九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告書
― 48 ―

福岡県朝倉郡朝倉町所在 才田・東才田遺跡の調査

1 9 9 8

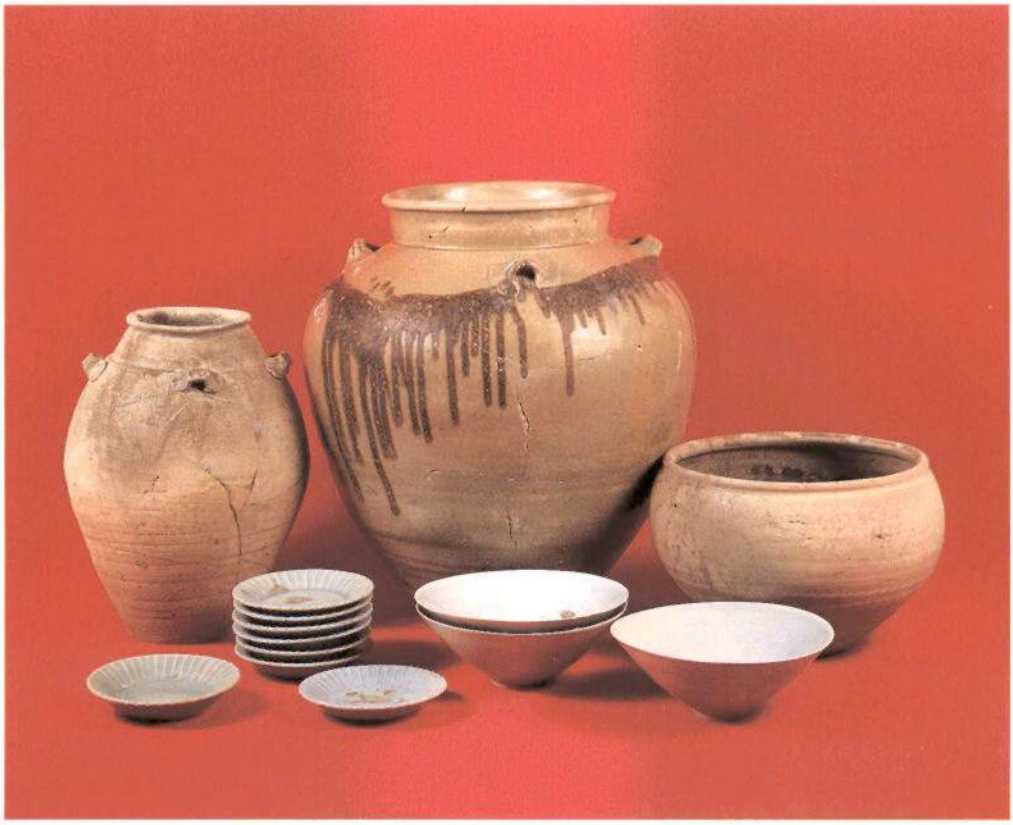
福 岡 県 教 育 委 員 会

九州横断自動車道関係

埋蔵文化財調査報告書

― 48 ―

福岡県朝倉郡朝倉町所在 才田・東才田遺跡の調査



才田遺跡50号土坑出土陶磁器

才田遺跡全景

1．才田遺跡50号土坑

2．才田遺跡１号木棺墓

序

福岡県教育委員会では、九州横断自動車道の大分自動車道建設予定地にかかる埋蔵文化財の発掘調査を昭和54年度から実施してきました。本書はその第48集にあたります。

この報告書に掲載した朝倉町所在の才田遺跡・東才田遺跡は昭和59・60年度に発掘調査を行ったもので、古墳時代後期～奈良時代、中世前期の集落が検出されました。とくに中世の荘園に関わるであろう集落に伴う多量の輸入陶磁器類には目を見張るものがあります。

考古学的な調査の進展は、歴史学のうちの原始・古代といった古い時期のことのみならず中世～近世、はては近代のことまでも対象としてこれまでに多大の成果を挙げてきました。文献では知りえない集落のあり方、生活の実態等を遺構や出土遺物が雄弁に物語ってきています。

ここに報告する遺跡の内容も、当地方における古代～中世の生活の実態を解明していくうえに少なからず寄与するものといえましょう。

本書に報告する調査成果が、今後の研究の一助ともなれば幸甚です。

なお、発掘調査および報告書作成において多数の方々に御協力・御援助を賜りました。厚くお礼申し上げます。

平成１０年 3月31日

福岡県教育委員会

教育長　光安　常喜

例言

1．本書は、福岡県教育委員会が日本道路公団から委託されて発掘調査を実施した、九州横断自動車道関係遺跡についての48冊目の報告書である。

2．本書に収録したのは、1985（昭和60）年に発掘調査を行った福岡県朝倉郡朝倉町所在の才田・東才田遺跡である。

3．遺構については、実測は井上裕弘・木下修・高橋章・小池史哲・伊崎俊秋・日高正幸・宮田浩之・樋口秀信・田中康信・高田一弘が行った。写真は木下・高橋・伊崎・宮田が撮影した。

4．出土遺物の整理は、岩瀬正信の指導のもとに、九州歴史資料館および福岡県文化課甘木事務所とで行った。鉄器は九州歴史資料館の横田義章氏のもとで保存処理を実施した。

5．遺物については、実測は原富子・西田美代子・丸山小夜子・大野愛里・岡泰子・辻啓子・伊崎・宮田・森井啓次が行い、写真は北岡伸一が撮影した。

6．遺構の下図作成には進村真之の、住居跡等の面積測定には窪山頼子の協力を得た。

7．遺構・遺物の浄書は塩足里美を主として、ほかに秋吉邦子・木下・伊崎が行った。

8．本書で使用した方位は、新平面直角座標系のⅡ系に基づく座標北である。

9．本書の挿図・付図等において、住居跡はそのままの数字で示すが、掘立柱建物跡はＳＢ、土坑はＳＫ、井戸はＳＥ、溝はＳＤ、柱穴はＰの略号を番号の前に冠する場合がある。

　また、遺物のうち土器・陶磁器については、縮尺は原則として1／3としたが、大型のものは1／4または1／6・1／8とした。同じ図中に異縮尺のものが混在する場合は、縮尺の小さい方の断面の下端に◆印を付している。土師器の小皿・坏の法量は巻末の表２を参照されたい。

10. 本書の執筆は、Ⅱ-B（一部を伊崎）、Ⅲ-A-2～6の遺構と土器・陶磁器、Ⅳ、Ⅴ-1を宮田が、それ以外を伊崎が行った。

11. 本書の編集は伊崎が行った。

※　本文中における陶磁器類の分類は主として下記と280頁の文献によっている。

●横田賢次郎・森田勉　1978「大宰府出土の輸入陶磁器について」

『九州歴史資料館研究論集４』

本 文 目 次

Ⅰ　序論 …… 1
A．はじめに …… 1
B．調査の組織と関係者 …… 2
C．調査の経過 …… 4
Ⅱ　遺跡の位置と環境 …… 7
A．位置 …… 7
B．歴史的環境 …… 7
Ⅲ　才田遺跡の調査 …… 13
A．中世期の遺構と遺物 …… 17
1．掘立柱建物 …… 17
2．土坑 …… 37
3．井戸 …… 115
4．溝 …… 119
5．木棺墓 …… 174
6．その他 …… 178
B．古墳時代～奈良時代の遺構と遺物 …… 197
1．竪穴住居 …… 197
2．その他 …… 258
C．その他の遺構と遺物 …… 263
1．暗渠 …… 263
2．弥生土器・土師器・須恵器 …… 265
3．その他 …… 269
D．放射性炭素年代測定結果 …… 270
Ⅳ　東才田遺跡の調査 …… 271
A．遺構と遺物 …… 271
1．溝 …… 271
2．ピットその他 …… 271
Ⅴ　総括 …… 276
1．中世期出土遺物の時期と様相について …… 276
2．中世期の才田遺跡 …… 281
3．奈良時代以前の才田遺跡 …… 287

巻頭カラー図版

1．　才田遺跡50号土坑出土陶磁器
2．　才田遺跡全景
3．1才田遺跡50号土坑
　　2才田遺跡1号木棺墓

図版目次

図版　1　　才田遺跡全景気球写真
図版　2　1 才田遺跡遠景と朝倉山塊（南から）　2 才田遺跡全景（南から）
図版　3　1 才田遺跡全景（西から）　2 同上　（東から）
図版　4　1 才田 掘立柱建物群（北から）　2 同上　（東から）
図版　5　1 才田　ＳＢ２～４（北から）　2 才田　ＳＢ５（北から）
図版　6　1 才田　ＳＢ９（西から）　2 同上　（西から）
図版　7　1 才田 土坑・柱穴群（西から）　2 同上　（東から）
図版　8　1 才田 土坑・柱穴群（北東から）　2 同上　（北から）
図版　9　1 才田　ＳＫ51（北から）　2 才田ＳＫ52（東から）
　　3 才田　ＳＫ68（北から）
図版 10　1 才田　ＳＫ50（東から）　2 同 陶磁器出土状態（南から）
図版 11　1 才田　ＳＫ50遺物出土状態（北から）　2 同上　（南から）
図版 12　1 才田　ＳＥ１周辺（北東から）　2 才田　ＳＥ１（南から）
図版 13　1 才田　ＳＤ１・４（西から）　2 同上　（東から）
図版 14　1 才田　ＳＤ12周辺（東から）　2 才田　ＳＤ12（東から）
図版 15　1 才田　ＳＤ9・10・19周辺（北東から）　2 才田　１・２号木棺墓（北東から）
図版 16　1 才田　１号木棺墓（東から）　2 同上 主体部（東から）
図版 17　1 才田　１号墓遺物出土状態　2 同上
　　3 同上　4 同上 基底部（東から）
図版 18　1 才田　２号木棺墓（東から）　2 同上 基底部（東から）
図版 19　1 才田　１～３号住居跡と溝（東から）　2 才田２・３号住居跡と方形溝（南から）
図版 20　1 才田　１号住居跡（南から）　2 才田２号住居跡（南から）
図版 21　1 才田　３号住居跡（東から）　2 同上 カマド（東から）

図版 22　1 才田 住居群（北西から）　2 同上 （西から）
図版 23　1 才田 住居群（北西から）　2 同上
図版 24　才田出土土器・陶磁器 1 （ＳＫ 5・9・10・11・12・13）
図版 25　才田出土土器・陶磁器 2 （ＳＫ13・22・23・24・25・26）
図版 26　才田出土土器・陶磁器 3 （ＳＫ31・36・40・41・44・48・50）
図版 27　才田出土土器・陶磁器 4 （ＳＫ50・51）
図版 28　才田出土土器・陶磁器 5 （ＳＫ51・52・55）
図版 29　才田出土土器・陶磁器 6 （ＳＫ56・57・60・61・65・68）
図版 30　才田出土土器・陶磁器 7 （ＳＫ68・70・75・76・78・80）
図版 31　才田出土土器・陶磁器 8 （ＳＫ80・83・84、ＳＥ1、ＳＤ1）
図版 32　才田出土土器・陶磁器 9 （ＳＤ1）
図版 33　才田出土土器・陶磁器10（ＳＤ1）
図版 34　才田出土土器・陶磁器11（ＳＤ1）
図版 35　才田出土土器・陶磁器12（ＳＤ1）
図版 36　才田出土土器・陶磁器13（ＳＤ1）
図版 37　才田出土土器・陶磁器14（ＳＤ1・4）
図版 38　才田出土土器・陶磁器15（ＳＤ4・9・12）
図版 39　才田出土土器・陶磁器16（ＳＤ12）
図版 40　才田出土土器・陶磁器17（ＳＤ19、方形溝）
図版 41　才田出土土器・陶磁器18、石鍋（方形溝その他）
図版 42　才田出土土製品 1
図版 43　才田出土土製品 2
図版 44　才田出土石器
図版 45　才田 1 ・ 2 号木棺墓出土遺物
図版 46　才田出土金属器 1
図版 47　才田出土金属器 2
図版 48　才田出土金属器 3
図版 49　才田住居跡出土土器 1
図版 50　才田住居跡出土土器 2
図版 51　才田出土焼塩土器
図版 52　才田出土焼塩土器・石器・鉄器
図版 53　1 東才田遺跡全景（西から）　2 同 南東隅ピット群（東から）
図版 54　東才田出土遺物

挿図目次

（頁）

第 1図　九州横断自動車道路線図（1／842,000）…… xii
第 2図　才田・東才田遺跡と周辺遺跡分布図（1／50,000）…… 8
第 3図　才田・東才田遺跡周辺地形図（1／1,000）…… 12
第 4図　24・25地点土層模式図 …… 13
第 5図　才田遺跡区割り・トレンチ位置図（1／600）…… 14
第 6図　才田A～Cトレンチ土層図（1／120）…… 15
第 7図　才田 ＳＢ１実測図（1／80）…… 18
第 8図　才田 ＳＢ２実測図（1／80）…… 19
第 9図　才田 ＳＢ３実測図（1／80）…… 20
第 10図　才田 ＳＢ４Ａ・４Ｂ実測図（1／80）…… 22
第 11図　才田 ＳＢ５Ａ・５Ｂ・11実測図（1／80）…… 折込み(24-25)
第 12図　才田 ＳＢ６実測図（1／80）…… 25
第 13図　才田 ＳＢ７・８実測図（1／80）…… 折込み(26-27)
第 14図　才田 ＳＢ１・６・７・８・９・10出土遺物実測図（1／3）…… 28
第 15図　才田 ＳＢ９・10実測図（1／80）…… 折込み(28-29)
第 16図　才田 ＳＢ２・３・４・５・11出土遺物実測図（1／3）…… 29
第 17図　才田 ＳＢ12・13実測図（1／80）…… 折込み(30-31)
第 18図　才田 ＳＢ12・13出土遺物実測図（1／3）…… 31
第 19図　才田 ＳＢ14・17Ａ・17Ｂ実測図（1／80）…… 32
第 20図　才田 ＳＢ15・16実測図（1／80）…… 34
第 21図　才田 ＳＢ14・15・16出土遺物実測図（1／3）…… 35
第 22図　才田 ＳＷ１実測図（1／80）…… 36
第 23図　才田 1・2・5号土坑出土遺物実測図（1／3）…… 37
第 24図　才田 8・9号土坑出土遺物実測図（1／3）…… 41
第 25図　才田 10・11号土坑出土遺物実測図（1／3）…… 43
第 26図　才田 1・2・5・8～11号土坑実測図（1／60）…… 44
第 27図　才田 12・13・18～21号土坑実測図（1／60）…… 46
第 28図　才田 12号土坑出土遺物実測図（1／3）…… 47
第 29図　才田 13・16・17・18号土坑出土遺物実測図（1／3）…… 48
第 30図　才田 19・20・21・22号土坑出土遺物実測図（1／3）…… 50
第 31図　才田 22～26号土坑実測図（1／60）…… 53

第 31図　才田 22～26号土坑実測図（1／60） …… 53
第 32図　才田 23・24号土坑出土遺物実測図（1／3） …… 54
第 33図　才田 25・26号土坑出土遺物実測図（1／3） …… 55
第 34図　才田 27～35号土坑実測図（1／60） …… 57
第 35図　才田 27・28・29号土坑出土遺物実測図（1／3） …… 58
第 36図　才田 30・31・32・33・34号土坑出土遺物実測図（1／3） …… 61
第 37図　才田 36～44号土坑実測図（1／60） …… 63
第 38図　才田 35・36・37・38・39号土坑出土遺物実測図（1／3） …… 64
第 39図　才田 40・41・42・43・44号土坑出土遺物実測図（1／3） …… 67
第 40図　才田 45～49・53～57号土坑実測図（1／60） …… 69
第 41図　才田 45・46・47・48・49号土坑出土遺物実測図（1／3） …… 70
第 42図　才田 50号土坑出土遺物実測図 1（1／3） …… 71
第 43図　才田 50号土坑実測図（1／30） …… 72
第 44図　才田 50号土坑出土遺物実測図 2（1／3） …… 73
第 45図　才田 50号土坑出土遺物実測図 3（1／3） …… 74
第 46図　才田 50号土坑出土遺物実測図 4（1／3） …… 75
第 47図　才田 50号土坑出土遺物実測図 5（1／3） …… 76
第 48図　才田 51・68号土坑実測図（1／30） …… 77
第 49図　才田 51号土坑出土遺物実測図 1（1／3） …… 79
第 50図　才田 51号土坑出土遺物実測図 2（1／3） …… 80
第 51図　才田 52号土坑実測図（1／40） …… 81
第 52図　才田 52号土坑出土遺物実測図（1／3） …… 82
第 53図　才田 53・54・55号土坑出土遺物実測図（1／3） …… 83
第 54図　才田 56号土坑出土遺物実測図（1／3） …… 84
第 55図　才田 58～63号土坑実測図（1／60） …… 87
第 56図　才田 57・58号土坑出土遺物実測図（1／3） …… 88
第 57図　才田 59・60号土坑出土遺物実測図（1／3） …… 89
第 58図　才田 61号土坑出土遺物実測図（1／3） …… 90
第 59図　才田 62・63号土坑出土遺物実測図（1／3） …… 93
第 60図　才田 64～67・69～73号土坑実測図（1／60） …… 94
第 61図　才田 64・65・66・67号土坑出土遺物実測図（1／3） …… 96
第 62図　才田 68号土坑出土遺物実測図（1／3） …… 98
第 63図　才田 68・69号土坑出土遺物実測図（1／3） …… 99

第 64図　才田 70・71・72号土坑出土遺物実測図（1／3） …… 101
第 65図　才田 74～80号土坑実測図（1／60） …… 103
第 66図　才田 73・74・75号土坑出土遺物実測図（1／3） …… 104
第 67図　才田 76・77号土坑出土遺物実測図（1／3） …… 106
第 68図　才田 78・79号土坑出土遺物実測図（1／3） …… 107
第 69図　才田 80・81・82号土坑出土遺物実測図（1／3） …… 109
第 70図　才田 81～86号土坑実測図（1／60） …… 110
第 71図　才田 83・84号土坑出土遺物実測図（1／3） …… 112
第 72図　才田 85・86・87号土坑出土遺物実測図（1／3） …… 113
第 73図　才田 87号土坑、P109・390・950・1298・1303等実測図（1／60） …… 114
第 74図　才田 1号井戸実測図（1／20・1／80） …… 116
第 75図　才田 1号井戸出土遺物実測図1（1／3） …… 117
第 76図　才田 1号井戸出土遺物実測図2（1／3） …… 118
第 77図　才田 溝土層図（1／60） …… 120
第 78図　才田 1号溝出土遺物実測図1（1／3） …… 121
第 79図　才田 1号溝出土遺物実測図2（1／3） …… 122
第 80図　才田 1号溝出土遺物実測図3（1／3） …… 123
第 81図　才田 1号溝出土遺物実測図4（1／3） …… 124
第 82図　才田 1号溝出土遺物実測図5（1／3） …… 125
第 83図　才田 1号溝出土遺物実測図6（1／3） …… 126
第 84図　才田 1号溝出土遺物実測図7（1／3） …… 127
第 85図　才田 1号溝出土遺物実測図8（1／3・1／6） …… 128
第 86図　才田 1号溝出土遺物実測図9（1／3・1／6） …… 129
第 87図　才田 1号溝出土遺物実測図10（1／3） …… 130
第 88図　才田 1号溝出土遺物実測図11（1／3） …… 131
第 89図　才田 1号溝出土遺物実測図12（1／3） …… 132
第 90図　才田 1号溝出土遺物実測図13（1／3） …… 133
第 91図　才田 1号溝出土遺物実測図14（1／3・1／6） …… 134
第 92図　才田 1号溝出土遺物実測図15（1／3） …… 135
第 93図　才田 1号溝出土遺物実測図16（1／3） …… 136
第 94図　才田 1号溝出土遺物実測図17（1／3） …… 137
第 95図　才田 1号溝出土遺物実測図18（1／3） …… 138
第 96図　才田 1号溝出土遺物実測図19（1／3） …… 139

第 97図　才田 1号溝出土遺物実測図20（1／3） …… 140
第 98図　才田 1号溝出土遺物実測図21（1／3） …… 141
第 99図　才田 1号溝出土遺物実測図22（1／3） …… 142
第100図　才田 1号溝出土遺物実測図23（1／3） …… 143
第101図　才田 1号溝出土遺物実測図24（1／3） …… 144
第102図　才田 1号溝出土遺物実測図25（1／3） …… 145
第103図　才田 1号溝出土遺物実測図26（1／3） …… 146
第104図　才田 4号溝出土遺物実測図 1（1／3） …… 148
第105図　才田 4号溝出土遺物実測図 2（1／3） …… 149
第106図　才田 4号溝出土遺物実測図 3（1／3） …… 150
第107図　才田 4号溝出土遺物実測図 4（1／3） …… 151
第108図　才田 9号溝出土遺物実測図（1／3） …… 152
第109図　才田 12号溝出土遺物実測図 1（1／3） …… 155
第110図　才田 12号溝出土遺物実測図 2（1／3） …… 156
第111図　才田 12号溝出土遺物実測図 3（1／3） …… 157
第112図　才田 12号溝出土遺物実測図 4（1／3） …… 158
第113図　才田 12号溝出土遺物実測図 5（1／3） …… 159
第114図　才田 10・11・13号溝出土遺物実測図（1／3） …… 161
第115図　才田 14・15・16・17号溝出土遺物実測図（1／3） …… 162
第116図　才田 19号溝出土遺物実測図 1（1／3） …… 164
第117図　才田 19号溝出土遺物実測図 2（1／3） …… 165
第118図　才田 20・21・22号溝出土遺物実測図（1／3） …… 166
第119図　才田 方形溝出土遺物実測図 1（1／3） …… 168
第120図　才田 方形溝出土遺物実測図 2（1／3・1／6） …… 169
第121図　才田 方形溝出土遺物実測図 3（1／3） …… 170
第122図　才田 方形溝出土遺物実測図 4（1／3） …… 171
第123図　才田 方形溝出土遺物実測図 5（1／3） …… 172
第124図　才田 方形溝出土遺物実測図 6（1／3） …… 173
第125図　才田 1号木棺墓実測図（1／30） …… 折込み(174-175)
第126図　才田 1号木棺墓出土遺物実測図（1／3） …… 175
第127図　才田 2号木棺墓出土遺物実測図（1／3） …… 176
第128図　才田 2号木棺墓実測図（1／30） …… 折込み(176-177)
第129図　才田 1・2号木棺墓出土鉄釘実測図（1／3） …… 177

第130図　才田 2号木棺墓出土玉実測図（1／1） …… 177
第131図　才田 土師器集積遺構出土遺物実測図（1／3） …… 178
第132図　才田 ピット出土土器・陶磁器実測図1（1／3） …… 179
第133図　才田 ピット出土土器・陶磁器実測図2（1／3） …… 180
第134図　才田 遺構検出面等出土土器・陶磁器実測図（1／3・1／6） …… 181
第135図　才田 撹乱部出土土器・陶磁器実測図（1／3・1／6・1／8） …… 183
第136図　才田 出土滑石製品実測図1（1／4） …… 184
第137図　才田 出土滑石製品実測図2（1／2・1／4） …… 185
第138図　才田 出土土製品実測図（1／3） …… 186
第139図　才田 出土ふいご羽口・瓦等実測図（1／3） …… 187
第140図　才田 出土土錘実測図1（1／3） …… 188
第141図　才田 出土土錘実測図2（1／3） …… 189
第142図　才田 出土土製人形・木製人形等実測図（1／2） …… 189
第143図　才田 ピット等出土石器実測図（1／2） …… 190
第144図　才田 出土石器実測図（1／4） …… 191
第145図　才田 出土銭貨・青銅製品・石帯実測図（2／3・1／2） …… 192
第146図　才田 建物跡・土坑・井戸出土鉄器実測図（1／3） …… 193
第147図　才田 溝出土鉄器実測図（1／3） …… 194
第148図　才田 溝・ピット等出土鉄器実測図（1／3） …… 195
第149図　才田 出土鉄器実測図（1／3） …… 196
第150図　才田 1号住居跡実測図（1／60） …… 197
第151図　才田 2号住居跡実測図（1／60） …… 198
第152図　才田 2号住居跡カマド実測図（1／30） …… 199
第153図　才田 1・2号住居跡出土土器実測図（1／3・1／6） …… 200
第154図　才田 3号住居跡、同カマド実測図（1／60・1／30） …… 202
第155図　才田 4号住居跡実測図（1／60） …… 203
第156図　才田 5～7号住居跡実測図（1／60） …… 205
第157図　才田 9・10号住居跡実測図（1／60） …… 206
第158図　才田 11・13号住居跡実測図（1／60） …… 208
第159図　才田 12・14号住居跡実測図（1／60） …… 209
第160図　才田 3・4・6・7・10・11・12号住居跡出土土器実測図（1／3） …… 210
第161図　才田 15号住居跡実測図（1／60） …… 211
第162図　才田 16・17・19B号住居跡実測図（1／60） …… 213

第163図　才田 18号住居跡実測図（1／60）…… 214
第164図　才田 19A号住居跡実測図（1／60）…… 215
第165図　才田 14・15・16・17・18号住居跡出土土器実測図（1／3）…… 216
第166図　才田 20・21号住居跡実測図（1／60）…… 218
第167図　才田 22号住居跡実測図（1／60）…… 219
第168図　才田 23号住居跡実測図（1／60）…… 220
第169図　才田 19・20・21・22・23号住居跡出土土器実測図（1／3・1／6）…… 221
第170図　才田 24・51号住居跡実測図（1／60）…… 222
第171図　才田 25・45号住居跡実測図（1／60）…… 224
第172図　才田 24・25号住居跡出土土器実測図（1／3）…… 225
第173図　才田 26・27号住居跡実測図（1／60）…… 226
第174図　才田 26・27号住居跡出土土器実測図（1／3・1／6）…… 227
第175図　才田 28・30号住居跡実測図（1／60）…… 228
第176図　才田 29号住居跡実測図（1／60）…… 229
第177図　才田 28・29号住居跡出土土器実測図（1／3）…… 230
第178図　才田 31・46号住居跡実測図（1／60）…… 232
第179図　才田 30・31号住居跡出土土器実測図（1／3）…… 233
第180図　才田 32・33号住居跡実測図（1／60）…… 234
第181図　才田 32号住居跡出土土器等実測図（1／3）…… 235
第182図　才田 34・36・43号住居跡実測図（1／60）…… 237
第183図　才田 33・34号住居跡出土土器実測図（1／3・1／6）…… 238
第184図　才田 35・44号住居跡実測図（1／60）…… 240
第185図　才田 37・38号住居跡実測図（1／60）…… 241
第186図　才田 39号住居跡実測図（1／60）…… 243
第187図　才田 40・41・42号住居跡実測図（1／60）…… 244
第188図　才田 35・36・37・38・39・40号住居跡出土土器実測図（1／3・1／6）…… 246
第189図　才田 47号住居跡実測図（1／60）…… 249
第190図　才田 48・49号住居跡実測図（1／60）…… 250
第191図　才田 41～48号住居跡出土土器実測図（1／3・1／6）…… 251
第192図　才田 50号住居跡実測図（1／60）…… 252
第193図　才田 54・55号住居跡実測図（1／60）…… 255
第194図　才田 49～55号住居跡出土土器実測図（1／3・1／6）…… 256
第195図　才田 遺構検出面等出土古墳～奈良時代土器実測図１（1／3）…… 257

第196図　才田 遺構検出面等出土古墳～奈良時代土器実測図２（1／3・1／6） …… 258
第197図　才田 焼塩土器実測図１（1／3） …… 259
第198図　才田 焼塩土器実測図２（1／3） …… 260
第199図　才田 焼塩土器実測図３（1／3） …… 261
第200図　才田 住居跡出土石器実測図（1／2・1／4） …… 262
第201図　才田 住居跡出土鉄器実測図（1／3） …… 263
第202図　才田 ミニチュア土器・ふいご羽口実測図（1／2） …… 263
第203図　才田 E-1区暗渠平面図（1／80） …… 264
第204図　才田 弥生土器実測図（1／4） …… 265
第205図　才田 古式土師器・初期須恵器実測図１（1／3） …… 267
第206図　才田 古式土師器実測図２（1／3） …… 268
第207図　才田 弥生時代以前石器実測図（1／2・1／3） …… 269
第208図　東才田 １号溝・ピット出土遺物実測図(1／3) …… 272
第209図　東才田遺跡全体図(1／400) …… 折込み(272-273)
第210図　東才田 遺構検出時、トレンチ出土遺物実測図(1／3) …… 273
第211図　東才田 石鍋・石器実測図(1／4) …… 274
第212図　東才田 土製品・鉄器実測図(1／2) …… 275
第213図　中世期遺構配置図① …… 278
第214図　中世期遺構配置図② …… 279
第215図　掘立柱建物の主軸、カマド方向グラフ …… 281
第216図　褐釉四耳壺実測図（1／6） …… 283

写真挿図目次

Photo. 1　現地説明会① …… xi
Photo. 2　現地説明会② …… 5
Photo. 3　新聞記事(1985年5月29日　朝日新聞) …… 6
Photo. 4　調査風景① …… 11
Photo. 5　ＳＢ１ …… 17
Photo. 6　調査風景② …… 23
Photo. 7　ＳＢ７・８ …… 26
Photo. 8　仲よしこよしの実測 …… 115

Photo. 9　この土器はどう？ …… 147
Photo.10　調査風景③ …… 174
Photo.11　調査風景④ …… 201
Photo.12　31号住居跡周辺 …… 233
Photo.13　現地説明会③ …… 283
Photo.14　耕地整理記念碑 …… 264
Photo.15　現地説明会④ …… 280
Photo.16　いつかここは高速に …… 285
Photo.17　菜の花を見る余裕もなく …… 286

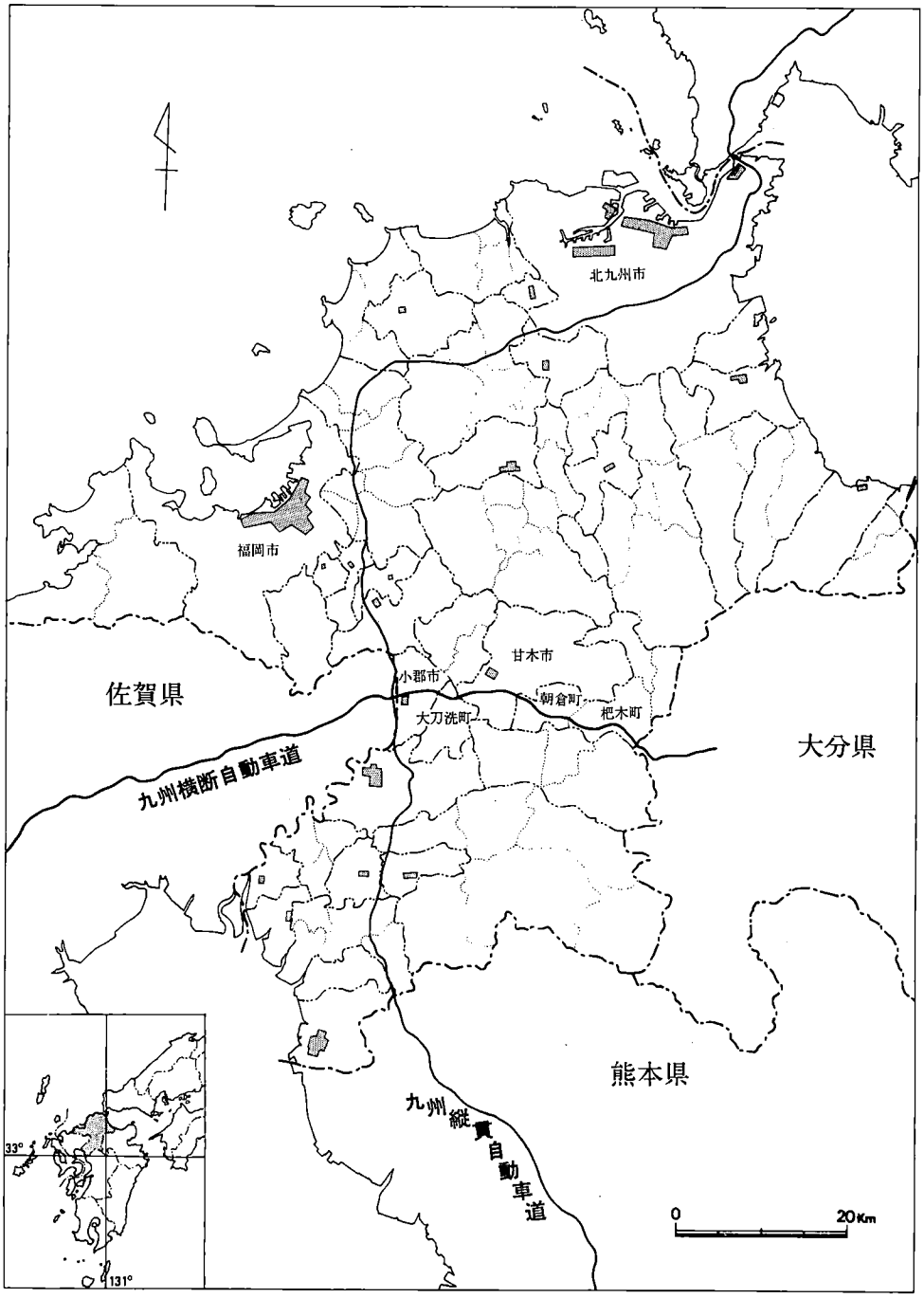
表目次

表１　九州横断自動車道関係遺跡一覧表 …… 折込み(6-7)
表２　①～⑫　小皿・坏法量表 …… 289-300

付図

付図１　才田遺跡全体図(1／200)

Photo. 1　現地説明会①



第１図　九州横断自動車道路線図（1/842,000）

Ⅰ 序 論

A. はじめに

九州横断自動車道と総称されるうちの大分自動車道の福岡県内部分は、西端部の小郡市から東端部の朝倉郡杷木町まで約37kmの距離がある。その建設に伴う事前の埋蔵文化財発掘調査は、日本道路公団からの委託を受けて、福岡県教育委員会によって1979（昭和54）年から始められ、1990（平成2）年までの12年間に、62箇所を対象として実施された。その発掘調査の総面積は約53万㎡に及んでいる。

自動車道の供用開始に向けて発掘調査を最大限に優先してきた中においても、調査担当者それぞれが順次調査報告書の作成を行ってきたところであるが、調査終了後の1991（平成3）年度からは年間5冊を目途として、1997（平成9）年3月現在、47集まで刊行した。平成9年度は次の5冊であり、平成10年度に最終の4冊が予定されている。

第48集（24・25地点：才田遺跡・東才田遺跡）

第49集（51地点：楠田遺跡、52-A地点：小覚原遺跡、52-B地点：二十谷遺跡、53地点：陣内遺跡、54地点：上野原遺跡）

第50集（28地点：中妙見遺跡、29-A地点：原の東遺跡Ⅰ）

第51集（11地点：宮原遺跡Ⅳ）

第52集（11地点：宮原遺跡Ⅴ）

報告書の作成にかかる遺物・図面等の整理は、福岡県文化課甘木事務所および太宰府事務所、九州歴史資料館において行った。

本書に収録した才田遺跡・東才田遺跡は、1987（昭和62）年2月5日に鳥栖ー朝倉間が開通する以前の、発掘調査が集中した昭和59～60年度（1985年）に調査を行ったものである。

この24・25地点は、朝倉町役場の南方にあり、現状では標高21m前後の沖積地上に立地している。才田遺跡・東才田遺跡と二つの遺跡に分けてはいるが、本来は一連の遺跡として捉えられる。調査においても両遺跡を交互に往来しての取り組みであった。調査期間と調査面積は以下のとおりである。

・才田遺跡　（24地点）　……昭和60年(1985) 2月 5日～ 6月 8日　約 4132㎡

・東才田遺跡（25地点）　……　〃　〃　約 3236㎡

B．調査の組織と関係者

発掘調査を行った昭和59・60年度と、報告書作成の平成9年度における関係者は次のとおりである。

日本道路公団

福岡建設局

	昭和59年度	昭和60年度	平成９年度
局　　長	今村　浩三	今村　浩三	
総務部長	菱刈　庄二	安元　富治	
管理課長	森　宏之	森　宏之	
管理課長代理	佐伯　豊	佐伯　豊	

福岡建設局甘木工事事務所

所　　長	乗松　紀三	乗松　紀三	
副 所 長	西田　功	杉本　恭一	
副所長（技術担当）	中村　義治	中村　義治	
庶務課長	徳永　登	徳永　登	
用地課長	岩下　剛	岩下　剛	
工務課長	後藤二郎彦	後藤二郎彦	
小郡工事区工事長		友田　義則	
甘木工事区工事長		猪狩　宗雄	
朝倉工事区工事長		小手川良和	
杷木工事区工事長		山中　茂	
【九州支社】			
支社長			藤波　督
調達用地部長			田中慎二郎
管理課長			松尾　俊昭
管理課長代理			酒井　正弘
担当			渡　宏之
日田工事事務所長			藤木　和啓
〃　庶務課長			大野　誠治

福岡県教育委員会

	昭和59年度	平成60年度	平成９年度
〔総括〕			
教 育 長	友野　隆	友野　隆	光安　常喜
教育次長	安倍　徹	安倍　徹	松枝　功
理　事			大村　寛
管理部長	大鶴　英雄	大鶴　英雄	
指導第二部長			竹若　幸二
文化課長	前田　栄一	前田　栄一	石松　好雄
文化課参事			柳田　康雄
文化課課長補佐	平　聖峰	平　聖峰	城戸　秀明
〃　課長技術補佐	宮小路賀宏	宮小路賀宏	井上　裕弘
〃　参事補佐	栗原　和彦	栗原　和彦	橋口　達也
〃　〃			川述　昭人
〃　〃			木下　修
〃　〃			児玉　真一
〃　〃			新原　正典
〃　〃			中間　研志
〃　〃			後藤　耕二
〃　〃			黒田　一治
〔庶務〕			
文化課庶務係長	平　聖峰（兼）		
〃　管理係長			黒田　一治
〃　事務主査	長谷川伸弘		久保　正志
〔調査〕			
文化課調査第二係長	栗原　和彦（兼）	宮小路賀宏	
〃　技術主査	井上　裕弘		
〃　主任技師	木下　修（担当）	高橋　章（担当）	
〃　〃	新原　正典	中間　研志	
〃　〃	児玉　真一	佐々木隆彦	
〃　〃	中間　研志		
〃　〃	小池　史哲		
〃　技　師	伊崎　俊秋（担当）	伊崎　俊秋（担当）	

〃	〃		緒方　泉
〃	〃		小田　和利
〃	文化財専門員	木村幾多郎	木村幾多郎［現 大分市歴史資料館］
〃	臨時職員	日高　正幸	日高　正幸［現 小石原村教育委員会］
〃	〃	宮田　浩之(担当)	宮田　浩之(担当)［現 小郡市教育委員会］
〃	〃	森山　栄一	森山　栄一［現 筑紫野市教育委員会］
〃	〃	緒方　泉	
〃	調査補助員	高田　一弘	高田　一弘
〃	〃	武田　光正	武田　光正［現 遠賀町教育委員会］
〃	〃	佐土原逸男	佐土原逸男
〃	〃	向田　雅彦	向田　雅彦［現 鳥栖市教育委員会］

〔整理〕

文化課参事補佐	木下　修
北九州教育事務所 生涯学習課長	高橋　章
甘木歴史資料館　副館長	伊崎　俊秋
小郡市教育委員会	宮田　浩之
文化課 整理指導員	岩瀬　正信
〃　〃	北岡　伸一

調査は地元の朝倉町・甘木市の作業員の皆さんのご協力のもとに進捗し、多大な成果をおさめることができた。また、調査中には渡辺正気・森本朝子・山本信夫氏等の来訪があり、種々のご教示を受けた。さらには、整理・報告書作成の段階でも多くの方々から有益なご助言・ご援助をいただいた。深謝いたします。

C．調査の経過

日誌から簡単に調査経過を振り返っておく。

〔昭和60(1985)年〕

2月 5日　24地点・才田遺跡へ重機導入。当面は工事用道路にかかる部分の表土を剝ぐ。

8日　19地点より器材を搬入する。ユニットハウス設置。

12日　25地点・東才田遺跡へ重機投入。

18日　テント設営。作業員集合。

20日　才田遺跡の遺構検出作業。溝を数条確認。発掘にとりかかる。
22日　1号土坑より銅銭出土。
3月 1日　才田・東才田遺跡に実測用の杭を打つ。
6日　東才田遺跡の遺構検出作業。才田と東才田の調査は同時進行。
13日　才田にカマドを持つ住居跡を確認。方形溝内からは弥生土器出土。
15日　東才田の全体写真撮影を行う。
18日　才田の全体写真撮影を行う。
22日　重機にて25地点の表土剝ぎ。工事用道路以外の本線部分の表土を剝ぐ。
4月 8日　昭和60年度の調査開始。25地点より調査を行う。
10日　24地点も遺構検出にかかる。
15日　25地点の西側部分にトレンチを設定。
16日　25地点の実測。24地点も実測と発掘。
17日　25地点の平面図作成、エレベーション実施。全体写真撮影。25地点は終了。
24日　24地点の50号土坑上面よりジョッキ形土器、床面より四耳壷・青磁皿等出土。1・2号墓発掘。
5月 2日　井戸を確認。住居跡も確認。実測の応援部隊来る。
9日　全体写真撮影。
11日　実測をすすめるとともに、掘り残しのピット等を掘る。
16日　住居跡・ピットの発掘。
17日　朝日新聞記者取材に来訪。
29日　溝9・10・19の発掘。朝日新聞朝刊に記事掲載さる。
6月 1日　現地説明会開催。約200名参加。
4日　気球による全体写真撮影。午後よりトレンチを掘る。
7日　器材の片づけ。
8日　調査終了。

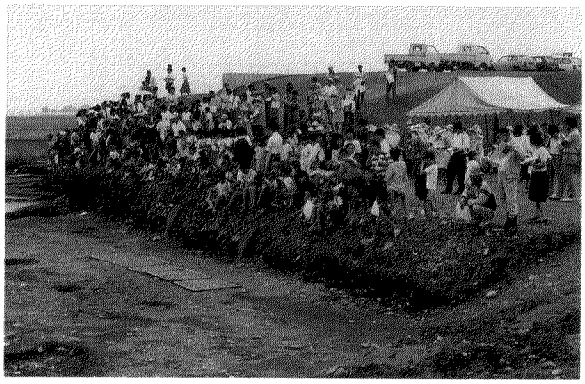
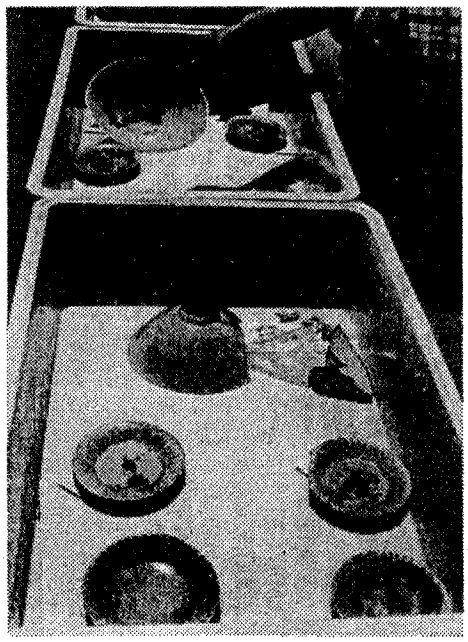


Photo. 2
現地説明会②

荘園管理者級の住居？

才田遺跡から中世の集落跡　青磁や白磁も出土

県文化課調査



出土した青磁、白磁の皿、わんなど＝甘木市一木の県文化課甘木発掘調査事務所で

朝倉郡朝倉町入地の才田遺跡で、十二―十三世紀の集落跡が、県文化課の発掘調査で確認された。甘木朝倉地方で、この時代の集落跡が見つかったのは初めて。出土した青磁や白磁、建物の規模などから、当時の荘園管理者か、それと同等の階層の人が住んだ跡らしい。甘木朝倉地方に荘園があったことは知られているが、所在地は確定されておらず、この地方の荘園研究に役立つ遺跡と関係者は言っている。

1日、現地で説明会

この遺跡の発掘は、九州横断自動車道建設に伴い、約五千平方㍍を調べるため二月中旬から始められた。十二―十三世紀の掘立杭式建物十六棟の跡が見つかった。最終的には二十棟以上になるという。その中に、規模が七―九㍍、四―九㍍の広さで縁を持った住家や倉庫などがあった。

また、土六や井戸、溝の跡から陶質土器、土師器（はじき）と一緒に、完全な形や復元すれば完全な形になる皿八枚、わん三個、鉢一個、つぼの上部四カ所に飾りのついた四耳つぼ一個などの青磁や白磁が出た。これらの磁器は中国浙江省の竜泉窯系の製品。日本へは博多に輸入されて取引されたが、一般民衆の手に入る品物ではなかったという。

整った形の中世集落であり、建物の規模、青磁や白磁を入手できる財力などから、県文化課の倉住靖彦技術主査らは「地域の有力者がいたといえる。周辺には長淵荘、三奈木荘、黒鳥荘などという荘園があったといわれ、どの荘園に属するかわからないが、荘園の管理者級の人かも知れない。甘木朝倉地方では初めての発掘で貴重」と言っている。

六月一日午後一時半から現地で説明会をする。

Photo. 3　新聞記事(1985年5月29日　朝日新聞)

表1　九州横断自動車道関係遺跡一覧表

地点	遺跡名	所在地	内容	面積 ㎡	調査年度と面積 54年度	55	56	57	58	59	60	61	62	63	H1	H2	備考	報告書
1	小郡正尻遺跡	小郡市大字小郡	弥生集落、歴史溝	11,200					5,000		560						完了	7集
2	前伏遺跡	〃　〃	弥生・古墳散布地	10,400						330	6,000						完了	11集
3	大板井遺跡	〃　大板井	弥生・古墳	5,400							3,000						小郡市委託完了	15集
4	〃	〃　〃	大板井遺跡	9,200						3,500	5,000						小郡市委託完了	15集
5	井上薬師堂遺跡	〃　井上	弥生・中世集落	8,800						4,500	3,700						完了	10・38集
6	薬師堂東遺跡	〃　薬師町	弥生・古墳散布地（首切塚）	32,000					500	7,300	10,100						完了	13・16集
7		〃　今隈	弥生散布地	7,200					200		100						遺構なし完了	——
8	宮巡遺跡	大刀洗町大字山隈	古代道路遺構	4,000					3,600								完了	26集
9	春園遺跡	〃　〃	先土器・弥生・奈良・近世墓	10,800					100	6,700							完了	26集
10	十三塚遺跡	〃　甲状本郷	古墳集落	34,400			700		300								完了	26集
11	立野・宮原遺跡	甘木市大字下浦	古墳・奈良集落、墓地	33,800			13,860	13,500	10,000	3,000								2・5・8・14・17 46・51・52集
12	小石原川西条里	〃　上浦	中世	48,000			8,100										遺構なし完了	——
13	〃　東条里	〃　上浦馬田	〃	56,000	200	7,600											完了	1集
14	上々浦遺跡	〃　上浦	弥生・古墳集落	18,400	200												完了	1集
15	西原・下原遺跡	〃　一ツ木屋永	〃　〃	54,800	AB地点 3,850		下原 3,850	C地点 1,400									完了	1・2・3集
16	高原遺跡	〃　屋永	縄文・弥生・古墳集落	7,800					1,400	5,400							完了	31集
17	口の坪遺跡	〃　牛鶴	近世積石	100						100							完了	31集
18		〃　〃	散布地	2,550					300								遺構なし完了	——
19-A	塔ノ上遺跡	〃　〃	奈良集落	30,000					700	8,200							完了	9集
19-B	大還端遺跡	朝倉町大字石成	古墳集落、奈良墓地	20,000							8,400						完了	39集
19-C D	石成久保遺跡	〃　〃	古墳集落	20,000							6,100						完了	39集
20	中道遺跡	〃　大庭	縄文・弥生・奈良集落	15,400					300		11,400						完了	39集
21-A	西法寺遺跡	〃　〃	奈良集落、中世	46,900							8,400						完了	47集
21-B	経塚遺跡	〃　〃	散布地					800	600		2,300						完了	47集
21-C	大庭久保遺跡	〃　〃	弥生墓地、奈良集落								9,650						完了	36集
21-D	上の原遺跡	〃　〃	弥生集落・墓地、古墳集落								12,300						完了	18・27・33集
22-A B	治部ノ上遺跡	〃　入地	縄文・弥生・古墳集落	5,400					300	4,800							完了	32集
22-C	狐塚南遺跡	〃　〃	弥生・中世集落、墓地	5,000							3,420						完了	28集
23	座禅寺遺跡	〃　〃	弥生集落、古墳	2,600						2,600							完了	32集
24	才田遺跡	〃　〃	古墳～奈良・中世集落	5,400						1,050	6,650							48集
25	東才田遺跡	〃　〃	〃　〃	4,000						1,300	4,400							48集
26		〃　須川	散布地	1,600													遺構なし完了	——
27	長島遺跡	〃　〃	縄文・弥生・古墳・奈良集落	16,000				C地点 5,000	C地点 6,640			500	16,000					34・55集
28	中妙見遺跡	〃　〃	縄文・歴史集落	2,400				200	458									50集
29-A	原の東遺跡	〃　菱野	縄文・弥生集落、墓地	16,800					600				5,240	2,100				50・53集
29-B	妙見古墳群	〃　〃	古墳、方形周溝墓										4,660				完了	29集
30	鎌塚遺跡	〃　菱野・山田	縄文・弥生集落	4,000									6,550				完了	22集
31	山ノ神遺跡	〃　山田	縄文	2,000									1,980				完了	22集
32		〃　〃	散布地	2,400				300									遺構なし完了	——
33	長田遺跡	〃　〃	縄文、弥生・古墳集落	2,000									5,500	2,000			完了	30集
34	金場遺跡	〃　〃	縄文、古墳	3,600									680	15,400				54集
35-A	上ノ宿遺跡	〃　〃	弥生、散布地	2,600									880	2,900			完了	20集
35-B	恵蘇山遺跡	〃　〃	古墳集落										2,400				完了	20集
36	稗畑遺跡	〃　〃	古墳散布地	2,000									3,980				完了	20集
37	大迫遺跡	〃　〃	奈良～平安火葬場・集落	2,400									5,410	9,900	700		完了	24集
38	外之隈遺跡	〃　〃	弥生～中世、箱式石棺	125									5,150	12,600		1,200	完了	35・40集
39-A	杷木宮原遺跡	杷木町大字志波	弥生・古墳、中世散布地	22,000							320	3,400					完了	21集
39-B C	中町裏遺跡	〃　〃	〃　〃　〃									11,000					完了	21集
40	志波桑ノ本遺跡	〃　〃	中世・散布地	2,500							300	7,700					完了	45集
41	志波岡本遺跡	〃　〃	〃　〃	18,000							300	9,400					完了	45集
42	江栗遺跡	〃　〃	中世、鍛冶遺構	8,000							300	9,700					完了	45集
43	大谷遺跡	〃　若市	古墳群	12,000								500	7,560				完了	41集
44		〃　久喜宮	散布地	1,800									150				遺構なし	——
45	笹隈遺跡	〃　〃	旧石器～中世、墓地・集落	2,400								400	3,710				完了	44集
46	夕月・天園遺跡	〃　古賀	〃	1,800								300	2,210	225			完了	42集
47	上池田遺跡	〃　池田	弥生・古墳・中世散布地	4,000								3,200					完了	42集
48	畑田遺跡	〃　〃	縄文・弥生・中世集落、墓地	1,800								6,800						56集
49		〃　林田	散布地	3,200								150					遺構なし	——
50		〃　〃	〃	2,400								200						——
51	楠田遺跡	〃　〃	縄文集落	5,200								6,500						49集
52-A	小覚原遺跡	〃　〃	〃	2,000								1,000	1,250					49集
52-B	二十谷遺跡	〃　〃	〃										1,550					49集
53	陣内遺跡	〃　穂坂	中世	3,500								5,700						49集
54	上野原遺跡	〃　〃	弥生、中世	1,800								2,700						49集
55		〃　〃	散布地	1,600								100					遺構なし完了	——
56		〃　〃	〃	2,400								800					遺構なし完了	——
57	柿原遺跡群	甘木市大字柿原	古墳群、縄文・弥生集落	200,000		測量 14,700	900	8,300	15,000	18,500	4,400						土取場・完了	4・6・12 19・37・41集
58	山田古墳群	朝倉郡大字山田	古墳群	40,000	測量 4,435				2,500	2,500	8,710						土取場・完了	23集
杷木インターA	鞍掛遺跡	杷木町大字寒水	弥生・古墳集落									6,450					完了	25集
杷木インターB	前田遺跡	〃　〃	弥生集落									2,600					完了	25集
杷木インターC	西ノ迫遺跡	〃　〃	弥生高地性集落	100,000								1,270	1,270				完了	25集
杷木インターD	クリナラ遺跡	〃　〃	縄文・古墳集落										4,180				完了	43集
杷木インターE	若宮遺跡	〃　〃	溝										2,400	4,000			完了	43集
			計		8,685	22,300	20,470	29,570	48,498	69,780	115,810	8,340	82,710	49,125	700	1,200		

Ⅱ　遺跡の位置と環境

A．位置と立地

（図版1、第2図）

佐賀県鳥栖市と大分県大分市とを結ぶ九州横断自動車道（大分自動車道）は、福岡県内は小郡市・三井郡大刀洗町・甘木市・朝倉郡朝倉町・同杷木町を通過する。朝倉町で国道386号線と交差するまでの西側部分は平野・台地部を、それより東側は山間部を縫って走っている。

ここに報告する才田・東才田遺跡が所在するのは、この横断道の福岡県内部分の中間よりやや東側のあたり、横断道の路線ＳＴＡＴＩＯＮナンバーでいえば№179＋20～№181＋80の間にある。国道386号線に面する朝倉町役場の南方にあたり、筑後川に注ぐ小河川である荷原川の支流・桂川に新立川と妙見川が合流する地点の近くに立地している。その地籍は下記のとおりである。

24地点・才田遺跡の方がやや高く微高地状を呈しているが、南半部は低くなっている。25地点・東才田遺跡は24地点よりも50cmほど低いが、ともに標高は21ｍを前後する高さである。ここは沖積地であって、基盤は砂利層をなし、その上に基本的に砂質の層が幾重にも堆積しているという状況であった。24地点の土層はＡ～Ｃトレンチのものを第6図に示すが、25地点は調査区中央付近での模式図を第4図に示した。

・才田遺跡（24地点）　……朝倉郡朝倉町大字入地字才田167・169ほか

・東才田遺跡（25地点）……　〃　〃　〃　字東才田106・108ほか

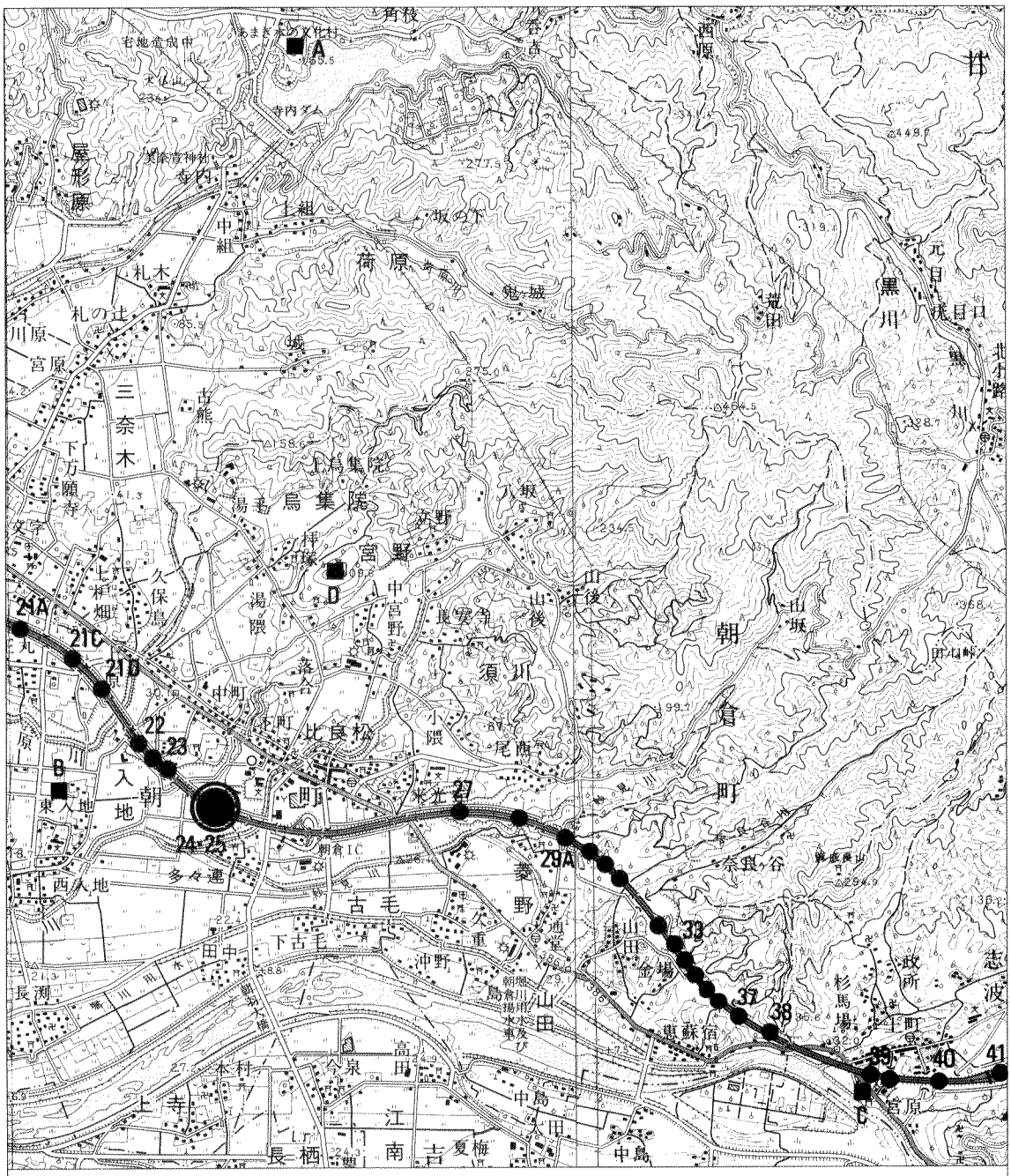
B．歴史的環境

（第2図）

朝倉町では、九州横断道関係の調査によって旧石器時代から歴史時代に至る、あらゆる時代と種類の遺構・遺物が発見された。調査された遺跡の数は25遺跡にのぼり、夥しい考古資料が蓄積された。特に甘木市から朝倉町西部にかけては、中位段丘上の先端部付近を横断道が通過するため、密集度の高い遺構・遺物が検出されている。

旧石器時代の遺跡としては、朝倉町菱野所在の原の東遺跡(29-A地点)でナイフ形石器などの包含層が検出されている。金場遺跡・山ノ神遺跡(註1)・上ノ宿遺跡(註2)などではナイフ形石器や細石器などが出土し、ＡＴ火山灰の降下の痕跡も見られる。

縄文時代では、原の東遺跡・金場遺跡・上ノ宿遺跡・狐塚南遺跡(註3)・治部ノ上遺跡(註4)で押型文土器が出土し、原の東・金場・上ノ宿からは石組炉・集石遺構が検出された。前期の



21A　西法寺
21C　大庭久保
21D　上の原
22　狐塚南
23　治部ノ上座禅寺
24　才田
25　東才田
27　長島
37　大迫
38　外之隈
40　志波桑ノ本
A　真奈板
B　大庭徳次
C　志波宝満宮古墳
D　宮地嶽古墳群

第2図　才田・東才田遺跡と周辺遺跡分布図（1／50,000）

遺跡は長田(註5)・狐塚南・治部ノ上・金場などがある。長田遺跡では晩期黒川式期のドングリ貯蔵穴が検出されている。

弥生時代は、中道遺跡(註6)・上の原遺跡(註7)・長島遺跡(註8)・原の東遺跡・長田遺跡などが前期から後期に至る集落で、大庭久保遺跡(註9)・上の原遺跡では木棺墓や甕棺墓などが調査された。

古墳時代前期では、座禅寺遺跡(註10)で方形周溝墓が検出されたが、古墳時代前期段階の首長墓（前方後円墳）はこの地域ではいまのところ見られない。ただ外之隈遺跡(註11)では墳丘墓を2基検出し、1号墳の主体部は組合せ式木棺墓と考えられ、画文帯神獣鏡と勾玉が出土し、過去に鉄剣が出土している。小規模なものではあるが、この時期に鏡を副葬している意味は大きいものがある。狐塚南遺跡では弥生時代後期後半前後に石蓋土壙墓・石棺墓・木棺墓・土壙墓などの墓地の形成を開始し、古墳時代初頭まで継続された群集墓である。しかし区画するような溝などは検出されていない。副葬品はガラス玉・管玉・鉄製品などが僅かに出土しているに過ぎない。集落は治部ノ上遺跡で竪穴住居が4軒検出され、時期は布留式古段階と併行するものと思われる。座禅寺遺跡の方形周溝墓、狐塚南遺跡の群集墓と同時期である。

古墳時代後期の集落は長田遺跡で6世紀後半代の竪穴住居が15軒ほど検出されている。西法寺遺跡(註12)では古墳時代末の竪穴住居が10軒程度検出され、中道遺跡では7世紀前半を前後する時期の竪穴住居が6軒、掘立柱建物が3棟検出された。狐塚南遺跡では6世紀後半の竪穴住居が検出され、それ以後7世紀後半、8世紀前半～中頃、9世紀前半まで連綿と続いている。

奈良時代の集落は数多くの遺跡で検出されている。西法寺・大庭久保・上の原・狐塚南・治部ノ上・長島・大迫(註13)などの遺跡がある。甘木市塔ノ上遺跡(註14)・大還端遺跡(註15)・中道遺跡は直線距離で1km以内に存在する。塔ノ上遺跡・中道遺跡は竪穴住居と掘立柱建物が混在している集落である。しかし中道遺跡では総柱の掘立柱建物が1棟しか検出されておらず、他の遺跡とは様相を異にするようである。大還端遺跡は8世紀第二四半期から第三四半期に位置づけられる土壙墓を主体とする墓地群である。副葬品は僅かに須恵器の坏蓋・身が出土している。道路幅の調査のため東側の墓域は確定できるが、南・北・西側の墓域は不明である。この墓地群の被葬者の集落が中道遺跡であることも考えられている。これらの遺跡では製塩土器の出土が多く見られる。また西法寺遺跡・石成久保遺跡(註16)からはそれぞれカマド状遺構と焼土坑が検出されている。これらは土器の焼成に係る遺構である可能性がある。石成久保のものは規模が60×70cm、深さ20cmを測り、土師器片と粘土塊が検出されている。形態から見る限り土師器焼成坑の可能性がある。西法寺遺跡のカマド状遺構は北九州市で検出されたものと類似する。

大迫・杷木宮原(註17)・志波桑ノ本(註18)・志波岡本遺跡(註19)では大型の掘立柱建物が検出されている。時期は大迫遺跡の8世紀中頃以降の火葬墓群の整地層に7世紀後半代の土器がふ

くまれていることから、これらの建物の時期は7世紀後半代に比定されている。これらの建物群は朝倉橘広庭宮に関連する可能性も考えられている。

中世の集落は、西法寺・狐塚南・治部ノ上遺跡などが調査された。西法寺遺跡の7号土坑からは手錫杖と短剣が出土した。鎌倉時代前期に比定される。鎮壇具として取り扱われた可能性がある。掘立柱建物もこの時期に比定できよう。狐塚南遺跡は才田遺跡から直線距離で西へ750mの所にある。13世紀から16世紀に至る掘立柱建物、土壙墓、集石遺構、土坑が検出された。土壙墓からは土師器、土師質のすり鉢、磁器、青銅製品などが出土した。出土遺物から見ると、輸入陶磁器や陶器などを含むことなどから一般の農村住民のものとは考えられず、中世博多などと直接的なつながりを持つクラスの人々の集落であったと考えられる。13世紀後半の蒙古襲来以降の恩賞地に筑前国長淵荘があるが、この地は現在の朝倉町長淵に地名が残り関連が考えられる。この才田遺跡と現在の長淵とは近距離に存在することから、この遺跡は領主に近い有力農民層の居館であった可能性がある。（宮田）

甘木市真奈板遺跡(註20)は才田遺跡の北方5.5kmの所にあり、12世紀後半～13世紀前半の掘立柱建物跡24棟や多数の土坑が検出され、寺跡の可能性も含めて特殊な性格の遺跡であったと考えられている。53号土坑からは3908枚の渡来銭が出土し、緡銭として確認された貴重な例である。最新銭は1127年初鋳の建炎通寶であり、埋納時期は12世紀中頃まで遡る可能性を指摘されている(註21)。また、才田遺跡の西方1kmほどの朝倉町大庭徳次では1310年初鋳の至大通寶を最新銭とする13688枚の備蓄銭が出土している(註22)。

なお、遺跡分布地図ではこの地を「歳田遺跡・歳田廃寺」としてある(註23)が、明確に寺に関係する遺構群とは捉えられなかった。ただ、才田の西南方には「寺田」という小字があり、その周辺を地元の人は‘カワラケ田’と称しているとのことである。（伊崎）

註 1 福岡県教育委員会　1992　『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告―22―』
2 福岡県教育委員会　1991　『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告―20―』
3 福岡県教育委員会　1994　『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告―28―』
4 福岡県教育委員会　1994　『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告―32―』
5 福岡県教育委員会　1994　『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告―30―』
6 福岡県教育委員会　1996　『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告―39―』
7 福岡県教育委員会　1990　『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告―18―』
福岡県教育委員会　1993　『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告―27―』
福岡県教育委員会　1995　『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告―33―』
8 福岡県教育委員会　1995　『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告―34―』
9 福岡県教育委員会　1995　『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告―36―』
10 註4に同じ
11 福岡県教育委員会　1995　『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告―35―』
12 福岡県教育委員会　1997　『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告―47―』

13 福岡県教育委員会　1992　『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告―24―』
14 福岡県教育委員会　1987　『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告― 9―』
15 註6に同じ
16 註6に同じ
17 福岡県教育委員会　1991　『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告―21―』
18 福岡県教育委員会　1997　『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告―45―』
19 註18に同じ
20 福岡県教育委員会　1993　『真奈板遺跡』　福岡県文化財調査報告書　第105集
21 櫻木晋一　1996 「九州地域における緡銭と金・銀貨」
出土銭貨研究会　第３回研究大会『備蓄銭とその出土状態』発表要旨
22 鶴田多々穂・櫻木晋一　1993 「福岡県朝倉町出土の備蓄銭」
九州帝京短期大学紀要　第５号
23 福岡県教育委員会　1978　『福岡県遺跡等分布地図（甘木市・朝倉郡編）』
これには以下のような記述がある。なお、これは「歳田」との表記であるが、町の小字図では「才田」となっているので後者に従う。
570067　歳田遺跡　（時代）弥生～平安時代　（遺跡の概要）平地、丹塗磨研土器片
（備考）公民館蔵
570068　歳田廃寺　（時代）　（遺跡の概要）平地、須恵器、灯明皿

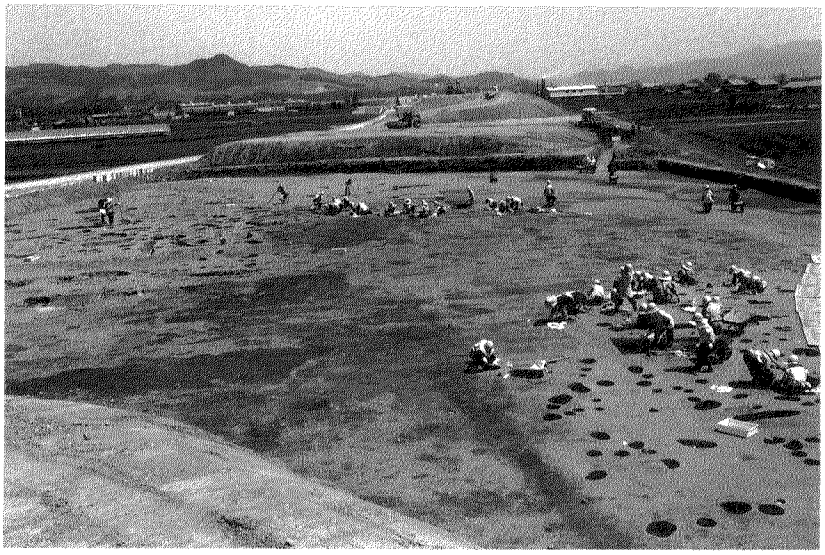
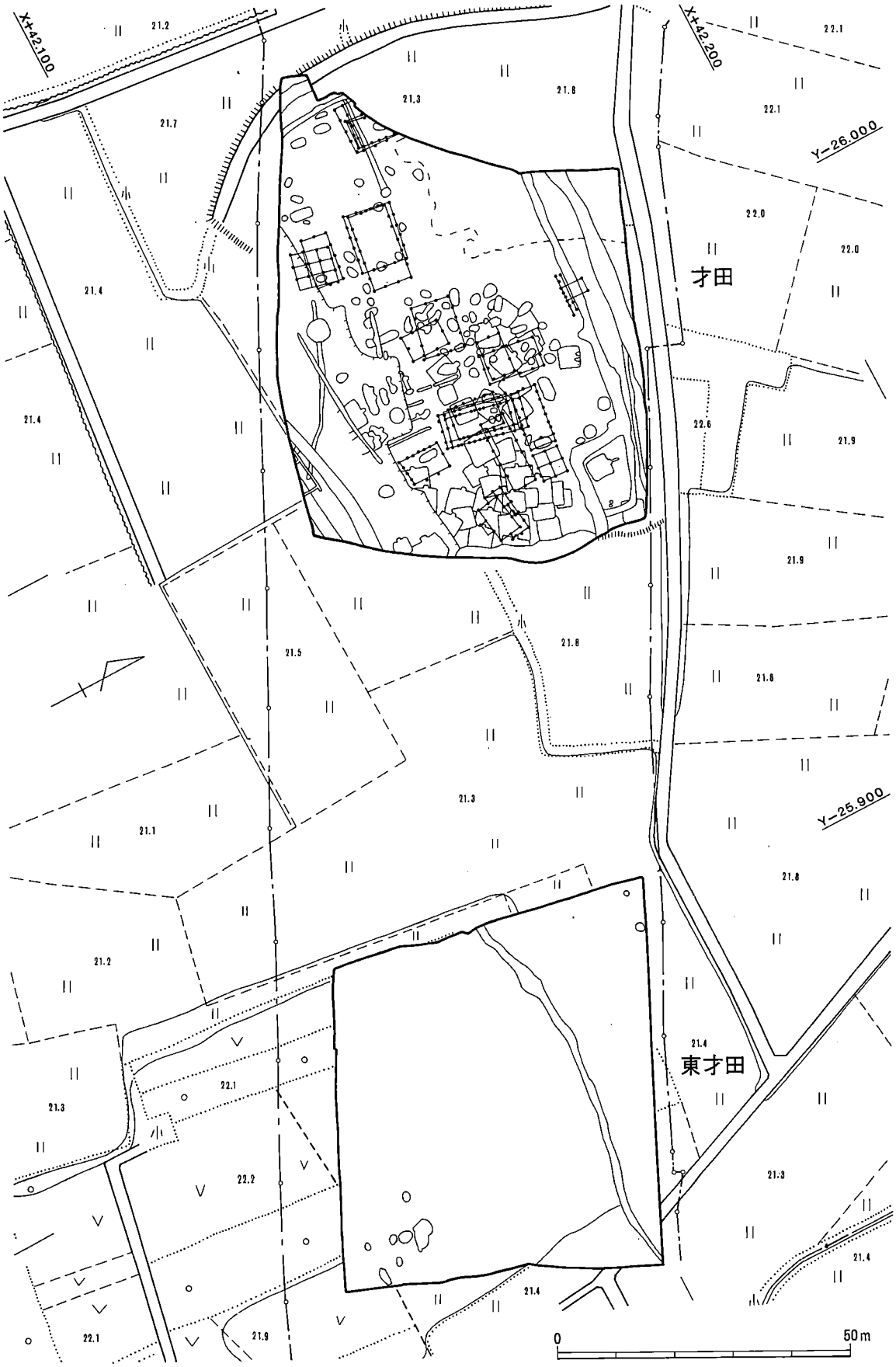


Photo. 4　調査風景①



第３図　才田・東才田遺跡周辺地形図（1／1,000）

Ⅲ　才田遺跡の調査

[概要]

この遺跡で検出された遺構の主なものは古墳時代後期～奈良時代（７～８世紀）の竪穴住居跡、そして平安時代末～鎌倉時代（11世紀後半～13世紀中頃）の掘立柱建物跡、土坑、溝、木棺墓等であった。弥生時代と古墳時代中期（５世紀）の遺物もあったが、その時期の遺構は検出されていない。

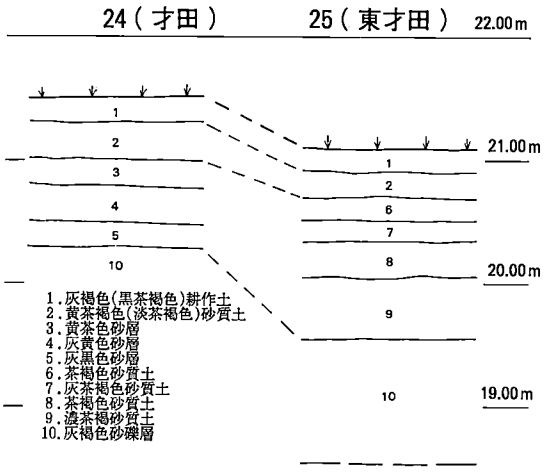
沖積地の堆積層に営まれた遺跡であるため幾層にも重なった砂層に遺構が掘り込まれており、各遺構のプランを検出するのに難儀した。調査の最終段階で調査区を縦横に切るトレンチを設定して検出面からの土層を見た（第6図）。東側と南側へと低くなっていることがわかる。

また、隣接する東才田遺跡との土層の対比模式図を示しておく（第4図）。

古墳～奈良時代の集落としての住居跡は調査区の東半部に重複して検出された。それらはプランを把握しにくく、やっとの想いで発掘したというのが実状であった。結果としては本来は全てがカマドを有する住居であったはずなのに不明のものも多かった。また、この時期に属する掘立柱建物跡も幾つか存したのかもしれないが、把握できていない。

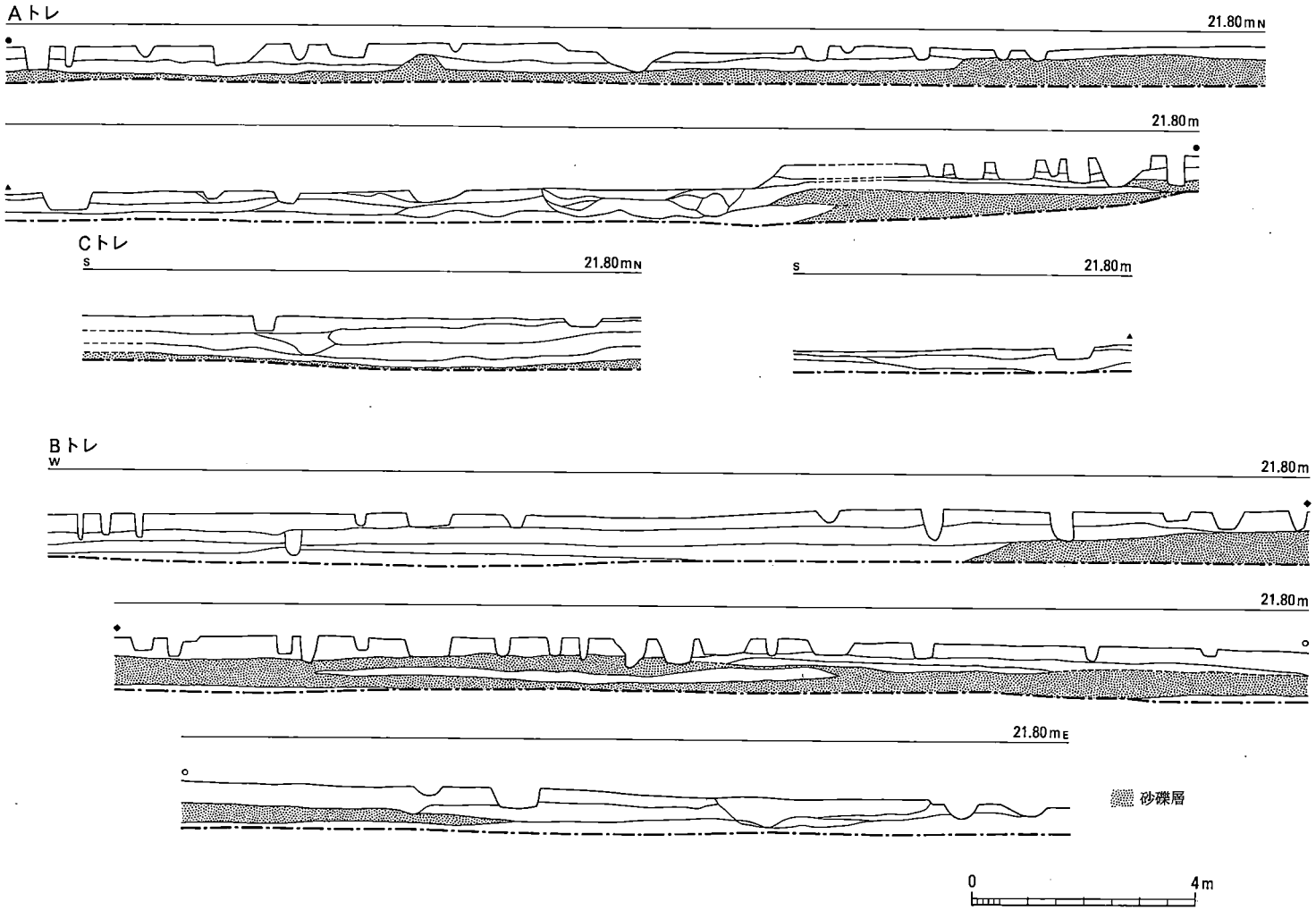
平安時代末（11世紀末～12世紀）は時代区分としては政治史的に古代末との捉え方が一般的と思うが、ここでは11世紀末に遡って中世期の初めとして捉えておく。この時期は数多くの土坑とピット群が見られた。調査区の北端と南端、西端に溝がめぐり、これらは調査区内では個別に検出されたが、連結して長方形区画として集落を囲繞していた可能性がある。また、西端部に近く木棺墓２基があった。なお、北西端部と南側はかなり攪乱を受けたり削平されたりしていた。東半部では建物群がわりと明快に捉えられたのに対し、中央部から西半部は無数のピット群があり、いくつかの建物跡は把握できたものの、まだ捉えきれていない建物もあるものと思われる。

遺構番号については調査時のものをそのまま用いることとしたので、連続する



第４図　24・25地点土層模式図

第５図　才田遺跡区割り・トレンチ位置図（1/600）



第6図　才田A～Cトレンチ土層図（1/120）

番号がかなり離れていたり、また欠番もある。本文での説明では位置関係がわかりやすいように区割りを行っている（第5図）。

以下においては、大きく中世期と古墳時代～奈良時代に分け、混入とみなされる遺物もその遺構の所で述べ、近時の遺構と５世紀代までの土器・弥生土器については「Ｃ　その他」の項で触れる。また検出面などの遺構外から採集された土器・陶磁器、石器等はＡ-6とＢ-2、C-2・3でそれぞれＡ・Ｂ・Ｃを冠して触れる。土製品・石器・鉄器等のうち所属時期不詳の出土遺物については中世期の項の最後で触れることとし、明らかに古墳時代～奈良時代とされる土器と焼塩土器のみその項にて説明する。

検出された遺構・遺物は下記のとおりである。

[弥生時代]

〈出土遺物‥‥弥生土器・石器〉

[古墳時代]

〈出土遺物‥‥土師器・須恵器〉

[古墳時代後期～奈良時代]

・竪穴住居跡　　55軒

〈出土遺物‥‥土師器・須恵器・墨書土器・焼塩土器・砥石・鉄器〉

[中世]

・掘立柱建物跡　　20棟
・土坑　　80基
・井戸　　1基
・溝　　16条
・木棺墓　　2基

〈出土遺物‥‥土師器・須恵器・瓦器・陶器・磁器・石鍋・瓦・石器・鉄器・土錘〉

A．中世期の遺構と遺物

1　掘立柱建物跡

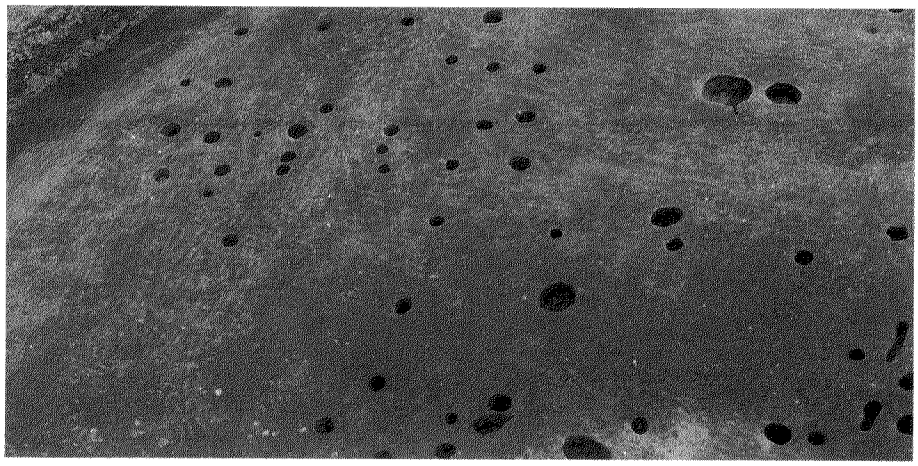
1号掘立柱建物跡［ＳＢ１］（図版3・4・7、第7図、Photo.5）

Ｇ4区を中心にＧ3区とＨ4区に位置する建物である。２間×３間の東西棟の北側半分に庇または縁が付く形態のようである。梁行２間は360cm、桁行３間は630cmを測り、東西両端に90cm幅、北端には120cm幅の張り出し部があり、これが庇か縁の部分であろう。主軸方位はＮ-81°-Ｅ。北側の桁行柱のＰ2・Ｐ3と支え柱のＰ13・Ｐ14の間にＰ21・Ｐ22の柱穴がある。この箇所が建物の入り口であったのではないかと考える。また、Ｐ8の南に120cmの間隔をおいてＰ23がある。これと対応する位置であるＰ9の南に、Ｐ24にあたる柱穴を入念に捜したが検出されなかった。しかしこのＰ23も全く無関係の柱穴というわけではないだろう。柱穴はあまり大きなものではない。なお、この下層からは竪穴住居群が検出されており、Ｐ12とＰ21から焼塩土器が出土しているが、それは下層の31号か46号住居跡に伴っていたものであろう。これについては別に後述する。

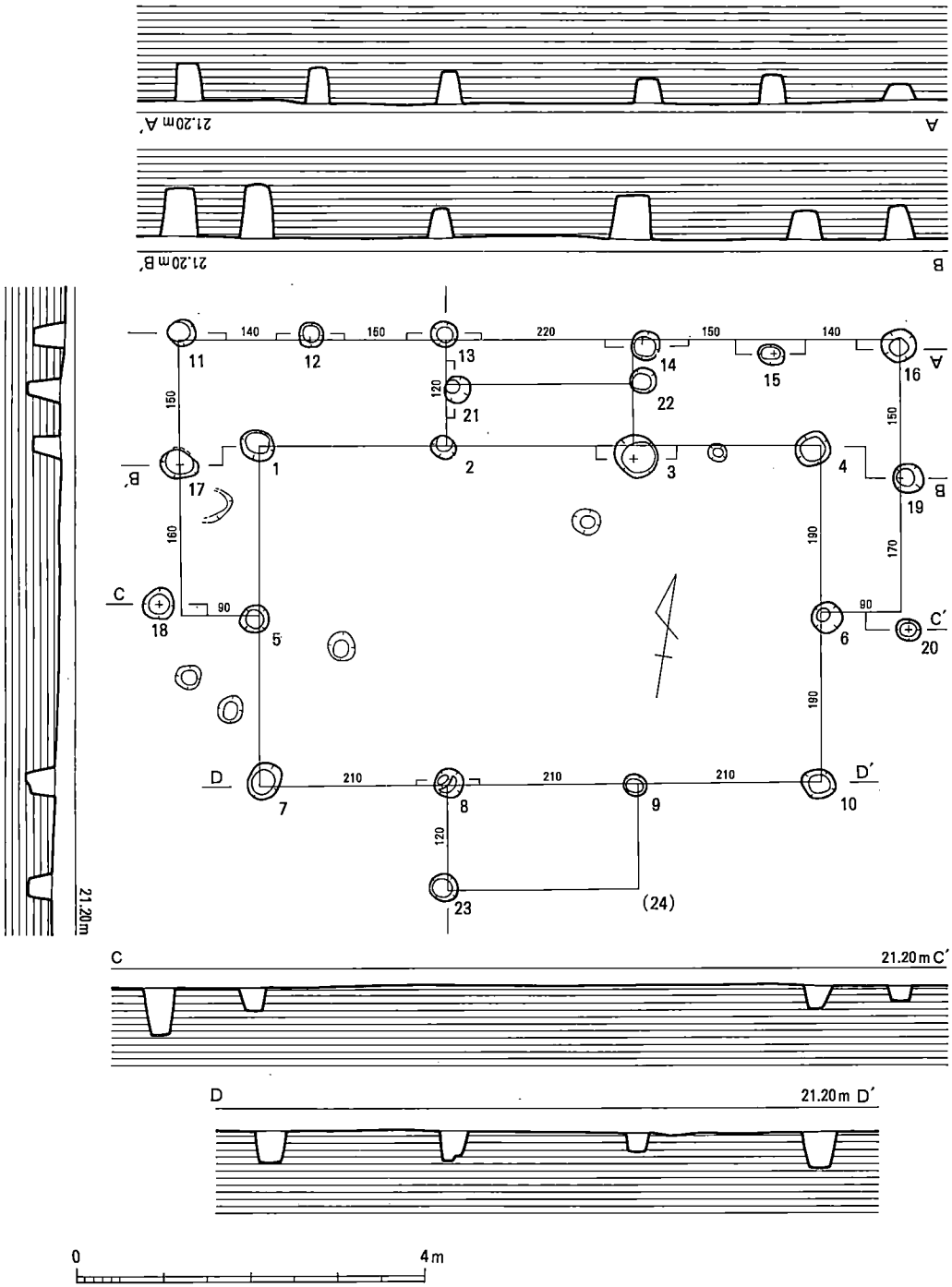
出土遺物（第14図1～5）

土師器（1・2・5）　1の小皿は糸切り底である。復原口径9.2cm、器高0.8cm。Ｐ7の出土。2は坏であろう。復原口径12.9。Ｐ1出土。5はＰ11の出土であるが、下層にある奈良時代の35号住居跡からの混入であろう。復原口径13cm。

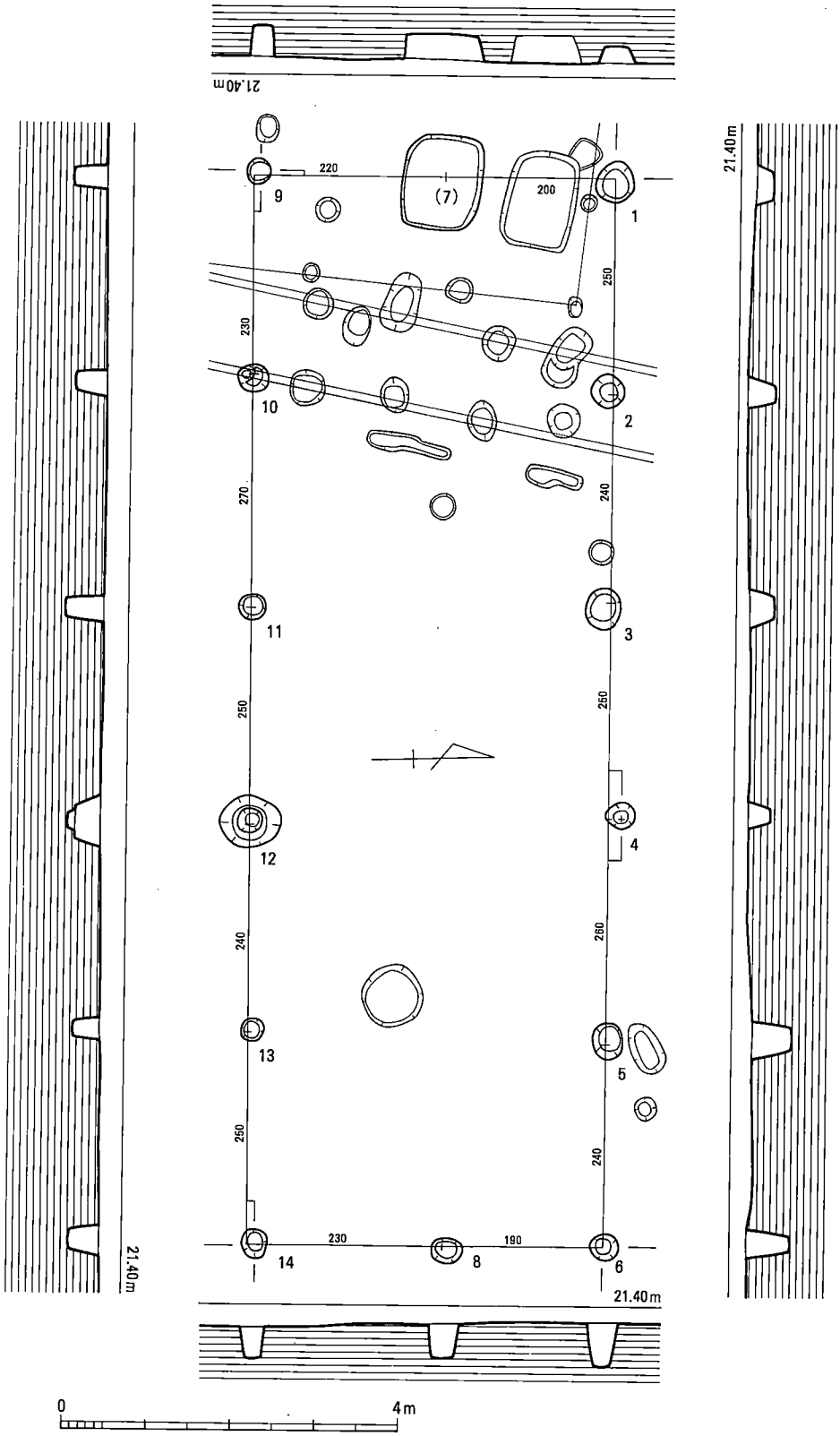
瓦器（3・4）　ともに内外にミガキが施されている。3は復原口径16.3cmでＰ23の出土。4はＰ1の出土で復原口径17.4cm。



Photo．5　ＳＢ１



第７図　才田 ＳＢ１実測図（1/80）



第8図　才田 ＳＢ２実測図（1/80）

2号掘立柱建物跡［ＳＢ２］（図版3～5・7、第8図）

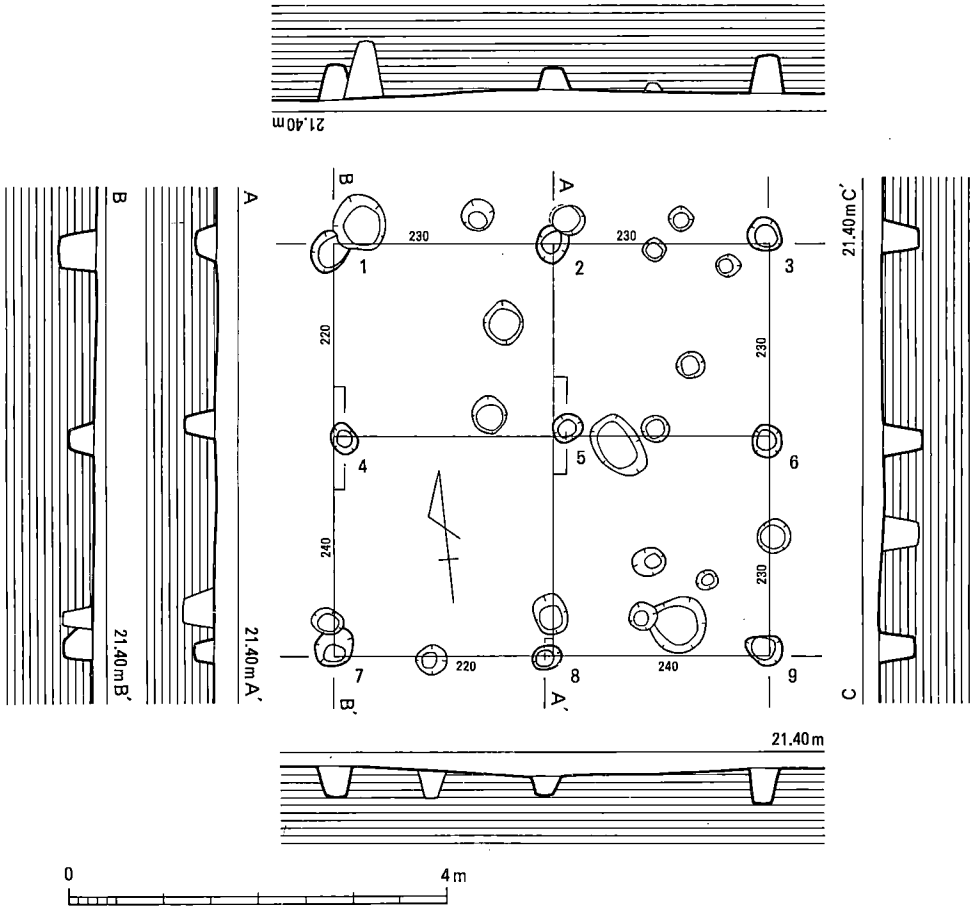
Ｆ・Ｇの4区を中心に同5区に及ぶ所に位置する建物である。SB5・11と重複するが先後関係はわからない。これの下層には竪穴住居群がある。２間×５間の東西棟で、梁行は420cm、桁行は1240cmを測る。P7にあたる所は43号土坑に切られていた。柱穴自体はあまり大きなものではない。P4は柱筋が少し北にずれている。主軸方位はN-88.5°-W。P9から鉄器が出土した。

出土遺物（図版46、第16図1～3、146図4）

土師器（1・2） 1の小皿は外底部が糸切りののち板目圧痕がある。復原口径9.1cm、器高1.3cm。Ｐ1の出土。2は坏であろう。Ｐ13出土。

瓦器（3） 出土ピットが不明の底部で、復原底径7.6cm。

鉄器（4） 頭部は明確でないが釘であろう。現存長45mm。



第９図　才田　ＳＢ３実測図（1/80）

3号掘立柱建物跡［ＳＢ３］（図版3～5・7、第9図）

Ｇ5区にあり、西側はＳＢ４と隣接する。あるいはＳＢ４と一連の建物であった可能性もあるが、ここでは一応別のものとして扱う。２間×２間の正方形の総柱建物で、ＳＢ４と関連するとすれば桁行は東西方向と見ることができよう。梁行・桁行ともに460cmを測る。柱穴自体はあまり大きなものではない。主軸方位はN-84°-W。

出土遺物（第16図1～3）

土師器（1・2） 1の小皿は外底部が糸切りののち板目圧痕がある。復原口径8.6cm、器高1.3cm。Ｐ7の出土。2は坏で外底部は1と同じである。復原口径16.5cm、底径11.7cm、器高2.6cm。Ｐ3から出土した。

瓦器（3） Ｐ3出土の底部片で、復原底径7.6cm。

4号掘立柱建物跡［ＳＢ４］（図版3～5・7、第10図）

Ｆ5区にあり、東側はＳＢ３と隣接する。東西棟の２棟の建物が位置をずらして存すると捉えられるので、それを４Ａ・４Ｂとすると、南側で重複するＳＢ５Ａ・５Ｂの柱穴の切り合い関係から、ＳＢ４Ａ・ＳＢ５Ａ→ＳＢ５Ｂ→ＳＢ４Ｂの順に新しくなっていると考えられる。ＳＢ４ＡとＳＢ５Ａの関係はわからない。そうすれば、４Ａを東へ100cmずらして４Ｂに建て替えたもののように思われる。ＳＫ44・45とも重複している。主軸方位はＮ-82.5°-Ｗ。前述のように、ＳＢ3と一連の建物であった可能性もある。

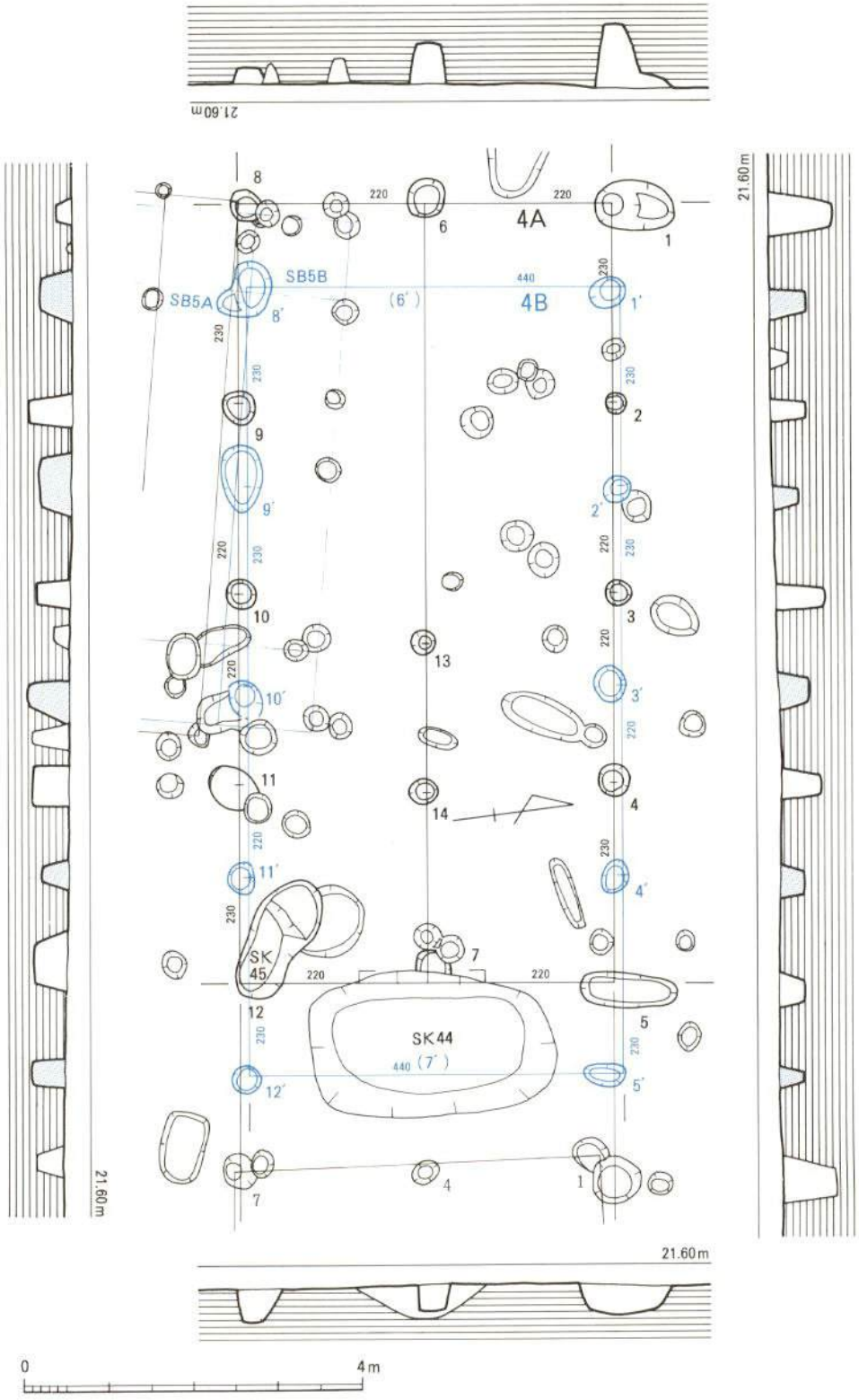
４Ａは２間×４間で、梁行は440cm、桁行は900cmを測る。ただＳＢ３の西辺であるＰ1・4・7までも取り込んで２×５間とすることも可能ではあるが、前述のようにＳＢ３を独立して捉えておく。Ｐ7はＳＫ44に切られ、Ｐ12はＳＫ45と重なっている。桁行南辺のＰ8がＳＢ５Ｂの柱穴Ｐ30′に切られている。なお、Ｐ6とＰ7を結ぶ線上にＰ13とＰ14があり、Ｐ14はＰ4とＰ11を結ぶ線上にもあたる。この２個の柱穴も関連するものかもしれない。柱穴自体はあまり大きくない。Ｐ11から軽石が出土している。

４Ｂは１間×４間で、４Ａを東側に100cmずらした位置にある。梁行は440cmで４Ａと同じであり、桁行は910cmとしたがこれは900cmでもよいので、４Ａと同じ規模ということになる。ただ、梁行の棟持柱たるＰ6・Ｐ7が見あたらない。柱穴は大きくない。

出土遺物（第16図1～6）

土師器（1～4） これらの小皿は外底部が糸切り離しである。復原口径は9.0～9.6cm、器高0.9～1.1cm。1～3が４Ａ号のＰ1から、4は４Ｂ号のＰ10′から出土した。

瓦器（5・6） ともに内面はミガキである。5は復原口径15.4cm。Ｐ3出土。6はＰ4出土で復原底径7.2cm。ともに４Ａ号に属する。



第10図　才田 ＳＢ４Ａ・４Ｂ実測図（1/80）

5号掘立柱建物跡［ＳＢ５］（図版3～5・7、第11図）

Ｅ・Ｆの4・5区にあって四面に庇の付く南北棟の建物である。これも２棟の建物が位置をずらして存すると捉えられた。南側にあるものを５Ａ、それより新しく北側にあるものを５Ｂとする。ＳＢ５Ｂは５Ａを北へ110cmずらして規模を大きくして建て替えたものと考えられる。ＳＢ２・11とも重複するが先後関係はわからない。またＳＫ40～43とも重なるが、そのうちＳＫ40・41よりは新しい所産である。主軸方位はＮ-12.5°-Ｅ。柱穴は大きくない。５Ａ号と５Ｂ号、11号の３者で共有する柱穴がいくつかある。

５Ａは２間×５間で、梁行は400cm、桁行は1100cmを測る。これに南北の梁行側に各々90cm、桁行側は東が100cm、西が120cmの幅で庇の部分が張り出している。桁行東辺のＰ17とＰ18・19間、Ｐ20の東に100cm離れてＰ37～39が660cmの距離をおいて並んでいる。これらも５Ａ・５Ｂのいずれかあるいは双方に伴うのではないかと考えられる。塀のようなものであろうか。また、Ｐ16～Ｐ18間のすぐ東側には途切れた細い溝がある。雨落ちの溝かもしれない。Ｐ10から種子が出土している。

５Ｂも２間×５間で、５Ａを北側に110cmずらした位置にある。梁行は400cm、桁行は1200cmを測る。梁行の南辺は５Ａと共有するものと捉える。これに梁行は北側に110cm、南側に90cm、桁行は東が100cm、西が90cmの幅で張り出している。南辺はやはり５Ａと共有する。Ｐ32′から土錘が、Ｐ2′から石鍋の破片と軽石、Ｐ18′から軽石が、５Ａと共有するＰ14とＰ1′（Ｐ23）からスラッグが出土している。Ｐ3′出土の木炭について^{14}Ｃ年代測定を行ったところ（本書Ｄ参照）、西暦1030±75年の結果を得ている。

Photo. 6　調査風景　②

出土遺物（図版43、第16図1～20、140図21）

土師器（1～12・15） 1～7の小皿は外底部が全て糸切り離しで、そののち板圧痕が付いている。1・2は復原口径8.4cmと8.6cm、器高はともに1.0cm。3～5は復原口径9.0～9.4cm、器高1.0～1.3cm。6・7は復原口径は8.4～8.8cm、器高1.0～1.1cm。8～11は坏で、これらも外底部は糸切り痕がある。8・9はともに復原口径が15.4cmと底径が10cmで、器高は2.8cmと3.1cmを測る。10・11は復原口径は14.0cmと14.6cm、底径はともに10.0cm、器高は2.4cmと2.8cm。12は椀になるかもしれない。復原口径は14.6cm。15は土鍋片で、口縁上面に押さえ痕がある。

瓦器（13・14） ともに内面はミガキらしい。

陶器（16） 茶褐色をなす無釉陶器で、大きめのこね鉢らしい。外底面に麻布らしき圧痕がある。復原底径14.5cm。

白磁（17～19） 17・18は玉縁口縁をなすⅠ-1-a類で、18の底径6.7cm。19はⅧ類かと思われる碗で復原口径16.8cm。

須恵器（20） 混入品の椀である。復原高台径9.4cm。

以上は５Ａ号に属するものとして1がＰ12、2がＰ20、12がＰ32、13がＰ19、15がＰ13、19・20がＰ1から、５Ｂは6がＰ3′、7・14がＰ20′、10がＰ2′、11がＰ10′、17がＰ13′から、Ａ・Ｂ共有のものとして、3がＰ6、4・8がＰ14、5・9・16・18がＰ23(1′)から出土した。

土製品（21） 管状土錘である。エンタシス状に中央部が膨らむ。器表には化粧土を掛けている。全長43.5mm、最大径11mm、重さ6.15g。

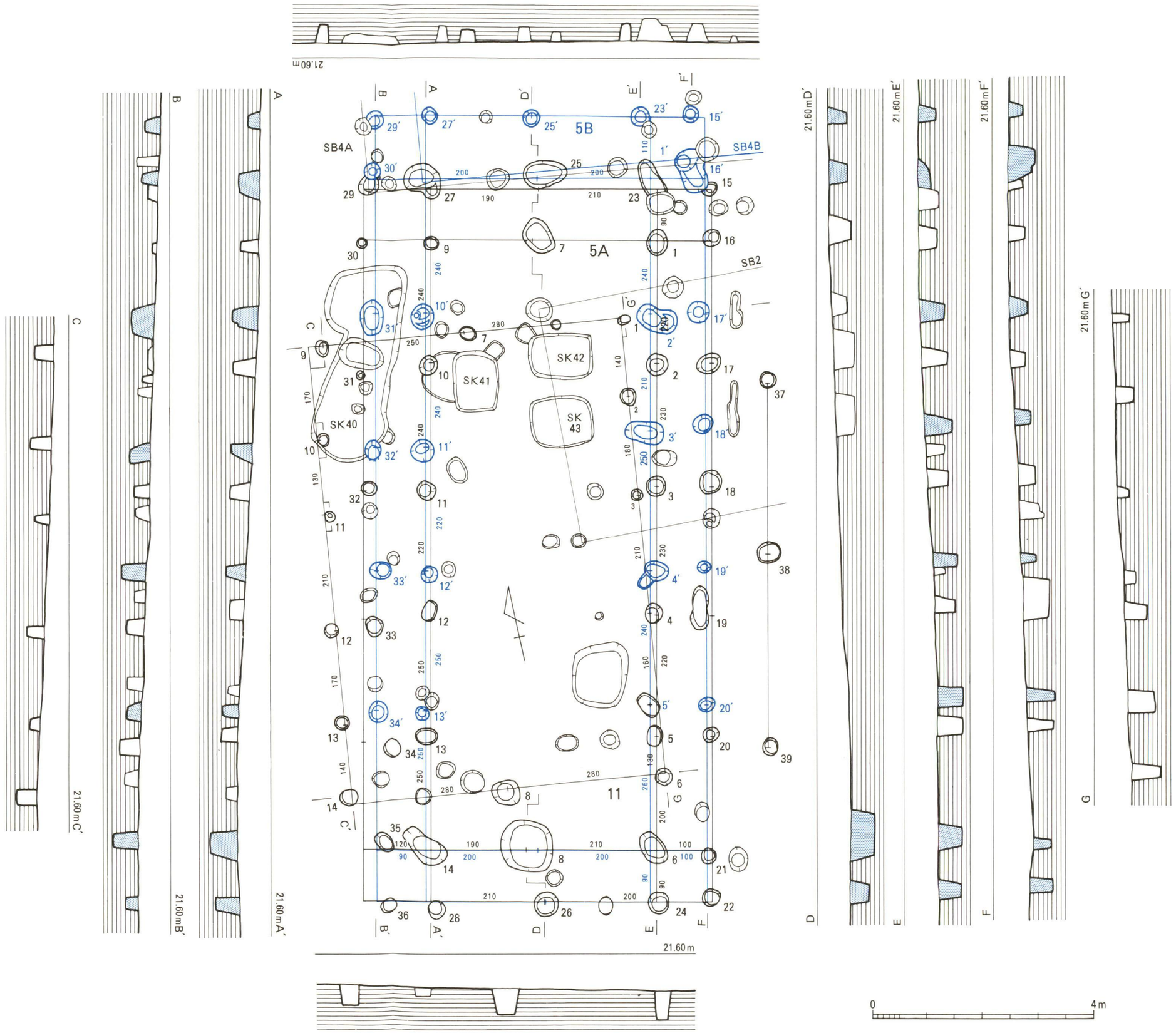
6号掘立柱建物跡［ＳＢ６］（図版3～5・7、第12図）

Ｆ3区にある２間×３間の南北棟建物である。内側にＳＫ74を取り込んでいる格好であるが、これらの先後関係はわからない。梁行の北辺は215cm等間の430cmで、南辺は北辺と平行ではなく6.5°の角度で北に振れている。南辺のＰ4とＰ6の間にＰ15、Ｐ6とＰ10の間にＰ14があるが、これらは補助的な柱なのであろう。桁行は西辺が710cmで、ここにも３つの柱間にＰ11～13の３個の柱穴がある。対する東辺はＰ1-Ｐ4間は660cmで、Ｐ2・Ｐ3は柱筋から少し東側に突出している。柱穴自体はあまり大きなものではない。主軸方位は真に北を向いており、N-0°-E。なお、桁行西辺の西3mに溝ＳＤ13があるが、これの主軸もほとんど北を向いている。ＳＢ６との間にやや距離がありすぎるきらいはあるが、無関係ではないかもしれない。

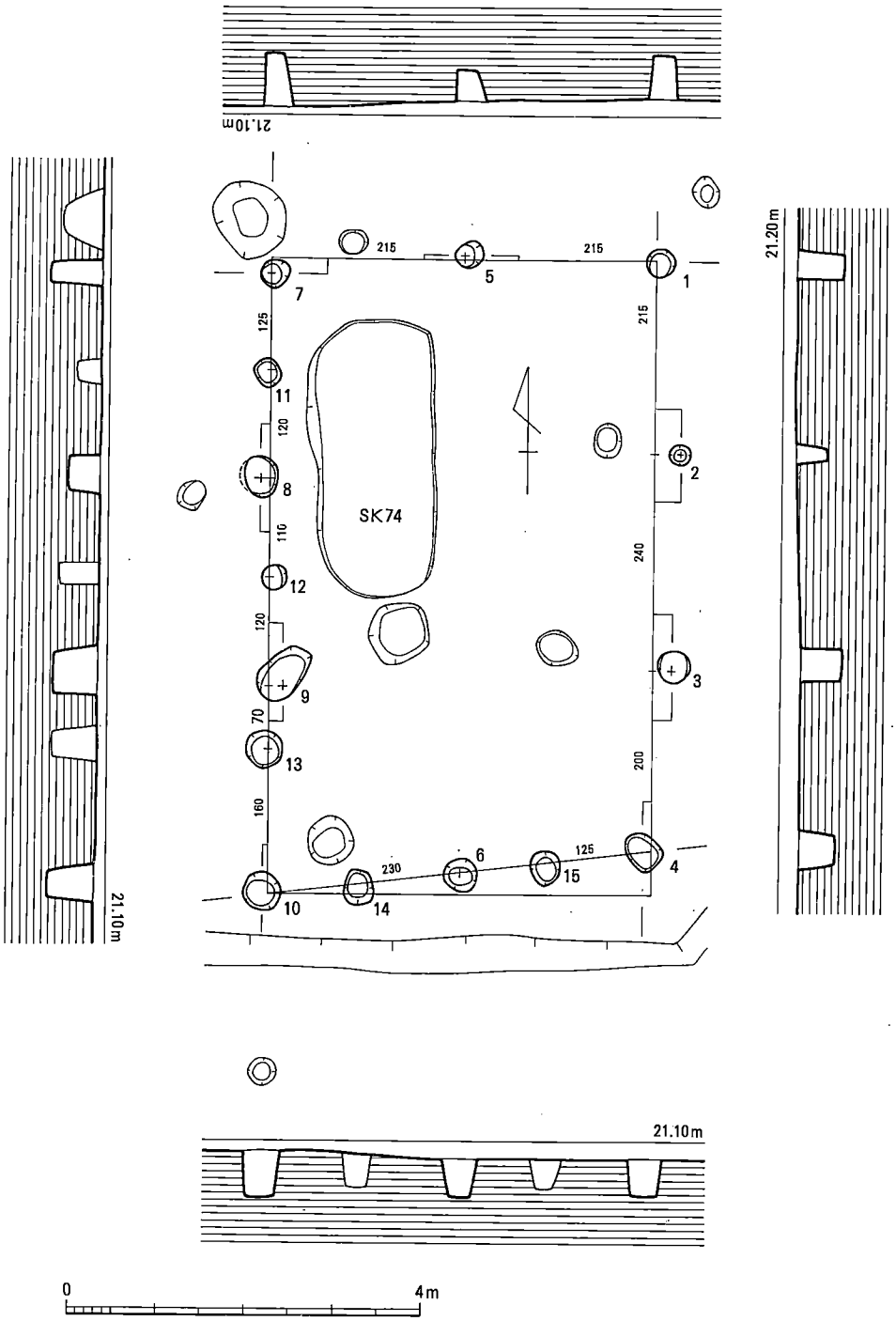
出土遺物（第14図1～5）

土師器（1・2・5） 1の小皿は復原口径9.1cm、器高1.2cm。Ｐ15出土。2の坏はＰ6出土。5は硬質の椀で瓦質に近い。復原口径13.8cm。Ｐ6出土。

瓦器（3・4） 3は内外にミガキが施される。3はＰ9、5はＰ6の出土。



第11図　才田 ＳＢ５Ａ・５Ｂ・11実測図（1／80）



第12図　才田 ＳＢ６実測図（1/80）

7号掘立柱建物跡［ＳＢ７］（図版3～5・7、第13図）

Ｅ5区にある２間×４間の南北棟建物である。内側にＳＫ12・18・19・39があるが、これらとの先後関係はわからない。ＳＢ８、ＳＫ38とも重複している。梁行520cm、桁行980cmで、主軸方位はＮ-5°-Ｅ。柱穴は大きくない。桁行東辺のＰ3・Ｐ5間にはこの主軸に沿った細い溝があり、Ｐ4はそれを切って掘り込まれている。

出土遺物（第14図1～3）

土師器（1）　体部から口縁が屈曲する坏で、復原口径15cm。Ｐ9出土。

瓦質土器（2）　土師器のきわめて硬質のものとも見てとれるが瓦質としておく。壷であろうか。復原口径15.5cm。Ｐ1出土。

白磁（3）　Ｖ-4-a類かと思われる碗で、Ｐ10出土。

8号掘立柱建物跡［ＳＢ８］（図版3～5・7、第13図）

Ｅ5区にあり、ＳＢ７の南半に直交する位置にある。２間×３間の東西棟建物で、内側にＳＫ39があり、Ｐ8がＳＫ38を切っている。梁行400cm、桁行700cmで、主軸方位はＮ-81.5°-Ｗ。ＳＢ７のＰ4が切っていた細い溝は梁行東辺に近いが、柱筋とはやや方向がずれている。Ｐ2から土錘が、Ｐ7からスラッグが出土している。

出土遺物（図版43、第14図1～4、140図5）

土師器（1～4）　1・2の小皿はともに外底部が糸切り離しである。復原で口径は1が8cm、2は10cm。器高は1が1.4cm、2が0.8cm。3・4は坏の小片。1・2・4がＰ7、3がＰ4の出土。

土製品（5）　管状土錘である。中央部はエンタシス状に少し膨らむ。全長54.5mm、最大径10～11mm、重さ5g。

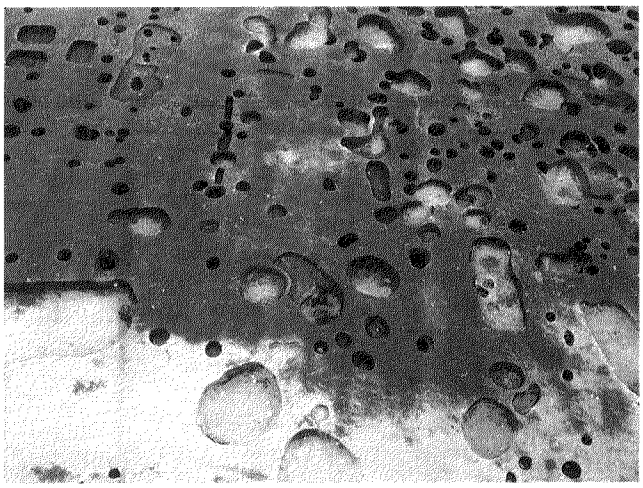
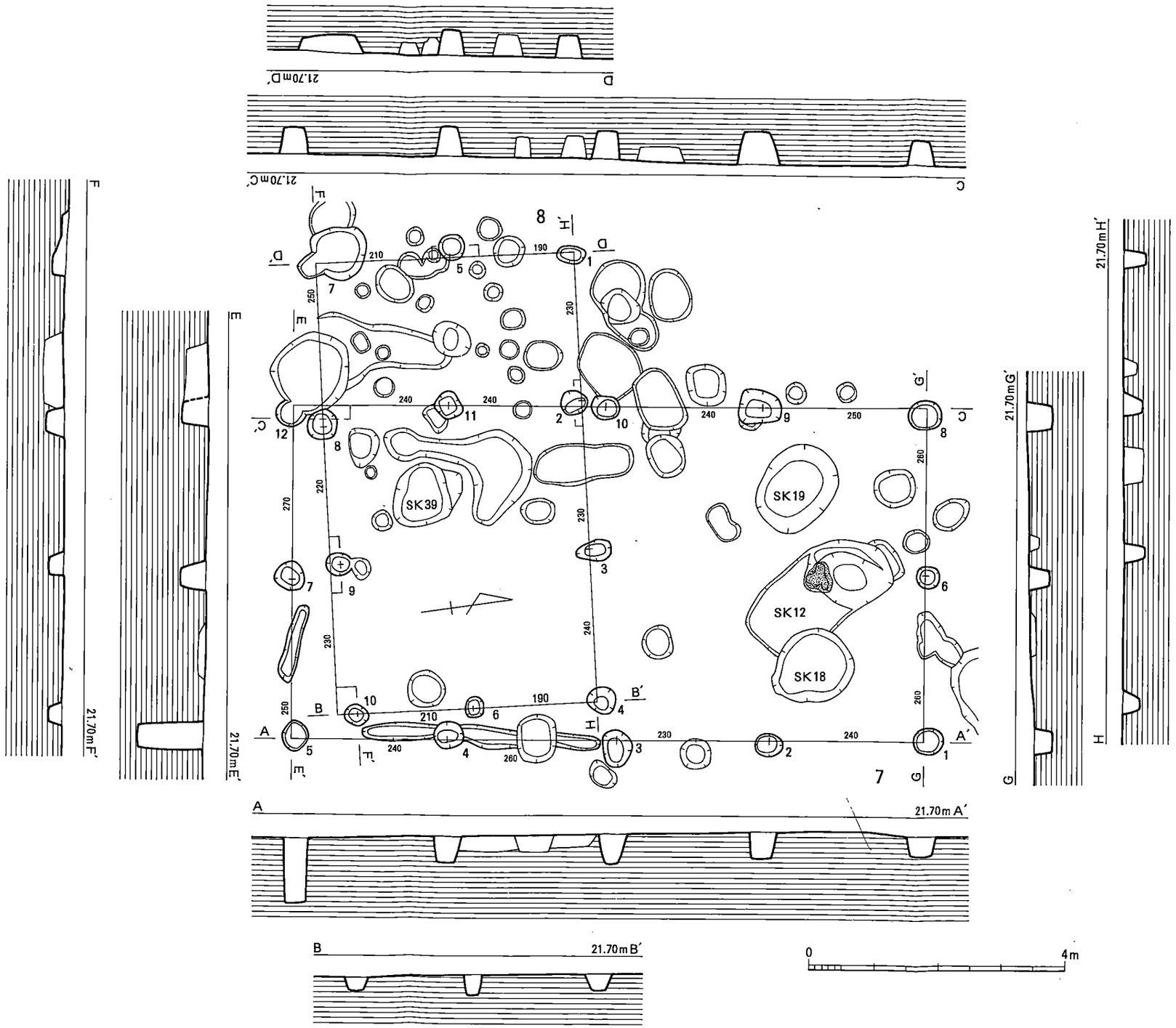


Photo. 7
ＳＢ７・８



第13図　才田 ＳＢ７・８実測図（1／80）

9号掘立柱建物跡［ＳＢ９］（図版3・6～8、第15図）

Ｂ4区にあり、４間×５間の規模の大きい東西棟建物である。ＳＫ66・67・80と重複し、そのいずれも切っているらしい。梁行790cm、桁行1000cmで、主軸方位はＮ-81°-Ｗ。梁行東辺の東には120cm幅で庇が付くと思われる。柱穴はこの遺跡の中では大きい方であり、その多くが中に根固めの石を据えていた。欠落しているのはＰ5・9・11・12・13・14・16の7個である。Ｐ2とＰ9から鉄器2点ずつ、Ｐ15から軽石、Ｐ8から鋳型のような土製品が出土している。

出土遺物（図版42、第14図1～9、138図10、146図11～13）

土師器（1～6） 1～4の小皿は外底部が全て糸切り離しで、そののち板圧痕が付いている。口径は復原で8.6～9.6cm、器高は0.8～1.2cm。5・6の坏も外底部は糸切り痕ののち板圧痕がある。口径は15～15.4cmで、器高は3.1～3.2cmを測る。1はＰ17、2・3はＰ6、4はＰ10、5はＰ4、6はＰ15から出土した。

青白磁（7） 合子の破片であり、小さな高台が付く。受部と高台周辺は無釉である。復原口径8cm、最大径9.5cm、器高2cm。Ｐ8出土。

白磁（8・9） 8はⅣ-1類の大きめの玉縁口縁をなすもので、復原口径16.2cm。9はⅧ類の碗で復原口径16.8cm。8はＰ6、9はＰ16出土。

土製品（10） 長さ108mm、幅48mm、厚さ18mmほどの扁平板状の破片で、表面の中央部は幅28mm以上、長さ90mm以上にわたって深さ2mmほどが平坦なまま低くなっている。砂粒はそれほど多くないが、赤褐色粒子をふくんでおり、焼成はややあまい。赤茶色～灰褐色を呈する。裏面から表面の一段高い部分には籾やワラの圧痕が多数見られる。二次熱を受けており、扁平な薄い板状の製品をつくる鋳型かもしれない。

鉄器（11～13） 3点ともに釘であろう。11はＰ2の出土。12・13はＰ9の出土。12は全長8.3cm、13は全長5.3cm。

10号掘立柱建物跡［ＳＢ10］（図版3・6～8、第15図）

Ｂ4区からＣ4区にかけて、ＳＢ９と重複して存する。ＳＢ9とは主軸も若干異なるだけであるが、その先後関係はわからない。３間×６間の東西に長大な建物となり、梁行は650cmで、桁行は1340cmを測る。主軸方位はＮ-82.5°-Ｗ。柱穴はあまり大きくない。Ｐ9から土錘が、Ｐ5から軽石が出土している。

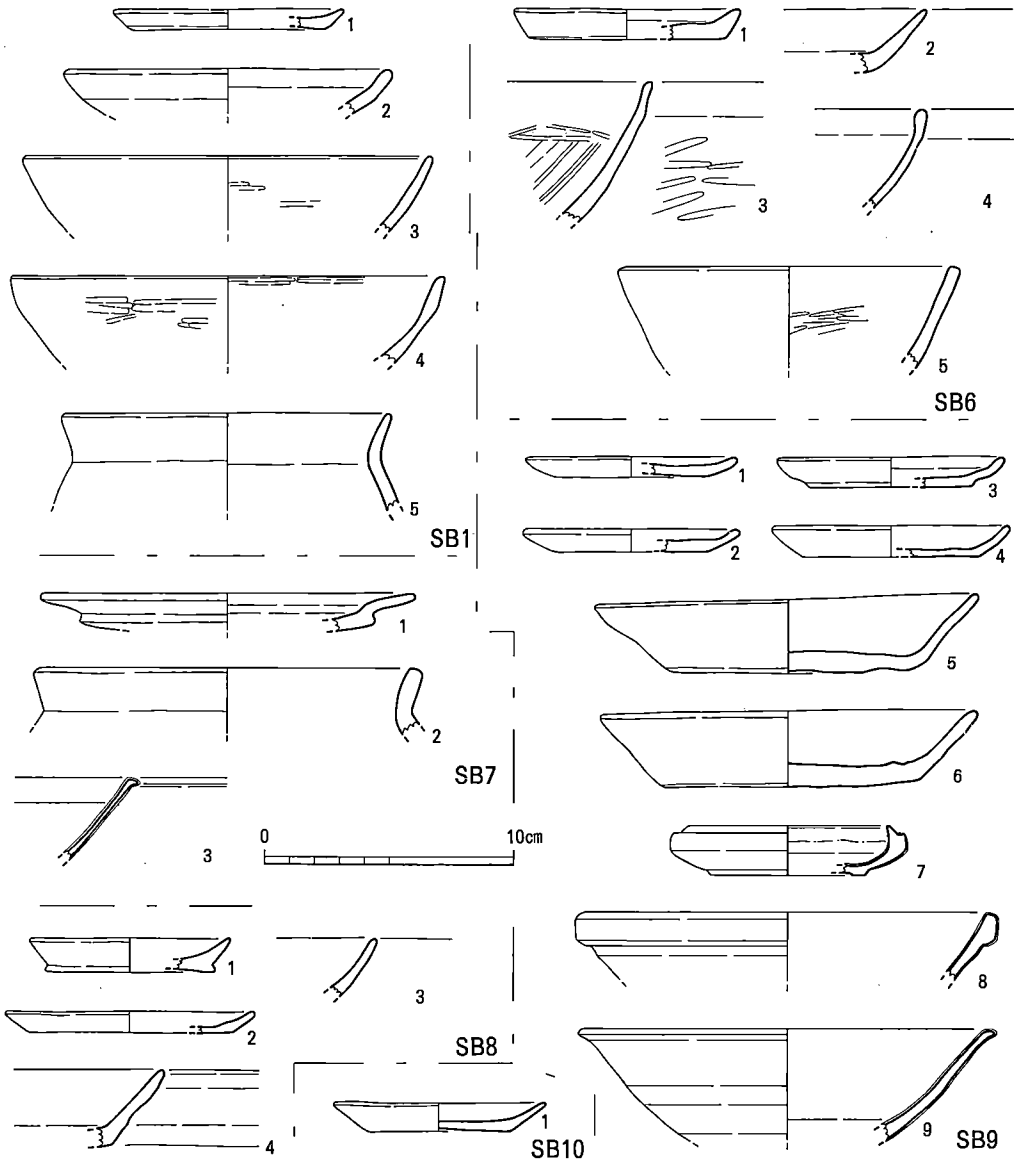
出土遺物（図版43、第14図1、140図2）

土師器（1） 小皿の破片で外底部は糸切り離しののち板圧痕が付いている。復原口径8.5cm、器高1.1cm。Ｐ17出土。

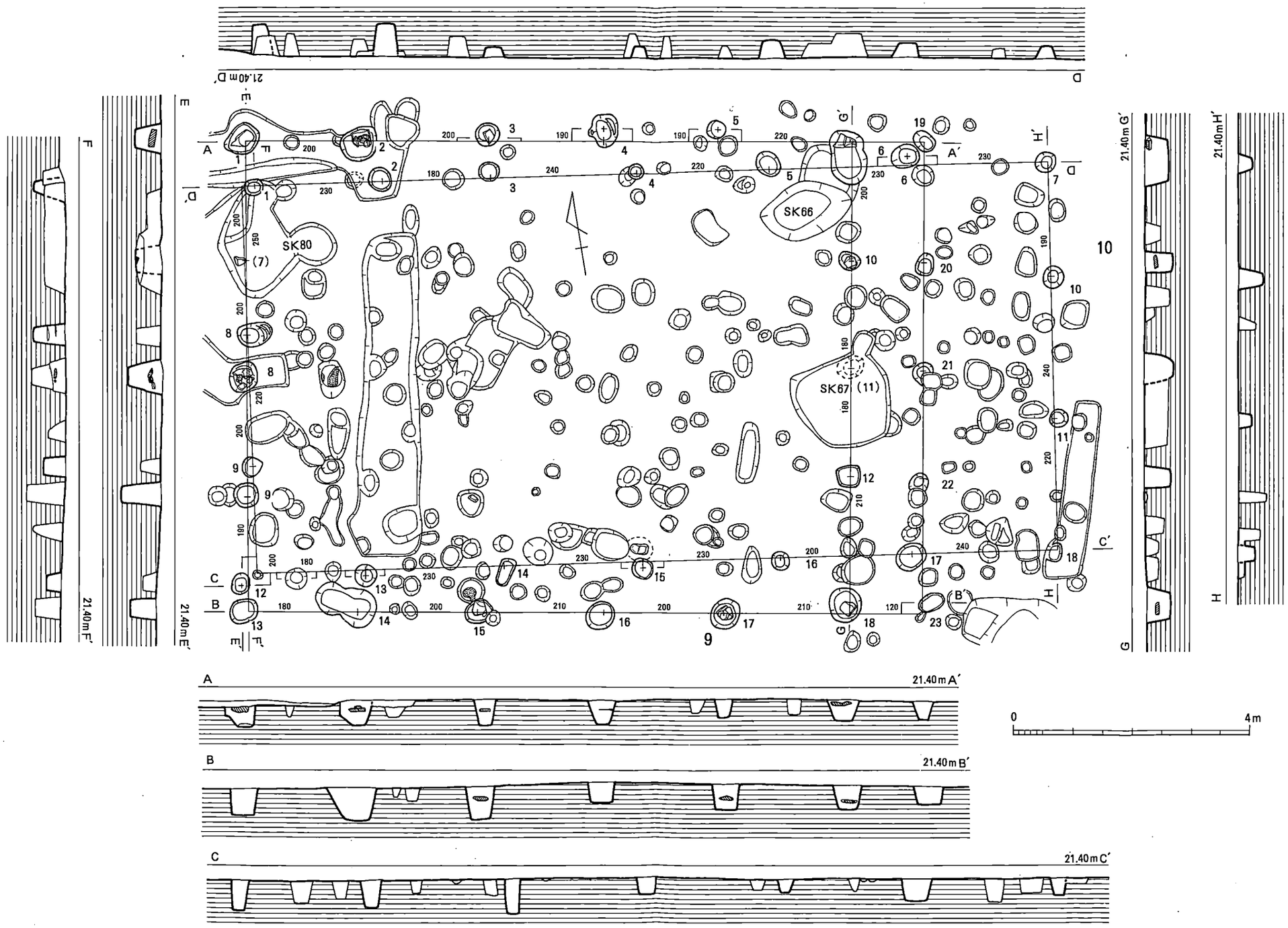
土製品（2） 管状土錘である。身の膨らみはやや偏っている。現存長32mm、最大径10mm。

11号掘立柱建物跡［ＳＢ11］（図版3～5・7、第11図）

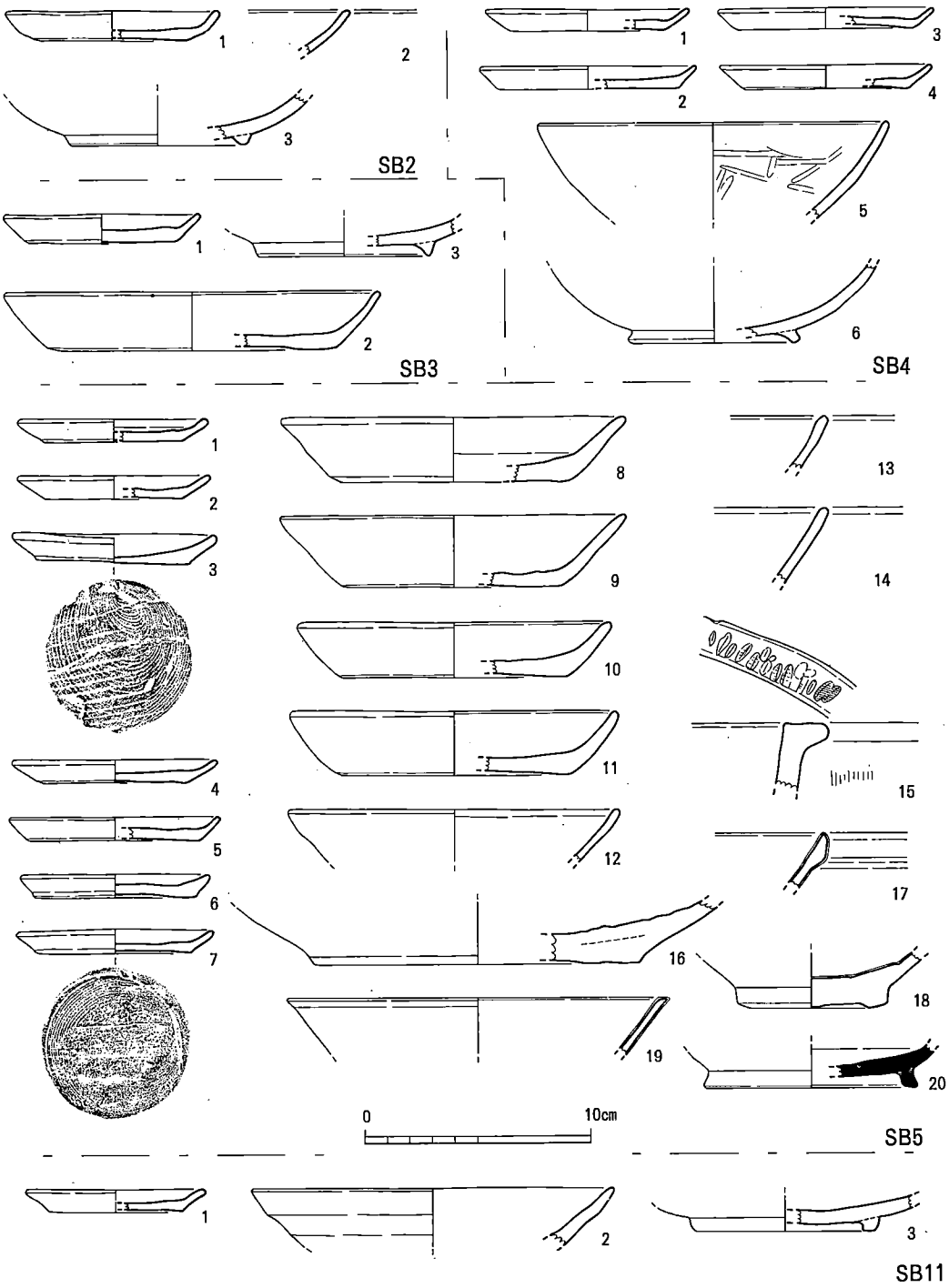
Ｅ・Ｆの4・5区にあって、ＳＢ５と重複して存する南北棟の建物である。２間×５間で、梁行は560cm、桁行は830cmを測る。主軸方位はN-7°-E。桁行のＰ4はＳＢ５ＡのＰ4と、またＰ5はＳＢ５ＢのＰ5′と共有している。東西両方の桁行の中央にあたるＰ3とＰ4の間、Ｐ11とＰ12の間は210cmであって他よりも広くなっている。これの柱穴はこの遺跡の中では最も小さいと



第14図　才田　ＳＢ１・６・７・８・９・10出土遺物実測図（1/3）



第15図　才田 ＳＢ９・10実測図（1／80）



第16図　才田 ＳＢ２・３・４・５・11出土遺物実測図（1/3）

いえる。

出土遺物（第16図1～3）

土師器（1・2） 1は小皿の破片で外底部は糸切り離し痕がある。復原口径8cm、器高1cm。P8の出土。2は坏で、復原口径16cm。P7出土。

瓦器（3） 高台が丸くならない椀である。復原高台径8cm。P12出土。

12号掘立柱建物跡［SB12］（図版3・7、第17図）

D4区にある2間×3間の南北棟建物であり、SB13と重複している。SK53～55とも重複し、P7がSK55を切り、P8もSK53を切っていたものと思われる。梁行440cm、桁行650cmを測り、主軸方位は真に南北を指していてN-0°-E。

出土遺物（第18図1～6）

土師器（1～5） 1・2の小皿はともに外底部が糸切り離しである。復原口径はともに9cmで、器高は1が1.2cm、2が0.9cm。3・4の坏もともに外底部は糸切り痕で、そののち板圧痕が付いている。3は復原口径が15.6cm、器高2.6cm。4は復原口径15.9cm、器高3.2cm。5は椀であろうか。復原口径15cm。1～3・5はP7、4はP10から出土した。

瓦器（6） 高台が角張った椀である。内面はミガキを施す。復原で口径17cm、高台径6.6cm、器高5.6cm。P7出土。

13号掘立柱建物跡［SB13］（図版3・7、第17図）

D4・5区にある3間×4間の東西棟建物であるが、柱並びにやや不安なところもある。SB12と重複し、P1がSK26と、P5がSK34と切り合い、SK32・33・53～56・58とも重複する。梁行690cm、桁行880cmを測り、主軸方位はN-81°-W。P6の所から土錘が出土している。

出土遺物（図版43、第18図1～20、140図21）

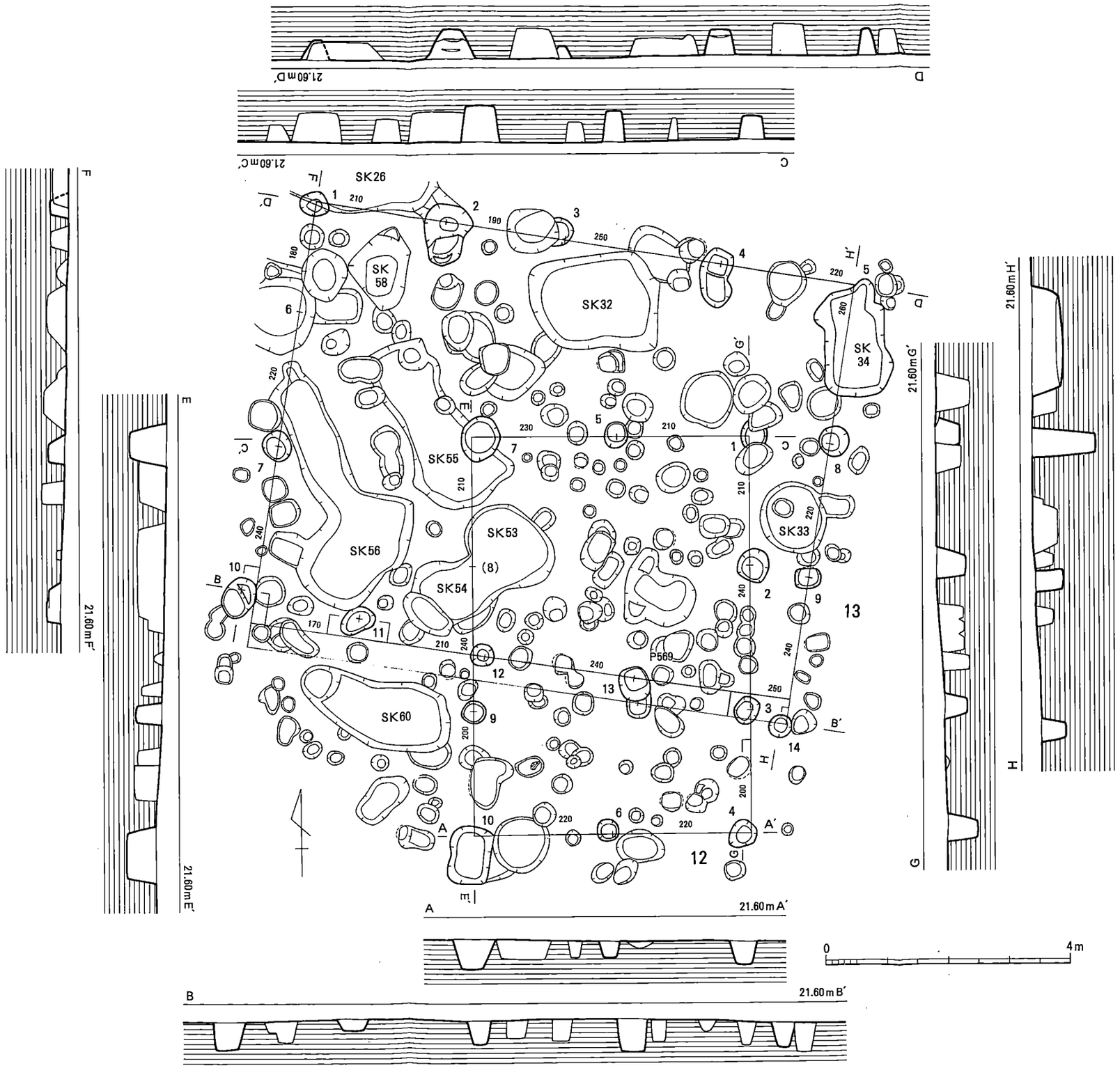
土師器（1～13） 1～9の小皿は外底部が全て糸切り離しで、そののち板圧痕が付いているものが多い。復原口径は8～10cm、器高は0.9～1.3cm。10～13は平底にならない坏で、椀に近い形状をなす。復原口径は15.8～16.8cm、器高3.4～4.cm。

瓦器（14～16） 14は口径のわりに深みがある。内面は黒変している。復原口径は14が15cm、15が17cm、16が18cm。

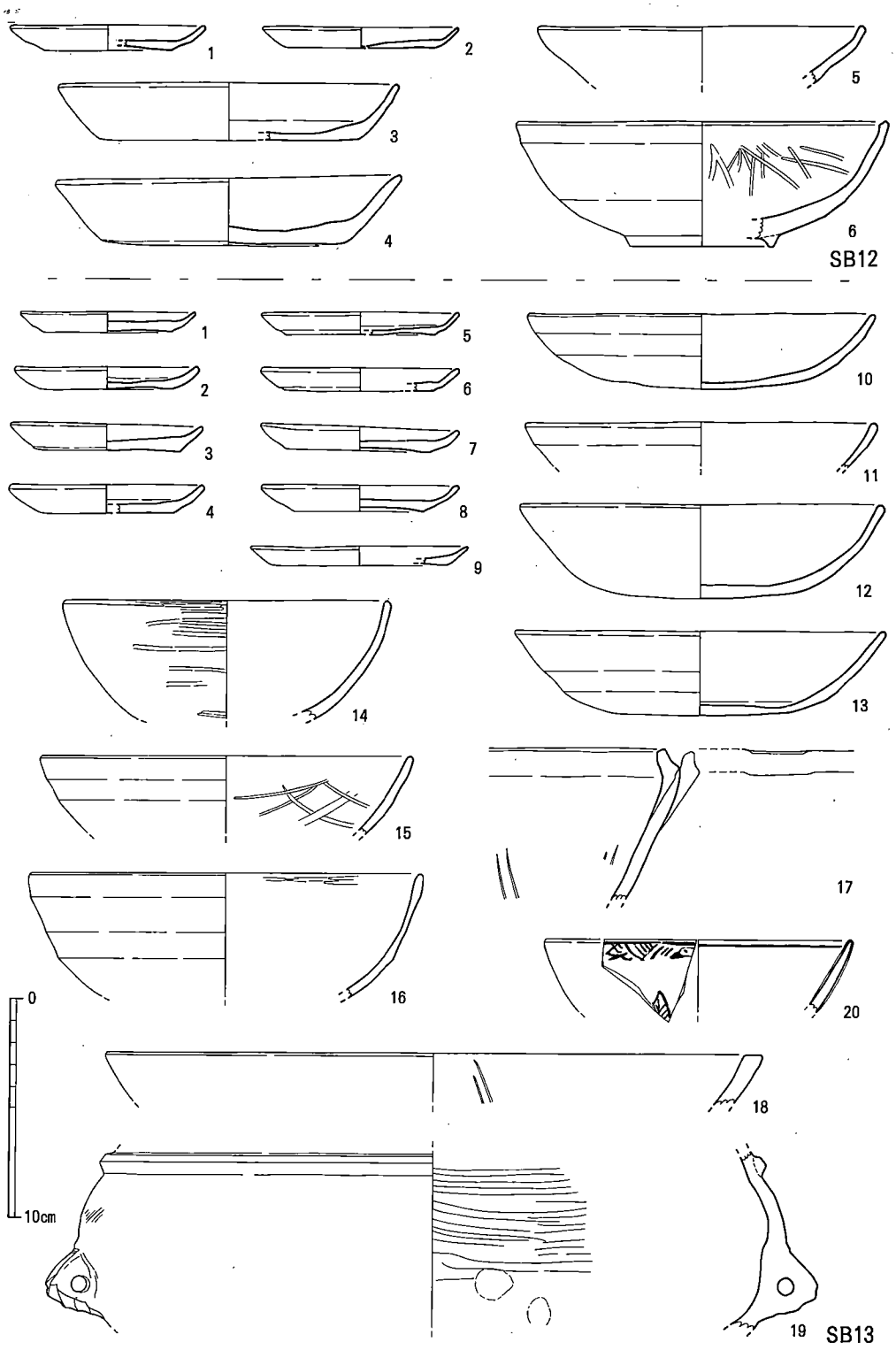
須恵質土器（17） 東播系すり鉢の破片である。

瓦質土器（18・19） 18はすり鉢片で、復原口径30cm。19は茶釜片で、内外とも黒灰色をなす。孔のある把手が付く。胴部最大径は復原で32.2cm。

磁器（20） 染付の破片で、口縁の内外と外面胴部に呉須で文様が描かれ淡いブルーに発色している。器表には貫入が入る。復原口径14cm。国産品の混入であろう。



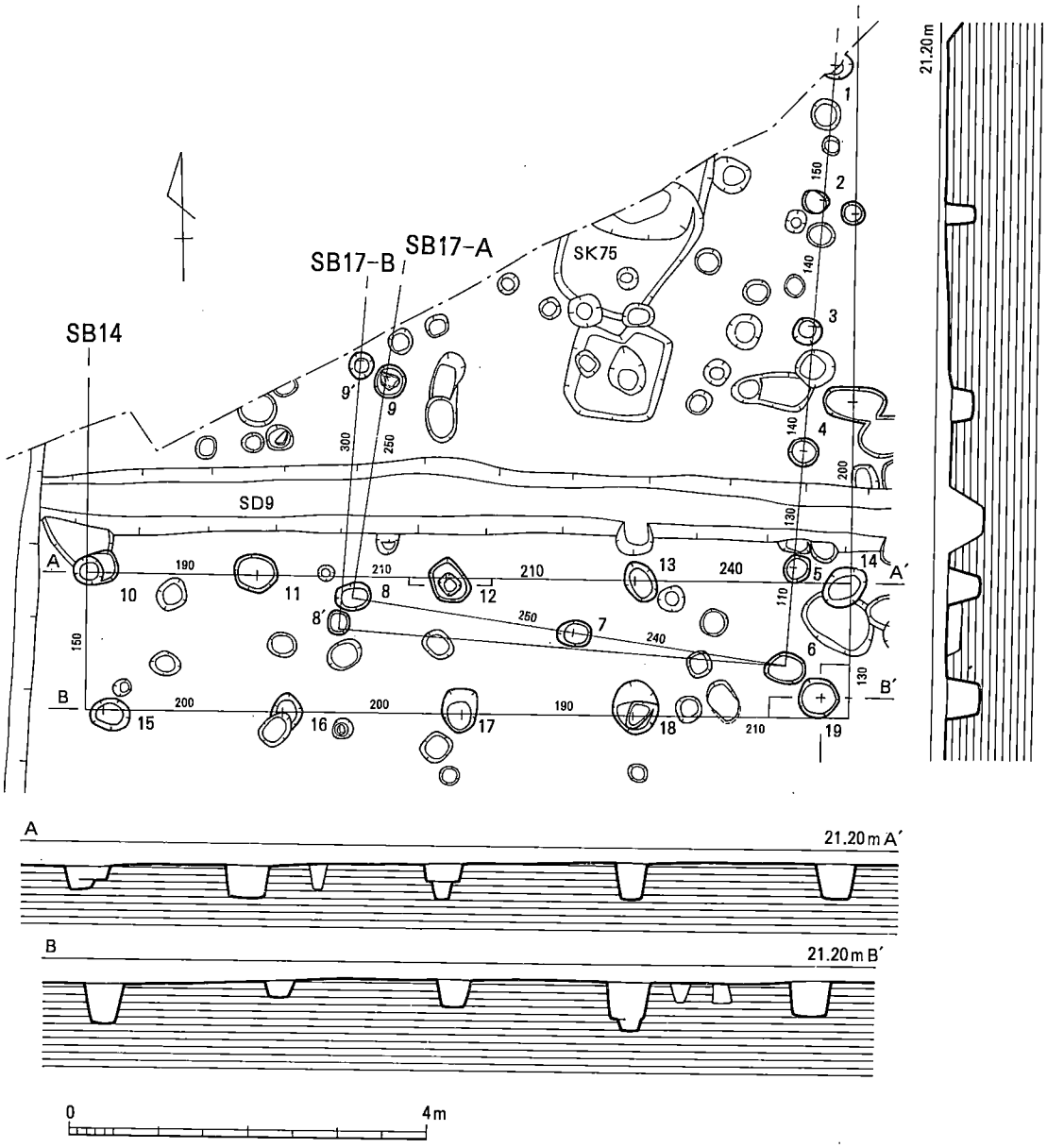
第17図　才田　ＳＢ12・13実測図（1／80）



第18図　才田 ＳＢ12・13出土遺物実測図（1/3）

以上のうち1～5・7・8・11・13・15・16はＰ6から、6・9がＰ4、10・12・14がＰ2、17～19がＰ13、20がＰ14から出土した。

土製品（21） 管状土錘である。中央部はエンタシス状に膨らむ。全長44㎜、最大径10㎜、重



第19図　才田 ＳＢ14・17Ａ・17Ｂ実測図（1/80）

14号掘立柱建物跡［ＳＢ14］（図版3・15、第19図）

Ｚ5区を中心にＡ5区にかかる所にあり、北半部が調査区外に伸びているが、おそらく３間×４間の東西棟建物であろう。ＳＢ17、ＳＤ9、ＳＫ75と重複する。梁行はＰ5にあたる柱穴が見えていないので明確でないが610～620cmほどと思われる。桁行は850cmで、Ｐ10～14の南側に幅150cmをおいてＰ15～19の柱列がある。庇であろうか。主軸方位はN-88°-W。Ｐ12から鉄器が出土している。

出土遺物（図版46、第21図1～6、146図7）

土師器（1～4） 1・2の小皿は外底部が糸切り離しである。復原口径は8cmと10cm、器高は0.9cmと1.2cm。3・4の坏も糸切り離しで、復原口径は15.6cmと15.8cm、器高は2cmと3cm。1・2・4はＰ17、3はＰ19の出土。

瓦器（5・6） 5はやや薄いつくりで高台が外側へ張った形状をなす。復原で高台径は5が7.6cm、6が8cm。5はＰ13、6はＰ11の出土。

鉄器（7） 刀子の茎かと思われるが、やや幅が広いのと刃部のある身が屈折している点が気になる。

15号掘立柱建物跡［ＳＢ15］（図版3・6・7・8、第20図）

Ｂ3区にある２間×４間の東西棟建物であるが、Ｐ11・Ｐ12にあたる柱穴は検出されていない。ＳＢ16と重複し、Ｐ9の切り合いによりＳＢ15がＳＢ16を切っていると思われる。ＳＫ70とも重複する。梁行450cm、桁行850cmを測り、主軸方位はN-80°-W。Ｐ2より鉄器が、Ｐ9より鉄器とスラッグが、Ｐ7より土錘が出土している。

出土遺物（図版43・46、第21図1～4、140図5、146図6・7）

土師器（1～4） 1～3の小皿、4の坏ともに外底部が糸切り離しののち板圧痕が付いている。口縁端部は丸く仕上げている。復原口径は8～8.6cm、器高は0.6cm～1.1cm。4は復原口径15.8cm、器高3.1cm。1はＰ8、2～4はＰ2の出土。

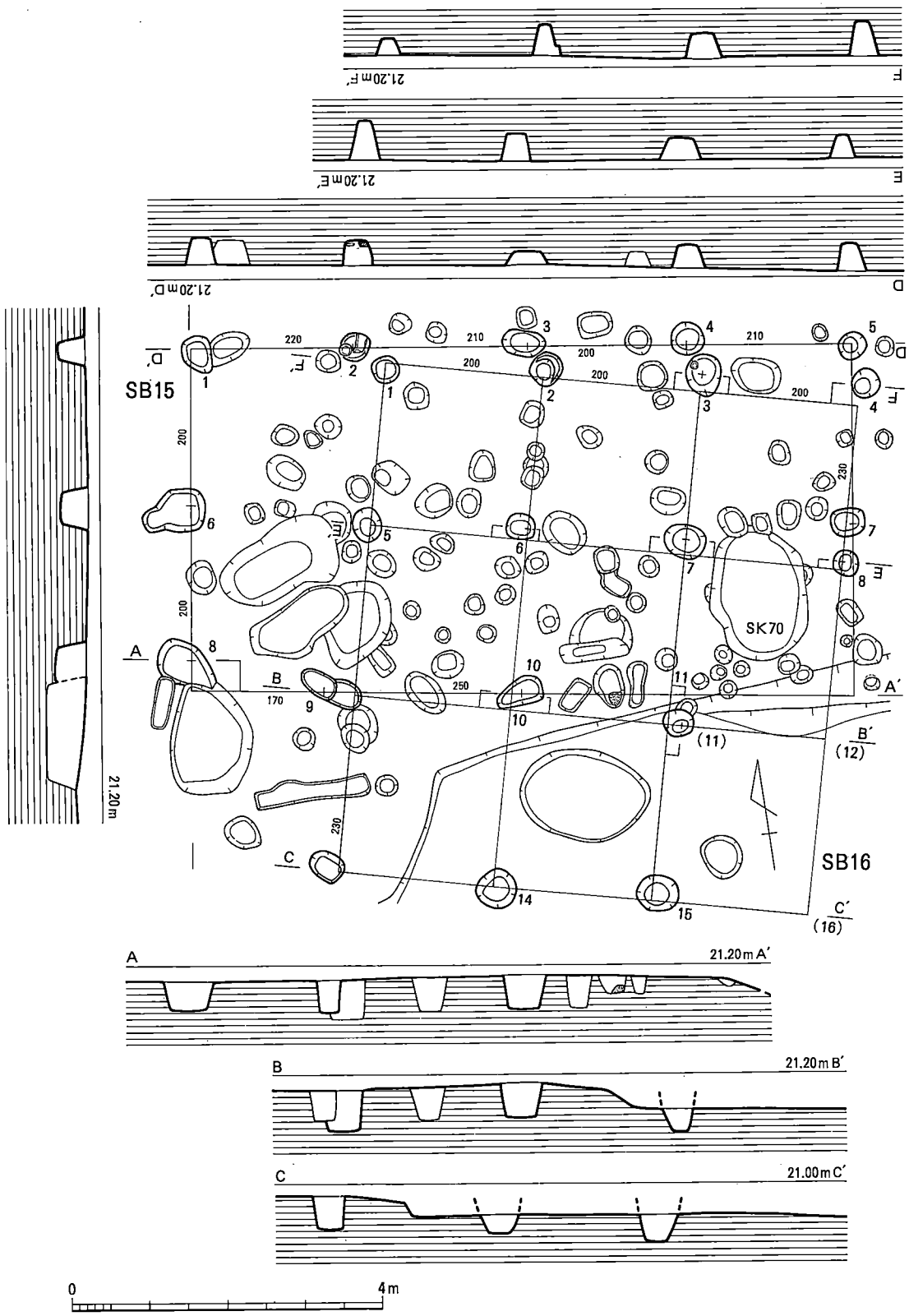
土製品（5） 管状土錘の破片である。中央部はエンタシス状に少し膨らむらしい。現存長28mm、最大径9.5mm。

鉄器（6・7） 6は刀子の茎であろうか。Ｐ9出土。7は釘が湾曲しているのであろう。Ｐ2出土。

16号掘立柱建物跡［ＳＢ16］（図版3・6・7・8、第20図）

Ｂ3区にありＳＢ15と重複する。３間×３間の総柱の南北棟建物であるが、Ｐ12・Ｐ16にあたる柱穴は検出されていない。ＳＫ70とも重複する。梁行600cm、桁行660cmを測り、主軸方位はN-15°-E。Ｐ3よりスラッグが出土している。

出土遺物（第21図1～12）



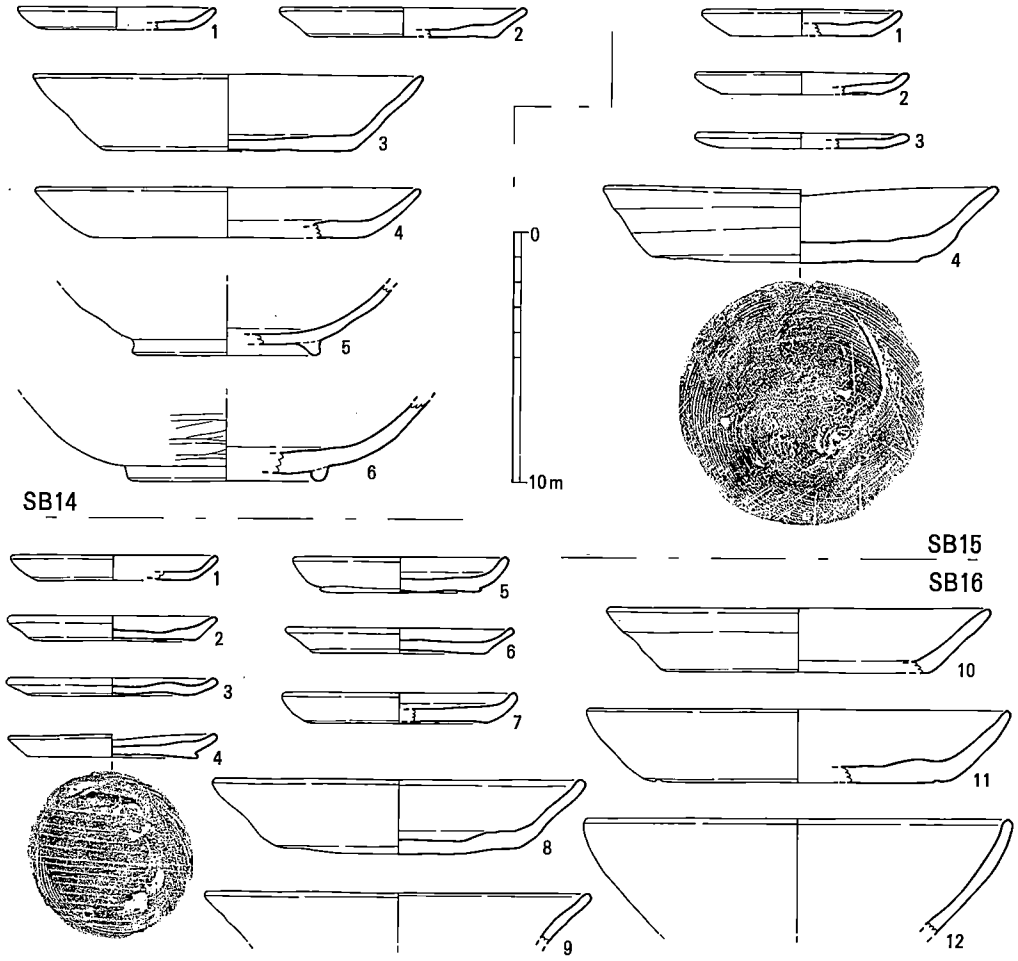
第20図　才田 ＳＢ14・17Ａ・17Ｂ実測図（1/80）

土師器（1～11） 1～7の小皿は外底部が全て糸切り離しで、そののち板圧痕の付いているものが多い。復原口径は8.3～9.5cm、器高は0.7～1.4cm。8～11の坏も8・11は外底部は糸切り痕がある。復原口径は15～17cm、器高は2.6～3cm。1・3・5・8はＰ13、2・7はＰ15、4・11はＰ3、6・10はＰ7、9はＰ2から出土した。

瓦器（12） 内外とも磨滅して調整は不明。復原口径17.2cm。Ｐ11出土。

17号掘立柱建物跡［ＳＢ17］（図版3・15、第19図）

Ｚ5区からＡ5区にてＳＢ14と重複して存する。確証はないが、建物であろうと考えたので参考として図示する。北半部が調査区外に伸びているが、おそらく２間×３間もしくは２間×６間の南北棟建物であろう。ＳＤ9、ＳＫ75と重複する。桁行の西辺が二方向ありそうなので17

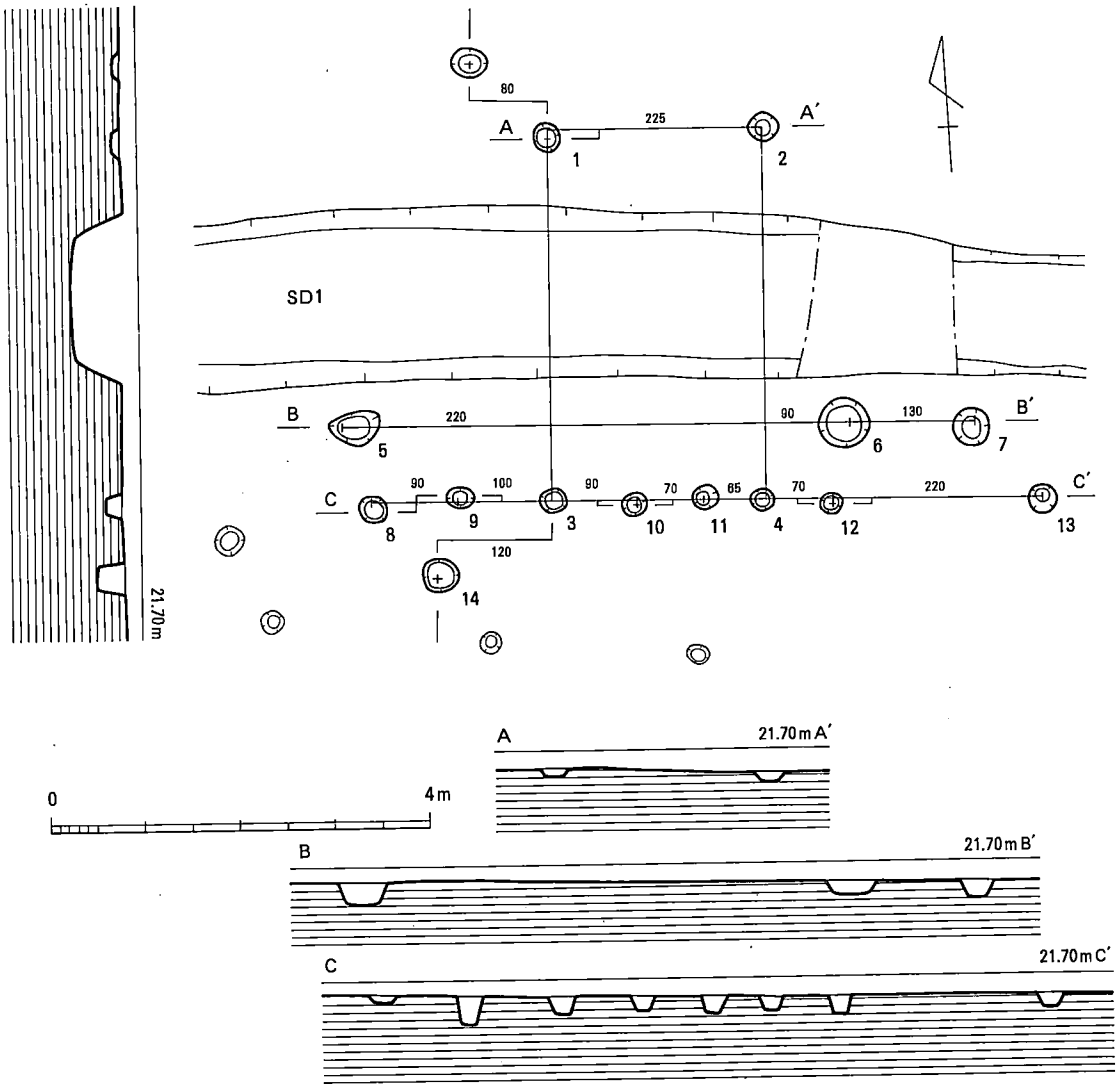


第21図　才田　ＳＢ14・15・16出土遺物実測図（1/3）

Ａと17Ｂにわける。桁行東辺は共有し、Ａ・Ｂ間で4.5°のずれがある。梁行は500cmで、主軸方位は17ＡがＮ-10.5°-Ｅ、17ＢがＮ-6°-Ｅ。

１号橋脚跡？［ＳＷ１］（図版13、第22図）

Ｄ7区の東端からＥ7区にかけてＳＤ4を跨いで存する。Ｐ1～Ｐ4を橋脚の柱穴とし、その周辺にある柱穴群を補助的な柱と捉えたが、もとより確実であるかどうかわからない。ただ、Ｐ8～Ｐ13は小さな柱穴が若干の出入りを有しながらも一列に並び、それはＳＤ4と平行している。



第22図　才田　ＳＷ１実測図（1/80）

この一列より北側にはＰ5～Ｐ7があり、Ｐ1-Ｐ3ラインとＰ5の間、Ｐ2-Ｐ4ラインとＰ7の間は等しく220cmである。これらは何らかの規則性を持っているようであり、ＳＤ4に関連する遺構であるとすれば橋のような上部構造が考えられる。Ｐ1～Ｐ4の主軸方位はN-3°-Ｅ。Ｐ5から瓦片、Ｐ11からスラッグ3点が出土している。

出土遺物（図版43、第139図1・2）

瓦　1は丸瓦の破片で、表面は燻して黒化している。厚みは1.8cm。2は平瓦片で表裏ともにナデにて調整している。厚みは1.8cm。ともにＰ5から出土した。

2　土坑

1号土坑［ＳＫ１］（図版19、第26図）

Ｆ6区の北東端に近い所にある。規模は長軸213cm、短軸194cm、深さ62cmを測る。平面プランは略方形を呈する。壁面は略直に近い形で立ち上がる。床面は略平坦である。埋土中からは土師器、瓦器、磁器、土錘1、鉄器1、銭貨5が出土した。

出土遺物（図版43・46、第23図1～8、140図9、146図10、145図11～15）

土師器（1～3）　小皿である。口径は8.3～9.7cm、器高0.6～1.2cmを測る。2は板状圧痕が見られる。底部外面は糸切り離し後板状圧痕を施す。胎土は精良、色調は赤褐色～黄桃色、焼成は良好である。

瓦器（4・5）　いずれも椀で口縁部上半は欠損する。内外面の調整は不明である。色調は灰色を呈する。

磁器（6～8）　いずれも白磁で底部は欠損する。6は碗Ｖ－1類に分類される。口縁部内面上半には沈線が巡る。7は口縁部が短く外反する碗である。内面の見込み部分に沈線が巡る。Ｖ類に分類される。8は口縁部が玉縁口縁になる碗である。Ⅳ-2類に分類できる。

土製品（9）　管状土錘で、一端を欠失する。現存長47mm、最大径11mm、重さ4.35g。

鉄器（10）　鏃であろう。現存長60mm。

銭貨（11～15）　5枚あり、いずれも北宋の銅銭である。裏面には文字・文様は見られない。11は熙寧元寶で、径24.4mm。周縁の多くを欠損する。孔は一辺7mm。1068～1077年間に鋳造。12は元豊通寶で、径25.2mm。孔は一辺6.2mm。1078年初鋳。13は皇宋通寶で、径24.8mm。孔は一辺6.5mm。厚さ1.5mmと5枚の中で最も厚い。1039年初鋳。14も皇宋通寶であるが13とは字体が異なる。径24.6mm。孔は一辺7mmほどで星形につくる。1039年初鋳。15は祥符元寶で、径25.8mm。孔は一辺6.7mm。重さ3.3gと5枚の中で最も重い。1008年初鋳。

2号土坑［ＳＫ２］（図版19、第26図）

Ｇ6区に位置し、方形溝と５号土坑に隣接する。規模は長軸235cm、短軸226cm、深さ28cmを測る。平面プランは円形を呈し、壁面は略直に近い形で立ち上がる。床面は略平坦である。埋土からは土師器、須恵器、瓦器、鉄器1、スラッグ1が出土した。

出土遺物（図版46、第23図1～7、146図8）

土師器（1・2） 小皿である。口径は8.5cmと10.2cm、器高は0.9cmを測る。1は底部外面に糸切り離し後板状圧痕が見られる。2は糸切り離しである。

瓦器（3） 口径15.7cm、器高5.9cm、高台径6.7cmを測る。内湾した体部に低い高台が付き、口縁部は外反気味に立ち上がる。内外面ともにミガキ調整を施している。

磁器（4・5） 4は白磁碗で、復元口径17.8cm、器高2.8cmを測る。口縁端部は短く外反する。Ｖ類に分類できる。5は白磁？の皿である。口縁部は欠損する。

須恵器（6・7） 6は坏身である。口縁部は欠損する。7は壺の口縁部片である。復元口径は14.5cmを測る。これらは竪穴住居に伴うものと思われる。

鉄器（8） 平らな頭部を有するもので、釘であろうか。現存長45mm。

5号土坑［ＳＫ５］（図版19、第26図）

Ｇ6区に位置し、方形溝と２号土坑に隣接する。規模は長軸159cm、短軸88cm、深さ50cmを測る。平面プランは楕円形気味で、壁面は直に立ち上がる。床面は略平坦である。埋土中からは土師器、瓦器、磁器、須恵器、スラッグ2が出土した。

出土遺物（図版24、第23図1～8）

土師器（1～4） 1～3は小皿である。口径は8.3～10.2cm、器高0.8～1.2cmを測る。底部外面は糸切り痕跡が見られる。2は底部外面に板状圧痕が残る。4は坏で、復元口径16.1cm、器高2.9cmを測る。底部外面には板状圧痕がある。

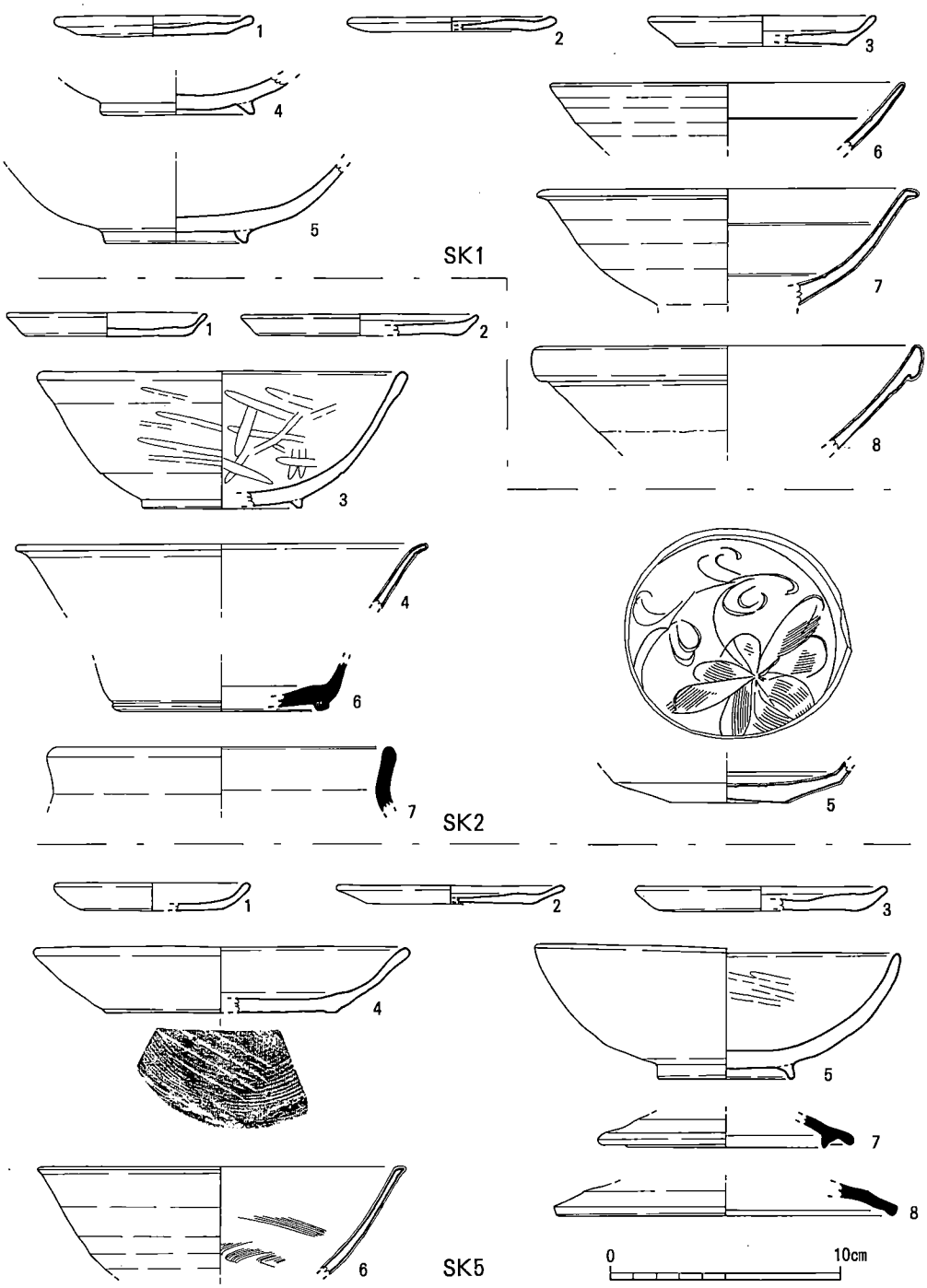
瓦器（5） 口径15.75cm、器高5.95cm、高台径5.8cmを測る。外面はヘラケズリの後ナデ、内面はナデの後ヘラミガキ調整を施している。底部外面にはヘラ記号が付く。

磁器（6） 白磁碗で、復元口径15.2cm、器高4.7cmを測る。口縁端部は平坦である。内面には櫛目文がある。Ｖ-4･ｂ類に分類できる。

須恵器（7・8）7は坏蓋である。天井部は欠損する。口径は8.55cmを測る。8は口径14.5cm、器高は2.3cmを測り、口縁端部は断面三角形を呈する。7は竪穴住居に伴うものと思われる。

8号土坑［ＳＫ８］（図版3・7・23、第26図）

Ｅ6区に位置し、９号土坑の北側に隣接する。規模は長軸178cm、短軸168cm、深さ35cmを測る。平面プランは円形気味で、壁面は略直に立ち上がる。床面は略平坦である。埋土中からは



第23図　才田 1・2・5号土坑出土遺物実測図（1/3）

土師器、瓦器、陶器、磁器、石鍋1などが出土した。

出土遺物（第24図1～7）

土師器（1～3） 1・2は小皿である。口径は8.8cmと8.9cm、器高0.95cmと～1.15cmを測る。いずれも底部外面には糸切り痕跡が見られる。1は底部外面に板状圧痕がある。3は坏で、復元口径15.4cm、器高2.95cmを測る。底部外面は糸切り離し後板状圧痕を施す。

瓦器（4・5） 4は口縁部片である。5は口縁部が欠損する。

陶器（6） 水注の口縁部片である。胎土は細砂・赤褐色粒・雲母を含む。露胎は茶褐色、釉調は黄茶色を呈する。Ⅳ類に分類される。

磁器（7） 白磁の碗である。底部は欠損する。Ⅳ類に分類できる。

9号土坑［ＳＫ９］（図版3・7・23、第26図）

Ｅ6区に位置し、8号土坑の南側に隣接する。規模は長軸178cm、短軸168cm、深さ35cmを測る。平面プランは略円形気味で壁面は略直に立ち上がる。床面は略平坦である。埋土からは土師器、瓦器、磁器、スラッグが出土した。

出土遺物（図版24、第24図1～24）

土師器（1～13） 1～9は小皿である。口径は7.7cm～9.3cm、器高0.7cm～1.1cmを測る。底部外面は糸切り痕跡が見られる。1・3・4・5・7は底部外面に板状圧痕がある。8は底部の中央部に穿孔が2ヵ所ある。10～13は坏で、口径15～16cm、器高3～3.3cmを測る。外面は糸切り痕跡が見られ、10～12は板状圧痕が残る。

瓦器（14～18） 椀で、14・15は底部片である。16～18は口径16～17.2cmを測る。16は内面にミガキが残っている

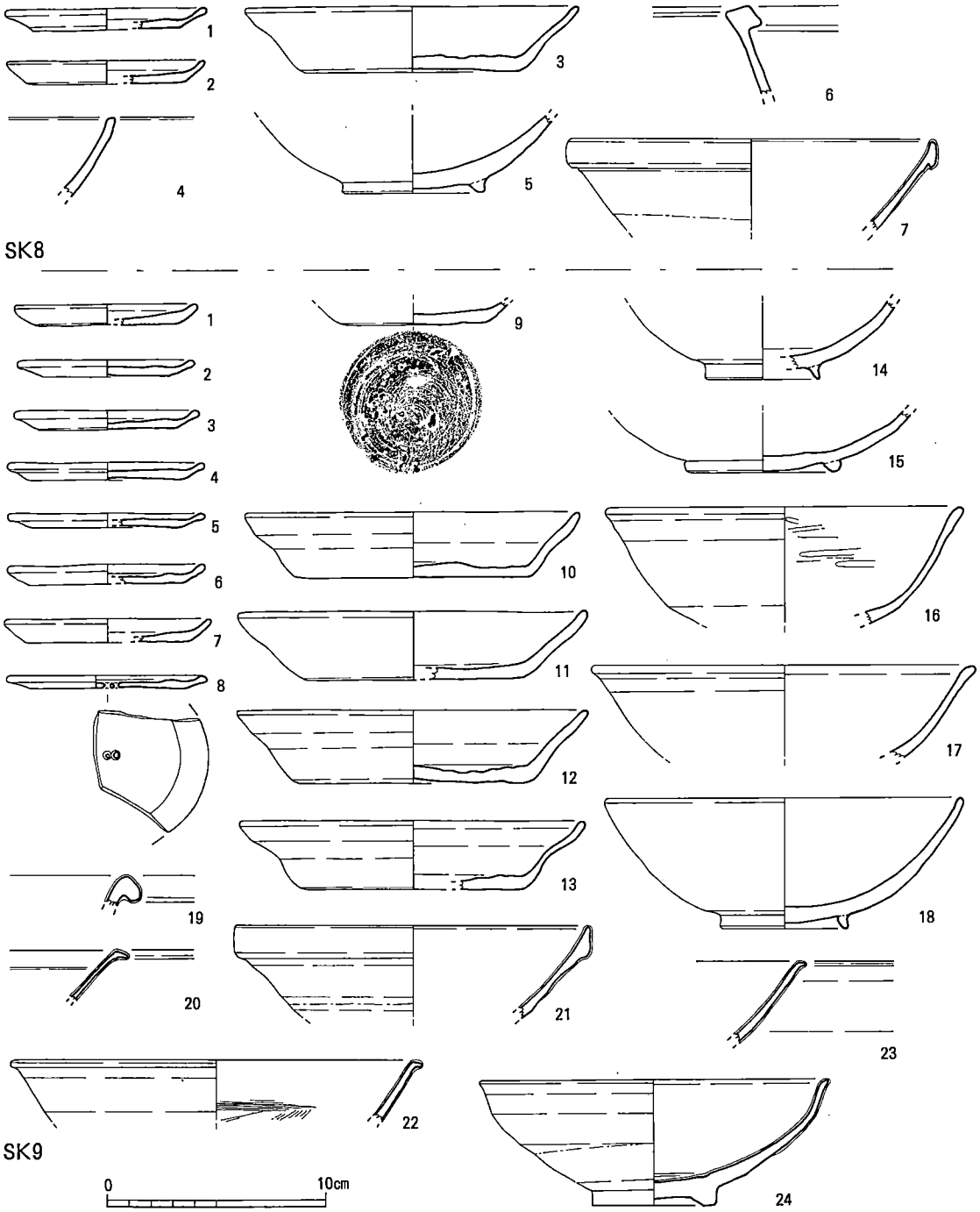
磁器（19～24） 19～23は白磁である。19は壺の口縁部である。20～23は碗である。20はＶ類かⅧ類である。21は玉縁口縁を有する。復元口径は16.2cmを測る。Ⅳ－2類である。22は復元口径17.9cmを測り、Ｖ－4・b類に分類できる。23はＶ類かⅧ類に分類できる。24は同安窯系青磁碗である。Ⅱ類に分類できる。

10号土坑［ＳＫ10］（図版3・5・7・22、第26図）

Ｆ5区に位置し、4号掘立柱建物跡の北側に隣接する。規模は長軸428cm、短軸201cm、深さ24cmを測る。平面プランは不整形で、壁面は略直に立ち上がる。床面は略平坦である。土師器、瓦器、陶器、磁器、軽石1などが出土した。

出土遺物（図版24、第25図1～21）

土師器（1～11） 1～8は小皿である。口径は8cm～9.3cm、器高0.8cm～1.5cmを測る。底部外面は糸切り痕跡が見られ、1～4・6・8は板状圧痕がある。9～11は坏で、口径13.6～16.4cm、器



第24図　才田 8・9号土坑出土遺物実測図（1/3）

高2.6～3.45cmを測る。底部外面は糸切り離し後板状圧痕を施す。

瓦器（13～15） 14･15は椀の底部片である。13～15は口径16～17.2cmを測る。15は内面にミガキが残っている。

陶器（12） 甕の口縁部片である。焼成は軟質、色調は灰色を呈する。常滑焼の可能性がある。

磁器（16～21） 16～19は白磁碗である。20･21は白磁皿である。16は片切彫文を施す。Ⅴ－2・b類に分類される。17・18はⅤ類に分類できる。19は復元口径15cmを測り、内面の見込み部分は釉を掻き取っている。Ⅷ－2類に分類できる。20は口縁端部が欠損する。Ⅵ－1･a類に分類できる。21は底部が欠損する。Ⅵ－1・a類に分類できる。

11号土坑［ＳＫ11］（図版3・7・22・23、第26図）

Ｅ6区に位置する。規模は長軸146cm、短軸121cm、深さ47cmを測る。平面プランは略円形気味で、壁面は緩やかに立ち上がる。床面は略平坦である。埋土中からは土師器、瓦器、磁器、石鍋2などが出土した。

出土遺物（図版24、第25図1～15）

土師器（1～5） 1～3は小皿である。口径は8.2cm～9.3cm、器高1.1cm～1.2cmを測る。底部外面は糸切り痕跡が見られる。3は底部外面に板状圧痕がある。4・5は坏で、口径13.8～14.6cm、器高2.85～3.3cmを測る。5は底部外面が糸切り離し後板状圧痕を施す。

瓦器（6～11） 6は小皿である。口径は9.5cm、器高2.1cmを測り、内面はミガキを施す。底部外面は板状圧痕が見られる。7～11は椀である。7・8は歪みが大きい。9は復元口径16.1cmを測る。外面の調整は回転ナデとナデである。10･11は底部片である。

磁器（12～15） 12は白磁碗である。玉縁口縁を有する。復元口径は16.1cmを測る。Ⅳ－2類である。13は白磁碗で、Ⅴ類に分類できる。14は白磁皿である。Ⅵ－1類に分類できる。15は龍泉窯系青磁皿である。復元口径は10cmを測り、Ⅰ－2・b類に分類される。

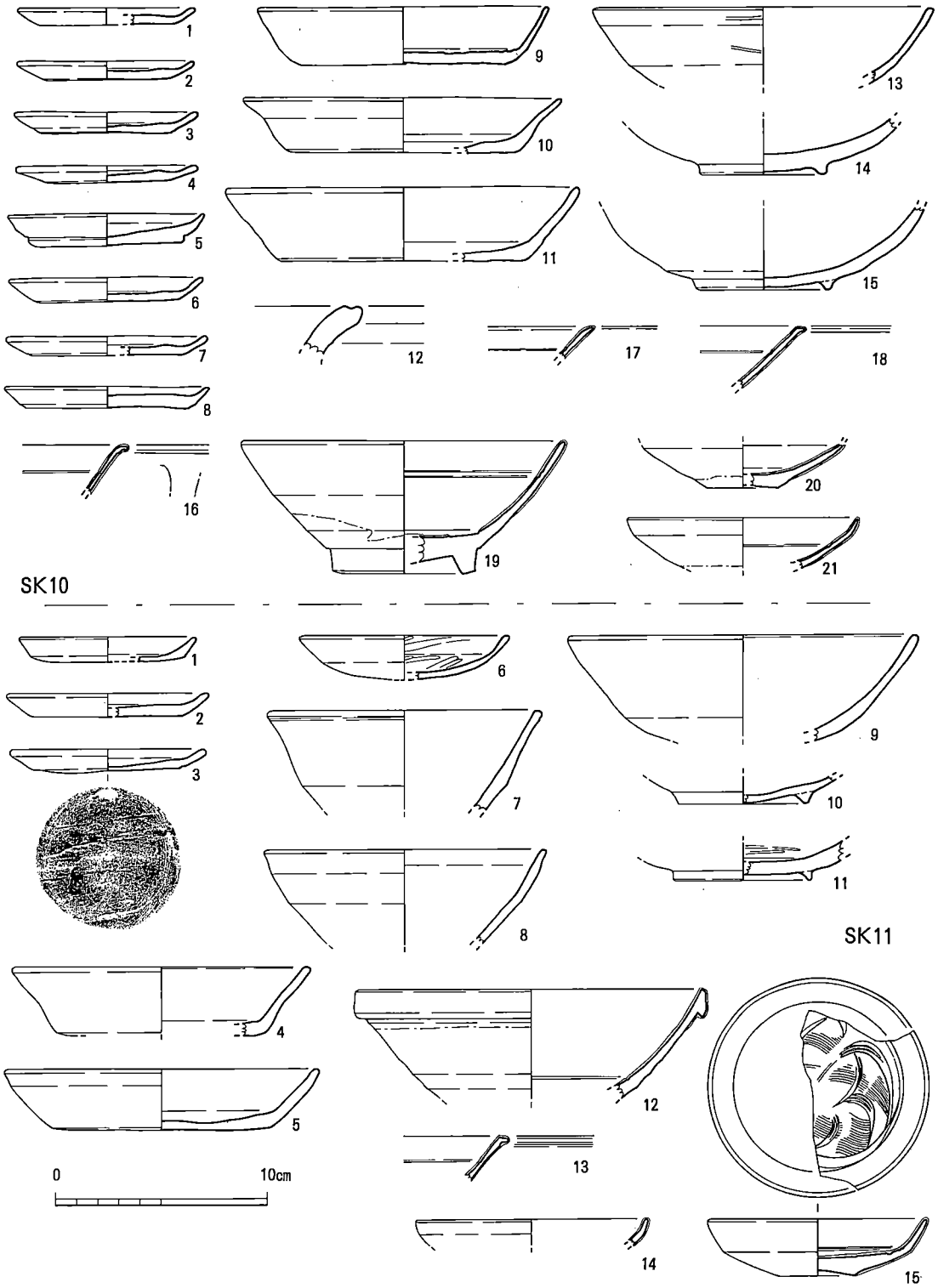
12号土坑［ＳＫ12］（図版3・7・22・23、第27図）

Ｅ5区に位置し、18号土坑に切られる。規模は長軸229cm、短軸128cm、深さ11cmを測る。平面プランは不整形気味で、壁面は緩やかにに立ち上がる。床面は略平坦で、北側には深さ58cmのピットが存在し、その上面からは粘土が検出された。土師器、瓦器、陶器、磁器が出土した。

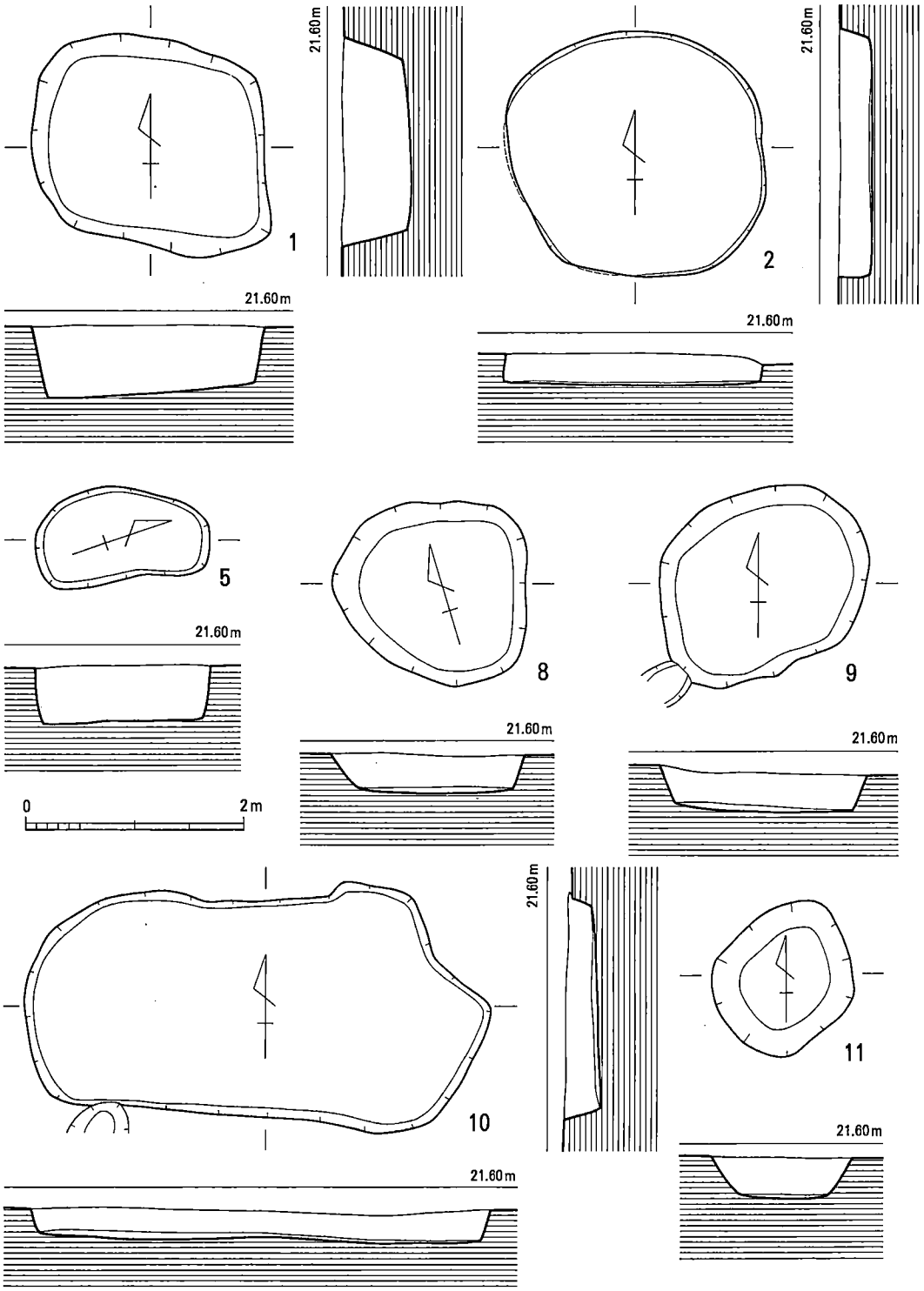
出土遺物（図版24、第28図1～27）

土師器（1～16） 1～9は小皿である。口径は8cm～9.2cm、器高0.65cm～1.4cmを測る。底部外面は糸切り痕跡が見られる。1～4・6～8は底部外面に板状圧痕がある。10～16は坏で、口径15.2～16.4cm、器高26～3.75cmを測る。11～13･16は底部外面が糸切り離し後板状圧痕を施す。

瓦器（17～19） 17は復元口径16.2cmを測る。18は口径16.4cmを測り、体部内面はミガキを施す。



第25図　才田 10・11号土坑出土遺物実測図（1/3）



第26図　才田 1・2・5・8～11号土坑実測図（1/60）

陶器（20） 壺の底部片で、胎土は赤褐色粒、黒色粒、細砂を含み、色調は黄茶褐色を呈する。
磁器（21～27） 白磁の碗である。21・22はⅤ類に分類され、23は玉縁口縁を有し、Ⅳ－2類に分類される。24は復元口径16.4cmを測り、Ⅴ－4・a類に分類される。25～27は底部片である。25は内面見込み部分に沈線が巡る。Ⅴ類に分類される。26・27は内面見込み部分の釉を掻き取っている。Ⅷ－1類に分類される。

13号土坑［ＳＫ13］（図版3・7・22・23、第27図）

Ｅ5区に位置し、18号土坑に切られる。規模は長軸301cm、短軸141cm、深さ23cmを測る。平面プランは不整形気味で、壁面は緩やかに立ち上がる。床面は略平坦である。土師器、瓦器、磁器、鉄器1が出土した。

出土遺物（図版24・25・46、第29図1～17、146図18）

土師器（1～11） 1～8は小皿である。口径は8.5～9.6cm、器高0.9～1.45cmを測る。1は糸切りであるが、2～8は底部外面がヘラ切り後板状圧痕を施す。9～11は坏で、口径15.7～16.6cm、器高3.2～3.75cmを測る。底部外面はへら切りを施す。11は板状圧痕が見られる。
瓦器（12～14） 12は口径14.6cmを測り、内外面はナデ調整の後部分的にミガキを施す。13は口径16.2cmを測り、内外面はナデ調整である。14は口径17.6cmを測り、内面はミガキ、外面の上半が回転ナデの後ミガキ、下半はナデの後ミガキを施す。
磁器（16・17） 白磁の皿である。17はⅣ類に分類される。
鉄器（18） 刀子である。関部分は背部の方が段が大きい。全長19.4cm、刃部長は12cm。

16号土坑［ＳＫ16］（図版19）

Ｈ6区の方形溝の内側にある。撹乱された小さな坑であった。埋土からは土師器、須恵器が出土した。

出土遺物（第29図1～4）

土師器（1） 口径は12.2cmを測る坏である。調整は回転ナデを施す。
須恵器（2～3） 2は坏蓋である。撮みは釦状を呈し、口縁端部は断面三角形を呈するが退化している。口径は15.9cm、器高は2.9cmを測る。3・4は坏身である。4は口径13.6cm、器高4.85cmを測る。高台は器高が低く、断面は逆台形状を呈する。

17号土坑［ＳＫ17］（図版19）

Ｈ6区の方形溝の内側でＳＫ16に隣接する。これも撹乱された坑であった。埋土からは土師器、須恵器が出土した。

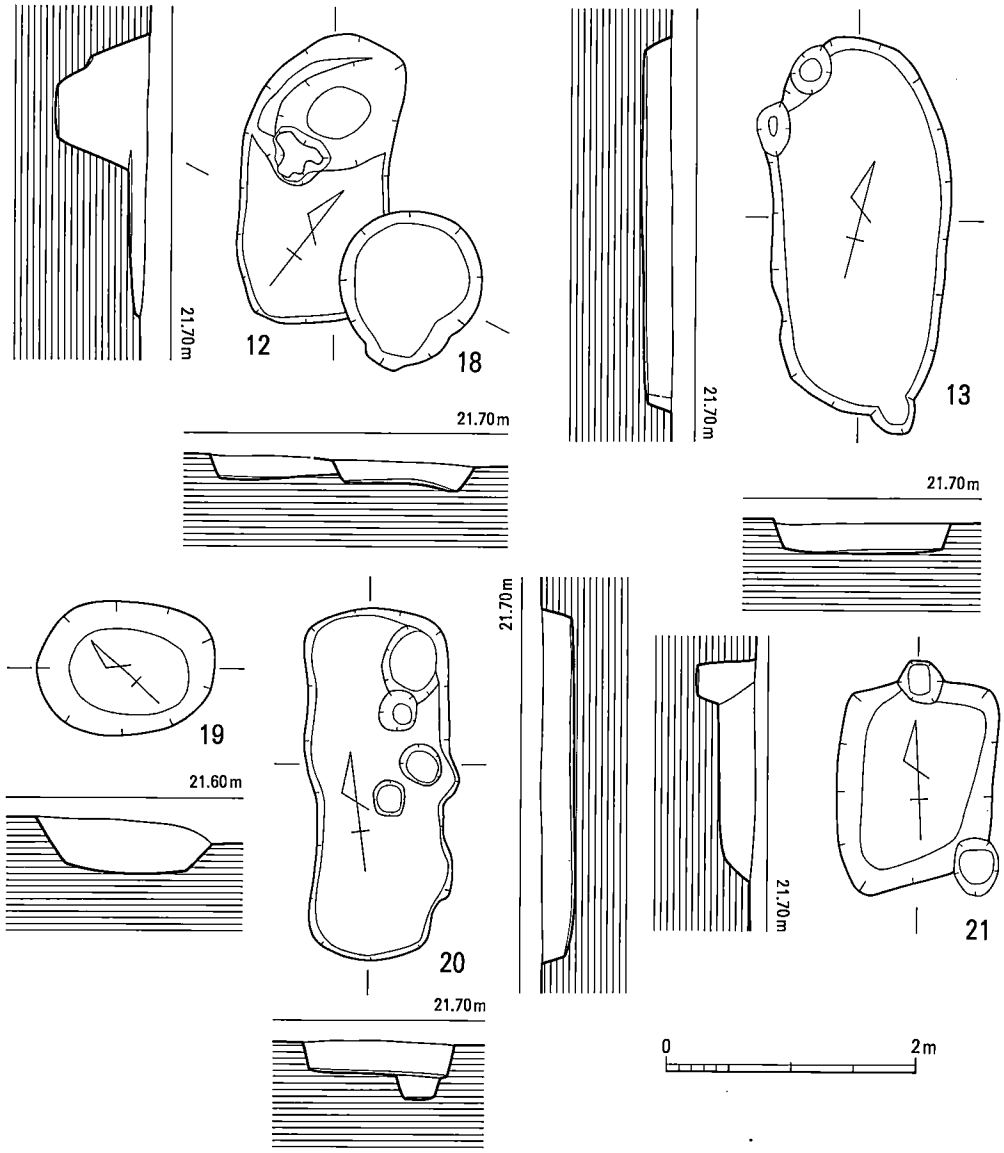
出土遺物（第29図1・2）

土師器（2） 甕の口縁部片で、外面には煤が付着している。

瓦器（1） 椀の口縁部片である。

18号土坑［ＳＫ18］（図版3・7・22・23、第27図）

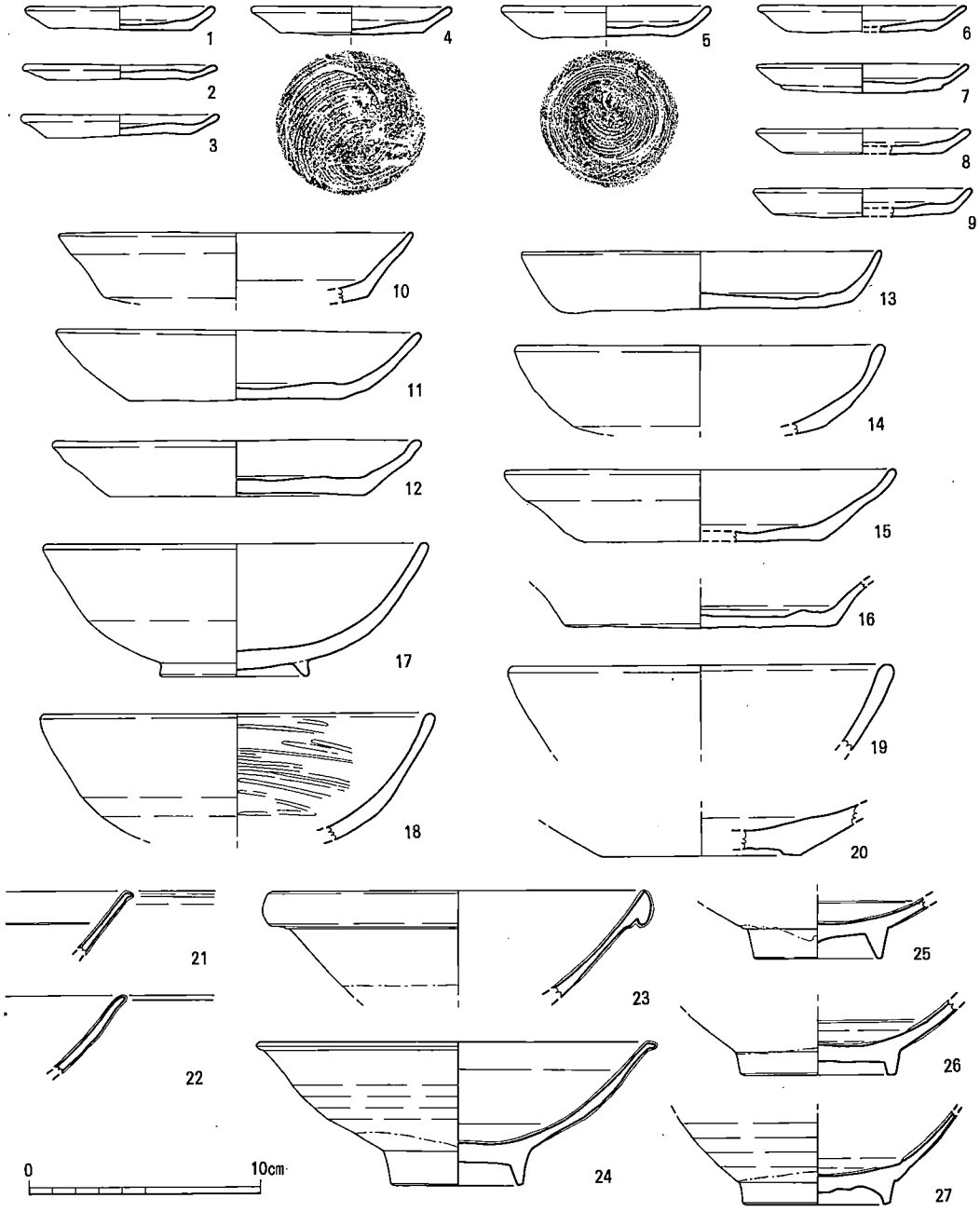
Ｅ5区に位置し、12号土坑を切る。規模は長軸115cm、短軸122cm、深さ10cmを測る。平面プランは円形で、壁面は緩やかに立ち上がる。床面は略平坦である。埋土から土師器が出土した。



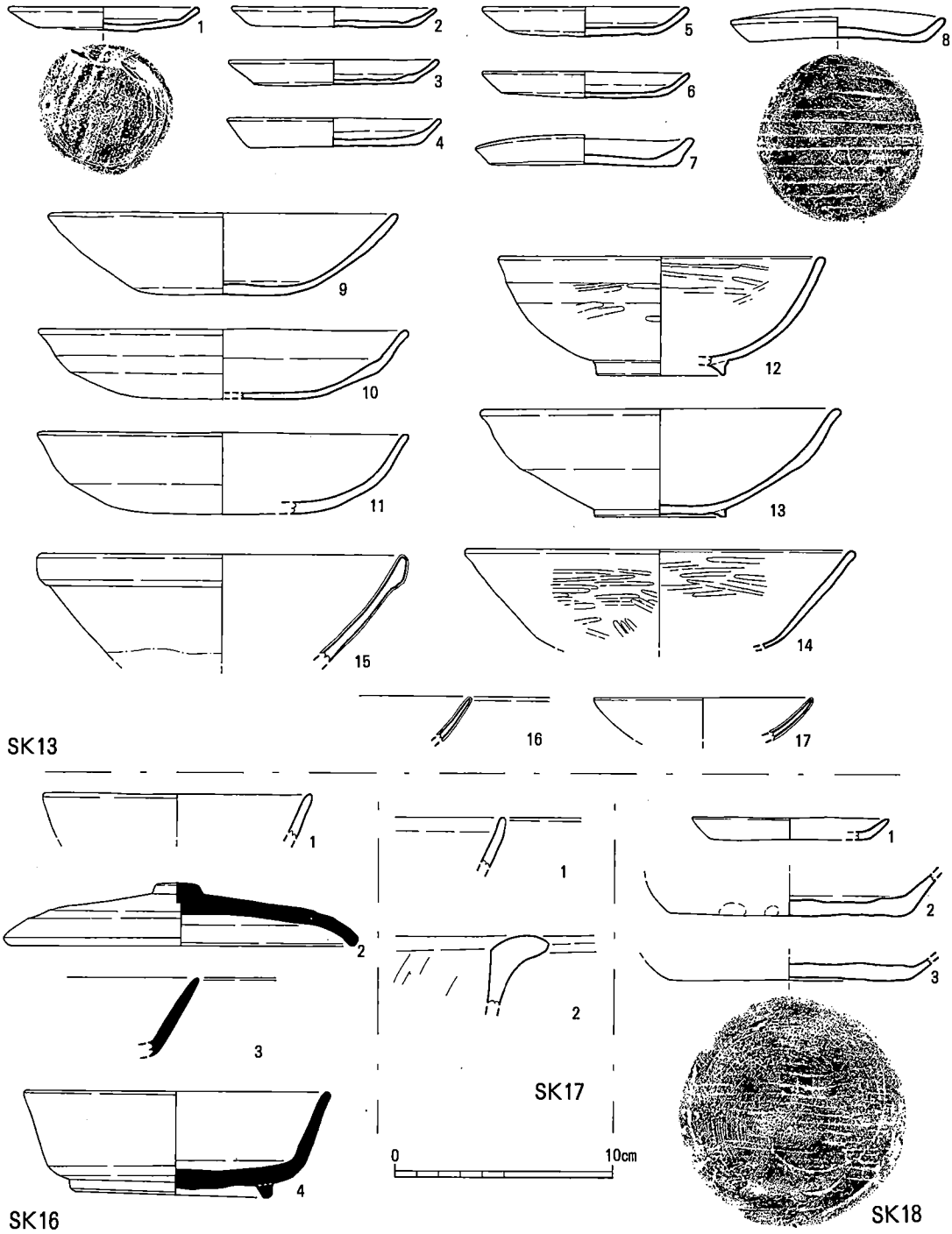
第27図　才田 12・13・18～21号土坑実測図（1/60）

出土遺物（第29図1～3）

土師器（1～3） 1は小皿である。口径8.9cm、器高0.9cmを測る。外面底部は糸切り痕が残る。2・3は坏であるが、いずれも口縁部が欠損している。外面底部は糸切りの後板状圧痕を施す。



第28図　才田 12号土坑出土遺物実測図（1/3）



第29図　才田 13・16・17・18号土坑出土遺物実測図（1/3）

19号土坑［ＳＫ19］（図版3・7・22・23、第27図）

Ｅ5区に位置し、12号土坑の西側に隣接する。規模は長軸141cm、短軸108cm、深さ42cmを測る。平面プランは円形で、壁面は緩やかに立ち上がる。床面はわずかに舟底状を呈する。埋土からは土師器、須恵器、瓦器、陶器、磁器、スラッグ1が出土した。

出土遺物（第30図1～13）

土師器（1～5） 小皿である。口径は7.5～10.2cm、器高0.9～1cmを測る。外面底部は糸切りの後板状圧痕を施す。

須恵器（12・13） 胴部片である。外面は擬格子タタキ、内面は平行タタキを施す。

瓦器（6・7） 6は口径17.4cmを測る。底部は欠損する。外面は回転ナデ、ナデ、内面は磨きを施す。7は底部片である。内面はナデの後ミガキを施す。

陶器（8・9） 鉢の口縁部片である。

磁器（10・11） いずれも白磁碗である。 10は玉縁口縁を有し、Ⅳ-2類に分類される。11は口径16.4cmを測り、口縁部は輪花を呈する。Ｖ－3・c類に分類される。

20号土坑［ＳＫ20］（図版3・7・22・23、第27図）

Ｄ5区に位置し、13号土坑の南側に位置する。規模は長軸233cm、短軸114cm、深さ27cmを測る。平面プランは隅丸長方形で壁面は直に立ち上がる。床面は略平坦で、４つのピットが存在する。土師器が出土している。

出土遺物（第30図1・2）

土師器（1・2）小皿である。2は口径が8.8cm、器高1.1cmを測る。底部外面は糸切りの後板状圧痕が見られる。

21号土坑［ＳＫ21］（図版3・7・22・23、第27図）

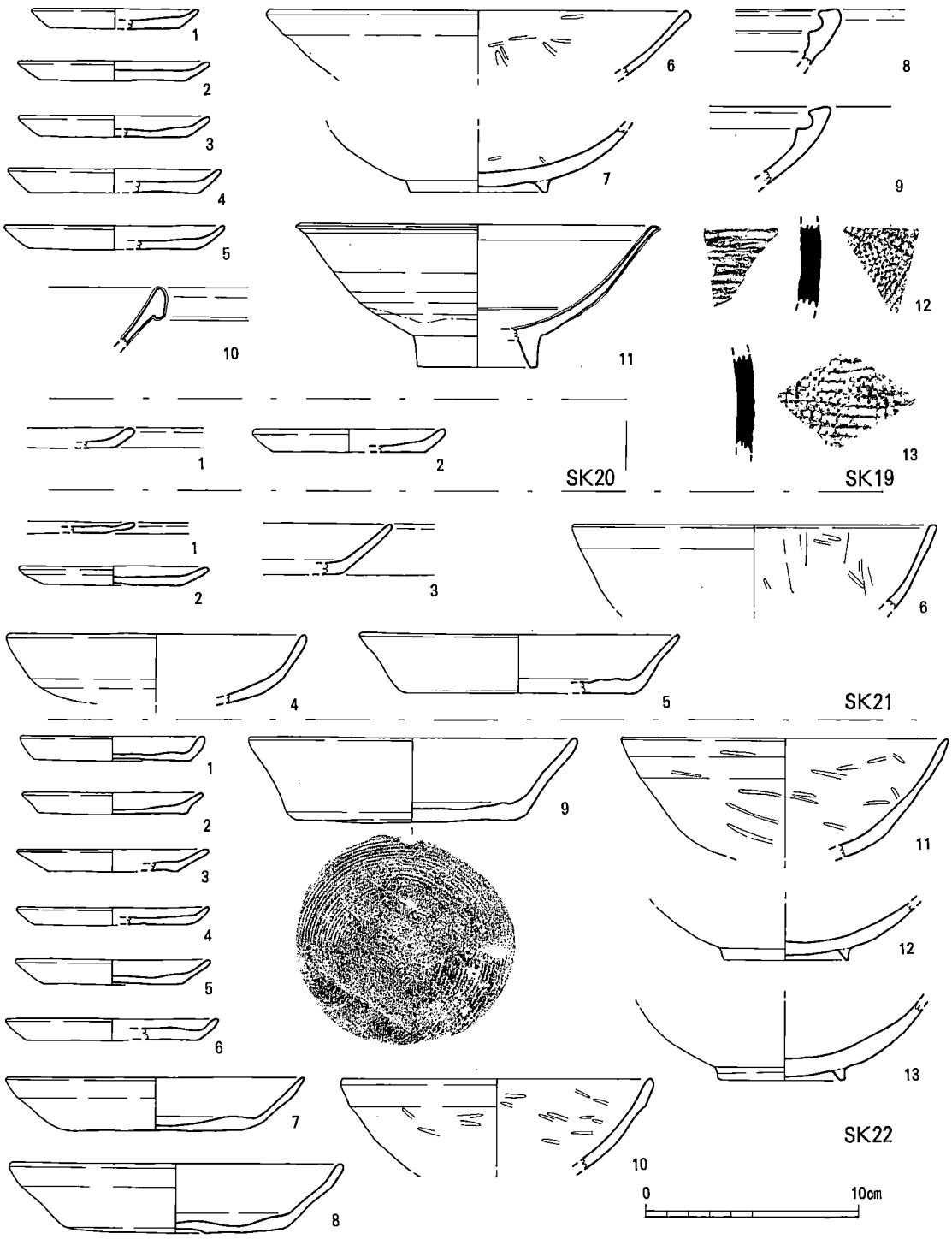
Ｄ5区に位置し、30号土坑の北東にある。規模は長軸155cm、短軸126cm、深さ29cmを測る。平面プランは不整形気味で、壁面は緩やかに立ち上がる。床面は略平坦である。土師器が出土している。

出土遺物（第30図1～5）

土師器（1～5） 1・2は小皿である。2は口径8.7cm、器高0.9cmを測る。3～5は坏である。口径は13.8cmと14.7cm、器高3.3cmと2.8cmを測る。5は糸切り痕が見られる。

22号土坑［ＳＫ22］（図版3・7・22・23、第31図）

Ｄ5区に位置し、23号土坑を切る。規模は長軸306cm、短軸122cm、深さ52cmを測る。平面プランは楕円形気味で、壁面は緩やかに立ち上がる。床面は平坦である。土師器、瓦器が出土し



第30図　才田 19・20・21・22号土坑出土遺物実測図（1/3）

ている。

出土遺物（図版25、第30図1～13）

土師器（1～9） 1～6は小皿である。口径は8.2～9.9cm、器高0.85～1.2cmを測る。外面底部は糸切り痕が見られ、1～5には板状圧痕が残る。7～9は坏である。口径は13.8～15.2cm、器高2.5～3.95cmを測る。いずれも糸切りの後板状圧痕が見られる。

瓦器（10～13） 10･11は椀の口縁部片である。口径は14.6cmと14.9cmを測る。内面はミガキを施し、外面は回転ナデ、ナデの後ミガキを施す。12･13は底部片である。

23号土坑［ＳＫ23］（図版3・7・22・23、第31図）

Ｄ5区に位置し、22号土坑に切られる。規模は長軸237cm、短軸235cm、深さ17cmを測る。平面プランは不整形気味で,壁面は緩やかに立ち上がる。床面は略平坦である。埋土からは土師器、瓦器、陶器、磁器、スラッグ1が出土した。

出土遺物（図版25、第32図1～19）

土師器（1～9） 1～6は小皿である。口径は7.8～8.1cm、器高0.9～1.2cmを測る。底部外面は糸切り痕がみられ、1・2・4・5には板状圧痕が残る。7～9は坏である。口径は15.3～15.6cm、器高2.8～3.15cmを測る。底部外面は糸切り痕がみられ、8には板状圧痕が残る。

瓦器（10～13） 10は小皿である。口径9.7cm、器高2.2cmを測る。胴部外面は回転ナデ、底部は糸切り痕がみられる。内面は工具によるナデが施されている。11～13は椀である。11・12は底部片である。13は口径17.6cmを測る。

陶器（14） 壺の底部片である。

磁器（15～19） 15～18は白磁碗である。15・16は玉縁口縁を有し、Ⅳ類に分類できる。17は底部片でⅣ類に分類できる。18はⅤ類に分類できる。19は白磁皿で、Ⅲ類に分類できる。

24号土坑［ＳＫ24］（図版3・7・8・23、第31図）

Ｄ5区に位置し、23号土坑の西側に隣接する。規模は長軸246cm、短軸204cm、深さ39cmを測る。平面プランは不整形気味で壁面は緩やかに立ち上がる。床面は略平坦である。埋土からは土師器、瓦器、磁器、土錘1が出土した

出土遺物（図版25・43、第32図1～18、140図19）

土師器（1～12・18） 1～8は小皿である。口径は8.4～8.6cm、器高0.75～1.2cmを測る。底部外面は糸切り痕がみられ、1・2・4～6・8には板状圧痕が残る。9～12は坏である。口径は15.8～17.4cm、器高2.7～3.2cmを測る。底部外面は糸切り痕がみられ、10～12には板状圧痕が残る。18は鍋の口縁部片である。

瓦器（13～15） 13・14は椀の口縁部である。13は口径17.6cmを測り、内外面にはミガキが施

されている。15は底部片である。

磁器（16・17） 16は白磁碗で、玉縁口縁を有し、Ⅳ類に分類できる。17は白磁皿である。Ⅲ類に分類できる。

土製品（19） 土錘の小片である。現存長3.1cm。

25号土坑［ＳＫ25］（図版3・7・8・23、第31図）

Ｄ5区に位置し、24号土坑に切られる。規模は長軸171cm、短軸168cm、深さ43cmを測る。平面プランは隅丸方形で、壁面は緩やかに立ち上がる。床面は略平坦である。埋土からは土師器、瓦器、石鍋1が出土した。

出土遺物（図版25、第33図1～7）

土師器（1～6） 1～4は小皿である。口径は8.6～10.8cm、器高1～1.6cmを測る。底部外面は糸切り痕がみられ、3には板状圧痕が残る。6は坏で、口径13.2cm、器高2.6cmを測る。底部外面は糸切り痕がみられる。

瓦器（7） 椀で、口径15.8mを測る。

26号土坑［ＳＫ26］（図版3・7・8・23、第31図）

Ｄ5区に位置し、58号土坑の北側に隣接する。規模は長軸299cm、短軸160cm、深さ31cmを測る。平面プランは不整形気味で、壁面は緩やかに立ち上がる。床面は西から東へ傾斜する。西側床面直上からは土師器の坏が出土している。埋土からは土師器、瓦器、磁器、台石1、スラッグ1が出土した。

出土遺物（図版25・44、第33図1～22、144図23）

土師器（1～10） 1～4は小皿である。口径は8.8～9.6cm、器高1～1.1cmを測る。底部外面は糸切り痕がみられ、2・3には板状圧痕が残る。5～9は坏で、口径14.2～17.4cm、器高2.7～3.5cmを測る。底部外面は糸切り痕がみられ、5・7・9には板状圧痕が残る。10は甕の胴部片である。外面は平行タタキ、内面はヘラ削りを施す。

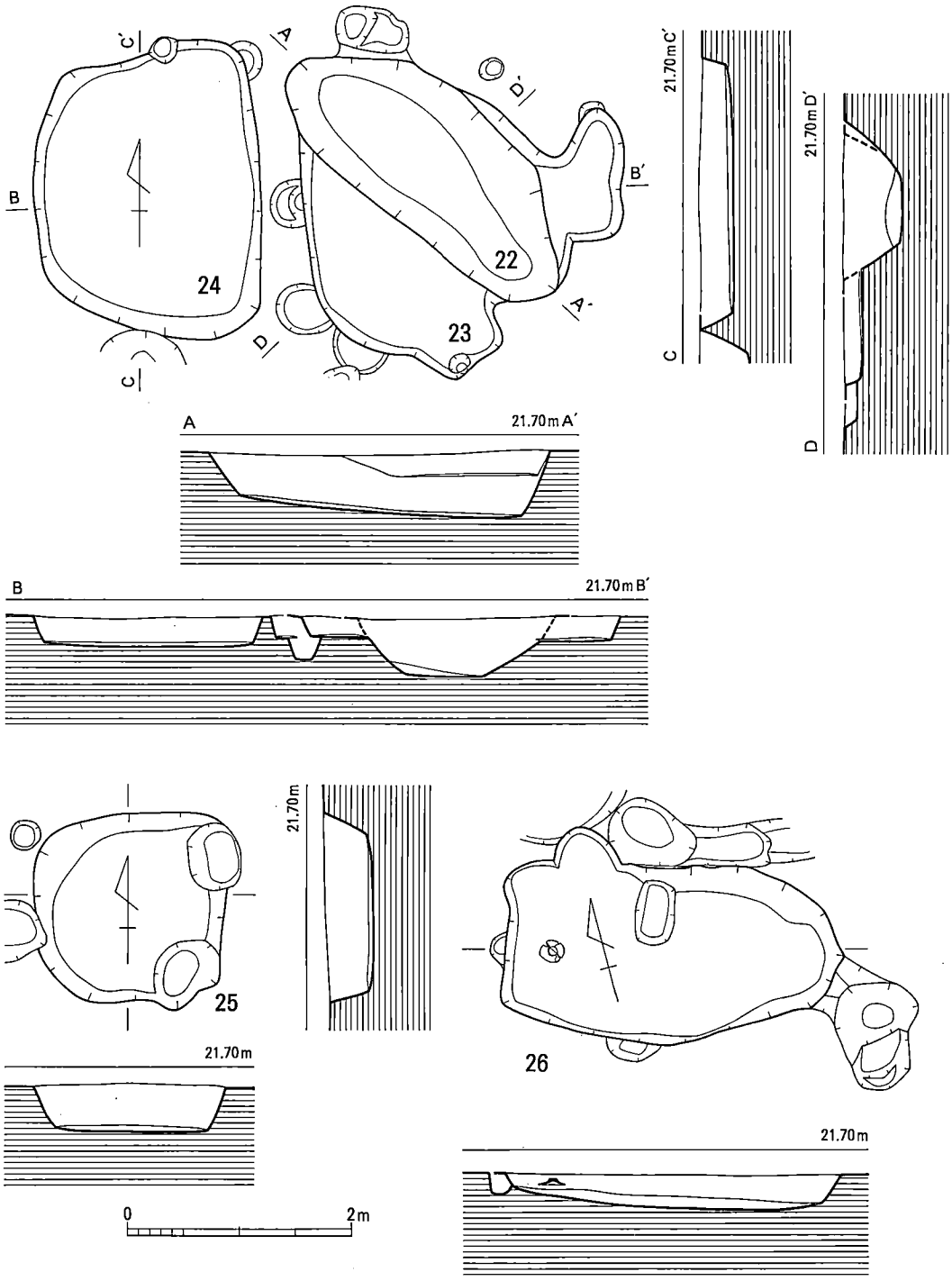
瓦器（11～13） 11は底部片である。13は口径16.4cmを測る。

磁器（14～22） 14～20は白磁碗で、14～16は玉縁口縁を有し、Ⅳ-2類に分類できる。17は碗の口縁部片で、Ｖ－４・b類に分類できる。18・19はＶ－４類に分類できる。20は白磁皿である。21は龍泉窯系青磁の小碗である。Ⅲ－１・b類に分類できる。

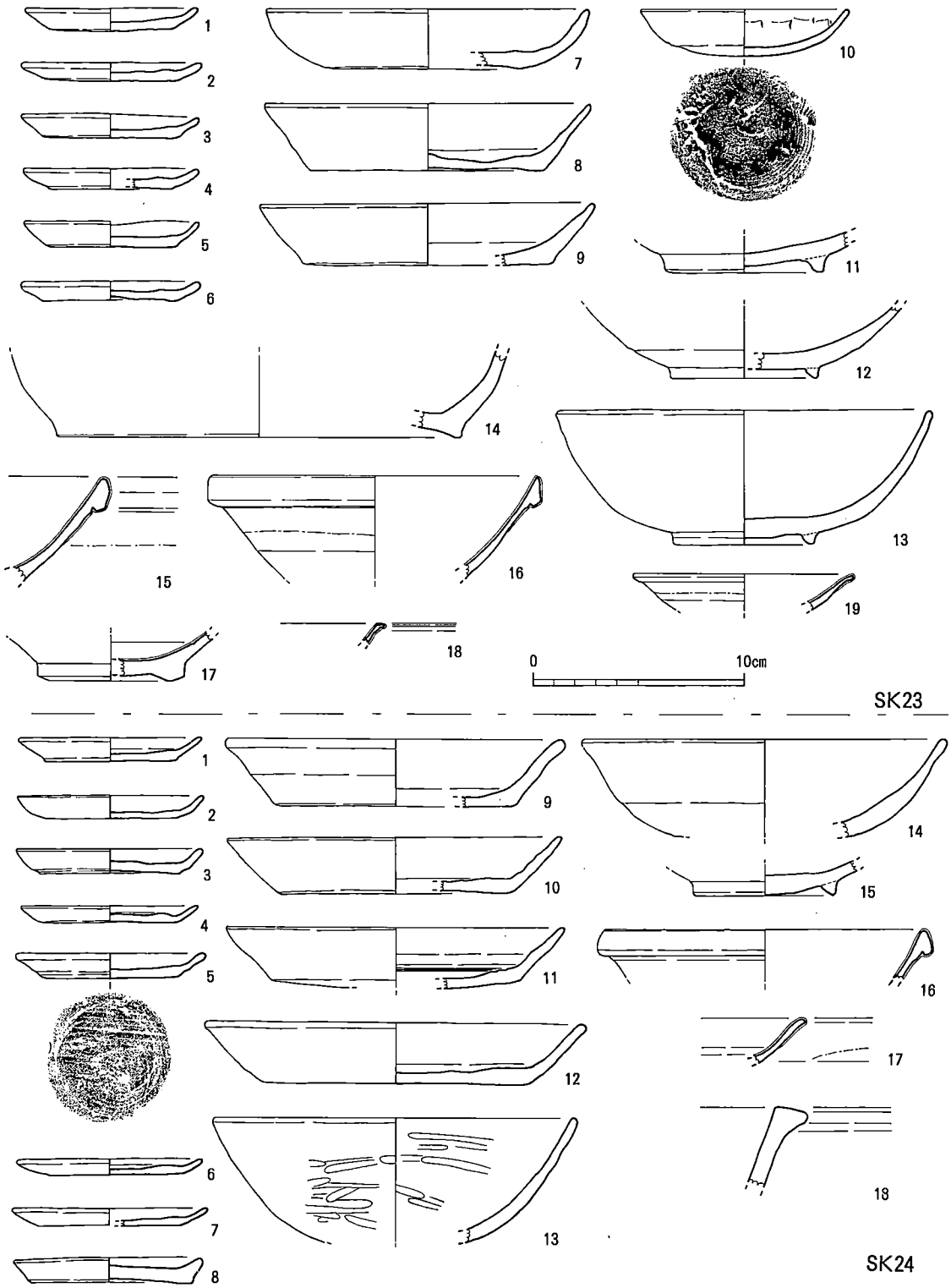
石器（23） 安山岩の台石であろう。上面はよく擦れている。

27号土坑［ＳＫ27］（図版3・7・8・22・23、第34図）

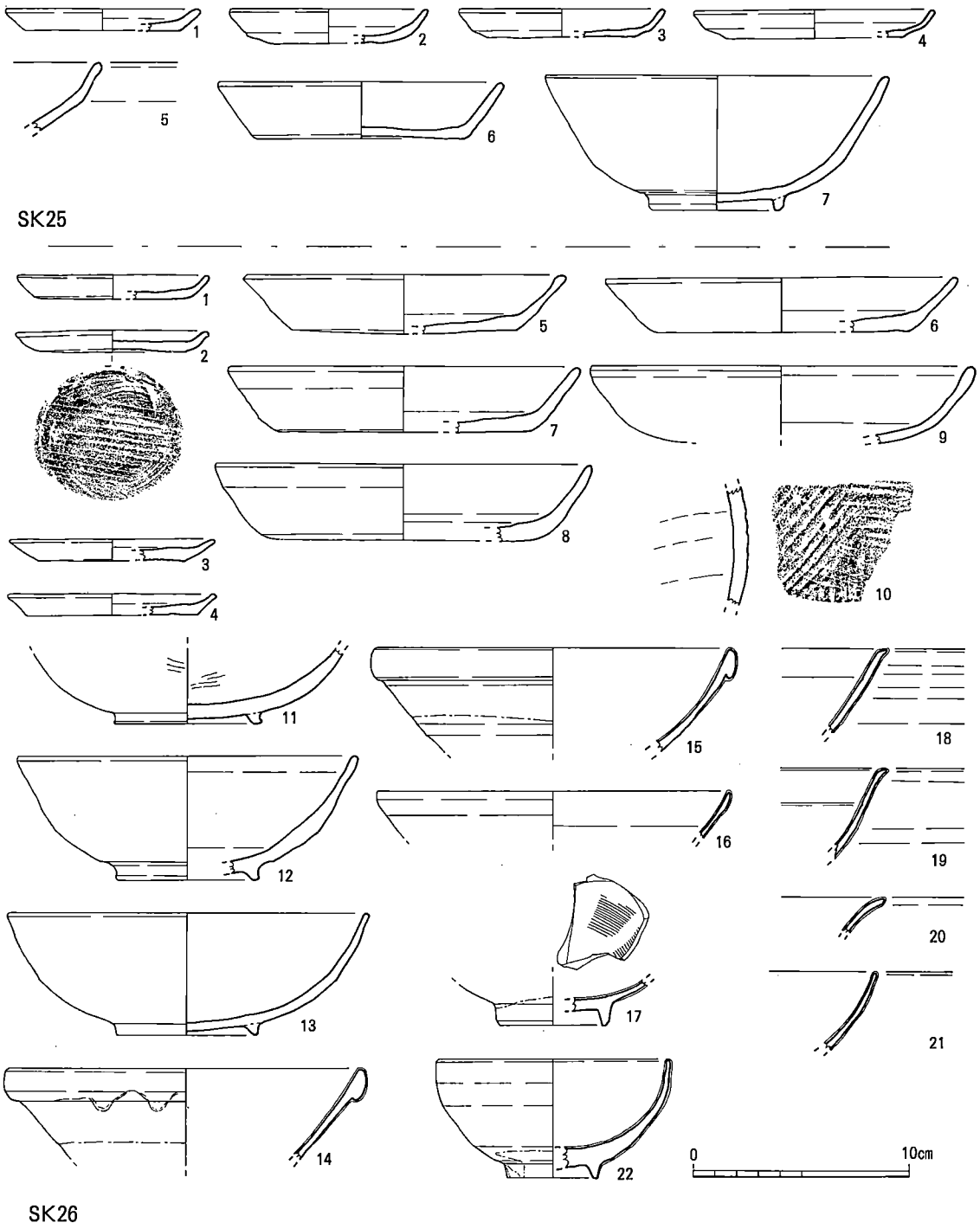
Ｄ5区に位置し、28号土坑の北側に隣接する。規模は長軸166cm、短軸93cm、深さ53cmを測る。



第31図　才田 22～26号土坑実測図（1/60）



第32図　才田 23・24号土坑出土遺物実測図（1/3）



第33図　才田 25・26号土坑出土遺物実測図（1/3）

平面プランは不整形気味で、壁面は緩やかに立ち上がる。床面は二段掘りを呈する。埋土からは土師器、須恵器、瓦器、スラッグ1が出土した。なお、この上面から第138図A84の支脚が採集されている。

出土遺物（第35図1～7）

土師器（1～5） 1～3は小皿である。口径は8.8～10.5cm、器高0.9～1.1cmを測る。底部外面は糸切り痕がみられ、1・3には板状圧痕が残る。5～9は坏である。口径は17.6～17.8cmを測る。底部外面は糸切り痕がみられ、4・5には板状圧痕が残る。

須恵器（7） 甕の胴部片である。外面は平行タタキ、内面は青海波タタキを施す。

瓦器（6） 口縁部片である。外面は回転ナデ、内面はミガキを施す。

28号土坑［ＳＫ28］（図版3・7・8・22・23、第34図）

Ｄ5区に位置し、27号土坑の南側に隣接する。規模は長軸124cm、短軸80cm、深さ32cmを測る。平面プランは不整形気味で、壁面は直に立ち上がる。床面中央部にはピットが存在する。埋土からは土師器、瓦器、磁器、青銅製小柄1が出土した。

出土遺物（図版46、第35図1～7、145図8）

土師器（1～4） 1～3は小皿である。口径は8～9.5cm、器高0.8～1.5cmを測る。底部外面は糸切り痕がみられ、2には板状圧痕が残る。4は坏である。口径は15.8cmを測る。

瓦器（5）口縁部片である。外面は回転ナデ、内面はミガキを施す。

磁器（6・7） 6は白磁碗である。Ⅷ－２類に分類できる。７は白磁皿である。Ⅵ－１・a類か。

金属器（8） 柄が青銅の、本体が鉄の小柄である。現存長111mmで、柄は長さ86mm、幅13mm、厚さ5mm。

29号土坑［ＳＫ29］（図版3・7・22・23、第34図）

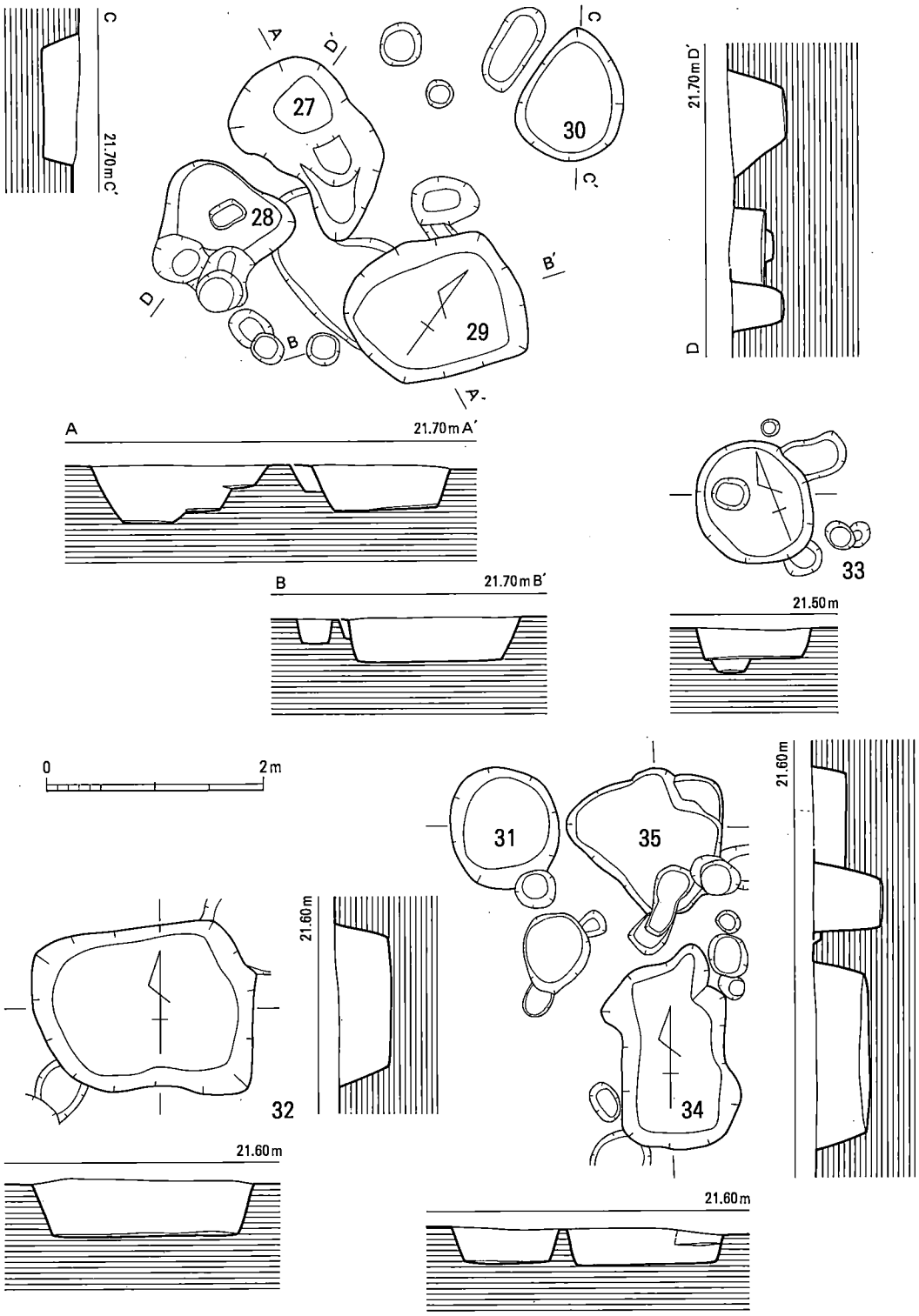
Ｄ5区に位置し、27号土坑の東側に位置する。規模は長軸162cm、短軸128cm、深さ41cmを測る。平面プランは不整形気味で、床面は平坦である。壁面は緩やかに立ち上がる。埋土からは土師器、瓦器、磁器、ふいご羽口1、土錘1、石鍋1が出土した。

出土遺物（図版42・43、第35図1～14、139図15、140図16）

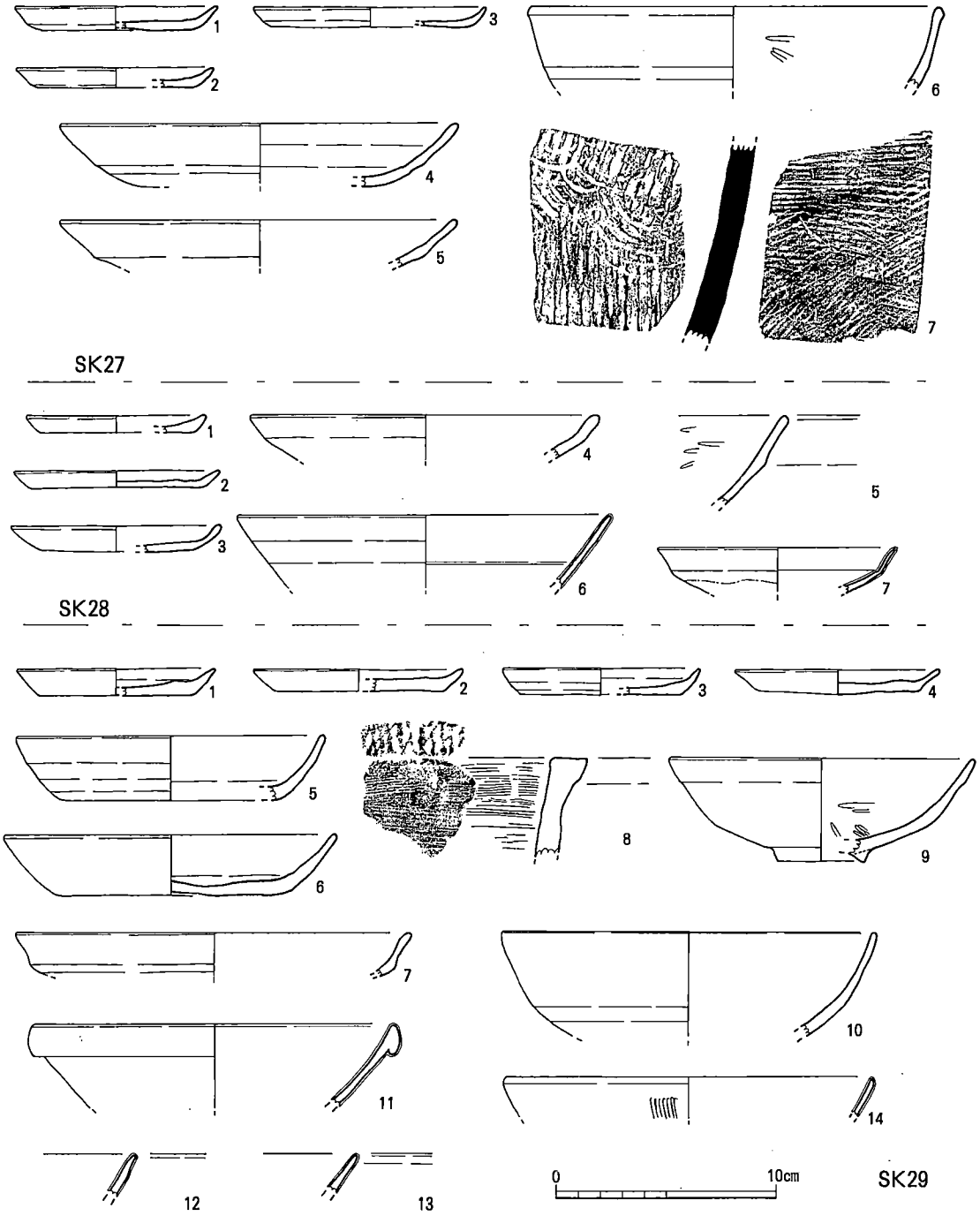
土師器（1～8） 1～4は小皿である。口径は8.8～9.4cm、器高1～1.2cmを測る。底部外面は糸切り痕がみられ、4には板状圧痕が残る。5～7は坏である。口径は13.6～17.6cmを測る。6は外面底部に糸切り痕がみられる。8は鍋の口縁部片である。口縁部の上面には、草本類の茎による押圧痕が残る。

瓦器（9・10） 椀である。9は外面体部が回転ナデ後内面はミガキを施す。10は口縁部片である。

磁器（11～14） 11は白磁碗椀である。玉縁口縁を有し、Ⅳ－2類に分類できる。12は龍泉窯系



第34図　才田 27～35号土坑実測図（1/60）



第35図　才田 27・28・29号土坑出土遺物実測図（1/3）

青磁碗の口縁部片である。Ⅰ－1類に分類できる。13・14は同安窯系青磁碗である。Ⅰ－1・b類に分類できる。

ふいご羽口（15） 先端部近くは溶融部分が剝離しているらしい。最大径は99㎜。

土製品（16） 管状土錘の完形品である。全長44.5㎜、径11㎜、重さ3.95g。

30号土坑［ＳＫ30］（図版3・7・22・23、第34図）

Ｄ5区に位置し、29号土坑の北側に隣接する。規模は長軸119㎝、短軸104㎝、深さ41㎝を測る。平面プランは不整形気味で、床面は平坦である。壁面は緩やかに立ち上がる。土師器、瓦器が出土した。

出土遺物（第36図1～5）

土師器（1～4） 1・2は小皿である。口径は7.8～8.8㎝、器高0.95～1㎝を測る。底部外面は糸切り痕がみられ、板状圧痕が残る。3・4は坏で、口径13.2㎝を測る。外面底部は糸切り痕がみられる。

瓦器（5） 椀で、外面胴部が回転ナデ、内面はミガキを施す。

31号土坑［ＳＫ31］（図版3・7・22・23、第34図）

Ｄ5区に位置し、35号土坑の西側に隣接する。規模は長軸112㎝、短軸100㎝、深さ30㎝を測る。平面プランは略円形で、壁面は緩やかに立ち上がる。土師器、瓦器が出土した。

出土遺物（図版26、第36図1～7）

土師器（1～6） 1～3は小皿である。口径は9～9.4㎝、器高0.8～1.2㎝を測る。底部外面は糸切り痕がみられ、3は板状圧痕が残る。4～6は坏である。口径は15～16.2㎝、器高3～3.2㎝を測る。いずれも外面底部は糸切り痕がみられ、板状圧痕が残る。

瓦器（7） 椀で、外面胴部が回転ナデを施す。

32号土坑［ＳＫ32］（図版3・7・22・23、第34図）

Ｄ5区に位置し、31号土坑の西側に隣接する。規模は長軸204㎝、短軸148㎝、深さ49㎝を測る。平面プランは隅円方形で、壁面は緩やかに立ち上がる。床面は略平坦である。埋土からは須恵器、須恵質土器、磁器、石鍋1、土錘1、鉄器1が出土した

出土遺物（図版43・46、第36図1～7、140図8、146図9）

須恵器（7） 坏蓋の口縁部の破片である。端部は鳥嘴状を呈する。

須恵質土器（1） 東播系の片口のこね鉢である。

磁器（3～6） 2は白磁碗である。Ⅷ類に分類できる。3は白磁皿で、Ⅵ-1類に分類できる。4・5は龍泉窯系青磁碗である。Ⅰ-5・b類に分類できる。6は龍泉窯系青磁皿で、Ⅰ-1・a類に分

類できる。

土製品（8） 管状土錘の完形品である。全長52mm、径9mm、重さ3.9g。

鉄器（9） 釘かと思われる。現存長42mm。

33号土坑［ＳＫ33］（図版3・7・22、第34図）

Ｄ4区に位置し、34号土坑の南側に隣接する。規模は長軸118cm、短軸107cm、深さ24cmを測る。平面プランは円形で、壁面は直に立ち上がる。土師器、瓦器が出土した。

出土遺物（第36図1～3）

土師器（1・3） 1は坏である。3は皿である。竪穴住居に伴うものであろう。

瓦器（2） 椀の口縁部片である。

34号土坑［ＳＫ34］（図版3・7・22・23、第34図）

Ｄ4区に位置し、35号土坑の南側に隣接する。規模は長軸129cm、短軸93cm、深さ49cmを測る。平面プランは不整形気味で,壁面は直に立ち上がる。土師器が出土した。

出土遺物（第36図1～5）

土師器（1～5） 1・2は小皿である。口径は8.8cmと10.4cm、器高1.2cmと1.35cmを測る。底部外面は糸切り痕がみられ、板状圧痕が残る。3・4は坏である。口径は16cmと18cmを測る。5は口径14.2cm、器高1.4cmを測る椀である。竪穴住居に伴うものであろう。

35号土坑［ＳＫ35］（図版3・7・22・23、第34図）

Ｄ5区に位置し、31号土坑の東側に隣接する。規模は長軸144cm、短軸132cm、深さ30cmを測る。平面プランは不整形気味で,壁面は緩やかに立ち上がる。土師器、瓦器、磁器、土錘1が出土した。

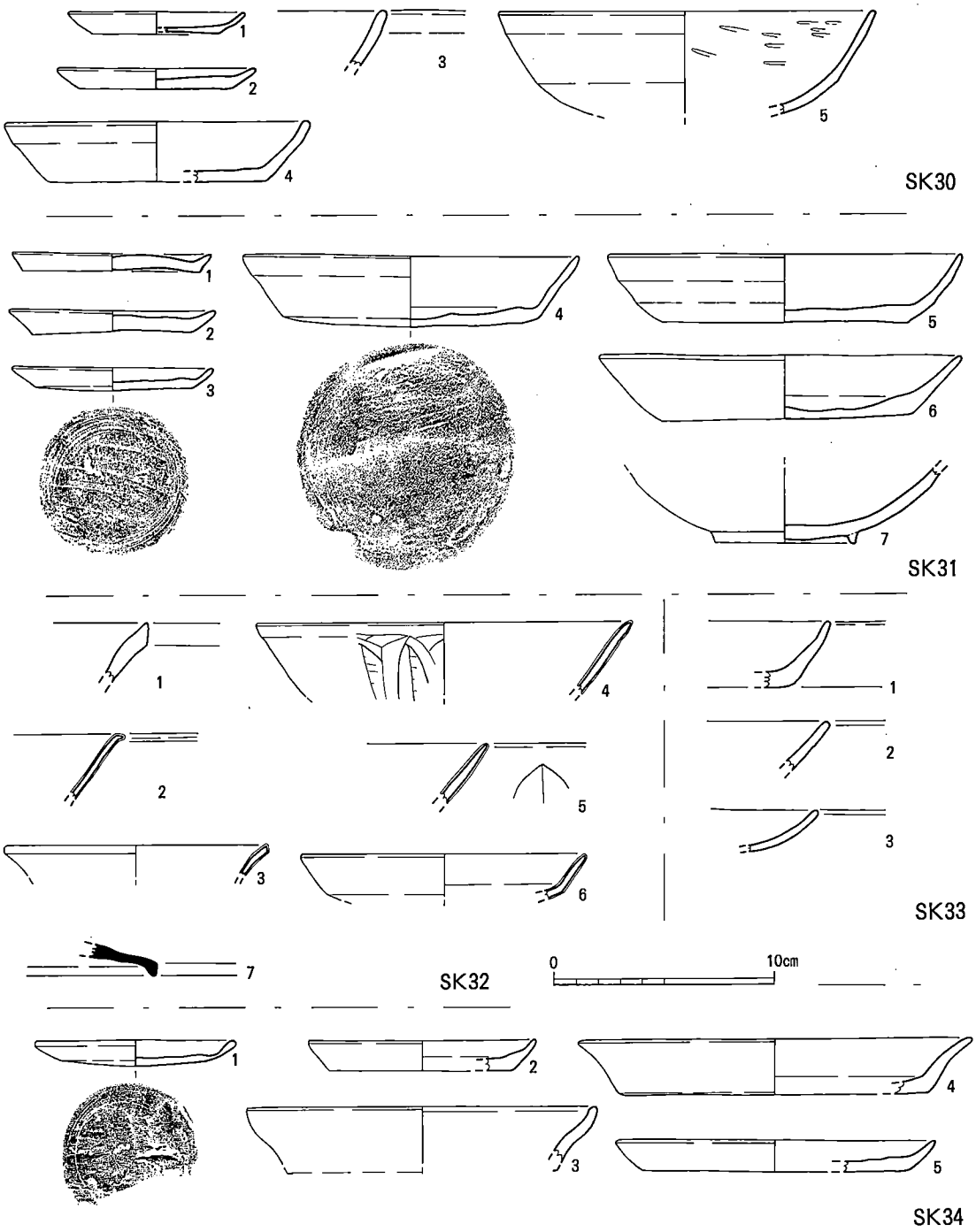
出土遺物（図版43、第38図1～8、140図9）

土師器（1～4） 1・2は小皿である。口径は7.8cmと8.8cm、器高は0.9cmを測る。底部外面は糸切り痕がみられ、2は板状圧痕が残る。3は坏で、口径15cm、器高2.9cmを測る。4は鍋の口縁部である。

瓦器（5） 椀である。口径は17.7cmを測り、底部は欠損する。

磁器（6～8） 白磁の碗である。6は内面に櫛目文を施し、Ｖ-4・a類に分類できる。7はⅧ類に分類できる。8は底部片で、内面見込み部分は釉を掻き取られている。Ⅷ-2類に分類できる。

土製品（9） 管状土錘の完形品である。両端に比べて中央部がかなり膨らむ。全長53mm、径11mm、重さ4.6g。



第36図　才田 30・31・32・33・34号土坑出土遺物実測図（1/3）

36号土坑［ＳＫ36］（図版3～7・22・23、第37図）

Ｅ5区に位置し、37号土坑の東側に隣接する。規模は長軸203cm、短軸118cm、深さ51cmを測る。平面プランは楕円形で、壁面は緩やかに立ち上がる。床面は平坦である。土師器、須恵器、瓦器、磁器、鉄器1、軽石1が出土した。

出土遺物（図版26・46、第38図1～9、146図10）

土師器（1～6） 1～3は小皿である。口径は9～9.4cm、器高0.7～1cmを測る。いずれも底部外面は糸切り痕がみられ、板状圧痕が残る。4～は坏である。口径は15.4～16.2cm、器高2.7～3.15cmを測る。いずれも外面底部は糸切り痕がみられ、板状圧痕が残る。

須恵器（9） 甕の胴部片である。外面は擬格子タタキ、内面は青海波タタキを呈する。

瓦器（7） 椀で、口径15.8cmを測る。外面胴部が回転ナデを施す。

磁器（8） 白磁碗の口縁部片である。

鉄器（10） 釘であろうか。現存長48mm。

37号土坑［ＳＫ37］（図版3～7・22・23、第37図）

Ｅ5区に位置し、36号土坑の西側に隣接する。規模は長軸171cm、短軸124cm、深さ33cmを測る。平面プランは不整形気味で、壁面は緩やかに立ち上がる。床面は舟底状を呈する。土師器、瓦器が出土した。

出土遺物（第38図1～4）

土師器（1～3） 1・2は小皿である。口径は8.2cmと8.7cm、器高0.6～1.1cmを測る。底部外面は糸切り痕がみられ、1は板状圧痕が残る。3は坏である。底部外面は糸切り痕が見られる。口径は13.9cmを測る。

瓦器（4） 椀の底部片である。

38号土坑［ＳＫ38］（図版3・4・7・22・23、第37図）

Ｅ5区に位置し、36号土坑の北側に位置する。規模は長軸123cm、短軸115cm、深さ38cmを測る。平面プランは不整形気味で壁面は緩やかに立ち上がる。土師器、磁器が出土した。

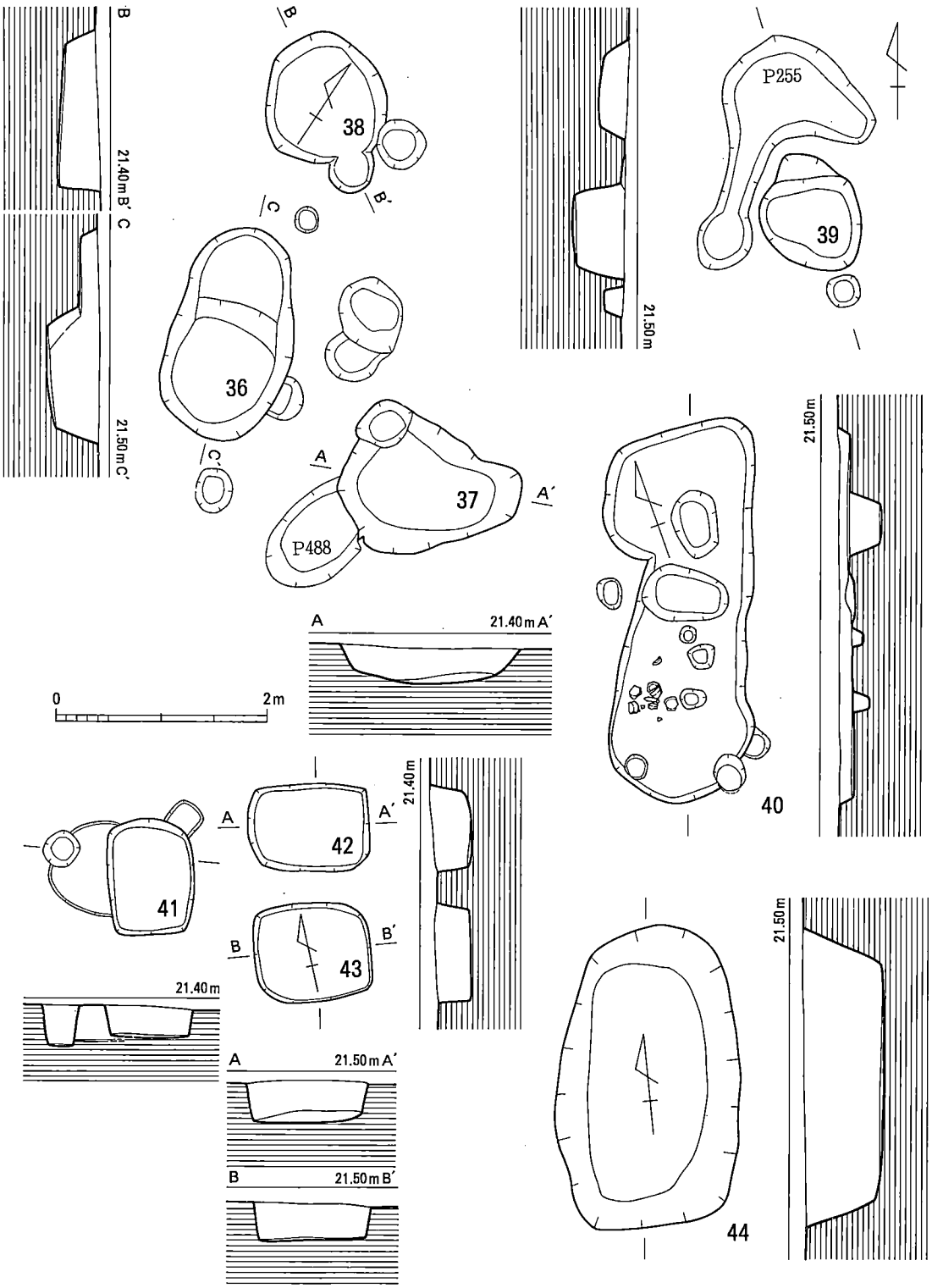
出土遺物（第38図1～5）

土師器（1～3・5） 1は小皿である。口径は9.2cm、器高1.1cmを測る。底部外面は糸切り痕がみられ、板状圧痕が残る。2・3は坏である。5は甕の口縁部片である。

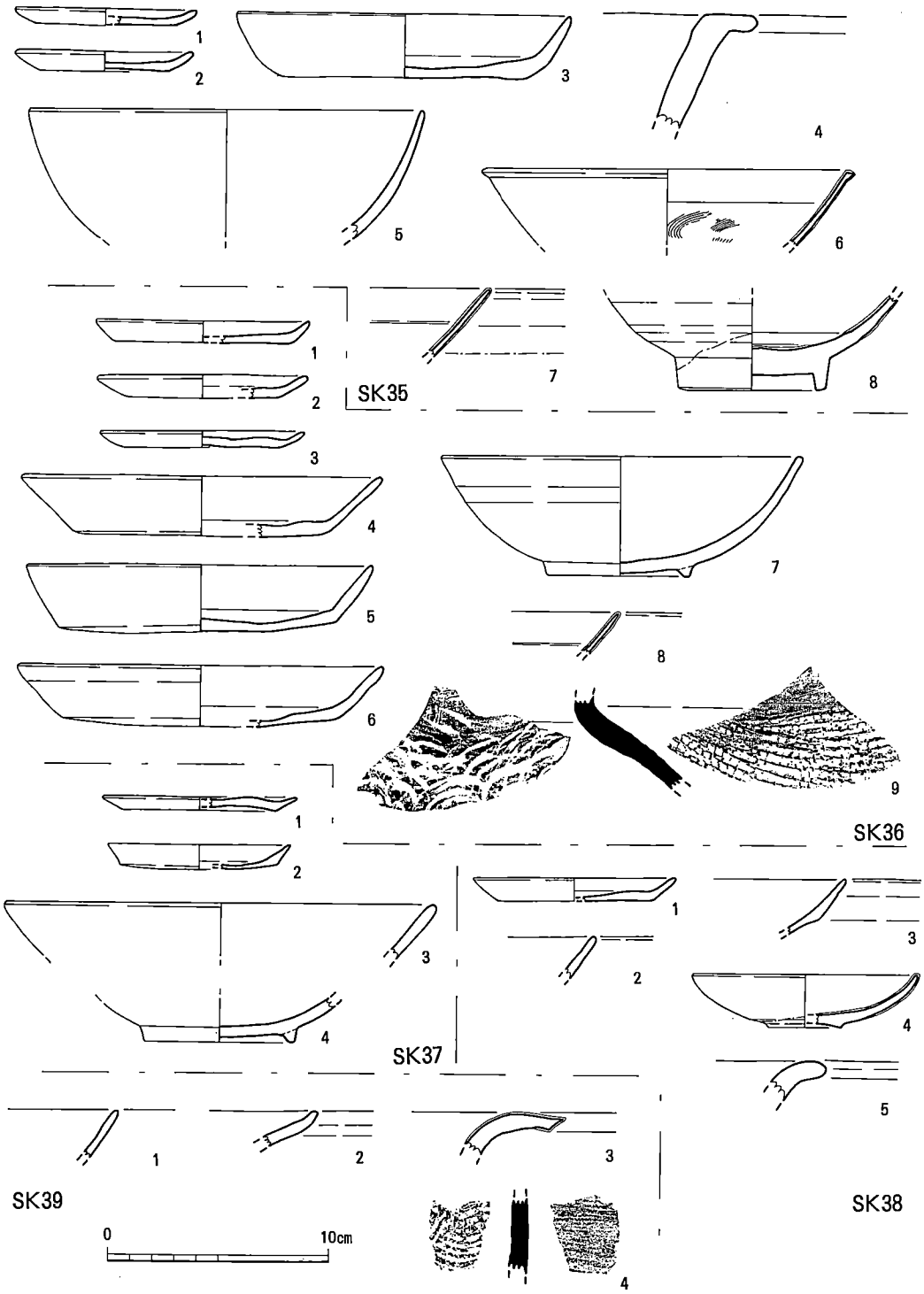
磁器（4） 白磁の皿である。Ⅵ類に分類できる。

39号土坑［ＳＫ39］（図版3・4～7・22・23、第37図）

Ｅ5区に位置し、38号土坑の北東にある。規模は長軸91cm、短軸80cm、深さ47cmを測る。平



第37図　才田 36～44号土坑実測図（1/60）



第38図　才田 35・36・37・38・39号土坑出土遺物実測図（1/3）

面プランは不整形で、壁面は緩やかに立ち上がる。床面は舟底状を呈する。土師器、須恵器、瓦器、陶器が出土した。

出土遺物（第38図1～4）

土師器（1） 坏の口縁部片である。

須恵器（4） 甕の胴部片である。外面は平行タタキ、内面は青海波タタキを呈する。

瓦器（2） 椀の口縁部片である。

陶器（3） 国産陶器の口縁部と思われる。

40号土坑［ＳＫ40］（図版3～5・7、第37図）

Ｅ5区に位置し、41号土坑の西側にある。規模は長軸351cm、短軸106cm、深さ13cmを測る。平面プランは不整形で、壁面は緩やかに立ち上がる。床面は平坦である。土師器、陶器、磁器、スラッグ3が出土した。

出土遺物（図版26、第39図1～10）

土師器（1～6・10） 1・2は小皿である。口径は8.3cmと9cm、器高1.1cmと1.3cmを測る。底部外面は糸切り痕がみられ、板状圧痕が残る。3～6は坏である。口径は14.7～15.5cm、器高3～3.4cmを測る。いずれも外面底部は糸切り痕がみられ、板状圧痕が残る。10は甑の底部片である。

陶器（7） 水注の口縁部片である。胎土は細砂を多く含み、赤褐色粒を少し含む。色調は黄緑味灰色を呈する。

磁器（8・9） 8は白磁碗で、Ｖ類に分類できる。9は龍泉窯系青磁皿である。

41号土坑［ＳＫ41］（図版3～5・7、第37図）

Ｆ5区に位置し、42号土坑の西側にある。規模は長軸109cm、短軸82cm、深さ31cmを測る。平面プランは隅円長方形を呈し、壁面は直に立ち上がる。土師器が出土した。

出土遺物（第39図1～5）

土師器（1～5） 1～4は小皿である。口径は8.2cm～10.8cm、器高0.75～1.15cmを測る。いずれも底部外面は糸切り痕がみられ、板状圧痕が残る。5は竪穴住居に伴う坏である。口径は15.5cm。

42号土坑［ＳＫ42］（図版3～5・7、第37図）

Ｆ5区に位置し、43号土坑の北側に位置する。規模は長軸116cm、短軸82cm、深さ36cmを測る。平面プランは隅円長方形を呈し、壁面は直に立ち上がる。土師器、瓦器が出土した。

出土遺物（図版26、第39図1～5）

土師器（1・2・5） 1は小皿である。口径は9.8cm、器高0.9cmを測る。底部外面は糸切り痕がみられる。2は坏である。5は甕の口縁部片である。

瓦器（3・4） 3は口縁部片である。4は底部片である。内面にはミガキを施す。

43号土坑［ＳＫ43］（図版3～5・7、第37図）

Ｅ4区に位置し、42号土坑に切られる。規模は長軸109cm、短軸93cm、深さ33cmを測る。平面プランは隅円長方形を呈し、壁面は直に立ち上がる。41～43号土坑と同一規模を有する。土師器、瓦器、磁器が出土した。

出土遺物（第39図1～4）

土師器（1） 1は小皿である。口径は8.8cm、器高0.9cmを測る。底部外面は糸切り痕がみられる。

瓦器（2・3） 2は口縁部片である。3は底部片で、内面にはミガキを施す。

磁器（4） 白磁皿の底部片で、内面の見込みは釉を掻きとっている。Ⅲ-1類。

44号土坑［ＳＫ44］（図版3～5・7・22、第37図）

Ｆ5区に位置し、45号土坑の北東側にある。規模は長軸231cm、短軸168cm、深さ75cmを測る。平面プランは隅円長方形で、壁面は緩やかに立ち上がる。床面はわずかに舟底状を呈する。土師器、瓦器、陶器、土錘1が出土した。

出土遺物（図版26・43、第39図1～4、140図15）

土師器（1～6） 1～6は小皿である。口径は8.5～10.1cm、器高0.85～1.4cmを測る。底部外面は糸切り痕がみられ、板状圧痕が残る。

瓦器（7） 椀である。外面は回転ナデ後ナデを施す。

陶器（8） 底部片で、胎土は細砂を多く含み、色調は内面が暗赤茶灰色、外面が茶灰色を呈する。

磁器（9～14） 9～13は白磁である。9はⅣ類である。10はⅤ類である。11・12は皿である。13は口縁部片で、Ⅴ類か。14は龍泉窯系青磁碗である。

土製品（15） 管状土錘で、歪んでいる。全長43mm、径11mm、重さ3.6g。

45号土坑［ＳＫ45］（図版3～5・7・22、第40図）

Ｆ5区にあり、44号土坑の南西側に位置する。規模は長軸153cm、短軸68cm、深さ44cmを測る。平面プランは不整形気味で、床面は2段掘りを呈する。壁面は直に立ち上がる。土師器、磁器、土錘1が出土した。

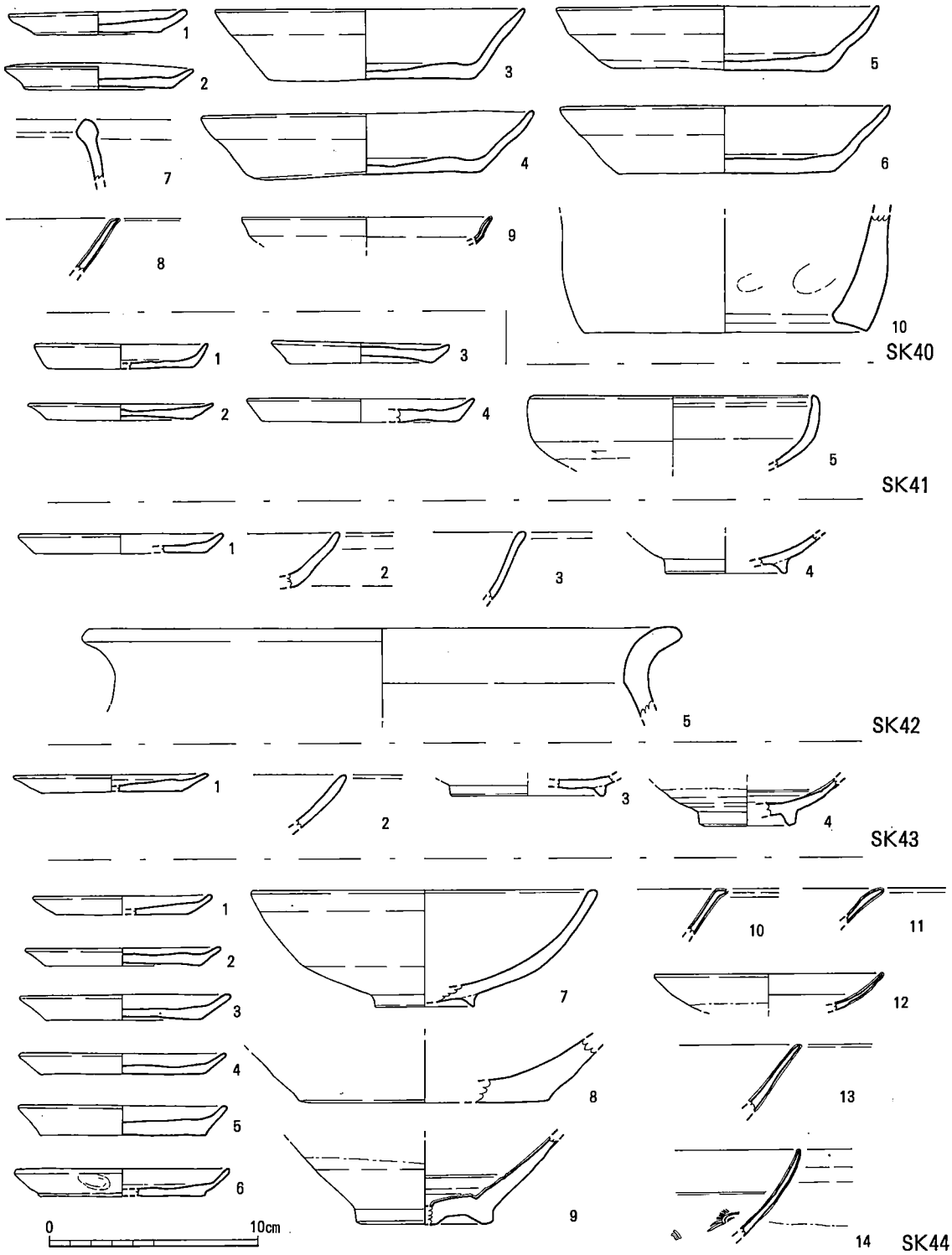
出土遺物（図版43、第41図1～5、140図6）

土師器（1・2） 1は小皿である。底部外面は糸切り痕がみられる。2は椀である。

瓦器（3・4） 3は椀の底部片である。4は椀の口縁部片である。

磁器（5） 同安窯系青磁碗の口縁部片である。

土製品（6） 管状土錘で、全長50.5mm、径10mm、重さ4.6g。



第39図　才田 40・41・42・43・44号土坑出土遺物実測図（1/3）

46号土坑［ＳＫ46］（図版3・7・15、第40図）

Ａ3区にあり、47号土坑の西側に位置する。規模は長軸167cm、短軸91cm、深さ33cmを測る。平面プランは隅円長方形で、壁面は直に立ち上がる。埋土の堆積状況は2・3層が落ち込んだ状況である。1～3層は炭化物を含む。形状からは土壙墓の可能性がある。土師器、瓦器、須恵質土器が出土した。

出土遺物（第41図1～8）

土師器（1～6） 1～4は小皿である。口径は8.4～9.6cm、器高0.6～1.4cmを測る。底部外面は糸切り痕がみられ、2・は板状圧痕が残る。5・6は坏で、口径15.9cm、器高2.3cmを測る。外面底部は糸切り痕がみられ、6は板状圧痕が残る。

瓦器（7） 椀である。外面は回転ナデ後ナデを施す。

須恵質土器（8） 東播系の片口のこね鉢である。

47号土坑［ＳＫ47］（図版3・7・8・15、第40図）

Ａ3区に位置し、46号土坑の東側に位置する。規模は長軸213cm、短軸97cm、深さ32cmを測る。平面プランは隅円長方形で、壁面は直に立ち上がる。埋土の堆積状況は2～4層が落ち込んだ状況である。4層を除いて炭化物を含む。土師器、瓦器、磁器が出土した。

出土遺物（第41図1～6）

土師器（1～3） 1～3は小皿である。口径は8.3～9.1cm、器高0.9～1.2cmを測る。底部外面は糸切り痕がみられる。

瓦器（4） 椀である。外面は回転ナデ後ナデ、内面はミガキを施す。

磁器（5・6） 5は同安窯系青磁碗である。6は青白磁の合子で坩形を呈する。

48号土坑［ＳＫ48］（図版3・7・8・15、第40図）

Ａ3区に位置し、50号土坑の南側に隣接する。規模は長軸126cm、短軸106cm、深さ23cmを測る。平面プランは円形で、壁面は緩やかに立ち上がる。土師器、磁器が出土した。

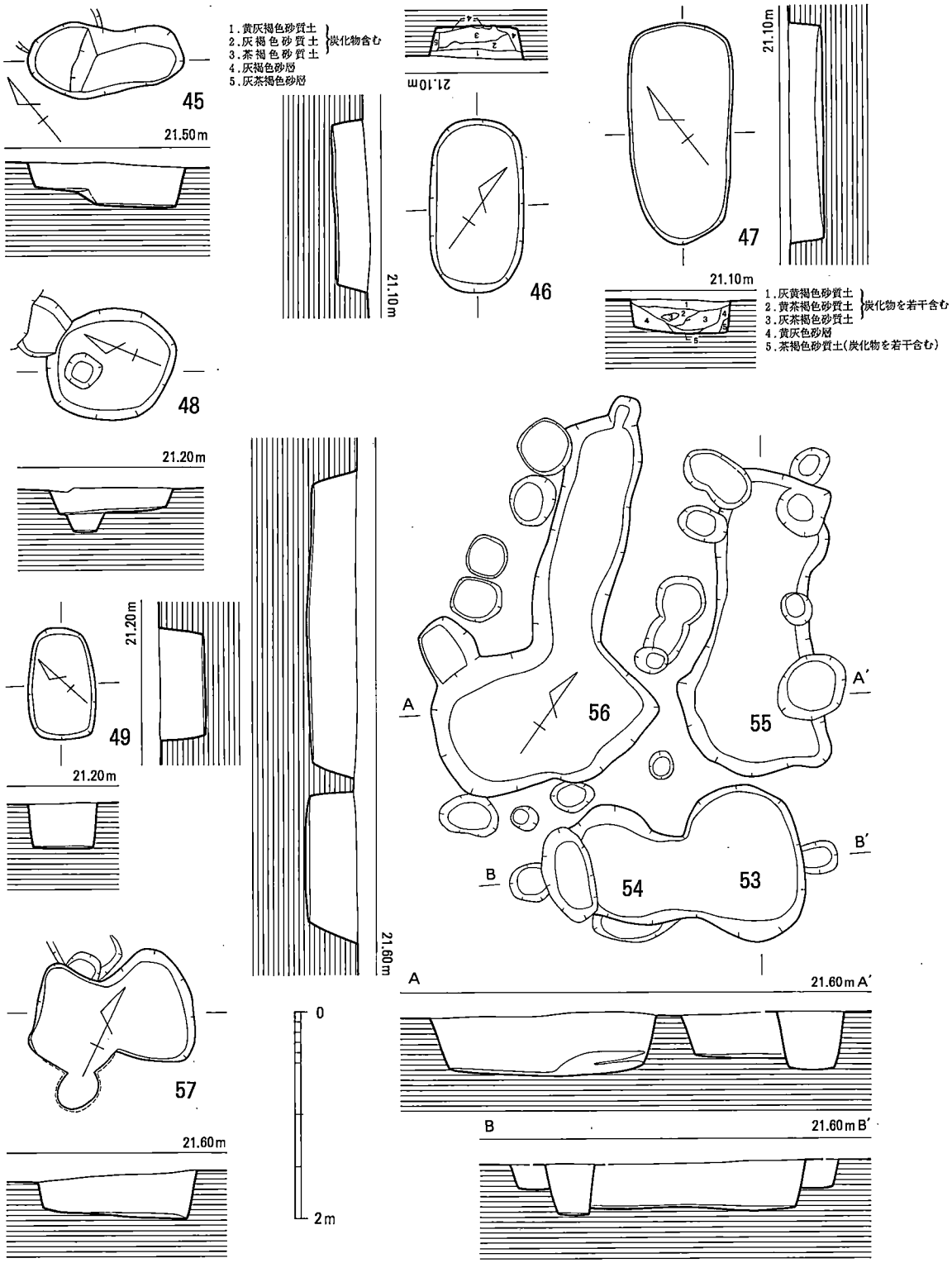
出土遺物（図版26、第41図1・2）

土師器（1） 1は坏である。口径は15.2cm、器高3.5cmを測る。底部外面は糸切り痕がみられる。

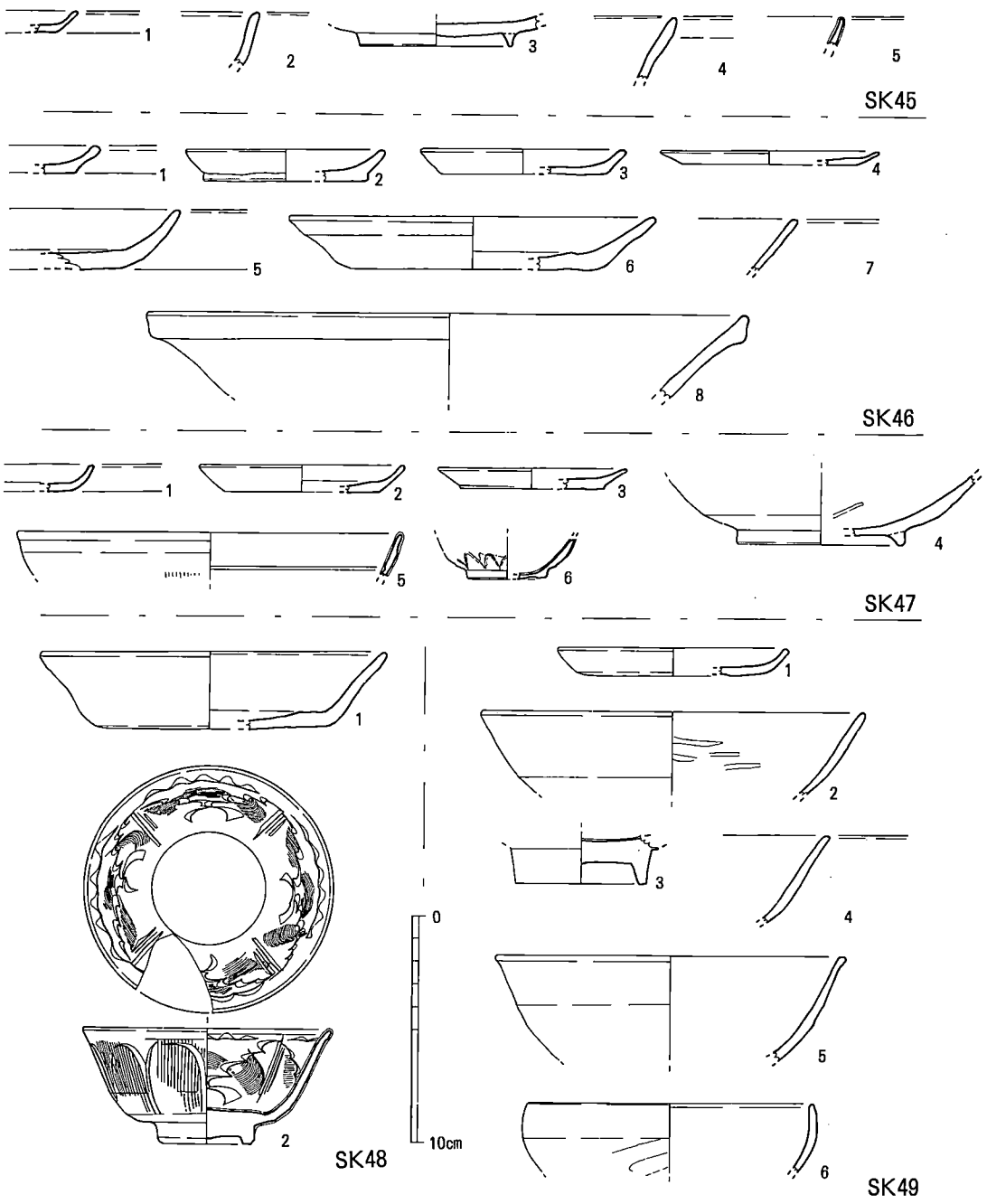
磁器（2） 龍泉窯系青磁碗である。Ｉ-6・a類に分類できる。

49号土坑［ＳＫ49］（図版3・7・8・15、第40図）

Ａ3区に位置し、50号土坑の東側に位置する。規模は長軸107cm、短軸67cm、深さ44cmを測る。平面プランは隅円長方形で、壁面は直に立ち上がる。土師器、瓦器、軽石2、鉄器1、スラッグ1が出土した。



第40図　才田 45～49・53～57号土坑実測図（1/60）



第41図　才田 45・46・47・48・49号土坑出土遺物実測図（1/3）

出土遺物（図版46、第41図1～6、146図7）

土師器（1・4～6） 1は小皿である。口径は10.2cm、器高1.25cmを測る。底部外面は糸切り痕がみられる。4・5は椀の口縁部である。5は口径15cmを測る。6は椀で、外面底部はヘラケズリを施す。竪穴住居に伴うものである。

瓦器（2） 椀である。外面は回転ナデ後ナデ、内面はミガキを施す。

鉄器（7） 釘であろう。湾曲している。全長81mm。

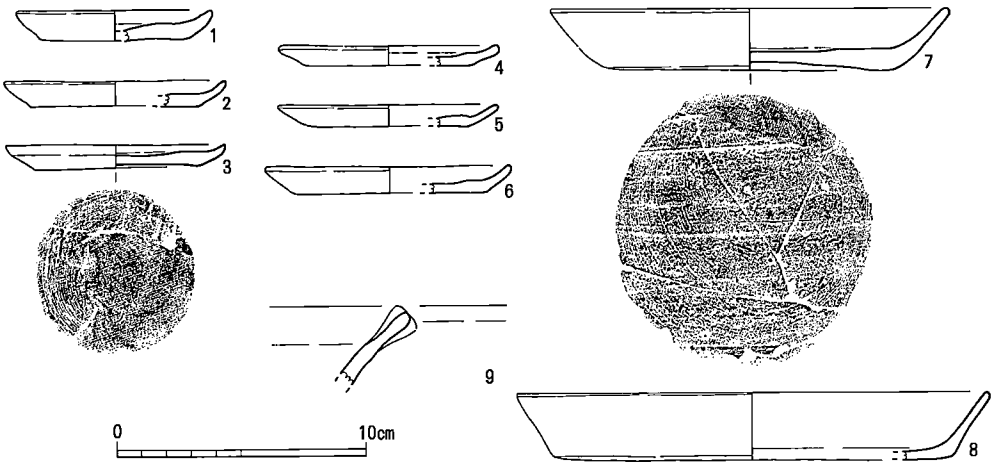
50号土坑［ＳＫ50］（図版3・7・8・10・11・15、第43図）

Ａ3区に位置し、49号土坑に切られる。規模は長軸396cm、短軸165cm、深さ75cmを測る。平面プランは隅円長方形を呈し、壁面は直に立ち上がる。北側の短辺にはテラスを有する。床面はわずかに凹凸があるが、略平坦である。床面からは陶器、磁器、鉄器が出土した。出土状況は中央部から陶器四耳壺(13)、その北側には青白磁の碗が逆さまに4個体(26～29)が重ねられ、さらにその下には、青磁の皿(30～37)が逆さまに８枚が重ねられていた。南東壁面付近からは陶器四耳壺(12)、13の陶器四耳壺の西側からは、陶器の鉢(16)が口縁部を下に被せた状況で出土した。埋土は自然堆積である。埋土中の木炭について^{14}Ｃ年代測定を行った。土師器、初期須恵器、陶器、磁器、石鍋片1、スラッグ1、鉄器3などが出土した。

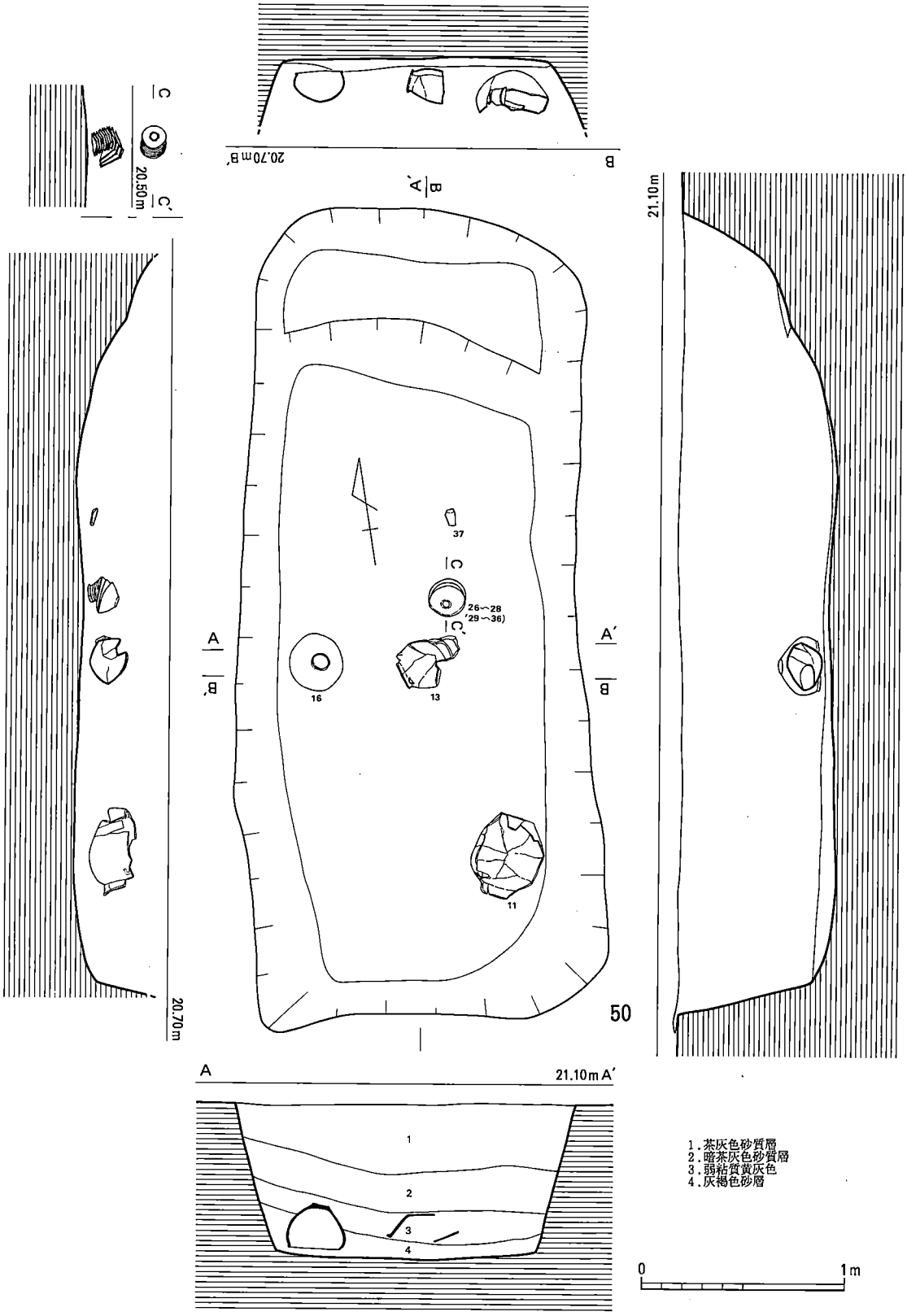
出土遺物（図版26・27・46、第42・44～47図1～37、146図38・39）

土師器（1～8） 1～6は小皿である。口径は7.8～9.8cm、器高0.8～1.1cmを測る。底部外面は糸切り離しを施し、2・4は板状圧痕が残る。7・8は坏である。口径は16cmと18.8cm、器高2.5cmと2.8cmを測る。底部外面は糸切り離しを施し、7は板状圧痕が残る。

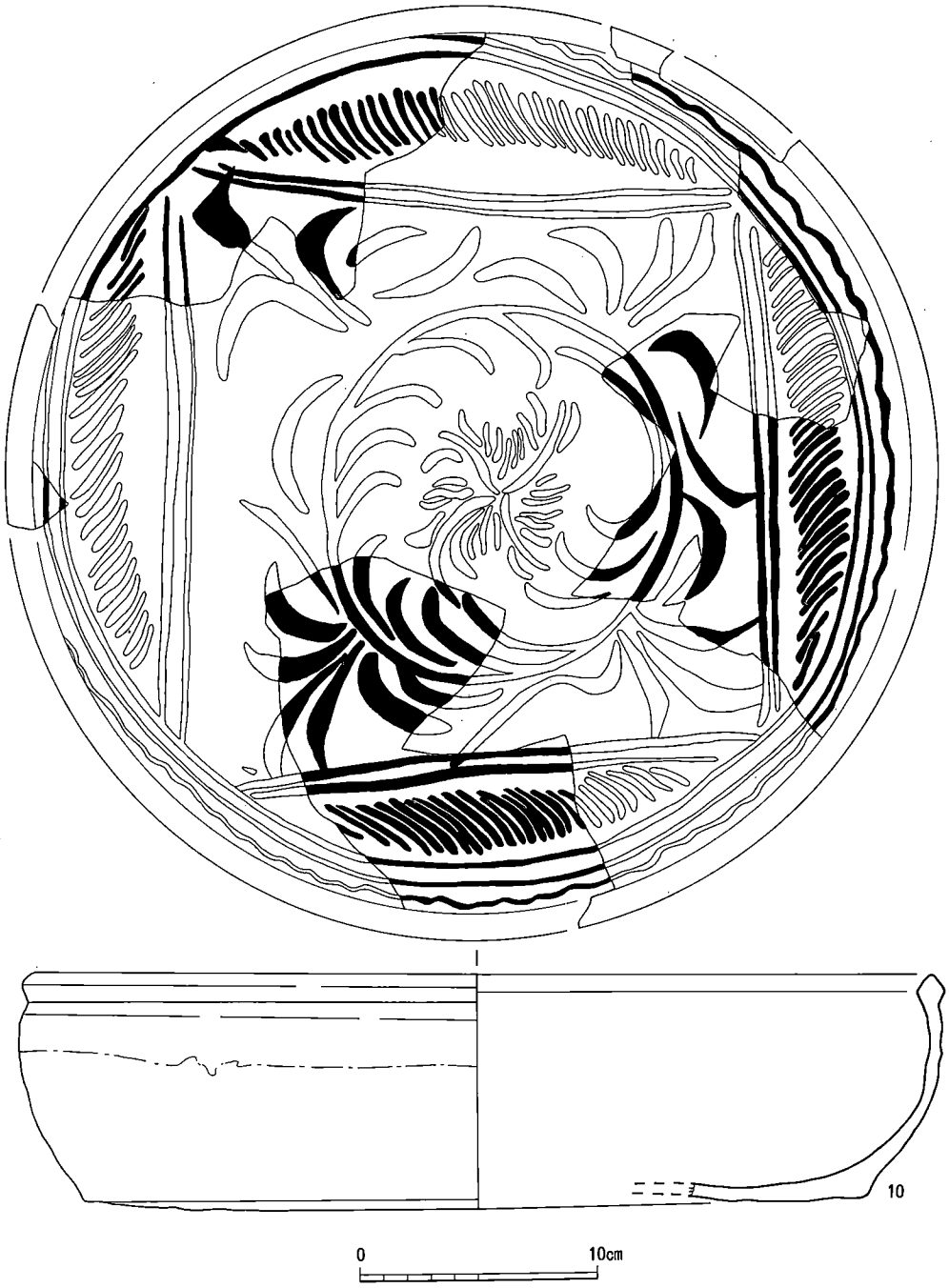
須恵質土器（9） 東播系の片口のこね鉢である。



第42図　才田 50号土坑出土遺物実測図１（1/3）

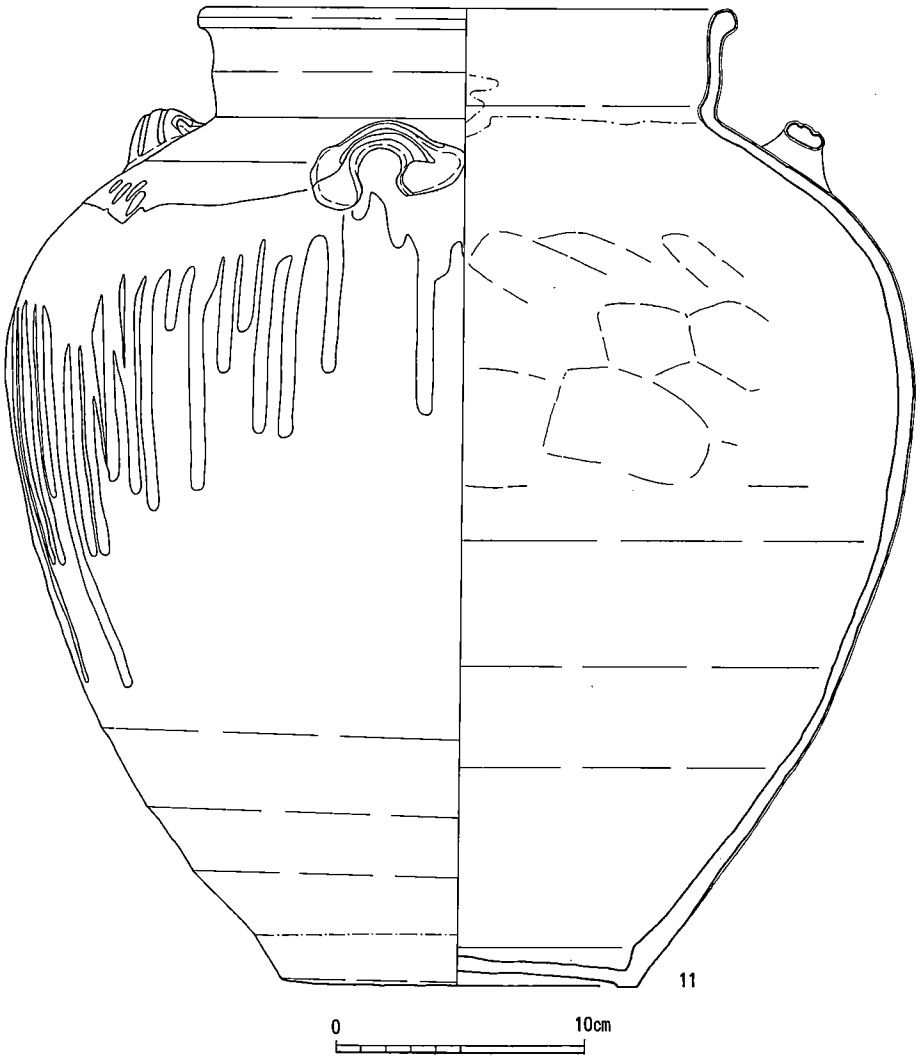


第43図　才田 50号土坑実測図（1/30）

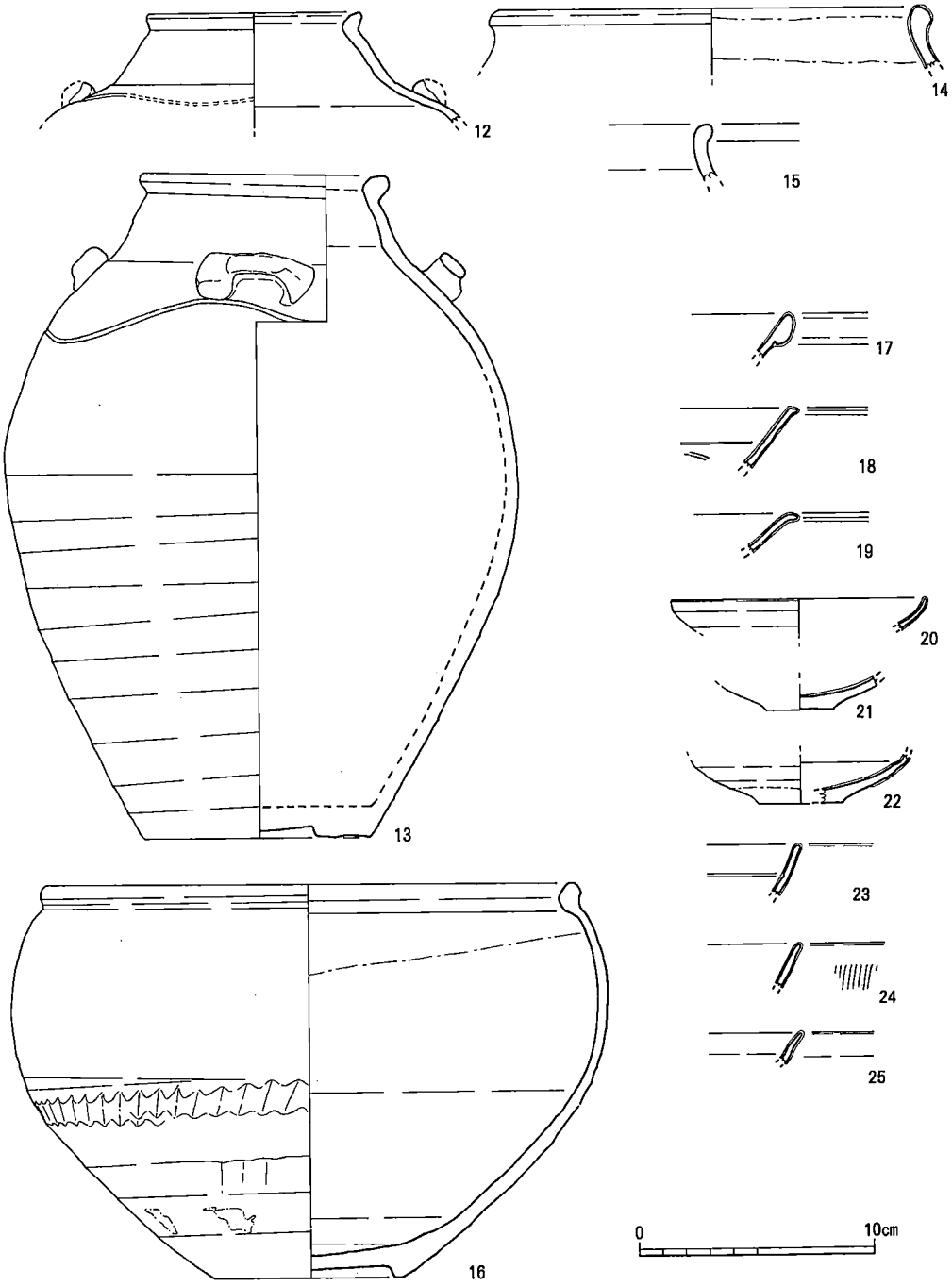


第44図　才田 50号土坑出土遺物実測図２（1/3）

陶器（10～16） 10は黄釉鉄絵花文の盤である。口径は38.9cm、器高12cm、底径33cmを測る。焼成は良好、胎土は砂粒を多量に含む。釉調は内面が薄黄茶色、外面は薄黄茶色と薄黄橙色、露胎は明るい茶色を呈する。Ⅱ－2・b類に分類できる。11は黄釉褐彩四耳壺である。口径は21.65cm、器高38.95cm、底径14.4cmを測る。胎土は緑灰色、黒色粒を含む。露胎は薄黄褐色、釉調は灰黄緑色、肩部にはこげ茶色の鉄釉をかけている。12は四耳壺の口縁部片である。Ⅴ類に分類できる。釉調は暗灰黄緑色を呈する。13は完形品の四耳壺である。胎土は黒色粒を含み、色調は外面が灰味黄緑色～うす黄茶色、内面は明るい緑味灰色を呈する。Ⅴ類に分類できる。14・15は四耳壺の口縁部片である。16は黄釉鉢で、口径23.15cm，器高16.7cmを測る。Ⅳ類に分類で



第45図　才田 50号土坑出土遺物実測図３（1/3）

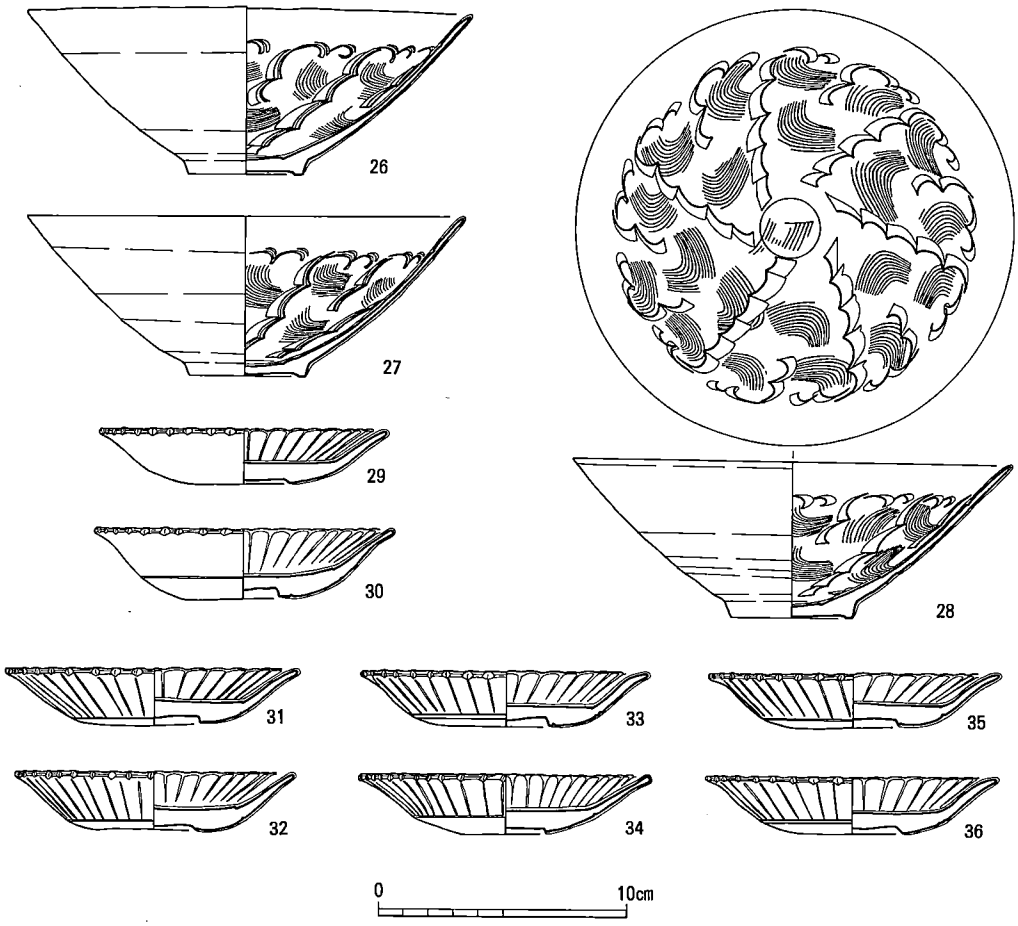


第46図　才田 50号土坑出土遺物実測図４（1/3）

きる。胎土・露胎は明るい橙褐色、釉調はこげ茶の上に黄褐色の釉をかけている。

磁器（17～35） 17～22は白磁である。17は碗で玉縁口縁を有し、Ⅳ類に分類できる。18・19は碗でⅤ－4・b類に分類できる。20～22は皿でⅣ類に分類できる。23～25は同安窯系青磁でⅠ類に分類できる。25は皿である。26～36は青白磁と青磁の完形品である。26～28は青白磁碗である。口径は17.5～17.9cm、器高6.5cmを測る。胎土は黄灰色、釉調は青味白灰色を呈する。釉は薄い。内外ともに貫入が入り、内面は6分割した中に櫛目文、雲文を入れる。内外面ともに一部に茶褐色のニカワ状の泥土が付着する。29～36は青磁の皿で口径11.5cm前後、器高2.2cmを測る。釉調はうす緑色、露胎は黄味灰色を呈する。内面の菊花の弁は43を数える。

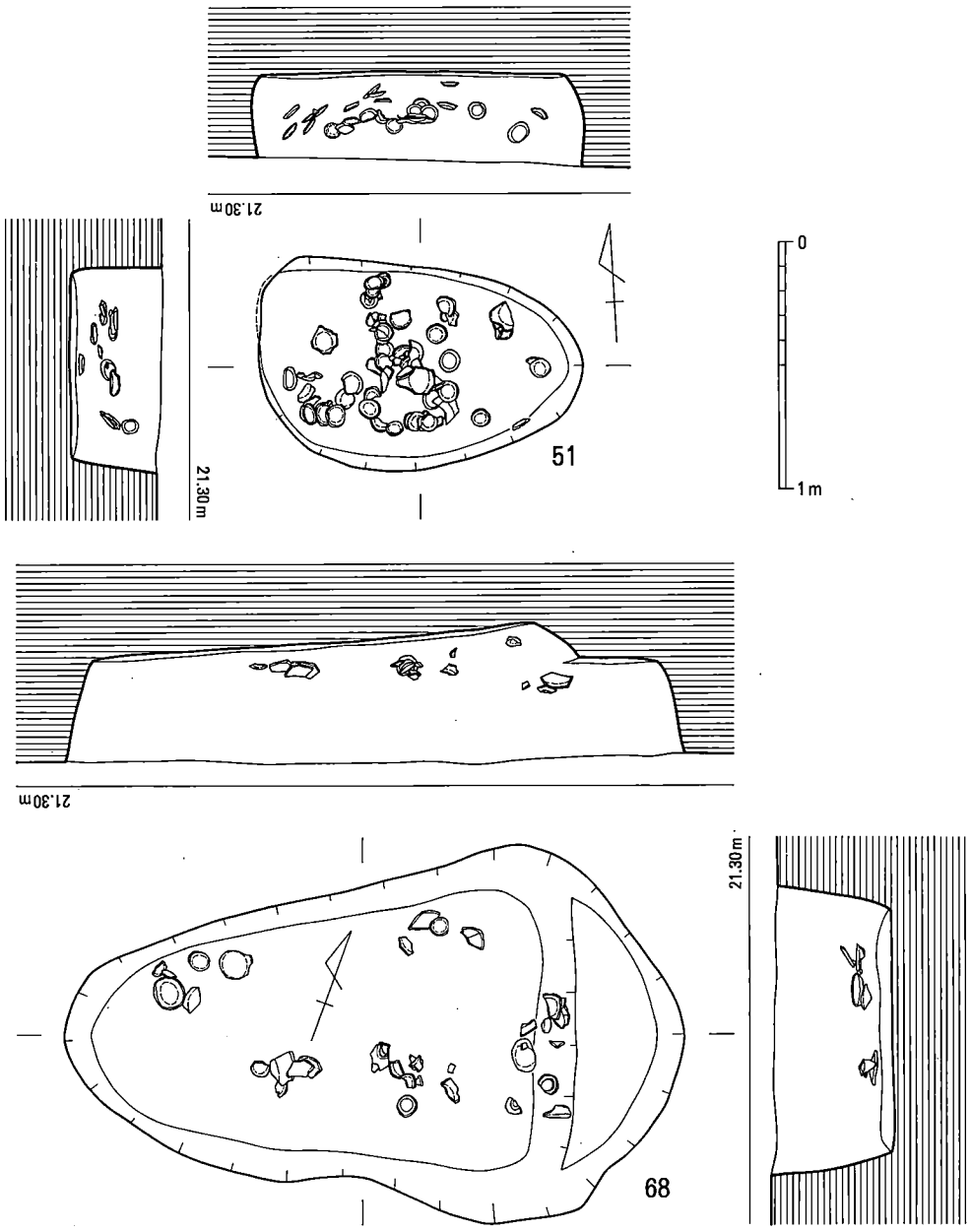
鉄器（38・39） 38は鋳造品らしく、鎚か斧かと思われるが定かでない。図上では刃部があるように表現したがこれも断定はできない。全長82mm、最大幅38mm、厚さ21mm。39は鏃の茎であろうか。現存長82mm。



第47図　才田 50号土坑出土遺物実測図5（1/3）

51号土坑［ＳＫ51］（図版3・7～9・12、第48図）

Ｃ3・4区に位置し、65号土坑の東側にある。規模は長軸264cm、短軸165cm、深さ71cmを測る。平面プランは楕円形に近く、壁面はオーバーハング気味に直に立ち上がる。中・下層には土師



第48図　才田 51・68号土坑実測図（1/30）

器の小皿、坏などが多量に廃棄されている。土師器、鉄器3などが出土した。

出土遺物（図版27・28・46、第49・50図1～66、146図67～69）

土師器（1～63）1～56は小皿である。口径は8.2～9.8cm、器高0.7～1.35cmを測る。底部外面は糸切り離しを呈し、1～6・8・11・12・14・15・17～20・22～34・36・38～42・44・46・48～53・55・56は板状圧痕が見られる。57～63は坏で、口径14.7～15.3cm、器高3～3.5cmを測る。いずれも底部外面は糸切り痕跡が見られ、62・63は板状圧痕が見られる。

瓦器（64） 椀の底部片である。内外面には回転ナデ、ナデの後ミガキを施す。

磁器（65・66） 65は白磁の碗である。Ⅴ類かⅧ類に分類できる。66は壺の口縁部片である。

鉄器（67～69） 67は釘か。68・69 は鏃の茎であろうか。

52号土坑［ＳＫ52］（図版3・5・7・9・22・23、第51図）

Ｅ4区に位置し、33号土坑の東側にあり、20号住居跡の上面にあった。規模は長軸349cm、短軸212cm、深さ44cmを測る。平面プランは不整形で、壁面は直に立ち上がる。床面付近からは土師器などが出土している。土師器、瓦器、陶器、磁器などが出土した。

出土遺物（図版28、第52図1～24）

土師器（1～16・22・23・24） 1～9は小皿である。底部外面はいずれも糸切り痕跡が見られ、2～5・8には板状圧痕が見られる。口径は7.9～9.8cm、器高0.8～1cmを測る。焼成は良好、胎土は細砂粒を含み、色調は褐色を呈するものが多い。10～16は坏で、口径14.3～15.5cm、器高2.6～3.1cmを測る。いずれも底部外面は糸切り痕跡が見られ、11・13～16には板状圧痕が見られる。22は鍋である。口径は24.3cmを測り、内外面はハケ目、口縁端部上面は平坦で4.5cm間隔で棒状の工具によって２本の沈線の押圧痕が見られる。23は甕で口径26.6cmを測る。胴部外面はハケ目、内面はヘラケズリを施す。24は椀である。口縁部と高台の先端部が欠損する。

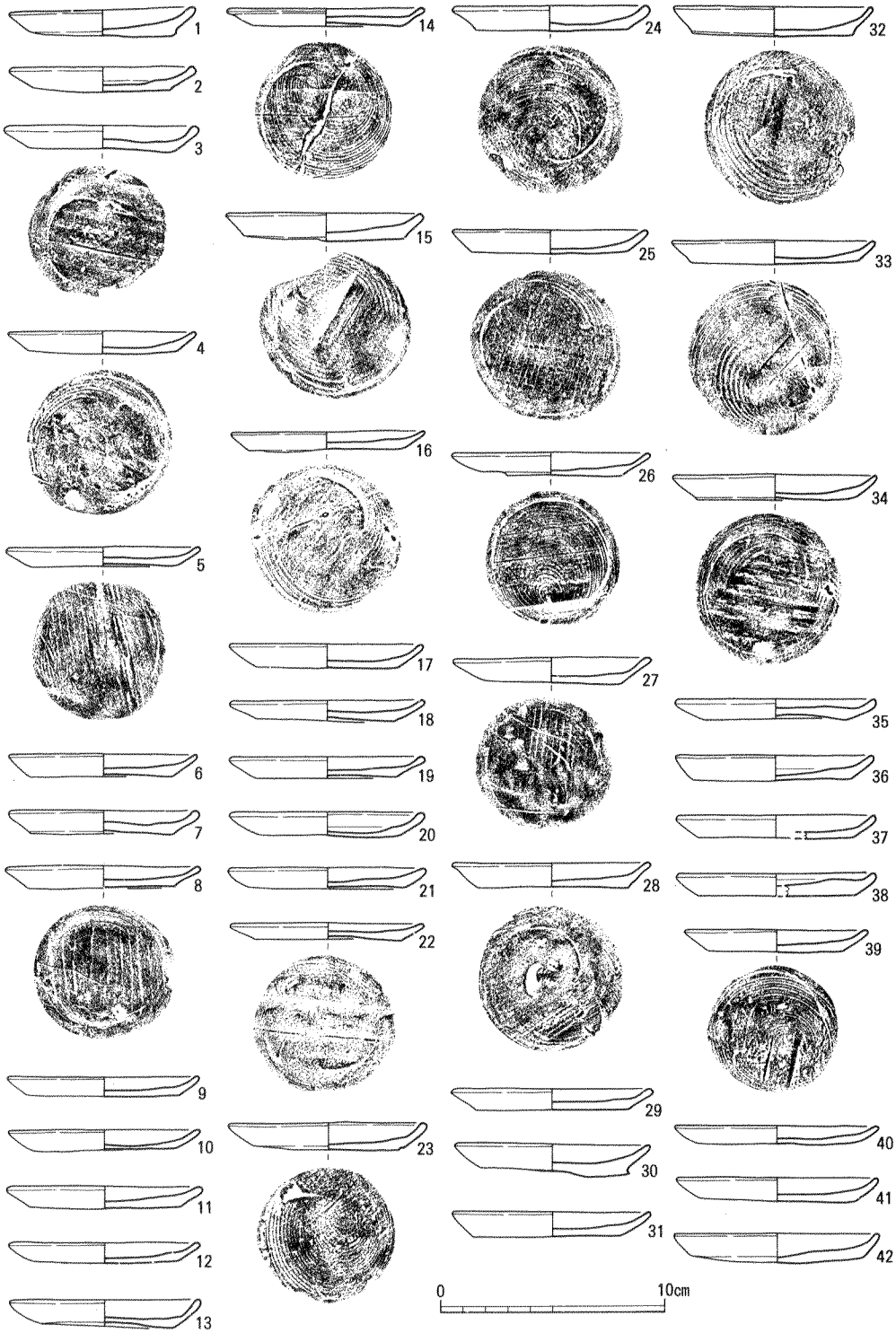
瓦器（17）口径は15.8cm、器高5.9cm、高台径5.7cmを測る。外面上半の調整は不明で下半はヘラケズリの後ナデ、底部には板状圧痕が見られる。内面はヘラミガキ調整を施している。

陶器（18）四耳壺の口縁部片である。胎土は茶褐色を呈する。Ⅴ類に分類できる。

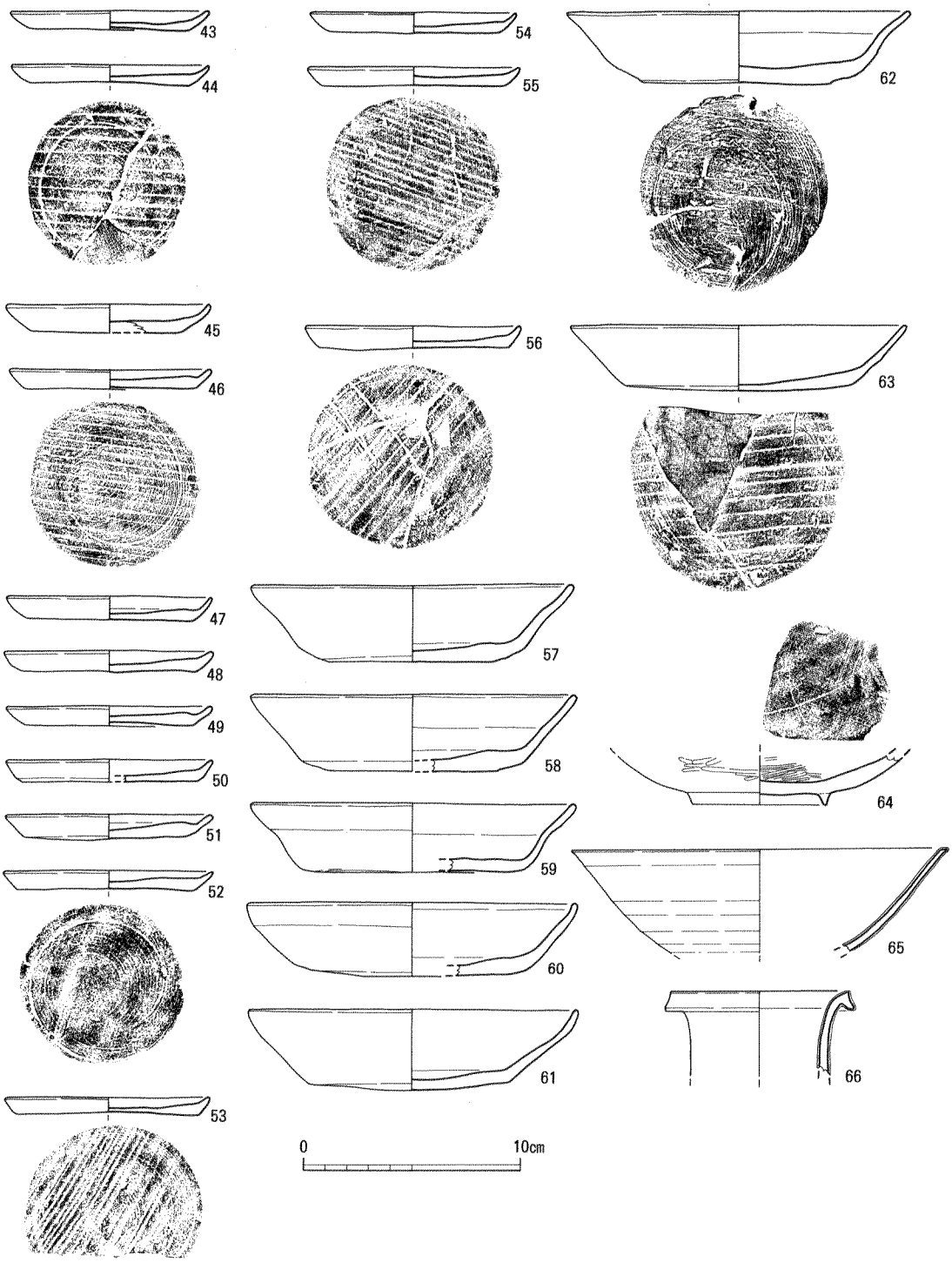
磁器（19～21）19は同安窯系青磁碗である。底部は欠損する。Ⅰ-1・a類に分類できる。20は同安窯系青磁碗の底部片である。Ⅲ-2類に分類される。21は龍泉窯系青磁碗の底部片である。Ⅰ-1類に分類できる。

53号土坑［ＳＫ53］（図版3・6～8、第40図）

Ｄ4区に位置し、55号土坑の南側にある。54号土坑と切り合っているが新旧関係は不明である。規模は長軸150cm、短軸104cm、深さ42cmを測る。平面プランは楕円形で、壁面は直に立ち上がる。土師器、瓦器、磁器などが出土した。



第49図　才田 51号土坑出土遺物実測図１（1/3）



第50図　才田 51号土坑出土遺物実測図２（1/3）

出土遺物（第53図1～8）

土師器（1～4）1～3は小皿である。いずれも底部外面は糸切り痕跡が見られる。2は口径9.9cmを測る。4は鍋の口縁部片である。内外面はハケ目を施す。

瓦器（5）椀の口縁部片である。

瓦質土器（8） 甕の胴部片で、外面には格子目のタタキがある。

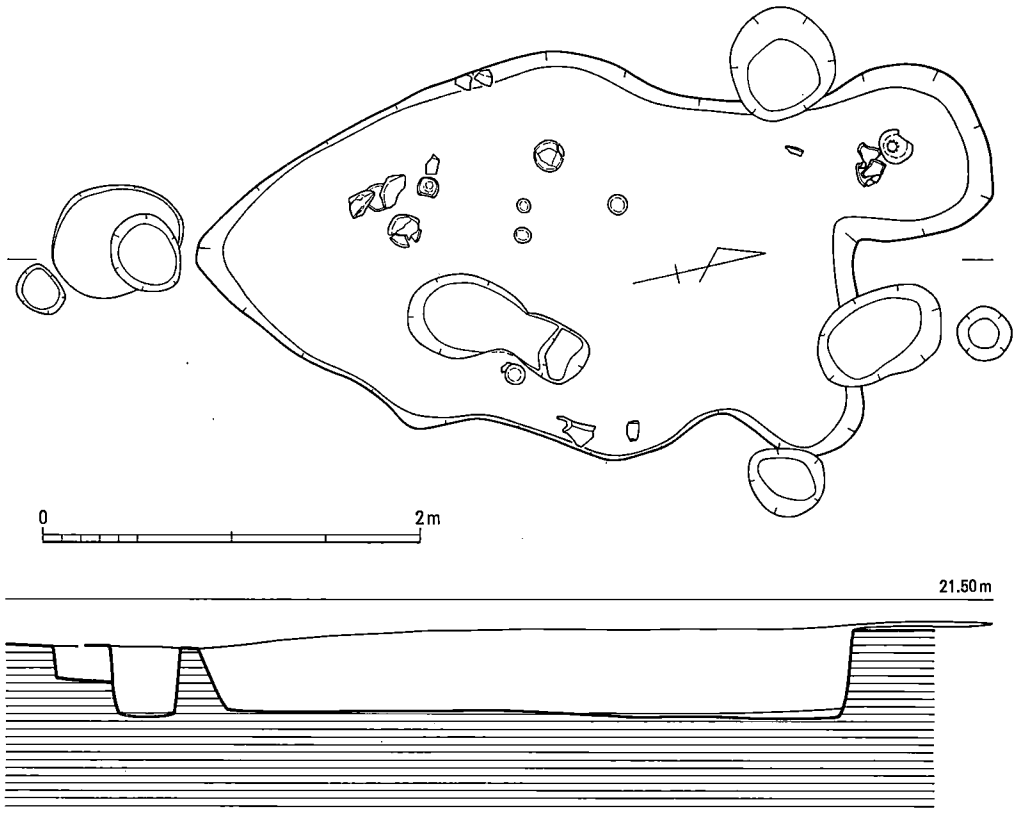
磁器（6・7） 6は白磁の皿である。口縁部は内湾気味に立ち上がる。口径は10.7cmを測る。

54号土坑［ＳＫ54］（図版3・6～8、第40図）

Ｄ4区に位置し、55号土坑と切り合っている。規模は長軸113cm、短軸80cm、深さ44cmを測る。平面プランは隅円長方形で、壁面は直に立ち上がる。土師器、瓦器などが出土した。

出土遺物（第53図1～3）

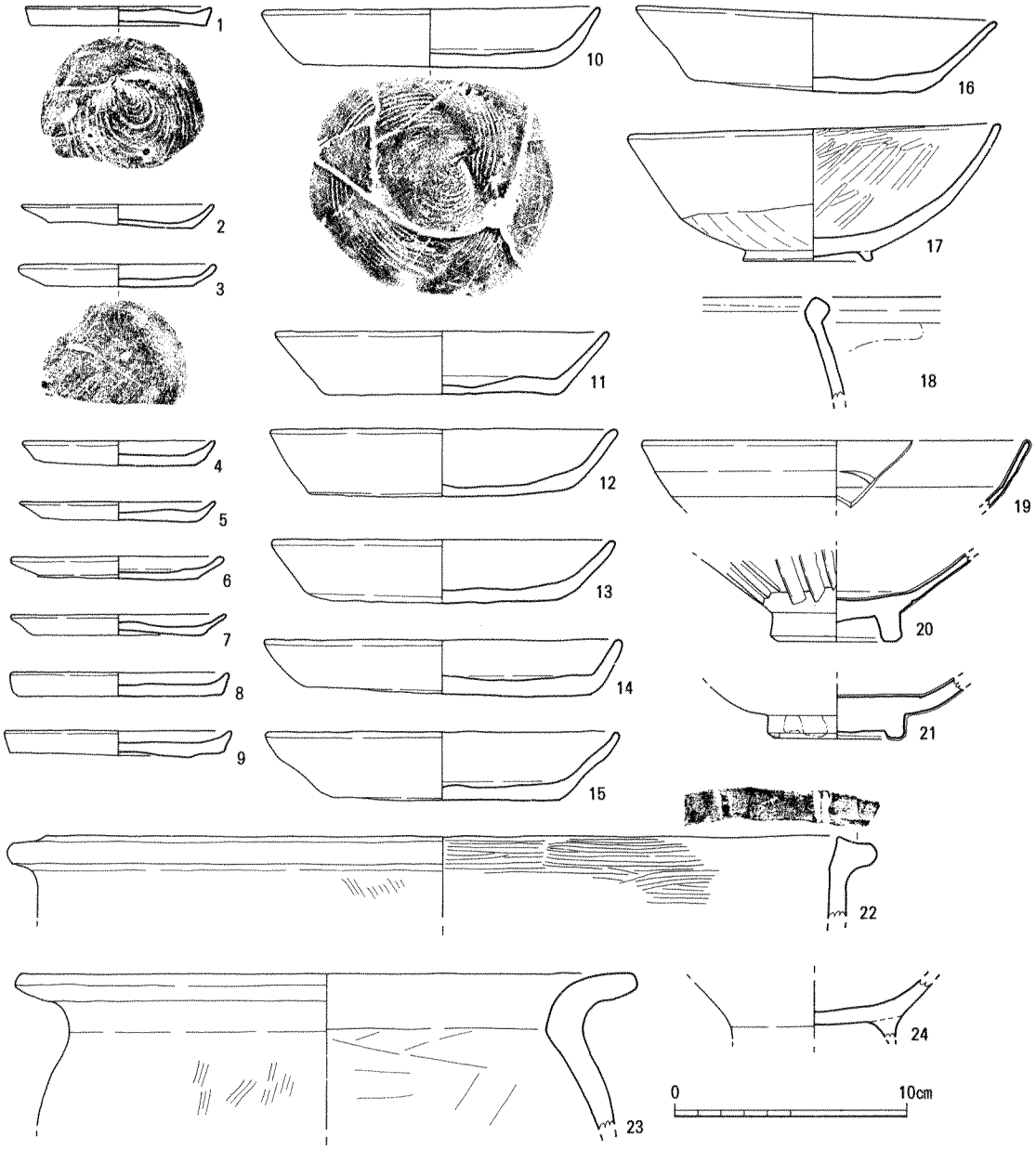
土師器（1･2） 1は小皿である。底部外面は糸切り痕跡が見られる。口径は7.5cm、器高1cmを測る。2は坏の口縁部片である。



第51図　才田 52号土坑実測図（1/40）

瓦器（3） 椀の口縁部片である。

55号土坑［ＳＫ55］（図版3・6～8、第40図）



第52図　才田 52号土坑出土遺物実測図（1/3）

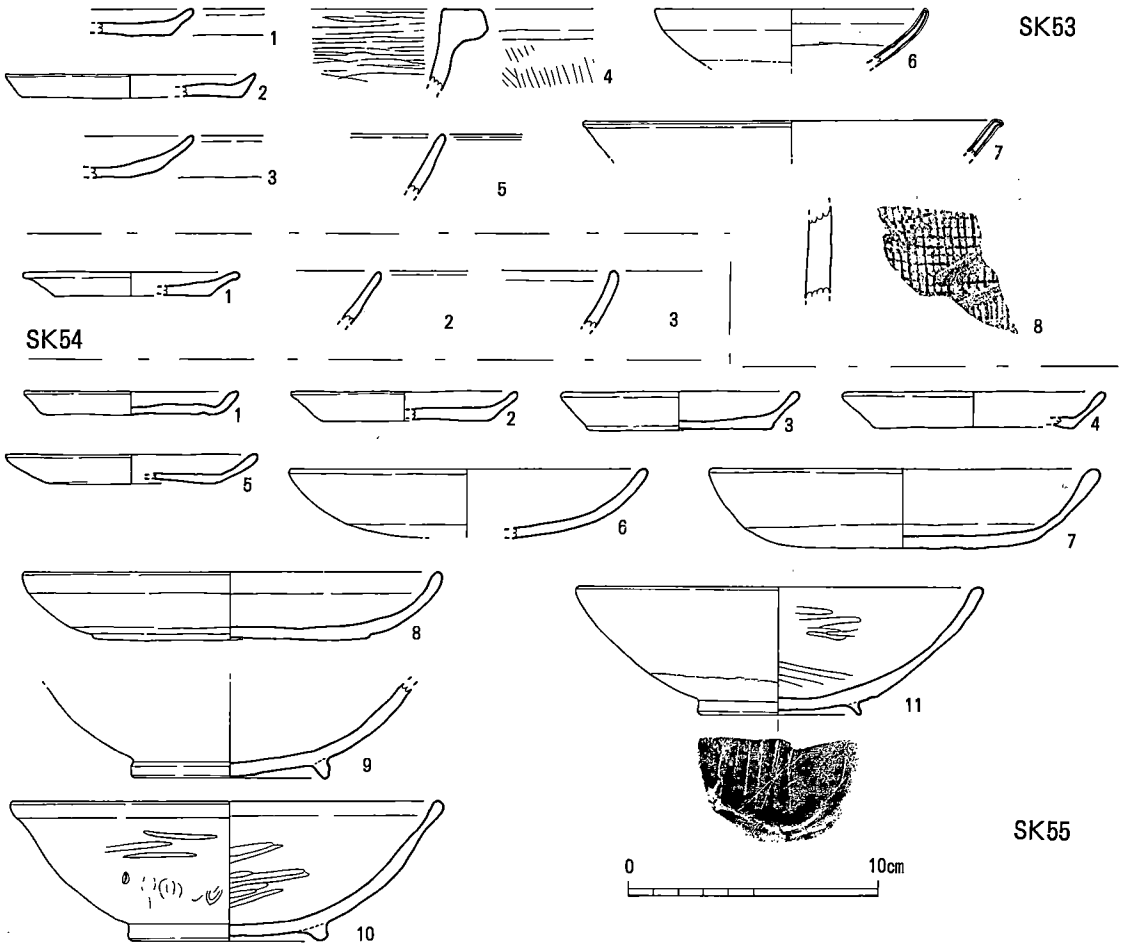
D4区に位置し、56号土坑の東側にある。規模は長軸294cm、短軸87cm、深さ48cmを測る。平面プランは不整形で、壁面は直に立ち上がる。土師器、瓦器、鉄器2などが出土した。

出土遺物（図版28・46、第53図1～11、146図12・13）

土師器（1～8） 1～5は小皿である。底部外面はいずれも糸切り痕跡が見られる。口径は8.4cm～10.9cmを測る。3・5は板状圧痕が見られる。6～8は坏で、口径14.3～16.7cm、器高2.1～3.15cmを測る。いずれも底部外面は糸切り痕が残り、7は板状圧痕が見られる。

瓦器（9～11） 椀である。9は口縁部が欠損する。10は口径17.2cm、器高5.55cmを測る。外面はナデの後ミガキ、下半には押圧痕が見られる。内面はミガキが施されている。底部外面に板状圧痕が見られ、ヘラ記号が施されている。11は口径15.5cm、器高5.1cmを測る。

鉄器（12・13） 板状の製品でともに何であるか不明。12は刃部がある。



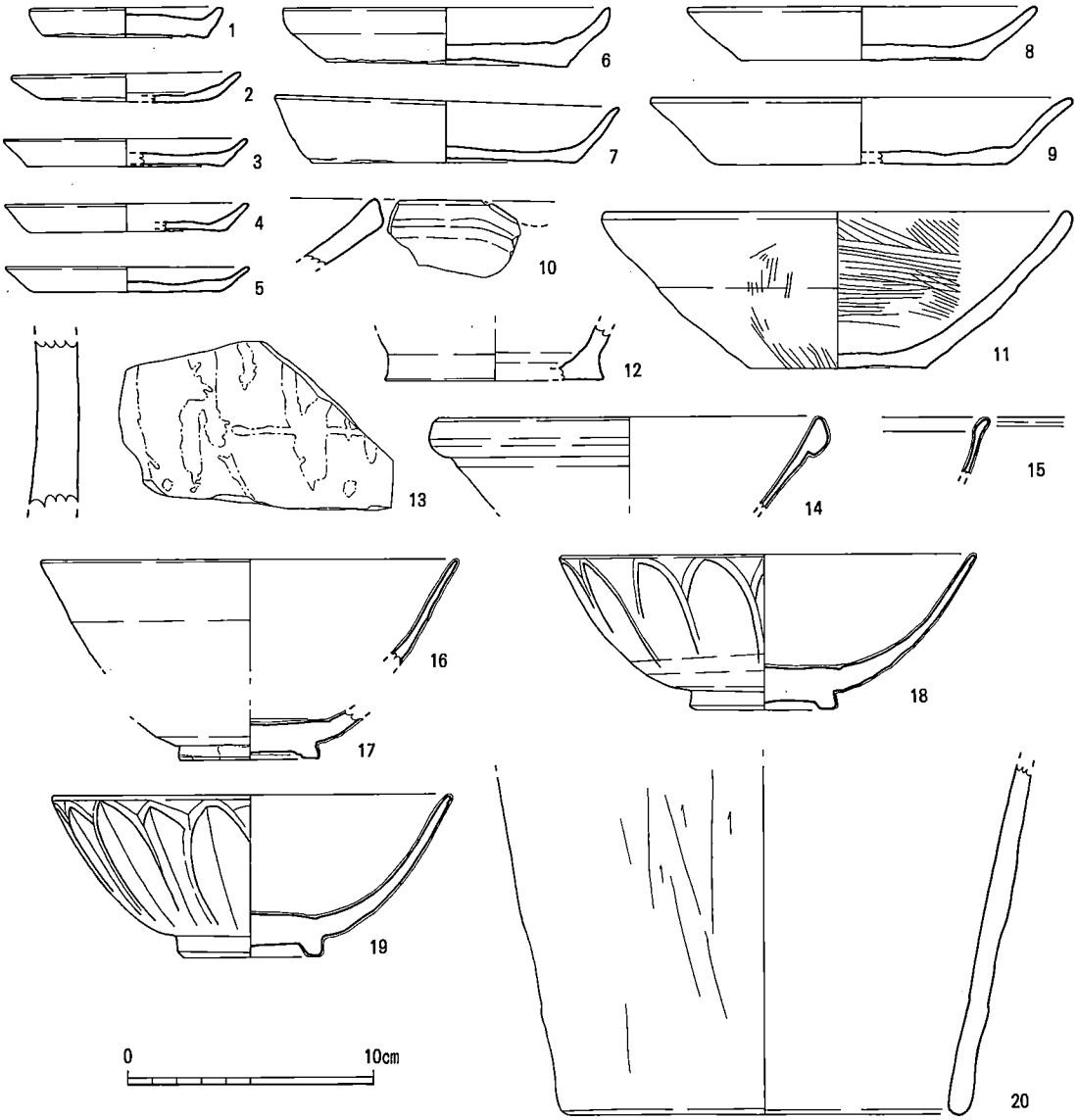
第53図　才田 53・54・55号土坑出土遺物実測図（1/3）

56号土坑［ＳＫ56］（図版33・6～8、第40図）

Ｄ4区に位置し、55号土坑の西側にある。規模は長軸219cm、短軸136cm、深さ57cmを測る。平面プランは不整形で、壁面は直に立ち上がる。土師器、須恵質土器、瓦質土器、陶器、磁器、石鍋1、土錘1、棒状石器1、スラッグ2などが出土した。

出土遺物（図版29・43・44、第54図1～20、136図21、140図22、143図23）

土師器（1～9・20） 1～5は小皿である。いずれも底部外面は糸切り痕跡が見られる。口径は7.8



第54図　才田 56号土坑出土遺物実測図（1/3）

～10cmを測る。3・5は板状圧痕が見られる。6～9は坏である。いずれも底部外面は糸切り痕跡が見られる。口径は12.3～17.3cmを測る。9は板状圧痕が見られる。20は甑の底部片である。竪穴住居からの混入品である。

須恵質土器（10） 東播系の片口のこね鉢である。

瓦質土器（11） こね鉢である。口径18.8cm、器高6.4cmを測る。外面はナデの後ハケ目、内面はハケ目調整を施している。

陶器（12・13） 12は壺類の底部片である。胎土は茶色、釉調は黒黄色を呈する。壺類の胴部片である。釉調は灰黄色から茶色を呈する。

磁器（14～19） 14は白磁碗である。Ⅳ類に分類される。底部は欠損する。15は同安窯系青磁碗の口縁部片である。Ⅱ類かⅢ類に分類できる。16～18は龍泉窯系青磁碗である。Ⅰ-1類に分類できる。18はⅠ-5・a類に分類できる。外面の蓮華文は鎬がないものである。19はⅠ-5・b類に分類できる。

石鍋（21） 滑石製の小振りの石鍋である。口縁に接して突起状の把手が付く。外面には煤が付着する。復原口径17.2cm、器高6.4cm。

土錘（22） 管状土錘で、全長45.5mm、径10mm、重さ3.4g。

石器（23） 雲母片岩の円柱棒状品で、器表には削った痕跡がある。現存長42mm、径11～13mm。用途不明。

57号土坑［ＳＫ57］（図版3・6～8、第40図）

Ｃ3区に位置し、56号土坑の西側に位置する。規模は長軸153cm、短軸108cm、深さ45cmを測る。平面プランは不整形で、壁面は直に立ち上がる。土師器、須恵器、瓦器、磁器、石鍋1などが出土した。

出土遺物（図版29、第56図1～16、136図17）

土師器（1～8） 1～5は小皿である。いずれも底部外面は糸切り痕跡と板状圧痕が見られる。口径8～9.9cm、器高0.9～1.3cmを測る。6・7は坏である。いずれも底部外面は糸切り痕跡と板状圧痕が見られる。口径は14.45～15.75cmを測る。8は鍋の口縁部片である。

須恵器（15・16） 15は壺の胴部片である。外面底部はヘラケズリ、その他は回転ナデを施す。

瓦器（9～12） 9・10は小皿である。口径は9.4cm、9.7cm、器高1cmと1.6cmを測る。内外面ともにヘラミガキを施す。11・12は椀である。12は内外面にヘラミガキが見られる。

磁器（13・14） 白磁碗である。13は底部を欠損する、Ⅳ-1・a類に分類できる。14はⅤ類かⅧ類に分類できる口縁部片である。

石鍋（17） 滑石でなく片岩の石鍋を再利用したものであるが、何に使ったのかは不明。口縁部直下に巡る鍔の上端部を擦っている。鍔部分の復原径46cm。

58号土坑［ＳＫ58］（図版3・6～8、第55図）

Ｄ5区に位置し、55号土坑の北側にある。規模は長軸135cm、短軸93cm、深さ69cmを測る。平面プランは不整形で、壁面は緩やかに立ち上がる。床面は舟底状を呈する。土師器、瓦器、磁器などが出土した。

出土遺物（第56図1～5）

土師器（1～3）　1は小皿である。2・3は椀である。2は口径18cmを測る。3は高台が付く椀類であろう。混入品の可能性がある。

瓦器（4）　椀の口縁部片である。

磁器（5）　同安窯系青磁碗である。Ｉ-1類に分類できる。

59号土坑［ＳＫ59］（図版3・6～8、第55図）

Ｃ4区に位置し、57号土坑の南側にある。規模は長軸150cm、短軸109cm、深さ38cmを測る。平面プランは不整形で、壁面は直に立ち上がる。土師器、瓦質土器、磁器などが出土した。

出土遺物（第57図1～5）

土師器（1～3）　1･2は小皿である。口径は7.8と8.8cm、器高1.4と1.5cmを測り、糸切り痕跡が見られ、1は板状圧痕が残る。3は坏で、口径13.6cm、器高2.7cmを測る。底部外面は糸切り痕跡が残る。

瓦質土器（4）　器種は不明である。器壁は厚手で、内面はハケ目調整が施されている。

磁器（5）　龍泉窯系青磁碗の口縁部片である。Ｉ-5・b類に分類できる。

60号土坑［ＳＫ60］（図版3・6～8、第55図）

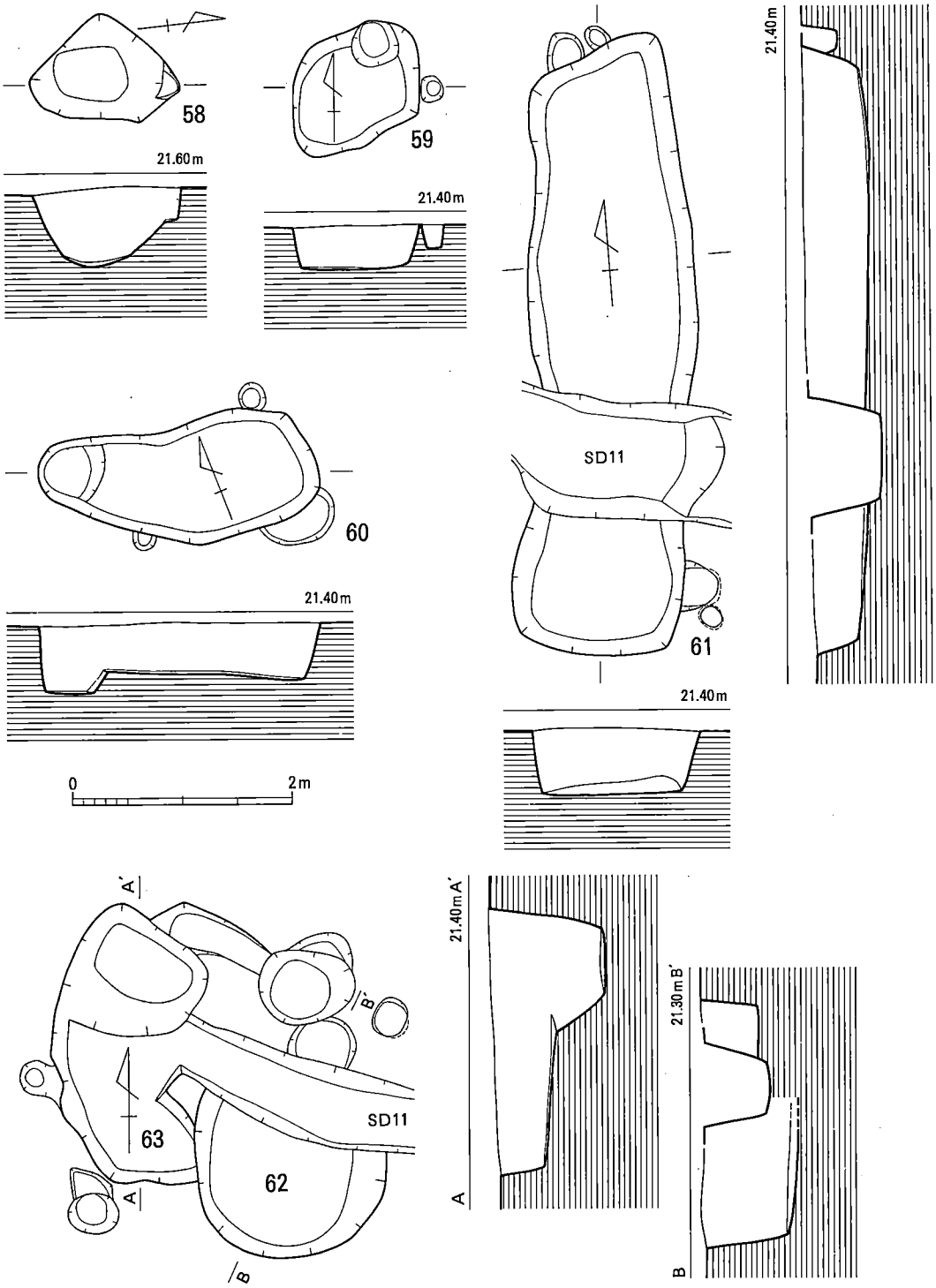
Ａ3区に位置し、57号土坑の南側にある。規模は長軸254cm、短軸112cm、深さ48cmを測る。平面プランは不整形で、壁面は直に立ち上がる。西側床面の際にはピットがある。土師器、瓦器、陶器、磁器、石鍋1、スラッグ1などが出土した。

出土遺物（図版29、第57図1～14、136図15）

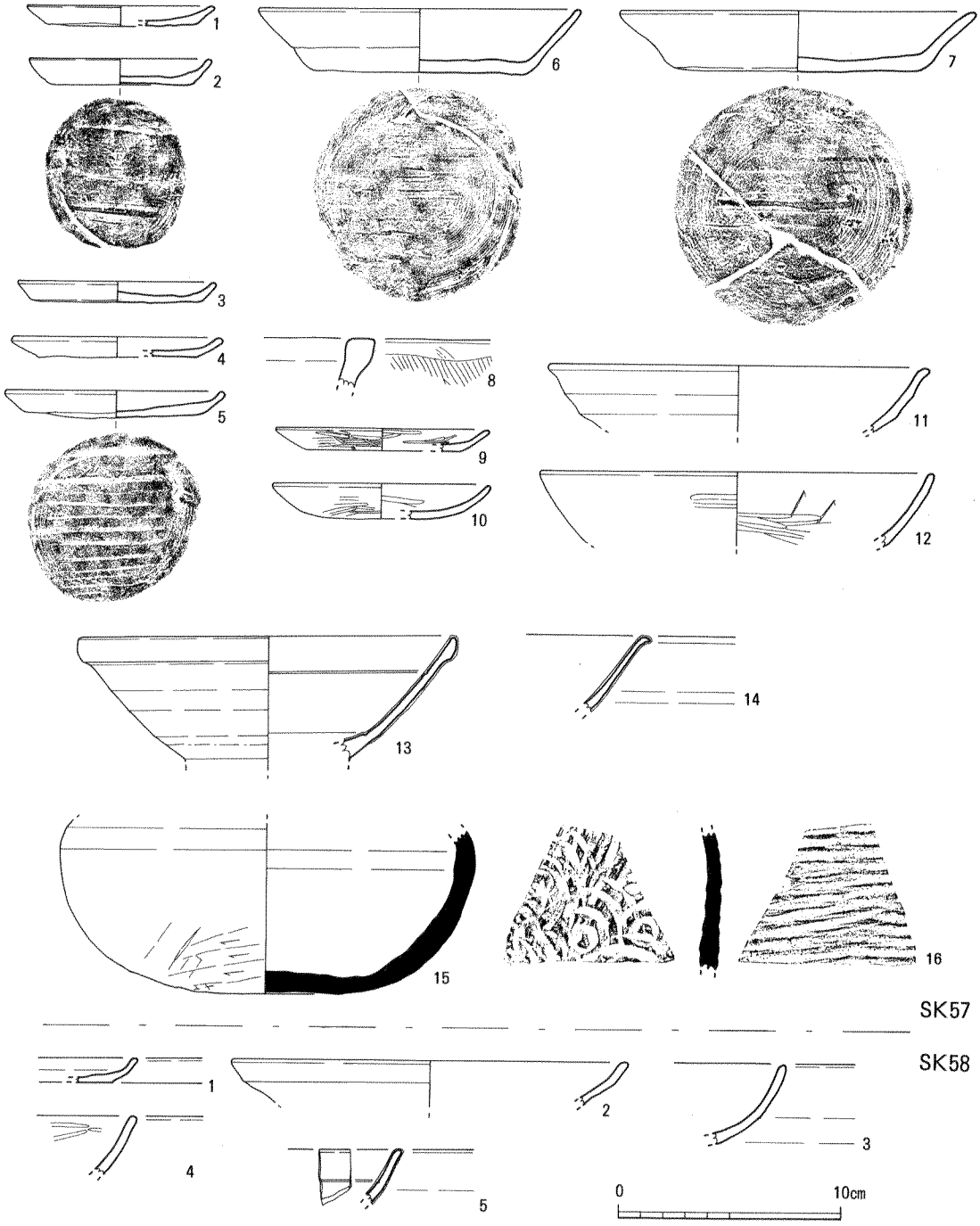
土師器（1～6）　1～3は小皿である。口径は8.8～8.9cm、器高1.2cm前後である。いずれも底部外面には糸切り痕跡と板状圧痕が残る。4は皿で口径12.7cm、器高2cmを測る。底部外面はヘラケズリを施している様である。竪穴住居に伴うものであろう。5・6は坏である。口径は14.7cmと16.3cmを測る。底部外面の調整は糸切り痕跡が見られる。6は板状圧痕が残る。

瓦器（7・8）　口径16.3cmと16.6cmを測る椀である。口縁部付近は回転ナデ、その他の外面はナデ調整を施す。

陶器（9）　底部片である。内外面はナデ調整を施す。国産品か舶載品か不明である。胎土は雲母を多く、赤褐色粒、微量の砂を含む。色調はこげ茶色を呈する。



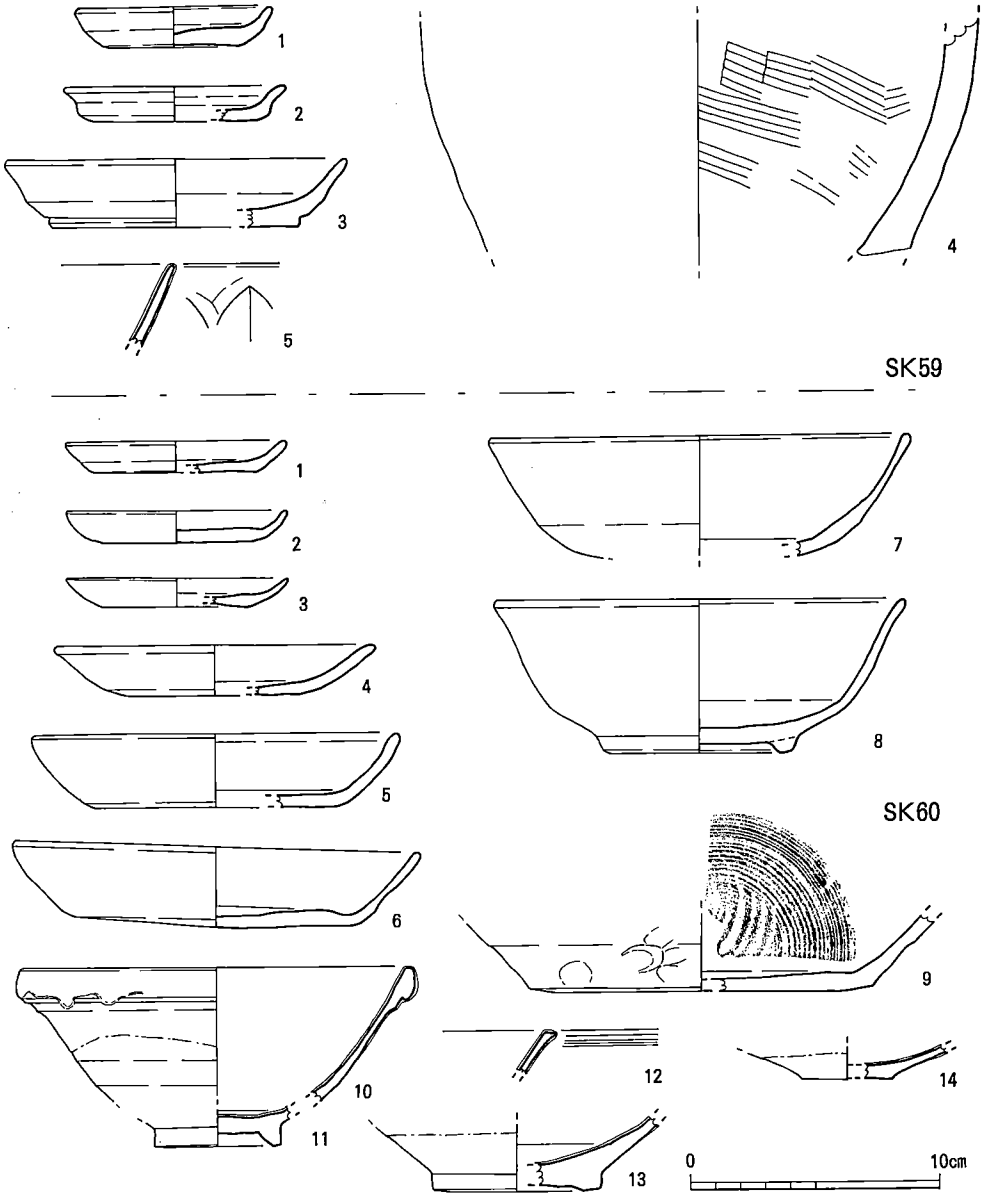
第55図　才田 58～63号土坑実測図（1/60）



第56図　才田 57・58号土坑出土遺物実測図（1/3）

磁器（10～14） 白磁である。10はⅣ－2類に分類できる玉縁口縁をもつ碗である。11は口縁端部が平坦な碗である。Ⅴ類かⅧ類に分類される。12は10の底部片であろう。Ⅳ－1・a類に分類できる。12はⅣ類の底部片である。13は皿の底部片で、Ⅴ類かⅥ類である。

石鍋（15） 滑石製で口縁の下方に鍔が巡る。復原口径21cm。



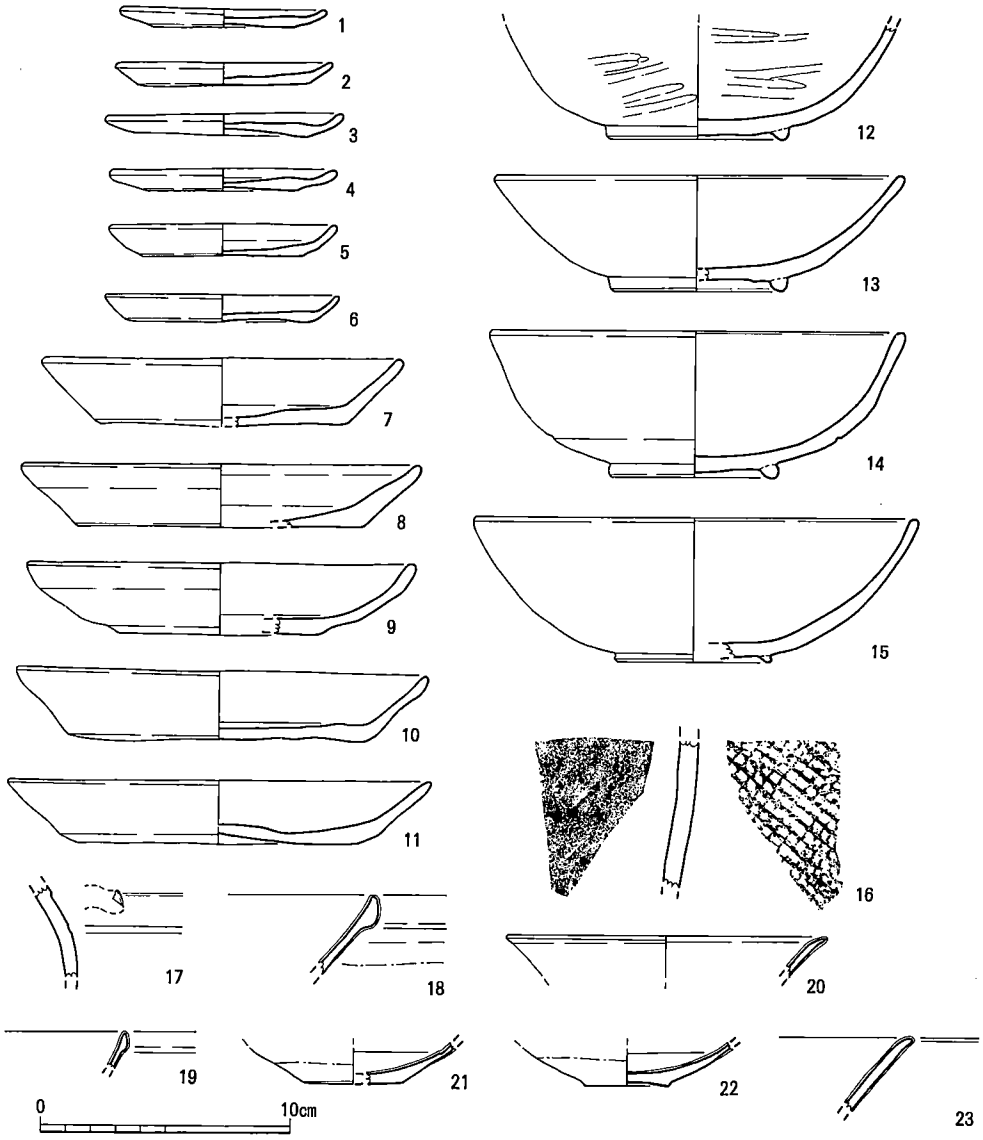
第57図 才田 59・60号土坑出土遺物実測図（1/3）

61号土坑［ＳＫ61］（図版3・6～8・12、第55図）

Ｄ3区に位置し、11号溝に切られる。規模は長軸546cm、短軸153cm、深さ57cmを測る。平面プランは隅円長方形で、壁面は直に立ち上がる。土師器、瓦器、陶器、磁器、土錘3、鉄器2などが出土した。

出土遺物（図版29・43・46、第58図1～23、140図24～26、146図27・28）

土師器（1～11） 1～6は小皿である。口径は8.1～9.2cm、器高0.7～1.2cmを測る。いずれも糸切



第58図　才田 61号土坑出土遺物実測図（1/3）

り痕跡が見られ、1·3·4·6は板状圧痕が残る。7～11は坏である。口径は15.7～16.8cm、器高2.45～3cmを測る。いずれも糸切り痕跡が見られ、10·11は板状圧痕が残る。

瓦器（12～15） 椀である。12は口縁部を欠損する。内外面はナデの後ミガキを施す。13～15の内外面はナデと回転ナデ調整である。

陶器（16·17） 16は国産陶器であろう。外面は擬格子タタキ、内面はナデ調整である。色調は灰色を呈する。常滑焼であろうか。17は四耳壺の把手部である。胎土は茶灰色、黒色粒、褐色粒を含み、暗灰色～黄灰色、釉調は暗黄色を呈する。

磁器（18～23） 18～20は白磁碗である。18は玉縁口縁を呈し、Ⅳ類に分類できる。19は口縁端部を短く折り曲げて小さな玉縁口縁をつくる。Ⅱ類に分類できる。20は口縁端部が短く外半する。Ⅳ-1類に分類できる。21·22は白磁皿である。口縁部は欠損する。内面見込み部分には沈線が巡る。23は龍泉窯系青磁碗の口縁部片である。Ⅰ類に分類できる。

土錘（24～26） 管状土錘の破片である。24は黒く塗っている。現存長39cm。25・26は同一個体かと思われるが接合はしない。

鉄器（27・28） ともに釘か鏃かわからない。28は現存長115mm。

62号土坑［ＳＫ62］（図版3・6～8・12、第55図）

Ｃ3区に位置し、11号溝に切られ、63号土坑を切る。規模は長軸174cm、短軸173cm、深さ85cmを測る。平面プランは円形で、壁面は直に立ち上がる。土師器、須恵質土器、磁器、スラッグ1が出土した。

出土遺物（第59図1～9）

土師器（1～5） 1～4は小皿である。口径は8.2～9.2cm、器高1.1～1.4cmを測る。いずれも糸切り痕跡が見られ、3·4は板状圧痕が残る。5は坏である。

須恵質土器（6） 東播系の片口のこね鉢である。

磁器（7～9） 7・9は白磁碗である。7はⅤ類かⅧ類に分類できる。8は龍泉窯系青磁碗である。Ⅰ-3類に分類できる。

63号土坑［ＳＫ63］（図版3・6～8・12、第55図）

Ｃ3区に位置し、11号溝に切られ、62号土坑に切られる。規模は長軸253cm、短軸112cm、深さ50cmを測る。平面プランは不整形で、壁面は直に立ち上がる。土師器、瓦器、瓦質土器、陶器、磁器、土錘1などが出土した。

出土遺物（図版43、第59図1～16、140図17）

土師器（1～5） 1～4は小皿である。口径は7.8～9.1cm、器高0.9～1.35cmを測る。いずれも糸切り痕跡が見られ、3は板状圧痕が残る。5は坏で、口径は15.2cm、器高3cmを測る。

瓦器（6） 椀である。口径は17.4cmを測る。外面は回転ナデを施す。

瓦質土器（16） 湯釜である。頸部付近には花文のスタンプが見られる。

陶器（7・8） 7は四耳壺の口縁部片である。胎土は赤褐色粒、微量の砂を含み、灰黄茶色～茶褐色を呈する。8は水注の口縁部片である。胎土は細砂を多く含み、灰色、釉調は白黄茶色、灰黄緑色を呈する。

磁器（9～15）すべて白磁である。9～14は碗である。9・10は玉縁口縁を呈する。10は内面見込み部分に沈線が巡る。Ⅳ-1・a類に分類できる。11は口縁部が短く外半する。Ⅴ類に分類できる。12・13は口縁端部が平坦である。Ⅴ類に分類できる。14は体部内面に沈線が巡る。Ⅷ類に分類できる。15は口禿の皿である。底部は欠損するが、口径10.3cmを測る。口縁部はやや外半する。

土製品（17） 管状土錘の半欠品である。径12mm。

64号土坑［ＳＫ64］（図版3・6～8・12、第60図）

Ｃ3区に位置し、65号土坑の南側にある。規模は長軸127cm、短軸64cm、深さ45cmを測る。平面プランは楕円形で、床面は舟底状を呈する。壁面は直に立ち上がる。土師器、瓦器、陶器、などが出土した。

出土遺物（第61図1～4）

土師器（1・2） 1は小皿である。底部外面は糸切り痕が見られる。2は坏である。

瓦器（3） 底部を欠損する椀である。外面の調整はナデを施す。

陶器（4） 四耳壺の底部片で僅かに上げ底である。胎土は内面が明灰色、外面は茶色、釉調は薄茶色である。

65号土坑［ＳＫ65］（図版3・6～8・12、第60図）

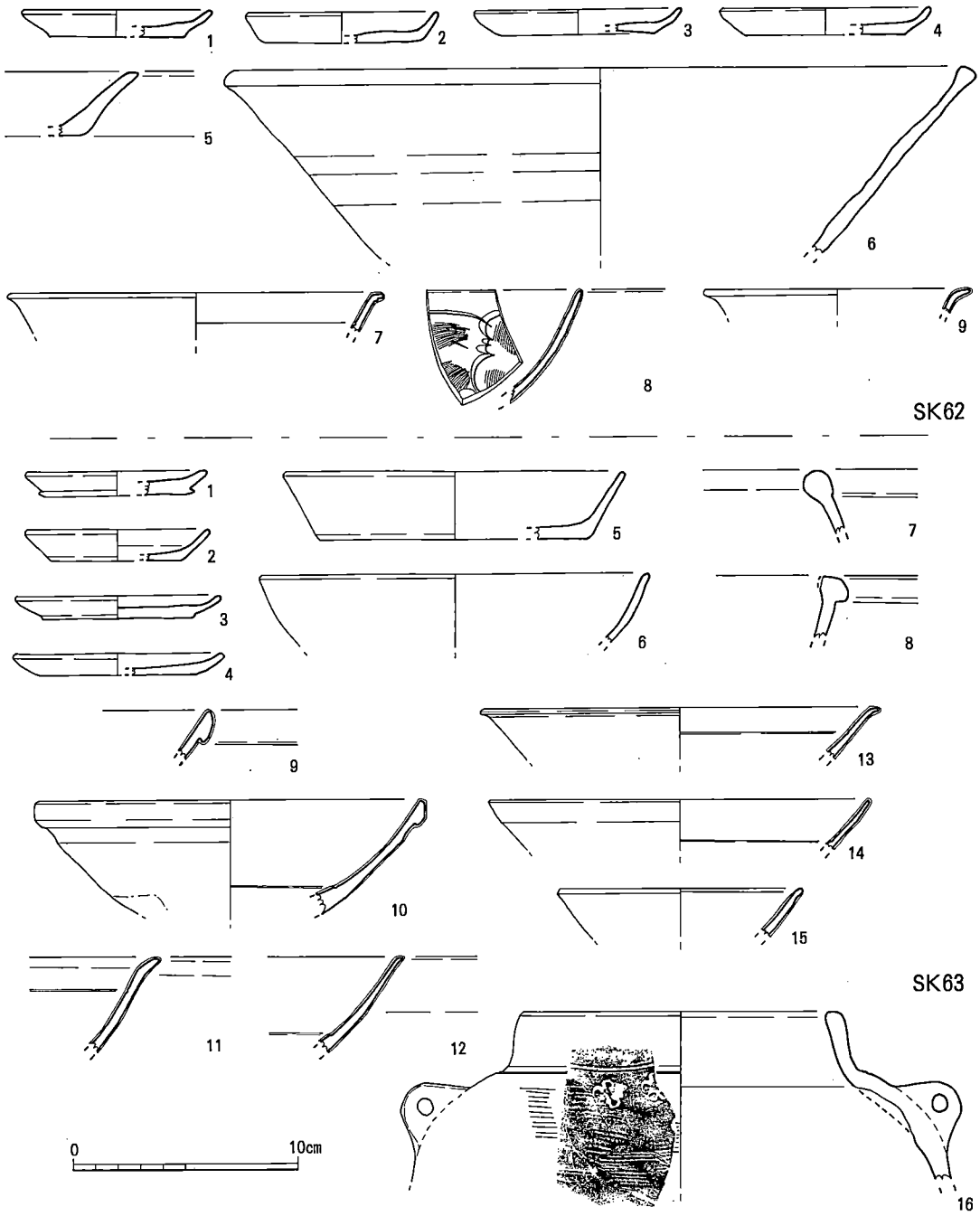
Ｃ4区に位置し、51号土坑の西側にある。規模は長軸145cm、短軸98cm、深さ45cmを測る。平面プランは不整形で、２段掘りを呈する。壁面は略直に立ち上がる。土師器、瓦器、陶器、すり石1、鉄器1が出土した。

出土遺物（図版29・44・46、第61図1～16、144図17、146図18）

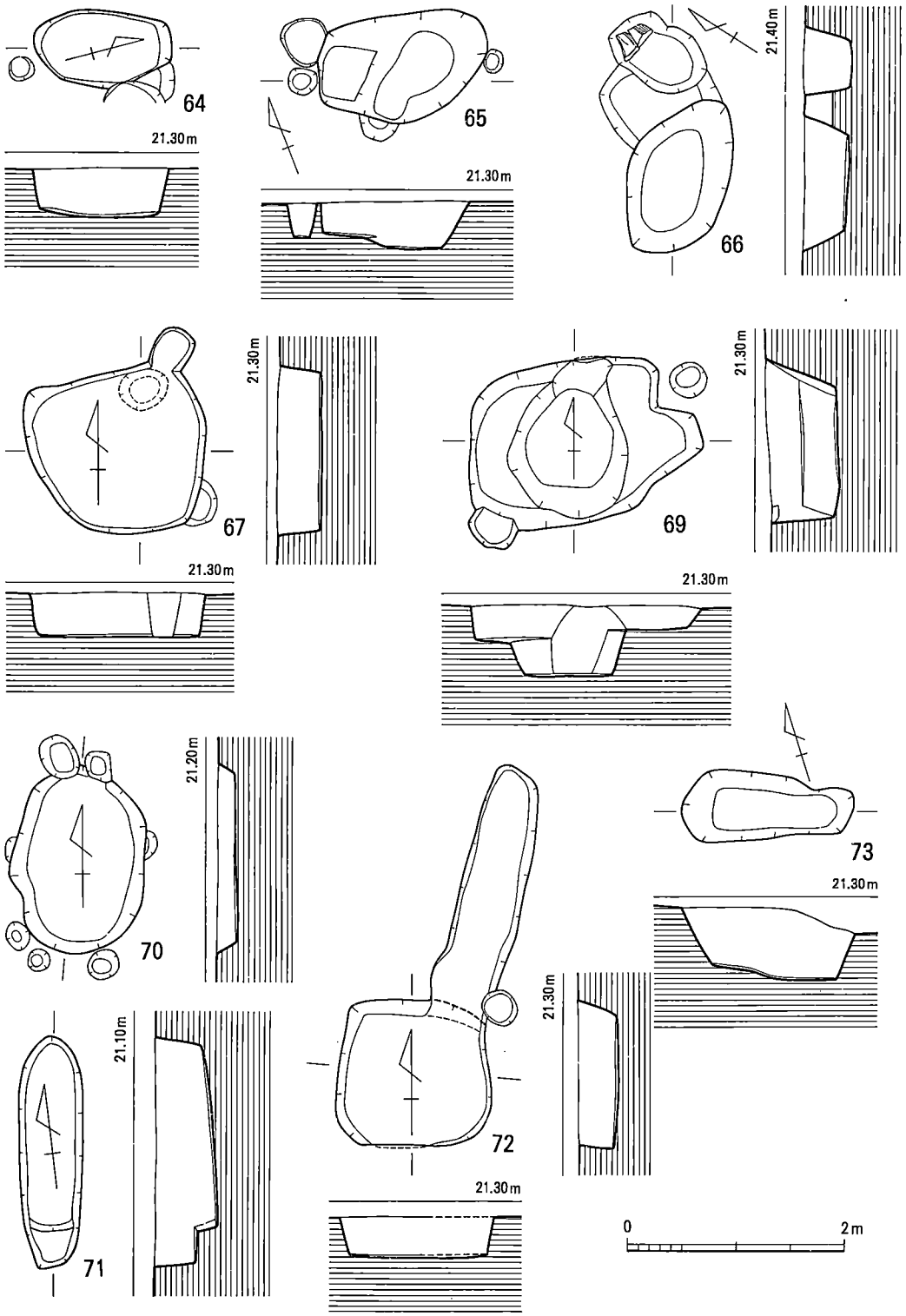
土師器（1～9） 1～7は小皿である。いずれも底部外面は糸切り痕が見られる。1・2・4は板状圧痕が残る。口径は7.6～9.2cm、器高0.8～2.7cmを測る。8・9は坏である。

瓦器（10・11） 椀の破片である。10は底部を欠損する。口径は16.6cmを測り、調整は磨滅しているため不明である。11は口縁部が欠損している。外面下半は回転ナデの後ナデ、内面はミガキを施す。

陶器（12・13） いずれも壺類の胴部片であろう。12の外面には沈線が巡る。胎土は細砂を多く含み、色調は暗茶褐色を呈する。13は胎土が細砂を多く、赤褐色粒を若干含む。色調は内面



第59図　才田 62・63号土坑出土遺物実測図（1/3）



第60図　才田 64～67・69～73号土坑実測図（1/60）

が灰色、外面が黒茶褐色を呈する。

磁器（14～16） 14は白磁椀の口縁部片で、Ｖ類に分類される。15は龍泉窯系青磁碗である。Ｉ－4・a類に分類される。青白磁の皿である。口縁部は輪花を施す。胎土は黒茶色、釉調は明るい緑灰色を呈する。

石器（17） 安山岩の平らな石で、表裏ともによく擦れていて滑らかである。裏面には煤が付着している。すり石というより台石とすべきか。

鉄器（18） 鏃の茎であろうか。

66号土坑［ＳＫ66］（図版3・6～8、第60図）

Ｃ4区に位置し、ＳＢ９の内側にある。規模は長軸107cm、短軸67cm、深さ44cmを測る。平面プランは不整形で床面は平坦である。壁面は直に立ち上がる。土師器、磁器、土錘1が出土した。

出土遺物（図版43、第61図1～7、140図8）

土師器（1～3・6・7） 1は小皿である。底部外面は糸切り痕跡が残る。2・3は坏である。6は口径12.8cm、器高4.2cmを測る。底部外面はヘラ切りを施す。混入品の可能性が高い。7は口縁部が外反する。外面はヘラケズリ、内面はヘラケズリの後ナデを施す。竪穴住居に伴う可能性がある。

磁器（4・5） 4は龍泉窯系青磁皿の口縁部片である。Ｉ類に分類できる。5は龍泉窯系青磁碗の口縁部片である。Ｉ類に分類できる。

土製品（8） 短い管状土錘である。化粧土が掛かっている。全長33mm、径10mm、重さ2.8g。

67号土坑［ＳＫ67］（図版3・6～8、第60図）

Ｃ4区に位置し、66号土坑の南側にある。規模は長軸163cm、短軸149cm、深さ42cmを測る。平面プランは不整形で、床面は平坦である。壁面は直に立ち上がる。土師器、須恵器、瓦器などが出土した。

出土遺物（第61図1～6）

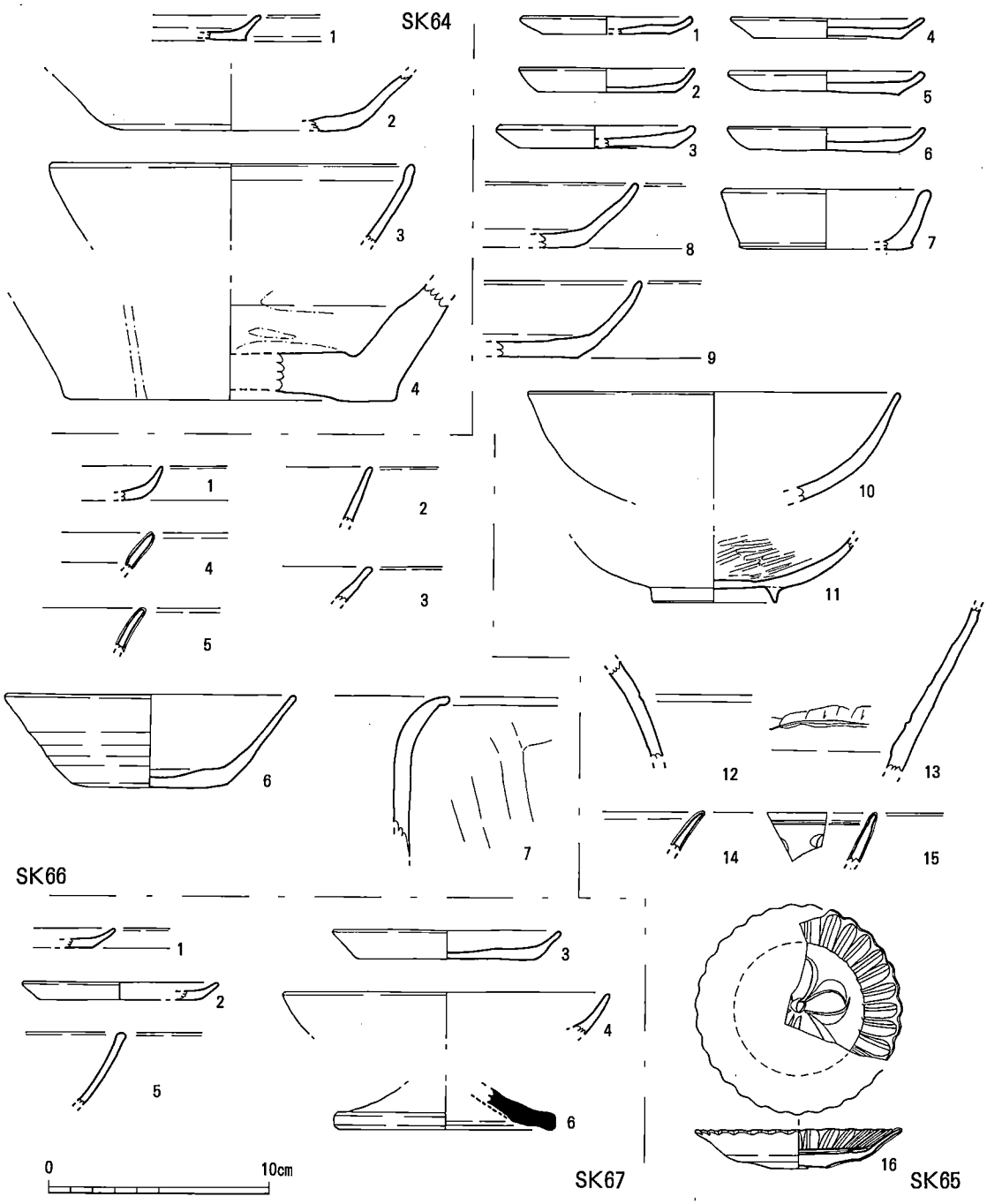
土師器（1～4） 1～3は小皿である。底部外面は糸切り痕跡が残る。3は板状圧痕が見られる。口径は8.8～10.4cm、器高0.8～1.3cmを測る。4は坏である。底部は欠損する。口径は14.8cm。

須恵器（6） 高坏の脚部と思われる。

瓦器（5） 椀の口縁部片である。

68号土坑［ＳＫ68］（図版3・6～9、第48図）

Ｂ3区に位置し、69号土坑の東側にある。規模は長軸253cm、短軸120cm、深さ47cmを測る。平面プランは不整形をなし、床面はほぼ平坦で、東側の壁際にはテラスを有する。壁面は直に



第61図　才田 64・65・66・67号土坑出土遺物実測図（1/3）

立ち上がる。床直上からは土師器が出土し、埋土からは土師器、須恵質土器、瓦器、陶器、磁器、土錘2、鉄器5、この遺跡で最大のスラッグ2が出土した。

出土遺物（図版29・30・43・46、第62・63図1～38、140図39・40、146図41～45）

土師器（1～30） 1～20は小皿である。いずれも底部外面は糸切り痕跡が残る。1・2・4・6・8・9～13・17・19には板状圧痕が見られる。口径は7.6～9.9cm、器高0.8～1.4cmを測る。21～30は坏である。いずれも底部外面は糸切り痕跡が残る。22～26・28・29には板状圧痕が見られる。口縁部は直線的に延びるものと屈曲して直立するものと外反して内湾気味に立ち上がるものが見られる。口径は13.8～16cm、器高2.3～3.2cmを測る。

瓦器（31） 底部は欠損する。口径は15.8cmを測る。外面はミガキ、内面はナデを施す。

須恵質土器（32） 東播系の片口のこね鉢である。復元口径は25.8cm、器高9.7cmを測る。

陶器（33・34） 33は壺である。口縁部は「く」字形に短く外反し、胴部上半には、1条の沈線が巡る。復元口径は12.2cm、器高27.9cmを測り、底部は僅かに上げ底気味である。34は壺の胴部片である。胎土は細砂を多く含み、灰色と赤褐色粒を含む。釉調は黄茶褐色を呈する。

磁器（35～38） 35・37・38は白磁碗である。35は玉縁口縁を有し、Ⅳ類に分類される。37は口縁端部が平坦で、Ⅴ-4・a類かⅧ-1類に分類できる。38は内面見込み部分に櫛目文を施す。高台は直に高く立ち上がる。Ⅴ-4・b類に分類される。36は同安窯系青磁碗である。Ⅲ-1類か2類に分類される。

土製品（39・40） ともに管状土錘で、39の完形品は全長52mm、径11mm、重さ4.8g。40は径10mm。

鉄器（41～45） 41～44は釘であろう。41は曲がっているが全長68mm。45はヤリガンナかとも考えたが身が太いので楔のようなものかもしれない。

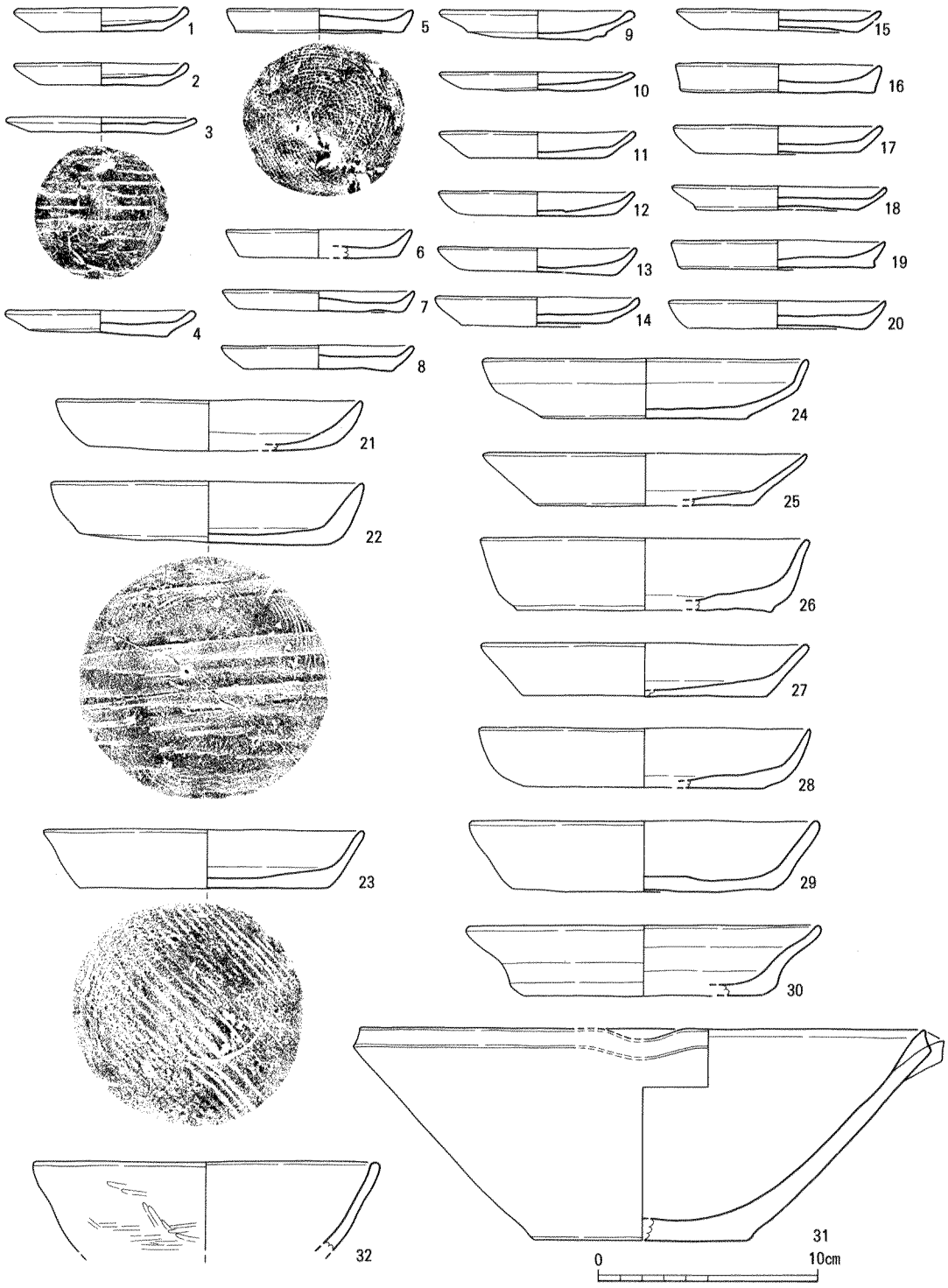
69号土坑［ＳＫ69］（図版3・6～8、第60図）

Ｂ4区に位置し、68号土坑の西側にある。規模は長軸214cm、短軸148cm、深さ65cmを測る。平面プランは不整形で、中央部にはピットがある。壁面は直に立ち上がる。土師器、瓦器、陶器、磁器、土錘1が出土した。

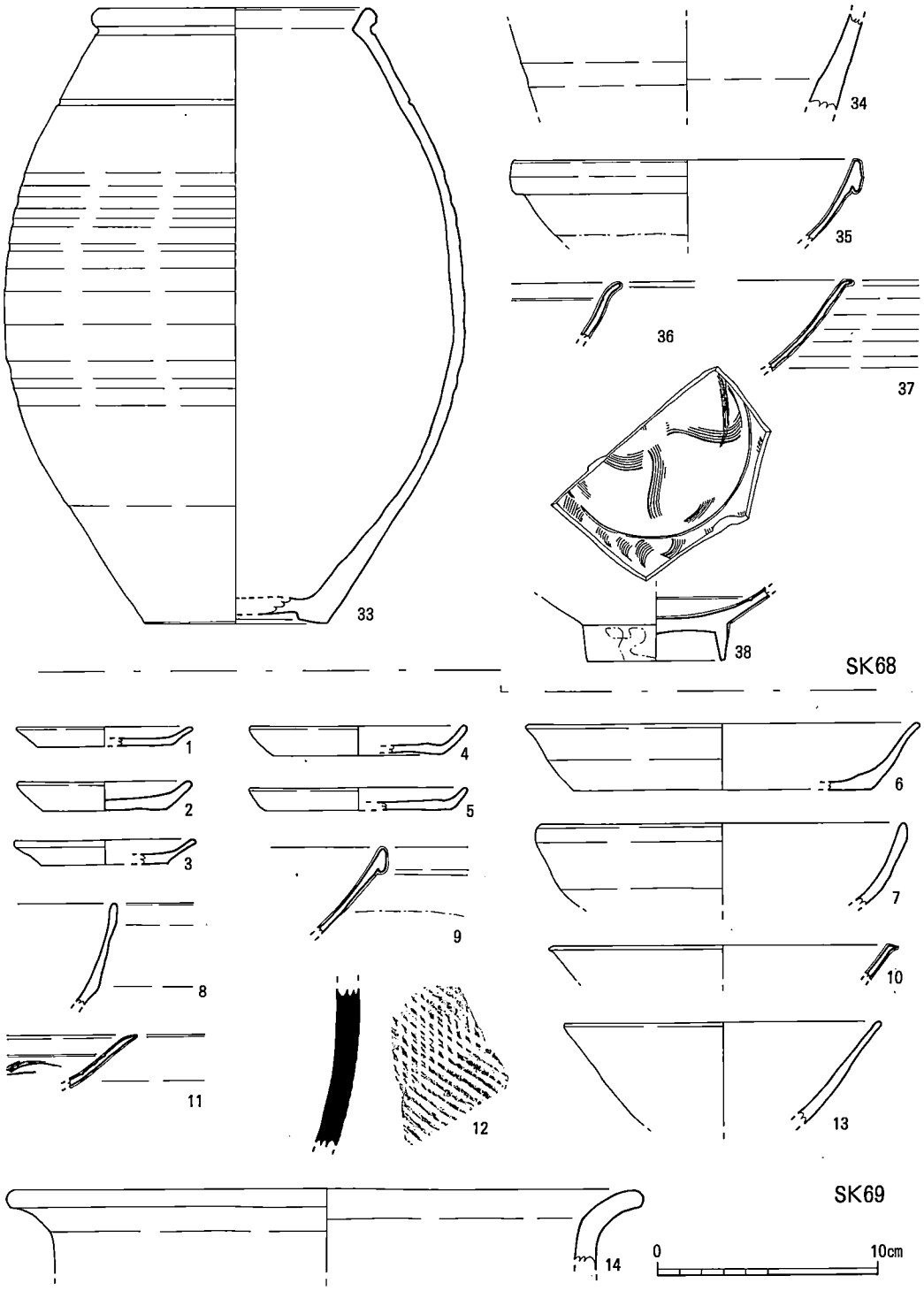
出土遺物（図版43、第63図1～14、140図15）

土師器（1～6・13・14） 1～5は小皿である。底部外面は糸切り痕跡が残る。1～4には板状圧痕が見られる。口径は7.8～9.9cm、器高0.8～1.4cmを測るが、7.9cm前後と9.8cm前後に分れる。5は坏である。底部外面は糸切り痕跡が残る。口径は17.6cm、器高3cmを測る。13は口縁部が直線的に延びる椀である。復元口径は14.2cmを測る。これは混入品であろう。14は大きく外反する口縁部をもつ甕である。復元口径は28.2cmを測る。

瓦器（7・8） 椀である。7は底部を欠損し、口径16.6cmを測る。外面は回転ナデ、内面はナデを施す。



第62図　才田 68号土坑出土遺物実測図（1/3）



第63図　才田 68・69号土坑出土遺物実測図（1/3）

陶器（12） 国産陶器か須恵器のどちらか分からない。外面は平行タタキを組合せて菱形状に見せている。内面はナデを施す。
磁器（9～11） 白磁である。9は玉縁口縁を呈する碗である。Ⅳ-1・b類に分類される。10はⅤ類かⅧ類に分類される。11は器高が低く、Ⅵ-1・b類に分類できる。
土製品（15） 管状というより紡錘形に近い形状の土錘である。現存長44mm。

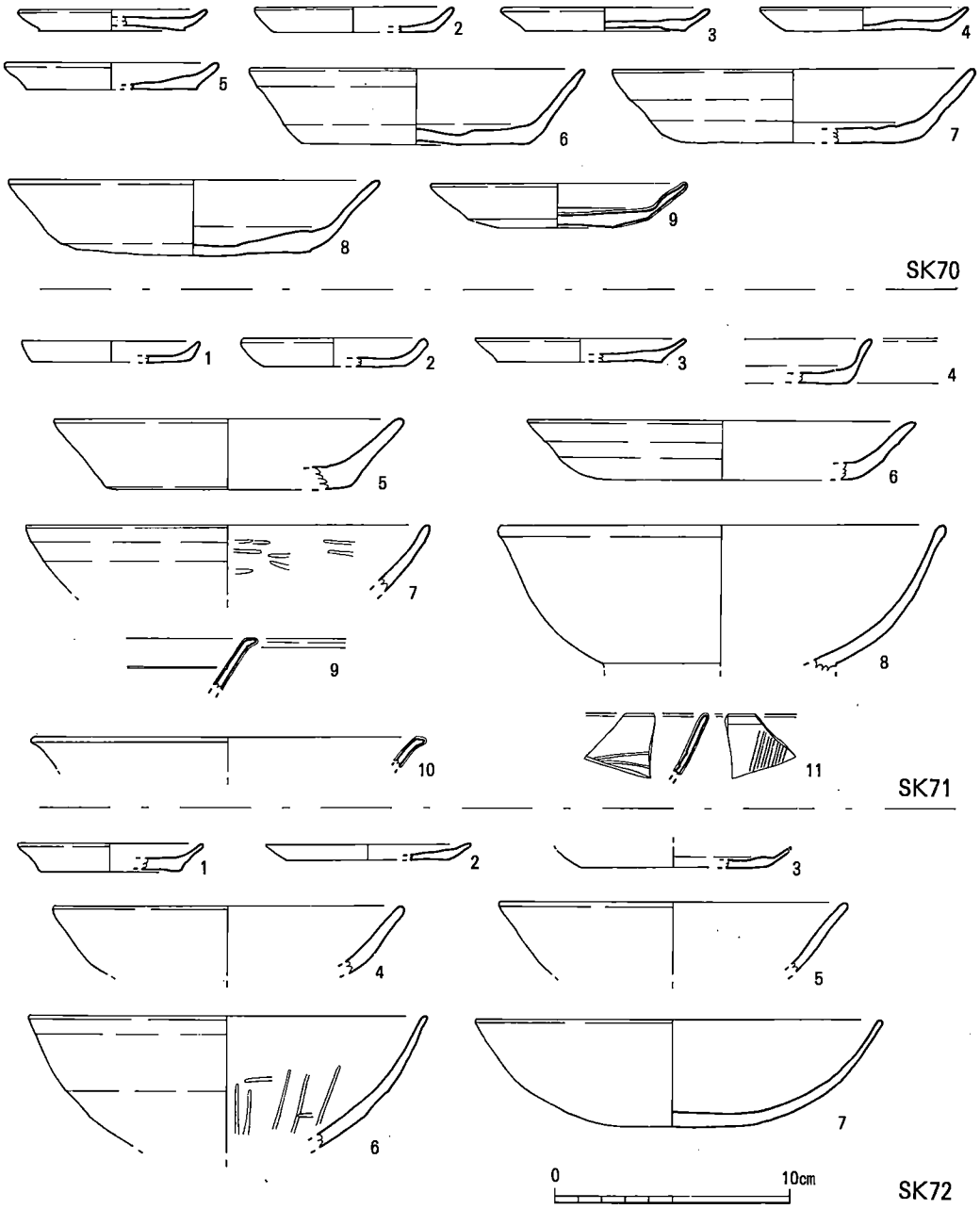
70号土坑［ＳＫ70］（図版3・6～8・12、第60図）
Ｂ3区のＳＢ15・16の内部に位置する。規模は長軸174cm、短軸119cm、深さ15cmを測る。平面プランは楕円形で、壁面は緩やかに立ち上がる。土師器、磁器などが出土した。
出土遺物（図版30、第64図1～9）
土師器（1～8） 1～5は小皿である。底部外面は糸切り痕跡が残る。5には板状圧痕が見られる。口径は8～9cm、器高0.9～1.1cmを測る。6～8は坏である。底部外面は糸切り痕跡が残る。6・8には板状圧痕が見られる。口径は14.1～15.8cm、器高3cmを測る。
磁器（9） 同安窯系青磁皿である。Ⅰ-1・a類に分類できる。

71号土坑［ＳＫ71］（図版3・7・15、第60図）
Ｚ4区に位置し、10号溝に隣接する。規模は長軸211cm、短軸58cm、深さ53cmを測る。平面プランは不整形で、南側は二段掘りを呈する。床面は北側から南側へ傾斜する。壁面は直に立ち上がる。土師器、瓦器、磁器などが出土した。
出土遺物（第64図1～11）
土師器（1～6） 1～3は小皿である。底部外面は糸切り痕跡が残る。口径は6.8～8.9cm、器高0.9～1.1cmを測る。5・6は坏である。底部外面は糸切り痕跡が残る。口径は14.6～16.6cmを測る。
瓦器（7・8） 口径は17.3cmと18.9cmを測る椀である。7の胴部内面にはミガキが施されている。
磁器（9～11） 9・10は白磁碗である。Ⅴ類かⅧ類に分類される。11は同安窯系青磁碗である。Ⅰ類に分類される。

72号土坑［ＳＫ72］（図版3・6～8、第60図）
Ａ5区に位置し、９号溝と切り合う。規模は長軸142cm、短軸135cm、深さ37cmを測る。平面プランは隅円方形で、壁面は直に立ち上がる。土師器、瓦器などが出土した。
出土遺物（第64図1～7）
土師器（1～5・7） 1～3は小皿である。底部外面は糸切り痕跡が残る。口径は6.1cmと8.8cm、器高0.7～1.2cmを測る。4・5は坏である。底部は欠損する糸切り痕跡が残る。口径14.6～14.9cmを測る。7は口径17.4cm、器高4.5cmを測る。底部外面は手持ちヘラケズリを施す。混入品の

可能性が高い。

瓦器（6） 口径は16.9cmを測る椀である。胴部内面にはミガキが施され、外面は回転ナデを施す。



第64図　才田 70・71・72号土坑出土遺物実測図（1/3）

73号土坑［ＳＫ73］（図版3・6～8・12、第60図）

Ｄ3区に位置し、61号土坑の東側、ＳＤ11の東端付近にある。規模は長軸157cm、短軸63cm、深さ58cmを測る。平面プランは隅円長方形に近く、壁面は緩やかに立ち上がる。土師器、瓦器、磁器などが出土した。

出土遺物（第66図1～10）

土師器（1～4）　1・2は小皿である。底部外面は糸切り痕跡が残る。口径は8.8～9.1cm、器高0.95～1.1cmを測る。3・4は坏である。底部外面は糸切り痕跡が残り、4には板状圧痕が見られる。口径は16～16.6cmを測る。

瓦器（5・6）　椀である。6は口径が17.7cmを測り、胴部内面にはミガキが施されている。

磁器（8～10）　8・9は白磁碗である。8は玉縁口縁を有し、Ⅳ類に分類できる。9はⅤ類かⅧ類に分類される。10は同安窯系青磁皿である。Ⅰ－1類に分類される。

74号土坑［ＳＫ74］（図版3～5・7・22、第65図）

Ｆ3区のＳＢ６の内部に位置する。規模は長軸306cm、短軸133cm、深さ76cmを測る。平面プランは隅円長方形で、床面は平坦である。壁面は直に立ち上がる。埋土は1～3層が自然堆積であるが、4層は一括で落ち込んだ状況である。土壙墓の可能性がある。土師器、瓦器、磁器などが出土した。

出土遺物（第66図1～10）

土師器（1～5）　1～4は小皿である。底部外面は糸切り痕跡が残る。口径は7.2～9.2cm、器高0.8～1.1cmを測る。3は底部外面に板状圧痕が見られる。5は坏である。底面は欠損する。口径13.7cmを測る。

瓦器（6・7）　同一個体の可能性が高い椀である。口径が13.9cmを測る。6の胴部内面にはミガキが施されている。

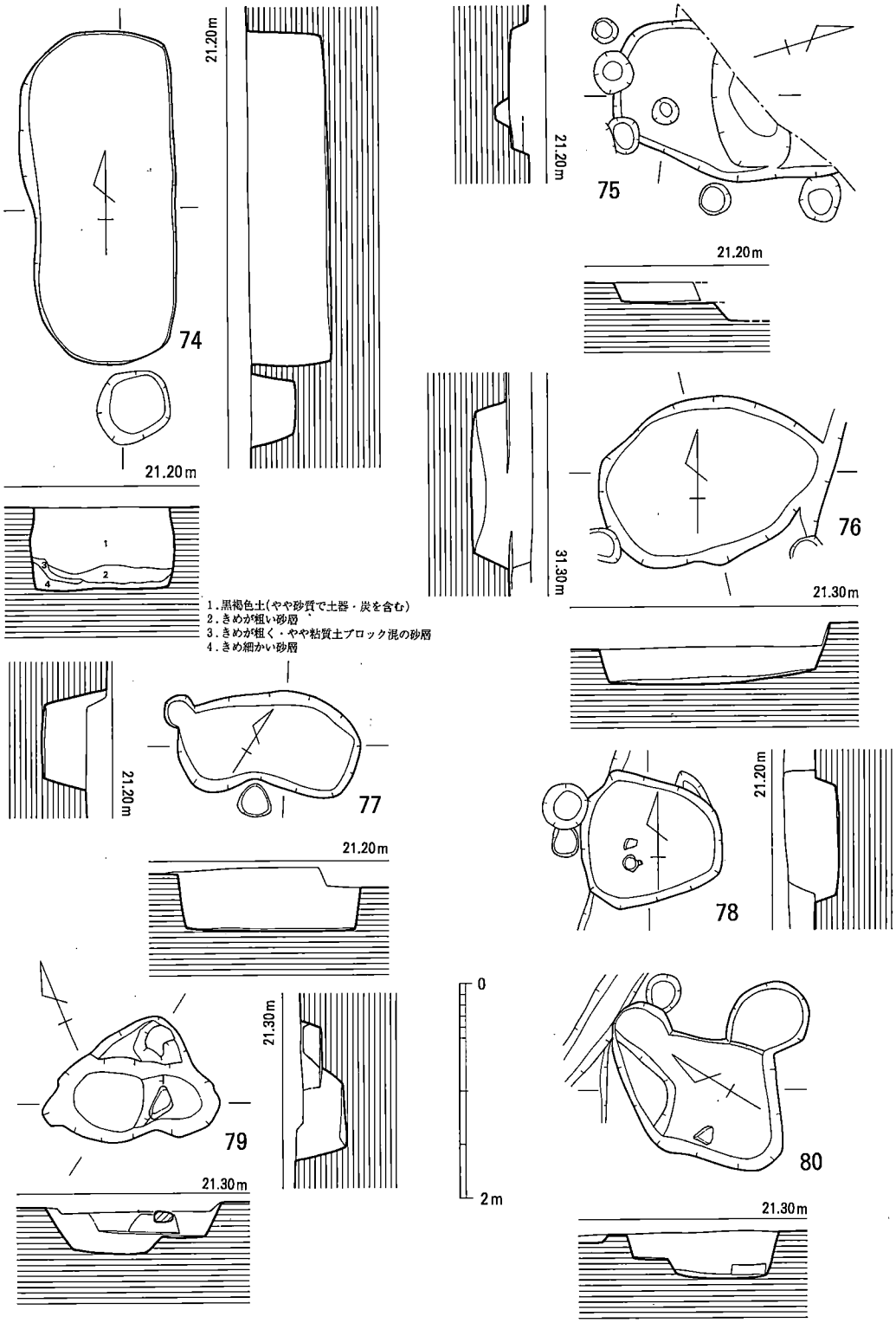
磁器（9・10）　白磁碗である。9は玉縁口縁を有し、Ⅳ類に分類できる。9はⅤ類かⅧ類に分類される。10はⅤ類かⅧ類に分類される。

75号土坑［ＳＫ75］（図版3・7・15、第65図）

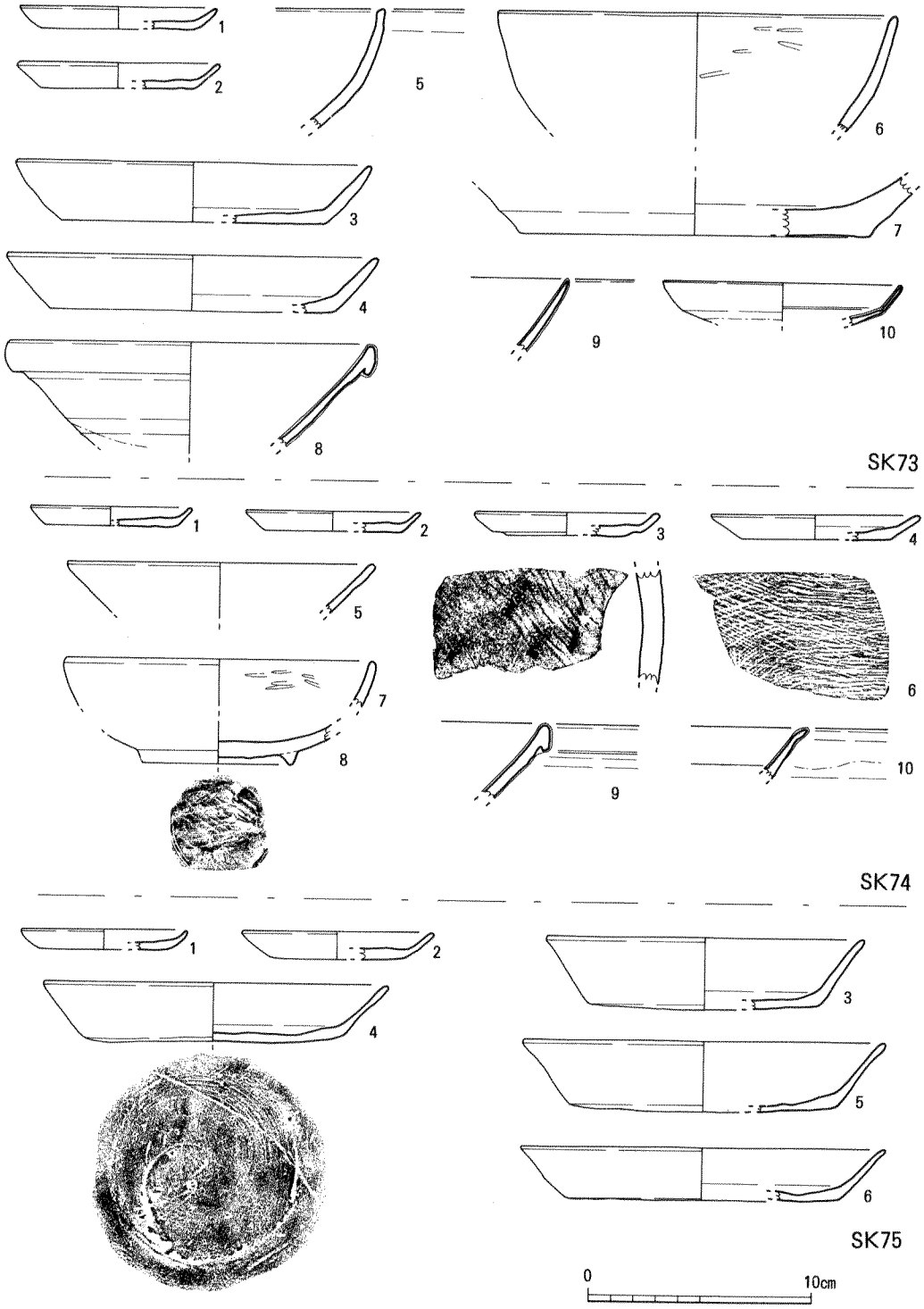
Ｚ5区に位置し、９号溝の北側に位置する。規模は長軸163cm、短軸122cm、深さ18cmを測る。平面プランは不整形で、壁面は緩やかに立ち上がる。土師器、軽石2などが出土した。

出土遺物（図版30、第66図1～6）

土師器（1～6）　1・2は小皿である。底部外面は糸切り痕跡が残る。口径は7.4～8·5cm、器高0.9～1.25cmを測る。3～6は坏である。底部外面は糸切り痕跡が残る。口径は14.3～16.4cm、器高2.4～3.3cmを測る。3～5は底部外面に板状圧痕が見られる。



第65図　才田 74～80号土坑実測図（1/60）



第66図　才田 73・74・75号土坑出土遺物実測図（1/3）

76号土坑［ＳＫ76］（図版3・6、第65図）

Ａ5区に位置し、77号土坑の東北側に位置する。規模は長軸208cm、短軸154cm、深さ45cmを測る。平面プランは不整形で、壁面は緩やかに立ち上がる。土師器、瓦器、磁器などが出土した。

出土遺物（図版30、第67図1～17）

土師器（1～8） 1～5は小皿である。底部外面は糸切り痕跡が残る。口径は8.2～8.8cm、器高0.7～1.2cmを測る。1・4は底部外面に板状圧痕が見られる。6～8は坏である。底部外面は糸切り痕跡が残る。口径13.8～15.7cm、器高2.7～3cmを測る。7・8は底部外面に板状圧痕が見られる。

瓦器（9・10） いずれも椀である。9は口径が14.4cmを測り、体部外面は回転ナデの後ミガキを施す。

磁器（11～17） 11～15は白磁碗である。11･12は玉縁口縁を有し、Ⅳ類に分類できる。13は底部片である。内面の見込み部分には沈線が巡る。Ⅳ-1・a類に分類できる。14・15はⅤ類かⅧ類に分類できる。16は青白磁の合子で坩形を呈する。底部は欠損する。露胎は淡明茶灰色、釉調は薄黄茶色を呈する。17は同安窯系青磁碗である。Ⅰ-1・a類に分類される。

77号土坑［ＳＫ77］（図版3・6・7、第65図）

Ａ5区に位置し、９号溝の北側にある。規模は長軸169cm、短軸82cm、深さ59cmを測る。平面プランは不整形で、壁面は直に立ち上がる。土師器、瓦質土器、磁器、石鍋1が出土した。

出土遺物（第67図1～10）

土師器（1～7） 1～5は小皿である。底部外面は糸切り痕がある。口径7.6～9.8cm、器高0.7～1.2cmを測る。1・4は底部外面に板状圧痕を見る。6・7は坏である。底部外面は糸切り痕跡が残る。底部外面には板状圧痕が見られる。口径は13.9cmと15.2cm、器高は2.5cmと3cmを測る。

瓦質土器（8） 口縁部の破片である。

磁器（9・10） 9は龍泉窯系青磁碗の底部片である。Ⅰ類に分類できる。10は同安窯系青磁碗でⅠ-1・b類に分類できる。

78号土坑［ＳＫ78］（図版3・6・7、第65図）

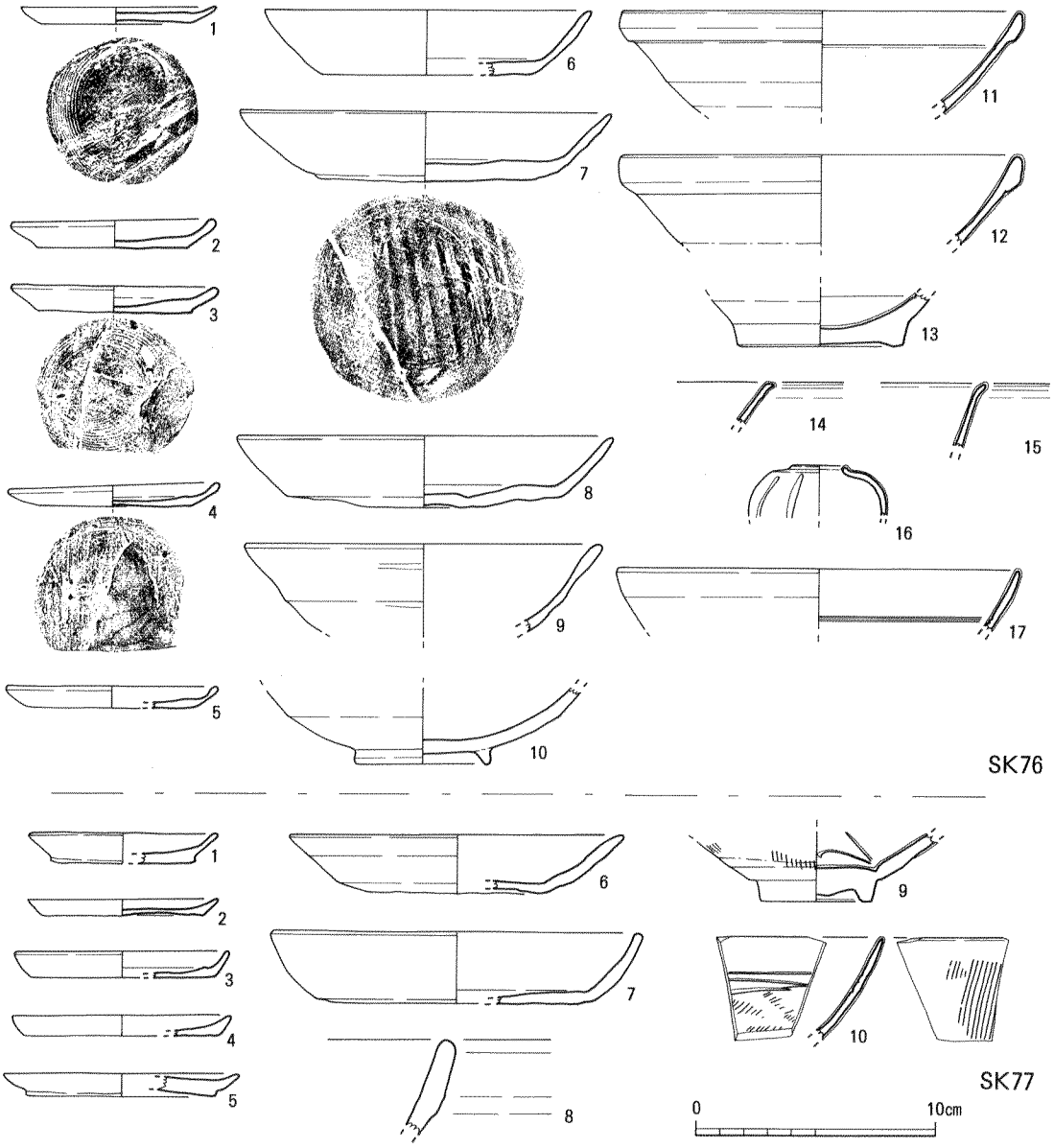
Ａ4区に位置し、９号溝の南側にある。規模は長軸131cm、短軸128cm、深さ49cmを測る。平面プランは不整円形で、壁面は直に立ち上がる。上層から土師器、磁器、鉄器2、スラッグ1などが出土した。

出土遺物（図版30・46、第68図1～9、146図10・11）

土師器（1～5） 1～3は小皿である。底部外面は糸切り痕跡が残る。口径は9.4～10.8cm、器高1～2.1cmを測る。4・5は坏である。底部外面は糸切り後板状圧痕を施す。口径は15cmと15.8cm、器高は2.5cmと3cmを測る。

磁器（6～9） 6は同安窯系青磁碗でⅠ-1・a類、7～9は龍泉窯系青磁碗である。7はⅠ-1類、8はⅠ-2類、9はⅠ-3類に分類できる。

鉄器（10・11） 10は環状部があるので馬具の一部であろう。11は斧の刃部かとも思われるがはっきりしない。



第67図　才田 76・77号土坑出土遺物実測図（1/3）

79号土坑［ＳＫ79］（図版3・6・7、第65図）

Ｂ5区に位置する。規模は長軸163cm、短軸103cm、深さ38cmを測る。平面プランは不整形で、壁面は緩やかに立ち上がる。北側からは粘土が検出された。土師器、瓦器、磁器が出土した。

出土遺物（第68図1～7）

土師器（1・2） 小皿である。底部外面は糸切り痕跡が残る。2は口径9.1cm、器高1cmを測る。

瓦器（3～6） 椀である。5は口径が15.8cm、6は口径が16.6cmを測る。外面は回転ナデを施す。

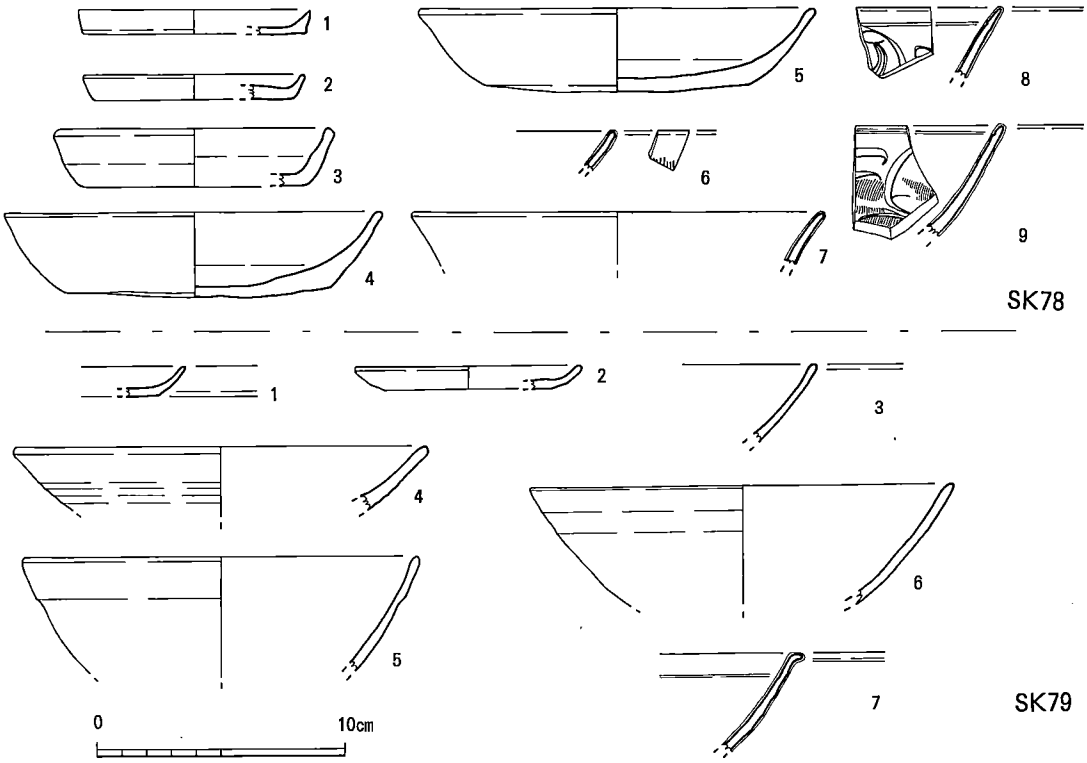
磁器（7） 白磁碗である。Ｖ類かⅧ類に分類できる。

80号土坑［ＳＫ80］（図版3・6・7、第65図）

Ｂ4区に位置し、72号土坑の南東側で、ＳＢ9・10と重複する。規模は長軸139cm、短軸116cm、深さ42cmを測る。平面プランは不整形で、壁面は直に立ち上がる。土師器、瓦器、須恵質土器、磁器、鉄器2が出土した。

出土遺物（図版30・31・46、第69図1～12、146図13）

土師器（1～8） 1～4は小皿である。1・2・4は底部外面に糸切り痕後板状圧痕が残る。口径は



第68図　才田 78・79号土坑出土遺物実測図（1/3）

8.7～9cm、器高0.8～1cmを測る。5～8は坏である。5・6・7は底部外面は糸切り痕後板状圧痕が残る。口径15cm～17.5cm、器高2.3～3.1cmを測る。

瓦器（10） 口縁部を欠損する椀である。外面はナデ調整を施す。

須恵質土器（11） 東播系のこね鉢である。口径は31.8cmを測り、底部は欠損する。

磁器（12） 白磁碗である。Ⅴ類に分類できる。

鉄器（13） 釘であろうか。

81号土坑［ＳＫ81］（図版3～5・7・22、第70図）

Ｅ3区に位置し、83号土坑の北東側に位置する。規模は長軸104cm、短軸78cm、深さ43cmを測る。平面プランは不整形で、床面は略平坦である。壁面は直に立ち上がる。土師器、瓦器、磁器などが出土した。

出土遺物（第69図1～9）

土師器（1～4） 1・2は小皿である。１1底部外面に糸切り痕後板状圧痕が残る。口径は7.6cmと9.1cm、器高0.75～9.1cmを測る。3・4は坏である。底部外面の調整は不明である。口径は14.5cmと16.4cm、器高2.9cmと3.2cmを測る。

瓦器（5～7） 5・6は底部が欠損する。口径は15.4cmと17.5cmを測る。7は内面がミガキを施し、外面上半はナデ、下半には板状圧痕が残る。

磁器（8～9） 8は白磁碗の玉縁口縁を有する。Ⅳ類に分類できる。9は白磁碗で、Ⅴ類かⅧ類に分類できる。

82号土坑［ＳＫ82］（図版3・4・6・7・14、第70図）

Ｆ2区に位置する。規模は長軸246cm、短軸198cm、深さ73cmを測る。平面プランは楕円形で、壁面は緩やかに立ち上がる。磁器などが出土した。

出土遺物（第69図1・2）

磁器（1・2） 1は同安窯系青磁碗である。2は染付である。国産品か元染か不明である。

83号土坑［ＳＫ83］（図版3・4・6・7・12、第70図）

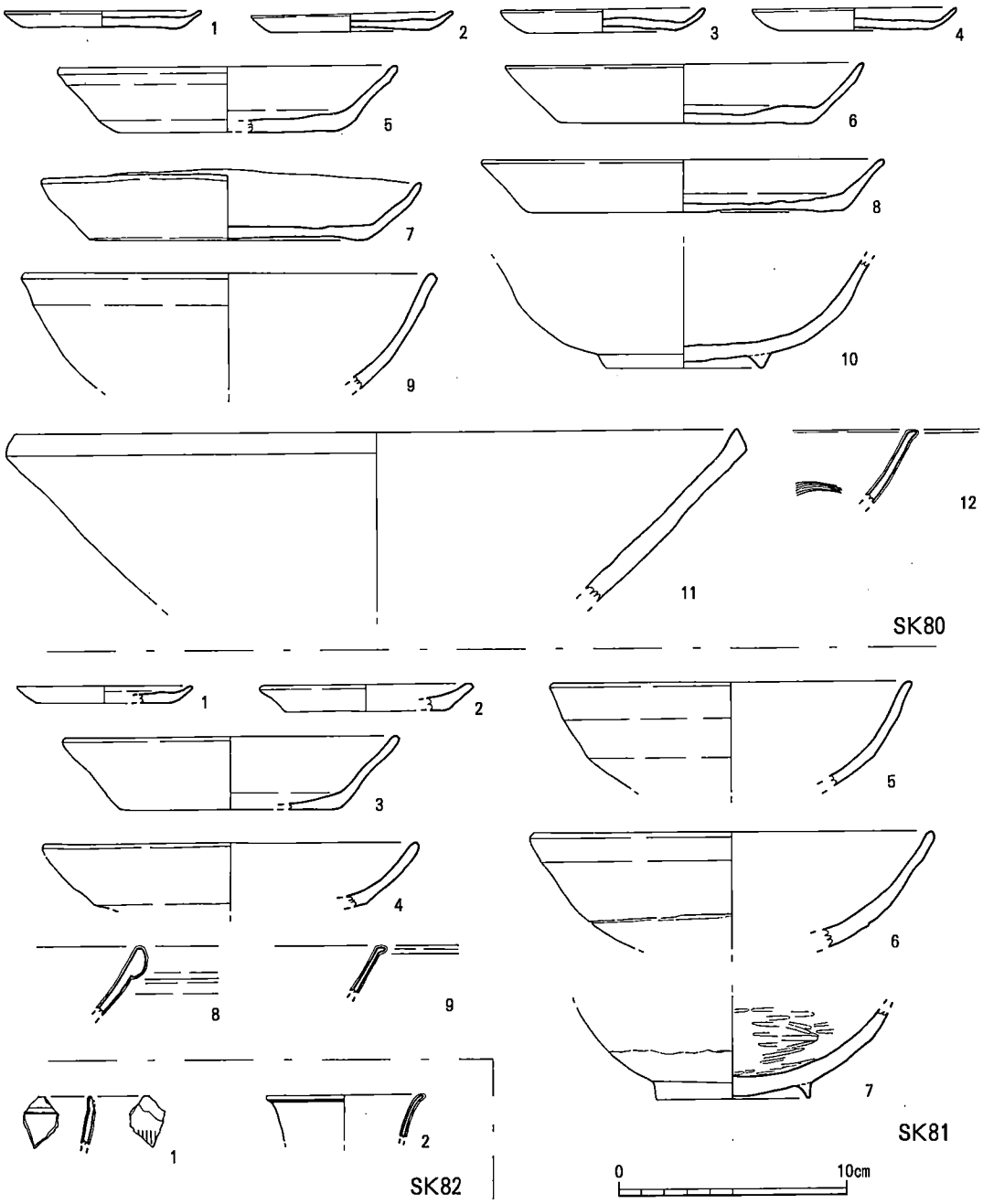
Ｄ3区にあり、84号土坑の北側に位置する。規模は長軸271cm、短軸55cm、深さ42cmを測る。平面プランは不整形で、壁面は直に立ち上がる。土師器、瓦器、磁器、鉄器1が出土した。

出土遺物（図版31・46、第71図1～15、146図16）

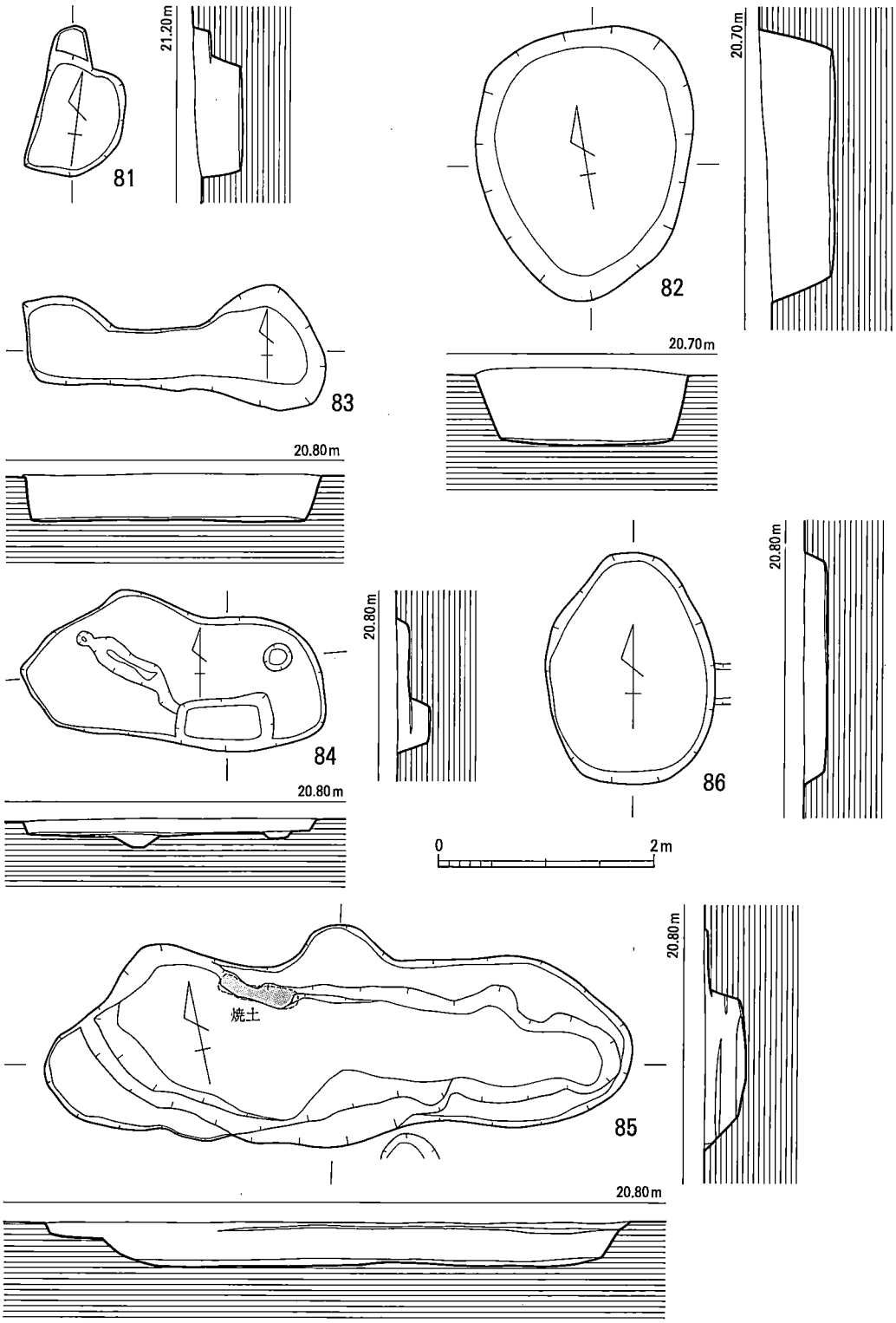
土師器（1～8） 1～4は小皿である。1・4は底部外面が糸切り痕後板状圧痕、その他は糸切り痕が残る。口径は8.4～9.4cm、器高0.85～1.7cmを測る。5～8は坏である。5は底部外面が糸切り痕である。口径は14.4cmと15.8cm、器高2.25～2.95cmを測る。

瓦器（9・10） いずれも口縁部片である。外面はナデと回転ナデを施す。

磁器（11～14） 11～14は白磁碗である。11は玉縁口縁を有し、Ⅳ類に分類できる。12は小さ



第69図　才田 80・81・82号土坑出土遺物実測図（1/3）



第70図　才田 81～86号土坑実測図（1/60）

い玉縁口縁を有し、Ⅱ類に分類できる。13は口縁部が短く外反する。V-4類かⅥ-1・b類に分類できる。14はV-4・a類に分類できる。

鉄器（16） 釘であろう。現存長45mm。

84号土坑［SK84］（図版3・4・6・7・12、第70図）

D・Eの3区に位置し、83号土坑の南側にある。規模は長軸278cm、短軸121cm、深さ10cmを測る。平面プランは不整形で、壁面は緩やかに立ち上がる。土師器、陶器、磁器、石鍋1、そして「たかし小僧」が出土した。

出土遺物（図版31、第71図1～17、136図19）

土師器（1～16） 1～14は小皿である。1～6・8・9・12・13は底部外面が糸切り痕後板状圧痕、その他は糸切り痕が残る。口径は7.6～9.2cm、器高0.7～1.3cmを測る。15は坏である。16は甑の底部であろう。

陶器（17） 外反する口縁部である。復元口径は7.6cmを測る。胎土は暗黄茶色、釉調は黒茶褐色を呈する。

磁器（18） 白磁碗である。復元口径は16.2cm、V-4・b類に分類できる。

石鍋（19） 滑石製で口縁は少し内傾するようである。復原口径32.4cm。

85号土坑［SK85］（図版3・4・6・7・12、第70図）

D・Eの3区にあり、84号土坑の南側に位置する。規模は長軸543cm、短軸153cm、深さ36cmを測る。平面プランは不整形で、壁面は緩やかに立ち上がる。北側壁際には焼土が検出された。土師器、須恵器、瓦器、須恵質土器、瓦質土器、陶器、磁器、土錘1、瓦1、石鍋1、軽石2、スラッグ1などが出土した。

出土遺物（図版43、第72図1～20、139図21、140図22）

土師器（1～7） 1～4は小皿である。底部外面は糸切り痕跡が残る。口径は7.6～9.2cm、器高0.85～1.1cmを測る。5～7は坏である。口径は11.9～16cm、器高2.7～3.2cmを測る。5・7は底部外面に糸切り痕後板状圧痕が残る。

瓦器（10） 椀である。底部は欠損する。口径は20.4cmを測る。

須恵質土器（8・9） 東播系のこね鉢の口縁部片である。

陶器（11） 四耳壺の胴部片である。

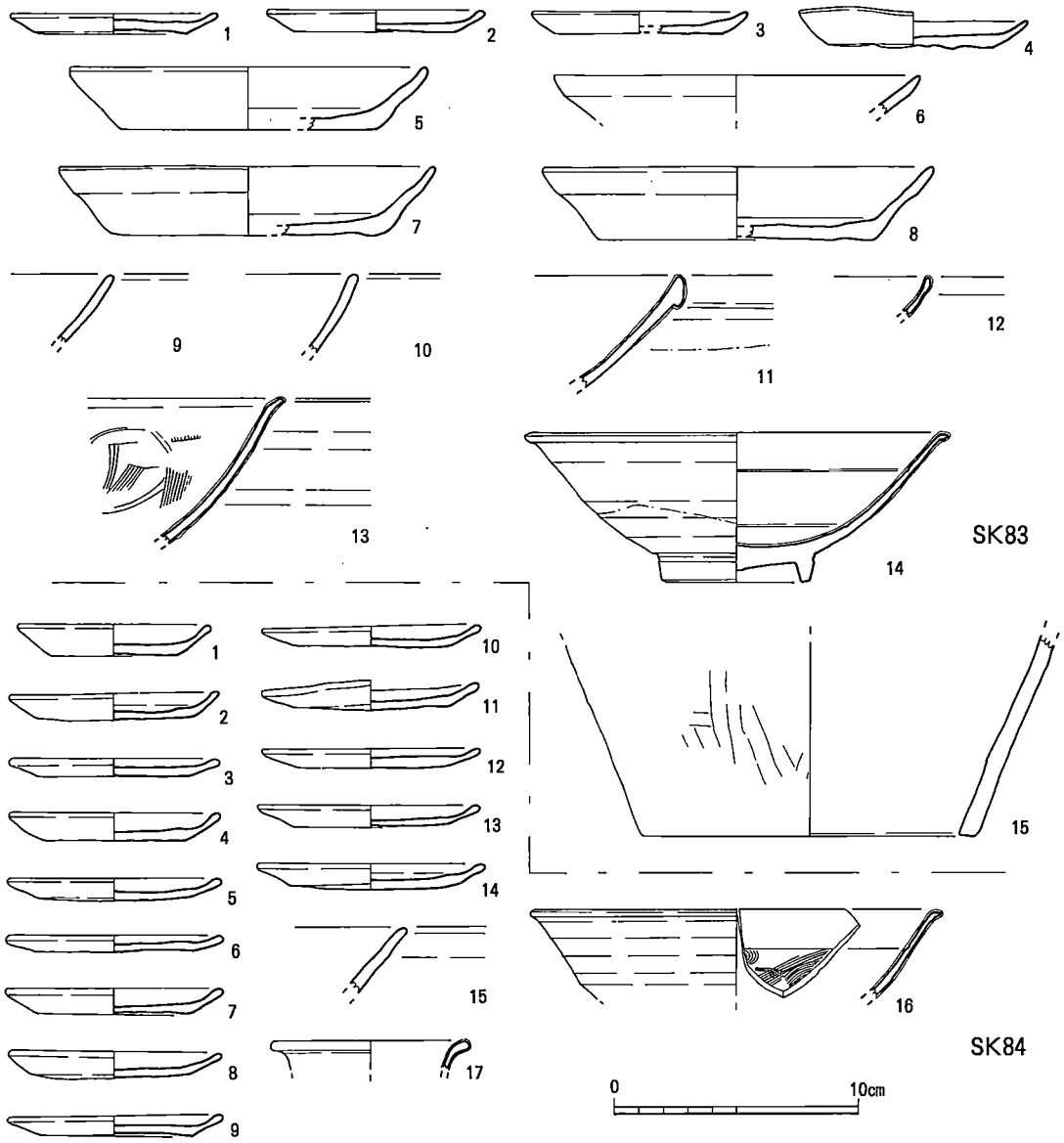
磁器（12～17） 12～16・18は碗である。12～14は白磁で、12はV類、13はV-4・b類、14はV類かⅧ類に分類できる。15・16は龍泉窯系青磁である。15はⅠ-5・a類，16はⅠ-6・a類に分類できる。17は同安窯系青磁壷でⅠ-1・b類である。

須恵器（19） 坏身の口縁部片である。

瓦質土器（20） 火舎の口縁部片である。混入品であろう。

瓦（21） 平瓦片で、内面は一部が少し黒化する。厚さは18㎜。

土製品（22） 管状土錘で、器表にしぼり痕が見られる。全長47㎜。



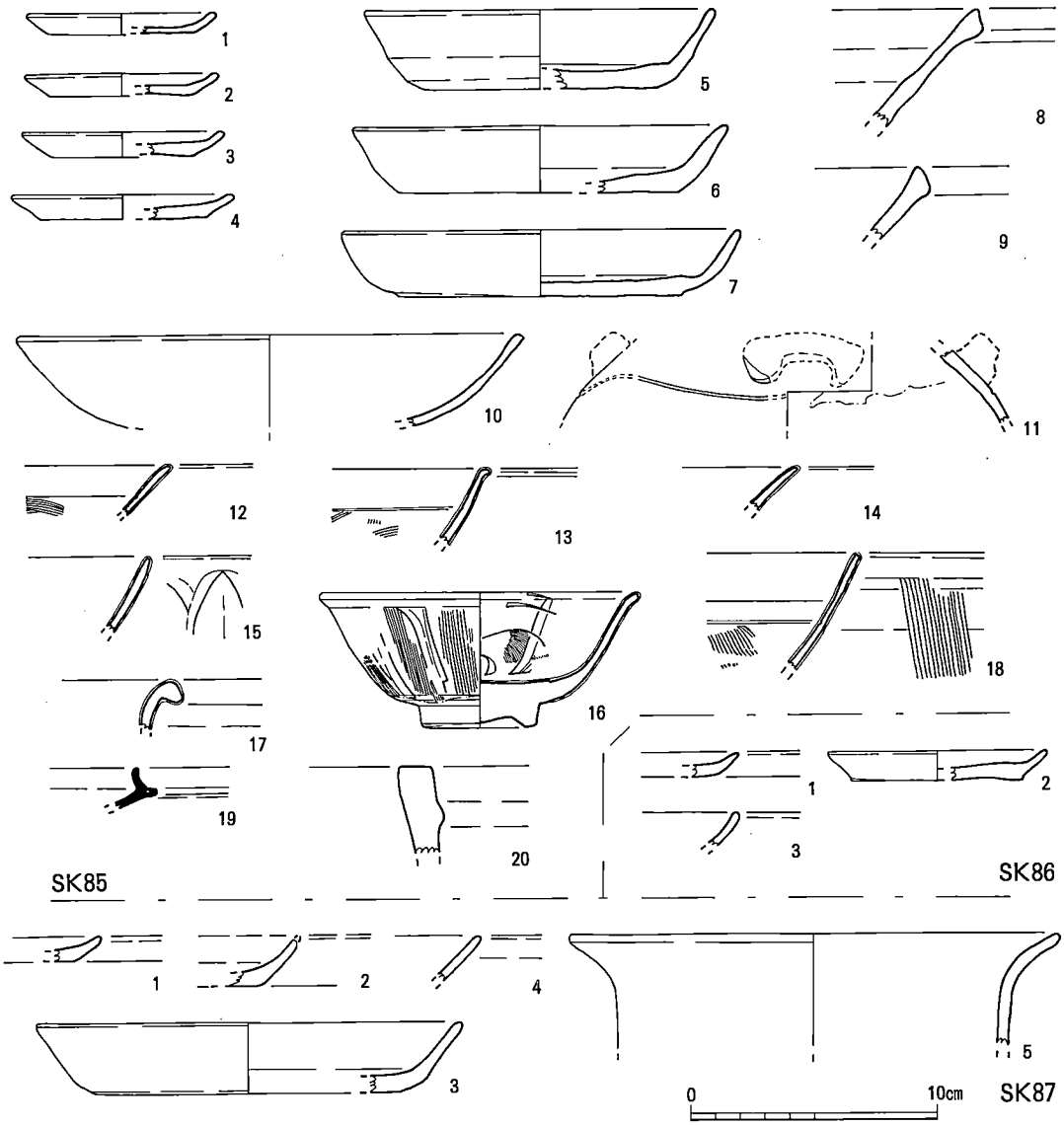
第71図　才田 83・84号土坑出土遺物実測図（1/3）

86号土坑［ＳＫ86］（図版3・4・7・12、第70図）

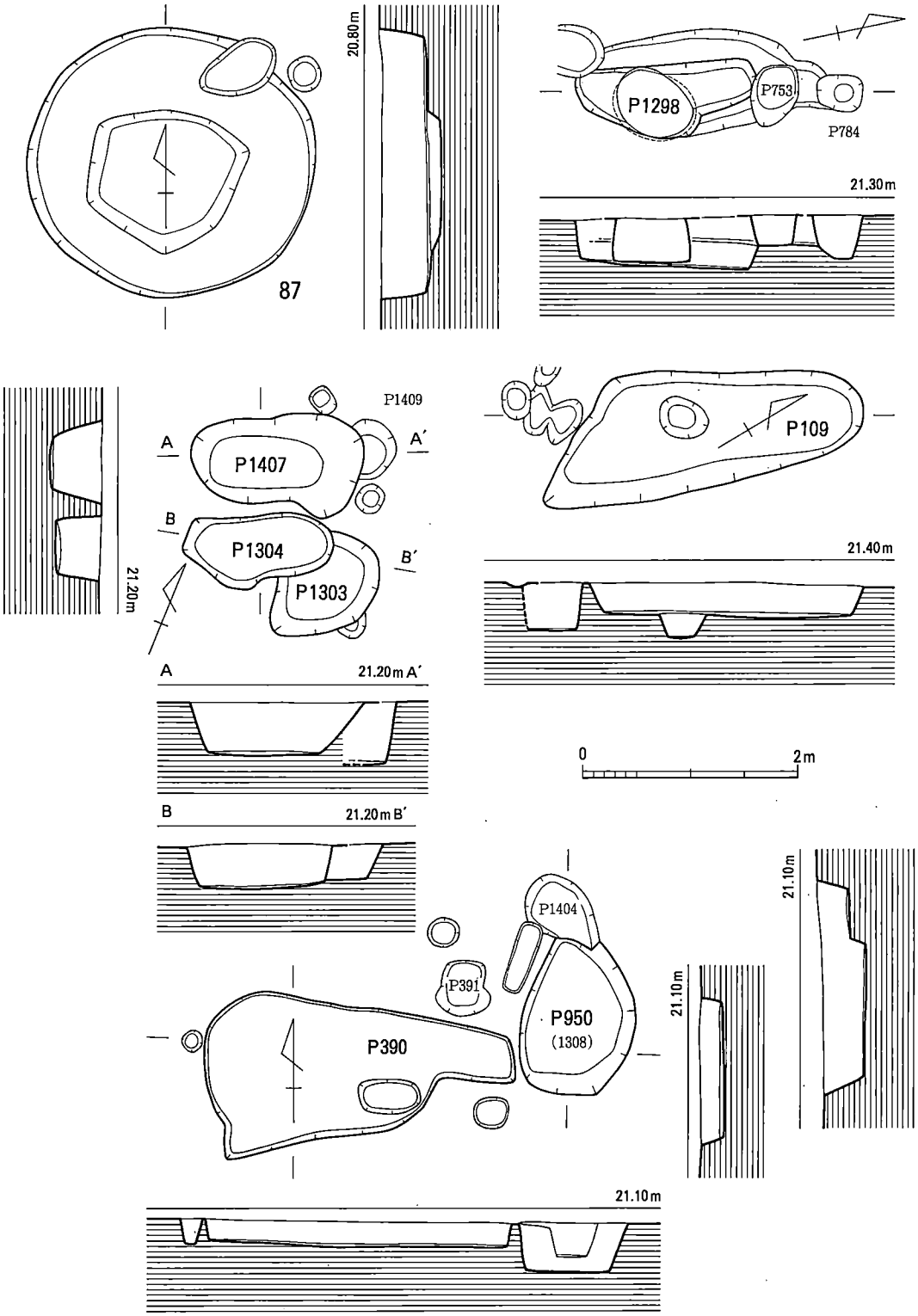
Ｄ2・3区に位置し、ＳＥ1の東方にある。規模は長軸213cm、短軸156cm、深さ21cmを測る。平面プランは楕円形で、壁面は緩やかに立ち上がる。土師器などが出土した。

出土遺物（第72図1～3）

土師器（1～3） 小皿である。3は底部外面に糸切り痕跡が残る。口径は9cm、器高1.2cmを測る。



第72図　才田 85・86・87号土坑出土遺物実測図（1/3）



第73図　才田 87号土坑、P109・390・950・1298・1303等実測図（1/60）

87号土坑［ＳＫ87］（図版3・4・6・7・22、第73図）

Ｅ3区に位置し、84号土坑の東側にある。規模は長軸268cm、短軸250cm、深さ41cmを測る。平面プランは円形で、中央部には不整形のピットがあり、深さ12cmを測る。壁面は直に立ち上がる。土師器、石鍋1などが出土した。

出土遺物（第72図1～5）

土師器（1～3・5）　1は小皿である。2・3は坏である。3は口径17.3cm、器高2.8cmを測る。5は甕である。復元口径は20cmを測り、外面はナデで、内面はヘラケズリを施す。竪穴住居に伴う可能性がある。

瓦器（4）　椀の口縁部片である。

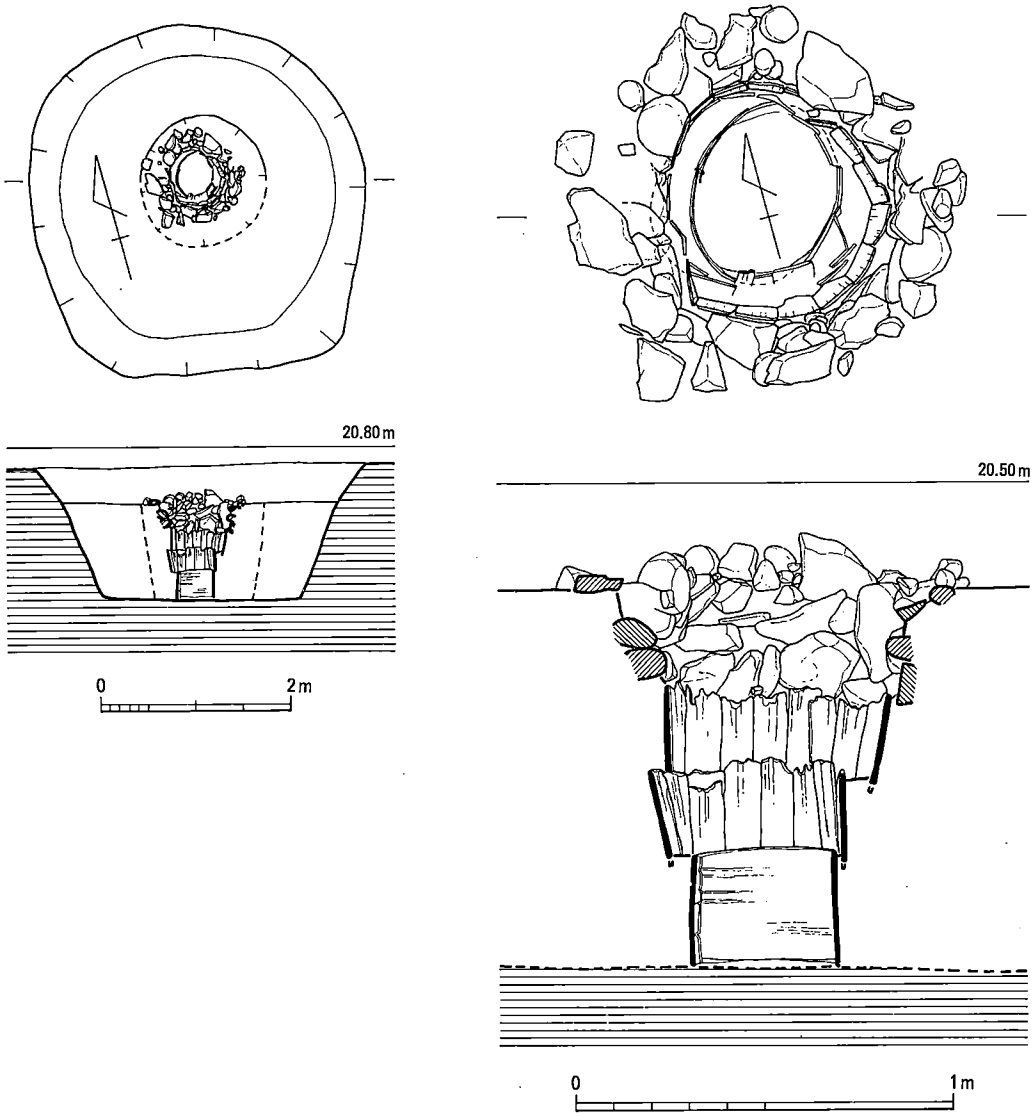
3　井戸
（図版3・6・8・12、第74図）

Ｃ2・3区に位置する。掘り形のプランは円形を呈する。規模は径360cm。石組は上面から40cmの箇所まで組まれ、それより下位には桶側が二段分を確認した。桶側の上端で径60cm、下端で径48cmである。底部には曲物を据え、砂層の湧水層にあたる。検出面から底までは140cmであった。土師器、須恵質土器、陶器、磁器、木製人形1、石鍋1、スラッグ6、ふいご羽口1、鉄器1、不明土製品1などが出土している。

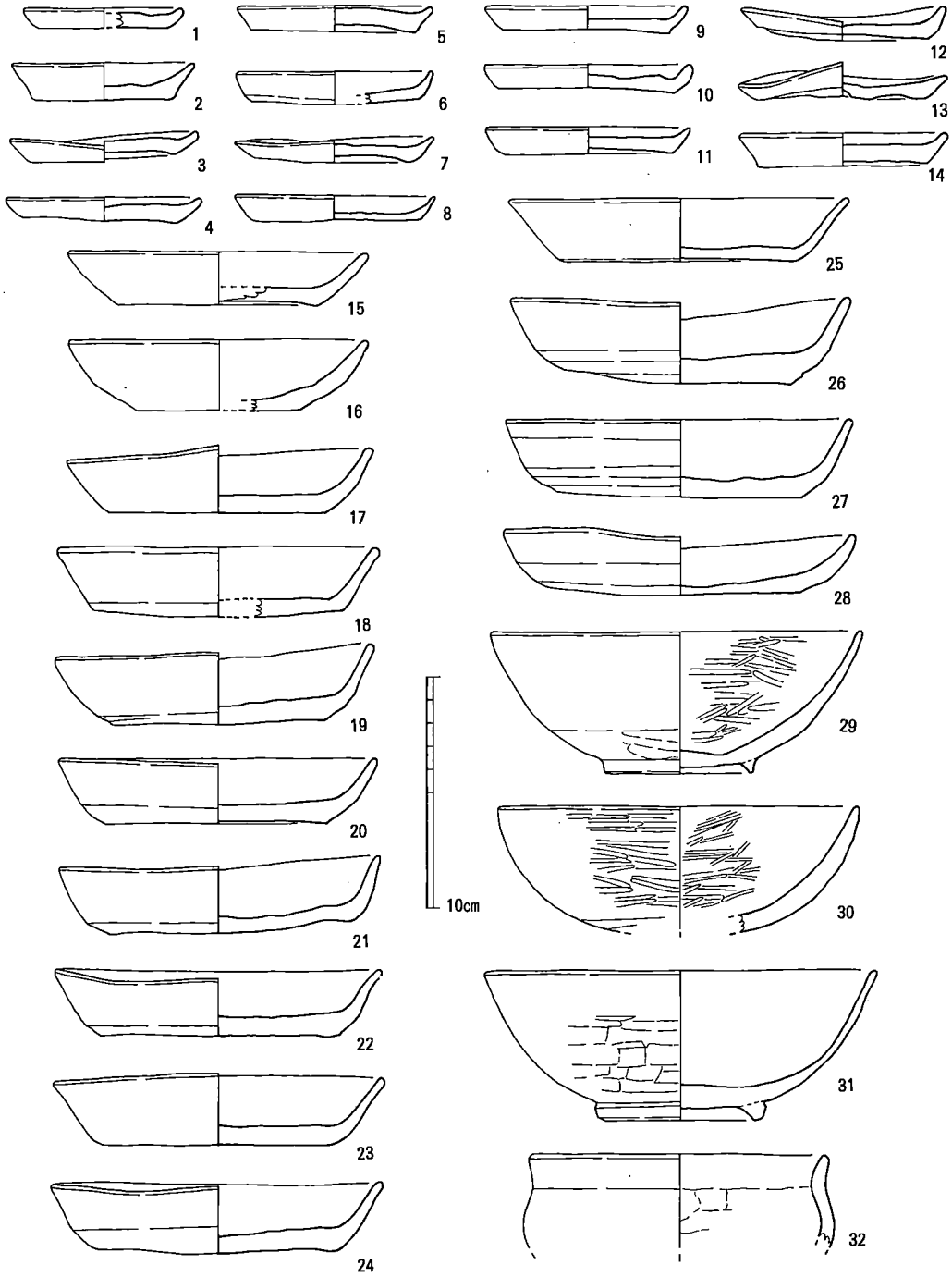
Photo. 8　仲良しこよしの実測

出土遺物（図版31・42・43・46、第75・76図1～48、139図49・50、142図51、146図52）

土師器（1～28・32～34）　1～14は小皿である。1・3・4・5・14は中層、2は掘り形上層、8・9・10は上層、6・7・13は下層、11は側板の中から出土している。中層出土の口径は6.8～8.9cm、器高は1～1.5cm、上層出土の口径は8.6～8.8cm、器高は1～1.1cm、下層出土の口径は8.4～8.8cm、器高は1～1.5cmを測る。いずれも底部外面は糸切り離し、4・6・7・8・10・12～14は板状圧痕が残る。15～28は坏である。15・24は上層、17・18・23・25は中層、16は掘り形上層、19・26・



第74図　才田　1号井戸実測図（1/20・1/80）



第75図　才田　1号井戸出土遺物実測図1（1/3）

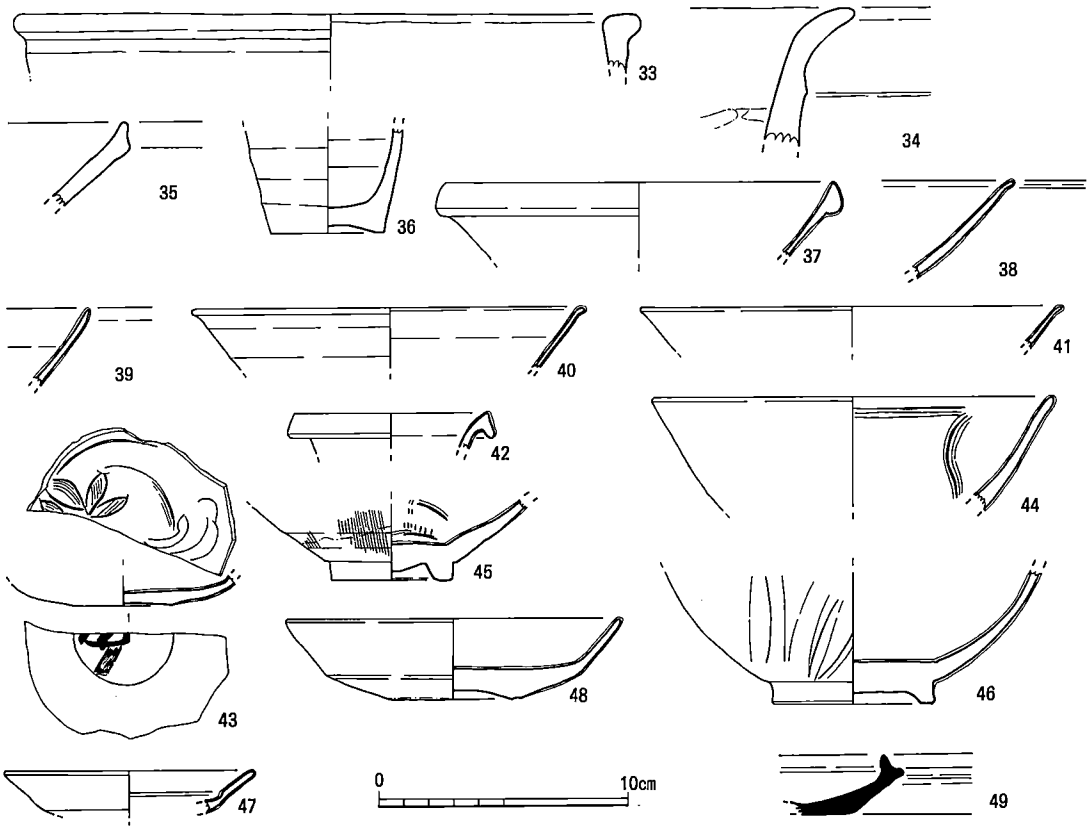
27は下層から出土している。上層出土の口径は12.8cmと14.3cm、器高は2.4cmと3.1cm、中層出土の口径は13.1～14.5cm、器高2.7～3.1cm、下層出土の口径は13.7～14.8cm、器高は3.2～3.4cmを測る。いずれも底部外面は糸切りを呈する。16・19・20・22・23・28は板状圧痕が残る。16の内面底部には、クレーター状の破裂痕が見られる。32は壺で掘り形内から出土した。口縁部は短く外反する。33は鍋で、掘り形上層から出土した。34は甕の口縁部片で、上層から出土した。

須恵質土器（35） 東播系の片口の鉢の口縁部片である。上層から出土した。

瓦器（29～31） 椀である。29・30は口径15.8～17cmを測る。29は内面ミガキ、外面は回転ナデ、下半はヘラケズリを施す。30は内外面ともにナデの後ミガキを施す。31は外面上半がミガキ、中位から下半はケズリを施す。

陶器（36） 壺の底部片である。胎土は細砂粒を含み、釉調は暗黄緑褐色を呈する。露胎は茶褐色である。

磁器（37～46） 37は白磁碗である。玉縁口縁を有し、Ⅳ類に分類できる。38～41はⅤ類に分



第76図　才田 1号井戸出土遺物実測図2（1/3）

類できる碗である。42は青白磁の壺の口縁部である。43は白磁の皿でⅦ-2類に分類できる。内面の見込み部分は草花文のヘラ描きを施す。外面底部には墨書がある。文字は不明である。44は同安窯系青磁碗である。Ⅰ-5・a類である。45～47は龍泉窯系青磁である。45は碗の底部で、Ⅰ-3類に分類でき、46はⅠ-5・b類に分類できる。47・48は皿である。47はⅠ-2類、48はⅠ-1類に分類できる。

ふいご羽口（49） 掘り形上層から出土した。最大径は84㎜。

土製品（50） 扁平な板状の土製品で、器表および胎土中に籾の圧痕が多く見られる。砂粒は含まないが胎土は粗い。粘土板ではあるが用途不明。上層出土。

木製人形（51） 中層から出土した人形で、一側面を削り出すことで顔面を表している。丸い頭部から目に当たる所は緩やかなカーブで削り、鼻を造形したのち、口は小さな切り込みで表現する。削り間違いなのか口の表現が二カ所ある。顎の部分も抉りを入れているが、その下方が突起状となるのはなぜかわからない。後頭部も大きな切り込みを入れるが、これは首との境とするなら上方にすぎるきらいがある。目や眉などは墨等で描かれてはいない。造形としてはあまり巧みなものとは言えない。頭部と反対側の小口部には桜皮の入った孔があるので、曲物の破片を再利用したものであろう。杉材かと思われた。全長160㎜、幅は最大50㎜、厚さ5㎜。呪術的な用途であろう。この木製人形については遺憾ながら整理途上で行方不明となったままである。

鉄器（52） 釘であろう。現存長45㎜。上層出土。

4 溝

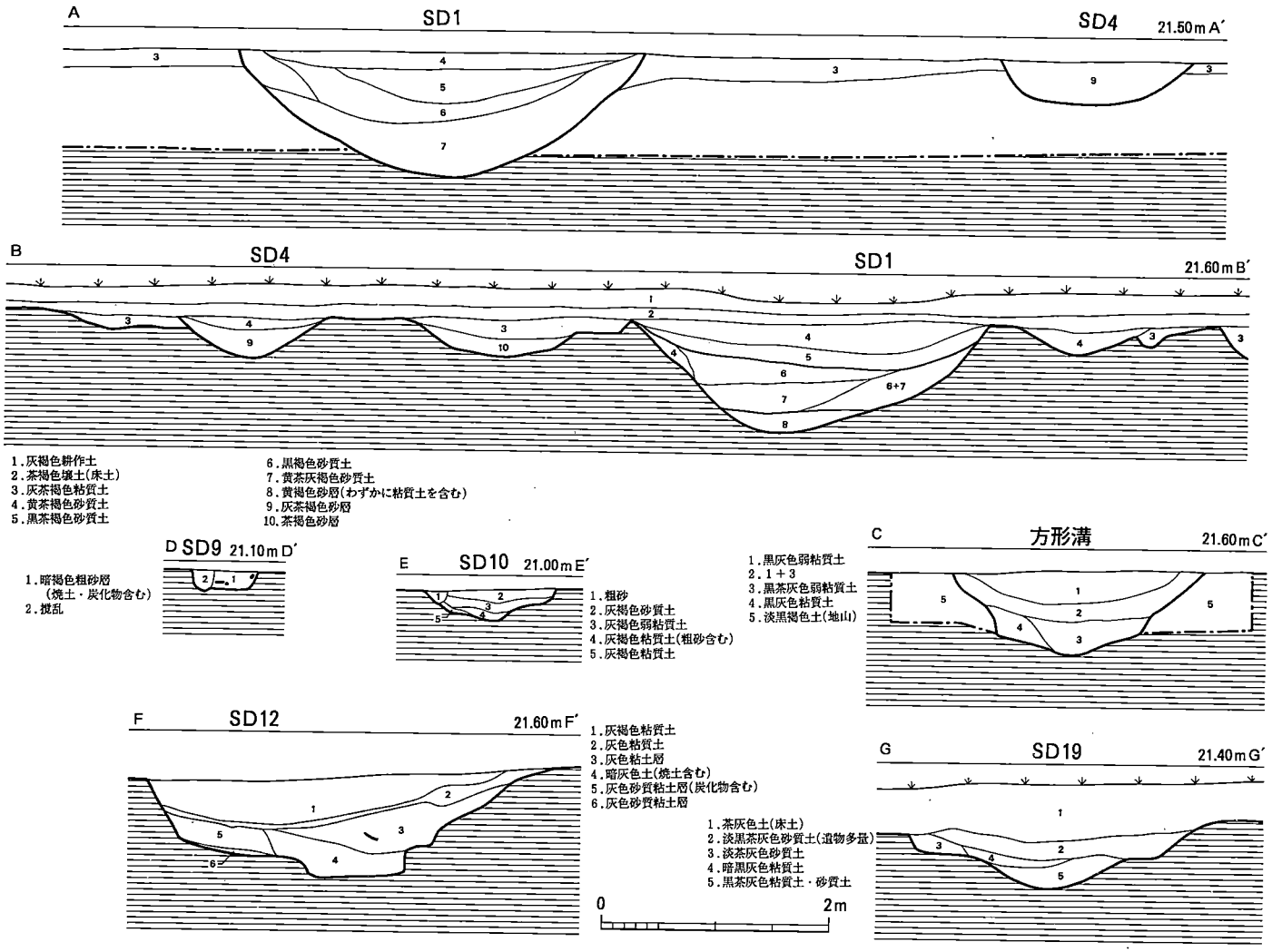
（図版3・7・12～15・19、第77図、付図）

1号溝［ＳＤ１］（図版13・19、第77図、付図）

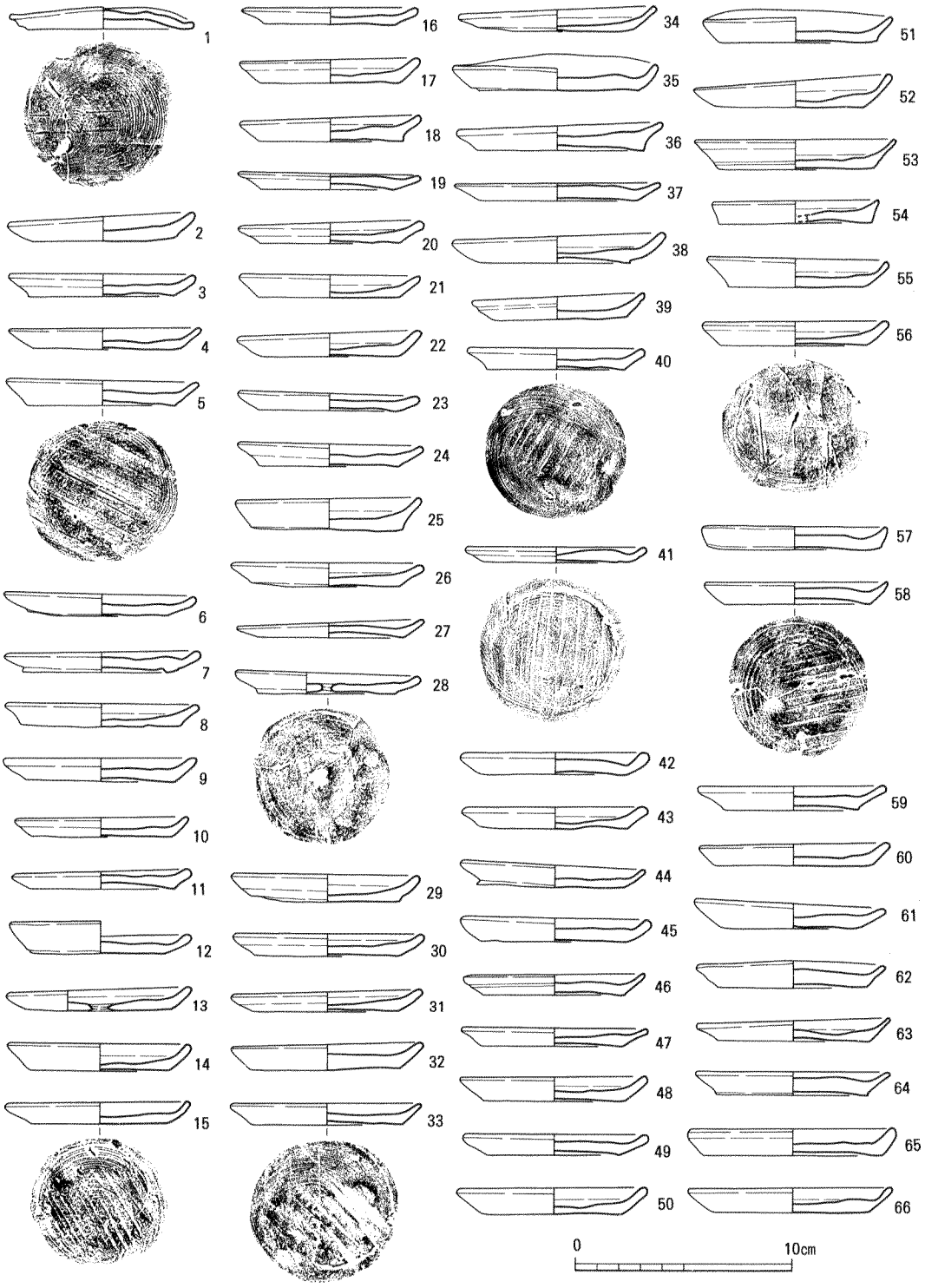
調査区の北端部で、ほぼ東西方向に掘削された溝である。この南にあるＳＤ４とはほぼ平行している。幅3.15～3.58m、深さ0.94～1.1mを測る。断面の形態はＵ字形を呈する。2回以上の掘り直しが認められる 土師器、須恵器、須恵質土器、陶器、磁器、石鍋11、焼塩土器5、スラッグ13、ふいご羽口3、軽石1、土錘8、鉄器30以上、不明土製品1、支脚3、ボタン状土製品1、砥石1などが出土した。西端下層の木炭については^{14}Ｃ年代測定を行った。結果はＤの項に掲載している。

出土遺物（図版31～37・42・43・44・47、第78～103図1～419、136図420～426、
138図427～430、139図431、140図432～440、142図441、143図442、147図443～467）

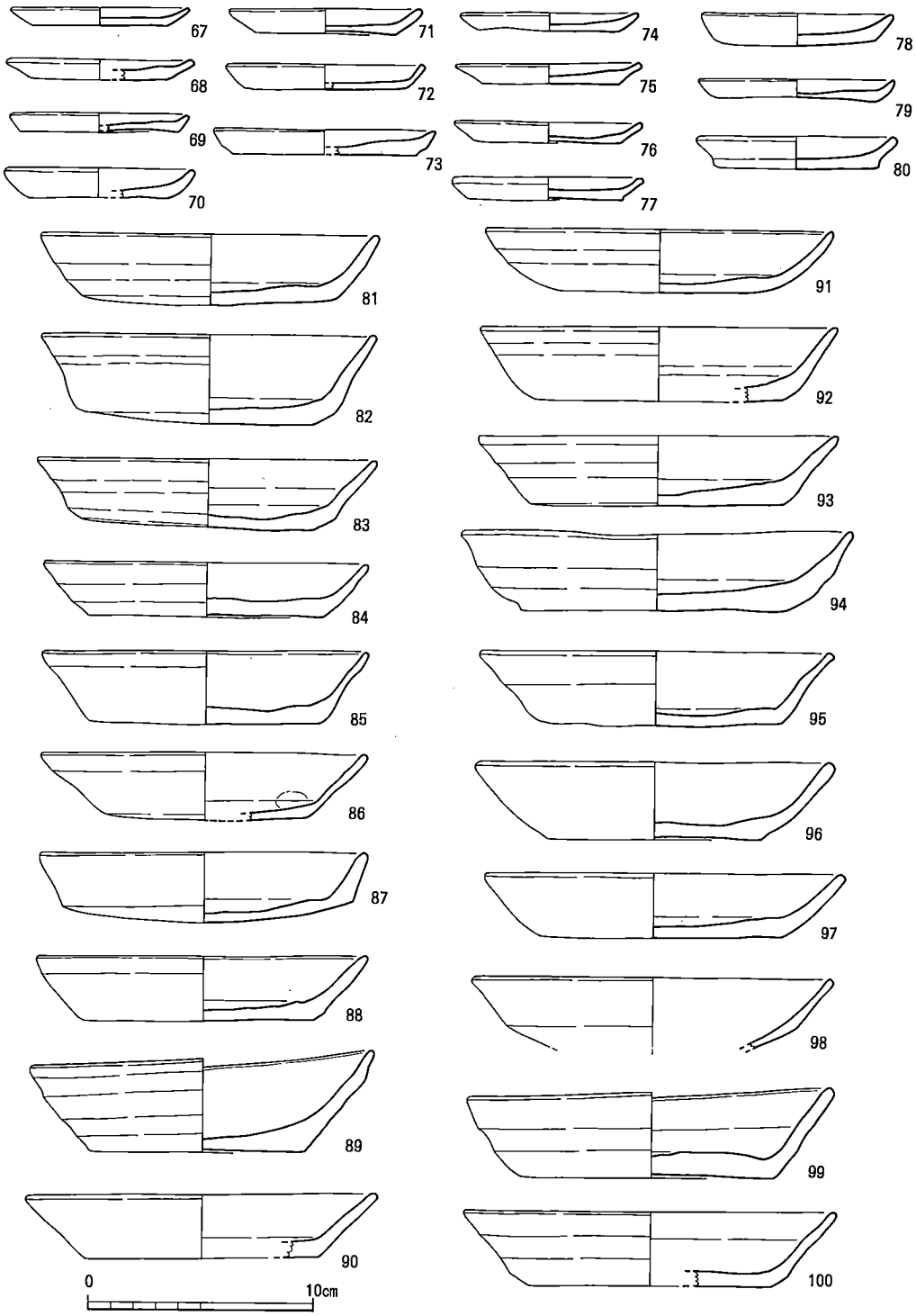
土師器（1～223・405～408・412～419） 1～80は小皿である。1～3・5～9は東側下層、4は北側、10～38は西端部、39～53は中央部下層、67～73はＥ7付近、74～80はＦ7付近からそれぞれ出



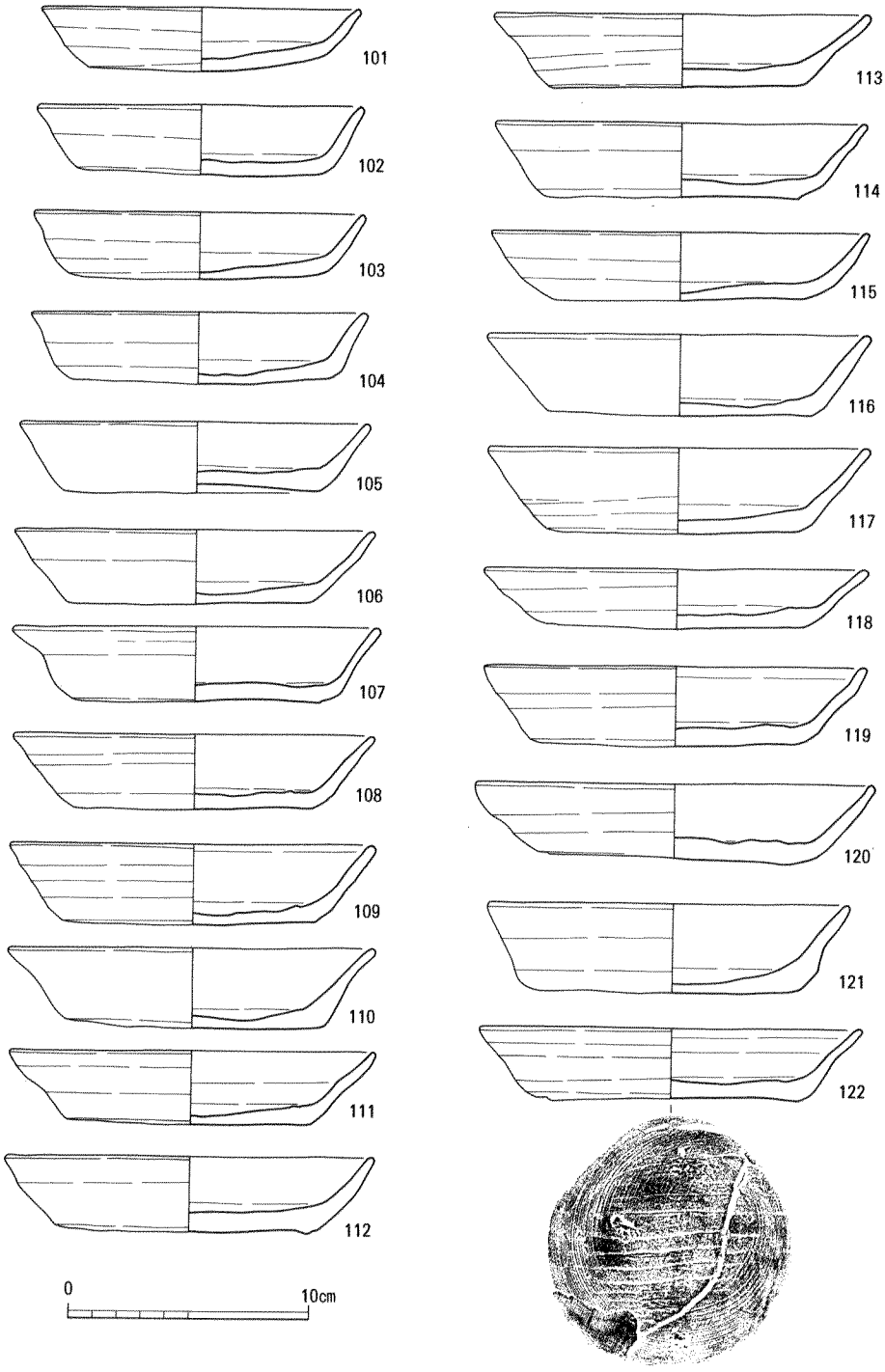
第77図　才田 溝土層図 (1/60)



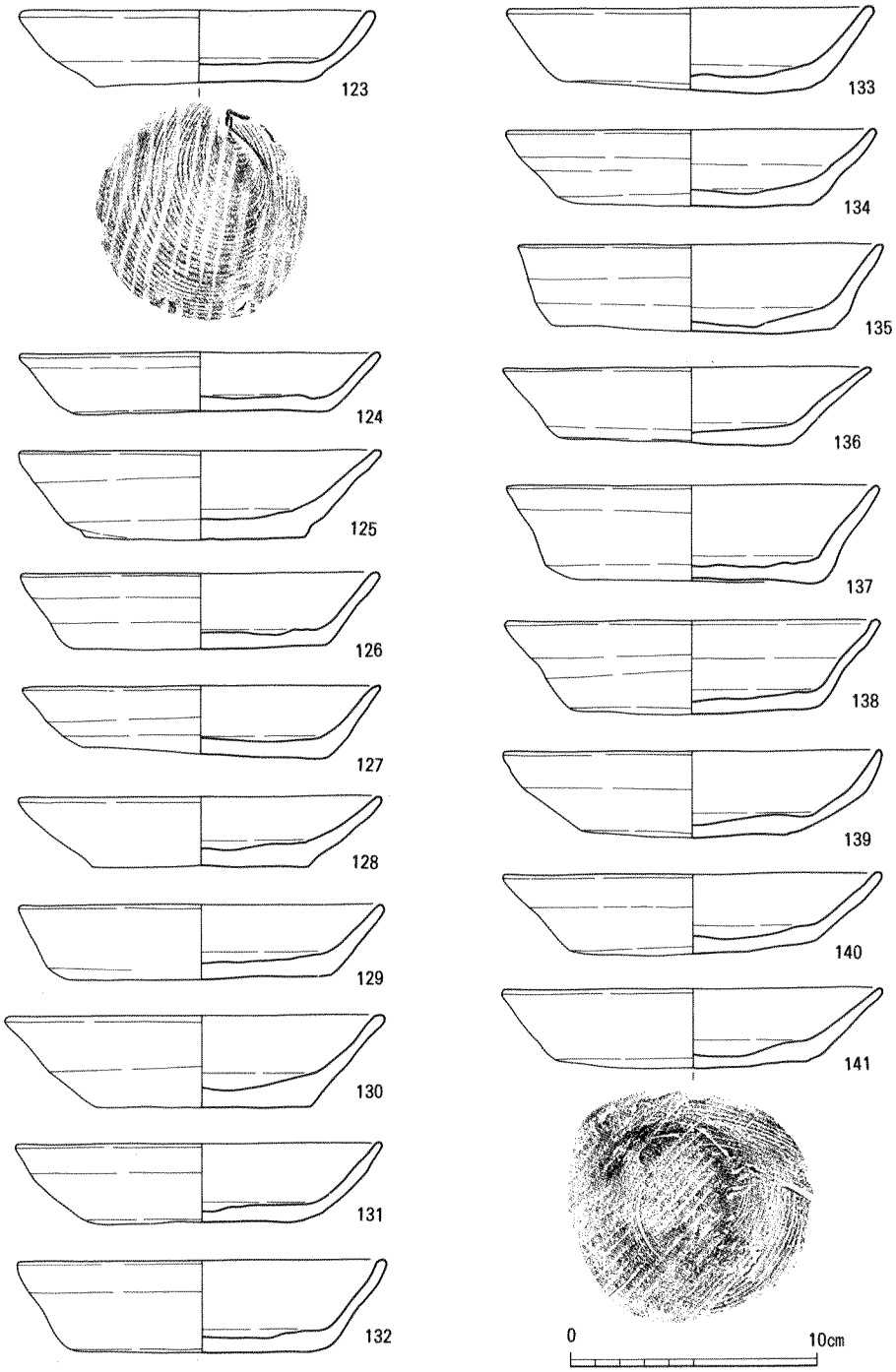
第78図　才田 1号溝出土遺物実測図1（1/3）



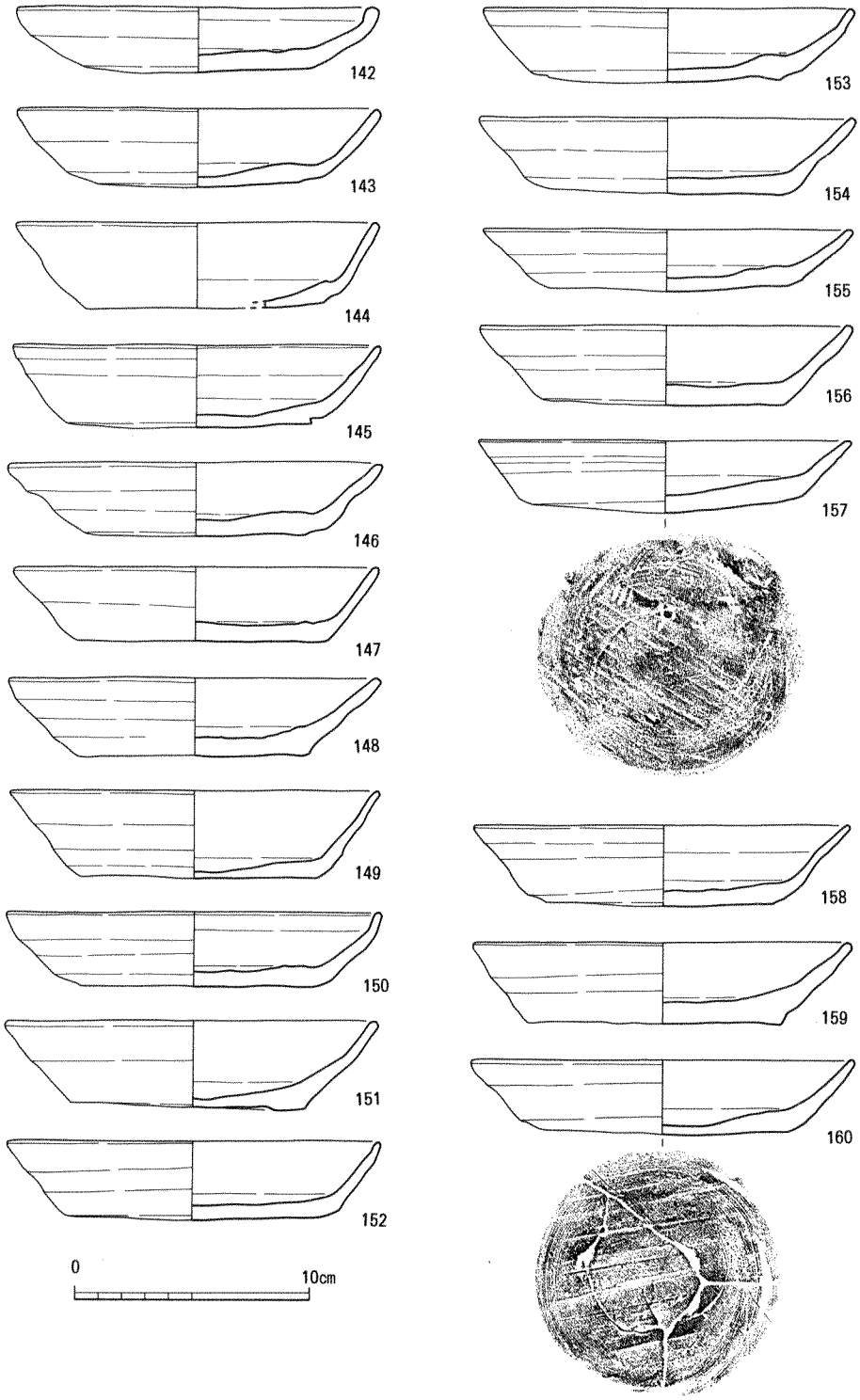
第79図　才田 1号溝出土遺物実測図2 (1/3)



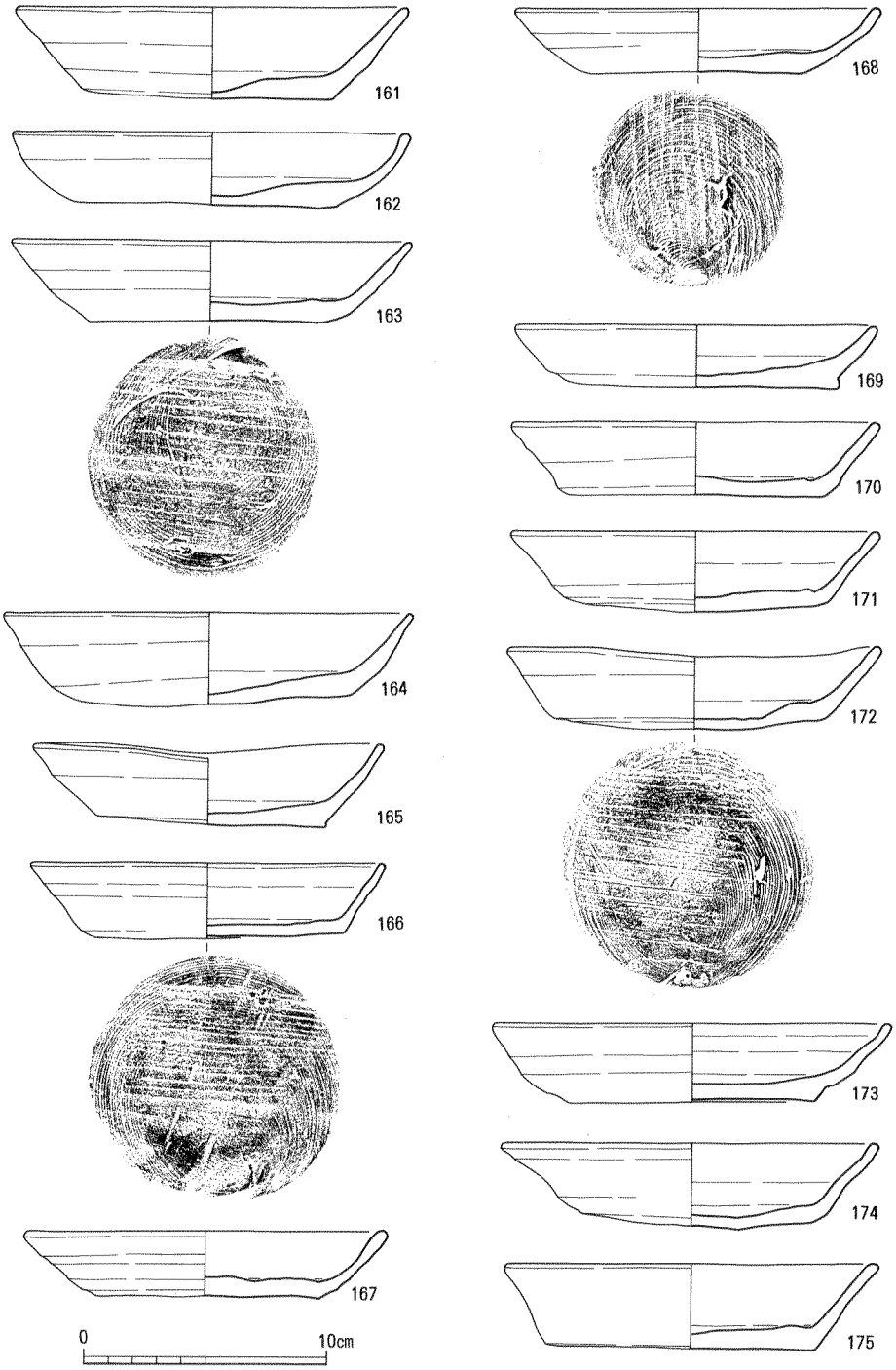
第80図　才田 1号溝出土遺物実測図3（1/3）



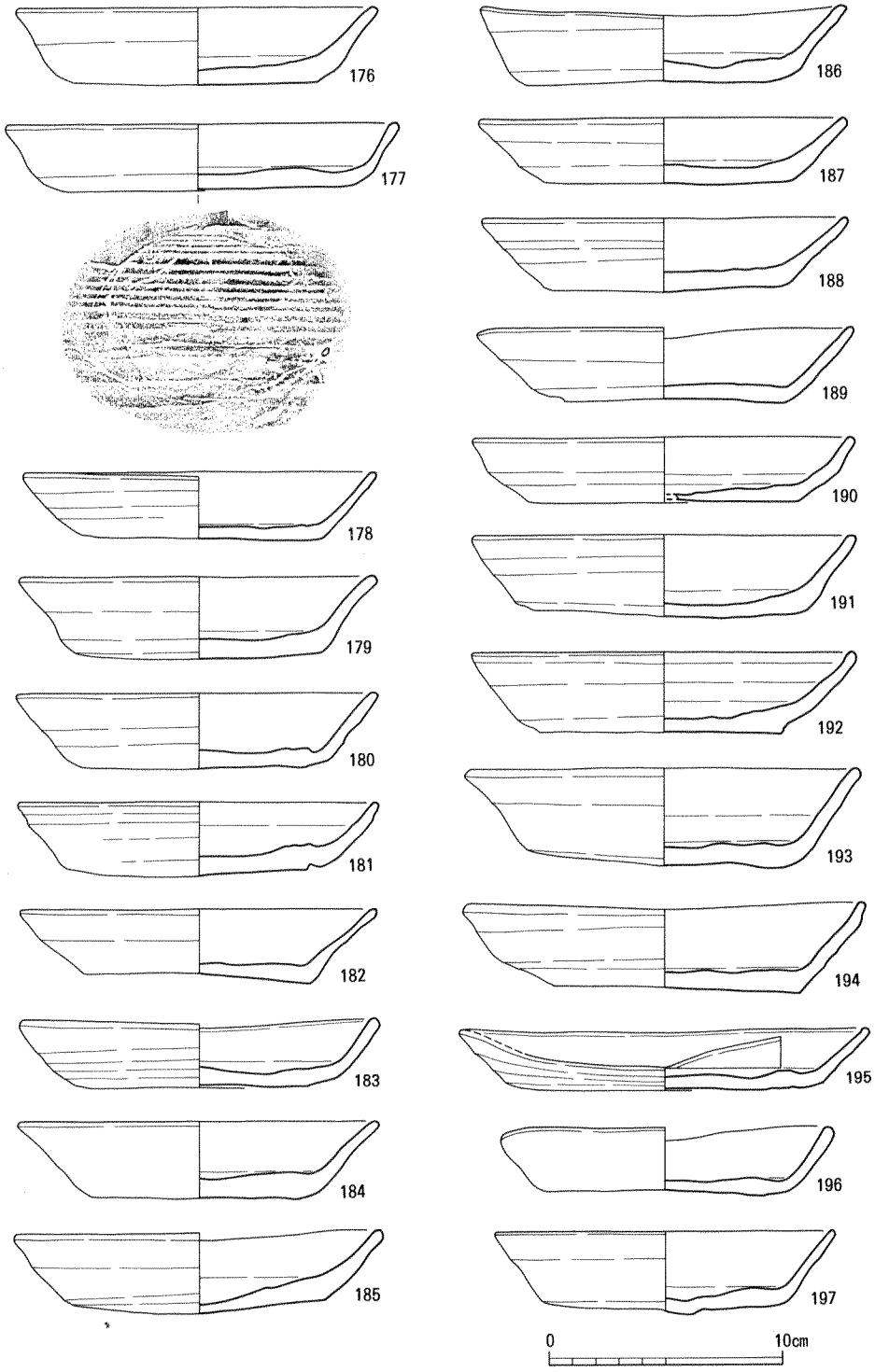
第81図　才田 1号溝出土遺物実測図4 (1/3)



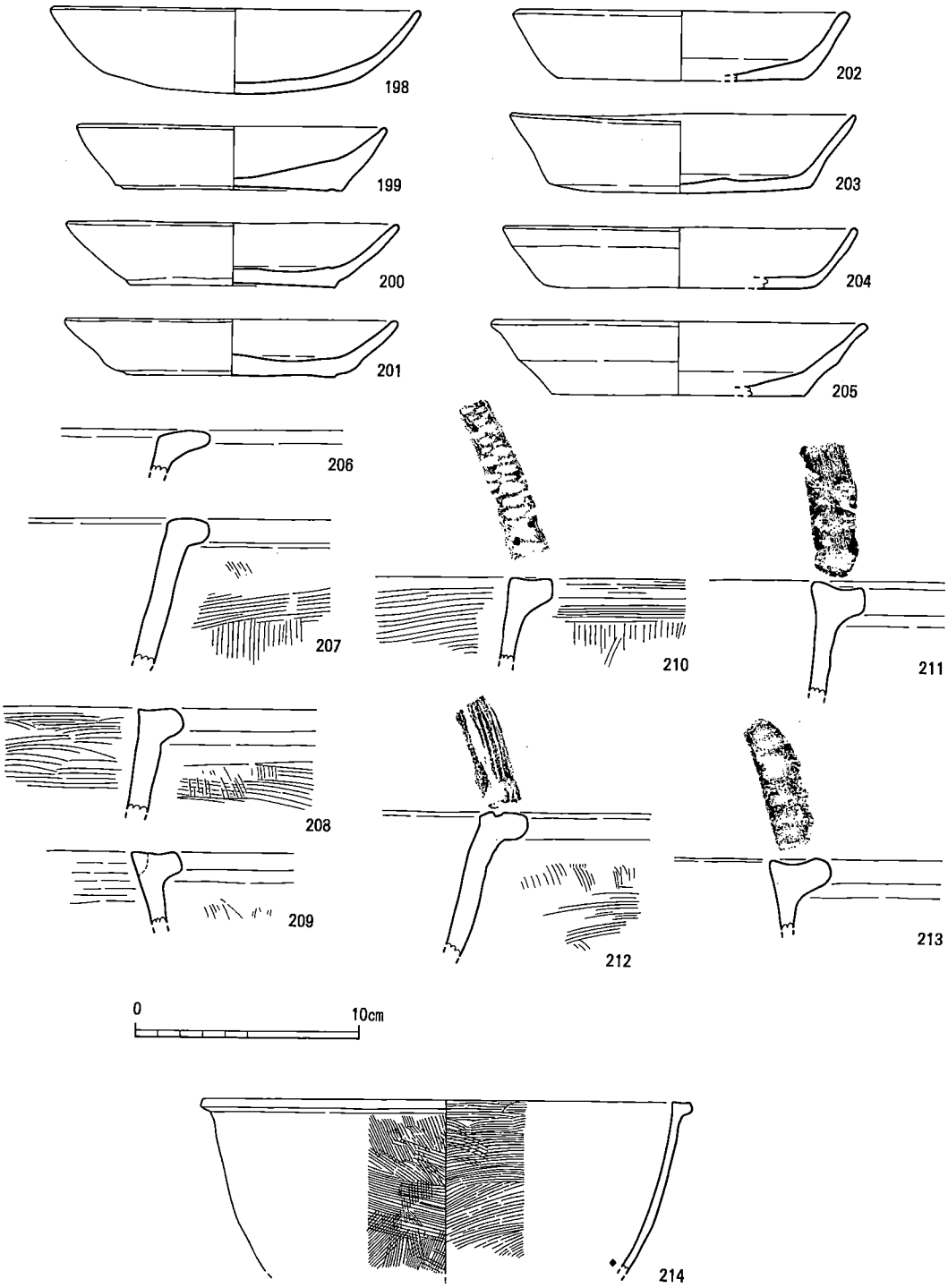
第82図　才田 1号溝出土遺物実測図5（1/3）



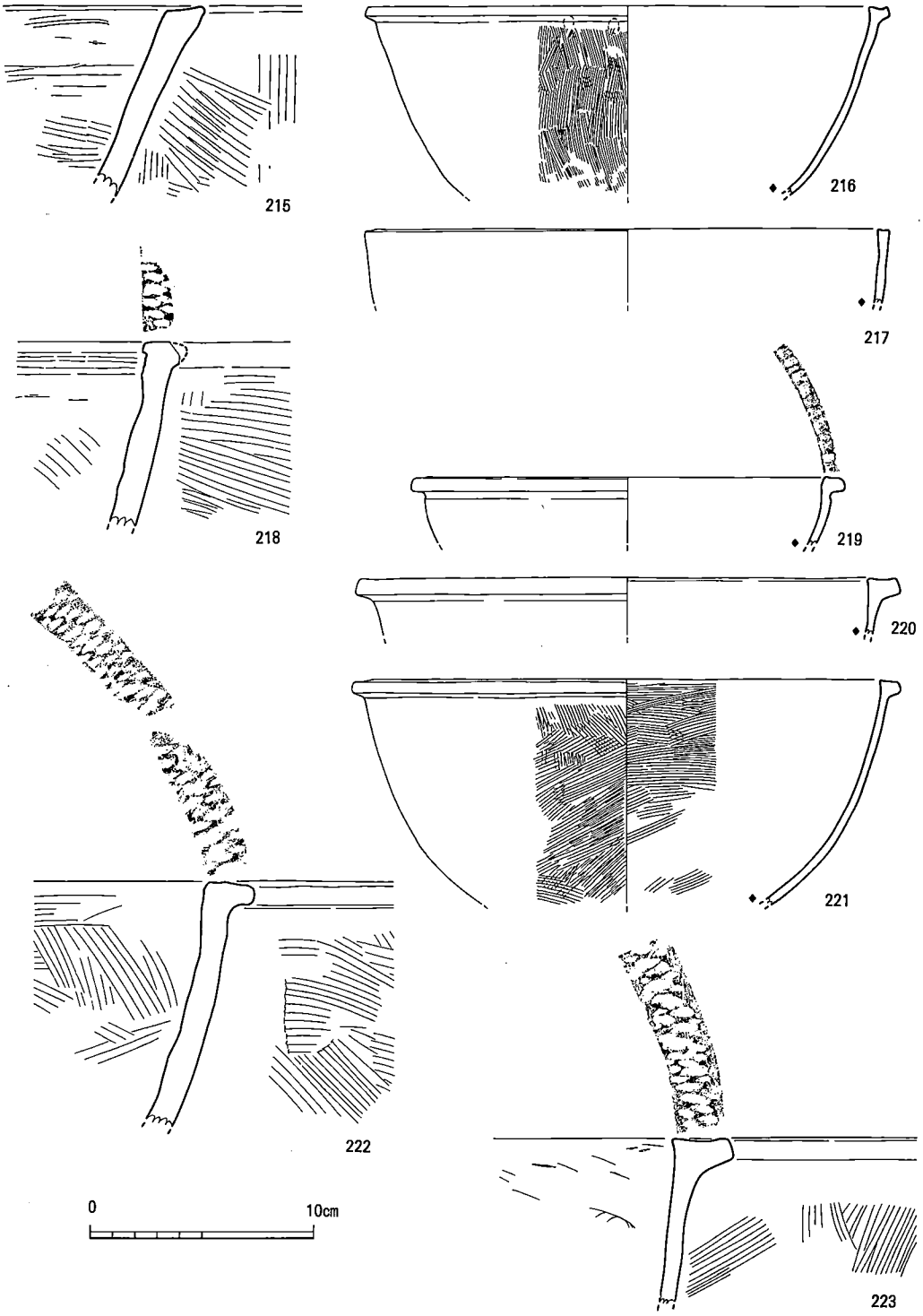
第83図　才田 1号溝出土遺物実測図6（1/3）



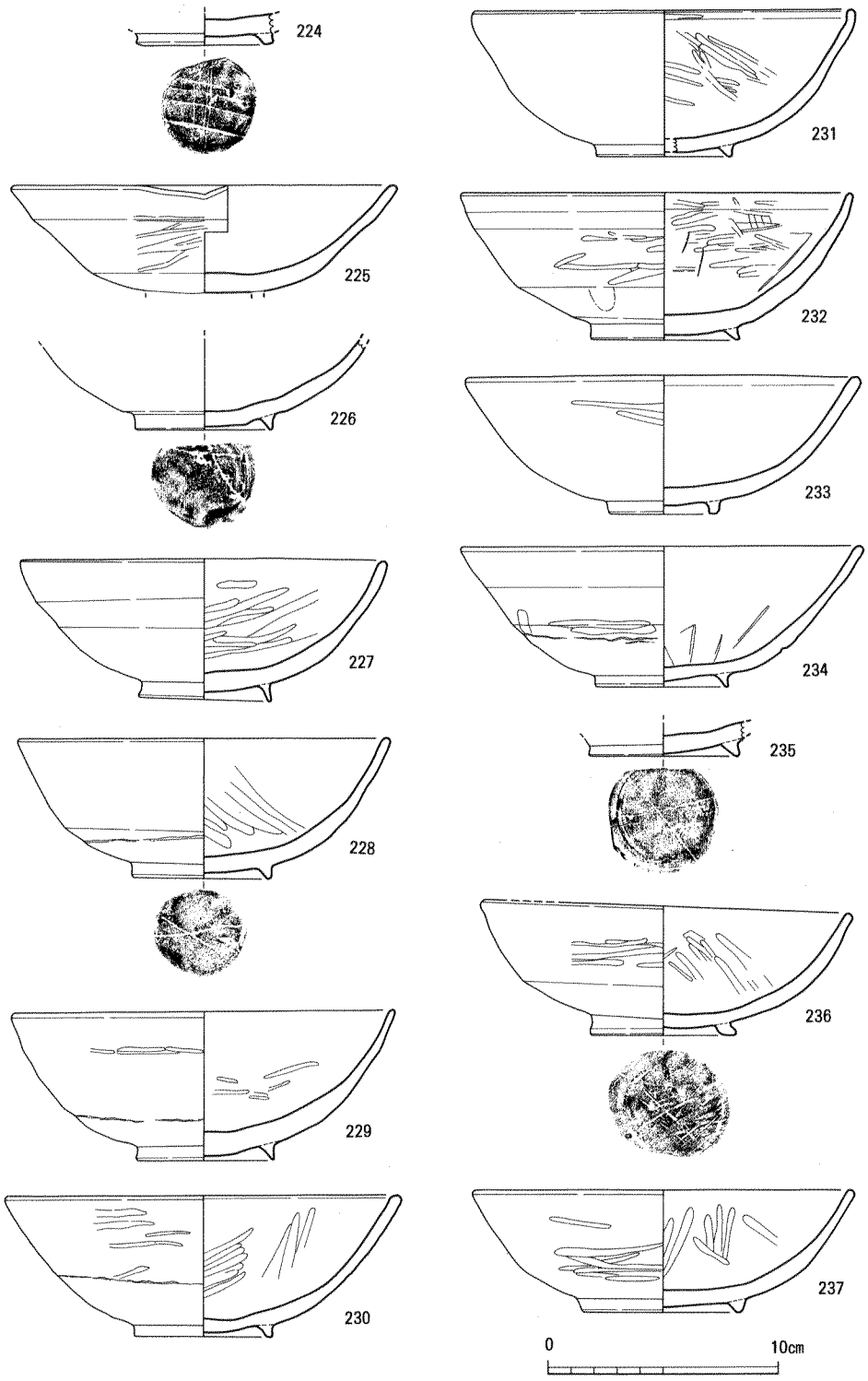
第84図　才田 1号溝出土遺物実測図7（1/3）



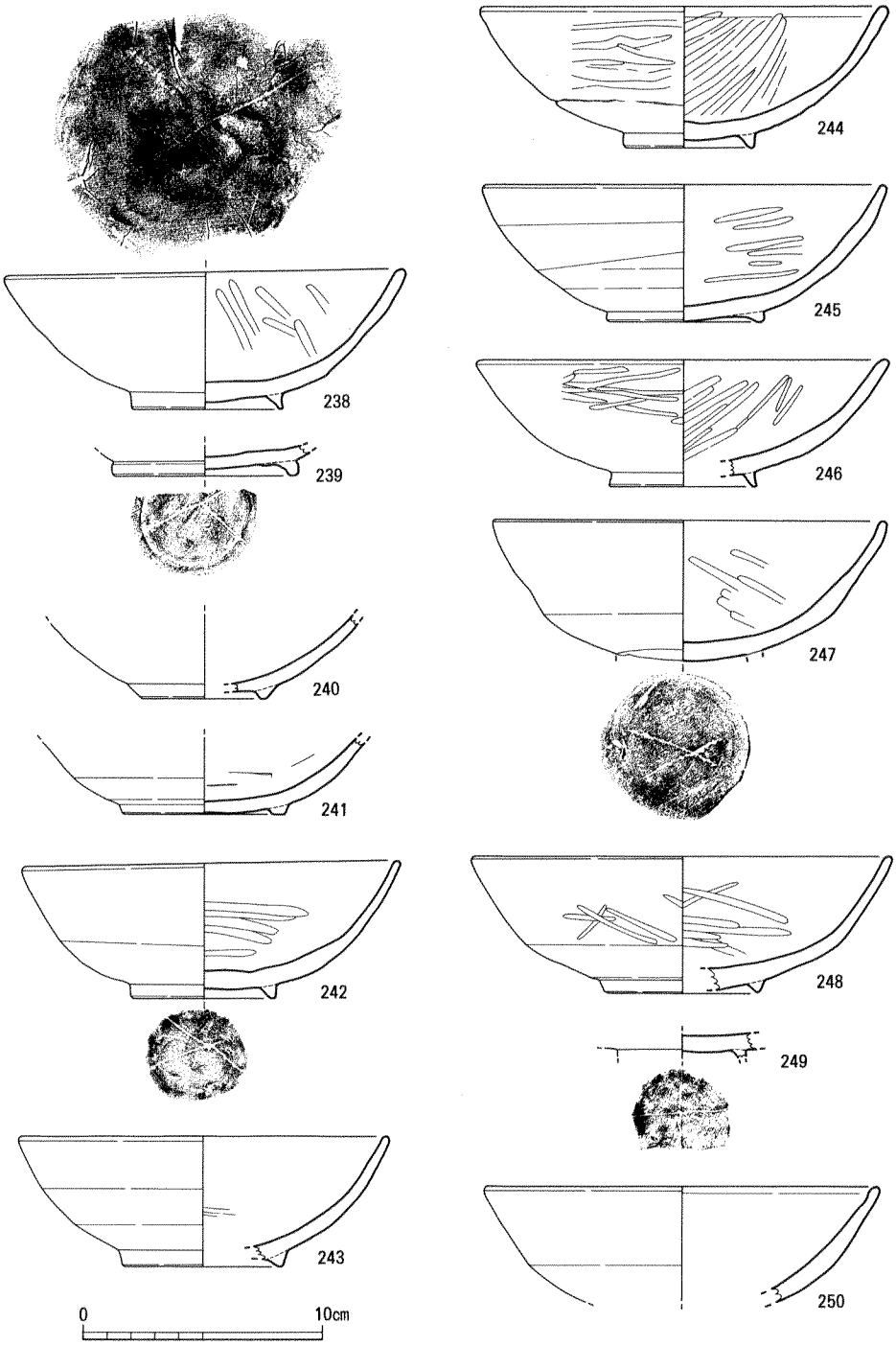
第85図　才田 1号溝出土遺物実測図8 (1/3・1/6)



第86図　才田 1号溝出土遺物実測図9（1/3・1/6）



第87図　才田 1号溝出土遺物実測図10（1/3）



第88図　才田 1号溝出土遺物実測図11（1/3）

土している。口径は7.8～9.3cm、器高0.8～1.4cmを測る。底部外面は糸切り離しを施し、板状圧痕が残るものが多い。81～205は坏である。81はヘラ切りであるが、それ以外は糸切りである。84～100はＦ6区、101～120は東端部、121・122は北端部、123～165は西端部、166～197は中央部、199はＦ7区からそれぞれ出土した。206～223は鍋である。口縁部の上面には草本類の茎を押圧して圧痕を施すものがある。405～408・412～419は甕である。奈良～平安時代に至るものが含まれている。

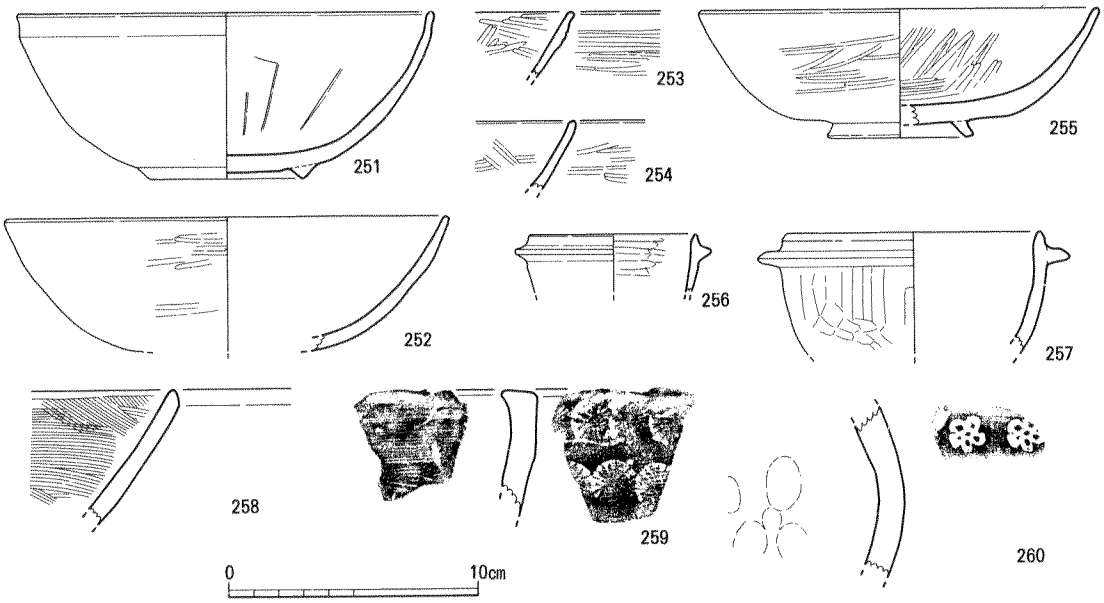
須恵質土器（261～266） 東播系の鉢である。口径は30cmを超えるものがある。

瓦器（224～257） 224～255は椀である。外面は回転ナデ、ナデの後ミガキを施すものがある。256・257は石鍋の形態をとる小型の鍋である。口径は6.8cmと10.2cmを測る。257の外面のケズリは石鍋と同様に縦方向に行っている。

瓦質土器（258～260） 258は鉢である。259は火舎である。外面には菊花文がスタンプされている。

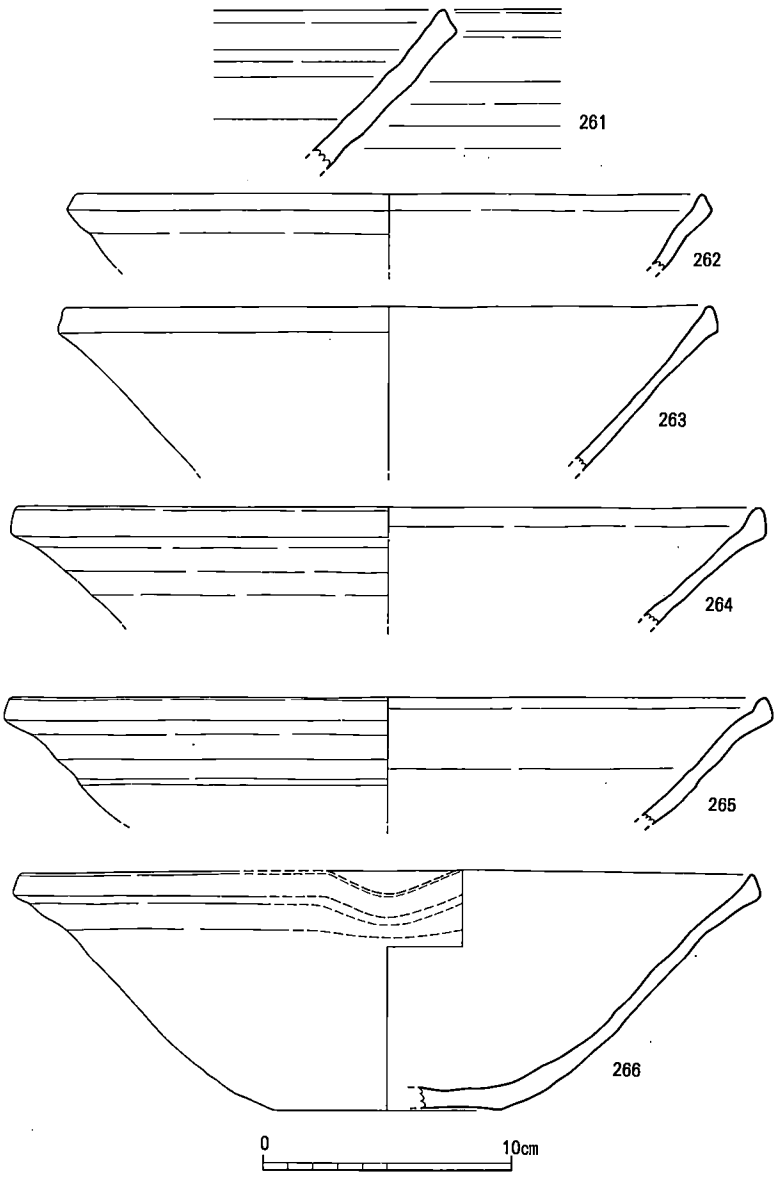
陶器（267～291） 267～272は国産陶器である。267～269は珠洲焼の甕であろう。色調は灰色を呈する。272は常滑焼の甕である。273～291は輸入陶器である。273～284は壷・水注の破片である。288は鉢でⅥ－2類に分類できる。289は小盤で、Ⅱ－2・b類に分類できる。290は鉢でⅠ－1類に分類できる。291は鉢でⅥ－2類に分類できる。

磁器（292～386） 292～323は白磁の碗である。292・293はⅡ類、294～298はⅣ類、299～308はⅤ類、309はⅦ類に分類でき、312～323の底部片はⅡ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅶ類に分類できる。324～33

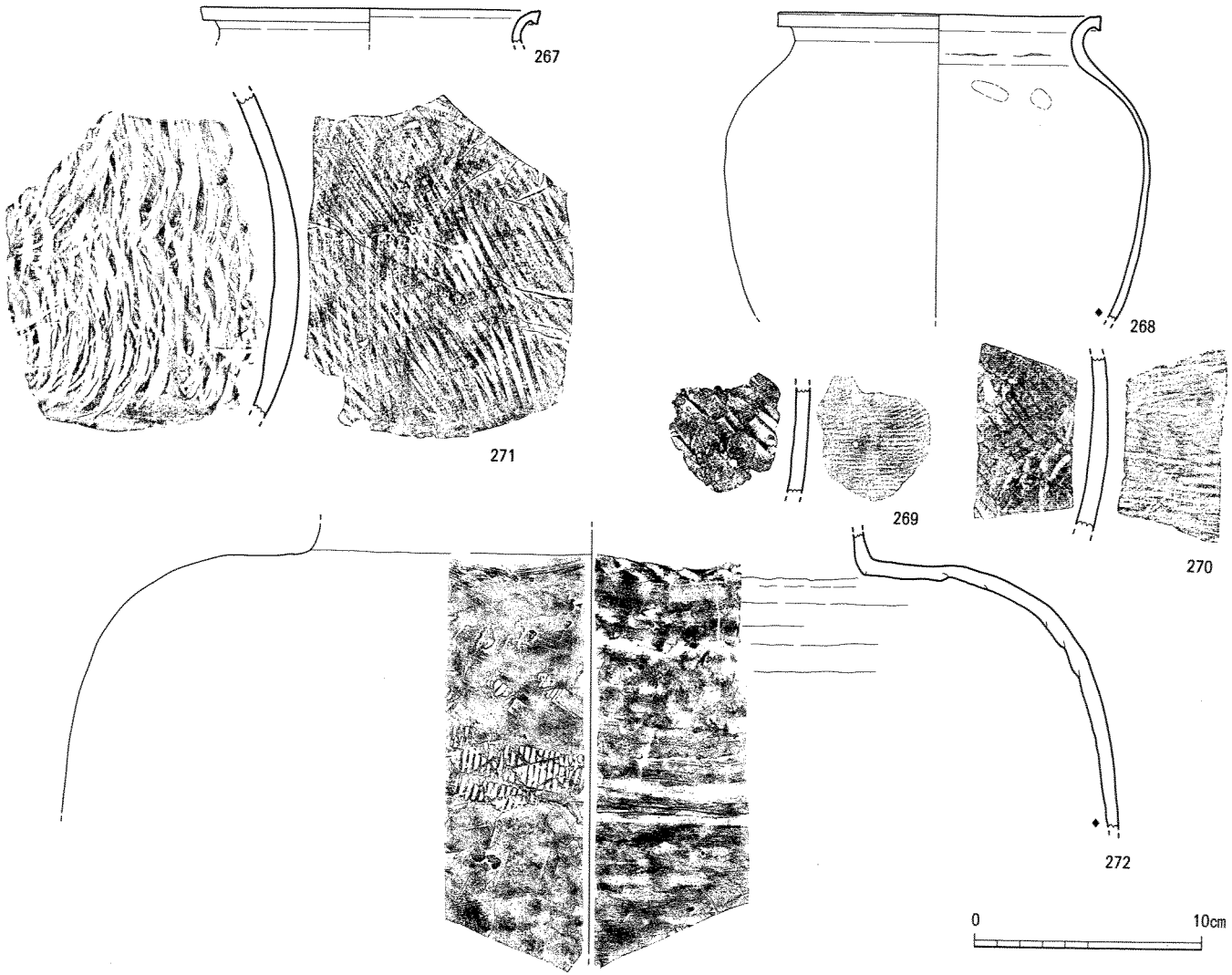


第89図　才田　1号溝出土遺物実測図12（1/3）

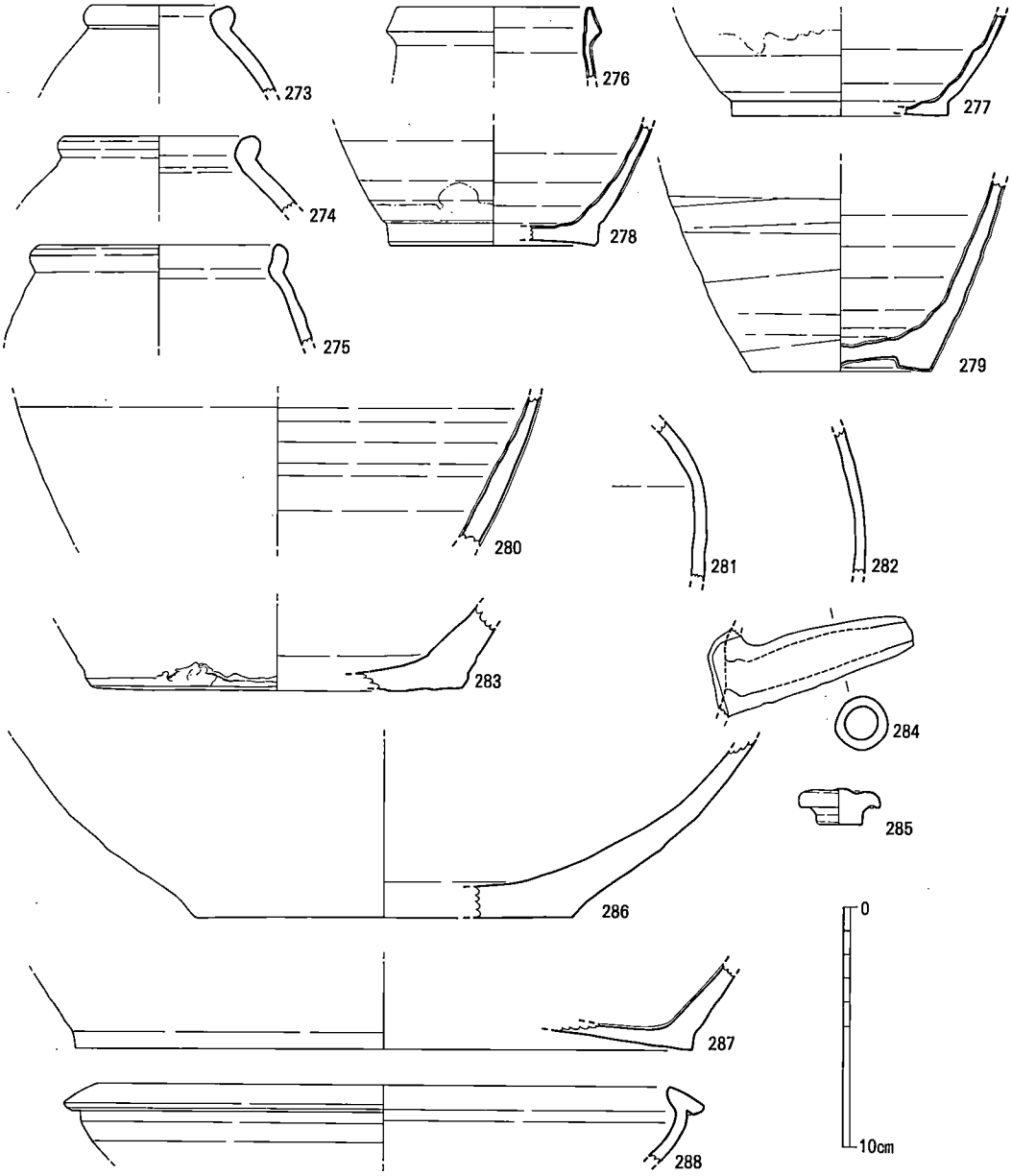
9は白磁の皿である。Ⅲ・Ⅵ・Ⅷ類に分類できる。340～358は同安窯系青磁である。340～356は碗、357は小碗で、Ⅲ－1・c類に分類できる。358は皿で、Ⅰ－1・a、b類に分類でき、359～380は龍泉窯系青磁である。359～376は碗である。Ⅰ－2・a、b類、Ⅰ－4・類、Ⅰ－5・b類、Ⅰ－6・a、b類に分類できる。377～380は皿である。Ⅰ－1類、Ⅰ－2類に分類できる。381～385は青白磁である。381～383は壺類、384・385は合子である。386は染付碗である。



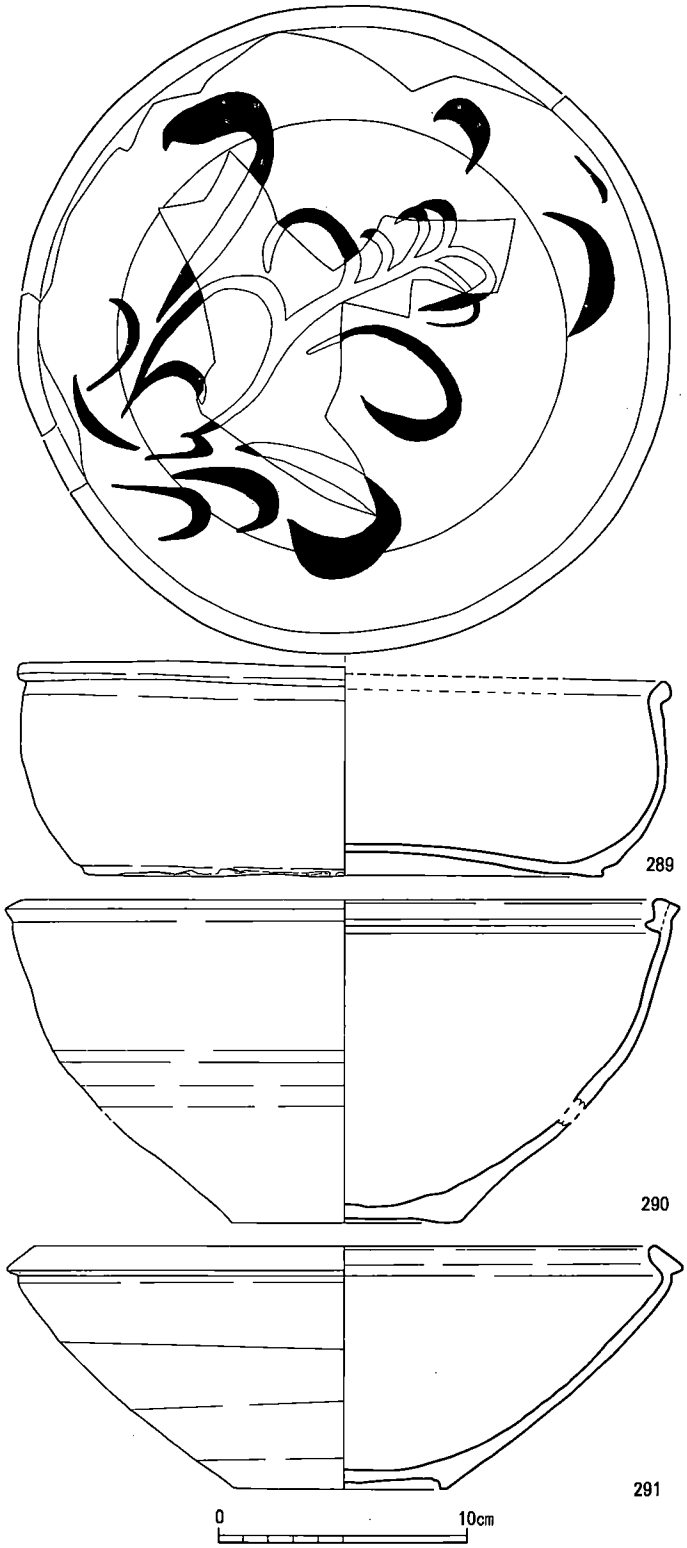
第90図　才田 1号溝出土遺物実測図13（1/3）



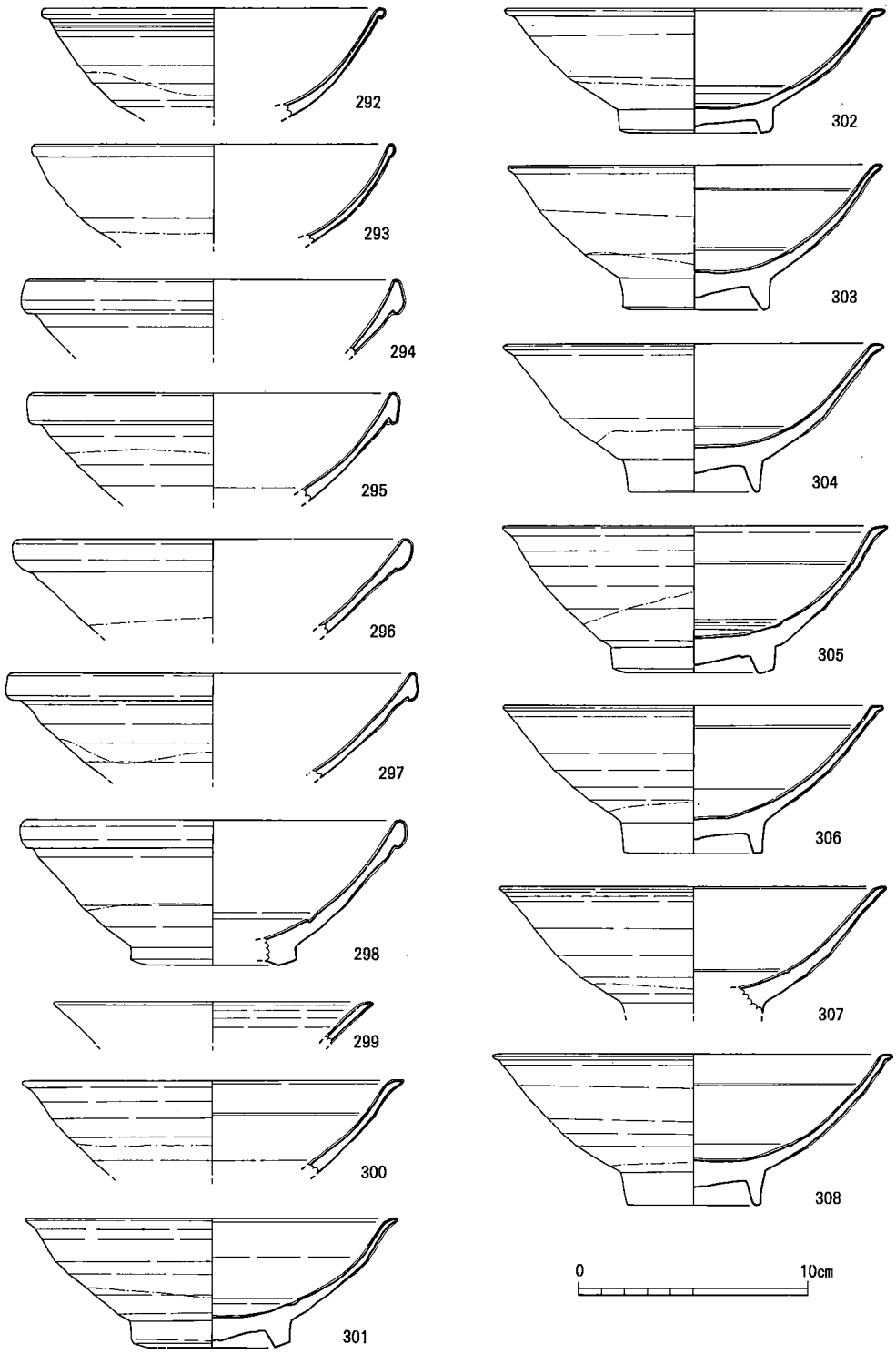
第91図　才田 1号溝出土遺物実測図14（1/3・1/6）



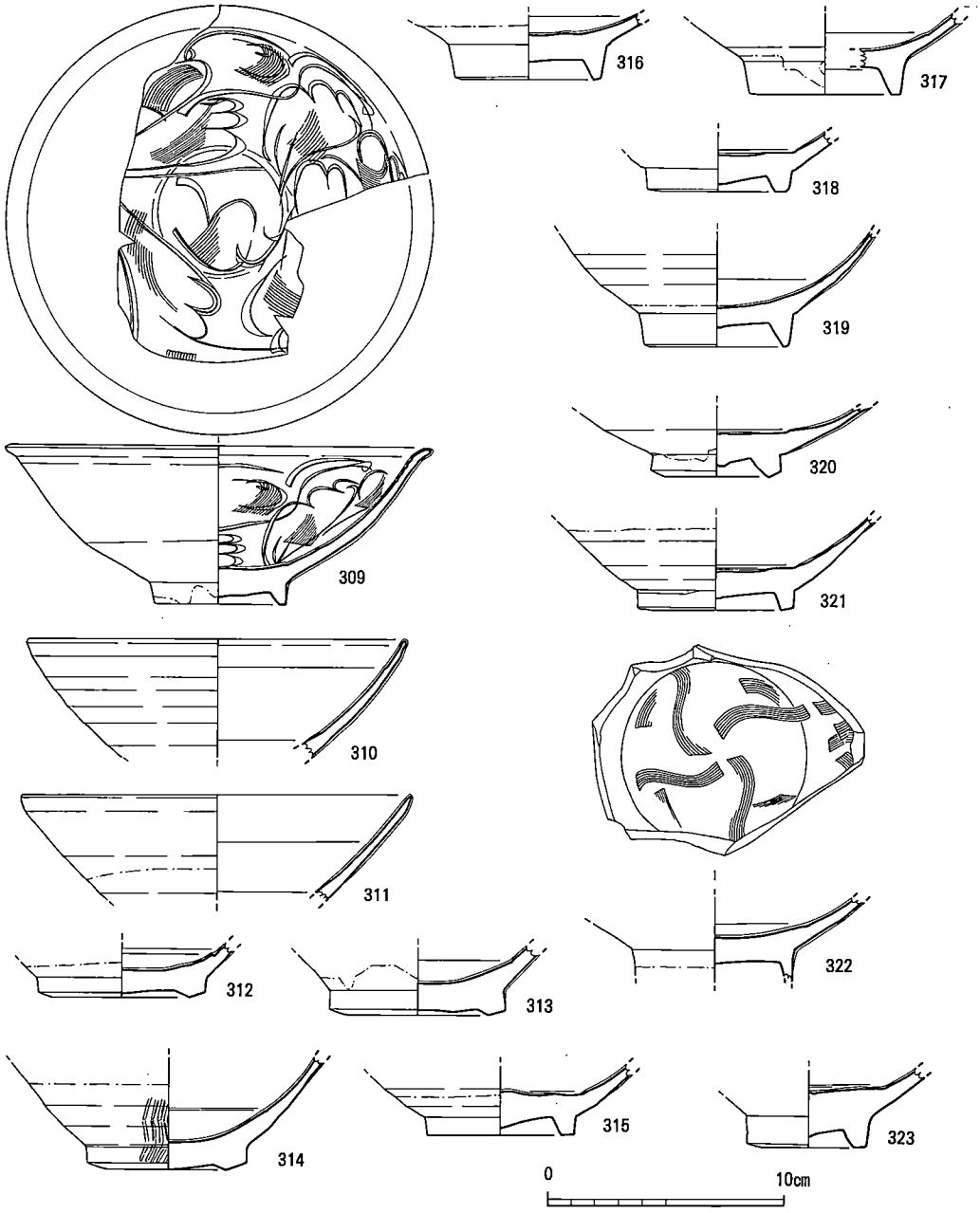
第92図　才田 1号溝出土遺物実測図15 (1/3)



第93図　才田 1号溝出土遺物実測図16（1/3）



第94図　才田 1号溝出土遺物実測図17（1/3）

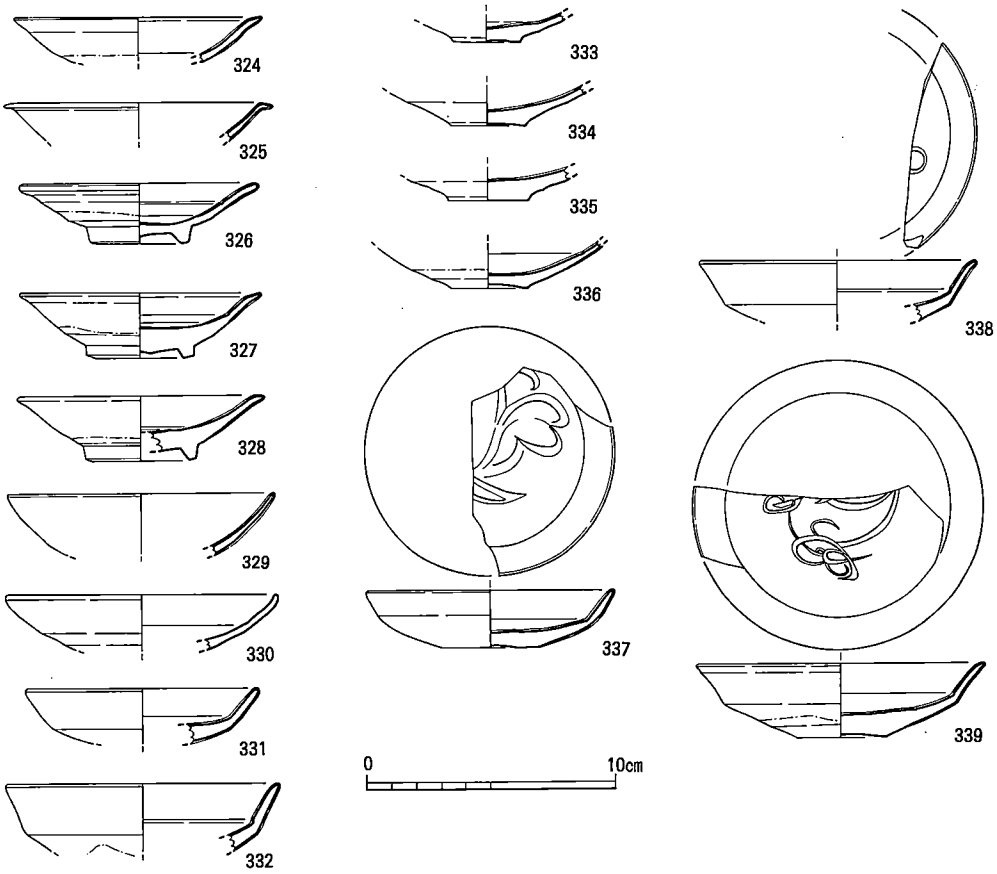


第95図　才田 1号溝出土遺物実測図18（1/3）

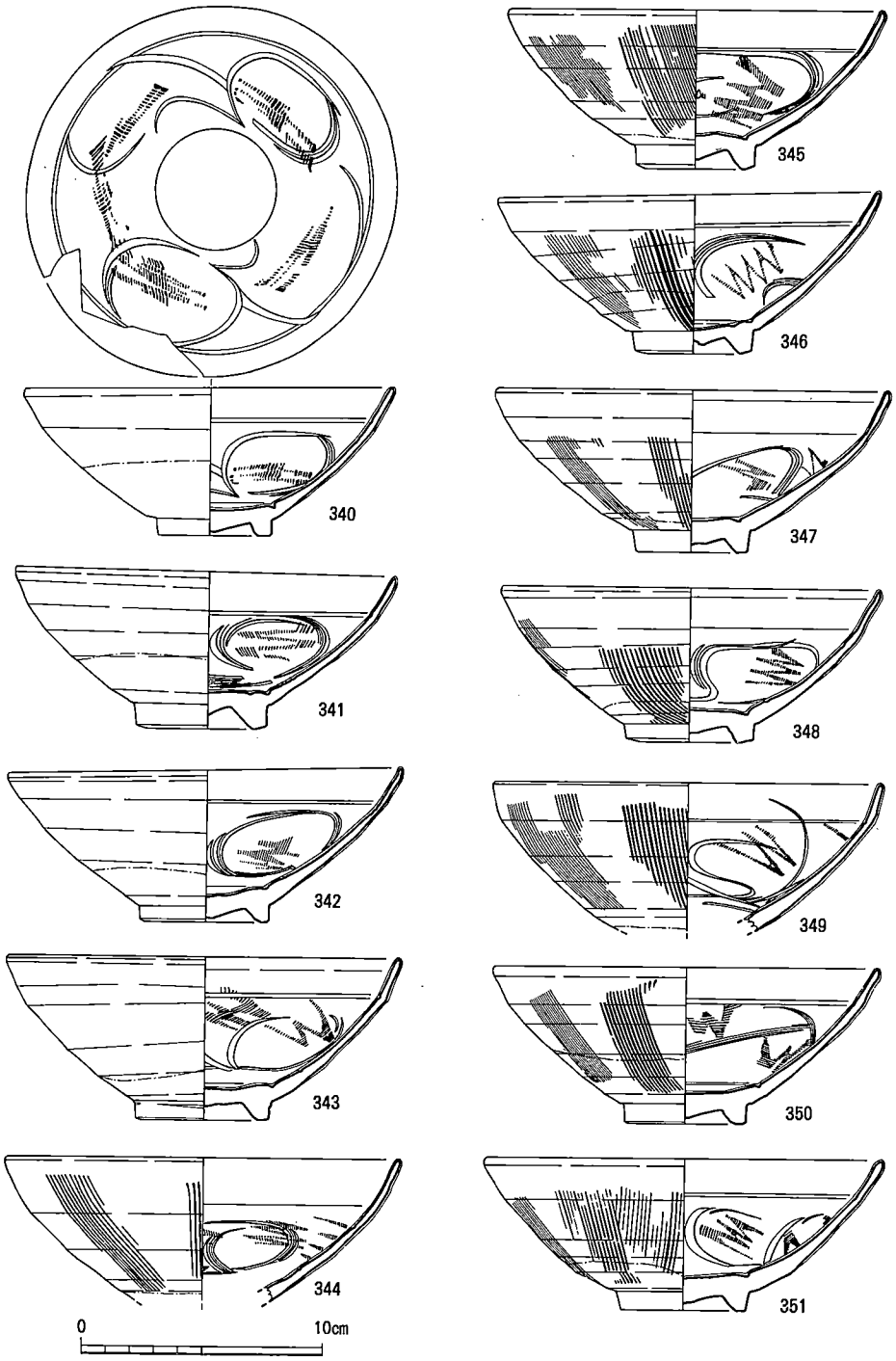
石鍋（420～426）すべて滑石製で、大小がある。420は復原口径33.6cm。421はやや小振りで鍔より下方は煤が付着する。復原口径21.6cm。422は鍔の部分が煤ける。423～426も外面は煤ける。426は滑石としてはあまり質がよくない。

土製品（427～431・441） 427～429は円柱状の支脚で、胎土はきわめて精良である。427は上半部が二次熱を受けている。428は直交する孔があるらしい。430は直方体棒状品で、一側面には白い釉のようなものが付着している。幅38～42cm、厚さ22cm。用途不明。431はふいご羽口で、先端部は溶融し、胎の外側は青灰色に変色している。最大径85cm。441は土師器小皿の底部片を利用して小円盤としたもので、周縁は擦って面取りを行っている。板目痕が見える。径18.1～20.6cm、厚さ7cm。

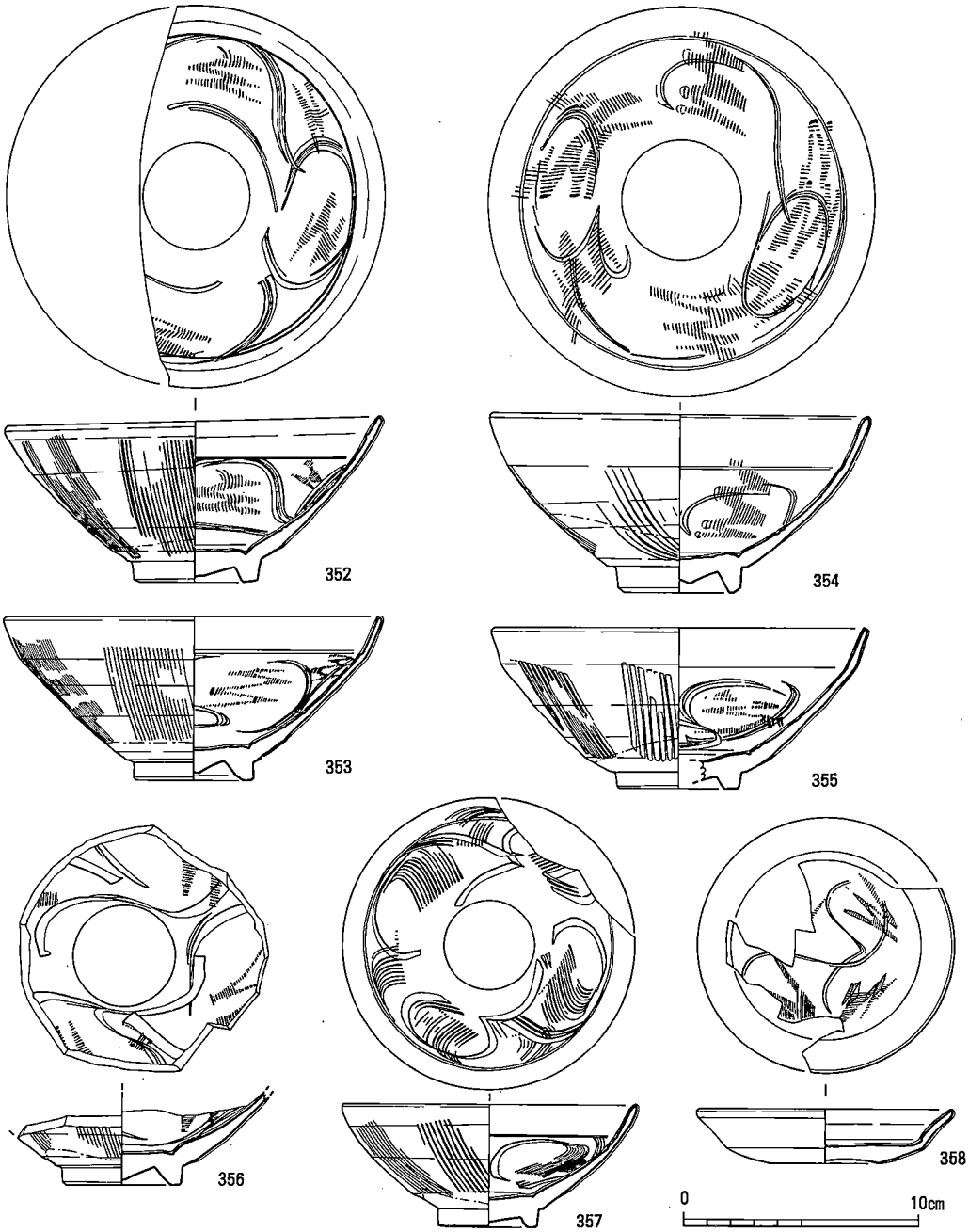
土錘（432～440） すべて管状をなすもので、中央部の膨らむ形状である。433・438は化粧土



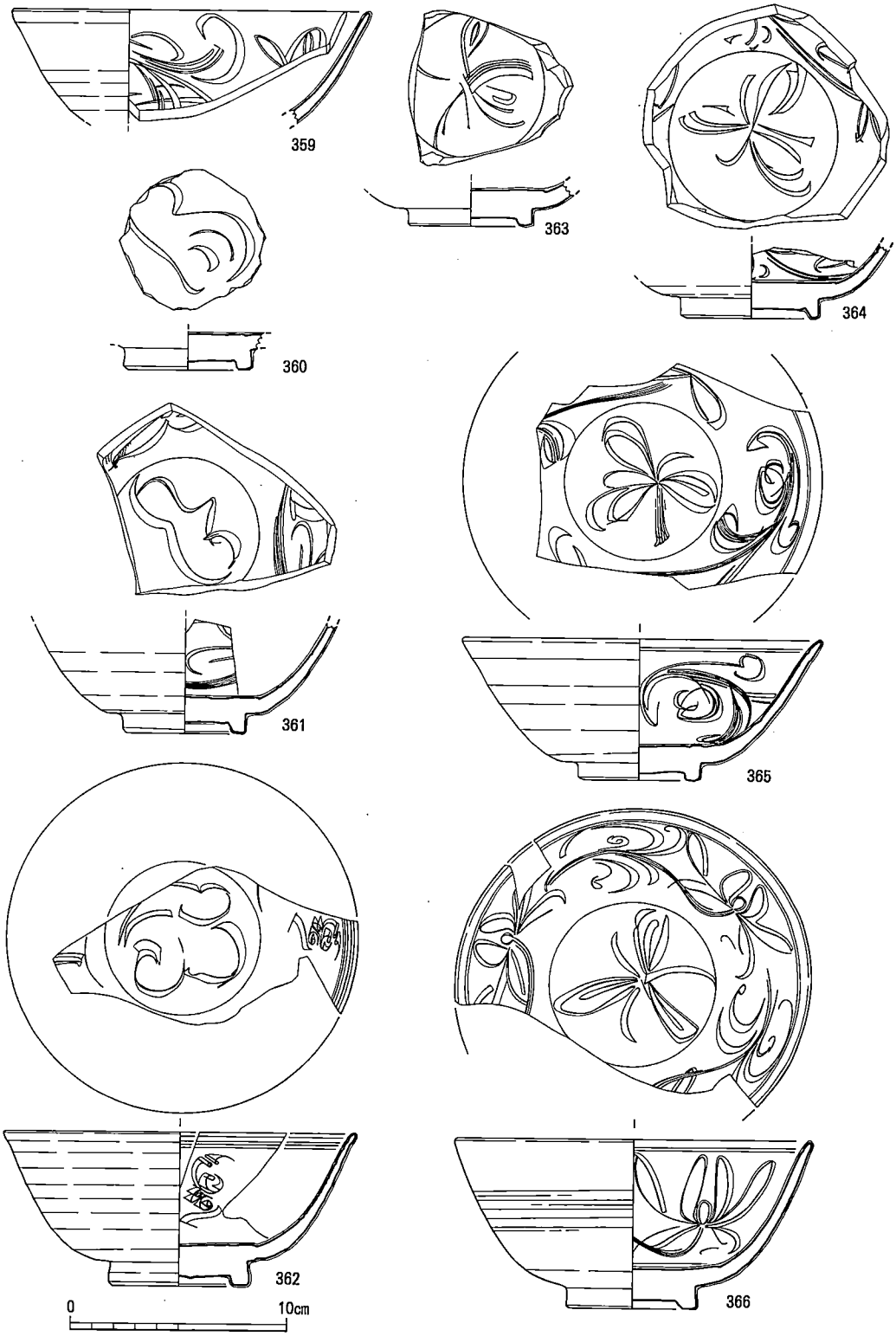
第96図　才田 1号溝出土遺物実測図19（1/3）



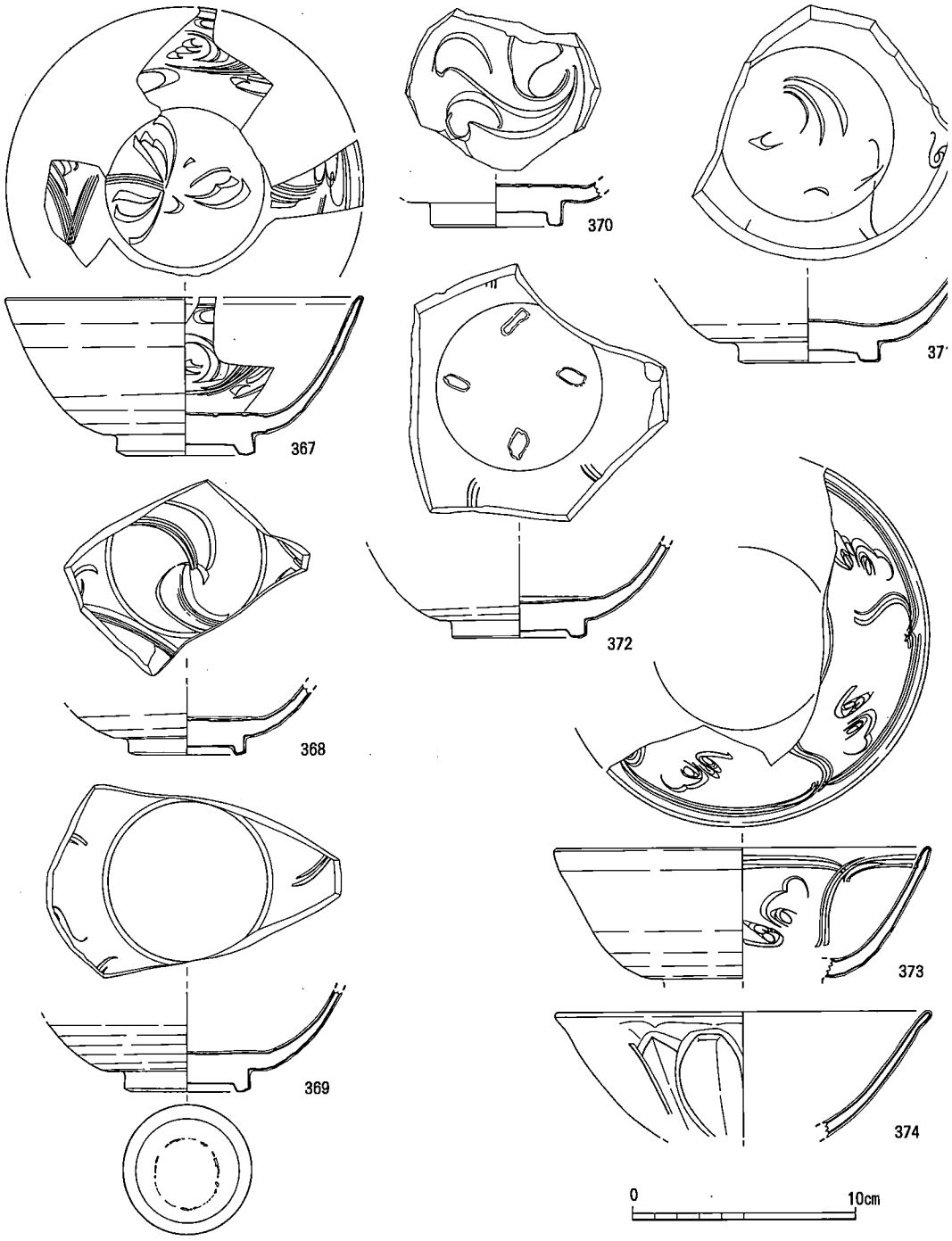
第97図　才田 1号溝出土遺物実測図20 (1/3)



第98図　才田 1号溝出土遺物実測図21（1/3）



第99図　才田 1号溝出土遺物実測図22 (1/3)

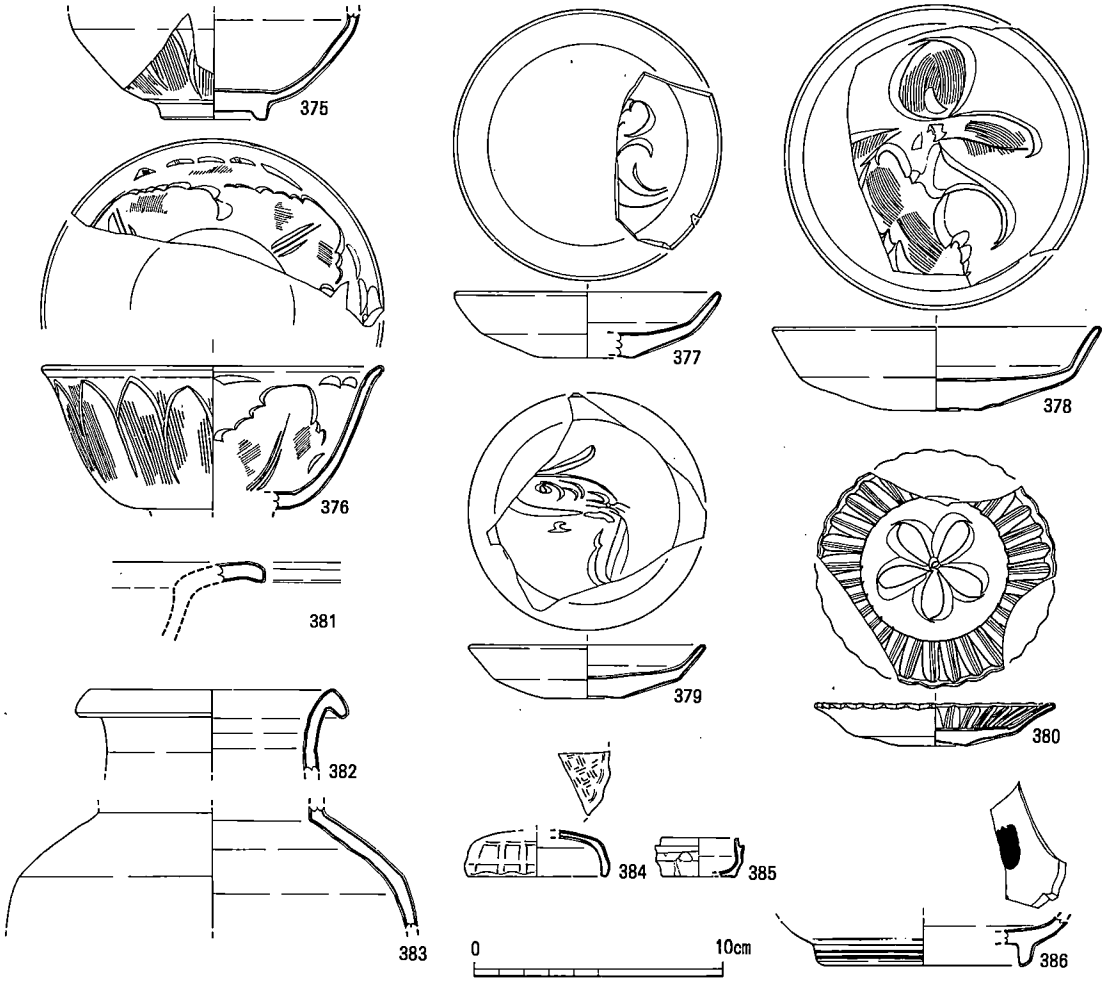


第100図　才田 1号溝出土遺物実測図23（1/3）

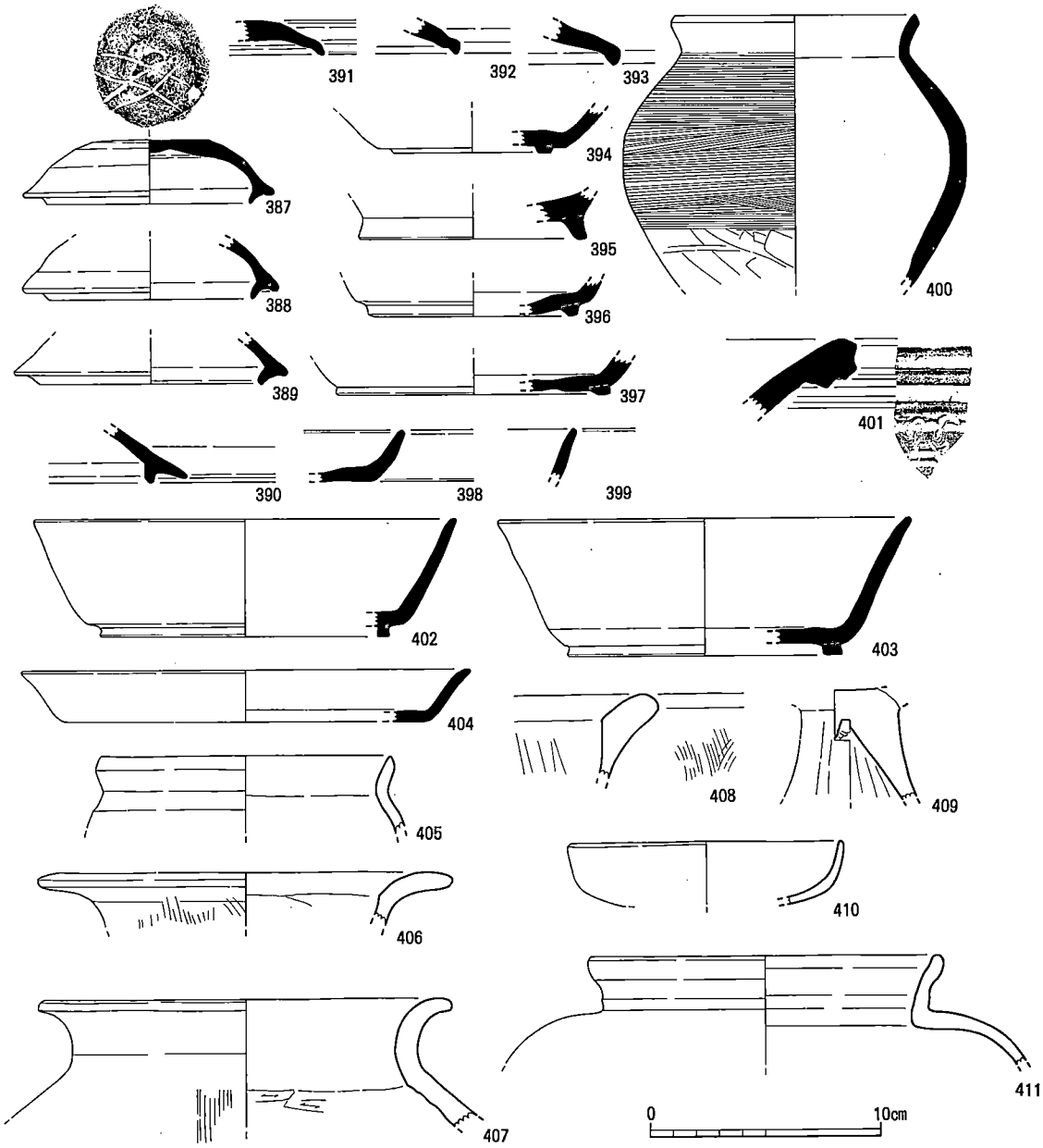
を掛けている。432は全長52cm。最も短い439は全長30cm。

石器（442） 流紋岩の砥石で、中砥であろう。全面を使用している。

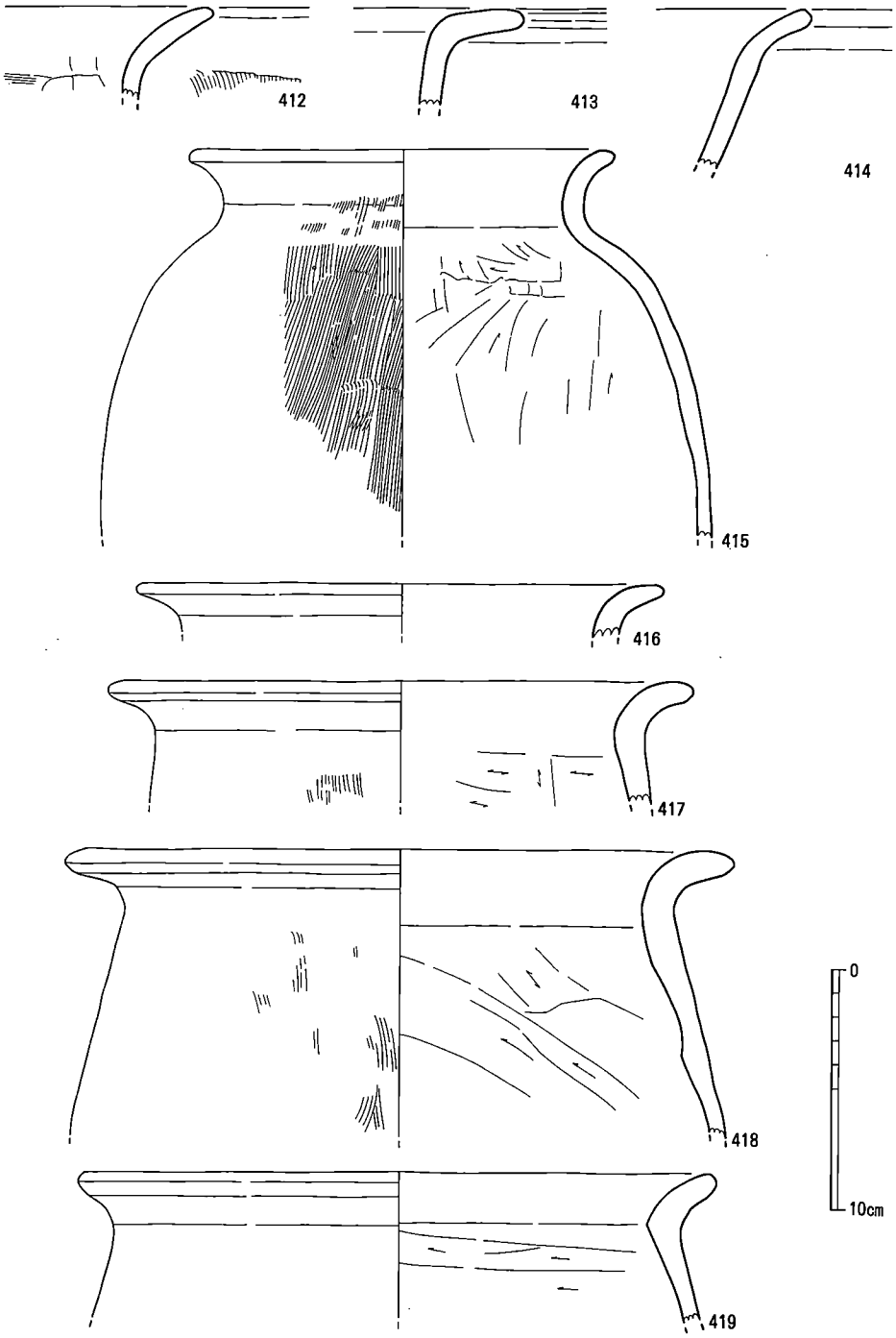
鉄器（443～467） 443～448はタガネ状の鉄器で、443が5本、444と445が2本ずつ錆着しているので、合計12本があることになる。完存する446は全長200cm。西端部上層からまとまって出土した。449・450は刀子で、449は復原全長218cm。455は鎌であろう。453がその先端部かもしれない。456～460は鏃であろう。461は不明。462は桂甲の小札か。463は環状品で用途不明。464～467は釘であろう。



第101図　才田 1号溝出土遺物実測図24（1/3）



第102図　才田 1号溝出土遺物実測図25（1/3）



第103図　才田 1号溝出土遺物実測図26 (1/3)

4号溝［ＳＤ４］（図版13・19、第77図、付図）

ＳＤ１の南側で、それとほぼ平行して走る溝である。１号と４号とは溝の中央部分（心心間）の距離が約300cmを測る。東端部は方形溝と合流する。幅168cm、深さ38cmを測る。断面形態は「Ｕ」字形を呈する。土師器、須恵器、瓦器、陶器、磁器、鉄器4が出土している。

出土遺物（図版37・38、第104～107図1～88、147図89～92）

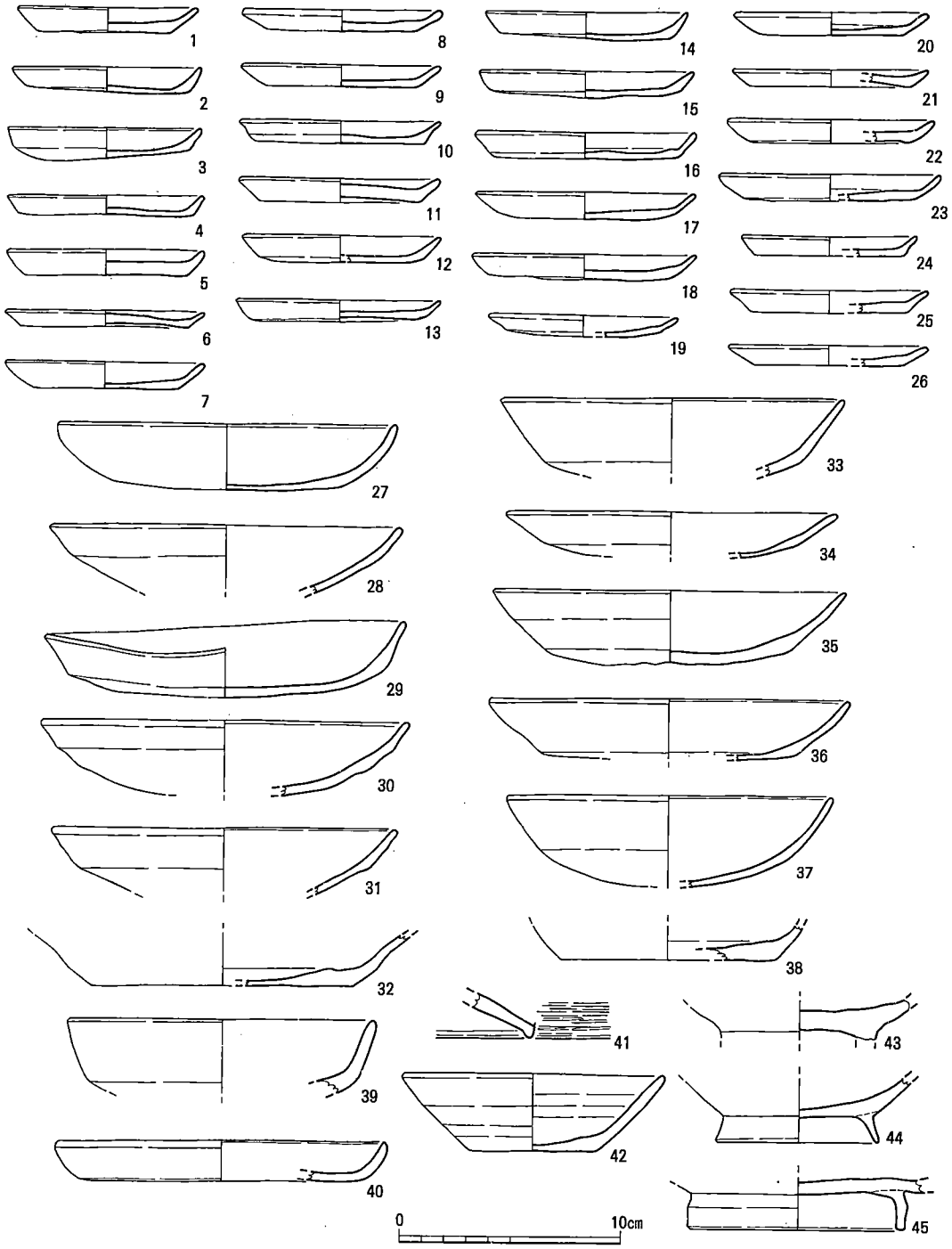
土師器（1～56）　1～26は小皿である。口径は8～10cm、器高0.9～1.2cmを測る。2～6・9・10・13・14・16～18・23は底部外面がヘラ切り離し、その他は糸切り離しを施す。1～3・5～7・9～15・17・18・20・23～26は板状圧痕が残る。27～40は坏である。口径は15.2～16.1cm、器高3～4.2cmを測る。27・32・38は糸切り離しを呈し、その他はヘラ切り及びヘラケズリを施す。39・40は竪穴住居に伴う皿である。41は須恵器を模倣した坏蓋である。外面から口縁端部内面まではミガキを施す。42は坏である。口径は11.6cm、器高3.4cmを測る。43～45は高台付椀である。46～56は甕で、竪穴住居に伴うものがほとんどであろう。

須恵器（57～62）　57は高台付の坏身である。58・59・62は皿である。底部外面はヘラ切り後ナデを施す。60・61は甕の口縁部片である。

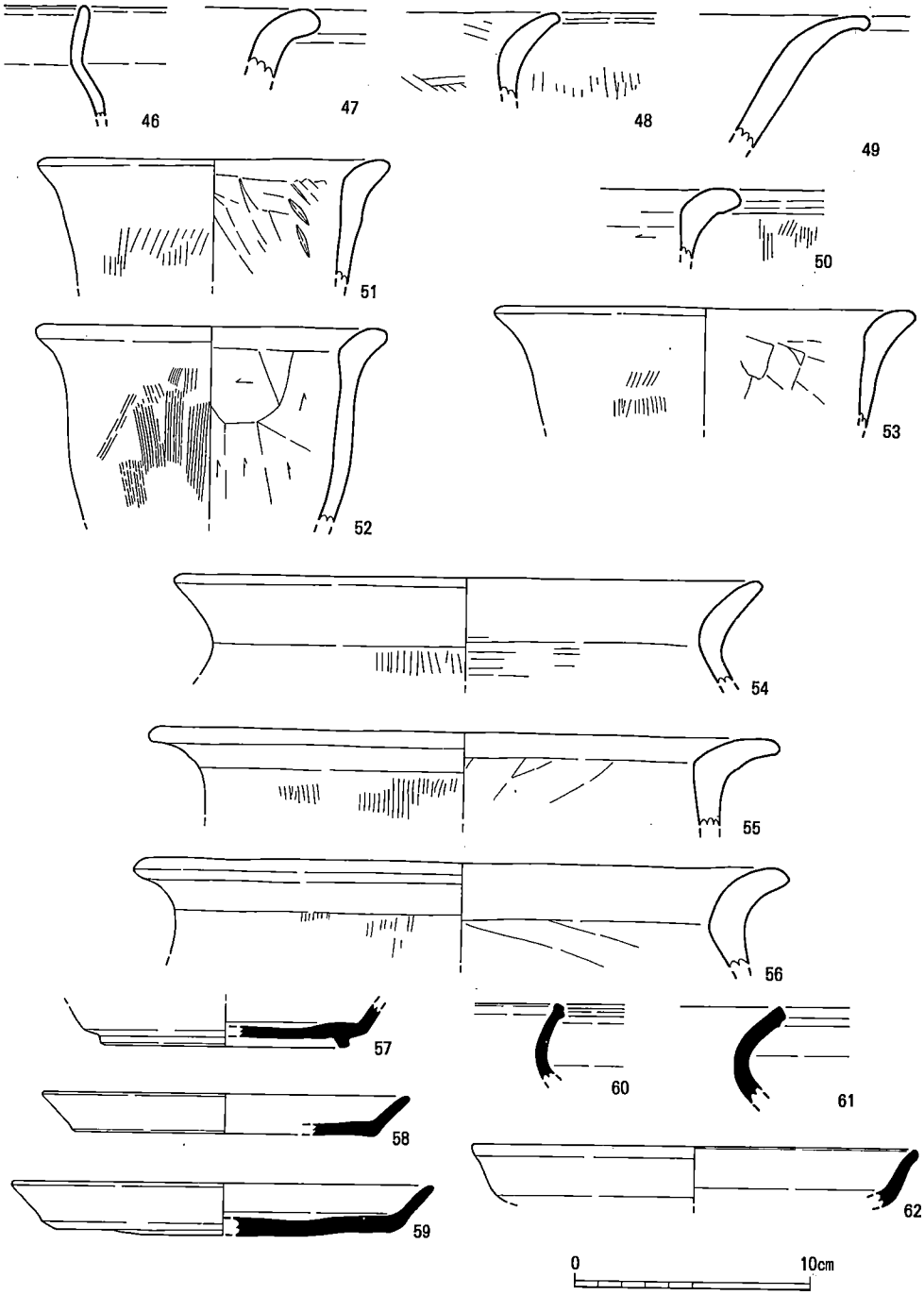
瓦器（63～74）　63は皿である。外面はミガキを施す。64～74は椀である。65の外面の下半には指圧痕が見られる。70の胴部内面にはミガキを施している。72の底部外面にはヘラ記号を付す。

陶器（75～80）　75～80は国産陶器である。75・77は常滑焼の甕胴部片である。77は珠洲焼の甕胴部片か。75は外面が沈線状のカキ目、内面は回転ナデを施す。色調は外面が淡灰色、内面は灰色を呈する。焼成は軟質である。76は頸部片である。色調は淡灰色、焼成は軟質である。外面は格子タタキ、内面はナデ調整を施す。78は外面が大き目の格子タタキ、内面はナデを施す。80は外面は左上がりの平行タタキを施す。81は壺の口縁部片である。釉調は淡暗灰緑色、

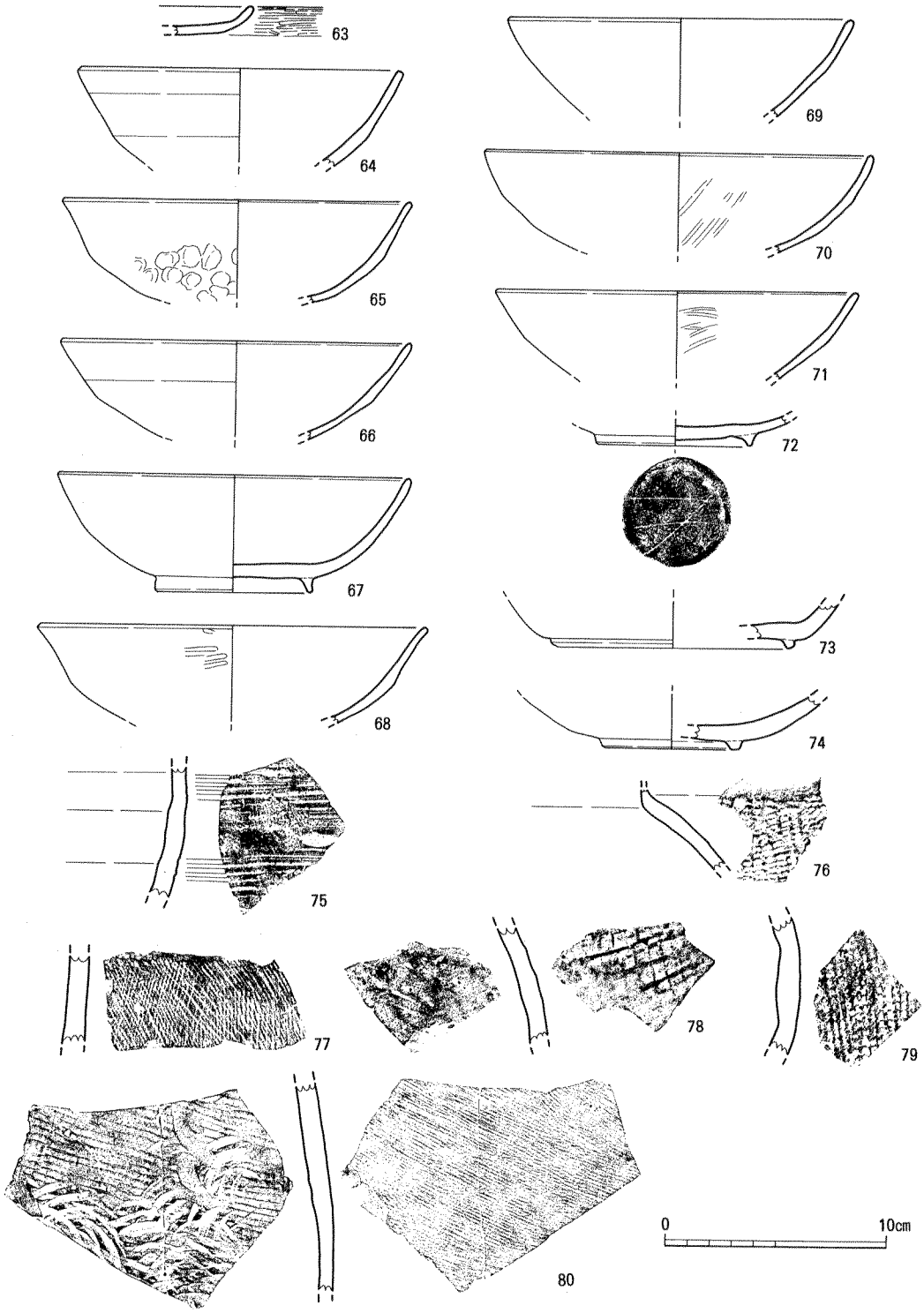
Photo. 9　この土器はどう？



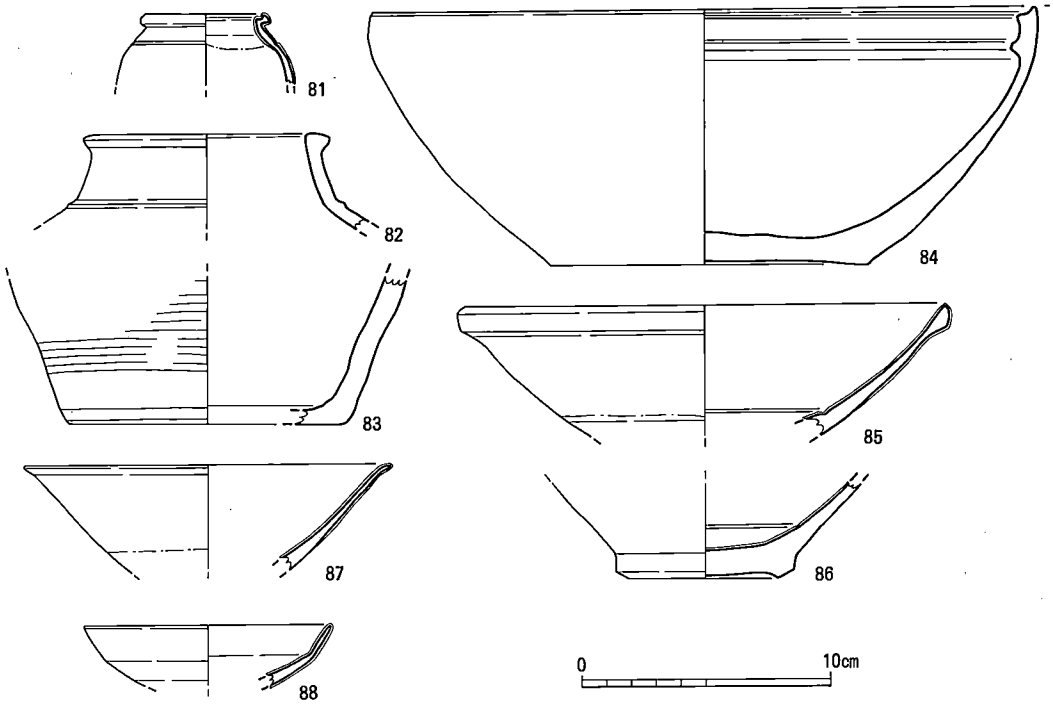
第104図　才田 4号溝出土遺物実測図1 (1/3)



第105図　才田 4号溝出土遺物実測図2（1/3）



第106図　才田 4号溝出土遺物実測図3（1/3）



第107図　才田 4号溝出土遺物実測図4（1/3）

露胎は淡こげ茶色を呈する。82は水注の口縁部である。胎土は白色・黒色粒の細砂粒を含む。釉調は外面が黄灰色、内面が黄灰色～暗灰色を呈する。83は国産陶器の底部片か。外面はカキ目状の回転ナデを施す。色調は内外面とも灰色を呈する。84は鉢である。胎土は石英・白色・黒色粒の細砂粒を多く含む。色調は内外面とも赤茶褐色を呈する。Ⅰ-2類に分類できる。

磁器（85～88）　いずれも白磁である。85は碗で、玉縁口縁を呈する。Ⅳ-1・a類に分類できる。86の底部は85の口縁部と同一個体である。87は碗でⅤ-4・a類に分類できる。88は皿でⅦ-1・a類に分類できる。

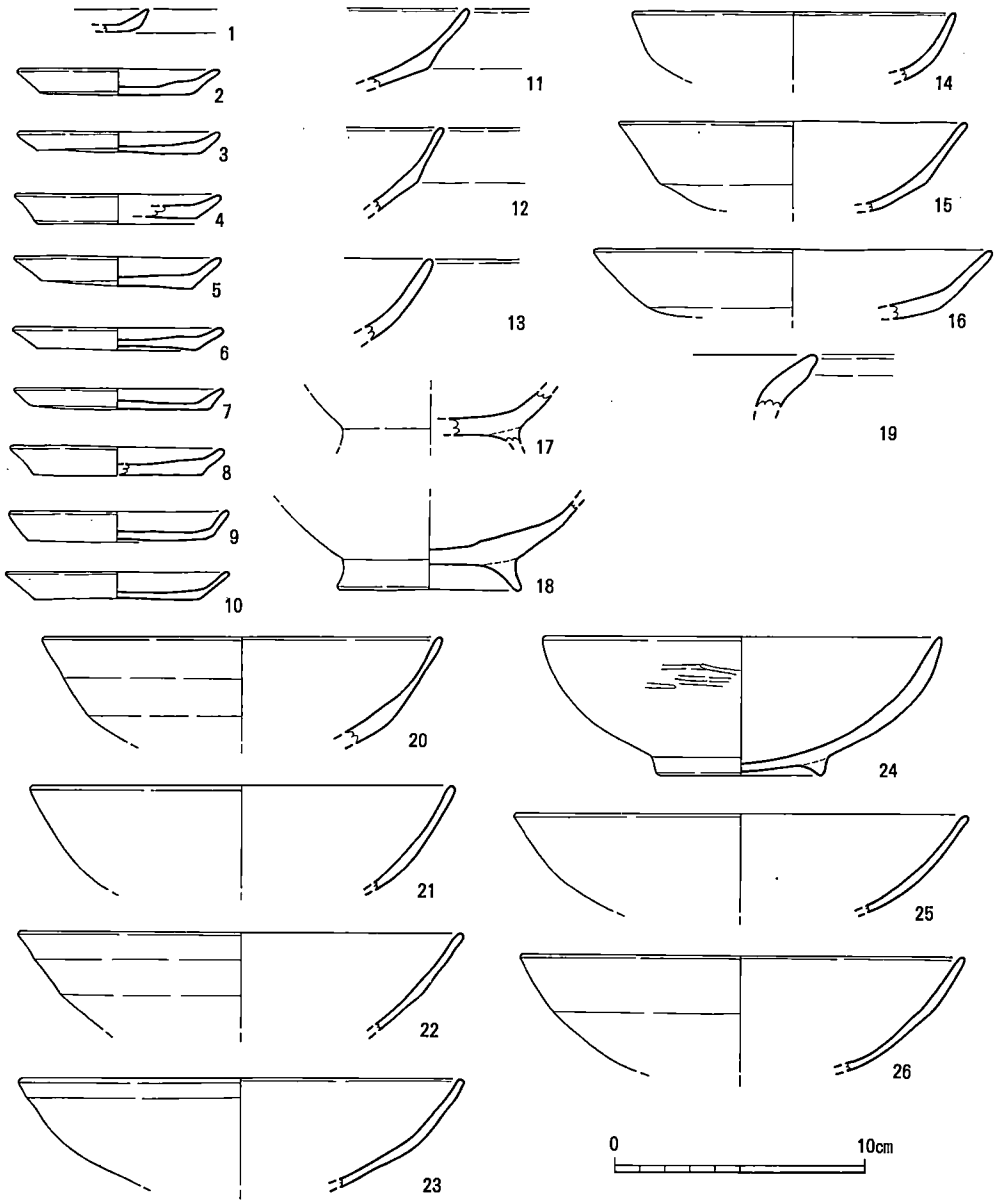
鉄器（89～92）　89～91は鏃であろう。89は二段の逆刺を図示しているが断定はできない。92は小さいが刀子で全長7.7mm。

9号溝［ＳＤ９］（図版3・6・7・9・15、第77図、付図）

調査区西端部付近で東西方向に走る溝で、ＳＤ10と直交するが、東端部はＳＫ72にぶつかってそこで終わっている。幅58cm、深さ16cmを測る。断面形態は逆台形を呈し、底面は平坦である。土師器、瓦器、石鍋1、スラッグ1、軽石2、土錘1、鉄器2が出土している。

出土遺物（図版38・43・47、第108図1～26、140図27、148図28・29）

土師器（1～18） 1～10は小皿である。口径は7.9～8.8cm、器高0.8～1.2cmを測る。底部外面は糸切り離しを施し、2・5・7～10は板状圧痕が残る。11～16は坏である。外面の調整はヘラ切りを施す。13は外面に煤が付着する。17～18は高台付椀である。



第108図　才田 9号溝出土遺物実測図（1/3）

瓦器（20～26） 椀である。24は外面に一部ミガキを施すが、その他は回転ナデ、ナデ調整を行う。

土錘（27） 管状のもので、全長37.5㎜。

鉄器（28・29） 28は鏃の茎と思われる。29は斧で小振りである。

10号溝［ＳＤ10］（図版3・7・15、第77図、付図）

調査区西端にあり、南北方向に走る溝で、さらにその西側にあって平行するであろうＳＤ19とは250㎝の間隔がある。幅117㎝、深さ28㎝を測り、断面形態は逆台形を呈する。土師器、須恵器、瓦器、陶器、磁器、土錘2、瓦1、石臼1などが出土している。

出土遺物（図版43・44、第114図1～9、139図10、140図11・12、144図13）

土師器（1･2） 1は小皿である。口径は7.8㎝、器高1.1㎝を測る。底部外面はヘラ切り離しを施す。2は坏と考えられるが蓋の可能性もある。ここでは坏としておきたい。口径は16㎝、器高1.7㎝を測る。底部外面はナデを施す。

瓦器（3） 椀である。口縁部は欠損し、外面はナデ調整を施す。

陶器（4） 壺の口縁部片である。

磁器（6～8） 6は白磁碗でＶ-3類に分類できる。7・8は龍泉窯系青磁碗の口縁部片である。7はＩ-1類、8はＩ-3類に分類できる。

須恵器（9） 坏蓋である。

瓦（10） 丸瓦片である。内面には布目がある。厚さは最大21㎜。

土錘（11・12） ともに管状で、11は全長51.5㎝、12は全長35㎜。

石臼(13) 安山岩製で碾面にはあまり深くない溝が刻まれる。

11号溝［ＳＤ11］（図版3・6～8・12、付図）

Ｃ・Ｄ3区にあり、溝というより細長い土坑とすべきであったかもしれない。ＳＫ61～63を切っている。土師器、須恵器、瓦器、陶器が出土した。

出土遺物（第114図1～16）

土師器（1～12） 1～9は小皿である。口径は7.8～8.9㎝、器高0.9～1.15㎝を測る。底部外面は糸切り離しを施し、1・2・6・7は板状圧痕が残る。8～12は坏である。11は口径16.4㎝、器高3㎝を測る。8～11は糸切り離しを施し、板状圧痕がみられる。12は口径13.2㎝、器高3.3㎝を測る。ヘラ切り後板状圧痕を施す。

瓦器（14） 椀である。外面は回転ナデ、内面はナデ調整を行う。

陶器（15） 水注の口縁部片である。色調は灰色を呈する。

須恵器（16） 坏身の底部である。高台径は6.6.㎝を測る。

12号溝［ＳＤ12］（図版3・4・7・14、第77図、付図）

調査区南端にて、さらにその南にあるＳＤ21と250～300cmの間隔をおいてほぼ平行に東西に走る溝である。幅362cm、深さ138cmを測る。部分的に段掘りを呈し、2回以上の掘り直しが見られる。土師器、須恵質土器、瓦器、陶器、土製人形1、石鍋2、スラッグ3、ふいご羽口1、軽石4、土錘4、鉄器3、台石1などのほか西半部から「たかし小僧」が多数出土している。

出土遺物（図版38・39・42・43・44、第109～113図1～86、137図87・88、139図89、140図90～93、142図94、144図95、148図96～98）

土師器（1～48・84・85） 1～17は小皿である。1～14は東側の上・下層、14～17は西側から出土した。口径は8～9.2cm、器高１～1.4cmを測る。1～3・5～17は底部外面が糸切り離し、4はヘラ切り離しである。4・7・8・10・12・16・17は板状圧痕が残る。18～46は坏である。18～30は東側、31～46は西側から出土した。口径14.4～18.4cm、器高3～3.7cmを測る。外面底部は糸切り離しを呈する。また、底部外面には板状圧痕が残るものが多い。48は鍋である。口縁部上面は草本の類の茎を押圧している。84は甕、85は鍋の口縁部片である。

須恵質土器（49） 東播系のすり鉢の口縁部片である。

瓦器（50～61） 椀である。50は外面がナデ・回転ナデの後ミガキ、52はナデの後ミガキを全面に施している。

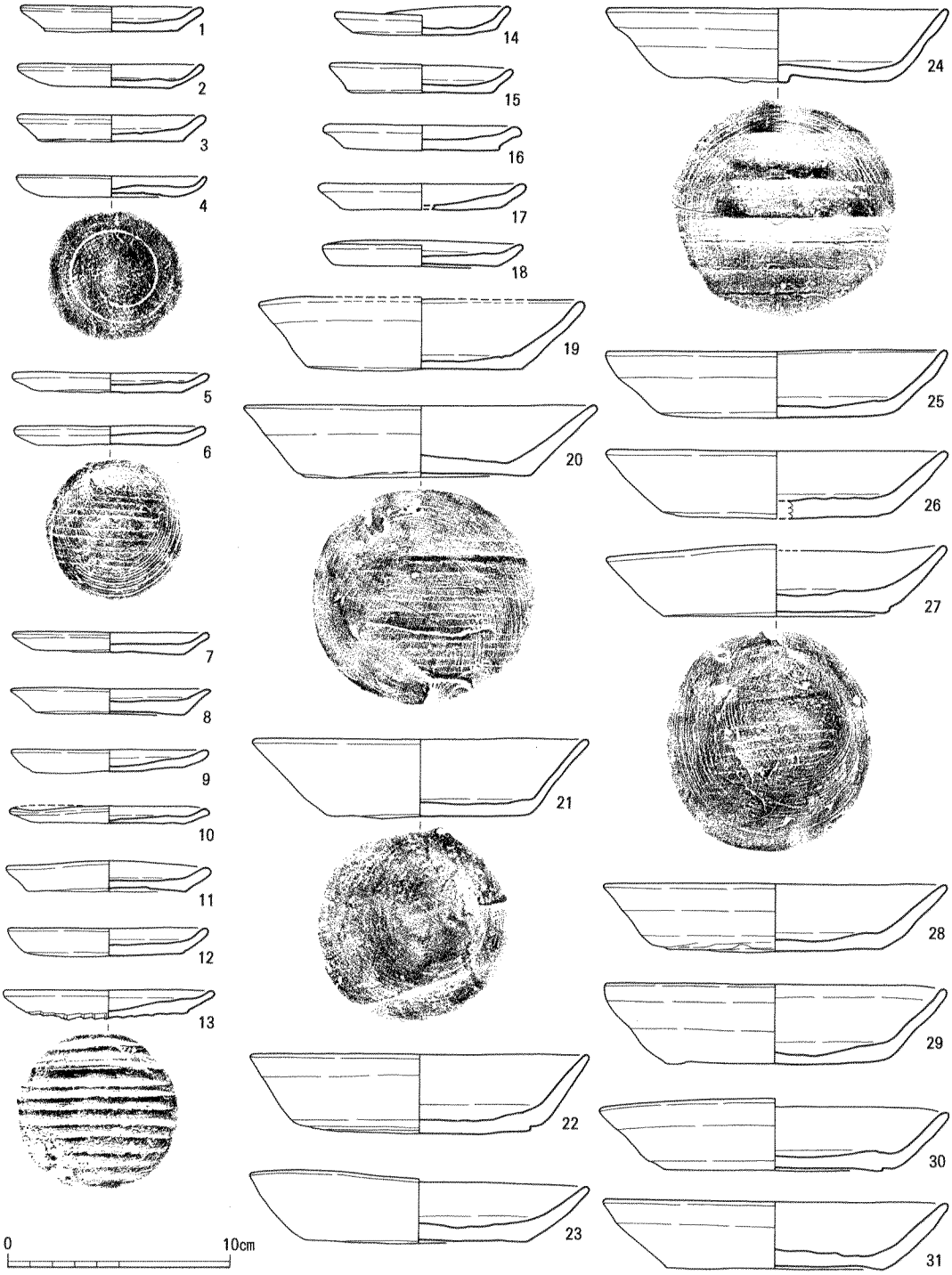
陶器（62～72） 62・63は四耳壺の把手部片である。64は口径33.7cmを測る盤である。釉調は口縁部が灰黄緑色、口縁下が白灰緑色の下釉が施されている。露胎は灰色に近い茶褐色を呈する。Ⅰ-1・a類に分類される。65は64の底部片で同一個体である。66～72は国産陶器である。66・67は常滑焼の甕の口縁部片で、69～72は胴部片である。70の胴部には二ノ田窯に類似する押印が施されている。胎土は微砂、黒色粒を含み、色調は外面が黒灰色、内面が灰色を呈する。71の色調は外面が茶褐色、内面が薄黄茶褐色を呈する。72の色調は外面が灰茶褐色、内面が灰黄褐色を呈し、67と同様の灰黄緑色の自然釉がかかる。67は細砂・赤褐色粒を含む白茶灰色、色調は茶褐色を呈し、口縁部付近には灰黄緑色の自然釉がかかる。68は甕の胴部片である。外面は格子タタキ、内面はナデ調整である。色調は外面が淡黒灰色、内面が淡灰色を呈する。

磁器（73～83） 73～80は白磁で、73～79は碗である。73はⅧ-1類に分類できる。74はⅧ-2類に分類できる。75～77はⅤ-4・a類に分類できる。78はⅥ-1・b類に分類できる。79はⅦ類に分類できる。80～83は皿である。80は白磁のⅢ-2類に分類できる。81・82は同安窯系青磁で、Ⅰ-1・a類に分類できる。83は龍泉窯系青磁で、Ⅰ-3類に分類できる。

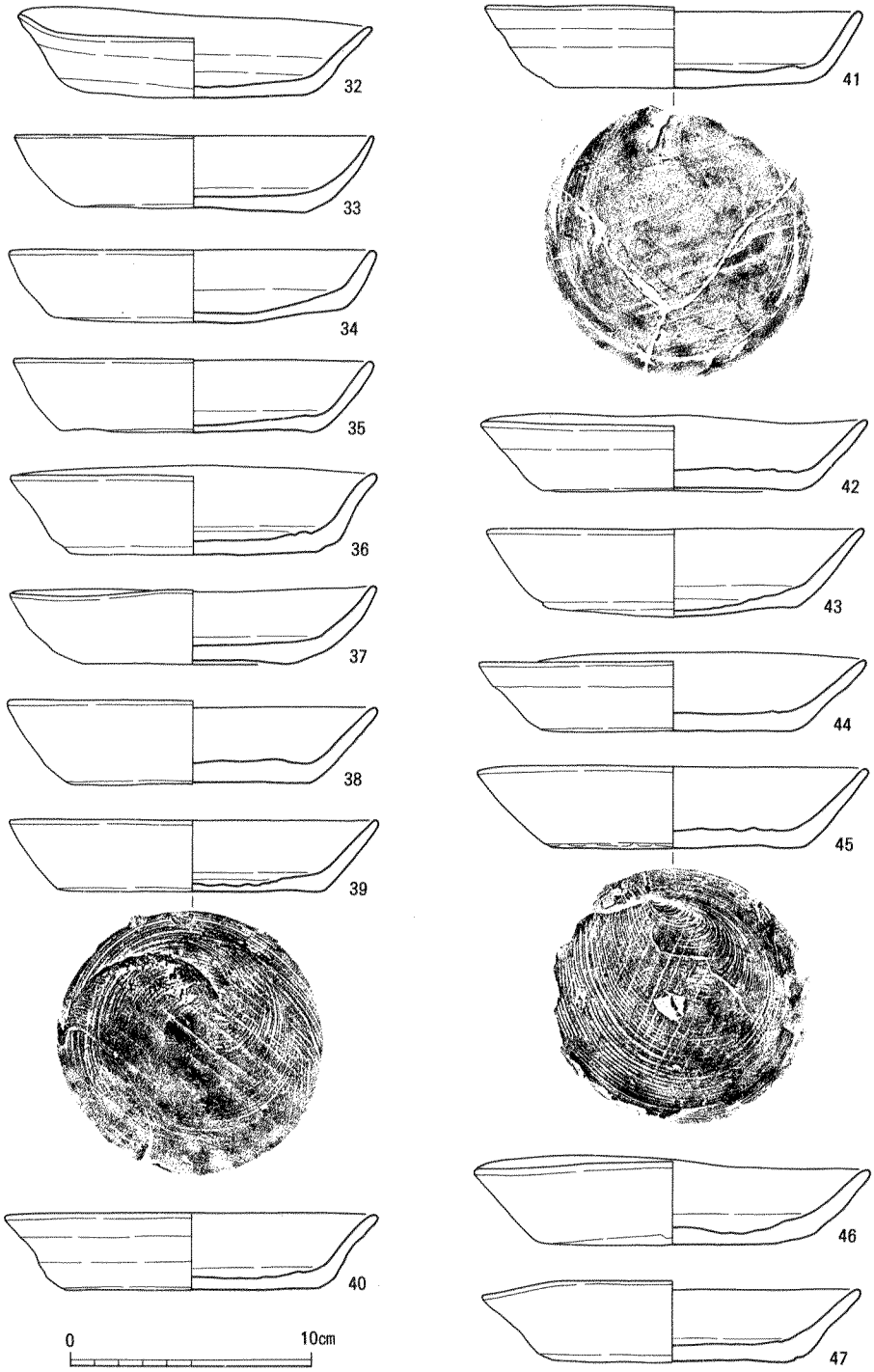
石鍋（87・88） ともに滑石製で、87は外面に煤が付着する。復原口径は20.6cm。88の内面には石材を削り出す時に付いたらしい傷痕が多数見られる。復原口径は18.6cm。

ふいご羽口（89） 二次熱で灰青色い変色した所がある。最大径93mm。

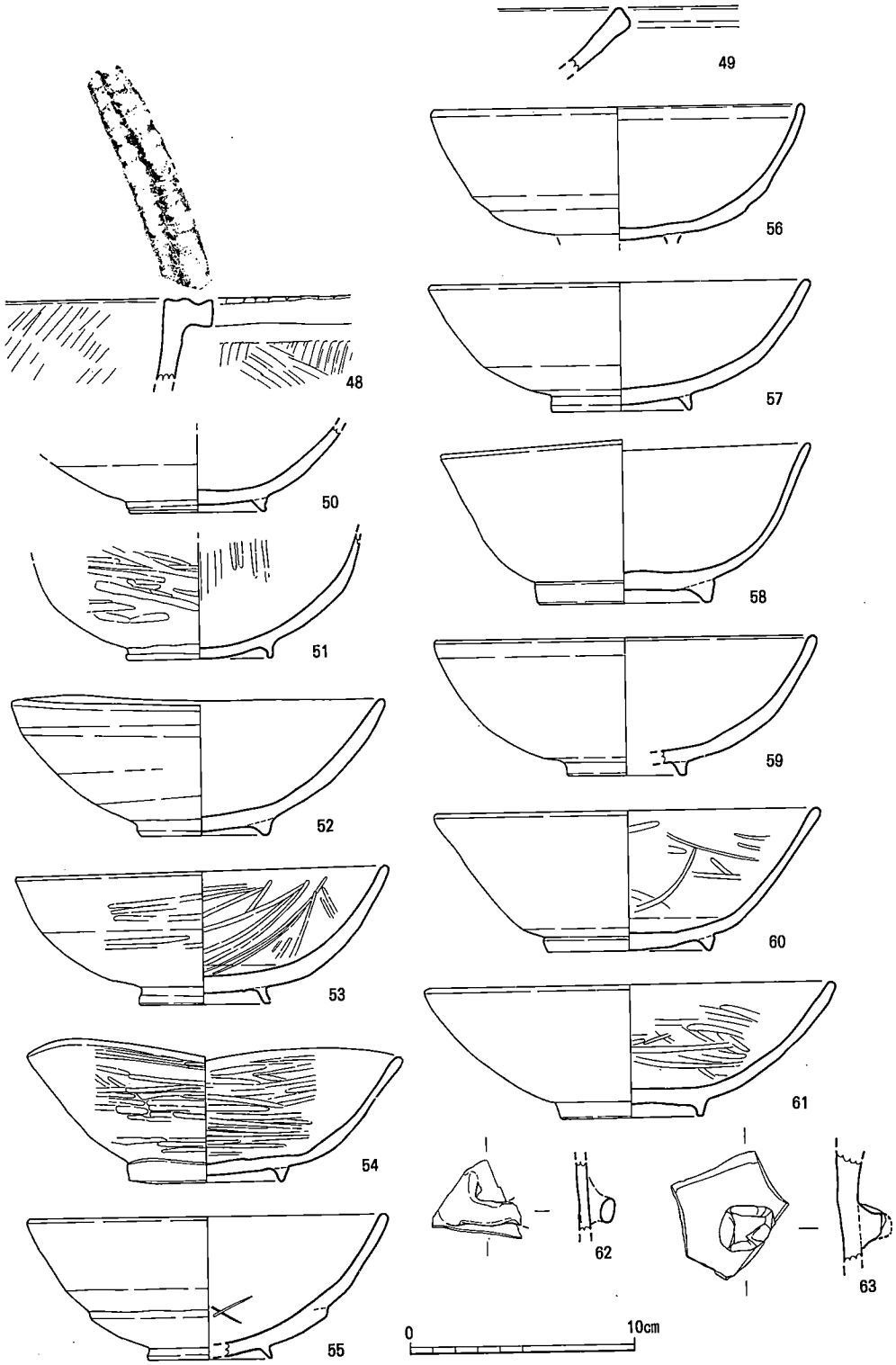
土錘（90～93） 管状のもので、90は全長55mm、重さ5g。化粧土を掛けている。



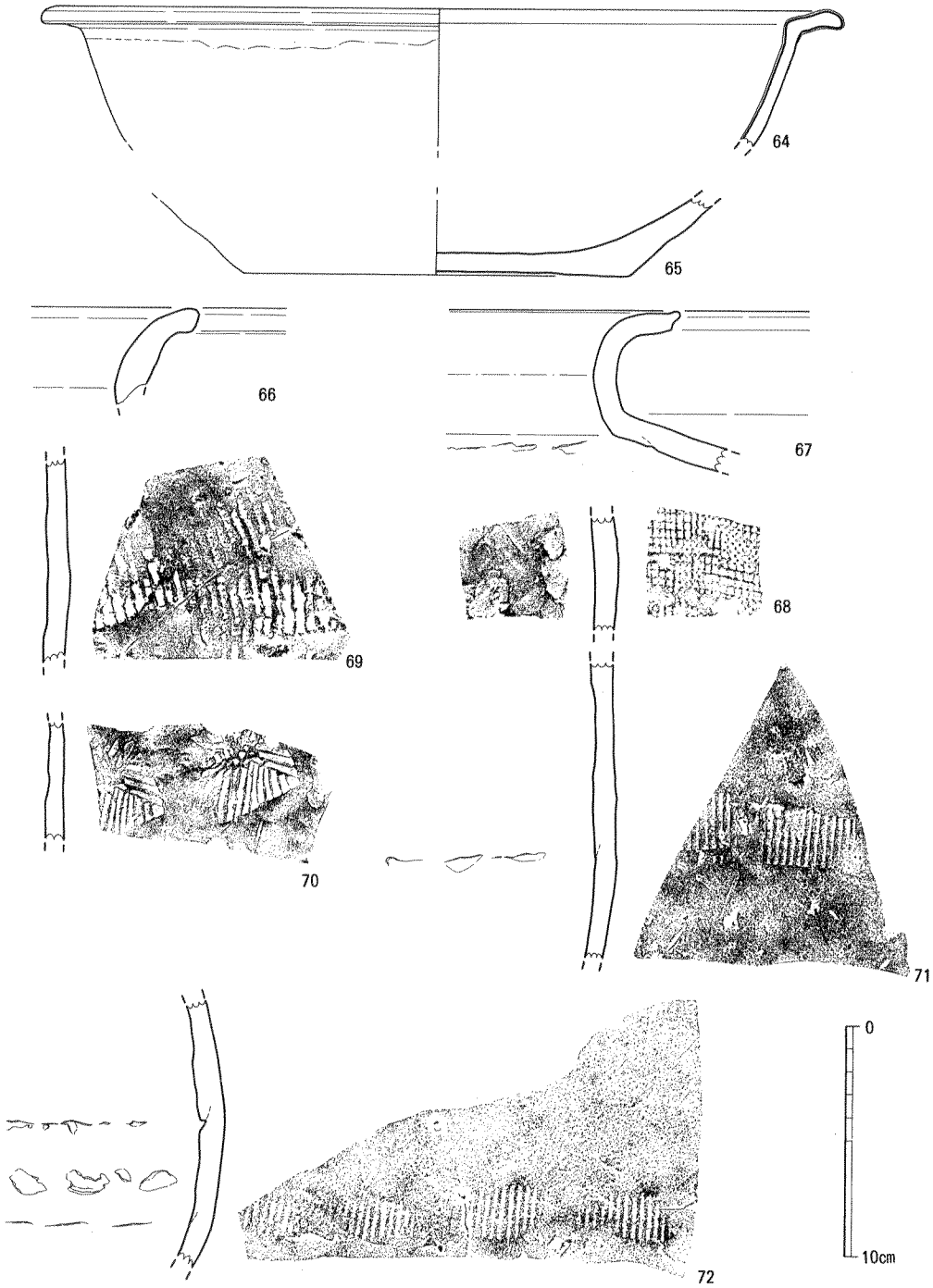
第109図　才田 12号溝出土遺物実測図１（1/3）



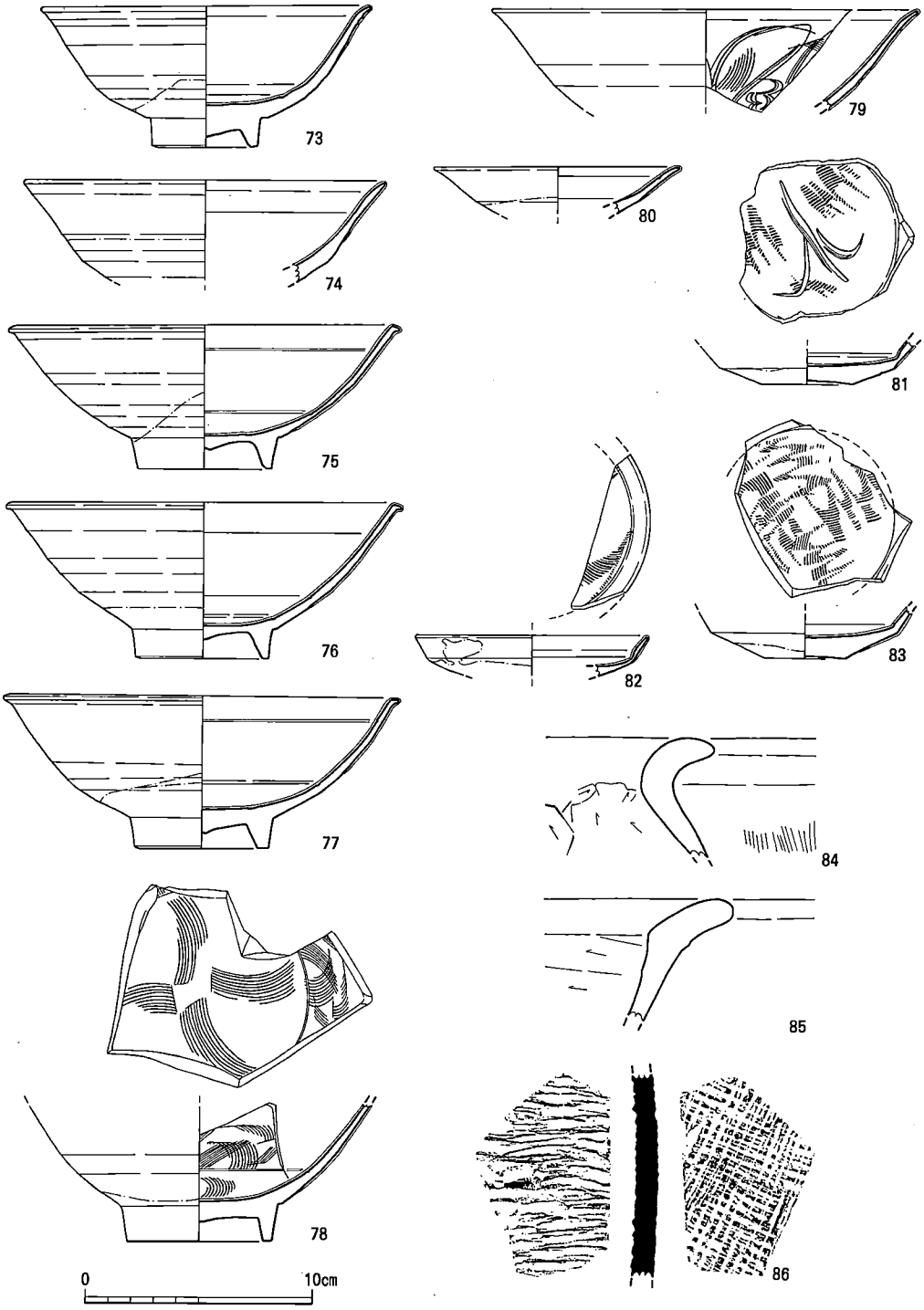
第110図　才田 12号溝出土遺物実測図２（1/3）



第111図　才田 12号溝出土遺物実測図３（1/3）



第112図　才田 12号溝出土遺物実測図４（1/3）



第113図　才田 12号溝出土遺物実測図５（1/3）

土製人形（94） 現存長65㎜の土製人形で、人形＝「ひとがた」というより「にんぎょう」と言った方が妥当なように思える造形品である。西半部から出土した。両手・両足と頭部、体の左側の一部を欠失したもので、腰から股間、臀部にかけて沈線によって「まわし」かと思える表現をしている。やや膨らんだ腹部には臍も表現し、胸にも沈線を横に入れている。首と右腕のはずれた部分からすれば、これらは別づくりにしたものを差し込むようにして全体を造形したものと思われる。頭・両手・両足ともに体より前方に出ているので直立した像ではなく、体を少しくぐめた格好をしている。胸の両側に一孔と、左腰部から右股関節付近へ一孔――これは途中で枝分かれして右股関節側では二孔となっている――が貫通し、この孔の中には炭化した竹のようなものが入っていた。ほかに貫通しない孔が左脇下と右腰部背面にある。股間には径6㎜、深さ4.5㎜の窪みがあって陽物を表示していた名残りらしい。

以上の状態から考えるに、この人形は、まわしをした男性の裸形像をつくり、乾く前に串刺しにして、焼成後に頭・両手・両足・陽物をもぎとったものではないか、と思える。きわめて呪術的な所作の窺える資料である。

台石(95) 安山岩の丸みを持った石で台石であろう。強い二次熱を受けている。

鉄器（96～98） 96は刀子か。97・98は鏃の茎であろう。

13号溝［ＳＤ13］（図版3～7・22、付図）

Ｅ3区の東側にて南北に走る細い溝である。ＳＤ14～16とはほぼ平行している。ＳＢ６の主軸とも平行するので、あるいは関連性があるかもしれない。土師器、瓦器が出土している。

出土遺物（第114図1～8）

土師器（1～3・6・7）1は小皿である。口径は8.4～9.4㎝、器高は0.7～0.8㎝を測る。6は甕の口縁部である。外面はハケ目を施す。7は坏である。口径13.2㎝を測る。竪穴住居に伴うものであろう。

瓦器（4） 椀の口縁部片である。外面上半は回転ナデ、中位はナデの後一部ミガキを施す。

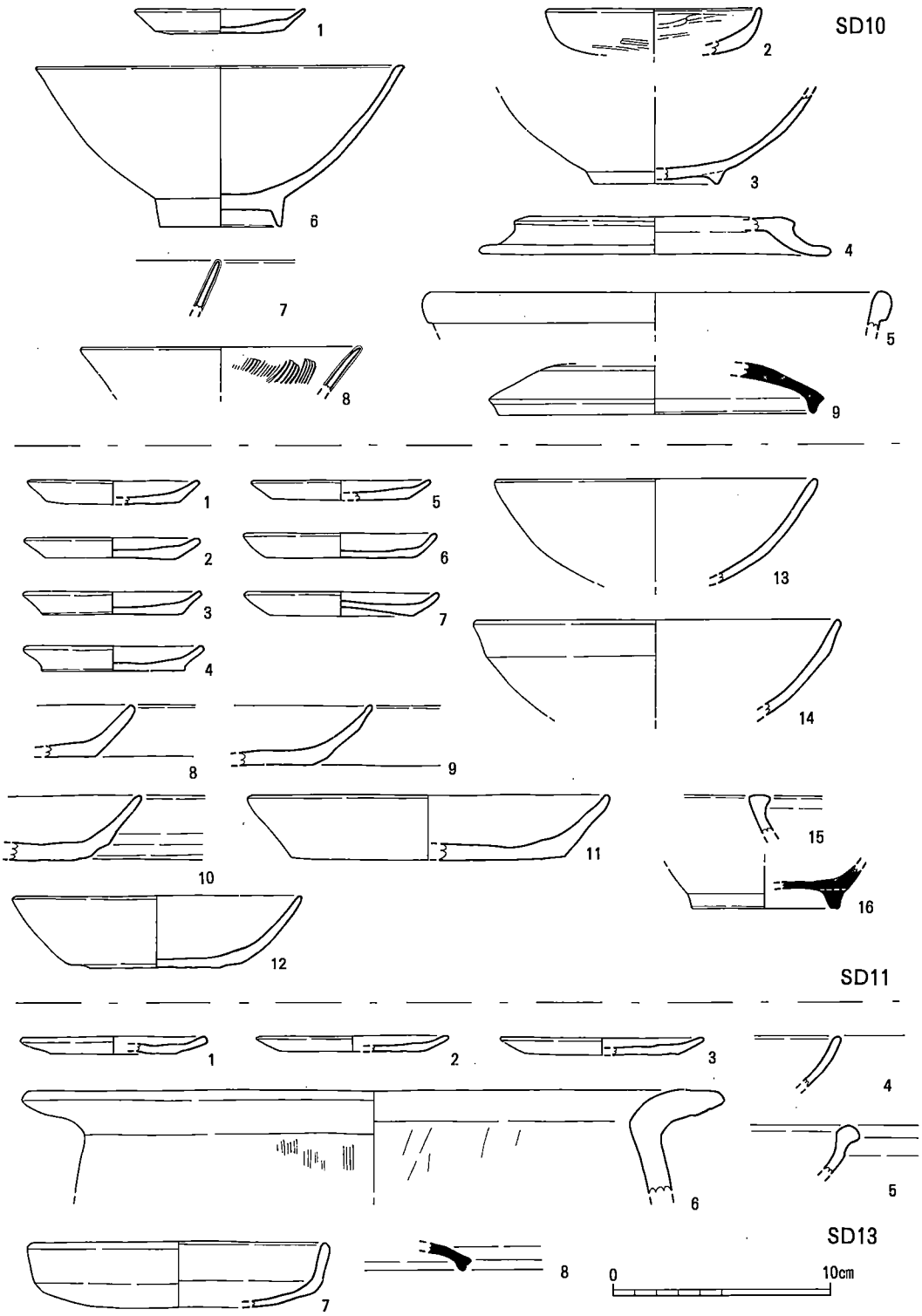
14号溝［ＳＤ14］（図版3～7・22、付図）

Ｅ3区でＳＤ13の西にあり、南半は段落ちで削られていた。ＳＤ13とほぼ平行して南北に走る。土師器、瓦器が出土している。

出土遺物（第115図1～4）

土師器（1～3） 1は小皿の底部片である。底部外面は糸切り離しを行う。2・3は坏である。

瓦器（4） 椀の口縁部片である。



第114図　才田 10・11・13号溝出土遺物実測図（1/3）

15号溝［ＳＤ15］（図版3～7・22、付図）

Ｅ3区でＳＤ14の西にあり、同じく南半は段落ちで削られていた。やはりＳＤ14とほぼ平行している。土師器、瓦器が出土している。

出土遺物（第115図1～8）

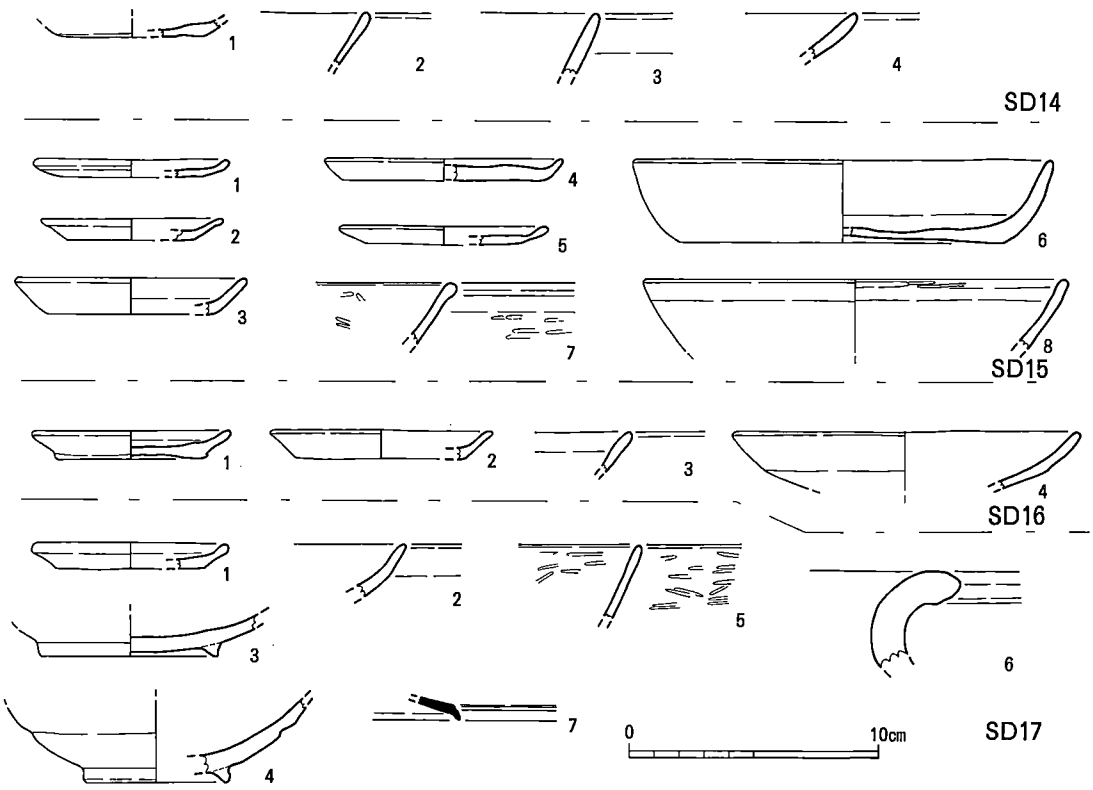
土師器（1・2・4～6）　1～5は小皿である。1・2・4・5は口径が7～9.5cm、器高0・75～1.5cmを測る。底部外面は糸切り離し、4・5は板状圧痕が残る。6は坏で、口径16.5cm、器高3.3cmを測る。底部外面は糸切り離しを施す。

16号溝［ＳＤ16］（図版3～7・22、付図）

Ｅ4区でＳＤ15の西北にあり、北側でＳＤ17と接する。やはりＳＤ15とほぼ平行している。土師器が出土している。

出土遺物（第115図1～4）

土師器（1～4）　1・2は小皿である。口径は7.8cmと8.7cm、器高1cmと1.2cmを測る。1は底部外面が糸切り離し後板状圧痕が残る。3・4は坏である。4は口径13.6cmを測る。



第115図　才田 14・15・16・17号溝出土遺物実測図（1/3）

17号溝［ＳＤ17］（図版3～7・22、付図）

Ｅ4区でＳＤ16の北にある。ＳＤ16の延長かとも思われる。土師器、瓦器、スラッグ2、軽石1が出土した。

出土遺物（第115図1～7）

土師器（1・2・6） 1は小皿である。口径7.6cm、器高1cmを測る。底部外面は糸切り離しを施す。2は坏の口縁部片である。6は甕の口縁部片である。

瓦器（3～5） 椀である。3·4は底部片である。5は口縁部片でミガキを施す。

須恵器（7） 蓋である。

18号溝［ＳＤ18］（図版3・7・14、付図）

Ｃ・Ｄ・Ｅの3区に東西方向に26mが検出された。ＳＤ20と4・7号住居跡を切っている。出土遺物はない。新しい溝であったように記憶する。

19号溝［ＳＤ19］（図版3・7・15、第77図、付図）

調査区西端にて、ＳＤ10とほぼ平行して南北に走る溝である。ごく一部しか検出できていない。幅271cm、深さ43cmを測る。二段掘りを呈し、断面形態は「Ｕ」字形を呈する。土師器、須恵器、須恵質土器、陶器、磁器、石鍋2、スラッグ1、軽石1、土錘1、鉄器2が出土している。

出土遺物（図版40・43・47、第116・117図1～43、140図44、148図45・46）

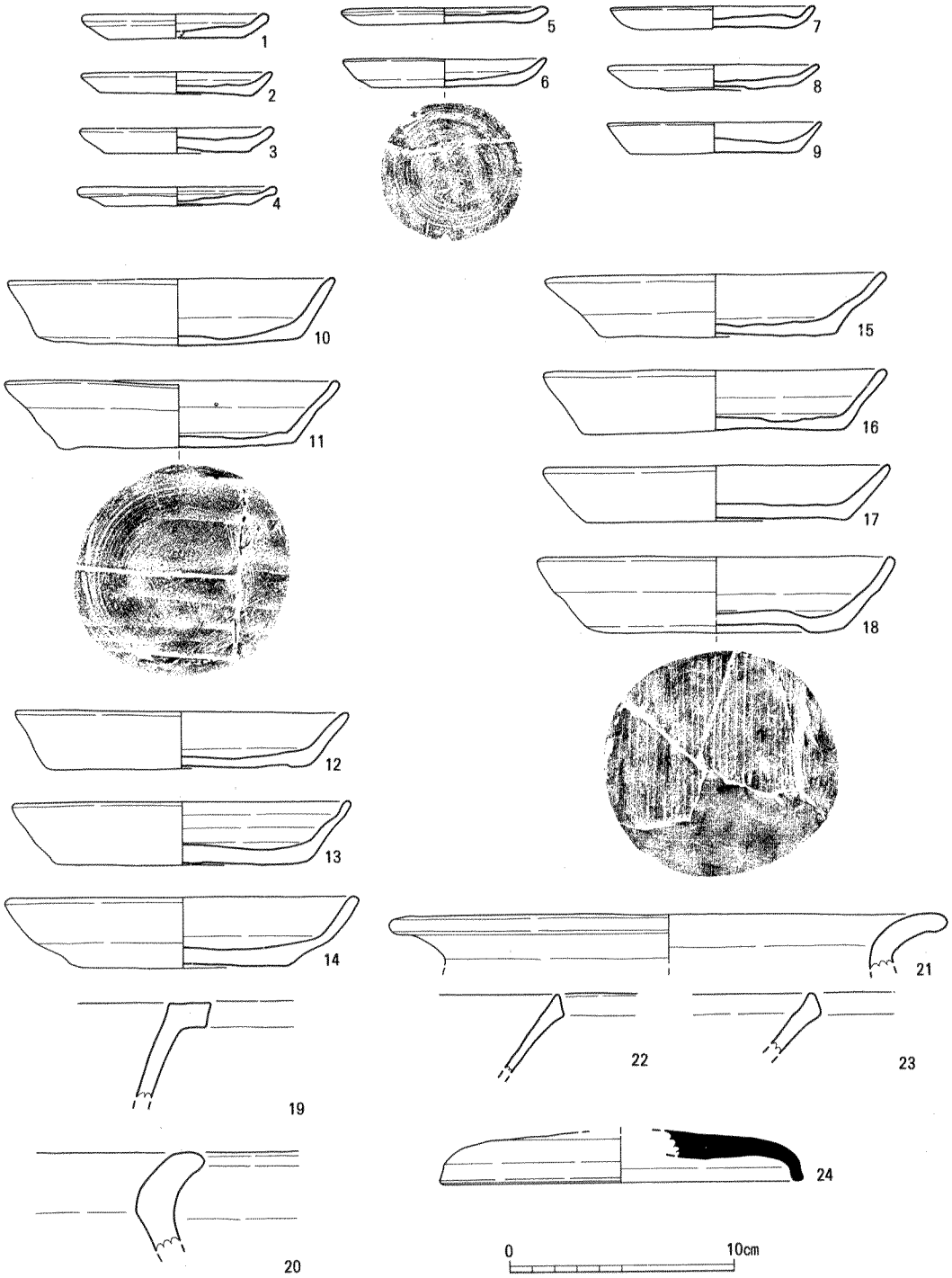
土師器（1～21） 1～9は小皿である。口径8.1～9.6cm、器高0.8～1.4cmを測る。底部外面は糸切り離しを施すが、9はヘラ切りを施している。4・7以外は板状圧痕が見られる。10～18は坏である。口径は14.4～15.6cm、器高2.45～3.2cmを測る。底部外面は糸切り離し後板状圧痕を施す。19は鍋片である。20・21は甕の口縁部片である。

須恵器（24）坏蓋である。口径は15.5cmを測り、外面天井部は回転ヘラケズリを施す。

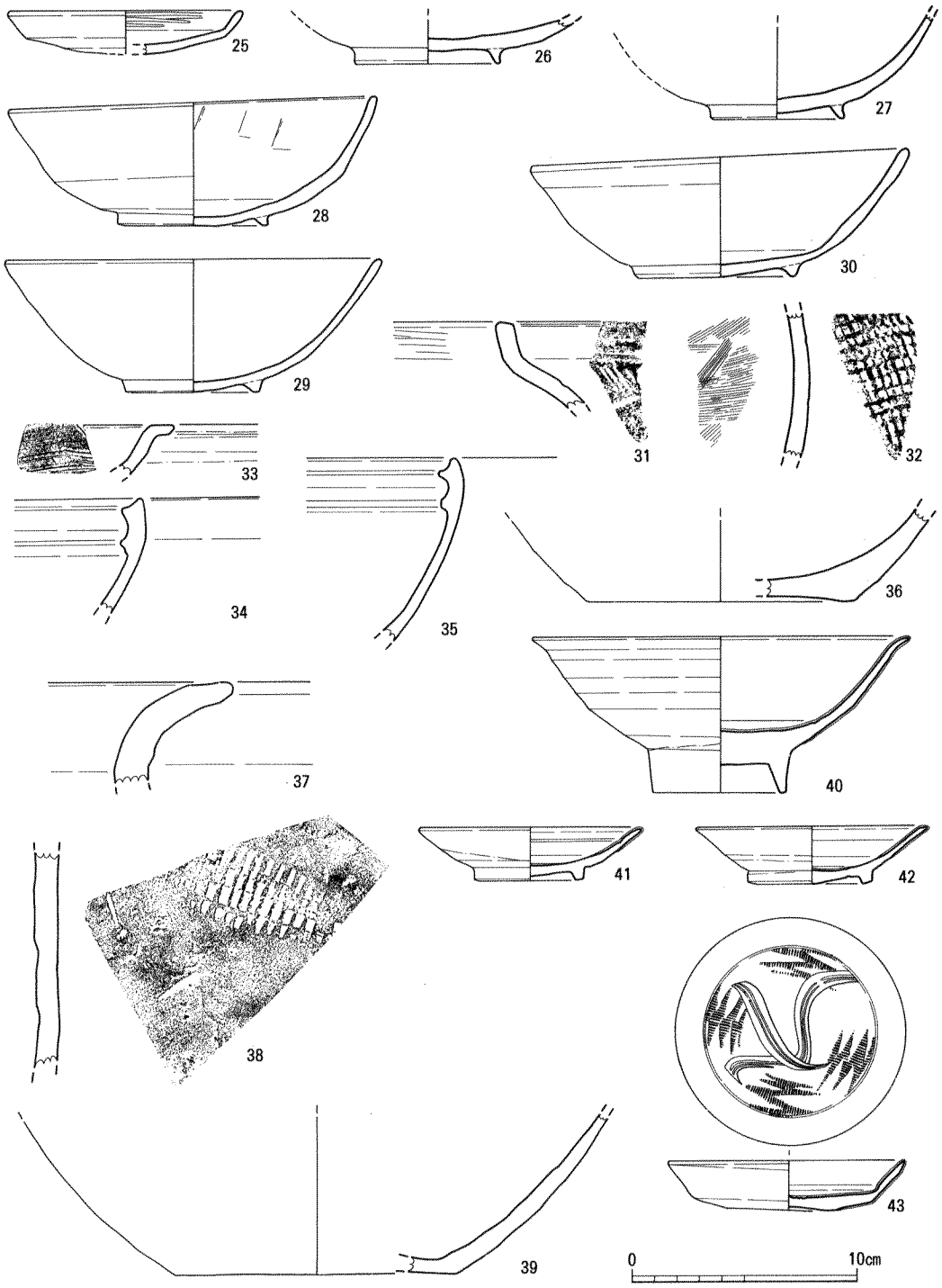
須恵質土器（22・23） 東播系の鉢の口縁部である。

瓦器（25～32） 25は小皿である。外面は回転ナデ、内面は回転ナデの後ミガキを施す。26～30は椀である。28は外面が回転ナデ、ナデを施す。32は須恵質か瓦質であるか判断できない。外面は格子タタキ、内面はハケ目を施す。

陶器（33～39） 33・34は鉢のＩ-2・a類に分類できる。色調は紫褐色、茶褐色を呈する。同一個体の可能性が高い。36は33か34の鉢の底部である。色調は外面が灰茶褐色、内面は暗紫灰色を呈する。37～39は常滑焼の甕である。37は口縁部片で、色調は外面が暗灰色、内面が灰緑色を呈する。38は胴部片である。接合部は格子状の押印が施されている。色調は灰色を呈する。39は底部片で、色調は灰色を呈する。外面はナデ、内面は回転ナデが一部見られるが、底部に近くなるとナデ調整を行う。



第116図　才田 19号溝出土遺物実測図１（1/3）



第117図　才田 19号溝出土遺物実測図２（1/3）

磁器（40～43） 40～43は白磁である。40は碗で、Ⅴ-2・a類、42・43は皿で、Ⅲ-1類に分類できる。43は同安窯系の皿である。Ⅰ-1・b類に分類できる。

土錘（44） 管状のもので、現存長41mm。

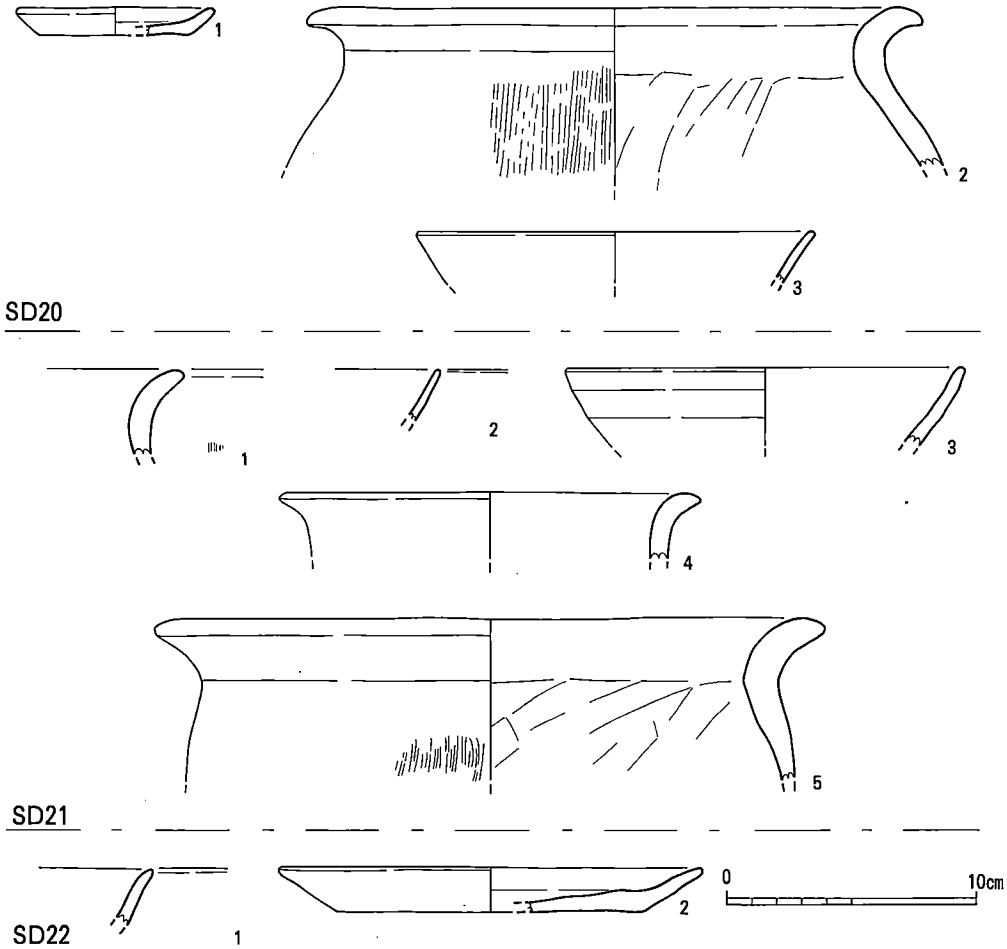
鉄器（45・46） 45はくさびのようなものであろうか。46は鏃の茎であろう。

20号溝［ＳＤ20］（図版3・7・8・14、付図）

Ｃ3区からＥ1区へ約30mが検出された。ＳＥ１とＳＤ12・18に切られている。土師器が出土している。

出土遺物（第118図1～3）

土師器（1～3） 1は皿で口径7.6cm、器高1.1cmを測る。2は甕。3は坏で口径15.6cmを測る。



第118図　才田 20・21・22号溝出土遺物実測図（1/3）

21号溝［ＳＤ21］（図版3・7・14、付図）

調査区の南端で、ＳＤ12とほぼ平行して東西に走る溝である。土師器・瓦器が出土している。

出土遺物（第118図1～5）

土師器（1～3） 甕の口縁部片である。

瓦器（4・5） 椀で、5は口径15.6cmを測る。

22号溝［ＳＤ22］（図版3・7・14、付図）

調査区南端で、ＳＤ12に切られてごく一部しか知り得ない溝である。ＳＤ12より北側へ伸びていないので、あるいはＳＤ12の支流のようなものかもしれない。土師器が出土している。

出土遺物（第118図1・2）

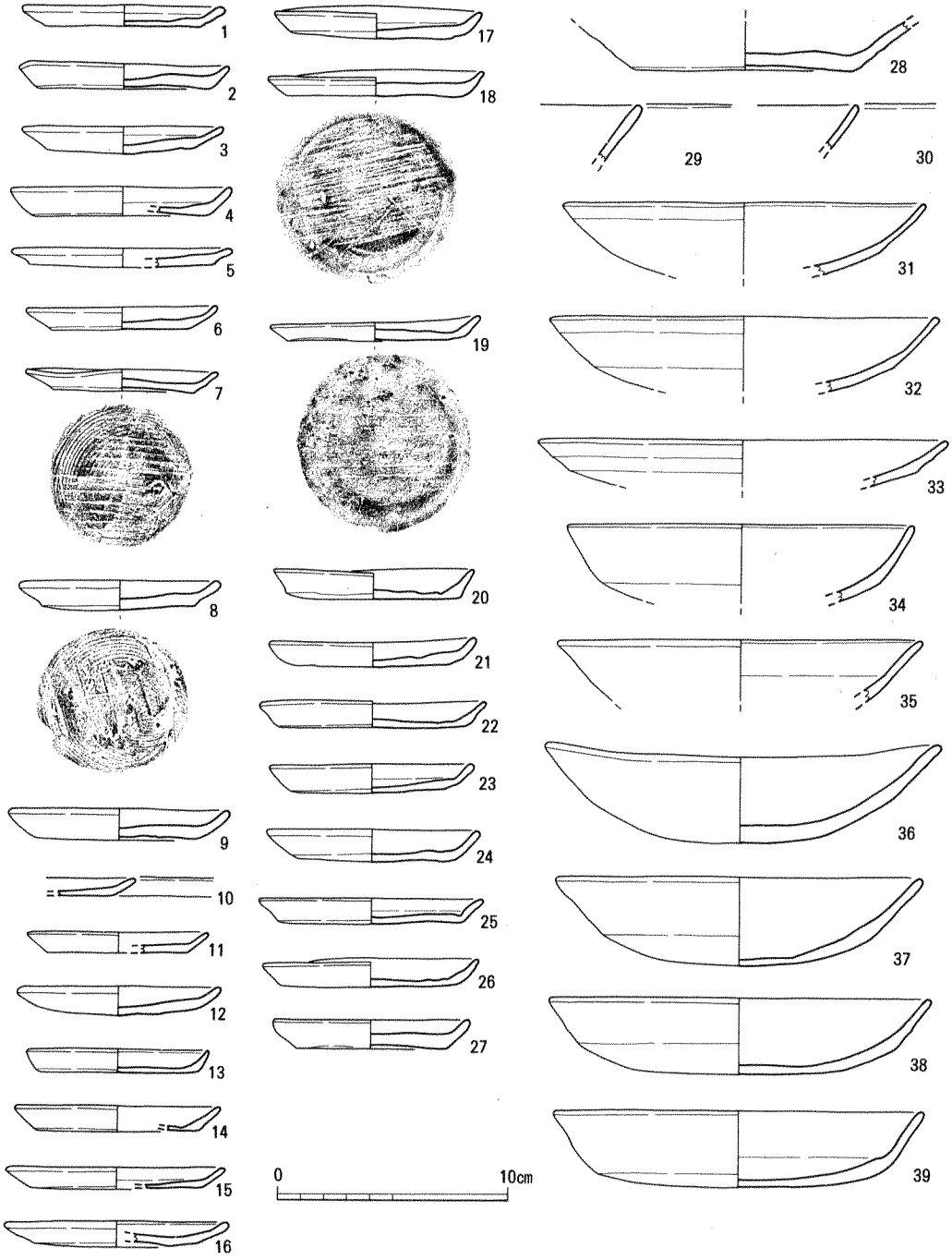
土師器（1・2） 坏の口縁部片である。2は口径17.6cmを測る。底部外面は糸切り離しを行う。

方形溝（図版13・19、第77図、付図）

調査区の北東端部で、4号溝と切合っている。幅は219cm、深さ75cmを測る。断面の形態は逆台形に近いが、中央部は窪む。埋土は自然堆積のようである。土師器、須恵器、須恵質土器、瓦器、磁器などが出土している。

出土遺物（図版40・42・43・44、第119～124図1～110、136図111、138 図112・113、140図114～116、142図117、143図118、144図119、147図120～127）

土師器（1～42・82～90・98～102・104～110） 1～27は小皿である。口径は8.35～9.75cm、器高0.8～1.3cmを測る。1～9は西側から出土し、底部外面は糸切り離し後、1・2以外には板状圧痕が見られる。10～16は北西隅の4号溝との合流部分から出土し、底部外面は糸切りを施し、12～15には板状圧痕が見られる。17～19・24・25は西側上層から出土し、底部外面はヘラ切りを施し、板状圧痕が見られる。20～22は南側上層から出土し、底部外面はヘラ切りを施し、板状圧痕が見られる。26・27は南側下層から出土し、26はヘラ切り、27は糸切りを呈し、26には板状圧痕が残る。23は東端から出土している。28～39は坏である。28は西側から出土した。29～35は北西隅の4号溝との合流部分から出土し、口径は15.7～17.7cmを測る。底部外面はヘラ切りを呈する。36～39は南側の上・下層から出土し、口径は15.7～16.9cm、器高3.3～3.8cmを測る。体部は丸みを帯びている。底部外面はヘラ切りの後板状圧痕を呈する。40～42は鍋である。42は口径46cmを測る大型のものである。口縁部は大きく外反する。82～90は竪穴住居に伴うものであろう。82～86は皿、88は有段の口縁部をもつ坏である。90は甕の口縁部片である。99は坏である。口径は12.3cm、器高3・1cmを測る。底部外面の調整はヘラ切りであろう。100は皿である。口径13.4cm、器高1.2cmを測る。底部外面はヘラ切り調整を行う。101・102は高台付椀である。101の体部は丸みをもつ。104～109は甕の口縁部片である。110は器種不明である。幅2



第119図　才田 方形溝出土遺物実測図１（1/3）

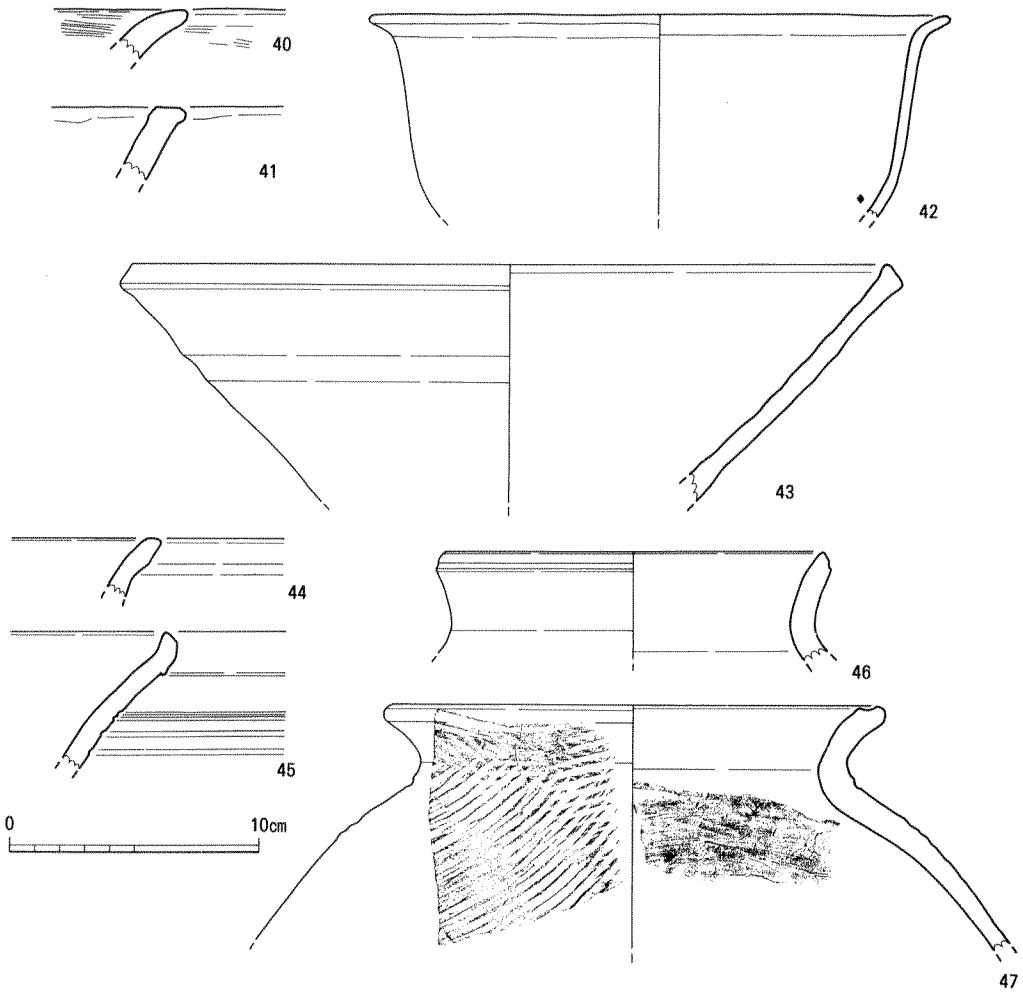
cmを越える鍔状の突起が付く。

須恵器（91～97・103） 91は坏蓋で、釦状の摘みを付す。口径は15.2cm、器高1.4cmを測る。92～96は坏身である。103は甕の胴部片である。

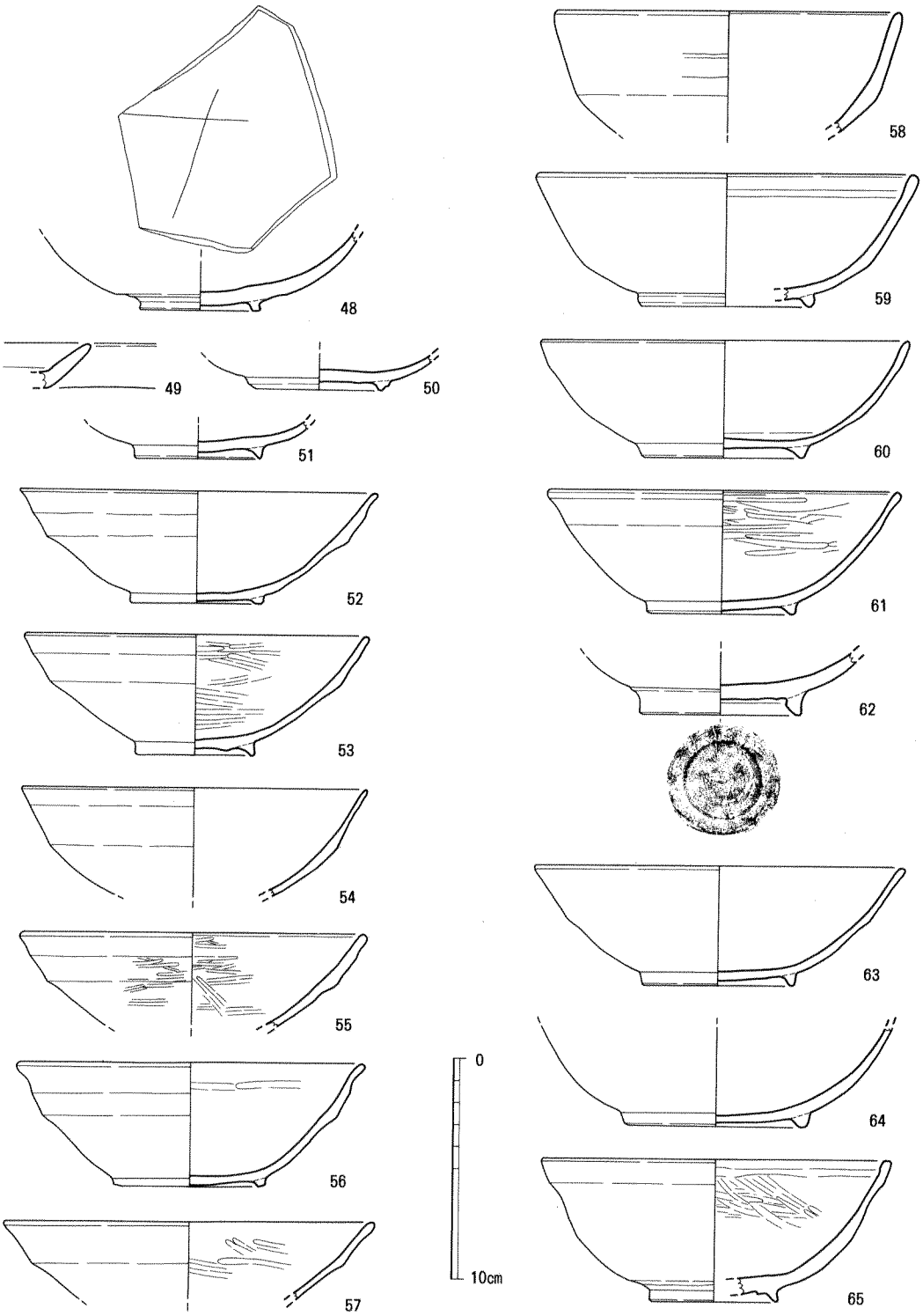
須恵質土器（43）43は東播系の鉢である。復元口径は30.2cmを測る。

瓦器（48～65） 椀である。外面の調整は回転ナデ・ナデの後ミガキを施すものがある。48の内面には「×」印のヘラ記号がある。

陶器（44～47・66・67） 44・45は壺の口縁部片である。47は甕で、外面は平行タタキ、内面はナデ調整を施す。66は鉢である。Ⅲ-1類に分類できる。67は国産陶器の底部片である。外面



第120図　才田 方形溝出土遺物実測図２（1/3・1/6）

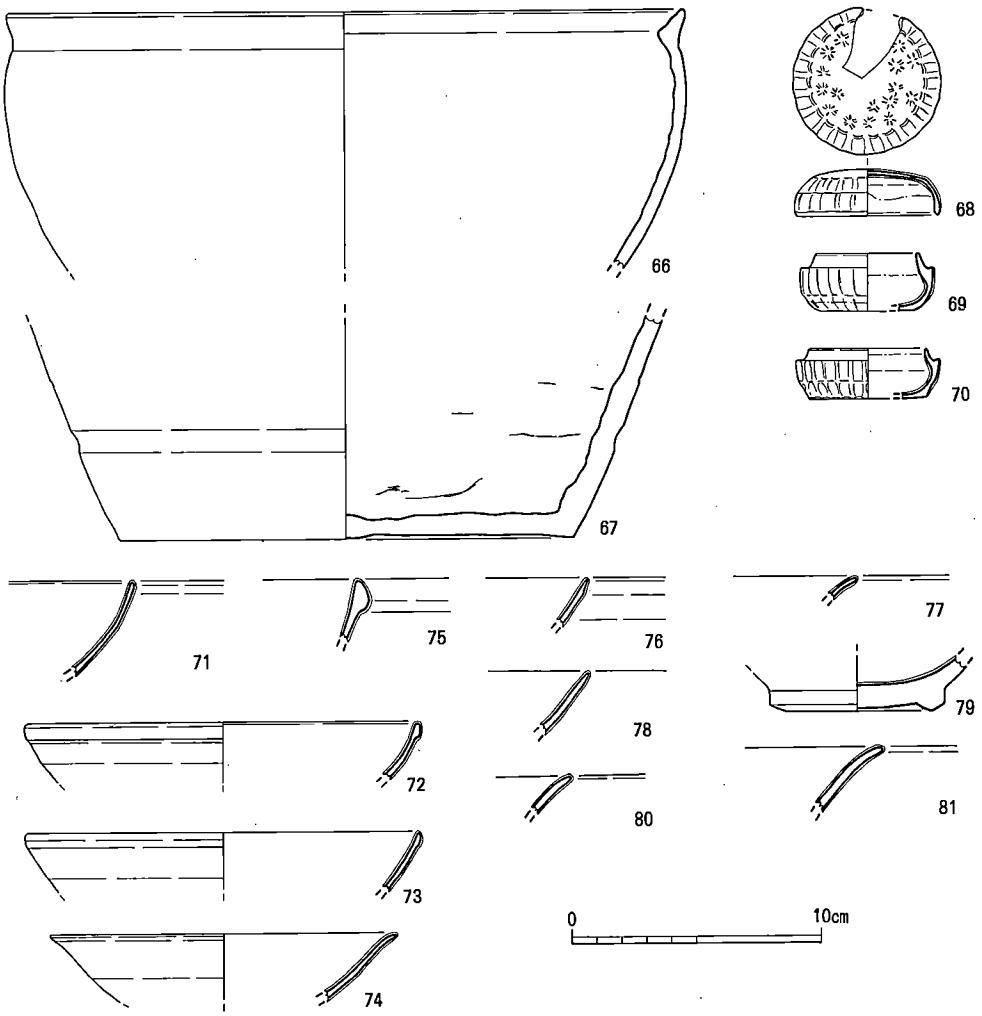


第121図　才田 方形溝出土遺物実測図３（1/3）

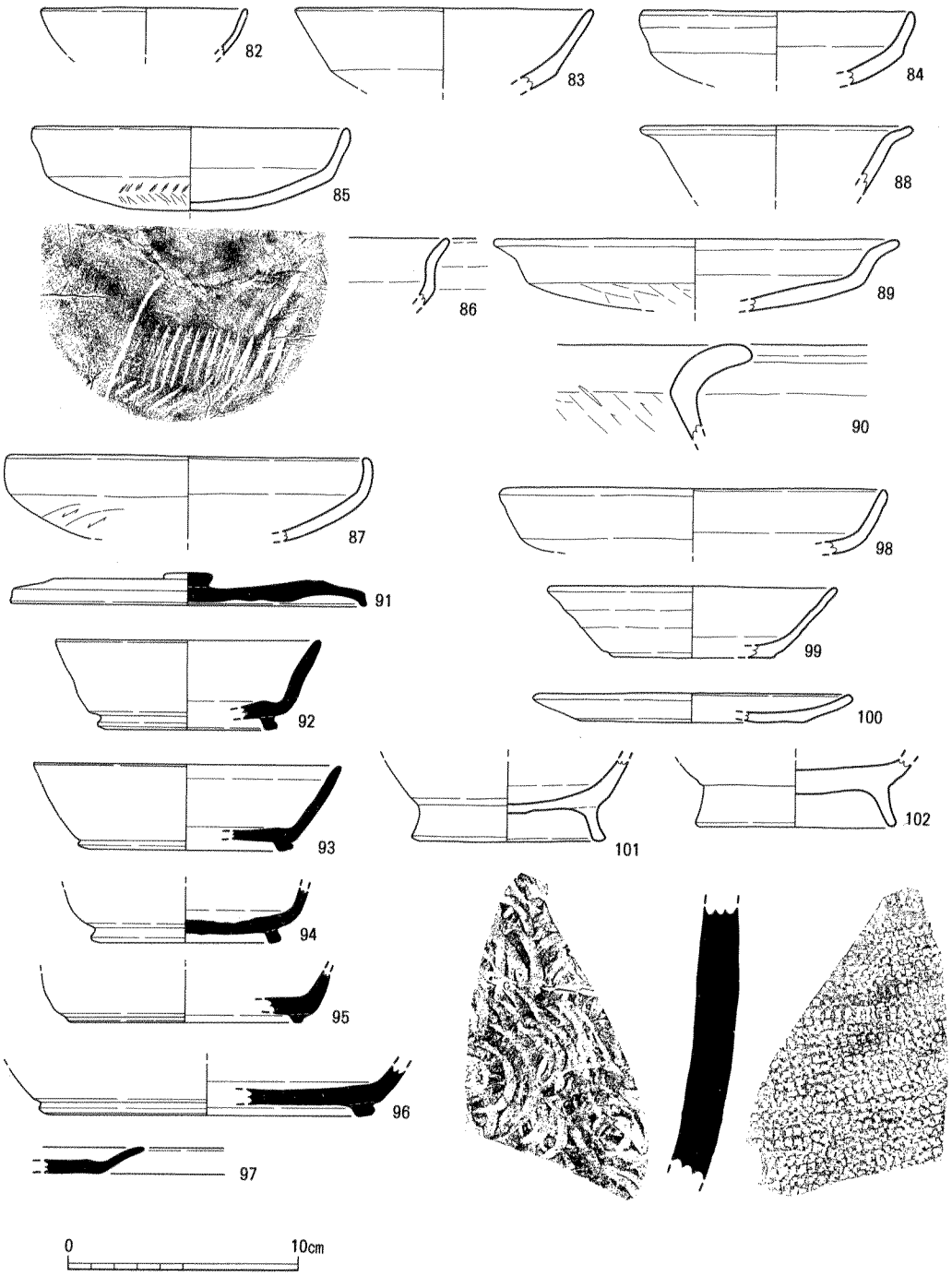
は回転ナデの後ナデ、内面は上半がナデ、底部付近は回転ナデを施す。色調は外面が黒灰色～灰色、内面が淡黒灰色を呈する。

磁器（68～81） 71～75・76は白磁碗である。71～73は小さい玉縁口縁を呈する。Ⅱ類に分類できる。75は玉縁口縁を呈し、Ⅳ類に分類できる。79は白磁碗の底部片である。Ⅳ類に分類できる。77は白磁皿である。Ⅳ-1類に分類される。76・78は同安窯系青磁碗である。80・81は越州窯系青磁碗の口縁部片の可能性がある。

石鍋（111） 滑石製で、やや丸みをもった底部をなす。外面には煤が付着する。底部と体部との境に径4mmの穿孔がある。



第122図　才田 方形溝出土遺物実測図４（1/3）

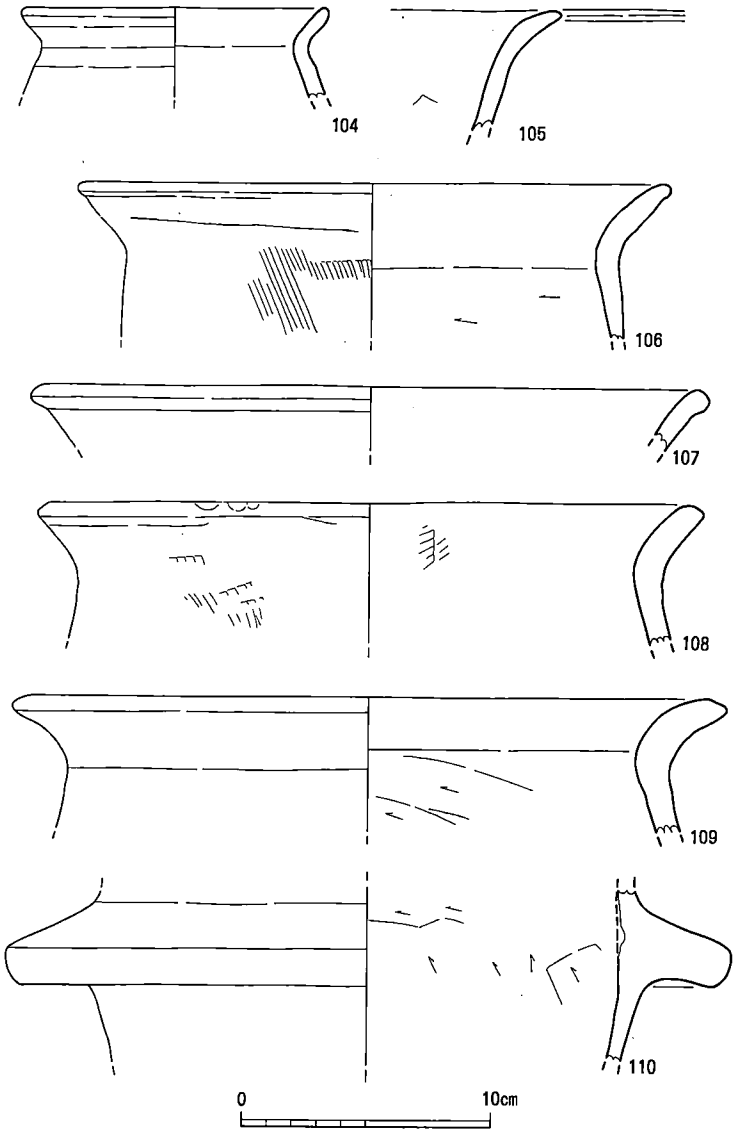


第123図　才田 方形溝出土遺物実測図５（1/3）

土製品（112・113・117） 112・113は方柱状の支脚で、112は一辺が40㎜、113は一辺が47～50㎜を測る。113は器表にワラのような原体による擦過痕がある。117は小さな円柱棒状品で、鋳型の中子のようでもあるし、何かの脚のようでもある。最大径14㎜。

土錘（114～116） すべて管状ではあるが、114は両端がかなり窄まる。114の全長62㎜。

石器（118・119） 118は粘板岩製品で、小さな硯の破片のように見える。しかし硯であったとしても実用品ではなかろう。119は頁岩質の石材で、砥石かすり石であろう。使用面はとても



第124図　才田 方形溝出土遺物実測図６（1/3）

よく擦れており滑らかである。

鉄器（120～127） 121～124は鏃であろう。121は全長60㎜。125は釘で全長46㎜。126は鎌の破片であろうか。127は馬具の一部かとも思われるがはっきりしない。

5 木棺墓 （図版15～18、第125～130図）

1号木棺墓（第125図）

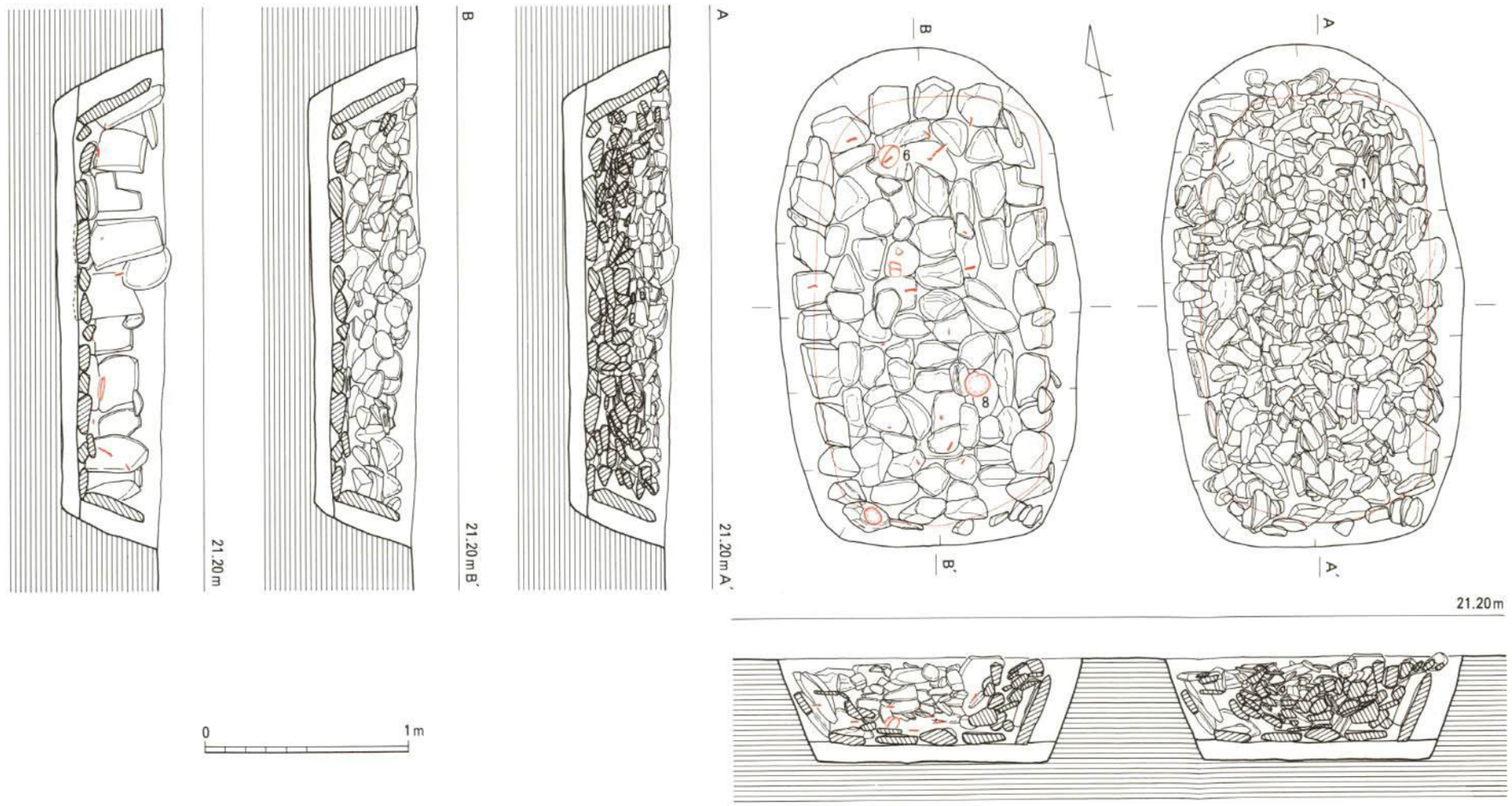
Z5区に位置する。検出状況は川原石が一面に広がっていた。掘り形の規模は長軸248㎝、短軸152㎝、深さ50㎝である。主軸方位はN-6°-Eである。平面プランは隅円長方形を呈する。上面の中央部は周囲に比べてわずかに落ち込んでいる。上面の塊石の隙間からは、土師器小皿(1)が検出された。中央部の塊石を除いていくと検出面から20㎝のレベルと床石の直上で鉄釘が検出され、木棺を納めていたことが窺える。木棺は西側へ傾いて崩壊した状況が鉄釘の出土状況から確認できる。鉄釘は30本が出土した。木棺の規模は長さ175㎝前後、幅70㎝前後、深さ40㎝前後を測ると推定できる。床石は棺上に置かれていた塊石より大きく20～30㎝の平石を敷き並べている。棺底には、龍泉窯系青磁碗(6)と皿(8)が副葬されていた。掘り形の壁面と同じ傾斜で板石を立て並べて造っている。板石と掘り形の間は茶褐色粘質土を入れている。上面には土師器の皿が置かれていた。木棺を固定するために、板石との間の裏込めには、棺上に置かれているのと同様の大きさの塊石を詰め込んである。土師器、磁器、鉄釘、木片などが出土した。

出土遺物（図版45、第126図1～8、129図9～38）

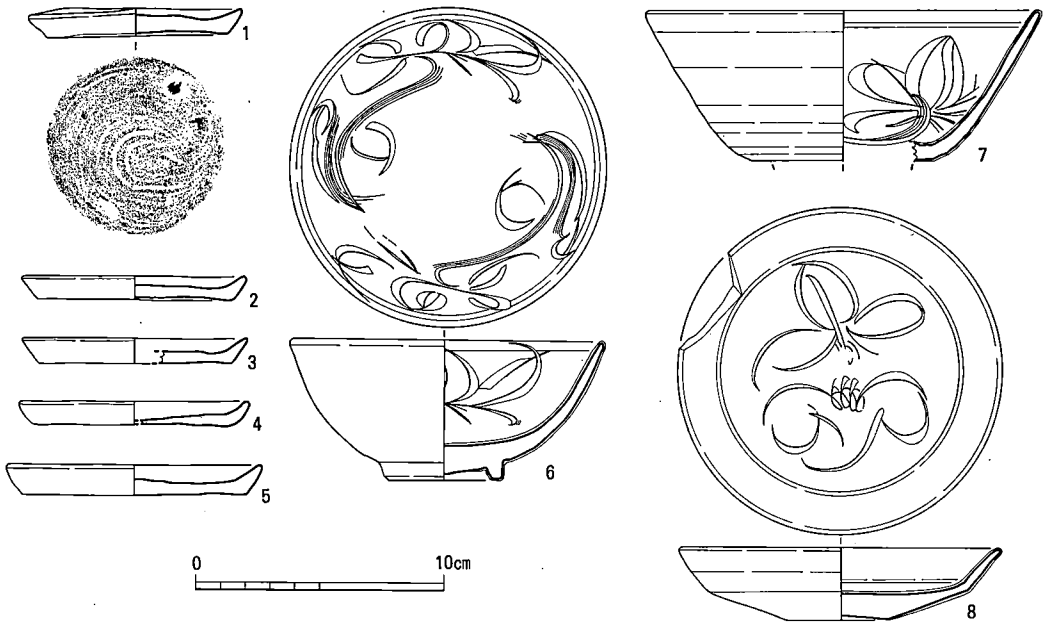
土師器（1～5） 小皿である。口径は8.25～10.3㎝、器高0.8～1.2㎝を測る。外面底部は糸切り痕が残る。4は底部外面に板状圧痕が見られる。

磁器（6～8） 龍泉窯系青磁である。6は小碗で口径12.5㎝、器高5.6㎝を測る。7は碗で口径15.6㎝を測る。Ⅰ-2・a類に分類される。8は皿でⅠ-2・b類に分類される。

Photo. 10
調査風景 ③



第125図　才田 1号木棺墓実測図（1／30）



第126図　才田 1号木棺墓出土遺物実測図（1/3）

鉄釘（9～38） 30本を図示するが、あるいは同じ個体の破片を別々に図化している可能性もある。17が完形で全長74㎜を測る。9・16・19・21・37のように折れ曲がったものがあるということは、釘を打ち込んでから意識的に曲げた箇所があったということだろう。頭から屈折部までが16・19・21は約35㎜なので、これが棺材の厚みであろうか。

2号木棺墓（第128図）

Z5区に位置する。検出状況は1号木棺墓と同様である。規模は長軸252㎝、短軸133㎝、深さ47㎝を測る。主軸方位はN-3.5°-Eである。平面プランは隅円長方形を呈する。掘り形の壁際には、板石や川原石を立て並べている。木棺の設置方法は1号木棺墓と若干異なっている。板石を固定した後に木棺を設置し、その隙間には土砂を主体とする裏込めを行い、上面付近のみに川原石を置くようにしている。いわゆる二段掘りの掘り形を呈する。そのために、木棺の規模が判明し、推定規模は長さは199㎝、幅75㎝を測る。床石は10～40㎝の塊石が敷かれ、1号木棺墓より雑な感がある。棺底の北側小口部分からはガラス玉・水晶玉、ガラス玉より南へ20㎝のところには土師器小皿2枚、南西側板部分からはガラス玉が検出された。

床石を剥ぐと径52～60㎝の略円形のピットが検出された。埋土はわずかにブロック混じりであった。塊石の配置は断面図で見ると、30㎝程の塊石を中央部に置き、その周りと上面には10～15㎝程の塊石を置いたようである。土器はピットの底面付近に配置され、中央の大きな塊石

に半分程度隠れるような状況で出土した。さらに上面の土師器小皿(9)は、小さな塊石が積み上げられた中に置かれていた可能性がある。土師器の配置は、東（第127図の2・4・6・11）・西(10)・南(3)・北(8)の各方向に1枚もしくは2枚重ねの状態であった。塊石の上面には1枚の小皿(9)が置かれていた。これは最初に墓壙を構築した際に行った祭祀であると考えられる。主体部埋土中出土の木炭は^{14}C年代測定を行った。結果については、Ⅲ－Dに掲載している。土師器、須恵器、磁器のほか水晶玉6、ガラス玉135、鉄釘24が出土した。なお、床面から土錘が出土したがこれは別に説明する(第141図A116)。

出土遺物（図版45、第127図1～14、130図15～23、129図24～47）

土師器（1～12） 1～11は小皿である。口径は8.1～9.35cm、器高0.8～1.2cmを測る。外面底部は糸切り痕が残る。3・5・7～10は底部外面に板状圧痕が見られる。12は坏である。口径15.5cm、器高3.25cmを測る。外面底部には板状圧痕が見られる。

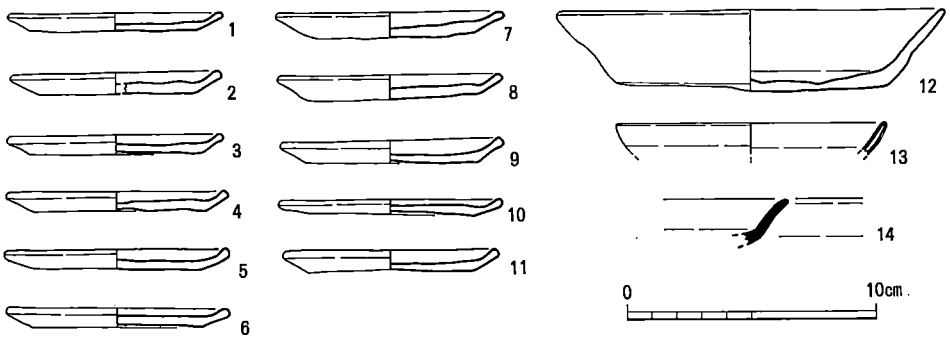
須恵器（14） 皿の口縁部片である。混入品である。

磁器（13） 龍泉窯系青磁皿である。口径は10.6cmを測り、底部はⅠ-2・a類に分類できる。

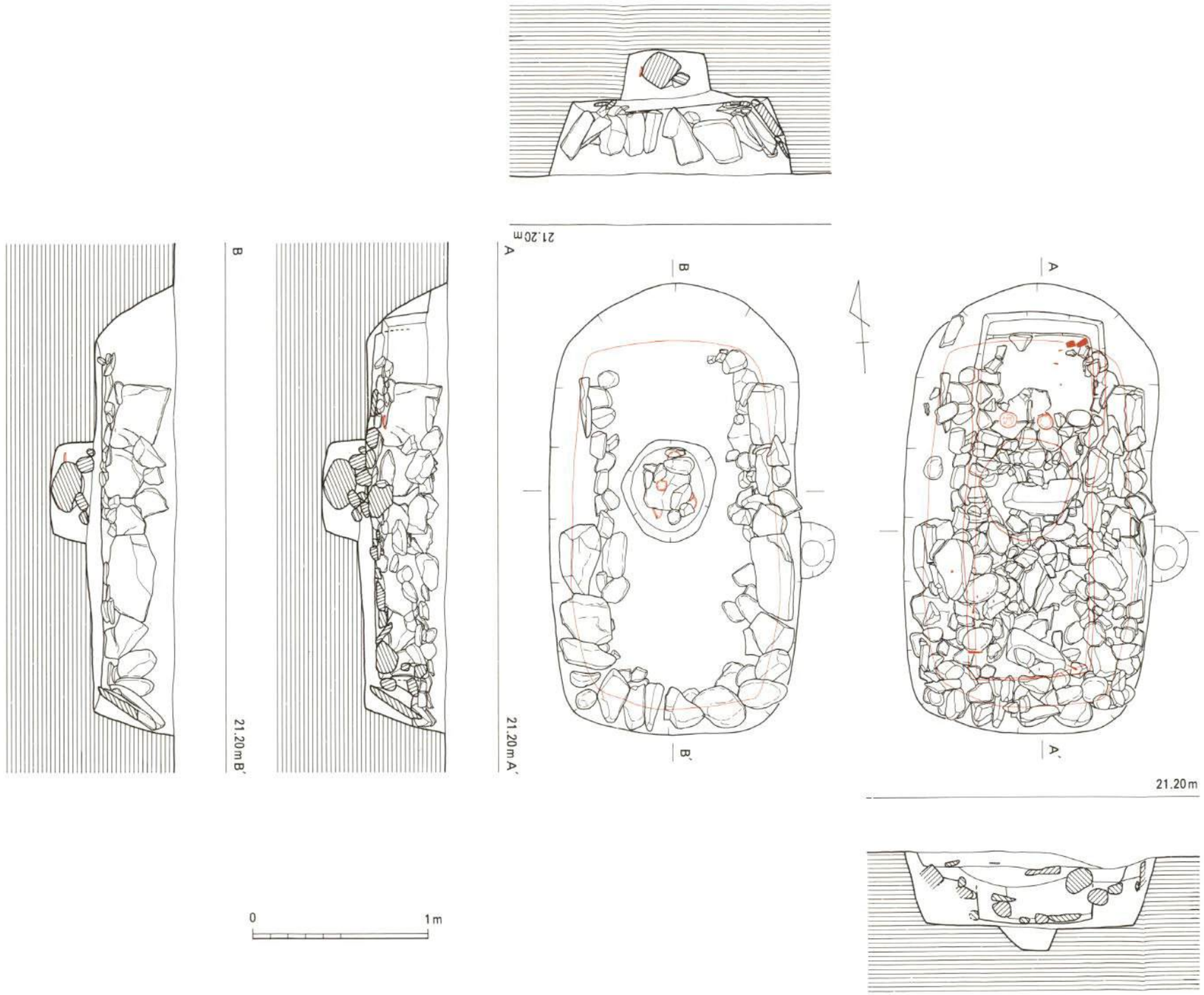
水晶玉(15・16) 6個出土したうちの2個を図示する。6個ともに球形で透明な綺麗な玉である。径は9.7～9.9mm。穿孔された部分がほんの少し平らになっている。孔径はやや大きい1.5～1.6cmと1.3～1.5mmとがある。

ガラス玉（17～23） 総数135個（うち8個は破損）のうちの7個を図示する。もともとはマリンブルーのあざやかな色をなしていたものが、多くは風化して白っぽくなっている。製作時にできた渦巻きの様子がわかるものもある。径は4.4mmから5.3mmまであり、正円形だけでなく楕円形に近いものもある。高さは2～3mm。孔径は1.9mmから2.5mmまでがある。水晶玉とガラス玉を合わせて15.7g。これは数珠としていたものだろう。

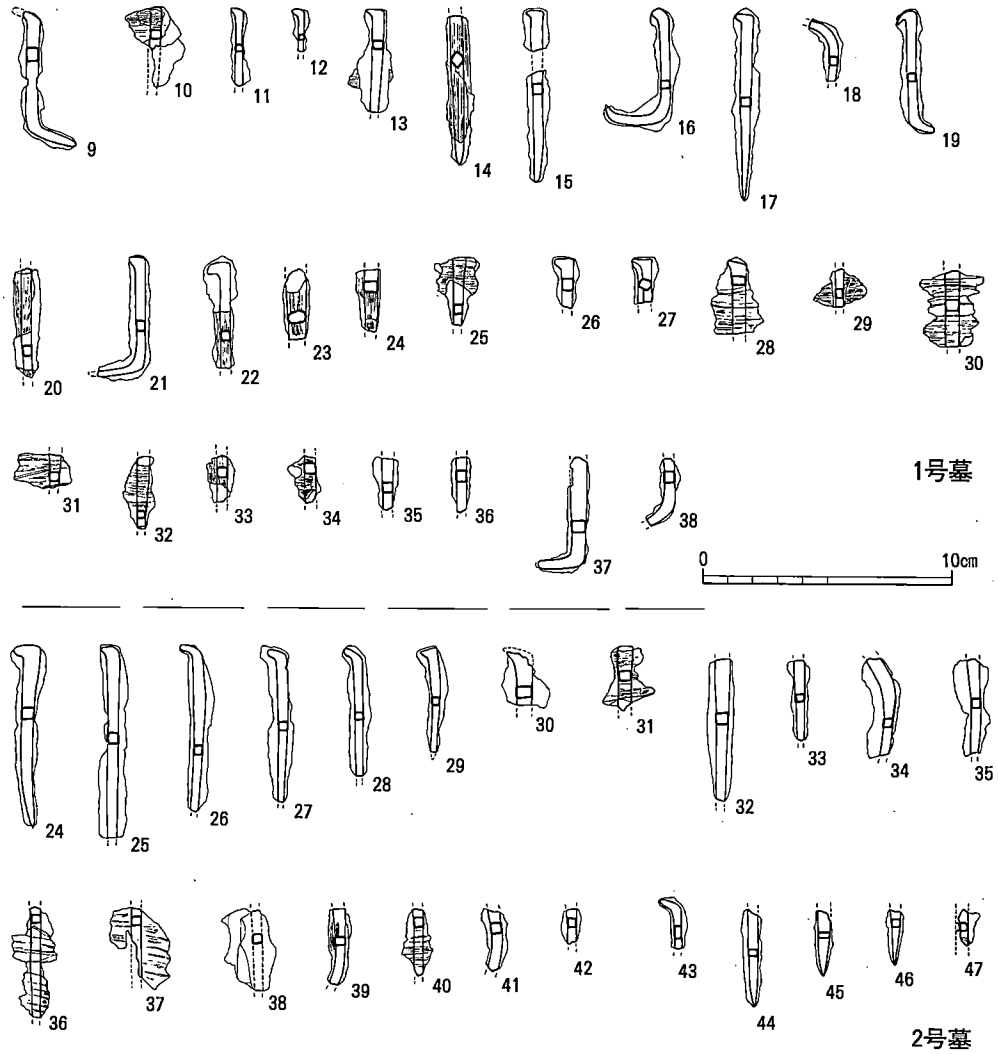
鉄釘（24～47） 24本を図示するが、これもあるいは同じ個体の破片を別々に図化している可能性もある。24が完形で全長73mmを測る。25は折損するが現存長77mmである。1号墓のように極端に折れ曲がった釘はない。



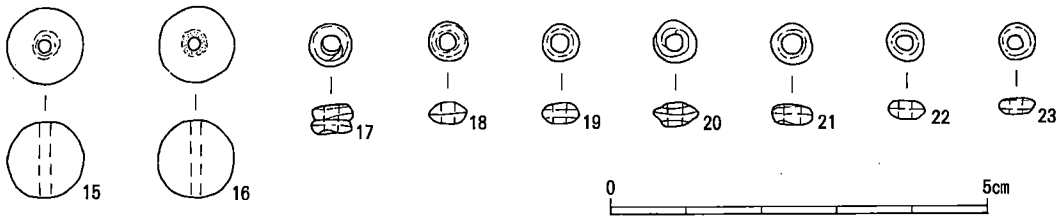
第127図　才田 2号木棺墓出土遺物実測図（1/3）



第128図　才田 2号木棺墓実測図（1／30）



第129図　才田 1・2号木棺墓出土鉄釘実測図（1/3）



第130図　才田 2号木棺墓出土玉実測図（1/1）

6　その他

ピットや遺構検出面、撹乱部等から出土した遺物について概述する。

a．土師器集積遺構

遺構と呼べるものではなく、検出面出土でよかったのかもしれないが、このような名称で取り上げた土師器の坏・皿のまとまった土器群があった。G3区の東端、南にも東にも段落ちとなる隅の所にあった。精査したが土坑のような遺構が存したわけではない。

土師器（第131図1～19）　1～15は皿である。口径9.0～9.6cm、器高0.8～1.0cmを測る。底部外面は糸切りを施し、1～4・7・10には板状圧痕がある。底部の内外面のいずれかに黒斑が付くものが多い。16～18は坏で、口径14.8～15.2cm、器高2.7～2.9cmを測る。底部外面は糸切りを施す。19は甕の口縁部片で、口径17.4cmを測る。

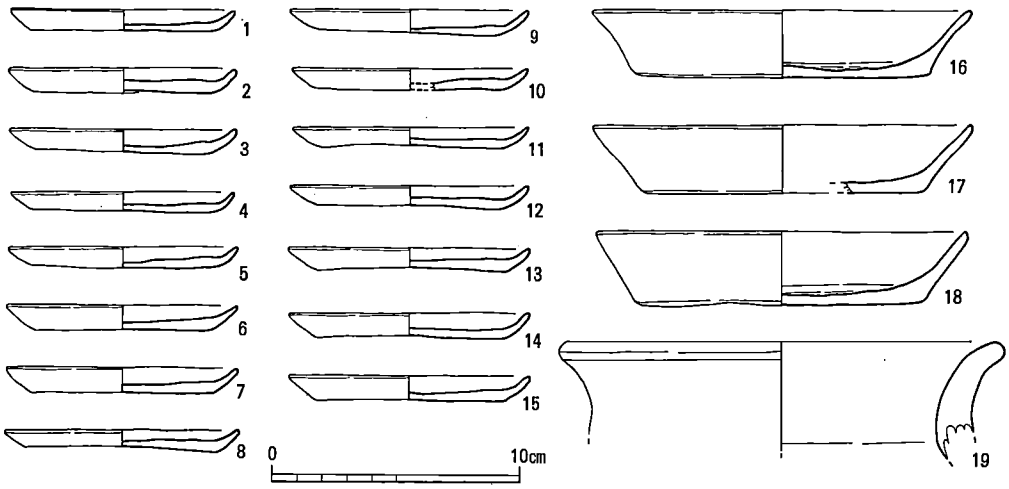
b．ピット出土土器・陶磁器（第132・133図A1～A38）

土師器（1～15）　すべて底部外面は糸切りである。1～5・9は小皿で、口径は9.3～10.1cmを測る。6の小皿は口径8.1cm。7は口径8.25cm。8は口径8.3cm。10は坏で口径15.9cm。11は坏で口径14cm。12の坏は口径14.1cm。13は坏で口径15.85cm。14は坏で口径15.85cm。15は坏で口径15.4cm。

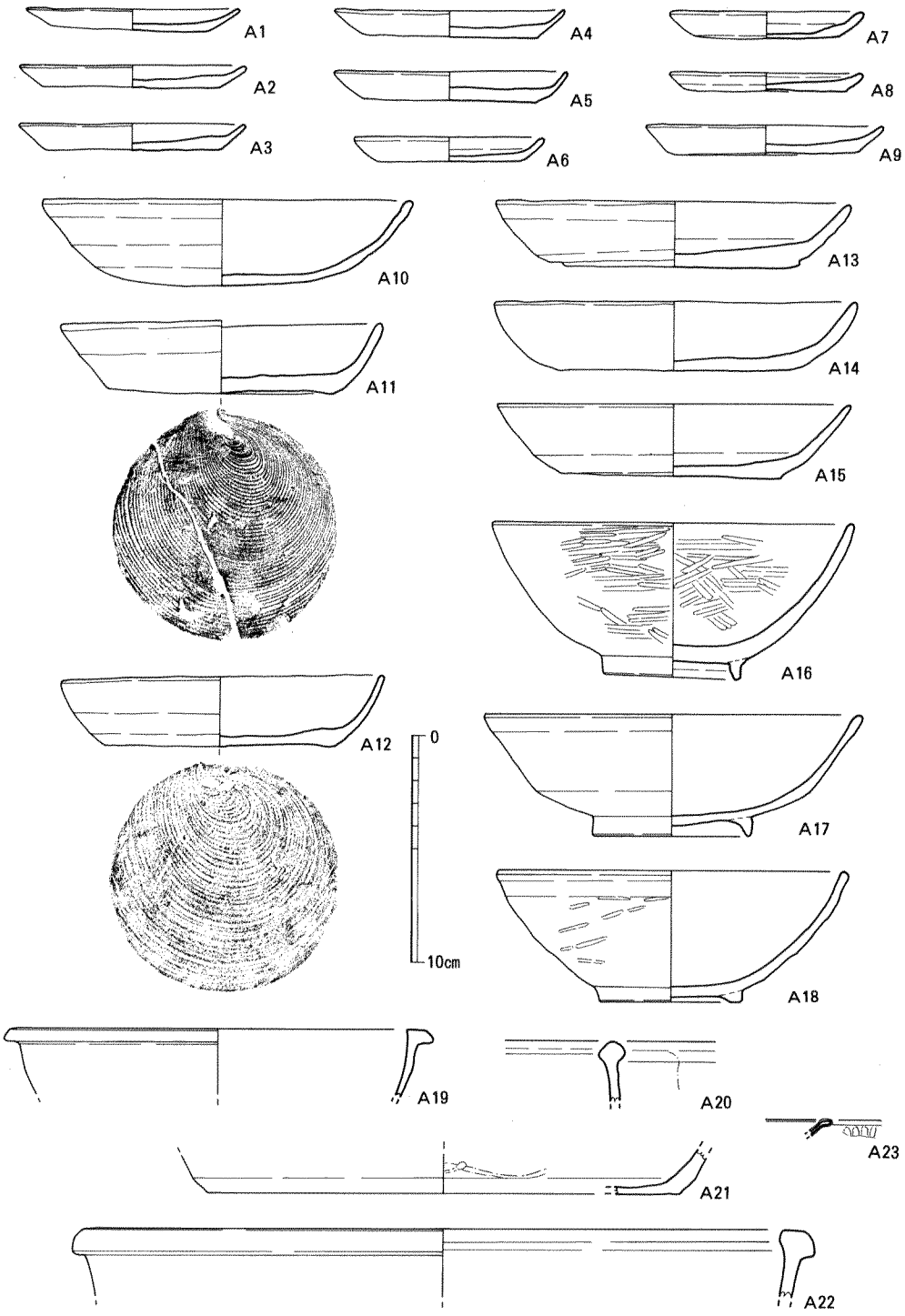
瓦器（16～18）　16は椀で、内外面はミガキを施す。

陶器（19～22）　19・20は鉢で、21は底部である。

磁器（23～38）　23・24は青白磁の皿の口縁部と合子である。25は白磁の小碗である。26は青白磁の壷。27・28の白磁碗はⅡ類に分類できる。29・30は白磁碗でⅣ類。31は白磁碗でⅤ類。



第131図　才田 土師器集積遺構出土遺物実測図（1/3）



第132図　才田 ピット出土土器・陶磁器実測図１（1/3）

32は白磁碗でⅧ類。33・34は白磁の皿である。35は龍泉窯系青磁碗である。Ⅰ-6・a類。36は同安窯系青磁碗である。Ⅰ-1・b類。36は龍泉窯系青磁碗でⅠ-2・a類。

以上は、1～5・9がP852、6がP1059、7がP212、8がP794、10がP655、11・12・16がP921、13がP1098、14がP1091、15がP1478、17がP1256、18がP1590、19・20がP89、21・29・30がP597、22がP466、23がP483、24・28がP873、25がP710、26がP408、27がP724、31・38がP1840、32がP1587、33がP791、34がP1277、35がP611、36・37がP787から出土した。

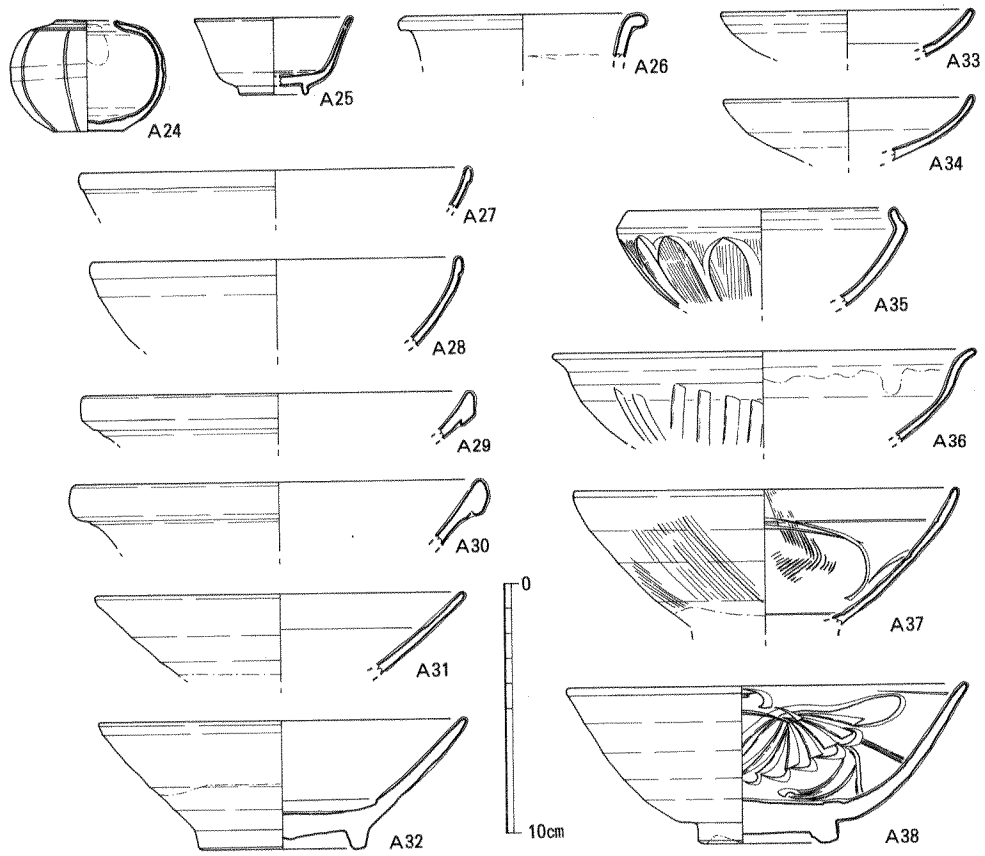
c．遺構検出面出土土器・陶磁器（図版41、第134図A39～A57）

土師器（39～46・49）　29～43は小皿である。口径は8～9.05cmを測り、底部外面は糸切りの後板状圧痕が残る。44～46は坏である。口径13.5～15cmを測り、底部外面は糸切りの後板状圧痕。

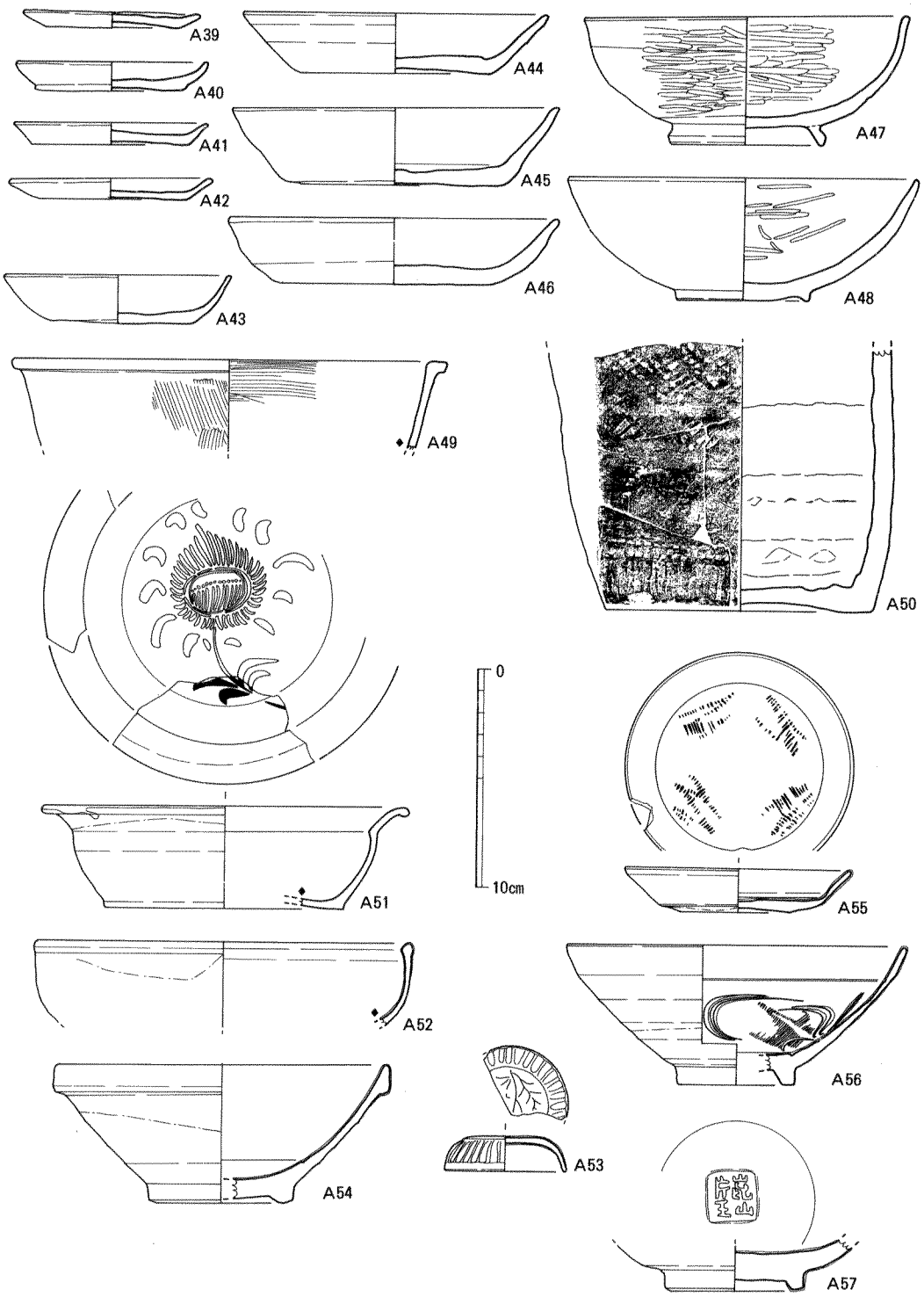
瓦器（47・48）　椀である。内外面にはミガキを施している。

陶器（50～52）　50は国産陶器である。常滑焼か。51は盤で、Ⅰ-1・a類。52は盤でⅡ-b類。

磁器（53～57）　53は青白磁の合子である。54は白磁碗でⅤ類に分類できる。56は同安窯系青磁碗でⅠ-1・a類に分類できる。57は龍泉窯系青磁碗の底部片で、内面の見込みには「昆山片玉」



第133図　才田 ピット出土土器・陶磁器実測図2（1/3）



第134図　才田 遺構検出面等出土土器・陶磁器実測図（1/3・1/6）

の文字を印刻する。

d．撹乱部出土土器・陶磁器（第135図A58～A77）

土師器（58～63）　58～63は小皿である。口径は7.8～9.4cmを測り、底部外面は糸切りの後板状圧痕が残る。64～66は坏で、口径15～15.3cmを測り、底部外面は糸切りの後板状圧痕が残る。

瓦器（67～69）　椀である。内外面にはミガキを施している。

瓦質土器（70）　すり鉢である。口径は24cmを測る。

須恵質土器（71）　東播系のすり鉢である。口径は34．4cmを測る。

陶器（77）　輸入陶器で、大型の甕である。Ⅰ類に分類できる。

磁器（72～76）　72・73は青白磁の合子である。74は龍泉窯系の皿で、Ⅰ-2・a類に分類できる。75は皿でⅧ-1類に分類できる。76は龍泉窯系青磁碗でⅠ-4・a類に分類できる。

e．滑石製品（図版41、第137図A78～A82）

78は石鍋の鍔の部分を再利用したもので、鍔の下方には煤が付着している。内面の周縁が擦れているので、穿孔部分に紐掛けし鍔を摘みとして何かを擦るのに用いたらしい。鍔径は37.4cmを測る。ピット出土。

79は石鍋である。約1/6の残存部分に鍔は見あたらない。外面はケズリ痕が明瞭で煤が付着している。内面はケズリ痕を平滑にしている。復原口径は内径が23.4cm、器高9.5cm。検出面出土。

80も石鍋で、これは口縁に接して鍔に相当する突起がある。外面には煤が付着する。復原口径は内径が24cm。検出面出土。

81は石鍋の底部近くを再加工したもので、穿孔があるとともに破断面を平滑にしているが、用途は不明である。復原底径は外径で19.6cm。3号住居跡の東側段落ちから出土。

82は石鍋のどこかの部分を再加工して二連の容器を造っている。この種の滑石製品は多いが用途は何であろうか。

f．土製品（図版42・43、第138図A83～A85、139図A86・A87、142図A126）

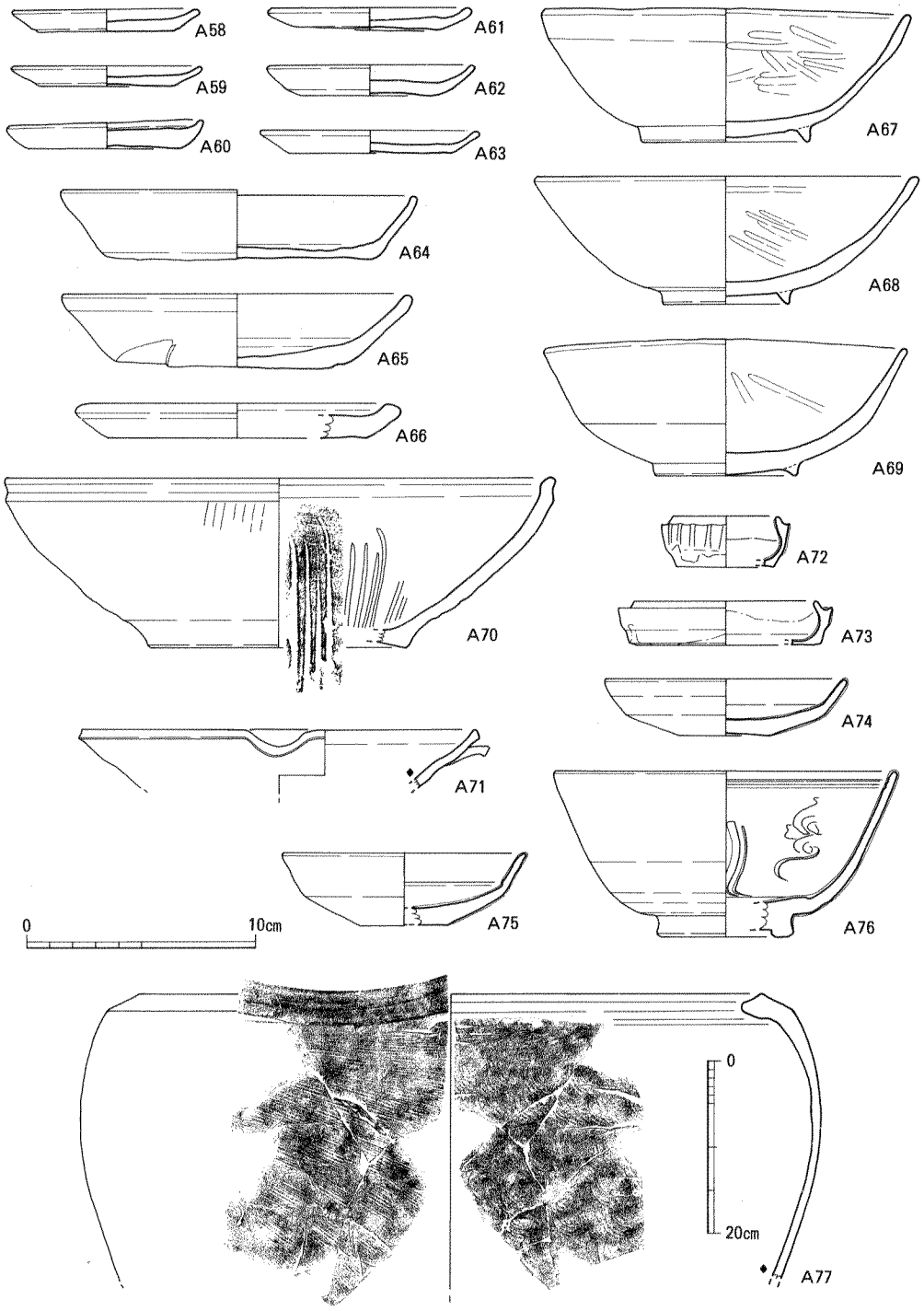
83は方柱状の製品で支脚であろう。砂粒がきわめて多く胎土は粗い。焼成はややあまい。四面ともにナデ調整である。一辺が4.6cm。3号住居跡の東側段落ちから出土。

84も同様の製品で支脚とみてよい。下端には破損面も含めて煤が付着している。一辺は4.5～5.6cmと直方体気味である。ＳＫ27の上面から採集された。

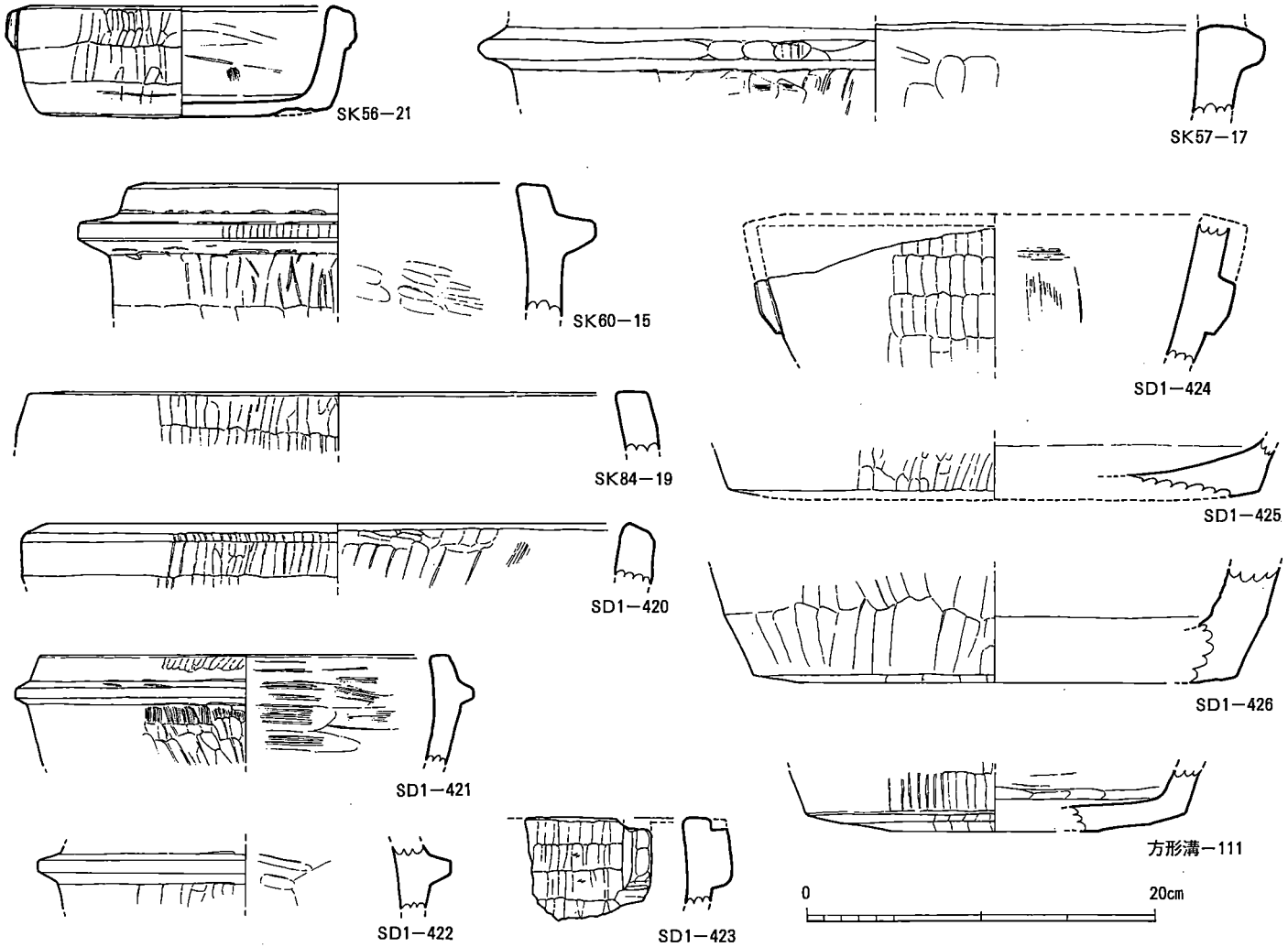
85は丸みを持った直方体棒状品で、一辺は2×2.4cm。二次熱を受けている。一側面は白い釉が掛かったようになっている。用途不明。ピット出土。

86はふいごの羽口片で、内面は溶融して器面が見えない。ＳＢ9付近のピット出土。

87は瓦質で、幅70mm、厚さ最大32.5mmの直方体状の製品である。四周はナデ調整を行い、灰



第135図　才田 撹乱部出土土器・陶磁器実測図（1/3・1/6・1/8）



第136図　才田 出土滑石製品実測図１（1/4）

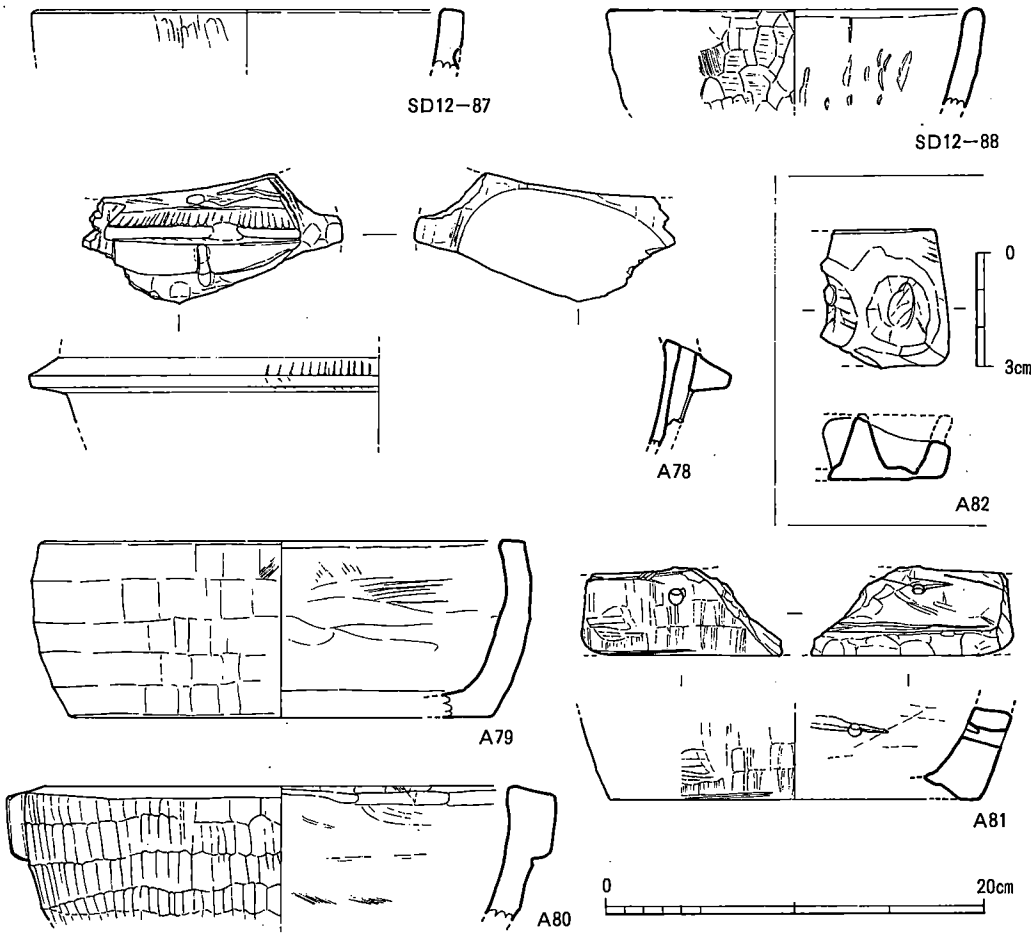
白色で一部が黒ずむ。一見して瓦のように見えるが、用途不明。ピット出土。

126は瓦質に近い土師器の破片をボタン状の小円盤としたもので、周縁は擦って面取りを行っている。径18.2～19㎜、厚さ4㎜。用途不明。調査区西端部の撹乱部出土。

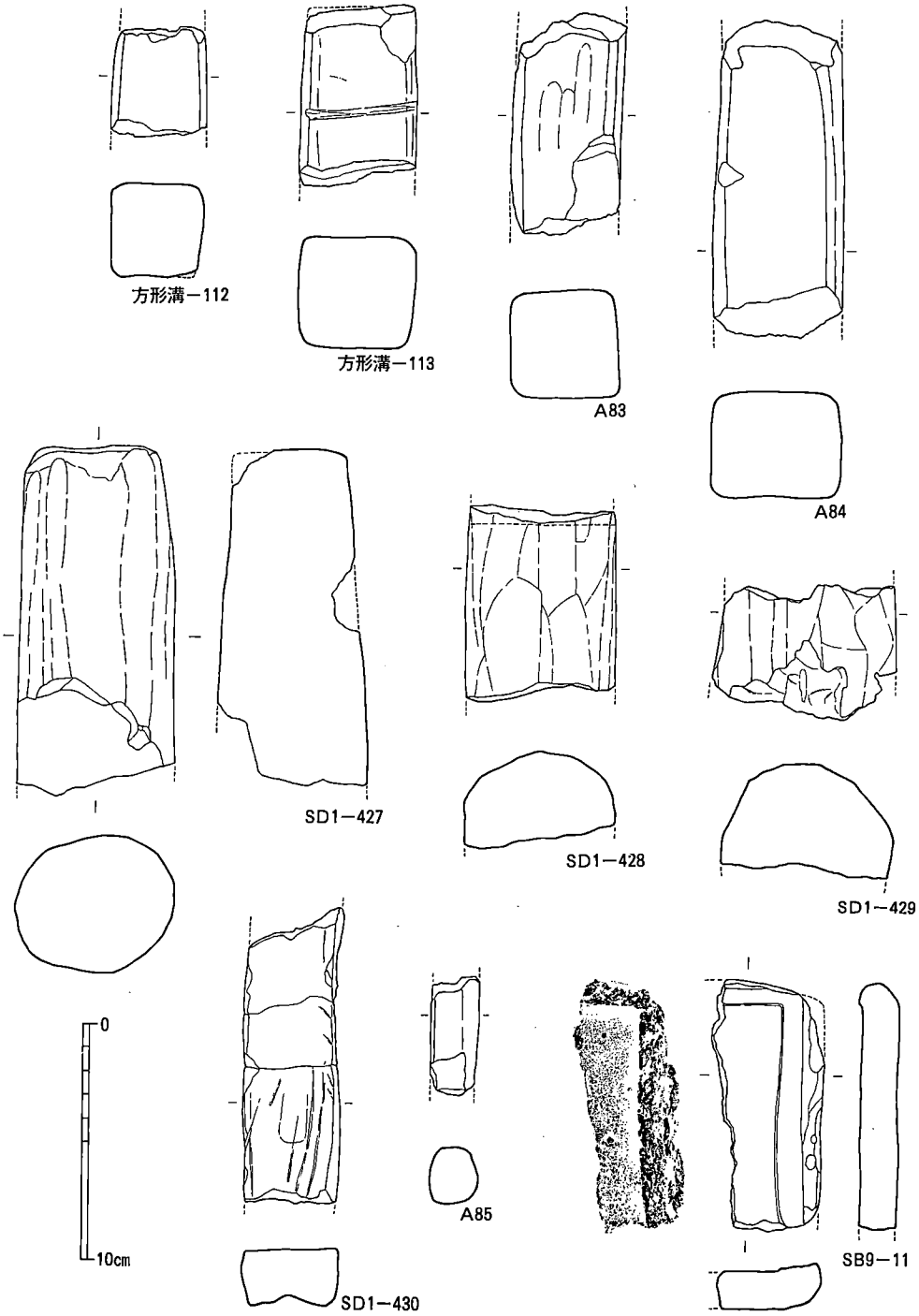
g．土錘（図版43、第140・141図A88～A125）

全てを通じて胎土は精良であり、器表はナデ調整を行っている。細い棒状のものに粘土を巻き付けて成形したらしく、シボリ痕のような捩れの見られるものがある。

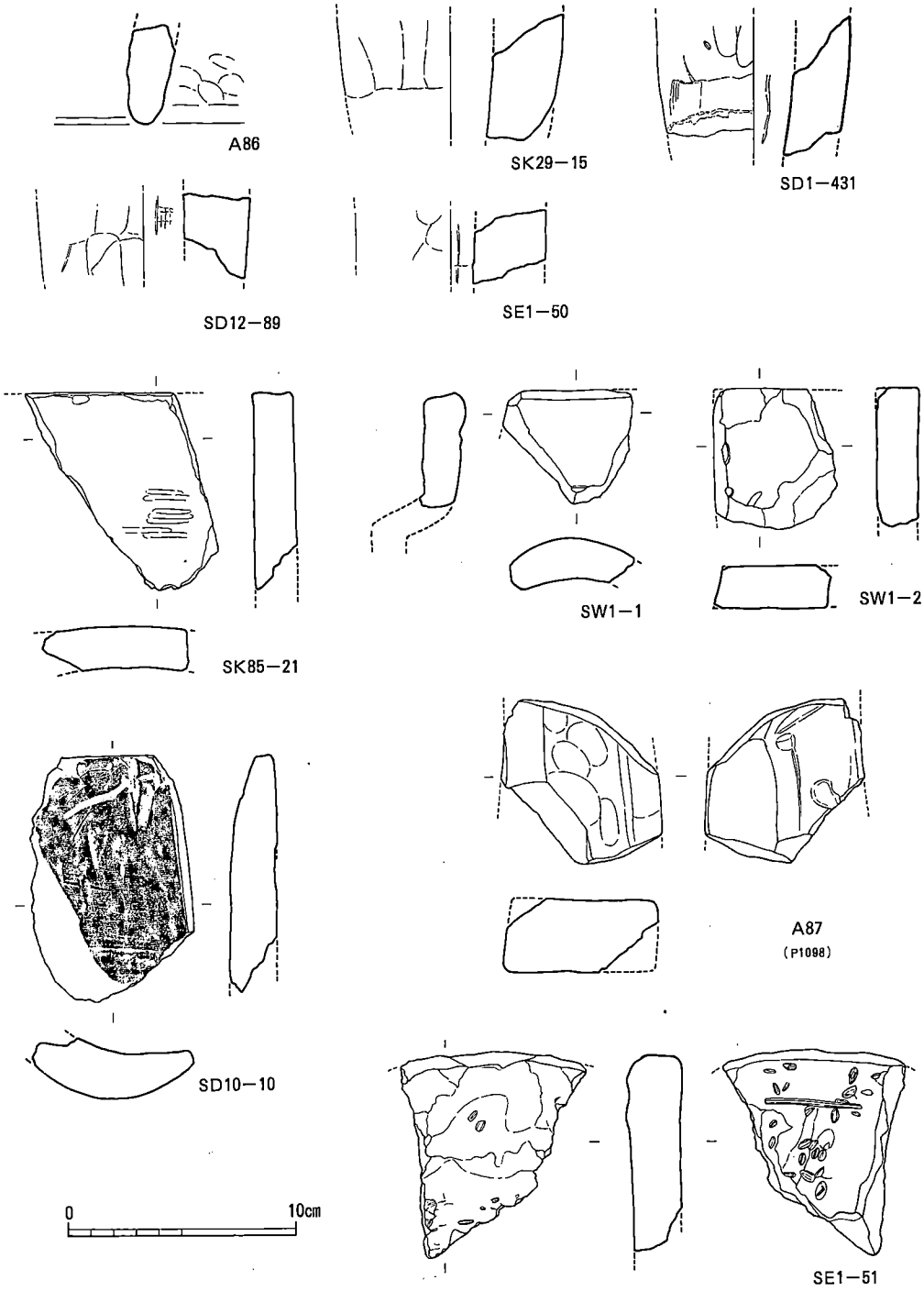
88～91は短くて径の大きいタイプであり、117・118もその亜類とみてよい。88は長さ40㎜、径14～16㎜。これら以外は中央部がやや膨らむエンタシス状の管状土錘で、平均して40～50㎜の長さであるが、最も長いのは92の64㎜を測る。88～114はピット出土で、115は49号住居のカマド、116は2号墓の床面、それ以外は検出面および撹乱部からの出土である。



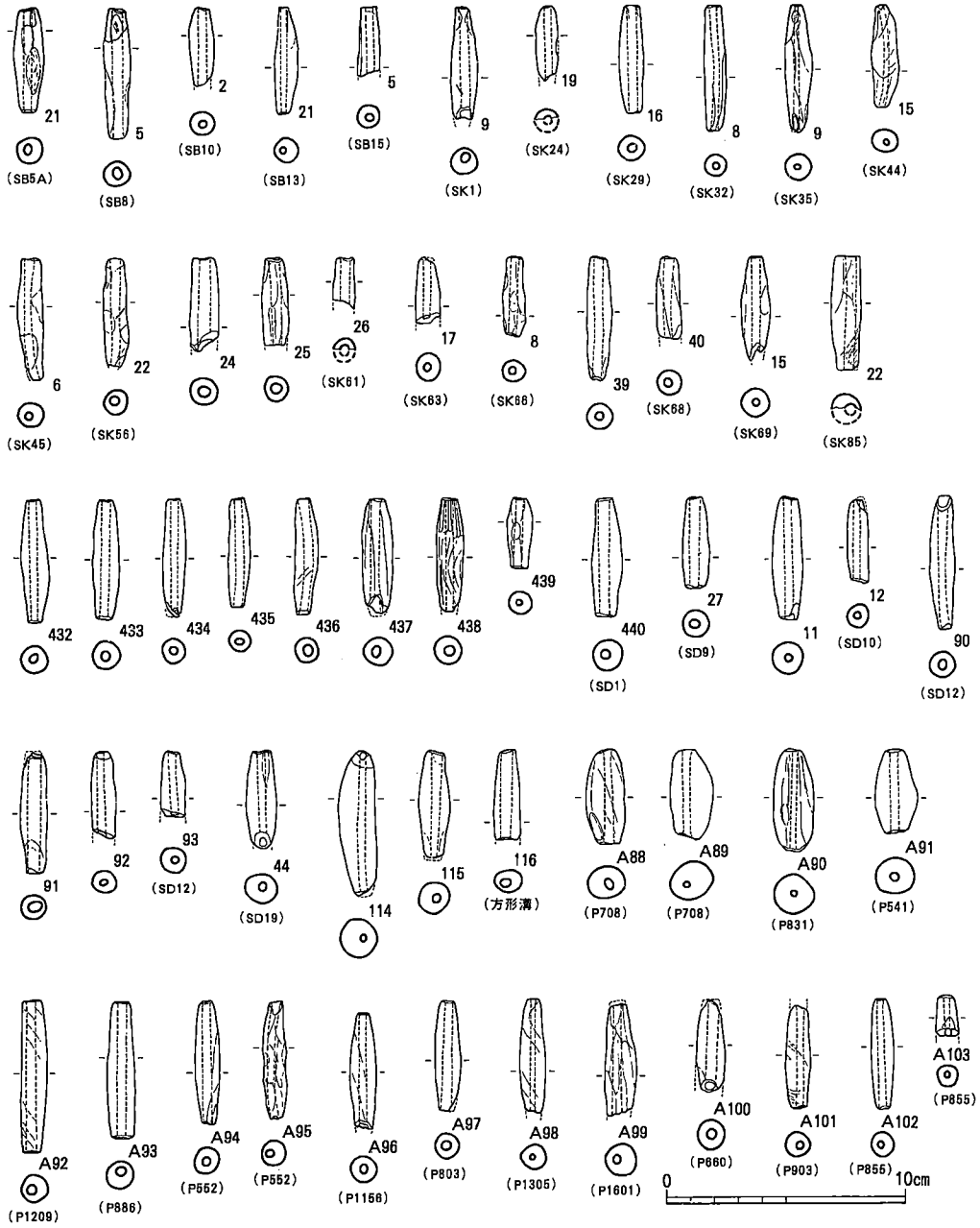
第137図　才田 出土滑石製品実測図２（1/2・1/4）



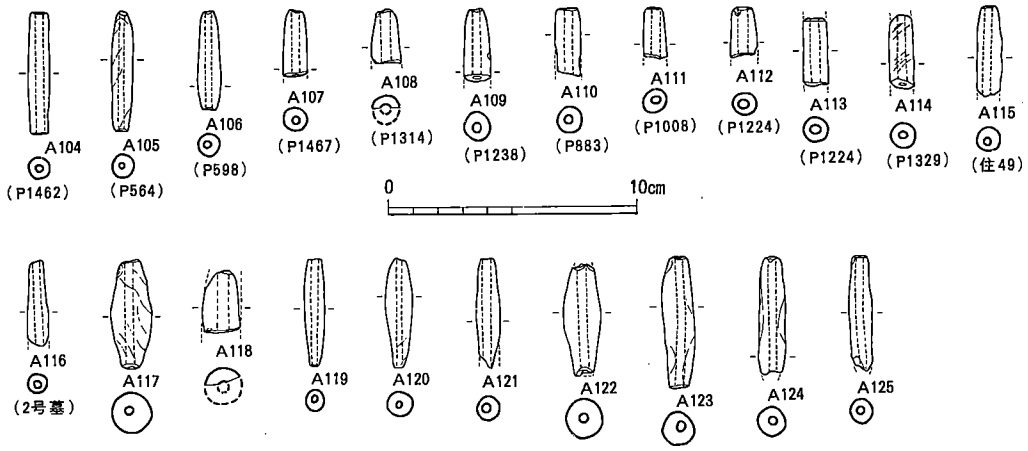
第138図　才田 出土土製品実測図（1/3）



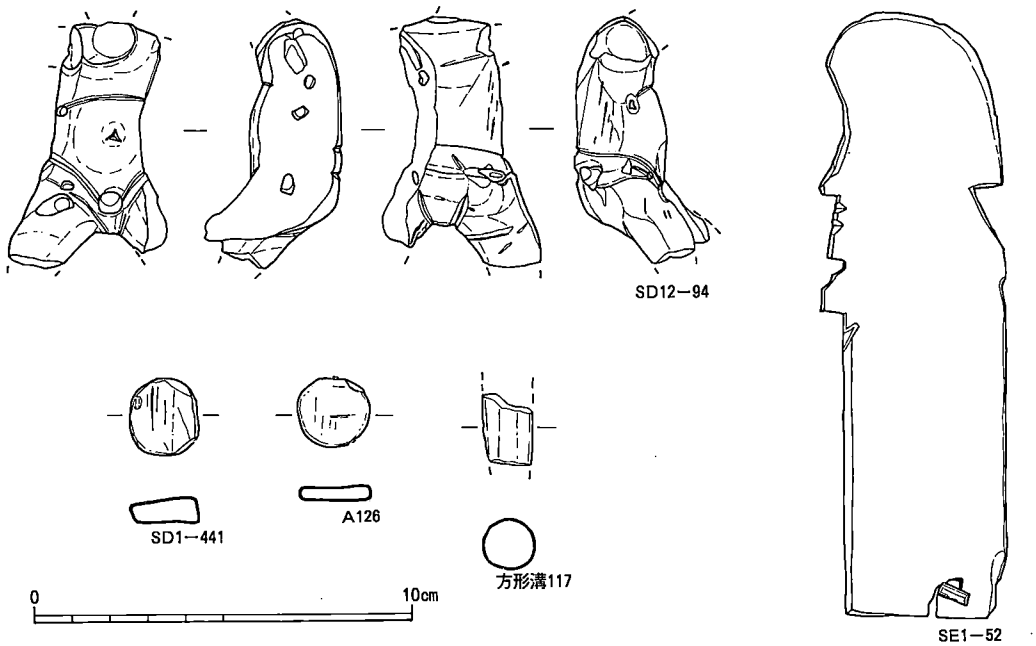
第139図　才田 出土ふいご羽口・瓦等実測図（1/3）



第140図　才田 出土土錘実測図１（1/3）



第141図　才田 出土土錘実測図２（1/3）

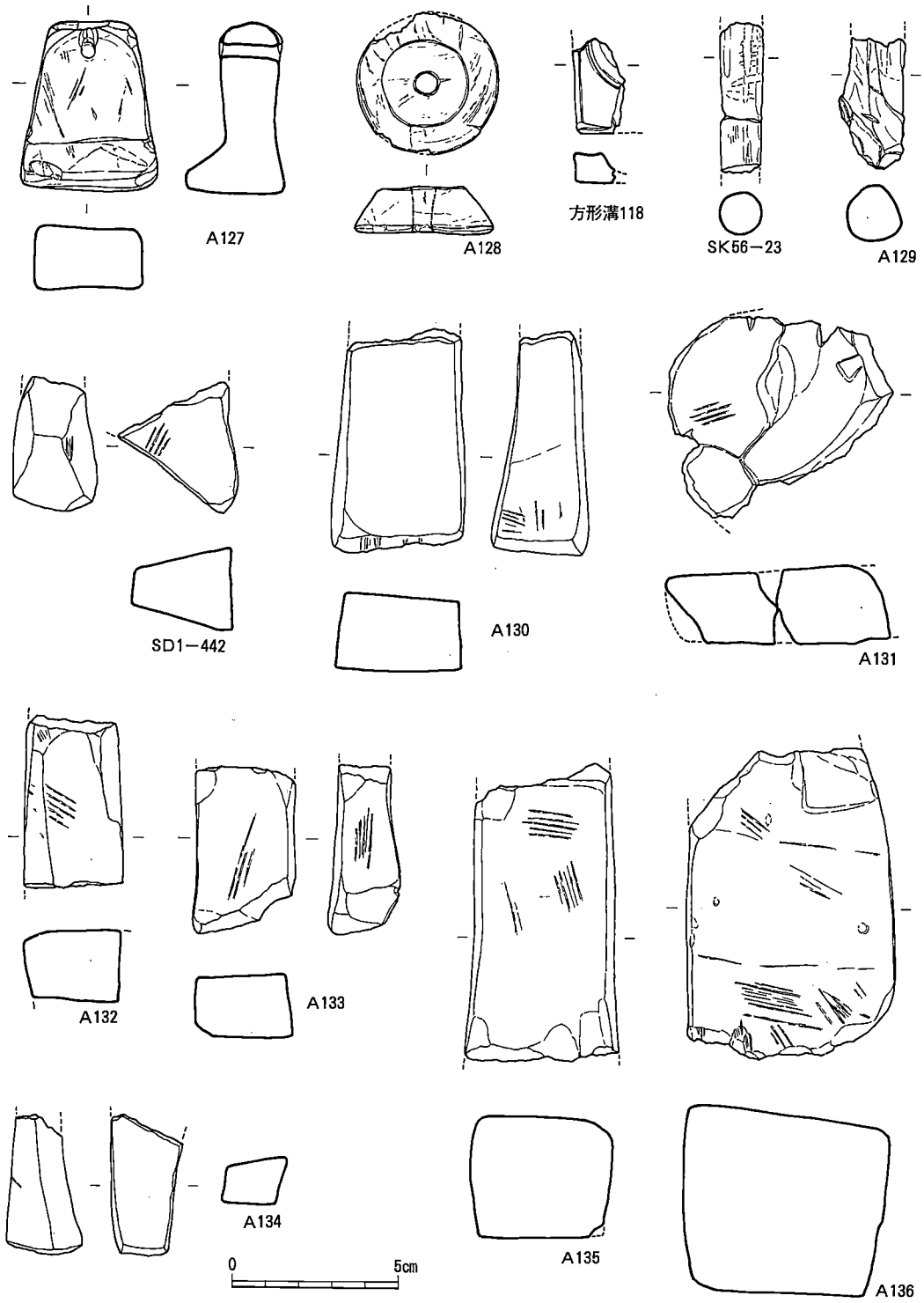


第142図　才田 出土土製人形・木製人形等実測図（1/2）

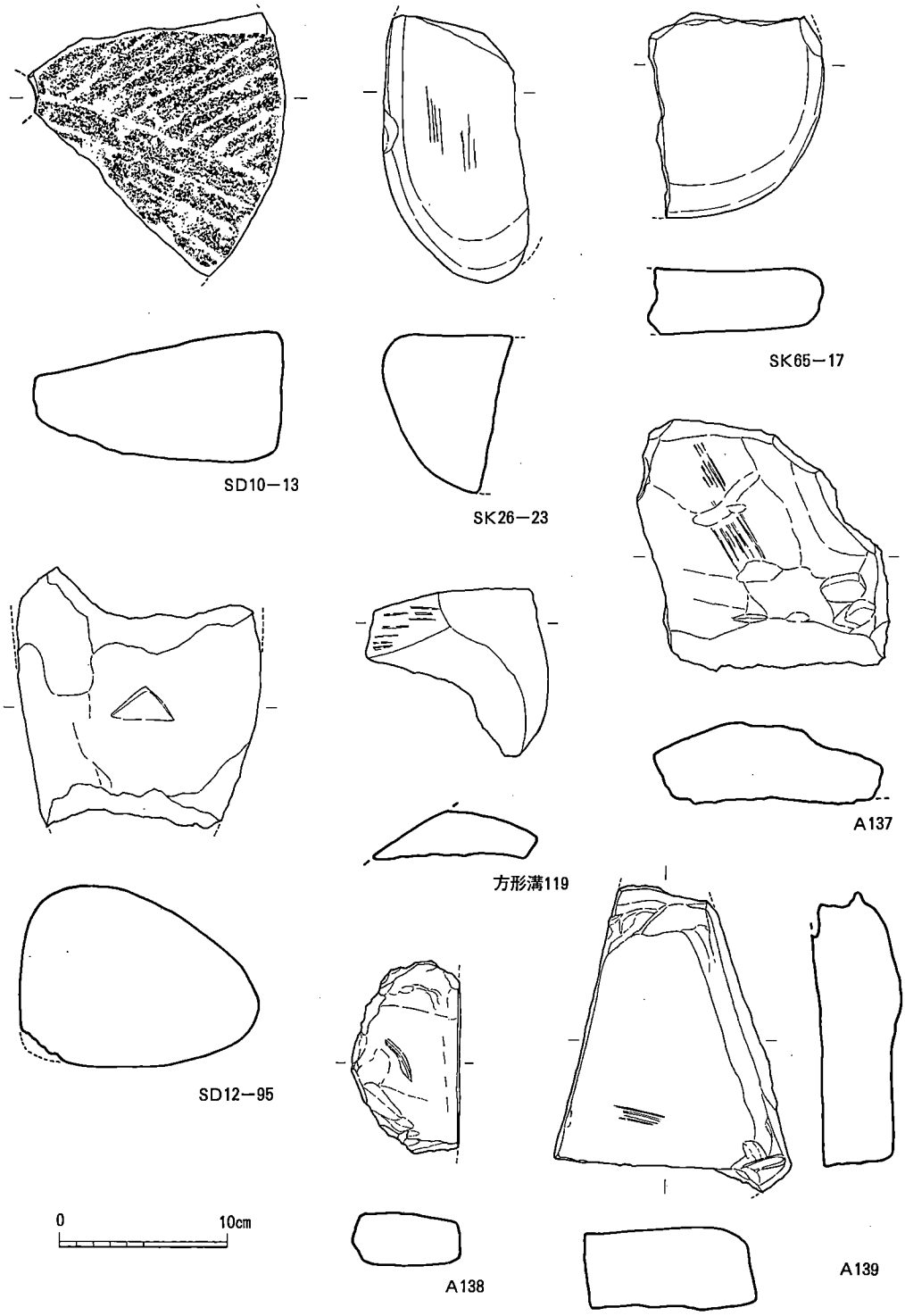
h．石器（図版44、第143・144図A127～A139）

127は滑石製品とすべきであったかもしれない。石鍋の口縁部の鍔を含めた部分を、逆向きに利用して上端近くに穿孔し分銅としている。高さ51mm、最大幅41mm、重さ82.8g。検出面採集。

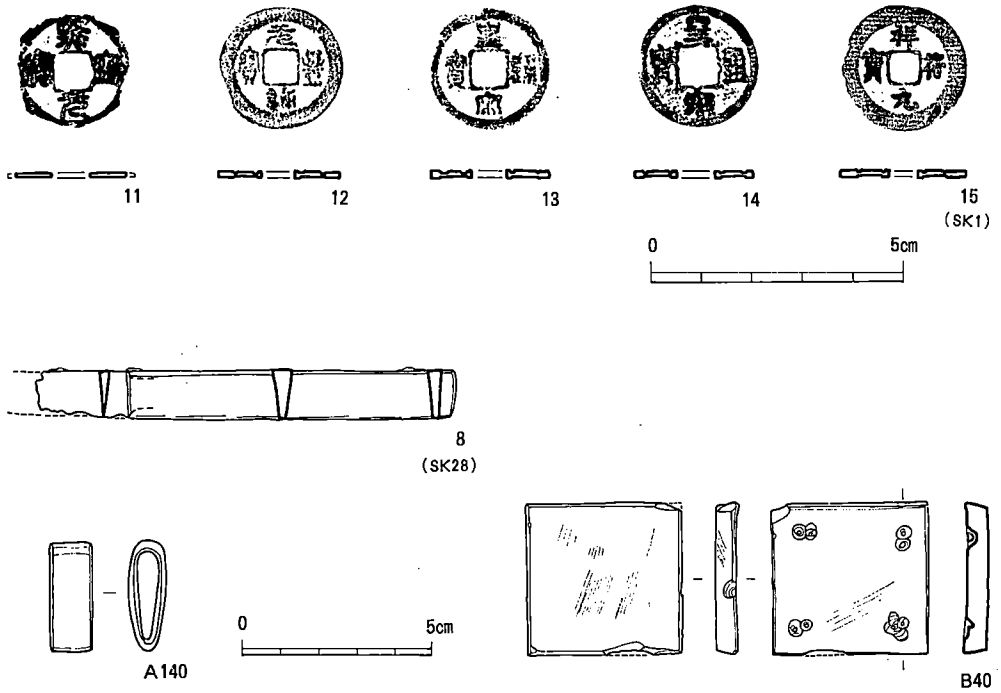
128は滑石製の紡錘車で、断面は台形をなす。表面は擦過痕が著しい。最大径42.5mm、孔径



第143図　才田 ピット等出土石器実測図（1/2）



第144図　才田 出土石器実測図（1/4）



第145図　才田 出土銭貨・青銅製品・石帯実測図（2/3・1/2）

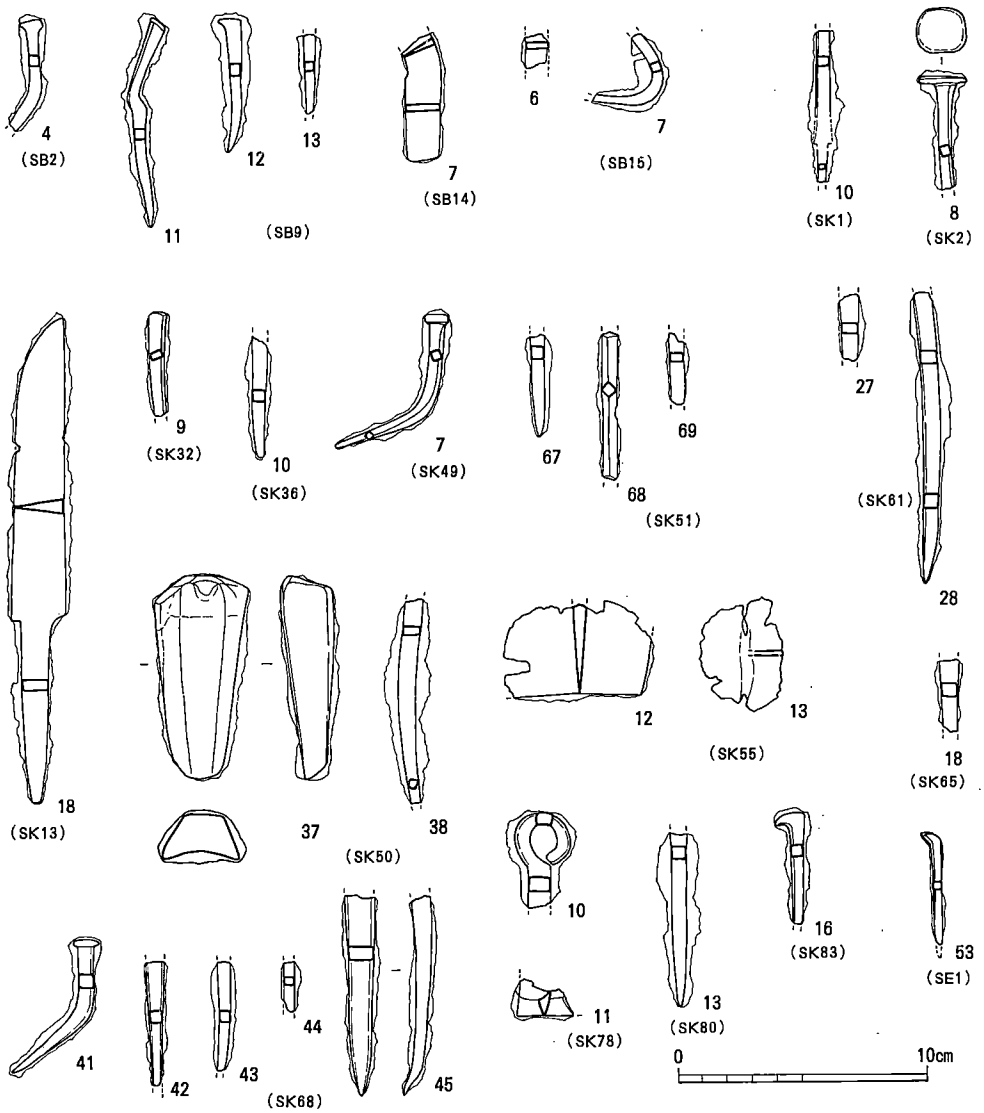
は最大8㎜、厚さ14㎜、重さ32.5g。トレンチ出土。

129は粘板岩製の棒状品で、器表の一部は擦っているらしい。石英の脈が入っている。何かの脚かとも思われるがはっきりしない。現存長39㎜。検出面採集。

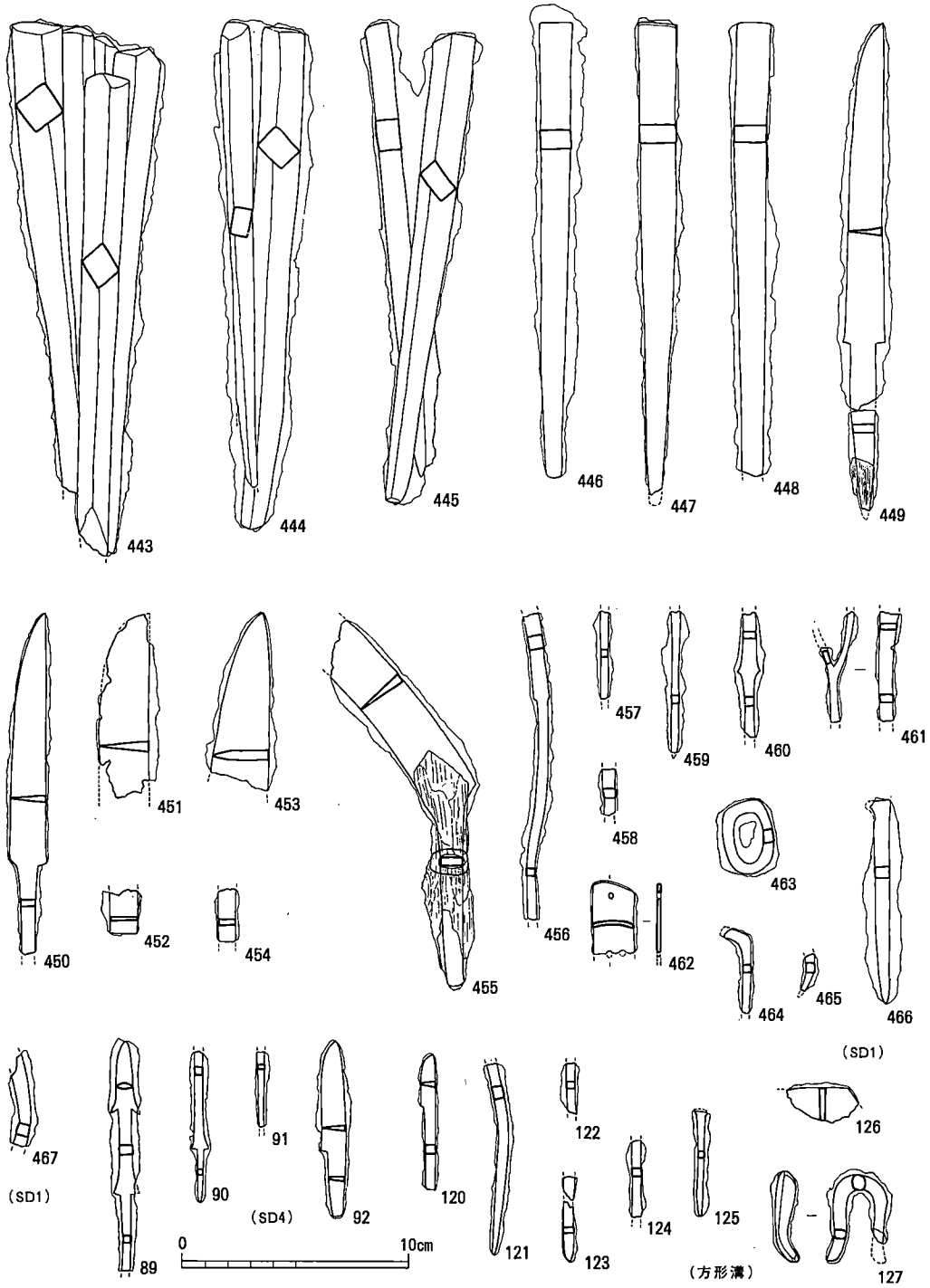
130～139は砥石である。130は流紋岩で中砥であろう。粗面の小口面も使用している。現存長67㎜。ピット出土。131も流紋岩で中砥であろう。ピット出土。132は砂岩の仕上砥で、破損した一方の小口面も擦った所がある。現存長51㎜。ピット出土。133は流紋岩の中砥で現存長50㎜。検出面採集。134も流紋岩の仕上砥で47号住居の東側から出土した。135は砂岩の中砥で現存長90㎜。G・Hの4・5区から出土したので、これは竪穴住居に伴っていたのかもしれない。136は流紋岩の仕上砥で粗面の小口面も一部が擦れている。現存長93㎜。SK76・77付近の撹乱部から出土した。137は荒砥かと思われるが、単なる台石の可能性もある。硬砂岩らしい。二次熱で赤褐色に変色した所と煤の付着した所がある。現存長147㎜、厚さ46㎜。ピット出土。138は砂質千枚岩の荒砥で現存長114㎜。東側斜面からの出土。139は片岩の荒砥もしくは台石である。隅角部分に擦って穿孔のようになった使用痕がある。現存長180㎜、厚さ53㎜。ピット出土。

ｉ．金属器（図版46・48、第145図A140、148・149図A141～A233）

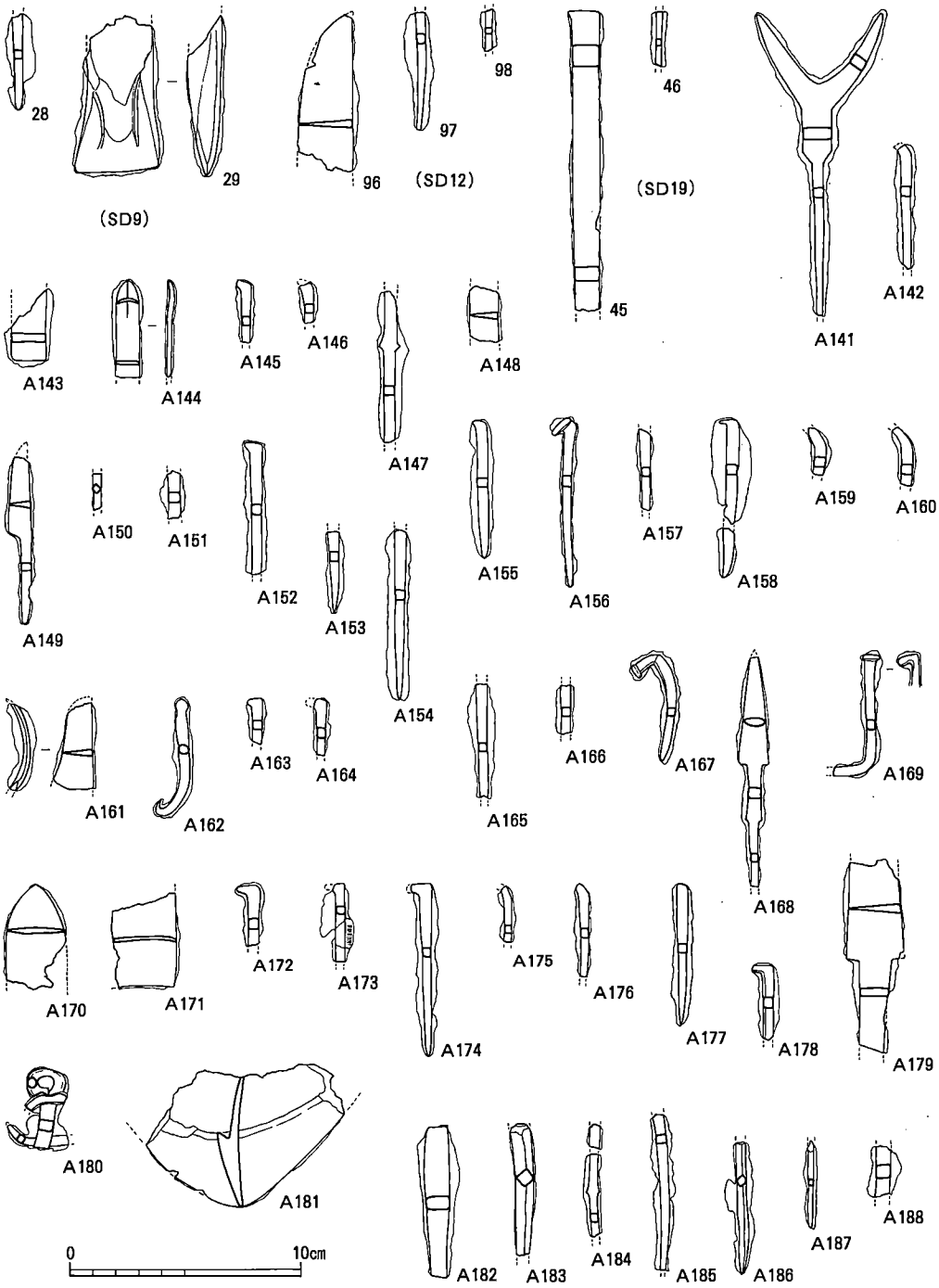
140は銅製品で、刀子の鞘金具と思われる。長さ28㎜、幅11㎜、厚さ10㎜。ＳＫ1の東、ＳＤ4の南側から出土した。141～233は鉄器である。141～176はピット、177～192は検出面等、193～233は攪乱部から出土している。全て錆が著しくて本来の形状を把握しにくかったため、かなり独断的に図化したものもある。よってレントゲン写真等を撮れば形状の違うものもありうるだろう。そのような中で釘と目される資料が最も多かった。いくつかについて触れておく。



第146図　才田 建物跡・土坑・井戸出土鉄器実測図（1/3）

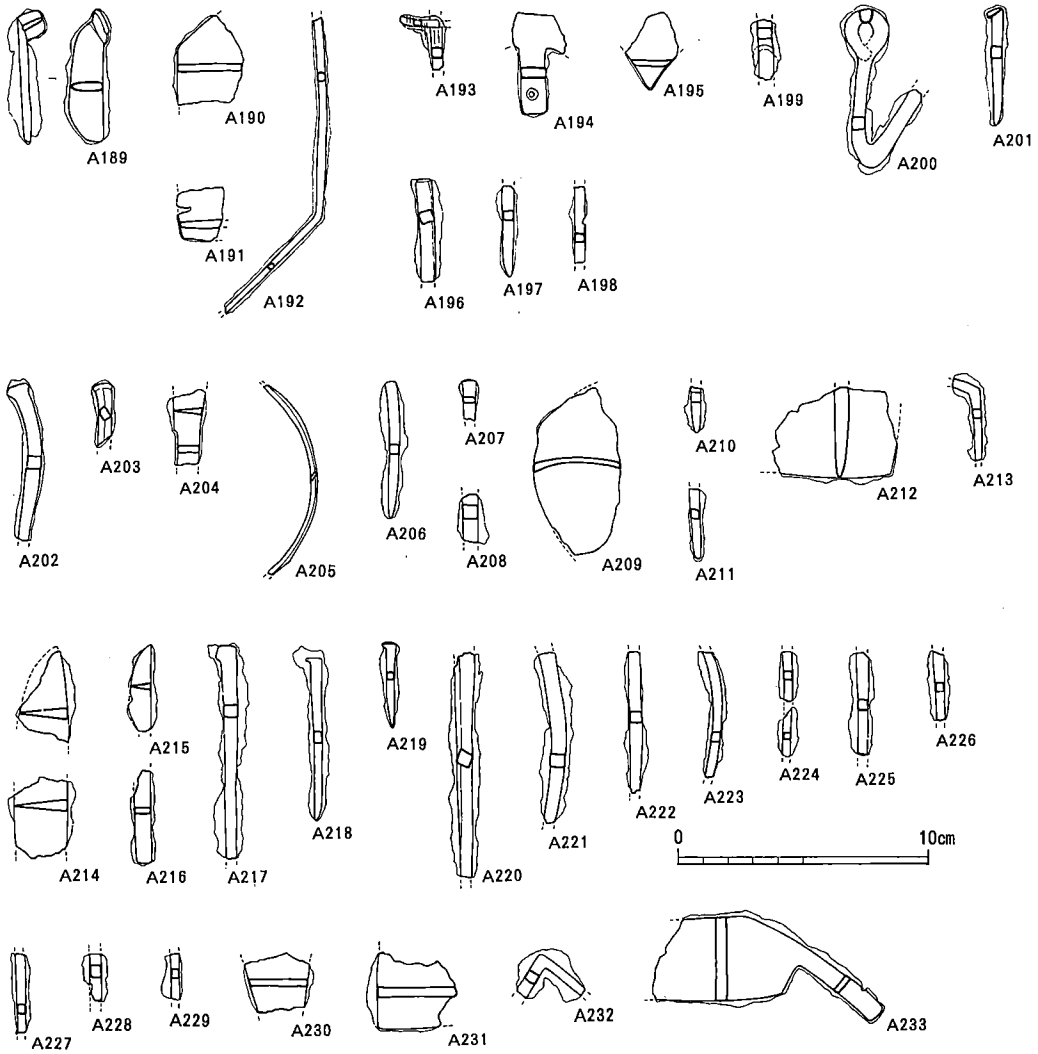


第147図　才田 溝出土鉄器実測図（1/3）



第148図　才田 溝・ピット等出土鉄器実測図（1/3）

141・168は鏃とみてよい。144はヤリガンナとするが断定できない。148・149・161・216は刀子であろう。162は釣針と判断した。長さ50㎜。180・200は環状の部分があり、馬具かと思われるがはっきりしない。181は鋤先の破片。193以降の撹乱部出土品には新しいものも含まれているらしい。



第149図　才田 出土鉄器実測図（1/3）

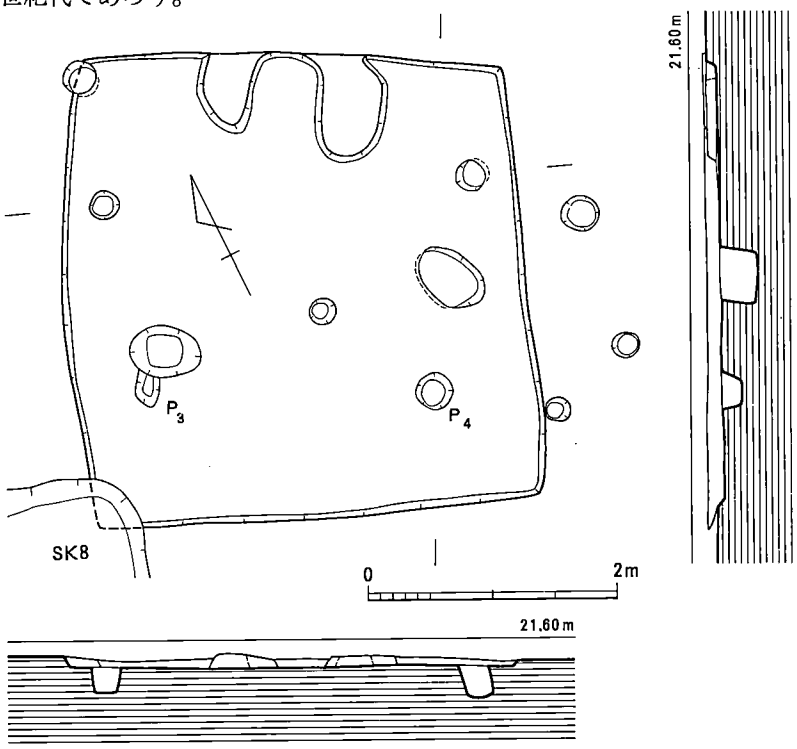
B．古墳時代～奈良時代の遺構と遺物

1　竪穴住居跡

調査区の東半部に分布し、東端部は特に重複して検出された。堆積層へ切り込まれた遺構であり、住居跡の埋土は全て茶褐色砂質土といってよく、検出するのに難渋した。調査時の不手際もあって、プランの全てを把握していない住居もある。また、8号住居跡が欠番となり、19号住居跡は2軒に番号を付したので、19A・19Bとする。

1号住居跡（図版19・20、第150図）

E・F6区にあり、西南隅をSK8に切られている。一辺が370cm前後の方形プランで、北壁中央にカマドを造り付けている。主柱穴は4本のはずであるがP1とP2は検出されなかった。P3-P4間は230cmを測る。検出面から床面までは10cmほどしかなく遺存状態がよくない。面積は12.8m²。カマドを通る主軸方位はN-26°-E。土師器、須恵器のほかに弥生土器片が出土している。7世紀代であろう。



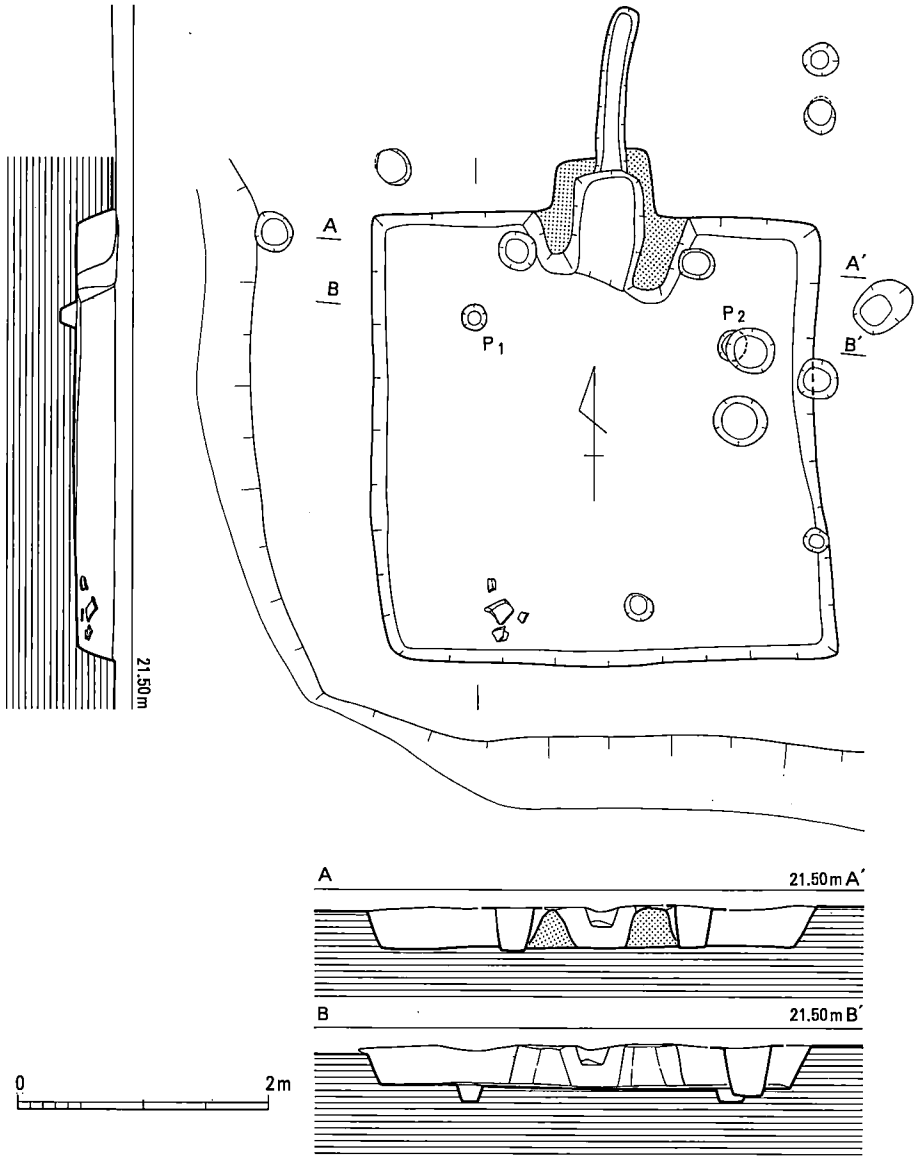
第150図　才田　1号住居跡実測図（1/60）

カマド　灰白色粘土を用いた袖部分の最下部が残っていただけであった。焚口幅は55cm、奥行きは約80cmを測り、焼成部には若干の焼土が見られた。

出土遺物（第153図1～3）

土師器（1～3）　1は壷か。2・3は甕の口縁部片である。

2号住居跡（図版19・20、第151・152図）



第151図　才田　2号住居跡実測図（1/60）

G6区の南東隅にあり、方形溝の内側に位置する。一辺が360cmの方形プランで、北壁中央に突出型のカマドを造り付けている。主柱穴はこれも4本のはずであるがP3とP4は検出されなかった。P1-P2間は210cm。検出面から床面までは30cm強もあって、この遺跡の住居跡としては遺存状態のよい部類に入る。面積は11.2m²。カマドを通る主軸方位はN-0°-E。西南隅近くの床面に土師器甕片があり、床直上および埋土中から墨書を含む土師器と須恵器のほか焼塩土器1、鉄器5、軽石1、弥生土器が出土した。8世紀中～後半であろう。

カマド（第152図）　壁面から突出し、煙道も伸びて行く形態である。北壁中央部の壁面から幅80cmで長さ40～50cmが突出し、その内側は焼土混じりの粘土を充填して袖へと続く。焚口幅は40cmで奥行きは90cmあまりを測る。幅20cmほどの煙道が底面をわずかに上昇させながら130cmまで伸びている。両袖の外側に袖を切った形状で柱穴が140cm離れてあるが、これはあるいはカマドに関連する柱かもしれない。

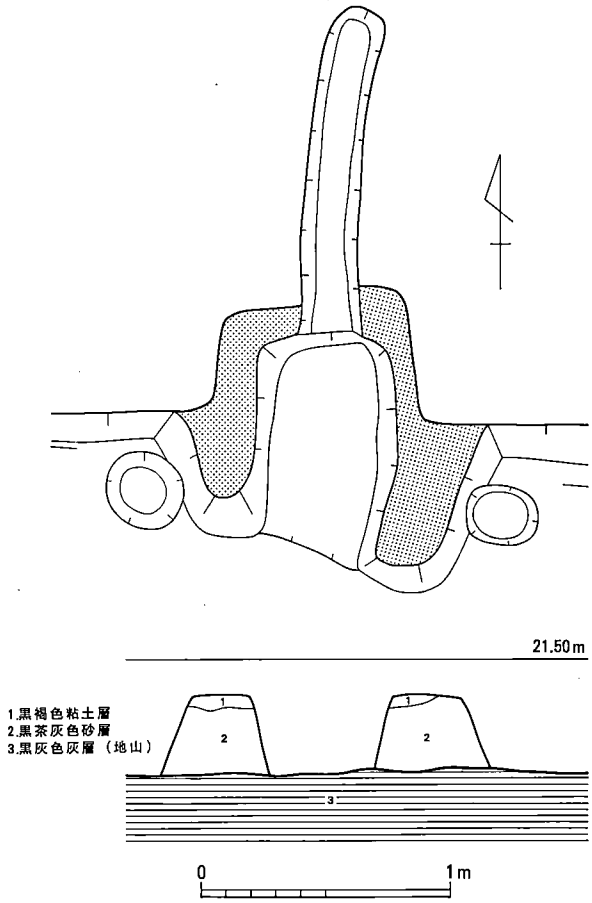
出土遺物（図版49・51・52、第153図1～21、197図22、201図23～27）

須恵器（1～9）　1～4は蓋で、口縁端部は2は鳥の嘴状を呈し、3は丸くなる。1の復原口径13.8cm。5～9は高台の付く椀であろう。7はカマドの袖から出土した。

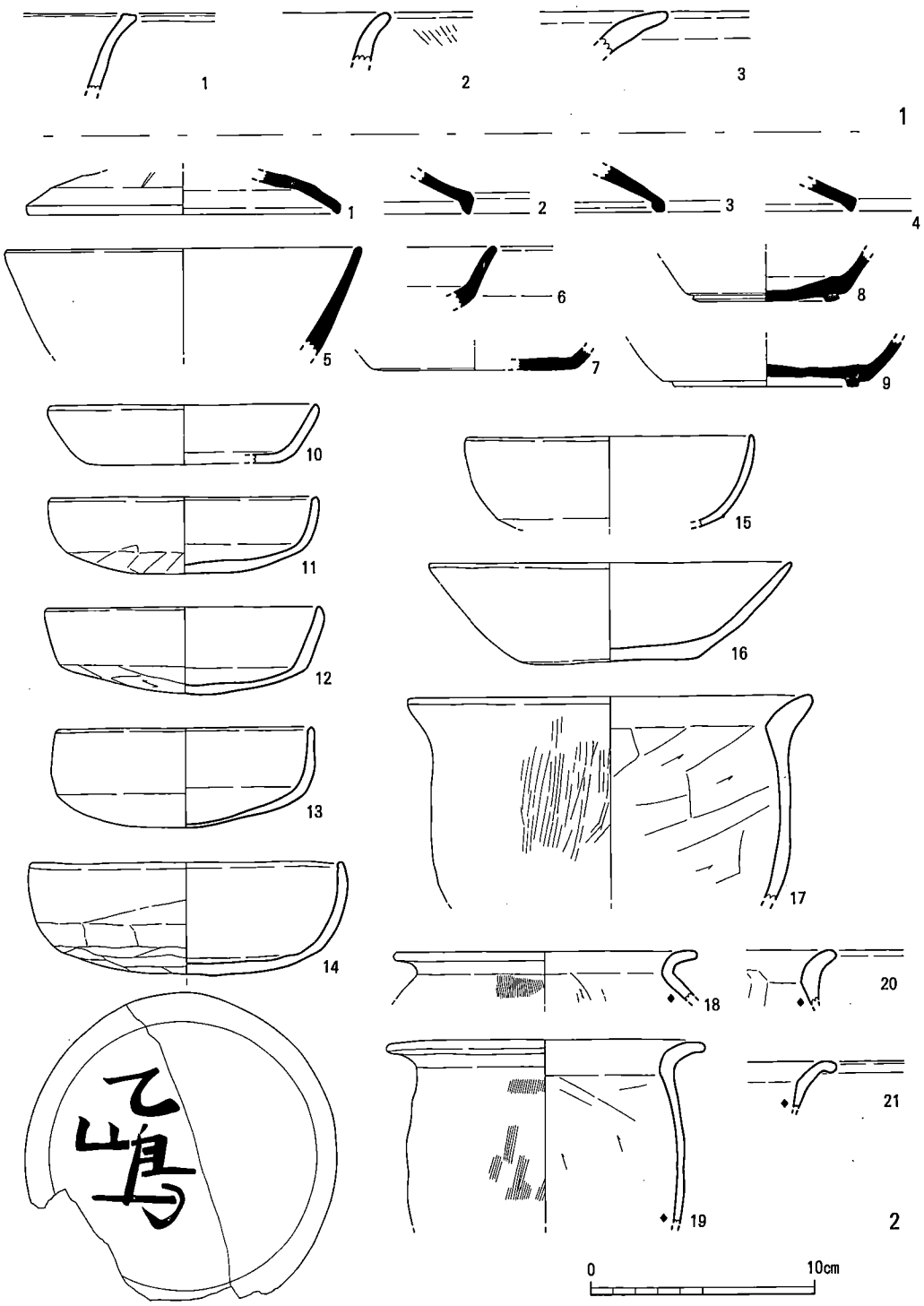
土師器（10～21）　10～16は坏で、14～16はかなり深みがある。14はやや歪みがあり、外底面にはあまりうまい字ではないが「乙嶋」と読める墨書がある。「嶋」の字は扁である山の中央の線が見えない。口径13.7～14.5cm、器高5.2cm。16は他と器形が異なる。17～20は甕で、19の復原口径28.5cm。21は鍋であろうか。

焼塩土器（第197図22）　鉢形になるもので、二次熱を受けている。

鉄器（第201図23～27）　23～25は鏃の破片か。26は小刀の茎であろうか。目釘穴がある。27は刀子としておく。全長58mm。



第152図　才田 2号住居跡カマド実測図（1/30）



第153図　才田 1・2号住居跡出土土器実測図（1/3・1/6）

3号住居跡（図版19・20、第154図）

H6区の南東隅にあり、4号溝が南に屈折する所でその溝に切られ、また東側は段落ちとなって削平されている。4号溝は上層のみを切っているので、その下位に壁面とカマドは遺存していた。南北壁間が370cmなのでおよそ一辺がこの規模の方形プランであろう。西壁中央にカマドを造り付けている。主柱穴はP1～P4の4本であり、柱間距離は一定でない。検出面から床面までは50cmもあって、この遺跡の住居跡としては最も遺存状態がよかった。面積は復原で12.6m²。カマドを通る主軸方位はN-68°-W。埋土中から土師器と須恵器、焼塩土器4、粘土塊のほか弥生土器が出土している。焼塩土器は図示できない。7世紀初頭前後かと思われる。

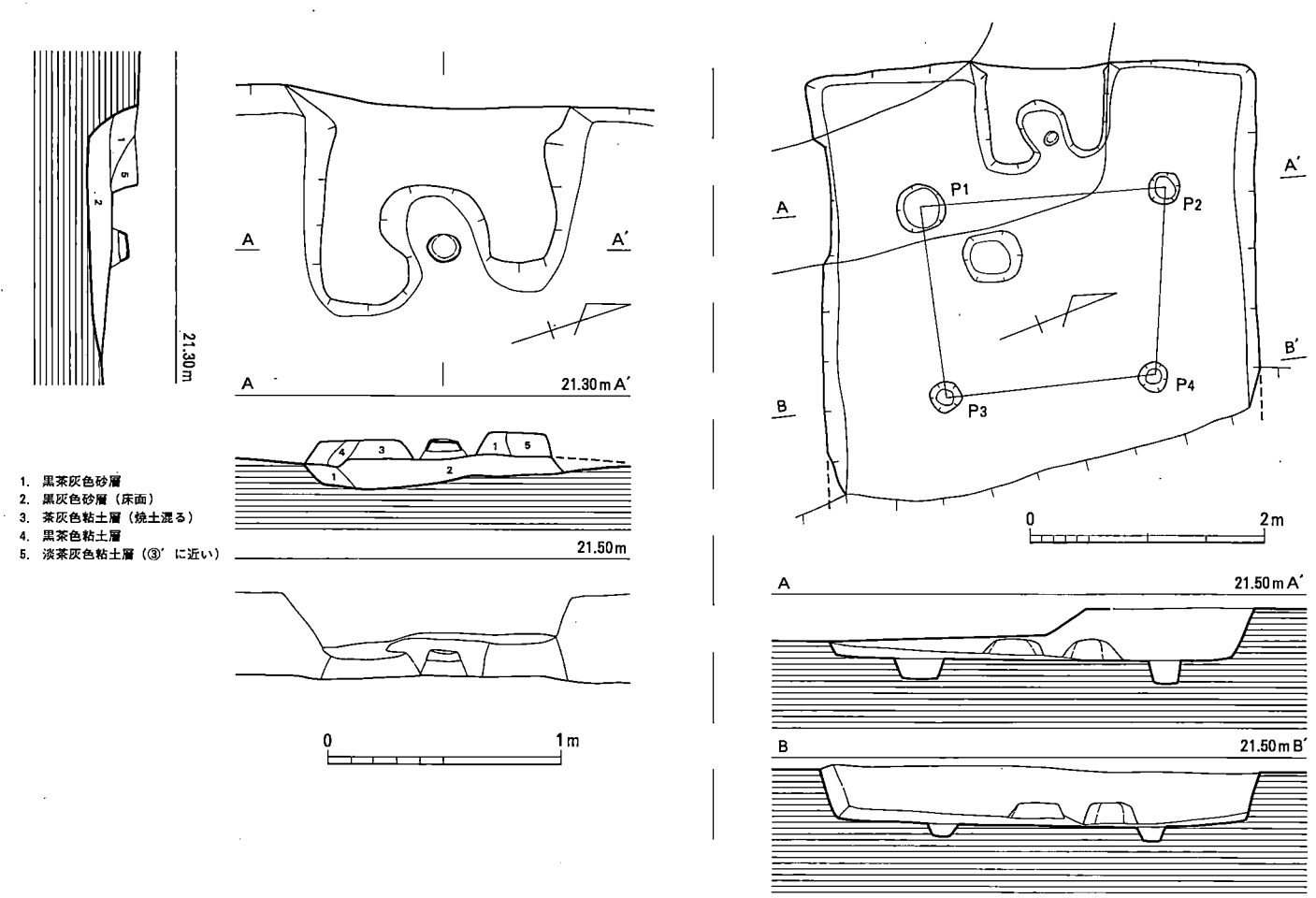
カマド（第154図） 北壁中央部の壁面に黄白色粘土を用いて造り付けている。焚口幅は60cm前後で奥行きは100cmほどを測る。内壁は赤褐色に焼けていた。

出土遺物（第160図1～11）

須恵器（1～4） 1は返りのある蓋で返りの先端は打欠きがなされているらしい。2は扁平な蓋で復原口径19.8cm。3・4は高台の付く椀であろう。

土師器（5～11） 5は坏、6は椀か。7はカマド内の支脚に用いられていた高坏で、脚部は打欠かれていた。口径12cm。8のような脚が付くのであろう。9～11は甕の口縁部片。

Photo. 11 調査風景 ④



第154図　才田 3号住居跡、同カマド実測図（1/60・1/30）

4号住居跡（図版7・14、第155図）

D・Eの2・3区にあり、18号溝がその南半を切っている。検出面からの深さが浅いこともあって南壁は削平されていた。東西壁間が400～450cmなのでおよそ一辺がこの規模の方形プランであったと思われる。北壁中央やや東寄りにカマドがある。主柱穴はP1・P2のみが検出されP3・P4はわからなかった。P1-P2間は235cm。面積は復原で17.7m²。カマドを通る主軸方位はN-0°-E。カマドや埋土中から土師器と須恵器、焼塩土器1、軽石1、スラッグ1、混入の青磁碗が出土している。8世紀中頃か。

カマド　北壁中央のやや東寄りに突出して築かれている。袖等は検出されなかった。焚口幅は55cm前後で奥行きは50cmほどを測る。

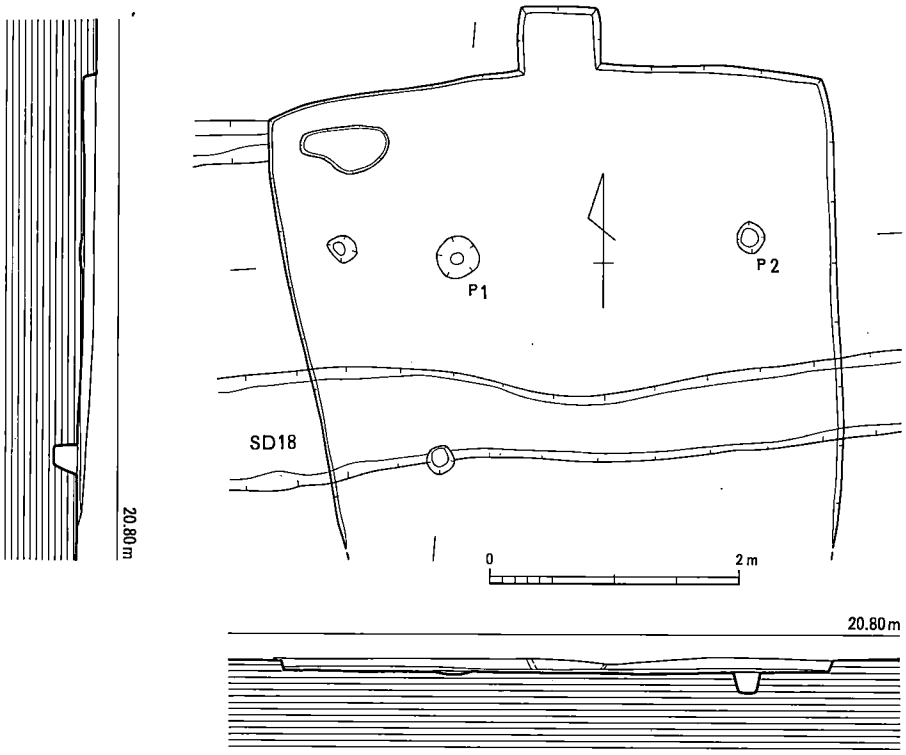
出土遺物（図版51、第160図1～4、197図5）

須恵器（1）　甕の胴部片である。

土師器（2・3）　ともに甕の口縁部片である。

瓦器（4）　カマドからの出土であるが後世の混入である。

焼塩土器（5）　鉢形になるもので、二次熱により外面は鮫肌状となっている。



第155図　才田　4号住居跡実測図（1/60）

5号住居跡（図版7・14、第156図）

E3区にあり、6・7号住居跡にその南半を切られている。東西壁間が300～330cmなのでおよそ一辺がこの規模の方形プランであったと思われる。北壁中央やや東寄りにカマドがある。柱穴は全く検出されなかった。カマドを通る主軸方位はN-28°-W。埋土中から土師器坏1点と焼塩土器1点が出土しているがともに図示できない。8世紀代か。

カマド　北壁中央のやや東寄りに突出して築かれている。袖等は検出されなかった。焚口幅、奥行きとも55cm前後を測る。

6号住居跡（図版7・14、第156図）

E2・3区にあり、5号住居跡を切り、7号住居跡と18号溝に切られている。東西壁間が320～330cmなのでおよそ一辺がこの規模の方形プランであったと思われる。東壁は18号溝に切られた南側は検出できなかった。北壁中央やや東寄りにカマドがある。柱穴は全く検出されなかった。カマドを通る主軸方位はN-4°-W。埋土中から土師器坏・甕が1点ずつと須恵器が出土している。8世紀中頃であろう。

カマド　北壁中央のやや東寄りに突出して築かれている。袖等は検出されなかった。焚口幅は約80cm、奥行きは50cmを測る。

出土遺物（第160図1）

須恵器　椀の口縁部片である。

7号住居跡（図版7・14、第156図）

E2区にあり、6号住居跡を切り、18号溝に切られている。南壁は削平されて検出されなかった。東西壁間が310～335cmなのでおよそ一辺がこの規模の方形プランであったと思われる。北壁中央にカマドがある。主柱穴はP2にあたるものが検出されなかった。カマドを通る主軸方位はN-4°-W。カマドや埋土中から土師器、須恵器、焼塩土器が出土しているが、焼塩土器は図示できない。8世紀後半であろう。

カマド　北壁中央に突出して築かれている。袖等は検出されなかった。焚口幅は50cm、奥行きは60cmを測り、焼成部には若干の焼土があった。

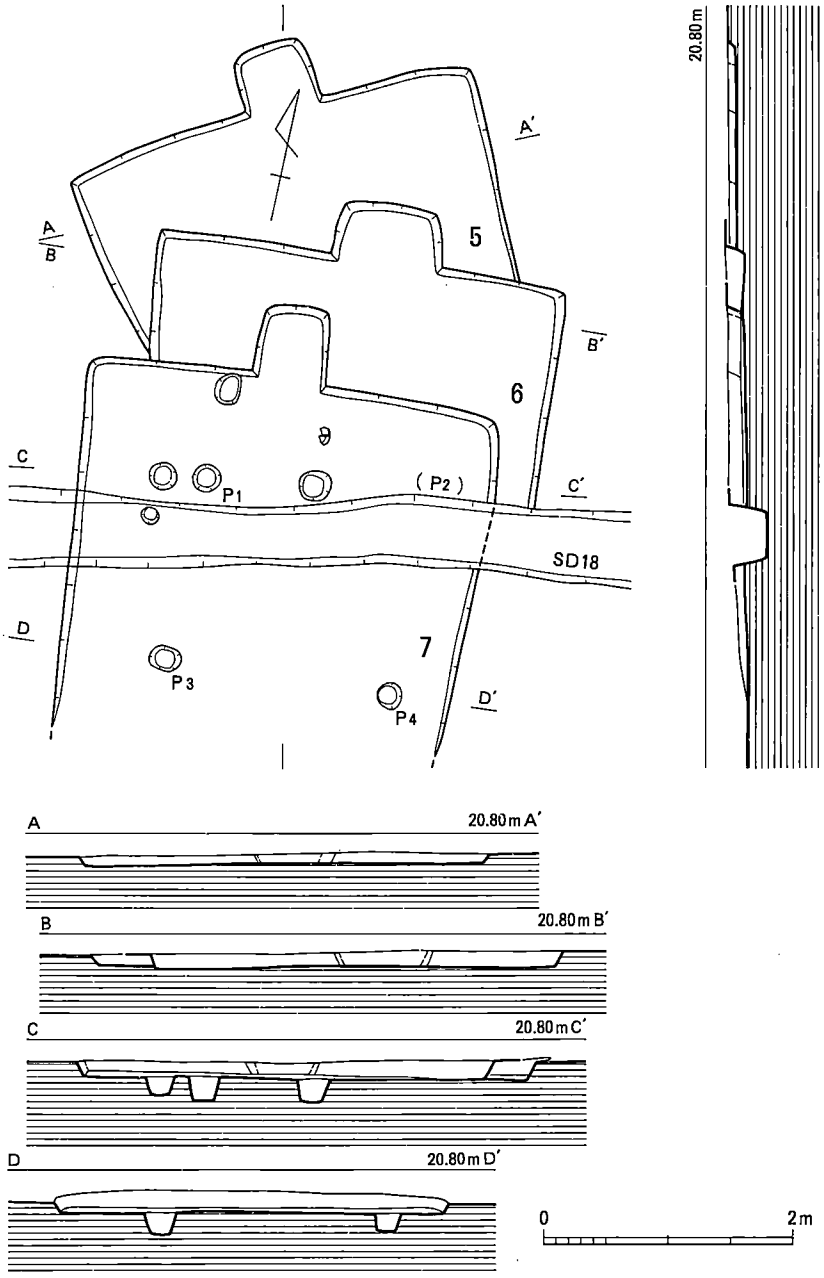
出土遺物（図版49、第160図1～3）

須恵器（1・2）　1は扁平な蓋で復原口径15.8cm。2は内面灰被りの椀の破片である。

土師器（3）　坏で復原口径12.6cm。

9号住居跡（図版8、第157図）

D・E3区にあり、10号住居跡を切っているが、大半は段落ちによって削平されている。北



第156図　才田 5～7号住居跡実測図（1/60）

壁にあるカマドの中心からごくわずかに検出された東壁まで290cmを測るので、これをそのまま折り返すと東西壁間が580cmとなってあまりにも規模が大きくなる。おそらくカマドは西に片寄っていたのであろう。カマドを通る主軸方位はN-2°-W。出土遺物はなかった。8世紀後半か。

カマド　北壁に突出して築かれている。袖等は検出されなかった。焚口幅は50cmと普通だが、奥行きは25cmしかない。

10号住居跡（図版8、第157図）

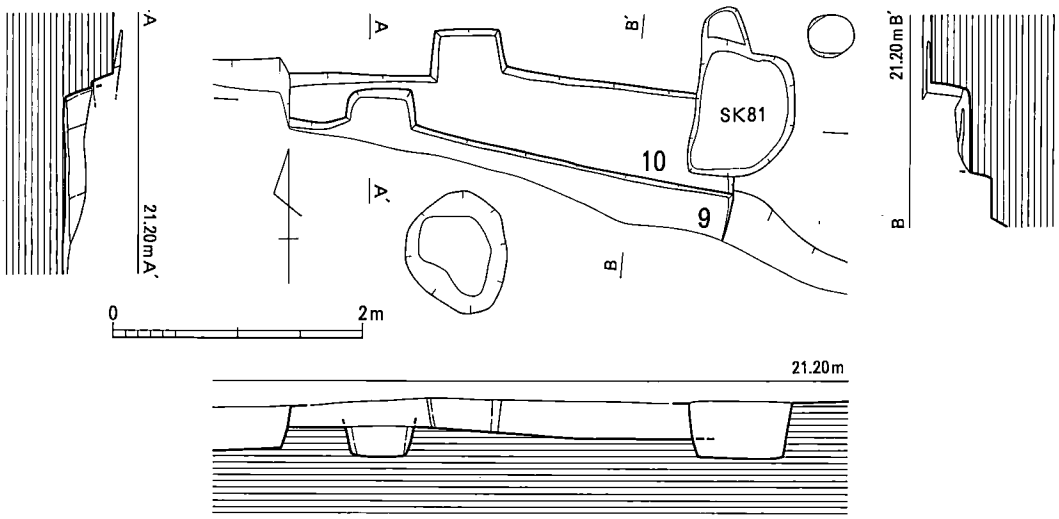
D・E3区にあり、9号住居跡に切られ、81号土坑に東北隅を切られている。北壁にあるカマドの中心からごくわずかに検出された東壁までが200cm前後なので、東西壁間の400cmほどを一辺とする方形プランであったものと思われる。カマドを通る主軸方位はN-4°-E。埋土中から土師器のほか砥石と混入の瓦器、青磁が出土している。8世紀中頃と思われる。

カマド　北壁に突出して築かれている。袖等は検出されなかった。焚口幅は50cmで、奥行きは35cmしかない。

出土遺物（図版52、第160図1・2、200図3）

土師器（1・2）　1は坏の破片。2は硬質の椀で中世の混入品である。

石器（3）　流紋岩の砥石で仕上砥であろう。丸くなった小口部には擦過痕が多数あり、一方の破損面も破損した後に一部を擦っているから器表の全面を使用していることになる。現存長55mm、幅42mm、厚さ29mm。



第157図　才田 9・10号住居跡実測図（1/60）

11号住居跡（図版22・23、第158図）

D5区にあり一部がD6区にかかっている。12～14号住居跡を切っているが、13・21～23号土坑に切られて壁が寸断されている。残存する壁面により、一辺が370～420cm前後の方形プランであったものと思われる。カマドは北壁に造られている。主柱穴は不明。復原で面積は15.8m²。カマドを通る主軸方位はN-29°-W。カマドや埋土中から土師器、須恵器のほか焼塩土器1、鉄器1と混入の黒色土器、瓦器、青磁が出土している。8世紀後半か。

カマド　北壁に突出して築かれている。袖等は検出されなかった。焚口幅は55cmで、奥行きは30cmしかない。

出土遺物（図版52、第160図1～7、201図8）

須恵器（1～3）　1は皿であろうか。2・3は甕の胴部片である。

土師器（4～7）　ともに甕の口縁部片である。5～7は内面のケズリとの境に稜線が入る。7はカマド出土で復原口径19.8cm。

鉄器（8）　鏃であろう。復原で身の長さは92mm。

12号住居跡（図版22・23、第159図）

D・Eの5・6区にある。13・14・16号住居跡を切り、11・17号住居跡と11・13・20号土坑に切られて壁が寸断されている。残存する南北壁間は430～455cmを測るが、13号土坑に切られた西壁が見えないので一辺が420～460cm前後の方形プランであったものと思われる。カマドは残存する壁に見あたらないので西壁に造られていたのであろう。主柱穴も不明。埋土中から土師器・須恵器のほかに混入の古式土師器、瓦器、白磁が出土している。8世紀中頃であろう。

出土遺物（第160図1）

須恵器　椀の口縁部片である。

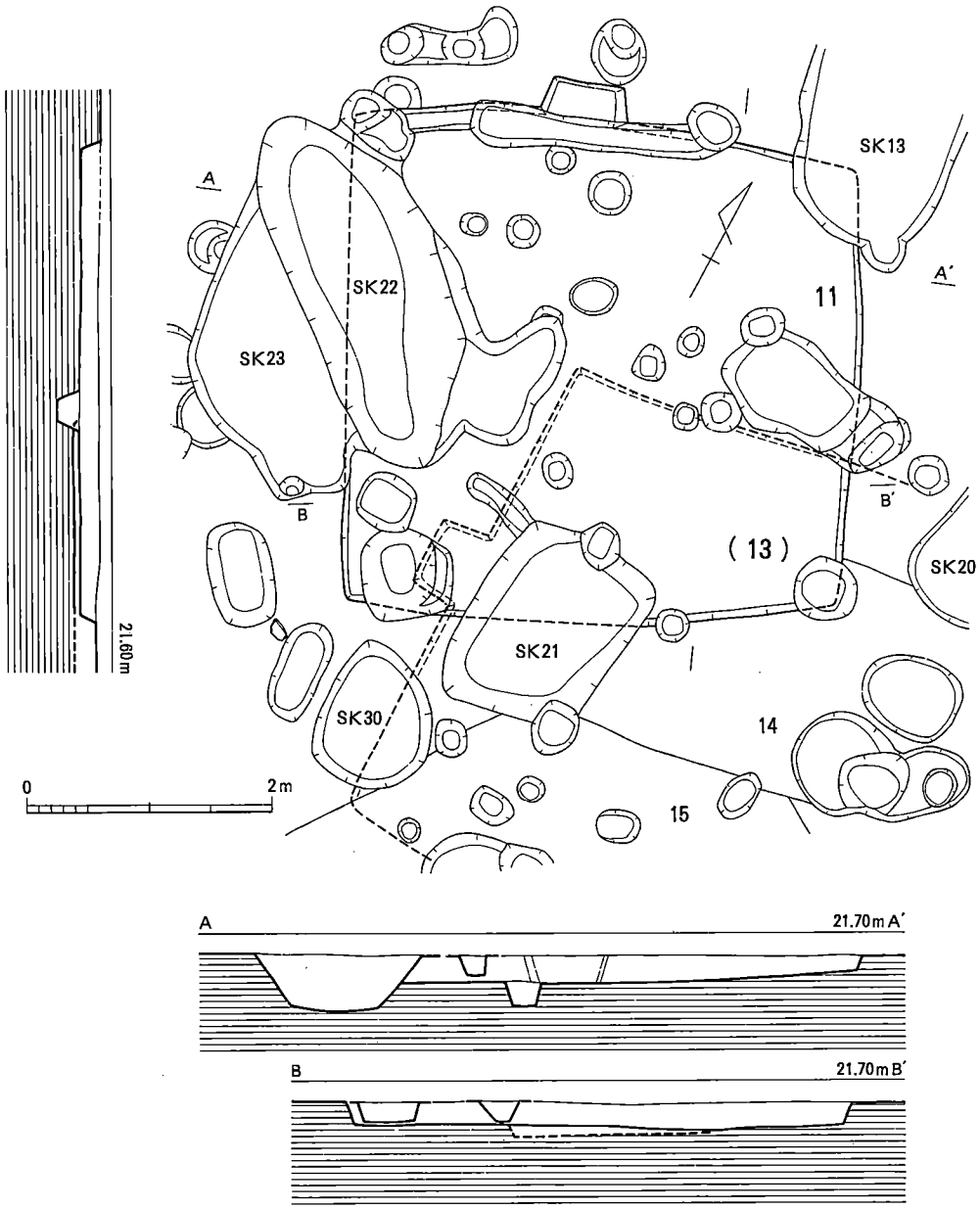
13号住居跡（図版22・23、第158図）

D5区にあり、11・12・14・15号住居跡と20・21・30号土坑に切られている。ほとんどがこれらの下層にあって、灰白色粘土で貼床をしている部分があったので、推定でのプランが何とかつかめた。南北壁間が420cm前後と思われるので、ほぼ一辺がこの規模の方形プランであろう。カマドは西壁に造られていたらしい。主柱穴も不明である。主軸方位はN-90°-W。面積は復原で15.8m²。土師器のほかにすり石、混入の白磁が出土しているが、土器は図示できない。7世紀代か。

カマド　西壁に突出して築かれていたと思われる。袖等は検出されなかった。焚口幅は60cm、奥行きは40cmほどと思われる。

出土遺物（図版44、第200図1）

石器　輝石安山岩のすり石である。表裏ともによく擦れている。長径100㎜、短径80㎜、厚さ24.3㎜、重さ291.8g。



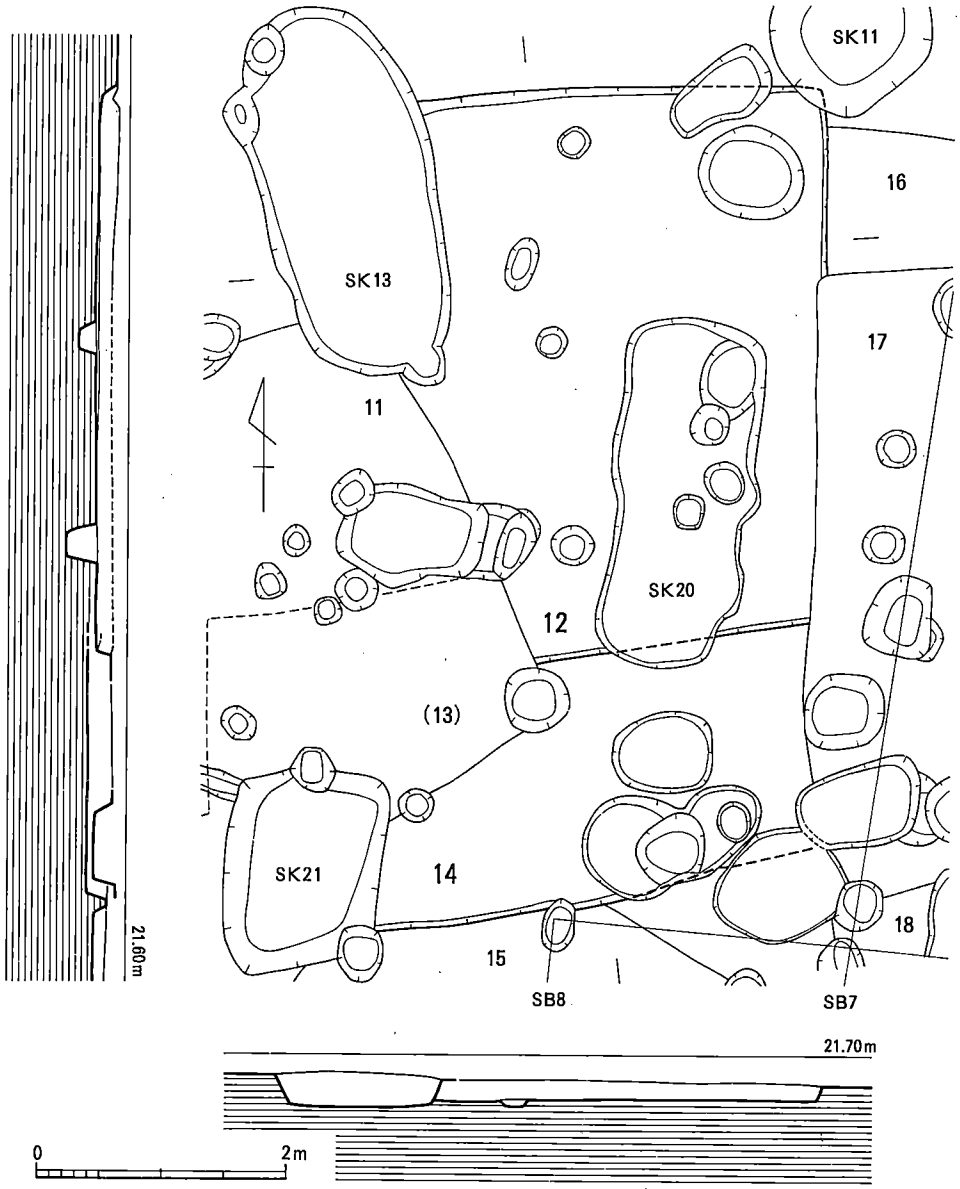
第158図　才田 11・13号住居跡実測図（1/60）

14号住居跡（図版22・23、第159図）

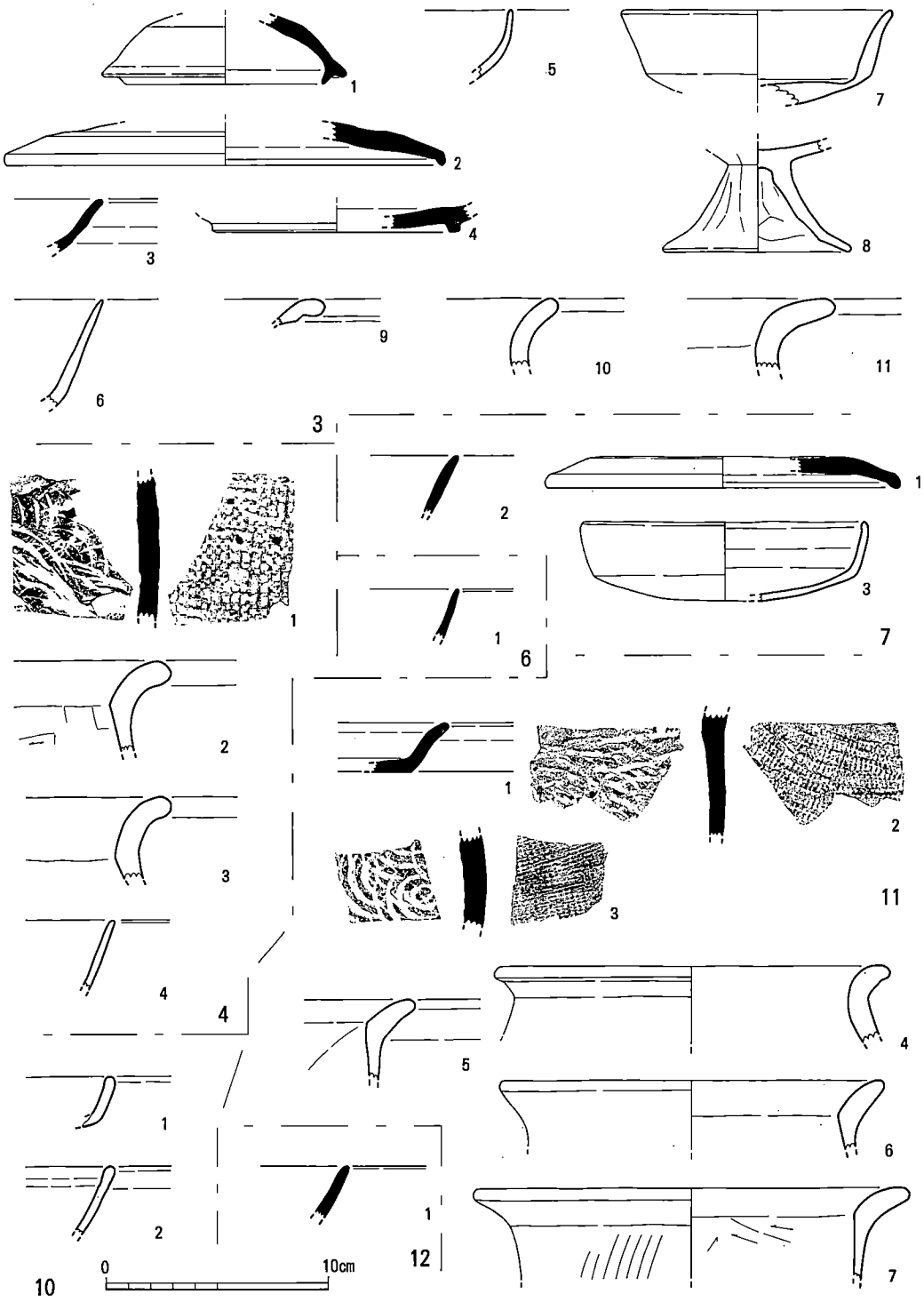
D・E5区にあり、13・15号住居跡を切り、11・12・17号住居跡と20・21号土坑に切られていて、南壁の一部が見られるのみの住居である。カマドや主柱穴も不明。埋土中から土師器・須恵器のほかに軽石1と混入の白磁が出土している。8世紀代か。

出土遺物（第165図1・2）

須恵器（1・2） 1は椀の破片。2は器台の裾部らしい。復原裾径23cm。



第159図　才田 12・14号住居跡実測図（1/60）



第160図　才田 3・4・6・7・10～12号住居跡出土土器実測図（1/3）

15号住居跡（図版22・23、第161図）

D・E5区にあり、13号住居跡を切り、14号住居跡と21・29・30・38号土坑に切られて壁が寸断されている。それでも残存する壁面から一辺が350～430cmの台形に近いプランであったことがわかる。面積は復原で15.9㎡。カマド、主柱穴は不明。埋土中から土師器・須恵器のほかに焼塩土器1、砥石、混入の弥生土器、瓦器が出土している。8世紀代であろう。

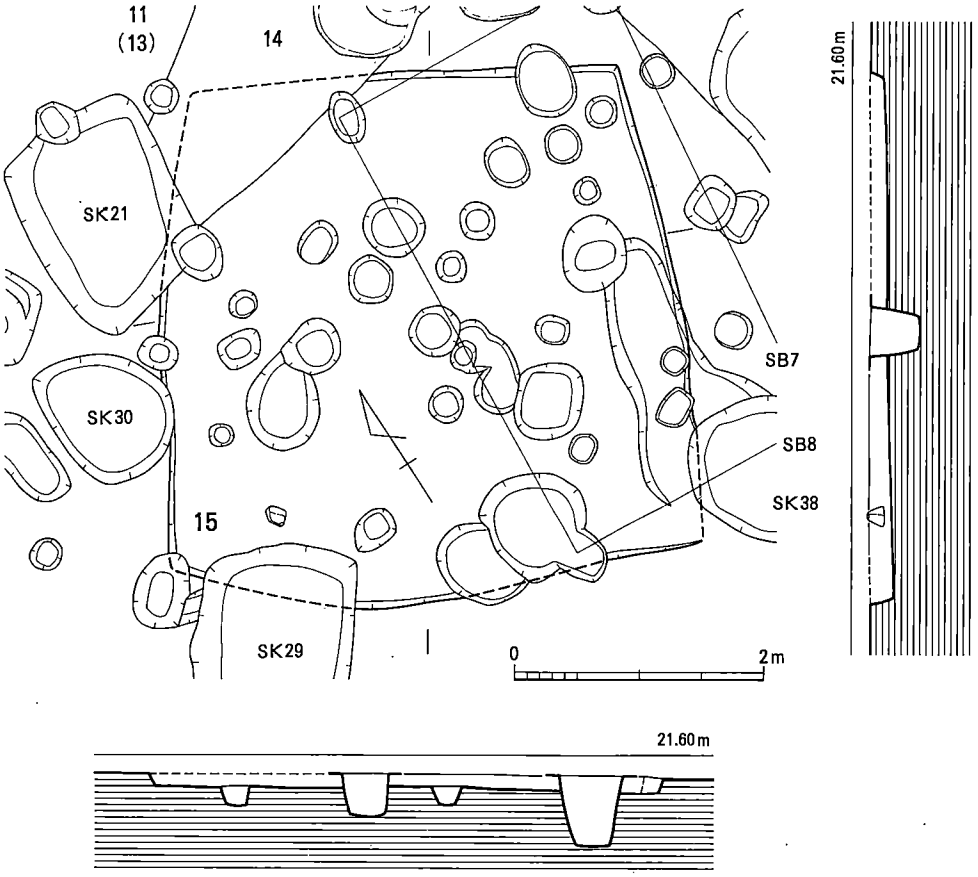
出土遺物（図版52、第165図1、200図2）

土師器（1） 坏の破片と思われる。

石器（2） 砂岩の粗砥である。中央を縦断するように石英の脈がはしっている。表裏面ともによく使用されている。長さ195mm、幅134mm、厚さ60mm。

16号住居跡（図版22・23、第162図）

E6区にあり、12・17号住居跡に切られて北壁と東壁のごく一部が見えるのみである。北壁



第161図　才田 15号住居跡実測図（1/60）

は310cmが残存するから、一辺が400cm前後の方形プランであったと推定する。カマドは北壁に見えないので西壁に造られていたものと思われる。主柱穴は不明。埋土中から土師器が出土している。7世紀末頃であろうか。

出土遺物（第165図1）

土師器　甕で内外とも磨滅している。復原口径21.2cm。

17号住居跡（図版22・23、第162図）

E5区から6区に位置し、12・14・16・19B号住居跡を切り、18号住居跡と7号掘立柱建物跡、12・18・19号土坑に切られている。南壁はほとんど遺存しないが、一辺が390～450cm前後の台形に近いプランとなる。カマドは北壁に造られている。主柱穴は断定できないが、横長のP1～P4を措定しておく。12号土坑の上面にある粘土はこの住居に関係あるものかどうかわからない。復原で面積は18.3m²。カマドを通る主軸方位はN-5°-W。カマドや埋土中から土師器、須恵器のほか焼塩土器1、鉄器1、スラッグ1と混入の弥生土器、瓦器、白磁が出土している。8世紀中頃と思われる。

カマド　北壁のやや西寄りに突出して築かれている。袖等は検出されなかった。焚口幅は65cmで、奥行きは30cmほどしかない。焼成部に若干の焼土があった。

出土遺物（図版49・52、第165図1～7、201図8）

須恵器（1・2）　1は蓋で復原口径13cm。2は椀の口縁部片。

土師器（3～7）　3～5は肩の張らない器形の甕で、4はカマド出土。復原口径12.6cm。7の甕は大型で肩部が張っている。復原口径23.7cm。6は甑であろうか。

鉄器（8）　鏃である。現存長70mm。

18号住居跡（図版22・23、第163図）

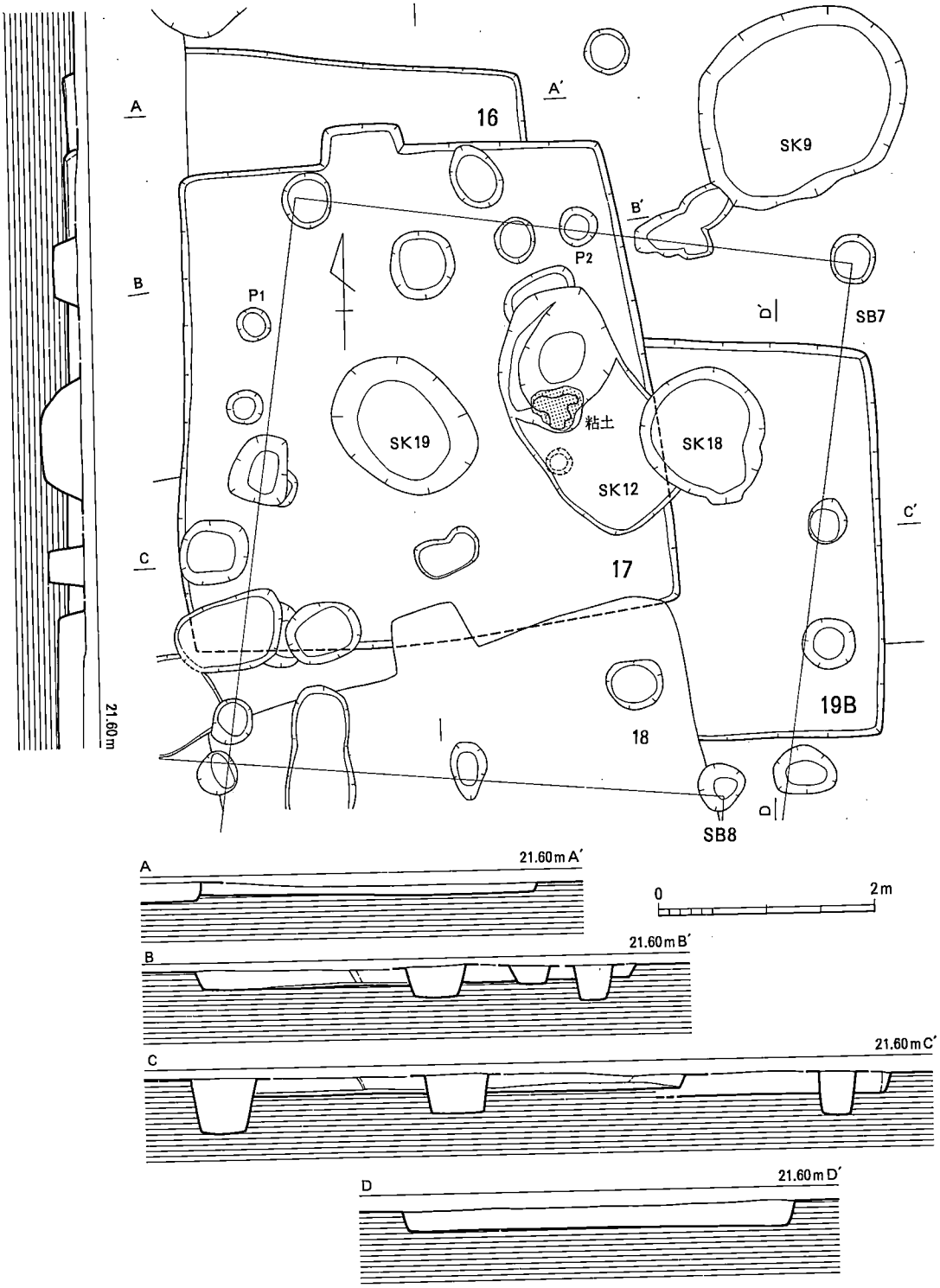
E5区に位置し、17・19A・19B号住居跡を切り、7・8号掘立柱建物跡、39号土坑に切られている。南北380cm、東西440cmの東西に長いプランであり、カマドは北壁に造られている。主柱穴は不明。復原で面積は15.9m²。カマドを通る主軸方位はN-16°-W。カマドや埋土中から土師器、須恵器のほか混入の弥生土器が出土している。7世紀初頭頃の土器もあるが、8世紀後半であろう。

カマド　北壁のやや東寄りに突出して築かれている。袖等は検出されなかった。焚口幅は70cmで、奥行きは50cmを測る。

出土遺物（第165図1～4）

須恵器（1・2）　1は摘みの付く蓋であろう。カマド出土。復原口径7.4cm。2は甕の胴部片。

土師器（3・4）　3の甕は口縁上面にヘラ状工具による切り込みが2カ所ある。3の甕は大型品



第162図　才田 16・17・19B号住居跡実測図（1/60）

で、復原口径24.2cm。

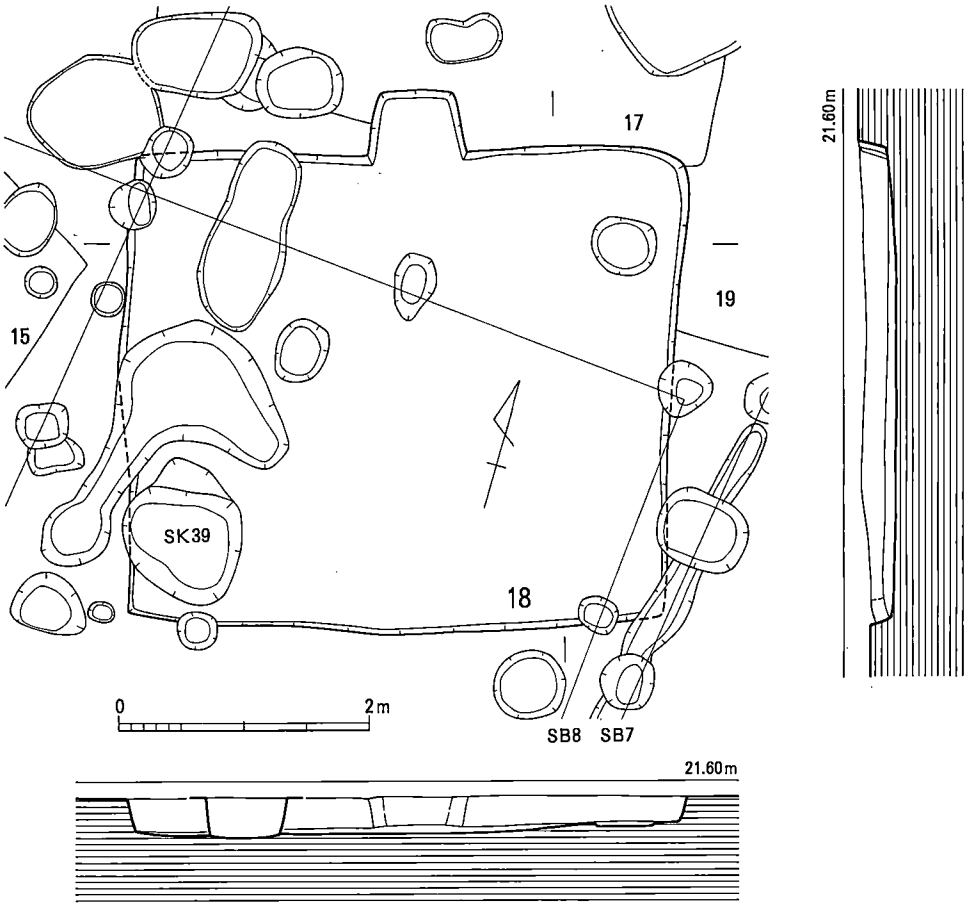
19A号住居跡（図版22・23、第164図）

E・F5区に位置し、47号住居跡を切り、18・19B号住居跡、4・5・7・8号掘立柱建物跡に切られている。南壁360cm、東壁410cmを測るが、一辺が360～490cmの台形プランになるであろう。カマドは西壁に造られていたと思われる。主柱穴は不明。復原で面積は18.9m²。

調査時の不手際で19号住居跡が2軒存することとなり、出土遺物も混在してしまったが、多くはこの19Aに属するものと考えるのでここで述べる。土師器、須恵器、焼塩土器2、軽石2のほか混入の弥生土器、古式土師器が出土している。8世紀中頃であろう。

出土遺物（図版51、第169図1～8、197図9・10）

須恵器（1・8） 1は蓋の破片。8は中世の須恵質土器と判断した。甕形であるがもう少し肩の

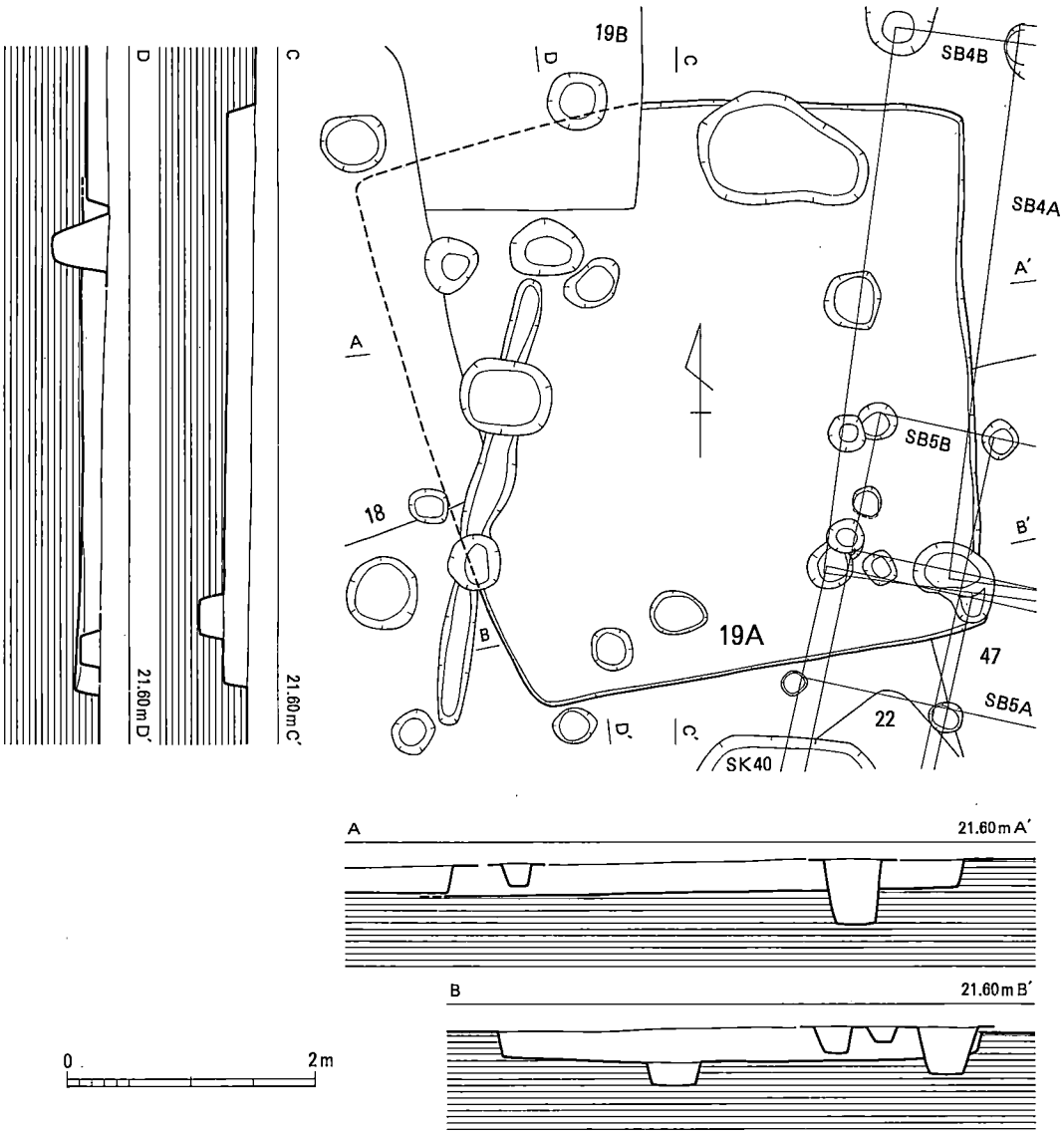


第163図　才田 18号住居跡実測図（1/60）

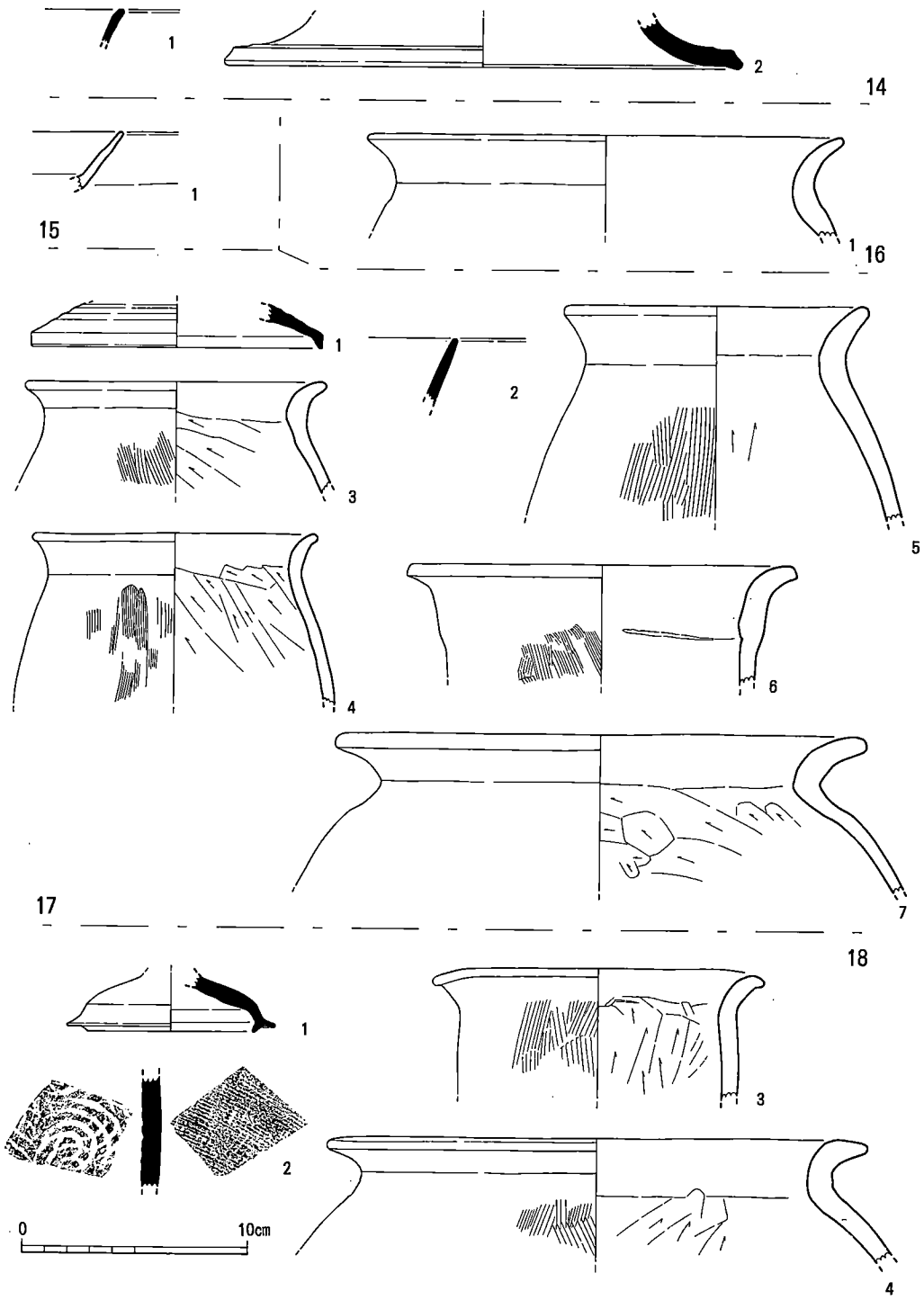
張る器形かもしれない。

土師器（2～7） 2～4は坏で、4は内湾した形状をなし復原口径14cm。5・6は似た形状の甕である。7の坏は中世の混入品であろう。

焼塩土器（9・10） ともに薄手のつくりで椀形になろう。二次熱を受けている。10の内面には二枚貝の条痕がある。



第164図　才田 19A号住居跡実測図（1/60）



第165図　才田 14・15・16・17・18号住居跡出土土器実測図（1/3）

19B号住居跡（図版22・23、第162図）

E5区にあり、17・18号住居跡、7号掘立柱建物跡、12・18号土坑に切られて半分以上を欠失する。東壁が360cmなので、ほぼそれを一辺とする方形プランであったろう。カマドは西壁に造られていたと思われる。主柱穴は不明。前述のようにこの住居の出土遺物は19A号に混在しているはずであるが分離できない。

20号住居跡（図版22・23、第166図）

D・Eの4区にあり、21号住居跡と52号土坑、17号溝に切られている。一辺が420～465cmの方形プランであり、カマドは北壁にあったものを52号土坑に切られているらしい。主柱穴は不明。復原で面積は19.1m²。埋土中から土師器、須恵器、軽石のほか混入の瓦器、青磁、白磁が出土している。8世紀中頃であろう。

出土遺物（図版49、第169図1～3）

須恵器（1・2） ともに高台の付く椀で、1は生焼けである。復原口径14cm。

土師器（3） 坏の破片である。

21号住居跡（図版22・23、第166図）

E4区で20号住居跡を切ってその東にある。南北270cm、東西300cmの東西に長い小型の長方形プランであり、カマドは付設されていない。主柱穴も全く不明であるから単なる竪穴とすべきであったかもしれない。面積は7.5m²。主軸方位はN-90°-W。埋土中から土師器、須恵器、軽石1のほか混入の白磁が出土している。8世紀後半であろう。

出土遺物（図版49、第169図1～4）

須恵器（1・2） 1は扁平な摘みの蓋。2は椀で復原口径15.8cm。

土師器（3・4） 3は坏の破片で口唇部がギザ状となっている。4は大型の鍋で復原口径33.2cm。

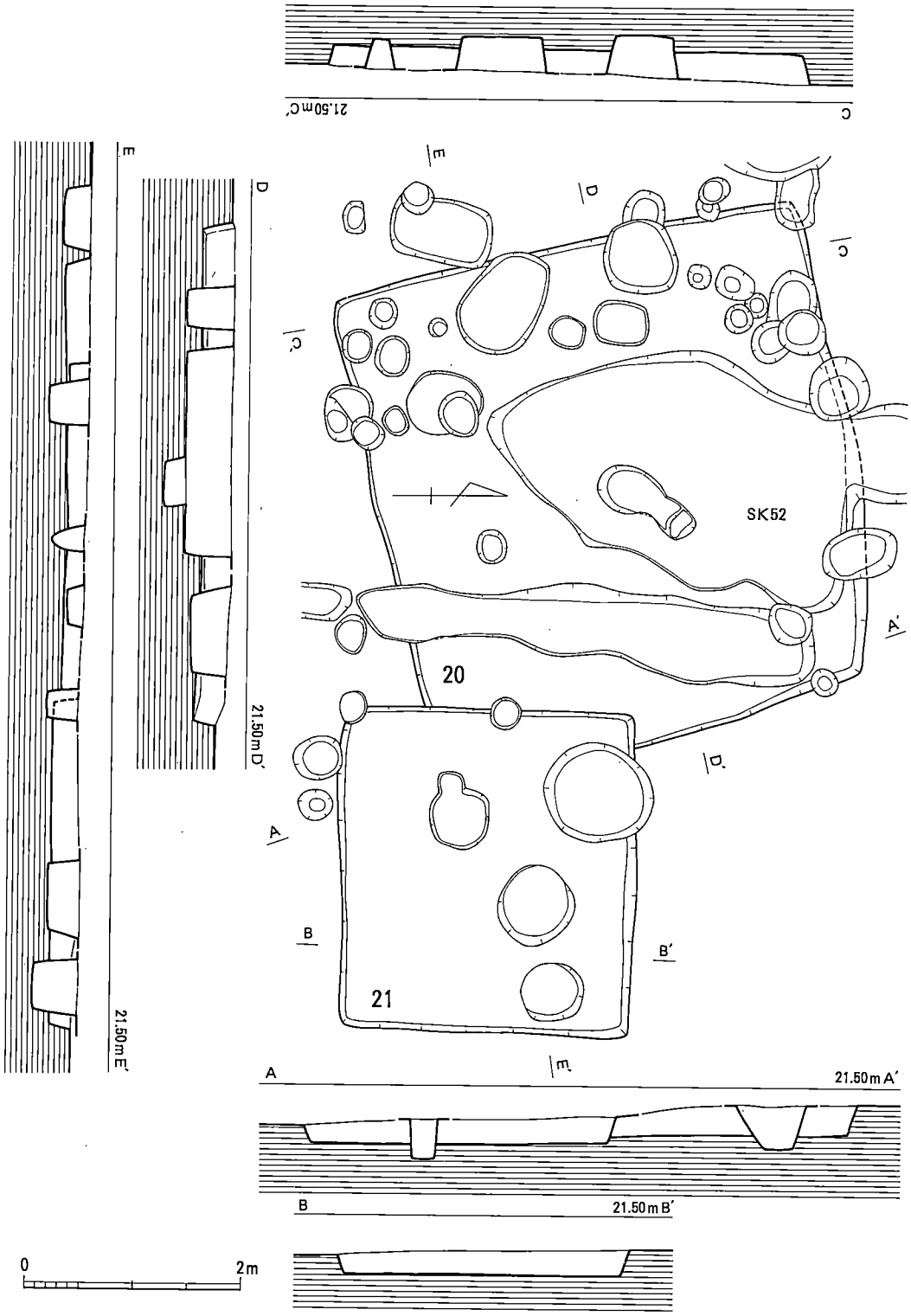
22号住居跡（図版22・23、第167図）

E・Fの4・5区にまたがってあり、南隅を23号住居跡に、北側を46号住居跡に切られ、2・5・11号掘立柱建物跡、40～43号土坑にも切られている。一辺が440～460cmの方形プランであり、カマドは検出されなかった。主柱穴も不明である。復原で面積は19.7m²。埋土中から土師器、須恵器と粘土塊が出土している。8世紀前半であろう。

出土遺物（第1691～7）

須恵器（1～4） 1は宝珠形の摘みを持つ蓋。2・3は高台の付く椀で、2は高台が高い。4は壷であろう。復原口径14cm。

土師器（5～7） 5は坩。6は肩の張らない甕で復原口径15.8cm。7は甑である。



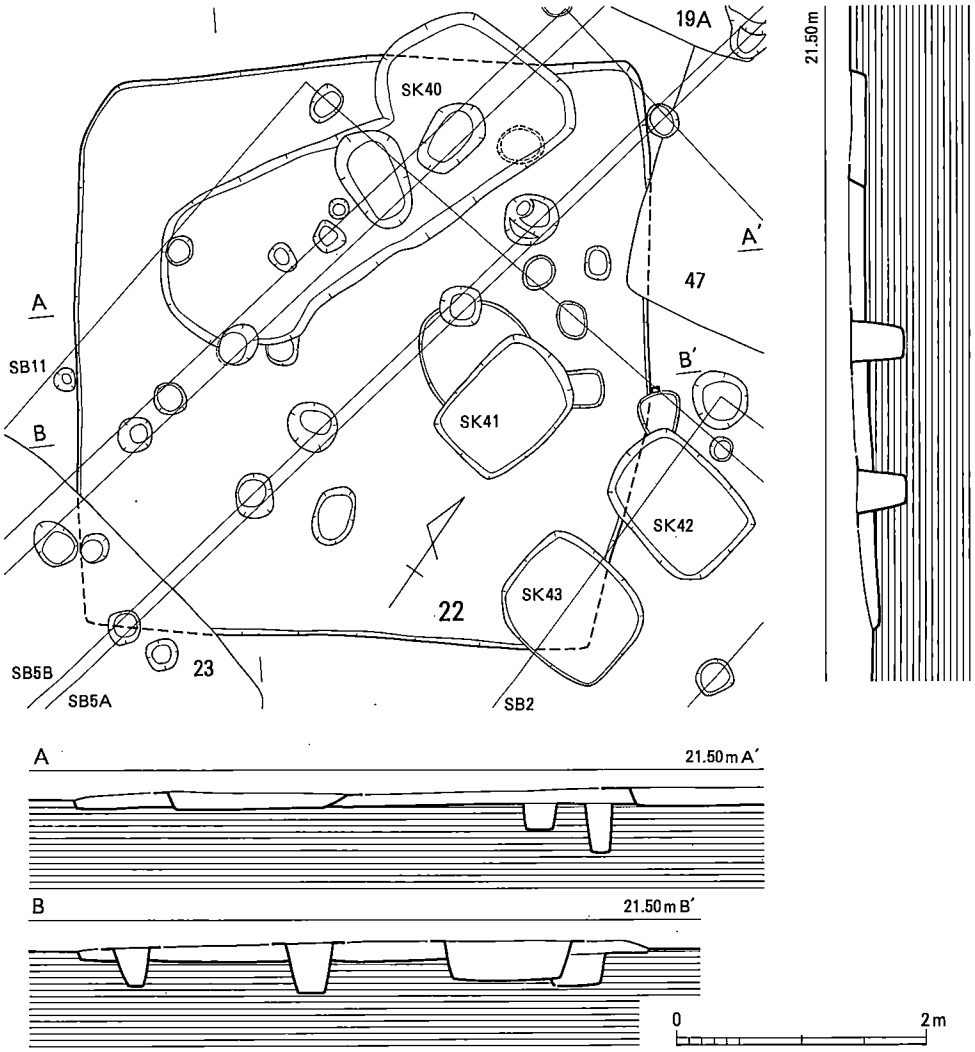
第166図　才田 20・21号住居跡実測図（1/60）

23号住居跡（図版22・23、第168図）

E・Fの4区で、22号住居跡を切ってその南にある。5・11号掘立柱建物跡に切られている。一辺が380cmの方形プランをなし、カマドは検出されなかった。主柱穴も不明。面積は13.7㎡。埋土中から土師器、須恵器、焼塩土器1、軽石2と混入の瓦器が出土している。8世紀中頃であろう。

出土遺物（図版49、第169図1～4）

須恵器（1～3） 1の蓋はまだ身受けの突出がある。2・3は椀で、3は外面に灰を被っている。復原口径11.8cm。



第167図　才田 22号住居跡実測図（1/60）

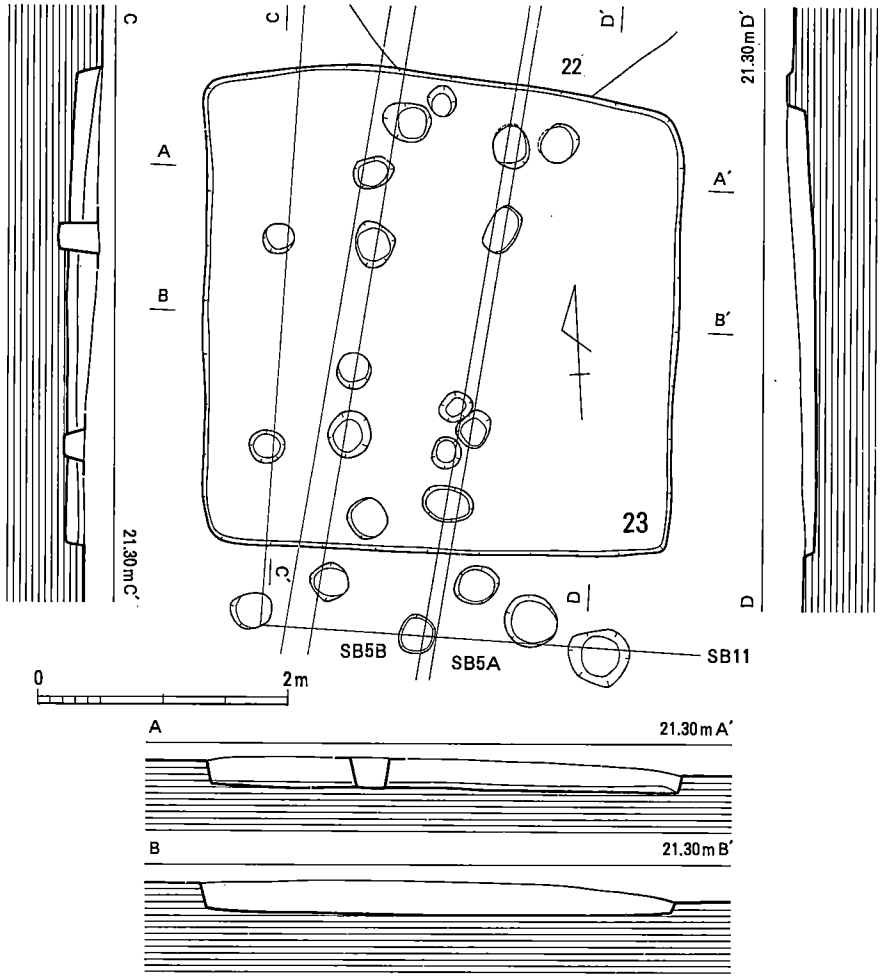
土師器（4）　口縁が直口の坏で復原口径16cm。

24号住居跡（図版22、第170図）

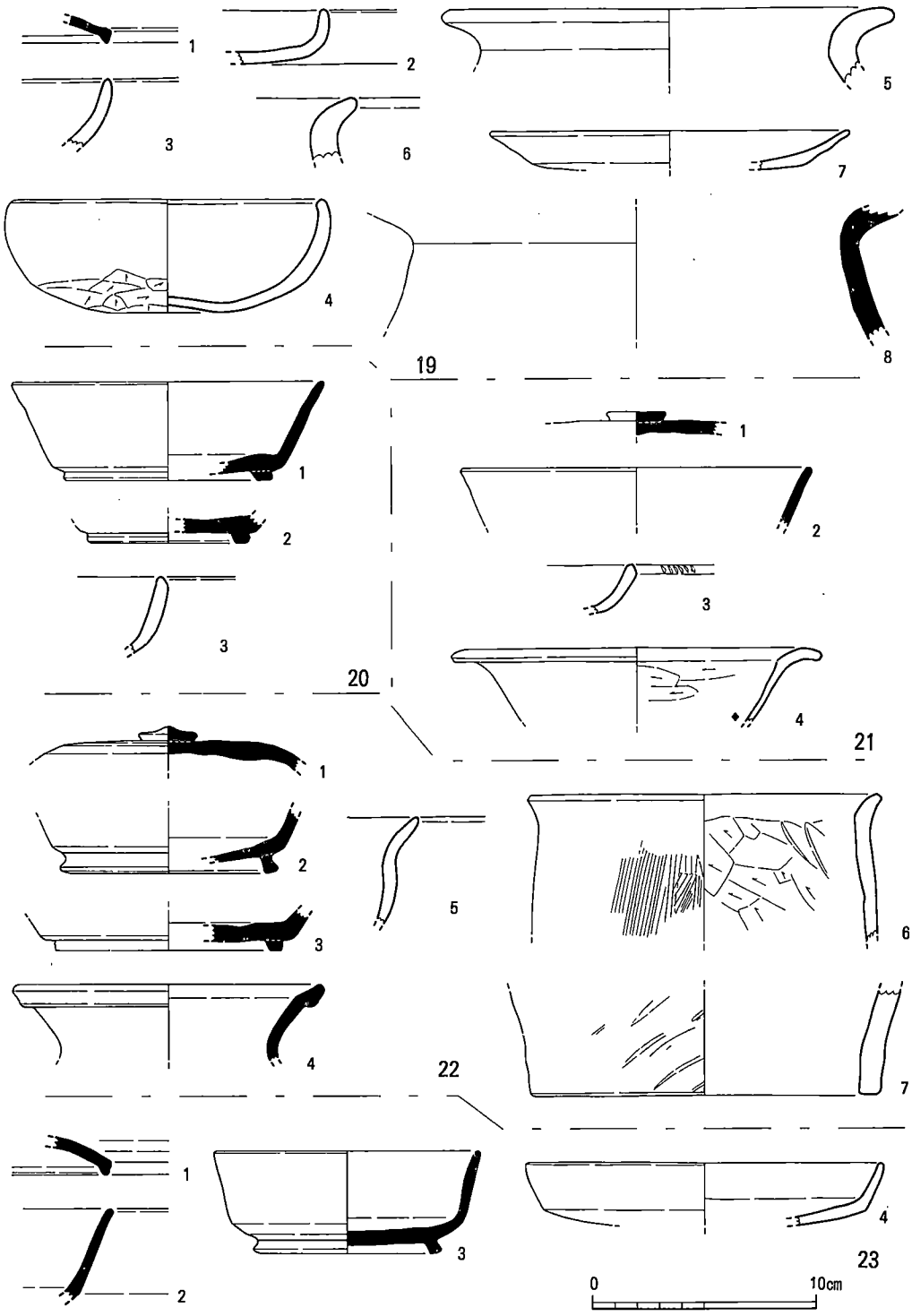
Ｆ4区で、23号住居跡の東方にある。25・50号住居跡を切り、また下層から51号住居跡が検出された。２・５・11号掘立柱建物跡にも切られている。一辺が480～520cmの方形プランをなし、カマドは検出されなかった。主柱穴も不明である。面積は23.2m²。埋土中から土師器、須恵器、焼塩土器2、軽石2、ふいご羽口、土製品、粘土塊が出土している。8世紀中～後半であろう。

出土遺物（図版49・50・52、第172図1～13、202図14、200図15、204図C19）

須恵器（1～4）　1は蓋。2・3の椀は高台が高い。4は甕の胴部片。



第168図　才田 23号住居跡実測図（1/60）

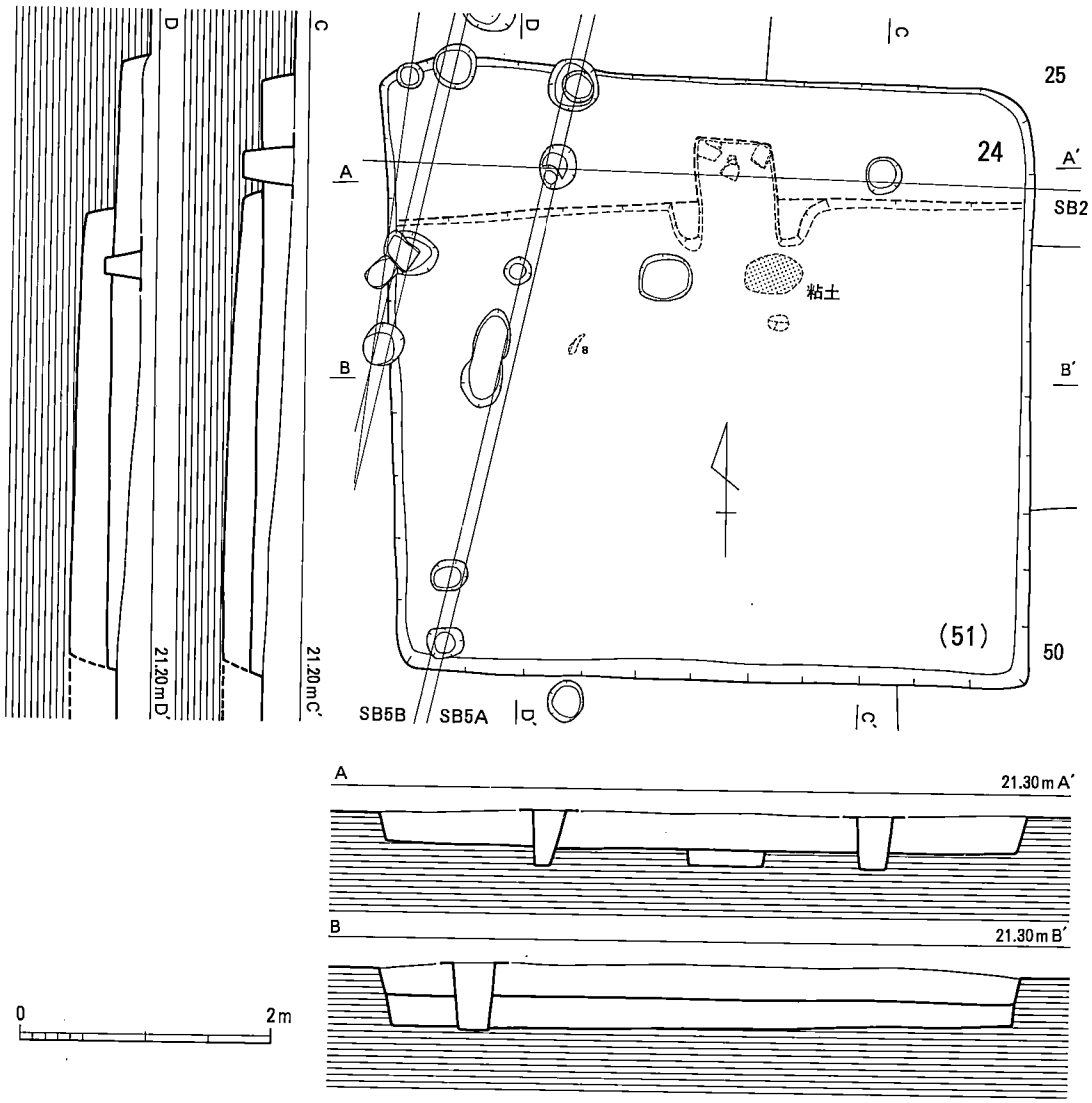


第169図　才田 19・20・21・22・23号住居跡出土土器実測図（1/3・1/6）

土師器（5～13） 5は須恵器を模倣した蓋で、復原口径22cm。6～8は坏で、7は直線的な器形である。復原口径14cm。8は口唇が丸くなる。復原口径15cm。9～13は甕で、9は小型ながら筒形に近い形状をなす。復原口径15.2cm、器高12.3cm。10の口縁はL字に近く屈折する。復原口径20cm。12の器壁は薄く外面に煤が付着している。復原口径26cm。13は肩部に張りを持つ。

ふいご羽口（14） 器壁のあまり厚くないもので、外面は擦過状のナデを施している。残存の最大径6cm。

石器（15） 流紋岩の楕円球形の石で、投弾の可能性もあるがすり石としておく。径27～31mm、



第170図　才田 24・51号住居跡実測図（1/60）

厚さ23㎜、重さ23.3g。

土製品（第204図C19） 平面が楕円形の凹面を持った製品で、金雲母や砂粒を多量に含み、茶黄色を呈するので弥生土器を利用した土製品としておくが、あるいは堆積岩の可能性もないではない。長径86㎜、短径64㎜、厚さ15㎜。用途不明。

25号住居跡（図版22、第171図）

Ｆ4区の東北隅にあり、45号住居跡を切り、51号住居跡と２号掘立柱建物跡に切られている。一辺が340～400㎝の台形状のプランをなし、カマド・柱穴は検出されなかった。面積は13.4㎡。埋土中から土師器、須恵器、軽石2、粘土塊が出土している。8世紀中頃であろう。

出土遺物（第172図1・2）

須恵器（1） 椀の口縁部片である。

土師器（2） 肩部に張りのある甕で、24号住居跡出土の13と似た形状であろう。

26号住居跡（図版22、第173図）

Ｇ・Ｈの5区にあり、27号住居跡に切られている。残存する北壁は280㎝、東壁は260㎝であり、やや東西に長い方形プランであろう。カマドは不明。主柱穴は西に寄ってＰ2・Ｐ4があるが、27号住居跡のＰ3もこの住居に伴っていたのかもしれない。Ｐ2-Ｐ4間は150㎝を測る。埋土中から土師器、須恵器、焼塩土器2、軽石3、鉄器1、粘土塊と混入の白磁が出土している。8世紀前半の土器があるが7世紀代であろう。

出土遺物（図版52、第174図1～10、201図11）

須恵器（1～5） 1は蓋。2も3と同様高台の付く椀であろう。3は外面に灰を被る。4は壷と思われる。復原高台径12㎝。5は甕の胴部片で内面の同心円当具痕は粗々しい。

土師器（6～10） 6・7は坏。8～10は甕で、8は精製土器である。もう少し肩部に張りのある器形かもしれない。8・9は大型で、10の復原口径27.2㎝。

鉄器（10） 鏃の茎であろうか。

27号住居跡（図版22、第173図）

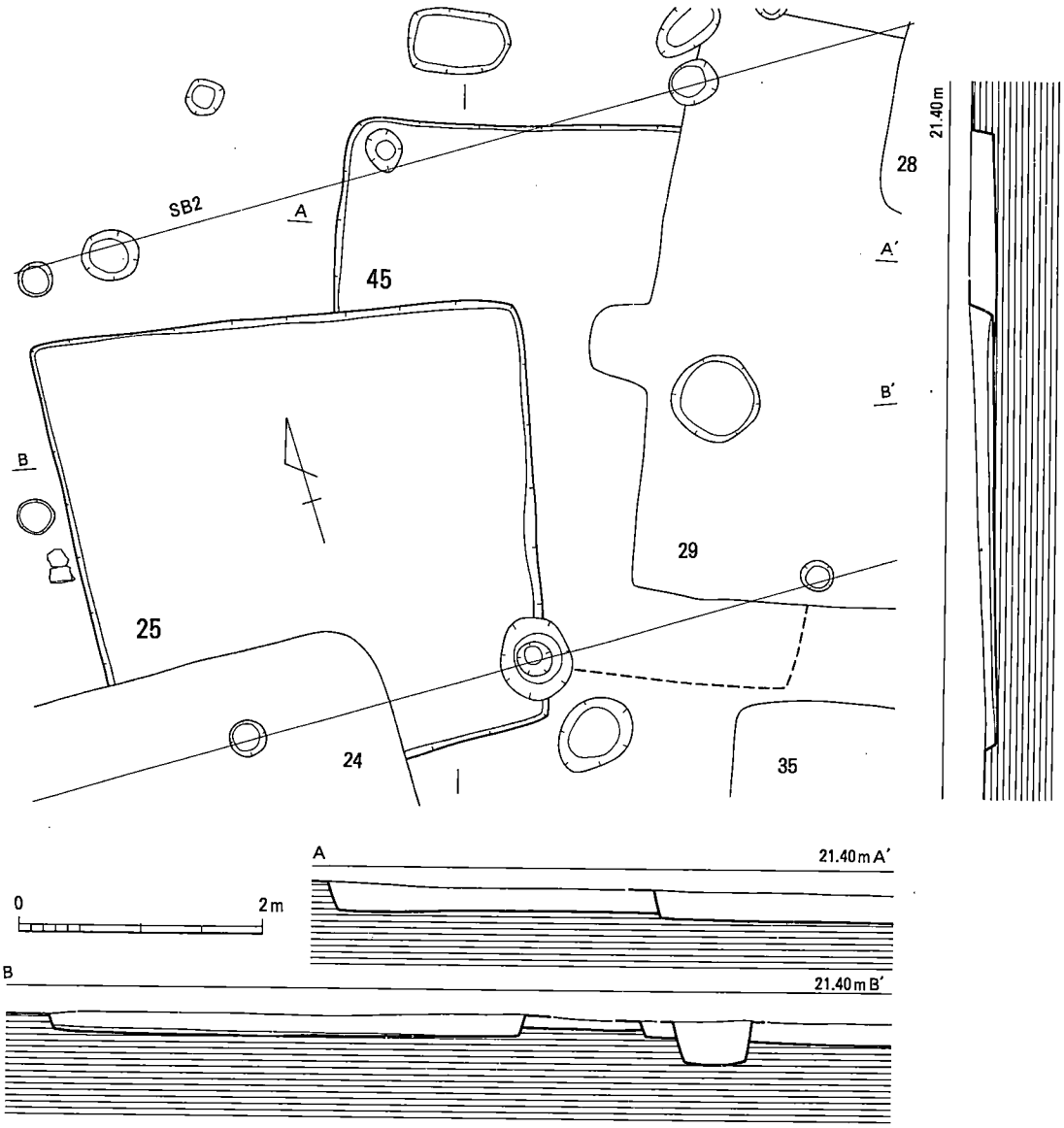
Ｇ5区にあり、26号住居跡を切り、28・32号住居跡に切られている。北壁の415㎝を前後する一辺の方形プランであろう。カマドは不明。主柱穴は先の26号住居跡の項で触れたＰ3があるのみで他には見られない。埋土中から土師器、須恵器、焼塩土器1、軽石6、粘土塊が出土した。7世紀末頃と考える。

出土遺物（第174図1～11）

須恵器（1～8） 1の坏身の外底部は手持ちヘラ削りである。復原受部径11.8㎝。2・3は蓋で3は

焼成があまい。4～6は高台の付く椀で、6の復原口径15.6cm。7は胴部の丸みから見て平瓶か壷であろう。8は大型の甕で、外面口縁下にはイネ科植物の茎で施したと思われる波状文が沈線をはさんで2条見られる。復原口径47cm。

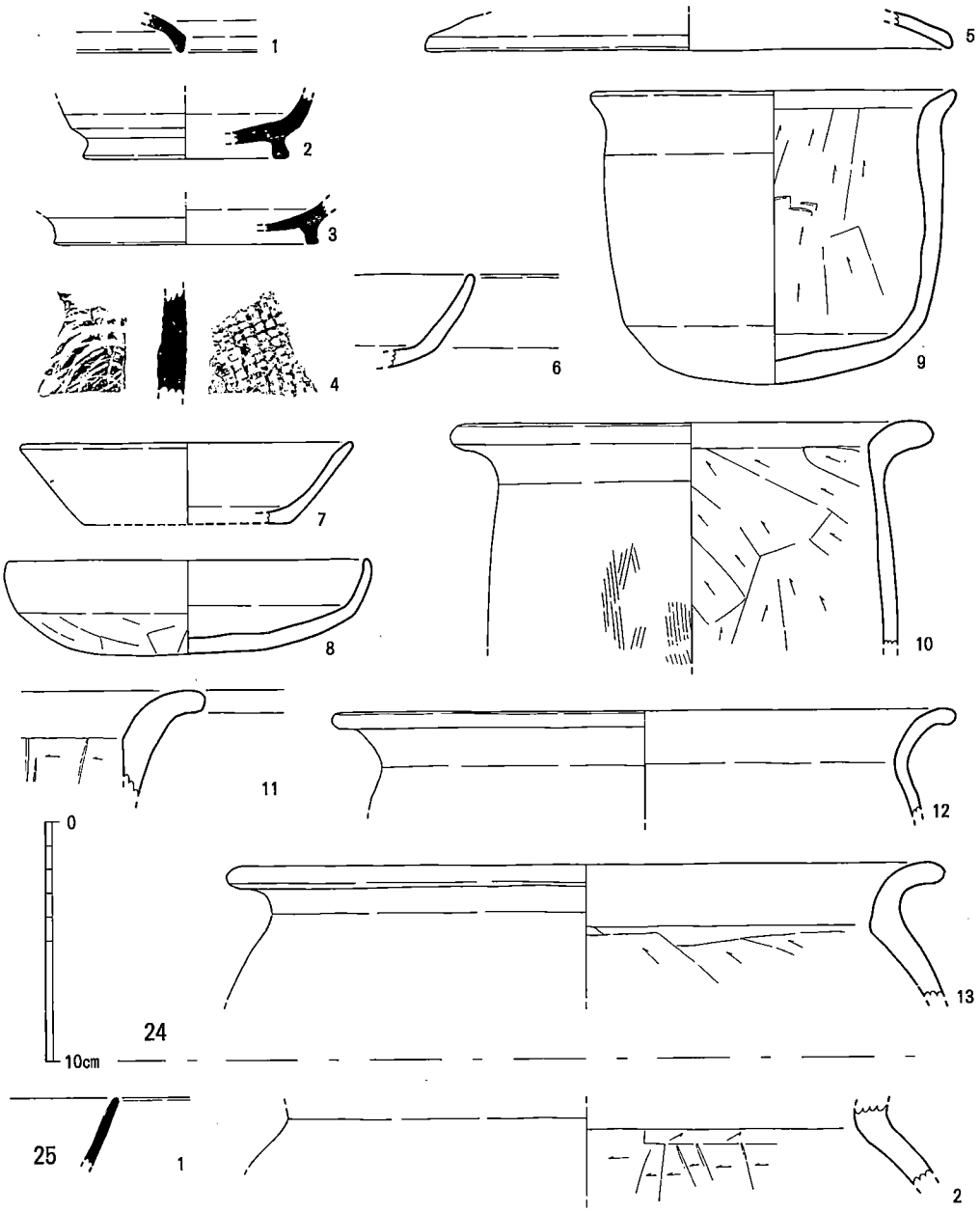
土師器（9～11） 9は須恵器を模倣した椀で、内面はミガキが施される。復原高台径12cm。10・11は甕。



第171図　才田 25・45号住居跡実測図（1/60）

28号住居跡（図版22、第175図）

G4・5区にあり、27・29・32号住居跡を切り、30号住居跡と2・3号掘立柱建物跡に切られている。一辺450cmの方形プランで、西壁にカマドがある。主柱穴は検出されなかった。復原



第172図　才田 24・25号住居跡出土土器実測図（1/3）

で面積は19.8㎡。カマドを通る主軸方位はN-65°-W。埋土中から土師器、須恵器のほか焼塩土器24、砥石1、軽石4、粘土塊が出土した。8世紀前半であろう。

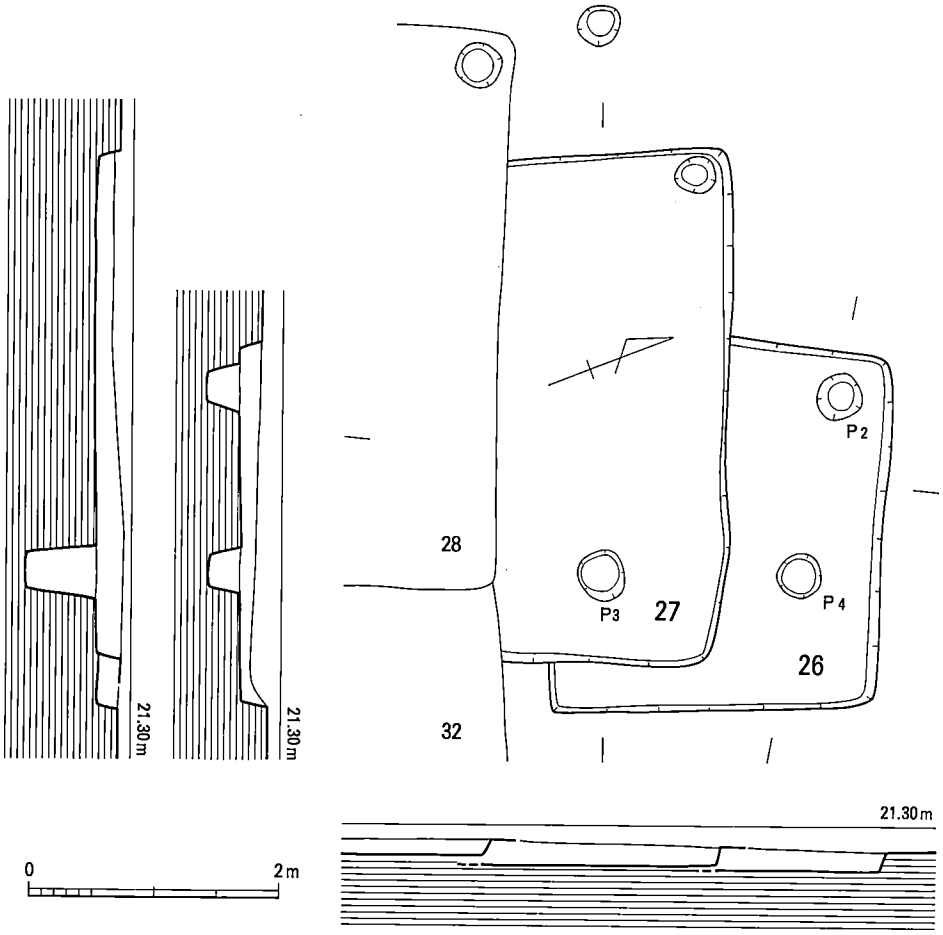
カマド　西壁のほぼ中央にあり、突出した形式で内側に袖は見られなかった。焚口幅80㎝、奥行き55㎝を測る。

出土遺物（図版51・52、第177図1～12、197図13～16、200図17）

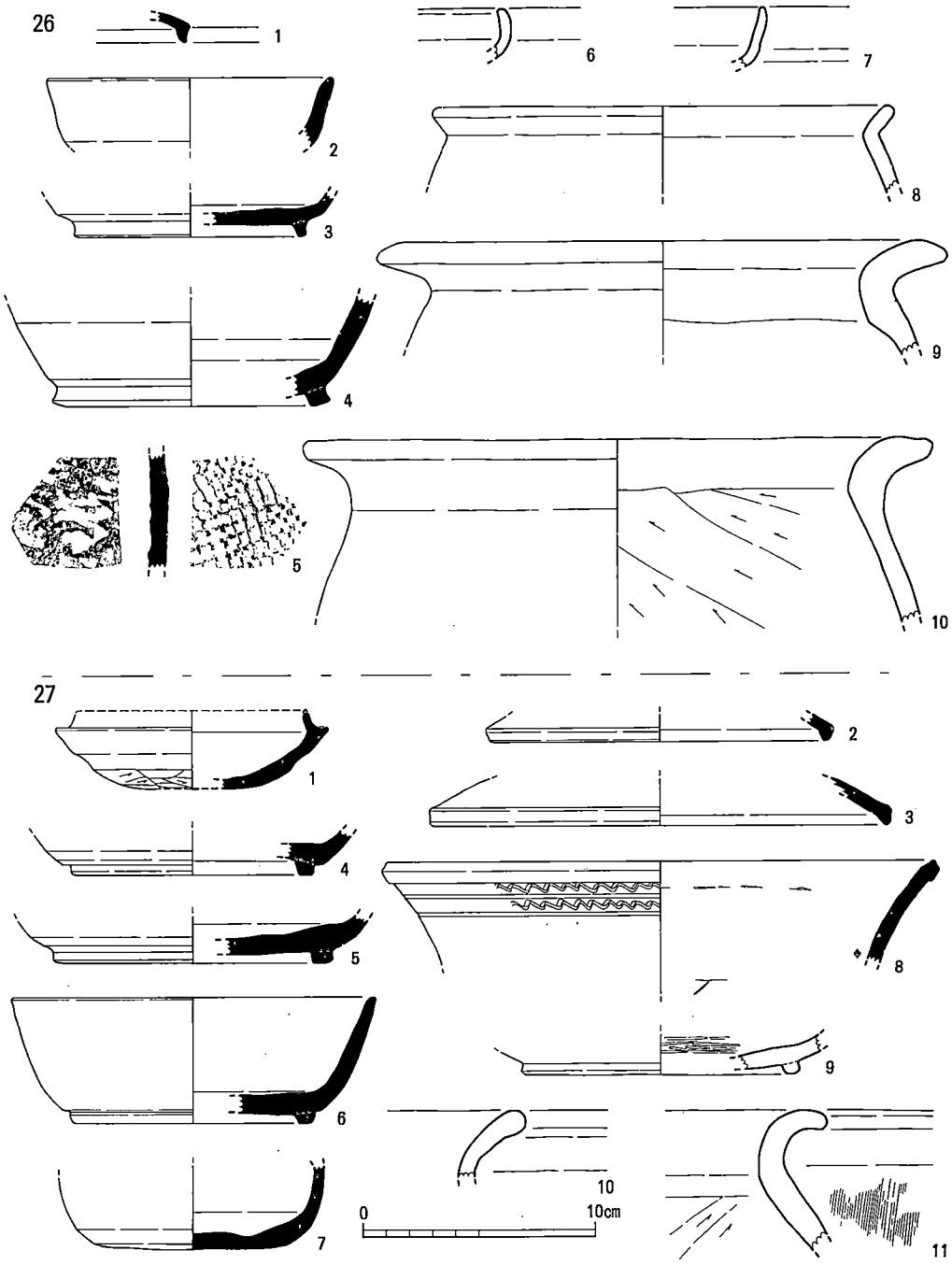
須恵器（1～7）　1～3の蓋は口径があまり変わらない。2は薄手で端部を丸く仕上げており復原口径15.6㎝。4～7の椀は5の高台がやや高い。4の復原口径12.4㎝。

土師器（8～12）　8の坏は復原口径12㎝。9は精製土器で鉢とすべきか。復原口径22㎝。10～12の甕は、10は器壁が薄い。12の復原口径26㎝。

焼塩土器（13～16）　13は内面に1㎝あたり12本の細かい布目痕がある。円筒形の器形か。二次



第173図　才田 26・27号住居跡実測図（1/60）

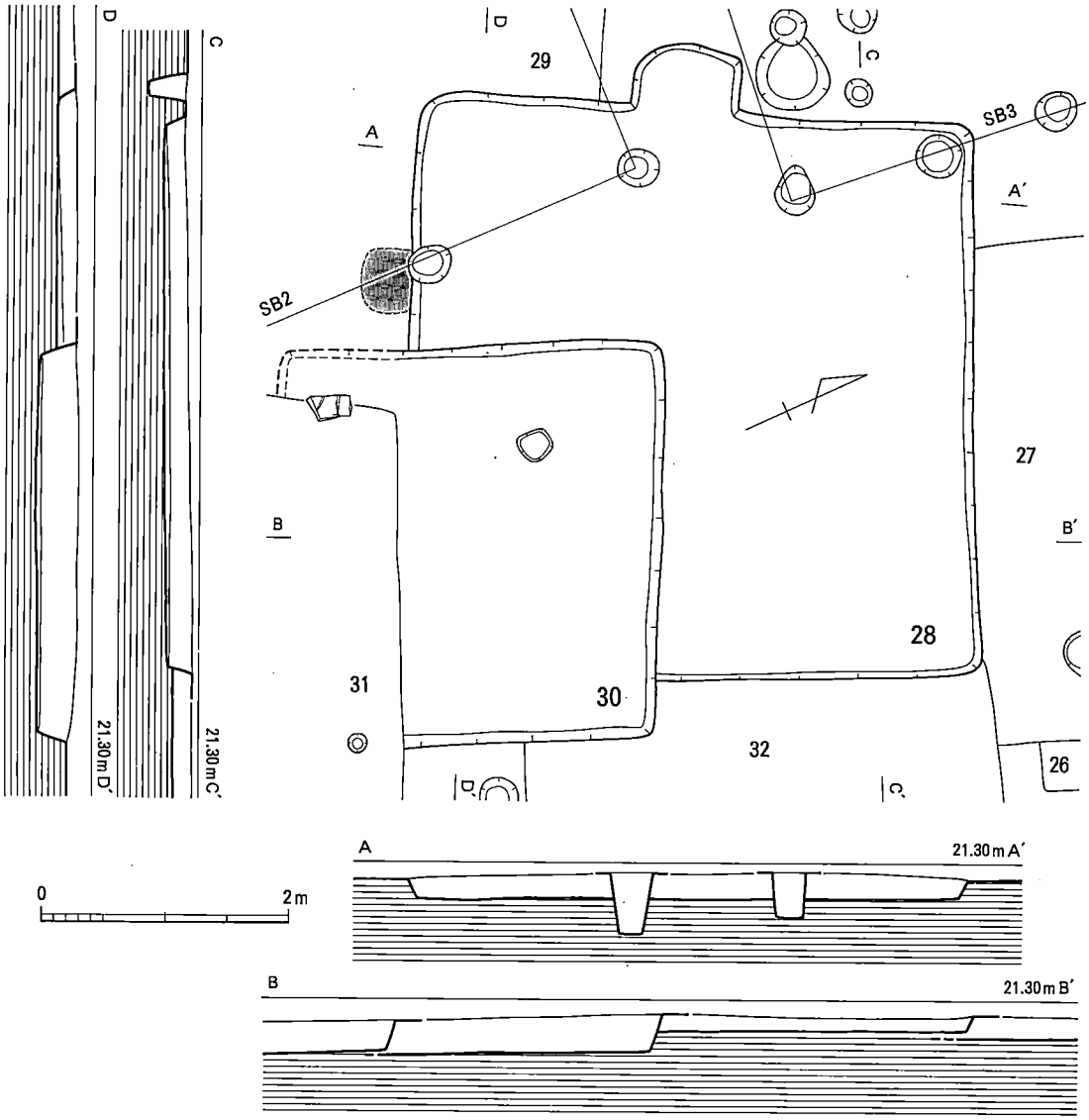


第174図　才田 26・27号住居跡出土土器実測図（1/3・1/6）

被熱は不明。14・15は内面に二枚貝の条痕がある。これらも二次被熱は不明。16は外面にかなり凹凸があり、口縁も波打っている。内面の上半は布のようなものでナデを行う。一部は二次熱で桃色に変色する。復原口径12.6cm。

石器（17） 流紋岩の砥石で、中砥かと思われる。現存長55mm。

29号住居跡（図版22、第176図）



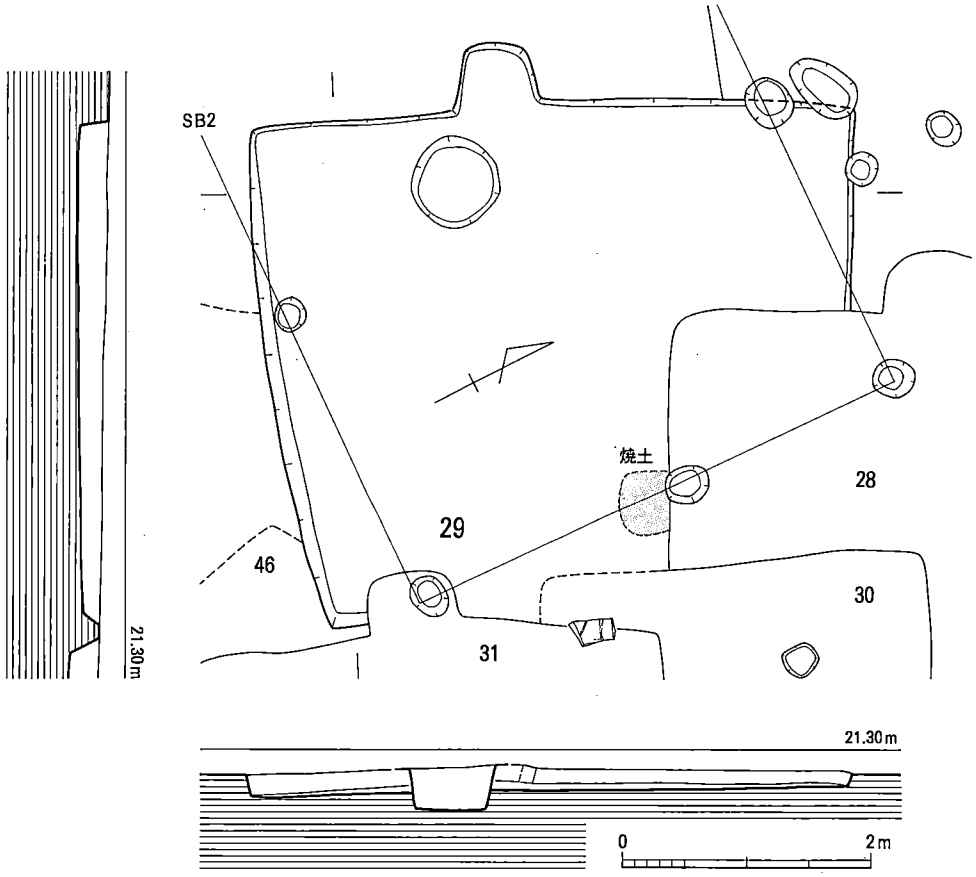
第175図　才田 28・30号住居跡実測図（1/60）

G4区にあり、45・46号住居跡を切り、28・30・31号住居跡と2号掘立柱建物跡に切られている。残存する南壁は405cm、西壁は485cmを測るので台形に近いプランとなるらしい。カマドは西壁にある。主柱穴は検出されなかった。復原で面積は16.8cmを測る。カマドを通る主軸方位はN-63°-W。この住居の東端部に近く、28号住居跡の南壁に接する所に径50cmほどの範囲で焼土が見られた。下層にまだ別の住居があってそのカマド部分なのかもしれない。埋土中から土師器、須恵器のほか焼塩土器3、叩石1、軽石6、粘土塊と混入の弥生土器が出土した。7世紀末頃であろう。

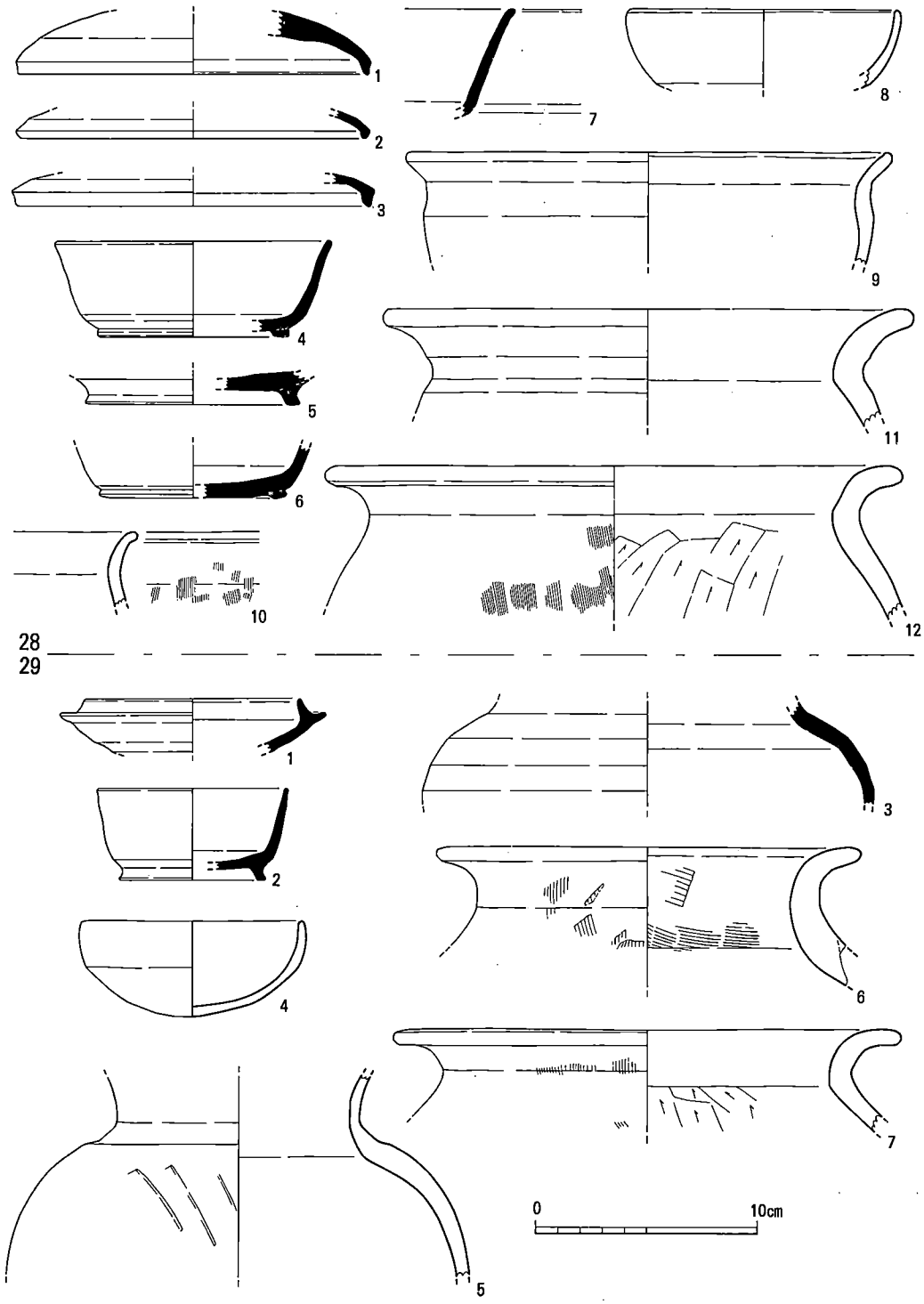
カマド　西壁の中央より南側に片寄ってあり、突出した形式で内側に袖は見られなかった。焚口幅60cm、奥行き55cmを測る。

出土遺物（図版44・50、第177図1～7、197図8、200図9）

須恵器（1～3）　1は小型の坏身とするが、あるいは蓋の可能性もある。復原口径9.7cm。2は小型の椀で高台は高く筥形の形状をなす。復原口径8.6cm。3はやや焼成のあまい壷である。



第176図　才田 29号住居跡実測図（1/60）



第177図　才田 28・29号住居跡出土土器実測図（1/3）

土師器（4～7） 4は坏というより椀とすべきか。復原口径10cm。5は精製の壷で外面は橙黄色だが胎の中心は青灰色をなす。6・7の甕は、6はかなり肉厚である。7の復原口径23cm。

焼塩土器（8） 鉢形になろう。口唇部が平坦な面をもつ。内面は布か皮のようなものでナデを行っている。かなり強い二次熱を受けている。

石器（9） 輝石安山岩の球形をなす石で、叩石であろう。径88～94mm、重さ726.1g。

30号住居跡（図版22、第175図）

G4区にあり、28・29・32号住居跡を切り、31号住居跡に切られている。一辺が310～320cmの方形プランであろう。復原で面積は9.0m²。カマドは北壁・西壁には見あたらない。主柱穴も不明である。埋土中から土師器、須恵器のほか焼塩土器14、軽石3が出土した。8世紀中頃かと思われる。

出土遺物（図版51、第179図1～5、197図6・7）

須恵器（1・2） 1は小さな蓋で復原口径12cm。2の椀はどっしりした形状をなし、復原口径は15cm。

土師器（3～5） 3・4の坏は、3は口唇部を丸くつくっており、復原口径15cm。5は薄手の甕で、復原口径15.8cm。

焼塩土器（6・7） 6は鉢形になろう。強い二次熱を受けていて、胎は灰青色をなし、器表外面は桃色に変色した部分がある。7も二次熱で口縁の一部に桃色に変色した所がある。

31号住居跡（図版22、第178図）

G4区にあり、29・30・46号住居跡を切り、34号住居跡と1・2号掘立柱建物跡に切られている。一辺が340～380cmの方形プランであり、西壁にカマドが造られている。主柱穴は全く不明であった。面積は復原で12.7m²。カマドを通る主軸方位はN-66°-W。埋土中から土師器、須恵器のほか多量の焼塩土器(106点)、軽石2、黒曜石剥片が出土した。8世紀中～後半であろう。

カマド 西壁の中央にあり、突出した形式で内側に袖は見られなかった。焚口幅55cm、奥行き55cmを測る。

出土遺物（図版50・51・52、第179図1～7、197図8～19）

須恵器（1～4） 1の蓋は摘みを欠失する。復原口径13.8cm。2・3は高台の付く椀で、2の体部は薄い。復原口径11.4cm。3は高台が幅広い。4は壷であろう。復原口径15.6cm。

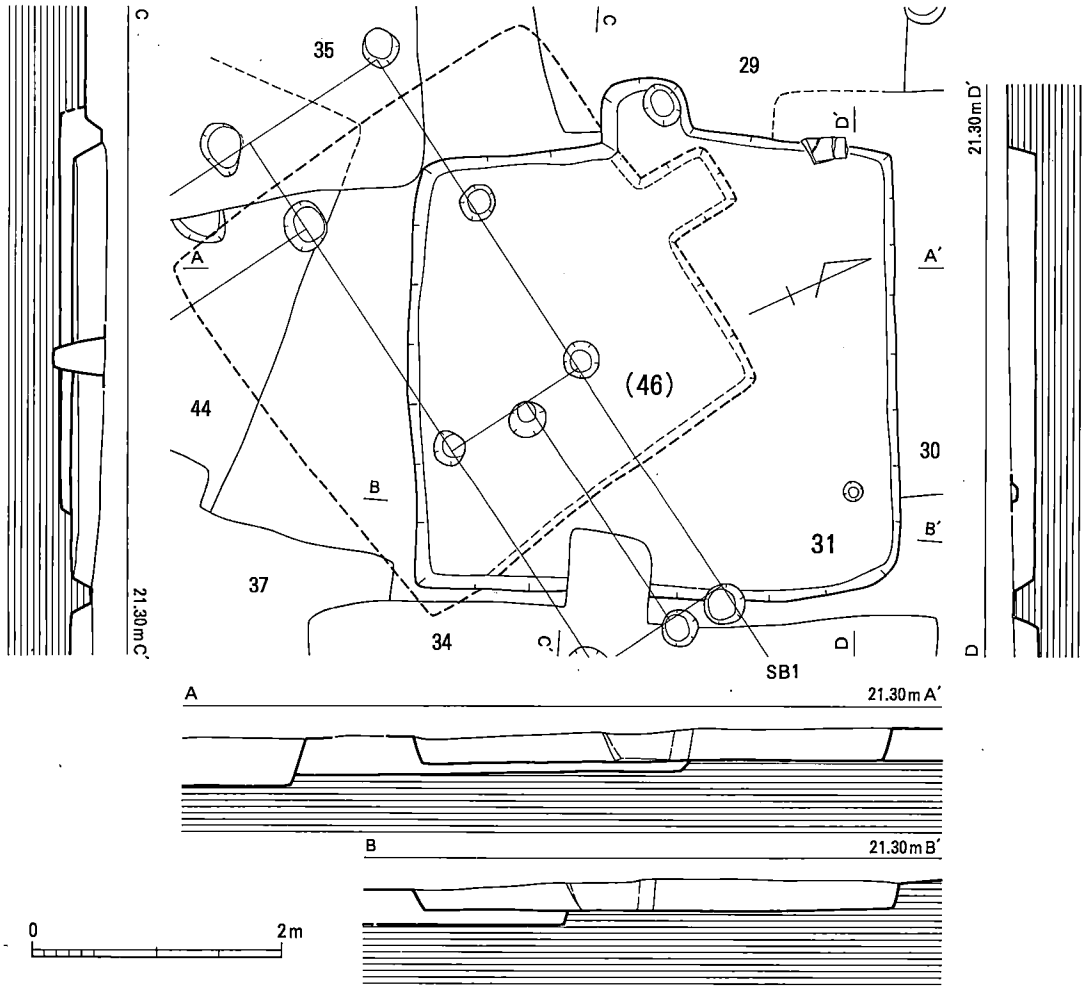
土師器（5～7） 5は椀か鉢になろう。6は小型、7は大型の甕で、7の復原口径24cm。

焼塩土器（8～19） 図示可能なもの12点である。このうち8・9は円筒形になろう。他は鉢形とみられる。11・12・15・19は二次被熱が不明であるが他は全て二次熱を受けている。8は強い二次熱のため胎の中心が青灰色を呈する。胴部最大径9.6cm。9は最大径10.3cm、現存高8.7cm。

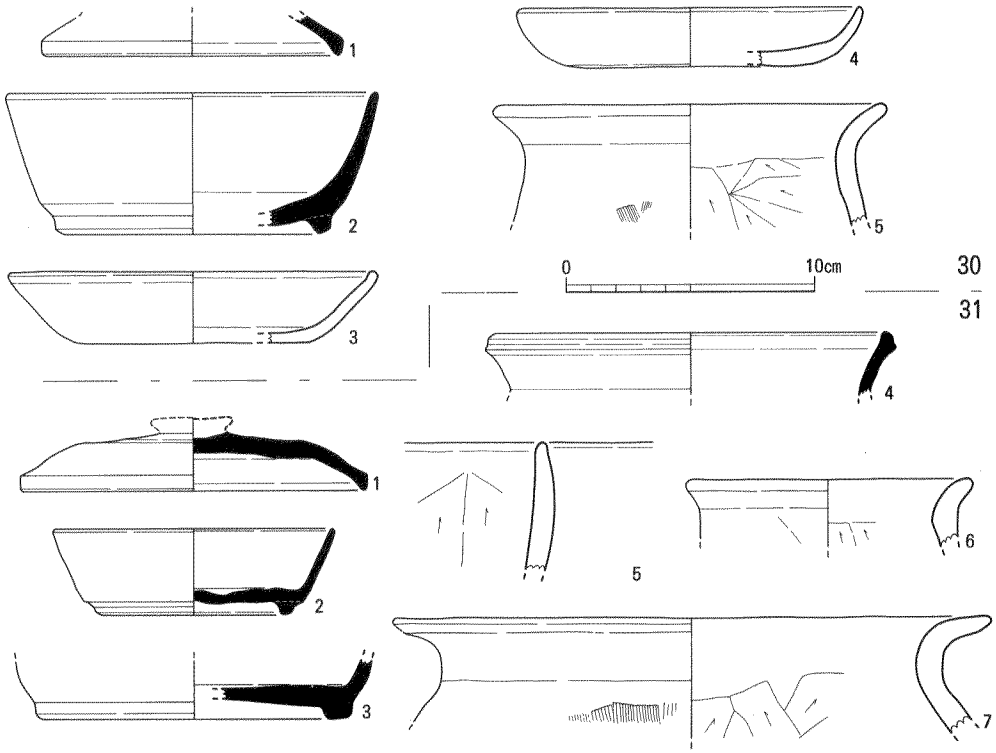
10は円錐形をなすが少し歪んでいる。内面には二枚貝の条痕がある。復原口径11.6cm、器高6.3cm。13も胎の中心が青灰色に変色している。内面の上半は化粧土を掛けている。復原口径10.8cm。14は復原口径9.8cm。15は9.2cm。16～19は口縁下が内湾する。16は復原口径10cm。17は胎の中心が青灰色をなす。復原口径12cm。18は12.2cm。19はやや大きすぎるきらいがあるが、現状で復原最大径14.8cm。

32号住居跡（図版22、第180図）

G・Hの4・5区にあり、27・33号住居跡を切り、28・30号住居跡に切られている。全長のわかる東壁が390cmの長さなので、一辺がこの規模の方形プランであろう。カマドは東壁・北壁に見られないので西壁に造られていたのであろう。主柱穴は全く不明であった。埋土中から土



第178図　才田 31・46号住居跡実測図（1/60）

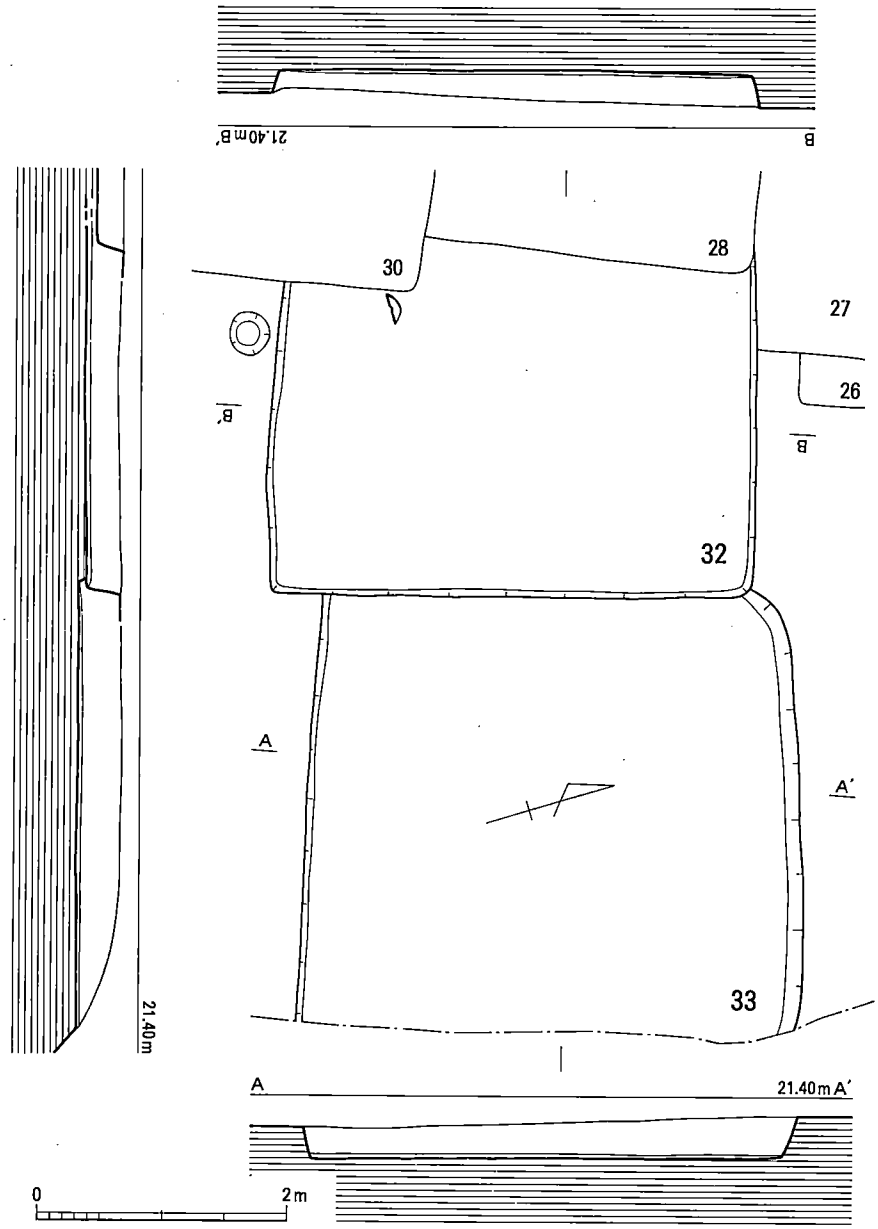


第179図　才田 30・31号住居跡出土土器実測図（1/3）

Photo. 12　31号住居跡周辺

師器、須恵器と多量の焼塩土器(52点)、鉄器2、軽石3、スラッグ2のほか、混入の陶器・白磁・滑石・黒曜石剥片が出土した。7世紀初頭頃の土器もあるが、8世紀中頃であろう。

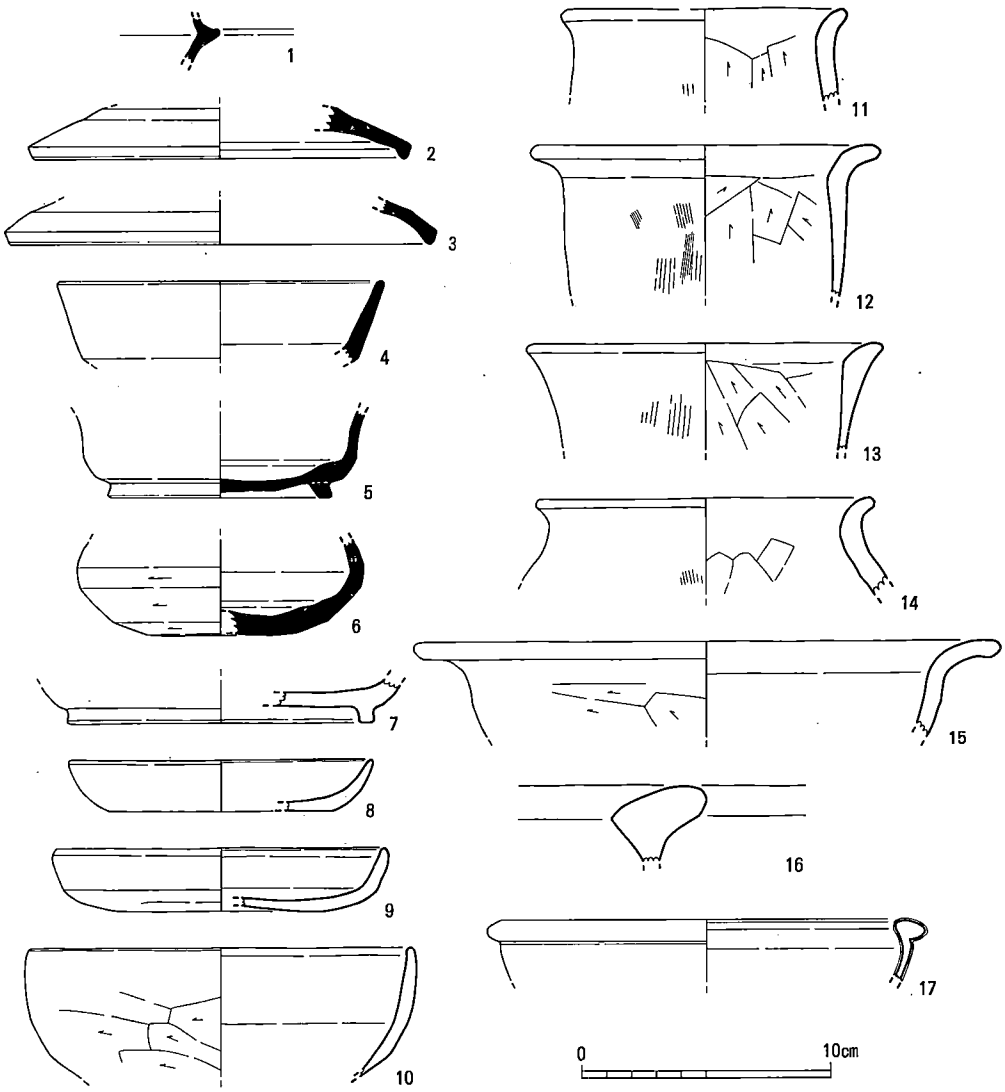
出土遺物（図版51・52、第181図1～17、198図18～23、200図24、201図25・26）



第180図　才田 32・33号住居跡実測図（1/60）

須恵器（1～6） 1は坏身の破片。2・3は蓋で、3は口縁内側に段を持たない。復原口径17cm。4・5は椀で、5の体部から口縁は外湾する。高台径9cm。6は壷であろう。外底面にヘラ記号がある。胴部復原最大径11.5cm。

土師器（7～17） 7は須恵器を模倣した椀。8・9は坏で、9の復原口径13.2cm。10は椀とすべきか。復原口径15.2cm。11～14は甕で、12・13は胴部に張りを持たない。14は胴の張る形状になろう。復原口径13.5cm。15は鍋か。16は分厚い口縁で、甕であろうか。17は混入の舶載陶器片である。鉢形をなし復原口径17.6cm。



第181図　才田 32号住居跡出土土器等実測図（1/3）

焼塩土器（18～23） 18は二次被熱は不明であるが、他はいずれも二次熱を受けている。20は復原口径8.8cm。22は強い二次熱を受け、器壁断面は薄く層状に見える。復原口径10.2cm。23は天地不明であるが、いずれが天にしても球形の胴部をなす。器壁は薄い。胴部最大径14.4cm。
石器（24） 珪石の扁平な石で、平面形は隅角の円くなった三角形状をなす。表裏ともよく擦れているが、自然のものか人工品か判断がつかない。長さ23mm、幅15mm、厚さ4mm、重さ1.4g。
鉄器（25・26） 25は釘であろう。混入品とみなされる。26は鏃の可能性もあるが釘かもしれない。現存長41mm。

33号住居跡（図版22、第180図）

Hの4区から5区にかけてあり、西壁を32号住居跡に切られ、東壁は段落ちるとなって削平されている。南北間が380～400cmを測るのでおよそ一辺がこの規模の方形プランであろう。カマドは西壁に造られていたものかと思われる。主柱穴は全く不明であった。埋土中から土師器、須恵器と多くの焼塩土器(41点)、すり石、軽石2が出土した。7世紀初頭頃であろう。

出土遺物（図版44・50・51、第183図1～18、198図19～22、200図23）

須恵器（1～11） 1の坏蓋は手持ちヘラ削りの外天井部にヘラ記号がある。復原口径11.6cm。2の坏身はやや扁平な形状をなす。復原口径9.7cm。3は蓋かもしれないが身としておく。外底部にヘラ記号がある。4～7は蓋。7は口唇部を丸くつくる。復原口径15.8cm。8～10は椀で、8は細い高台が外側へ踏ん張っている。復原高台径7.6cm。9は焼成があまい。11は壷であろう。復原口径10.5cm。

土師器（12～18） 12～14は坏で、14の復原口径12.2cm。15は精製土器で鉢とすべきか。16は蓋の摘みとして図示するが違うものかもしれない。精製土器である。17・18は甑で、17の裾部は黒変している。18の口径28.2cm。

焼塩土器（19～22） いずれも鉢形になるもので、二次熱を受けているが21は明瞭でない。19は白っぽい。20の内面は二枚貝条痕ののちにナデが行われている。

石器（23） 黒褐色の阿蘇凝灰岩を素材とする石で、周縁の一部が擦れているのですり石であろう。石材としては珍しい。径80～87mm、厚さ37mm、重さ319.3g。

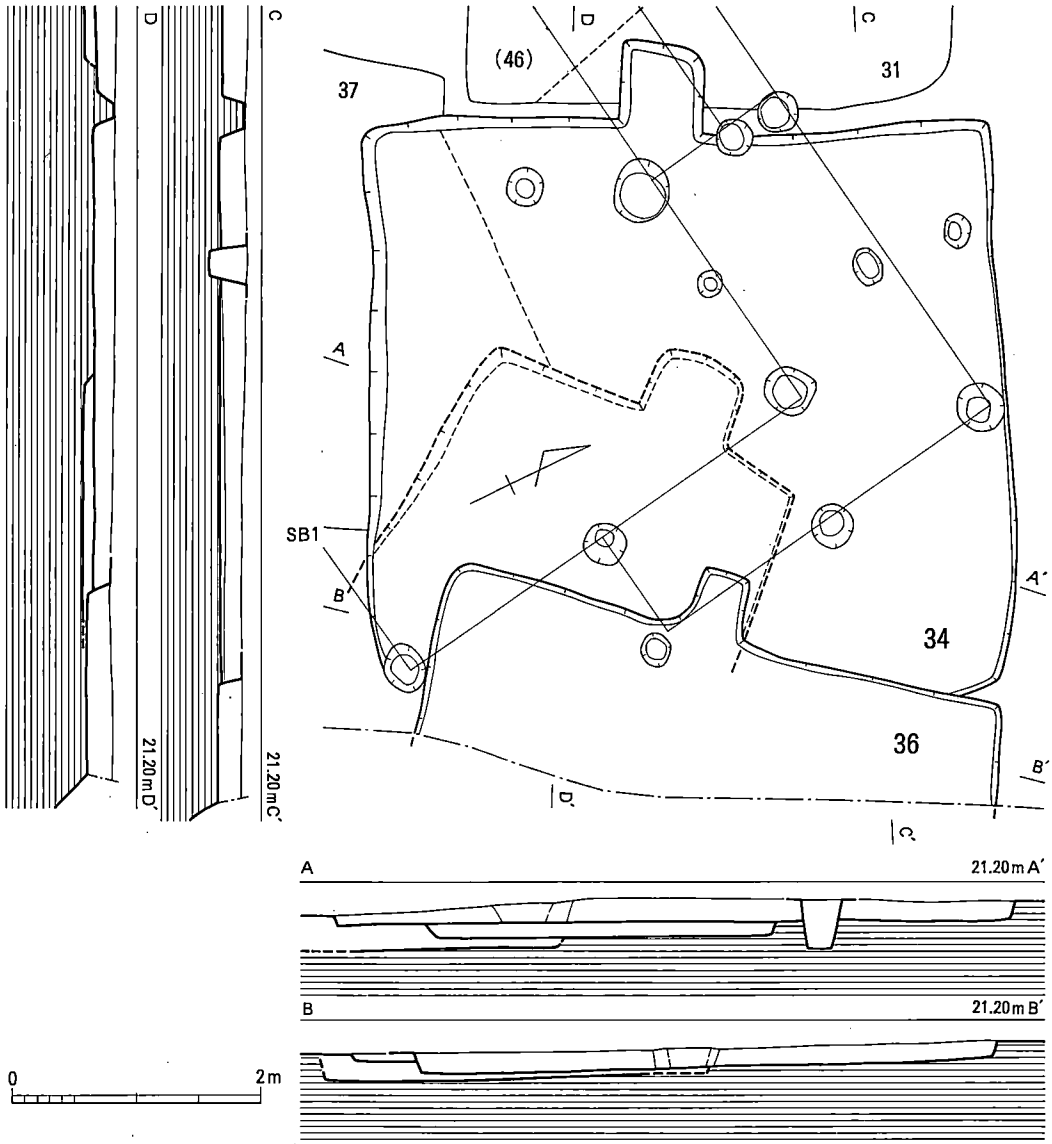
34号住居跡（図版22、第182図）

G・Hの4区にあり、31・37号住居跡と下層から現れた43号住居跡を切り、36号住居跡と1号掘立柱建物跡に切られている。一辺が450～520cmのやや南北に長い方形プランであり、西壁にカマドが造られている。主柱穴は不明であった。面積は復原で22.1m²。カマドを通る主軸方位はN-65°-W。埋土中から土師器、須恵器、焼塩土器(26点)、軽石1、スラッグ1のほか、混入の瓦器片が出土した。古い土器もあるが8世紀後半であろう。

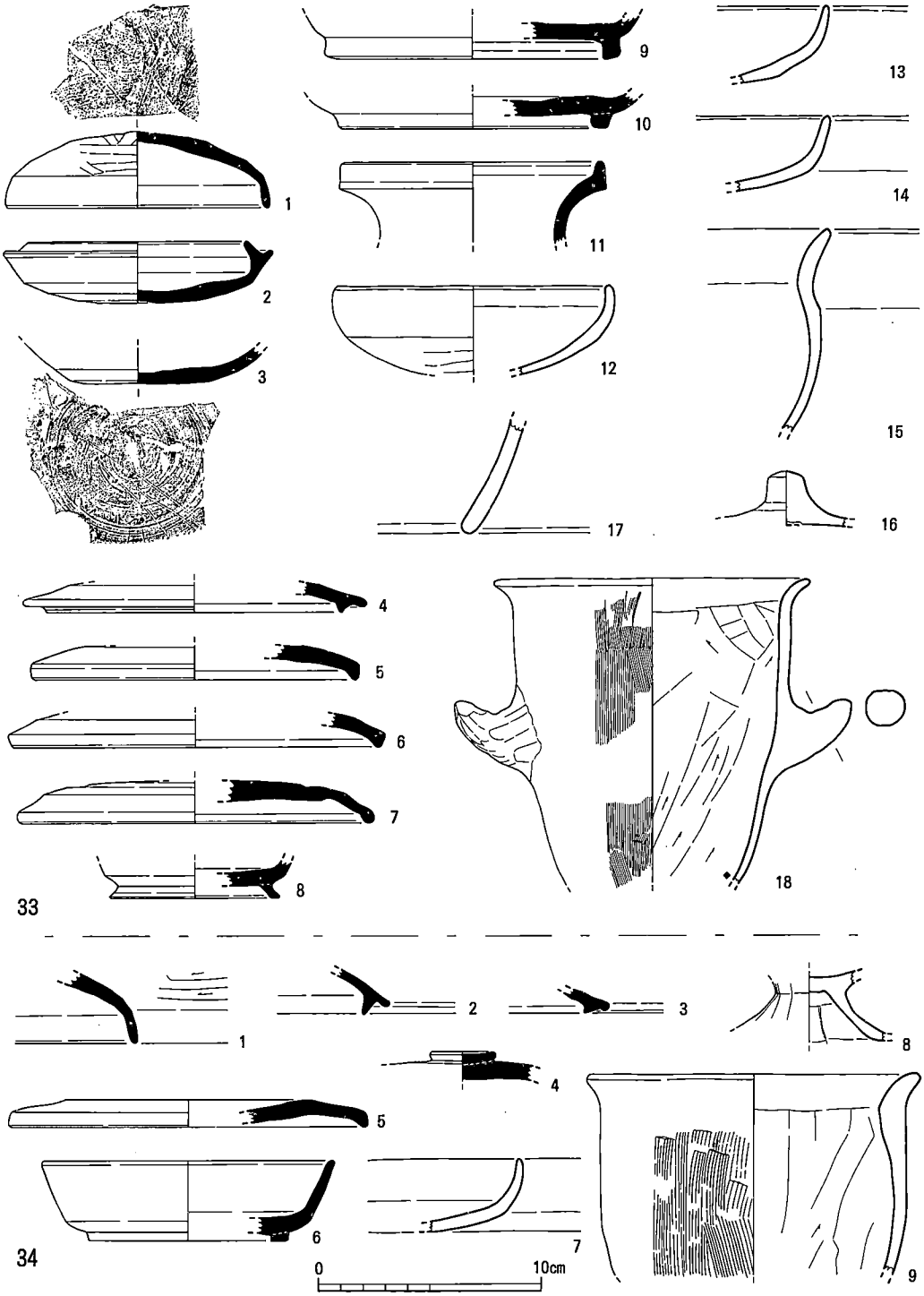
カマド　西壁のほぼ中央にあり、突出した形式で内側に袖は見られなかった。焚口幅55cm、奥行き70cmを測る。

出土遺物（図版51、第183図1～9、198図10～13）

須恵器（1～6）　1は外天井部が手持ちヘラ削りの坏蓋である。2～5は椀の蓋で、2・3は返りを持つ。5の復原口径16cm。6は深みがなく坏とすべきか。復原口径13cm。



第182図　才田 34・36・43号住居跡実測図（1/60）



第183図　才田 33・34号住居跡出土土器実測図（1/3・1/6）

土師器（7～9） 7は坏。8は短脚の高坏脚部。9の甕は復原口径15cm。

焼塩土器（10～13） いずれも鉢形になるもので、二次被熱が顕著である。10は二次熱で口縁内外は灰褐色に変色している。復原口径13cm。11は深みのあるもので、復原口径15.6cm。13は強い二次熱のために内面に白い斑点がある。

35号住居跡（図版22、第184図）

G4区にあり、44・46・50号住居跡を切り、1号掘立柱建物跡に切られていた。一辺が320～375cmの少し台形気味の方形プランである。カマドは見あたらず、主柱穴も不明であった。面積は10.9m²。埋土中から土師器、焼塩土器1、軽石3が出土した。8世紀後半代か。

出土遺物（第188図1）

土師器 小型の甕である。復原口径14cm。

36号住居跡（図版22、第182図）

H4区にあり、カマドのある西壁が34・43号住居跡を切り、1号掘立柱建物跡に切られていた。東側の大半は段落ちにて削平されている。西壁の長さが460cmなのでほぼ一辺をこの規模とする方形プランであったものと思われる。主柱穴は不明であった。カマドを通る主軸方位はN-50°-W。埋土中から土師器、須恵器と焼塩土器1、粘土塊が出土した。8世紀後半であろう。

カマド 西壁のほぼ中央にあり、突出した形式で内側に袖は見られなかった。焚口幅45cm、奥行き55cmを測る。

出土遺物（第188図1・2）

土師器（1・2） 1は須恵器を模倣した蓋である。2は薄い造りの甕。

37号住居跡（図版22、第185図）

G3・4区にあり、44号住居跡を切り、34・38・42号住居跡と1号掘立柱建物跡に切られていた。カマドのある北西壁の長さが430cm、ごく一部のみ検出された南東壁と北西壁間が380cmを測り、カマドに向かって横長の長方形プランとなる。面積は復原で15.6m²。主柱穴は不明であった。カマドを通る主軸方位はN-50°-W。埋土中から土師器、須恵器と焼塩土器3、軽石1、スラッグ1、粘土塊が出土した。8世紀中頃と思われる。

カマド 北西壁のほぼ中央にあり、突出した形式で内側に袖は見られなかった。焚口幅70cm、奥行き45cmを測る。

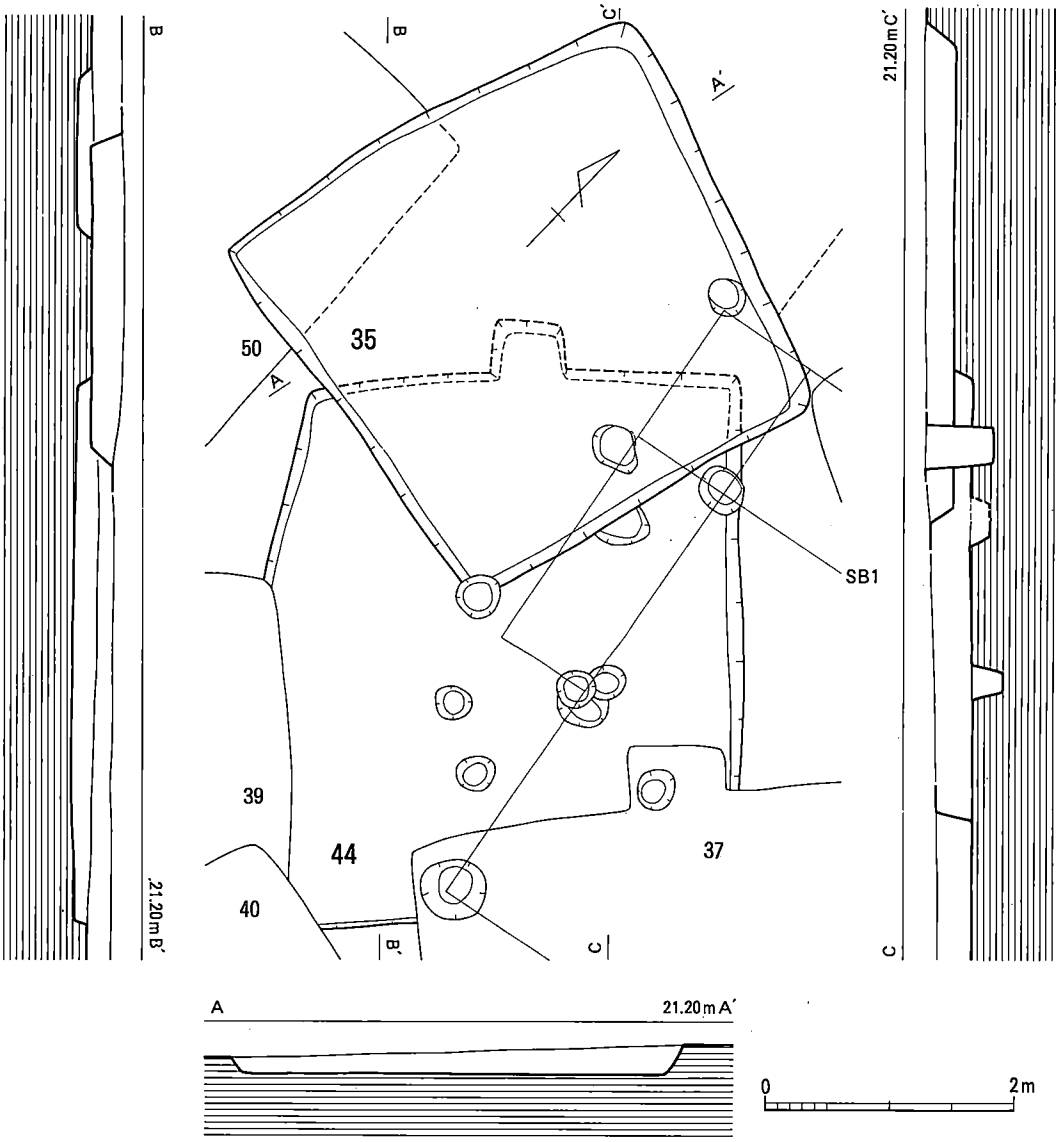
出土遺物（図版50、第188図1～8）

須恵器（1～4） 1は口唇部を欠失する坏身。2は蓋。3は高台の付く椀で、復原口径13.8cm。4は底部の安定しない坏で、焼成はややあまい。復原口径15cm。

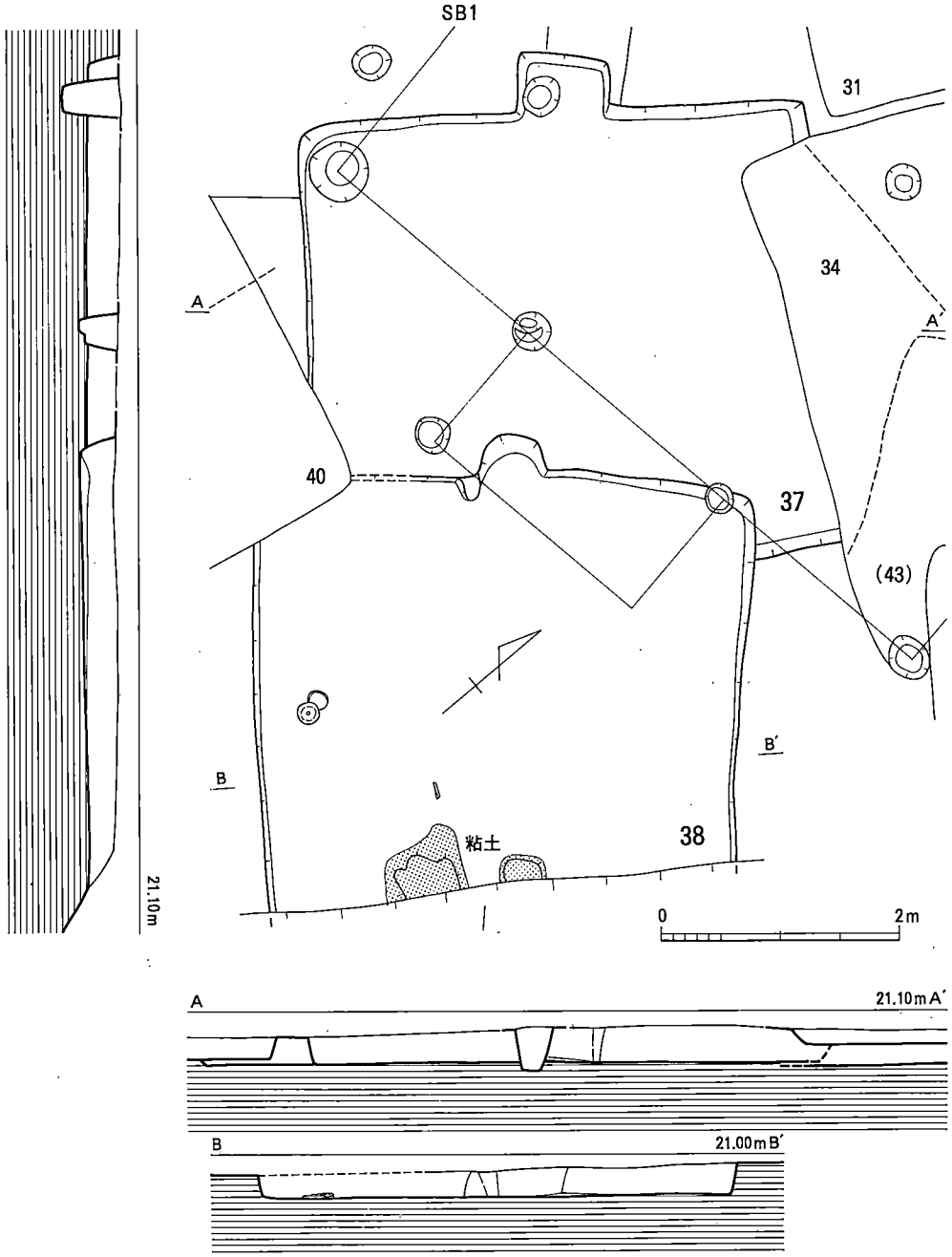
土師器（5～8） 5は底部がヘラ起こしの坏で、口径12cm、器高3.4cm。6～8の甕は、8は肩部が張らない。6の復原口径19.2cm。

38号住居跡（図版22、第185図）

G3区の北東隅を中心にG4区とH3区にかかる所にあり、37号住居跡を切り、42号住居跡と1号掘立柱建物跡に切られていた。カマドは北西壁に造られ、対する南東壁は段落ちによって



第184図　才田 35・44号住居跡実測図（1/60）



第185図　才田 37・38号住居跡実測図（1/60）

遺存していない。北東壁と南西壁の間が390～420cmを測るので、ほぼこの長さを一辺とする方形プランであったと思われる。面積は復原で14.4m²。主柱穴は不明であった。カマドを通る主軸方位はN-51°-W。床面の南東側で粘土の塊が2カ所に見られた。カマドの対面に設置された遺構の名残りなのか、別の住居跡のカマド部分であるのかは確認できなかった。床面と埋土中から土師器、須恵器と焼塩土器31、鉄器2、スラッグ1、粘土塊が出土した。8世紀中～後半であろう。

カマド　北西壁のほぼ中央にあり、突出した形式で、内側には左袖のみが約20cmの長さに残っていた。右袖が不明であるが焚口幅は50cmほど、奥行きは40cmをほどであったと思われる。

出土遺物（図版50・51・52、第188図1～7、198図8～12、201図13・14）

須恵器（1～4）　1・2は完形の蓋。1は生焼けである。口径15.4cm、器高2.6cm。2は外天井部に墨書があるように見えるが明瞭でない。口径14.6cm、器高2.3cm。3は坏とすべきか。復原口径13cm。4は高台部分の破片。

土師器（5～7）　5・6は坏。6の口径13.2cm、器高4cm。7の甕は復原口径16cm。

焼塩土器（8～12）　いずれも鉢形になるもので、11が不明であるほかは二次熱を受けている。8の内面は二枚貝の条痕がある。9・10は接合しないが同一個体らしい。内面は布のようなものでナデを行っている。10の外面には煤が付着する。11は白っぽい。12の外面は凹凸が著しい。

鉄器（13・14）　ともに似た形状である。13の下端は折損しているのではないように見えるが、釘としても少し短いので不明品とせざるをえない。13の長さ31mm。

39号住居跡（図版22、第186図）

G3区の北西隅にあり、44号住居跡を切り、40・41号住居跡に切られていた。東南壁と北東壁の一部は遺存しないが、残存する部分から一辺が430～450cmほどの方形プランであったことがわかる。面積は復原で18.2m²。カマドは北西壁に造られている。主柱穴はP1・P2が230cmの距離をおいて検出されたのみで、4本柱であるはずの残りのP3・P4は不明であった。カマドを通る主軸方位はN-46°-W。埋土中から土師器、須恵器と焼塩土器7、軽石1、粘土塊が出土した。8世紀中頃であろう。

カマド　北西壁の中央にあり、突出した形式で内側に袖は見られなかった。焚口幅は60cm、奥行きは45cmを測り、焚口近くに支脚としていた石があった。

出土遺物（第188図1～4）

須恵器（1）　蓋で、口縁の断面は三角形になる。

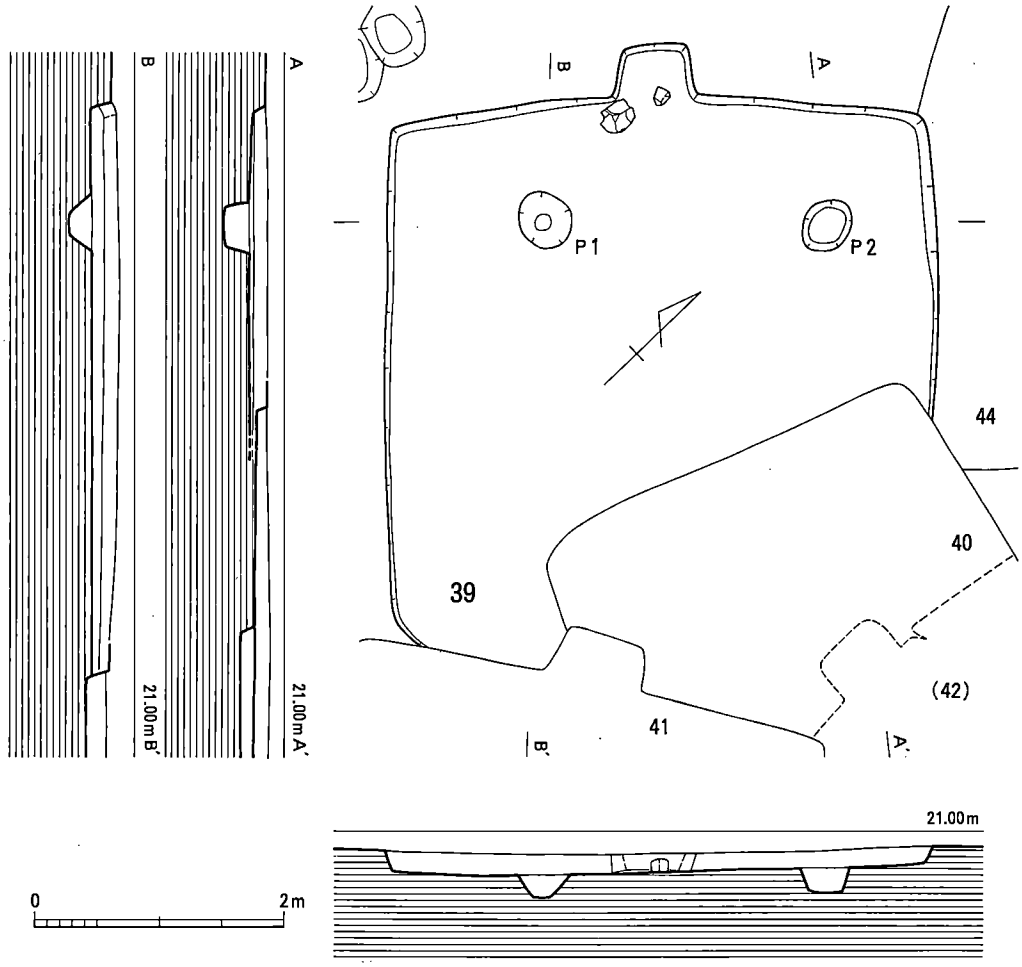
土師器（2～4）　2は椀とすべきか。3は坩で、器壁が薄い。復原口径12.8cm。4はL字形をなす口縁の甕。

40号住居跡（図版22、第187図）

G3区にあり、37～39・44・52号住居跡と下層から現れた42号住居跡を切り、41号住居跡に切られていた。南壁を除く3辺により一辺が325～395cmほどの少し台形気味の方形プランであったことがわかる。面積は復原で12.4m²。カマドは南壁以外の3辺には見られなかった。主柱穴は不明であった。埋土中から土師器、須恵器と焼塩土器5、粘土塊、混入の瓦器が出土した。8世紀中～後半であろう。

出土遺物（第188図1～3）

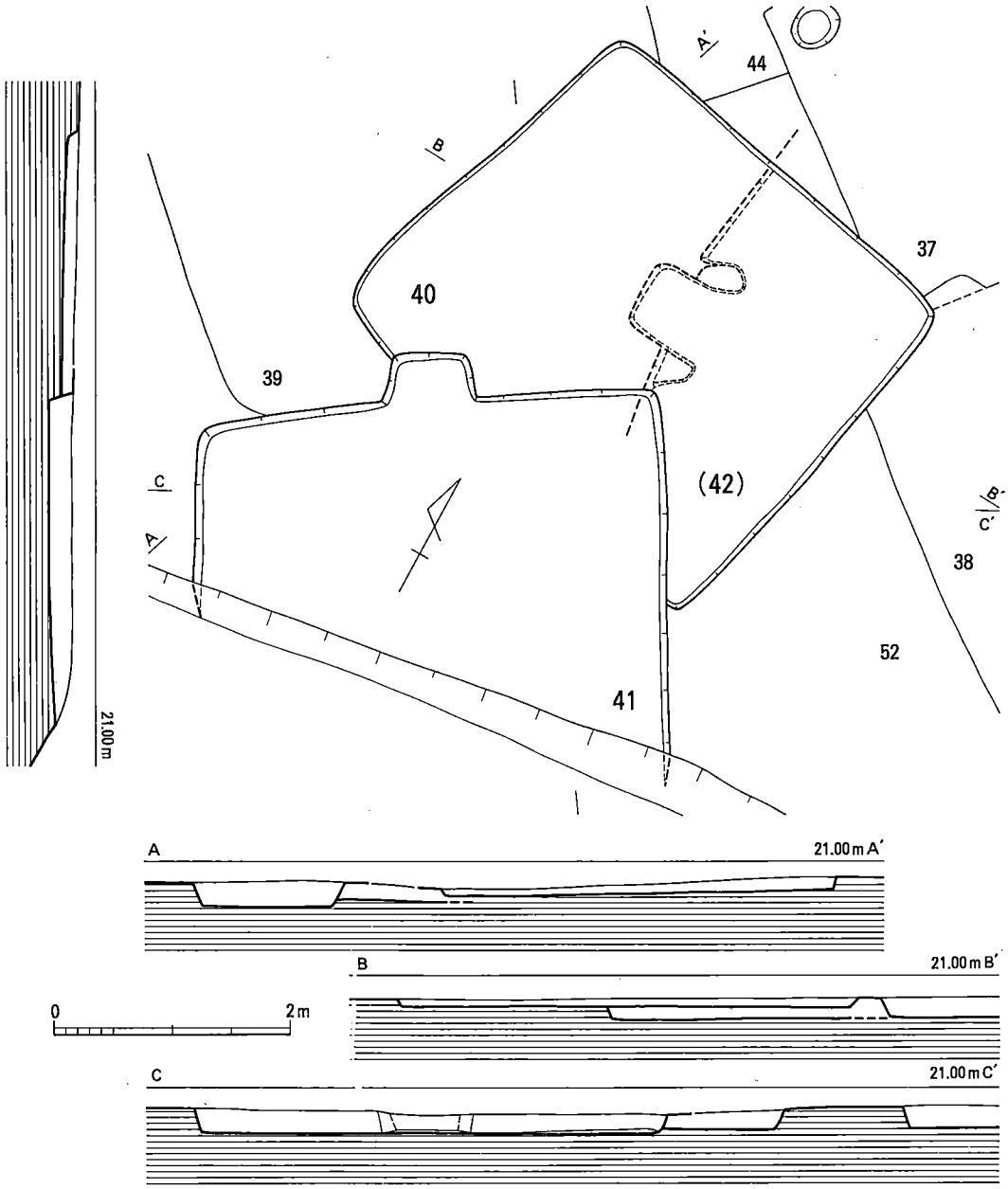
土師器（1～3）　1は口唇を丸く仕上げる坏。2・3は甕で、3は復原口径25cm。



第186図　才田 39号住居跡実測図（1/60）

41号住居跡（図版22、第187図）

G3区にあり、39・40・42・52号住居跡を切っているが、南側は段落ちで削平されていて約半分しか遺存しない。カマドのある北西壁の長さが390cmであり、北東壁と南西壁の間が400cm



第187図　才田 40・41・42号住居跡実測図（1/60）

なので、一辺が390～400cmほどの方形プランであったと思われる。柱穴は全く検出されなかった。カマドを通る主軸方位はN-29°-W。埋土中から土師器、須恵器と焼塩土器5、砥石1、軽石1、粘土塊が出土した。8世紀中～後半であろう。

カマド　北西壁の中央にあり、突出した形式で内側に袖は見られなかった。焚口幅は70cm、奥行きは40cmを測る。

出土遺物（図版51・52、第191図1～6、198図7・8、200図9）

須恵器（1・2）　ともに椀で、1は復原口径14.8cm。

土師器（3～6）　3は高坏、4は壷でともに精製品。5は甕、6は甑である。

焼塩土器（7・8）　ともに内面に布目痕がある。7は円筒形になろう。布目は粗い。8は鉢形で布目は1cmあたり13本と密である。二次熱を受けている。

石器（9）　流紋岩の砥石で仕上砥であろう。ごく一部しか遺存しない。

42号住居跡（図版22、第187図）

G3区にあり、40号住居跡の下層から検出されたが、40号住居跡より外側へ広がる部分が不明なので規模は把握できない。カマドのある西壁の長さ215cmを確認できただけである。柱穴も全くわからない。カマドを通る主軸方位はN-87°-Wを示す。埋土中から土師器、須恵器と焼塩土器6、粘土塊、混入の青磁片が出土した。8世紀前半であろう。

カマド　西壁にあり、突出した形式で内側に両袖も遺存していた。焚口幅・奥行きともに70cmを測る。

出土遺物（図版51、第191図1・2、198図3）

須恵器（1）　蓋で、口縁の断面は三角形を呈する。

土師器（2）　小型の甕で、復原口径14cm。

焼塩土器（3）　鉢形をなすもので、内面はミガキのようにも見えるが、二枚貝条痕ののちにナデが施されたものらしい。

43号住居跡（図版22、第182図）

G・Hの4区にあり、34号住居跡の下層から検出された。34号住居跡と1号掘立柱建物跡に切られていた。カマドのある北西壁の長さが270cmで、北東壁と南西壁の間が300cmなので、270～300cmを一辺とする方形プランになるのであろう。主柱穴は不明であった。カマドを通る主軸方位はN-37°-W。埋土中から土師器と粘土塊、石が出土した。8世紀前半か。

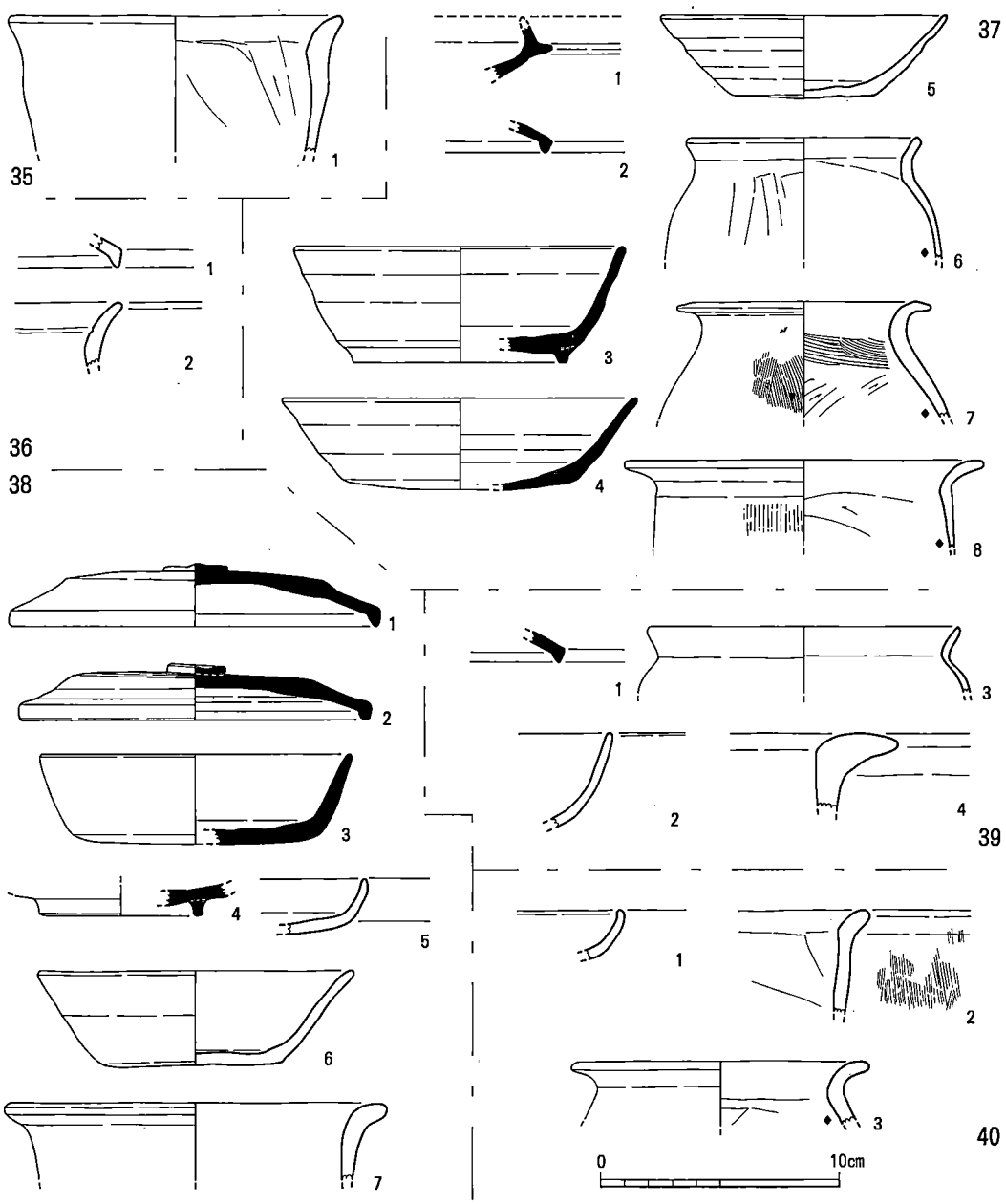
カマド　北西壁の中央北寄りにあり、突出した形式で内側に袖は見られなかった。焚口幅70cm、奥行き55cmを測る。

なお、この住居の北西壁に切られて東西に伸びる掘り込みが存した。これも住居跡の北壁の

一辺かと思われるが、それ以上の面的な検出を行っていないので詳細は不明である。

出土遺物（第191図1）

土師器　坏で復原口径10.6cm。



第188図　才田 35～40号住居跡出土土器実測図（1/3・1/6）

44号住居跡（図版22、第184図）

G4区を中心に一部G3区に及んでいる。35・37・39・40号住居跡と1号掘立柱建物跡に切られ、カマドのある北西壁は35号住居跡の下層から検出された。カマドのある北西壁は345cmの長さで、ごく一部が検出された南東壁と北西壁間が435cmを測り、北西ー南東に主軸のある長方形プランとなる。面積は復原で15.5m²。主柱穴は不明であった。カマドを通る主軸方位はN-44°-W。埋土中から土師器、須恵器、焼塩土器11、軽石2、鉄器1と粘土塊が出土した。7世紀初頭頃と考える。

カマド　北西壁のほぼ中央にあり、突出した形式で内側に袖は見られなかった。焚口幅50cm、奥行き40cmを測る。

出土遺物（図版52、第191図1～9、201図10）

須恵器（1～5）　1は坏の身か蓋かわからないが身として図示する。2・3蓋で、2は摘みが付くと思われるので径がもう少し大きくなるだろう。3は復原口径12.8cm。4は椀で復原口径14.6cm。5は甕の胴部片。

土師器（6～9）　6～8は坏で、6の復原口径13.4cm。9は甕の口縁部片。

鉄器（10）　小片で、鏃の茎かと思われる。

45号住居跡（図版22、第171図）

F・Gの4・5区にあり、25・29号住居跡と2号掘立柱建物跡に切られている。南壁を検出できなかったが、一辺が430～450cmの方形プランであったと思われる。復原で面積は18.3m²。カマドは存したとすれば西壁であろう。柱穴は検出されなかった。埋土中から土師器、須恵器と混入の瓦器が出土している。7世紀中～末頃か。

出土遺物（第191図1）

須恵器　壷の口縁部片である。

46号住居跡（図版22、第178図）

G4区にあり、31号住居跡の下層で検出され、29・31・34・35・44号住居跡と1号掘立柱建物跡に切られている。31号住居跡の下層で北壁と東壁を検出したのみなので全容は不明であるが、おおよそ一辺が340～350cmの方形プランになるものと思われ、面積は11m²前後であろう。カマドは北壁につくられ、主柱穴は不明である。カマドを通る主軸方位はN-9°-W。埋土中から土師器、須恵器のほか焼塩土器(16点)、粘土塊が出土した。7世紀中頃か。

カマド　北壁にあり、突出した形式で内側に袖は見られなかった。焚口幅45cm、奥行き60cmを測る。

出土遺物（図版51、第191図1、198図2～4）

土師器（1） 坏の口縁部片である。

焼塩土器（2～4） いずれも二次熱を受けている。2は復原口径9cm。3は復原口径11.5cm。4の内面は布のようなものでナデを行っている。外面は凹凸が著しい。強い二次熱により下半部は胎の中心が青灰色に変色し、また内面下端の器表は紫色に変色している。復原口径11cm。

47号住居跡（図版22、第189図）

Ｆ5区にあり、22号住居跡を切り、19A号住居跡と４・５号掘立柱建物跡に切られている。一辺が380～410cmの方形プランをなす。面積は復原で15.5m²。カマドは検出されなかった。主柱穴も不明である。埋土中から土師器、須恵器のほか鉄器1、軽石1、混入の白磁片が出土した。8世紀前半であろう。

出土遺物（図版52、第191図1～4、201図5）

須恵器（1） 椀の底部片で、高台は内端部が接地している。復原高台径8.8cm。

土師器（2～4） 2は須恵器を模倣した椀で復原高台径12.4cm。3・4は甕で、復原口径は3が12.2cm、4が18cm。

鉄器（5） 鏃であろう。現存長59cm。

48号住居跡（図版22、第190図）

Ｆ・Ｇの3区にあり、49号住居跡を切っているが、南側は段落ちで削平されていて全容はわからない。カマドのある西壁が400cm、北壁が425cmまで遺存するので、カマドの位置を考慮しても一辺が430cmほどの方形プランであったと思われる。柱穴は全く検出されなかった。カマドを通る主軸方位はＮ-59°-Ｗ。埋土中から土師器、須恵器と焼塩土器1、種類不明の種子が出土している。8世紀中頃であろう。

カマド 西壁のおそらく中央やや北寄りにあり、突出した形式で内側に袖は見られなかった。しかし右袖にあたる所には粘土が潰れて広がっていたので、いくらかは袖が出ていたのかもしれない。焚口幅は70cm、奥行きは35cmを測る。

出土遺物（図版50、第191図1～5）

須恵器（1・2） 1は坏身で立上りは細く小さい。2は蓋。

土師器（3～5） 3・4は坏。5は大型の甕で、外面に煤が付着している。復原口径26.2cm。

49号住居跡（図版22、第190図）

Ｆ3区にあり、48号住居跡と６号掘立柱建物跡に切られ、南側は段落ちで削平されている。カマドのある西壁は440cm、北壁は370cmが遺存する。カマドが西壁の中心にあると仮定すれば、カマド中心から北壁までが250cmなので西壁は500cmの長さに復原されるが、おそらく48号住居

跡と同程度の規模で一辺が430～450cmほどの方形プランであったと思われる。柱穴は全く検出されなかった。カマドを通る主軸方位はN-71°-W。埋土中から土師器、須恵器と焼塩土器2、鉄器1、カマドから軽石2と土錘1が出土した。土錘は中世の所産と考えるので先述した。8世紀中頃であろう。

カマド　西壁にあり、突出した形式で内側に袖は見られなかった。焚口幅は65cm、奥行きは40cmを測る。

出土遺物（図版52、第194図1・2、201図3）

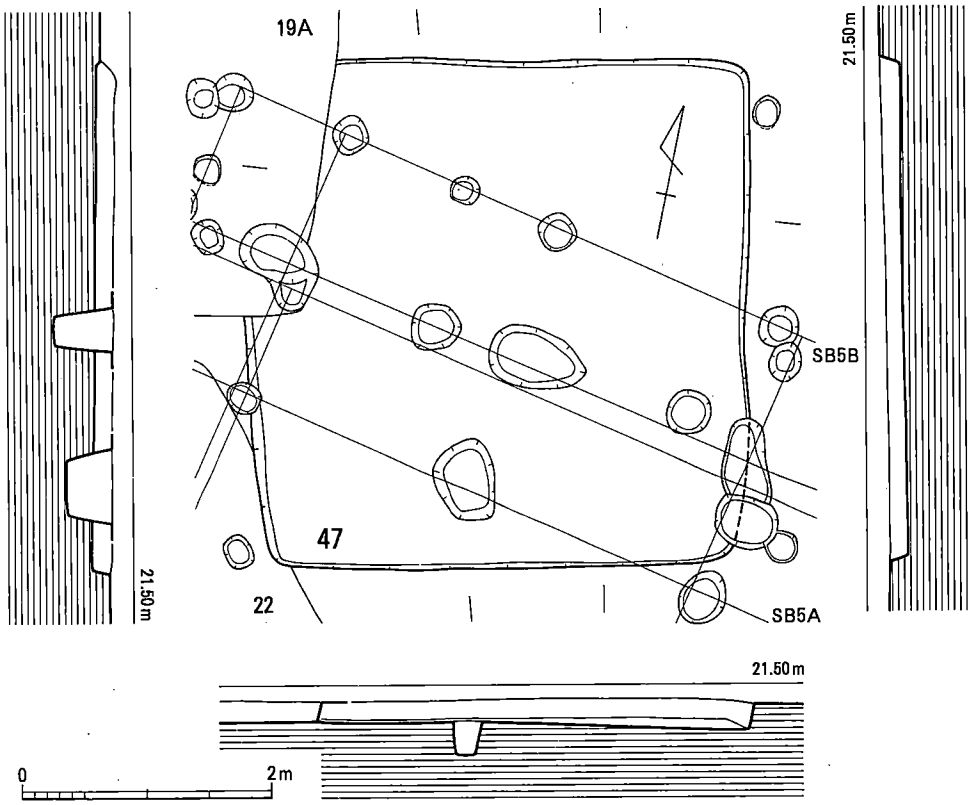
須恵器（1）　椀の口縁部片であろう。

土師器（2）　坏で復原口径16.6cm。

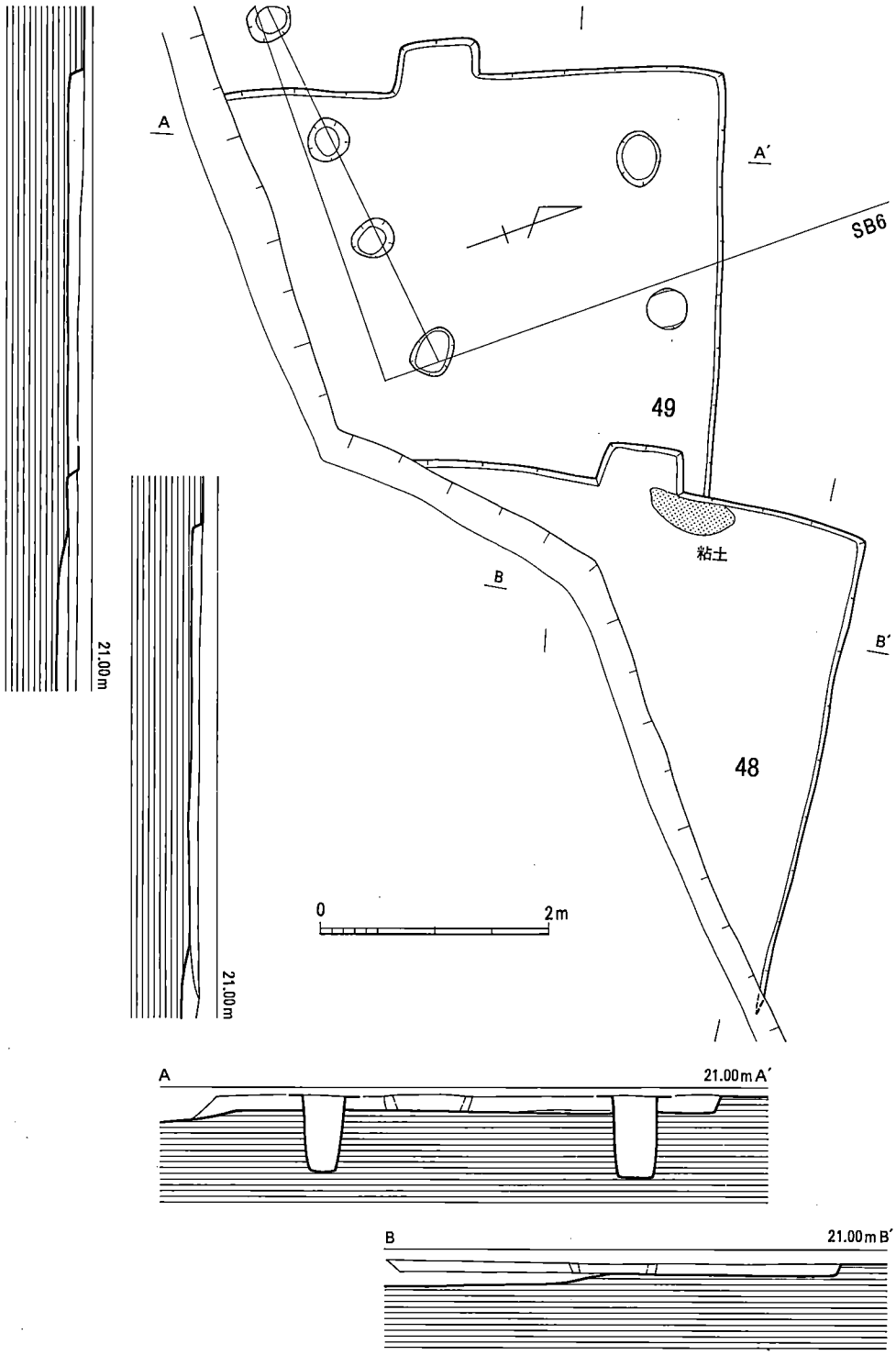
鉄器（3）　鏃の茎であろうか。

50号住居跡（図版22、第192図）

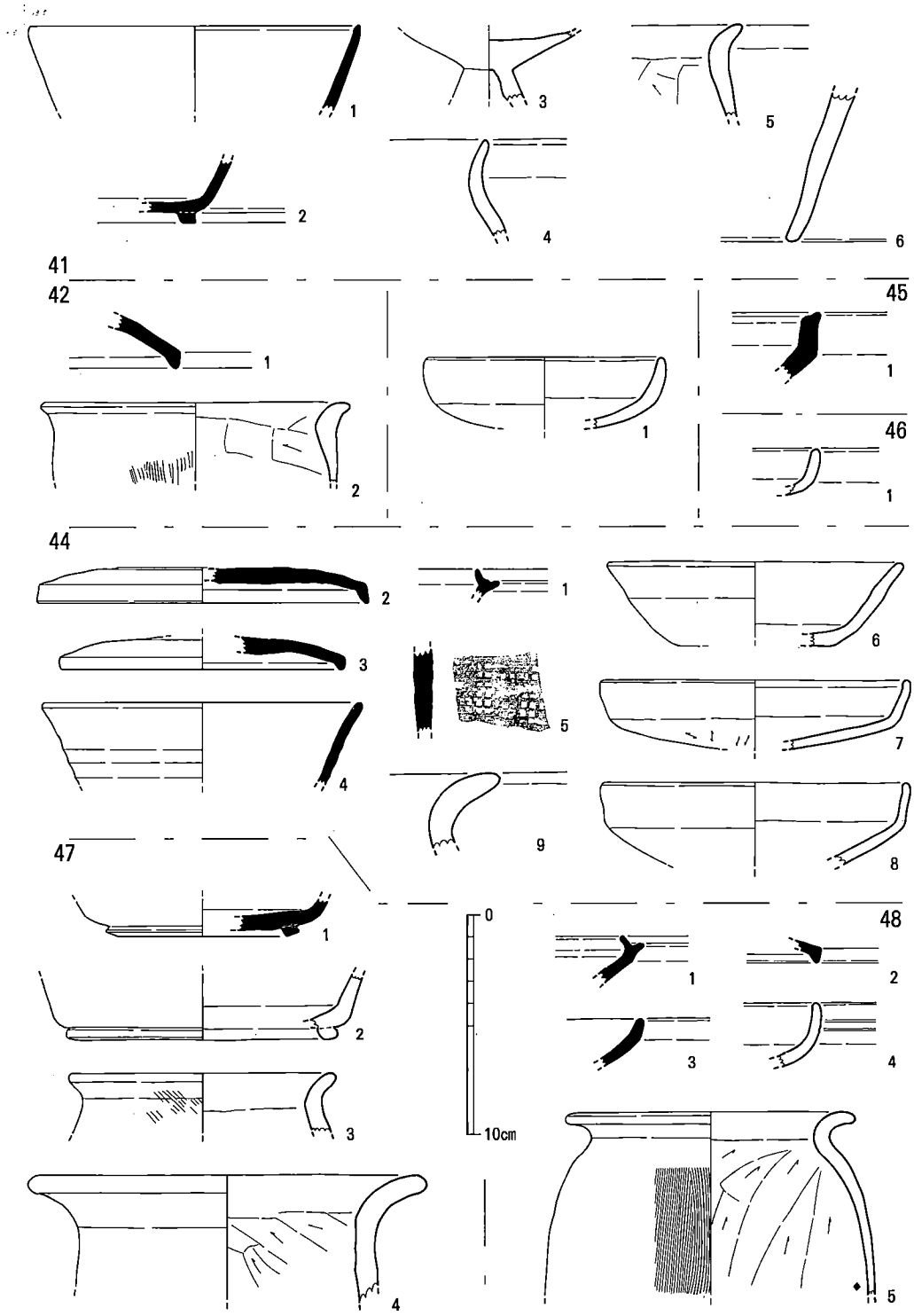
F・Gの4区にあり、35・51号住居跡に切られている。一辺が350～365cmの方形プランをな



第189図　才田 47号住居跡実測図（1/60）



第190図　才田 48・49号住居跡実測図（1/60）



第191図　才田 41～48号住居跡出土土器実測図（1/3・1/6）

し、カマドは北壁に造られている。面積は復原で11.9㎡。主柱穴は不明であった。カマドを通る主軸方位はN-4°-W。埋土中からごく少量の土師器、須恵器が出土した。

カマド　北壁にほぼ中央にあり、突出した形式で内側に袖は見られなかった。焚口幅は50㎝、奥行きは45㎝を測る。8世紀代か。

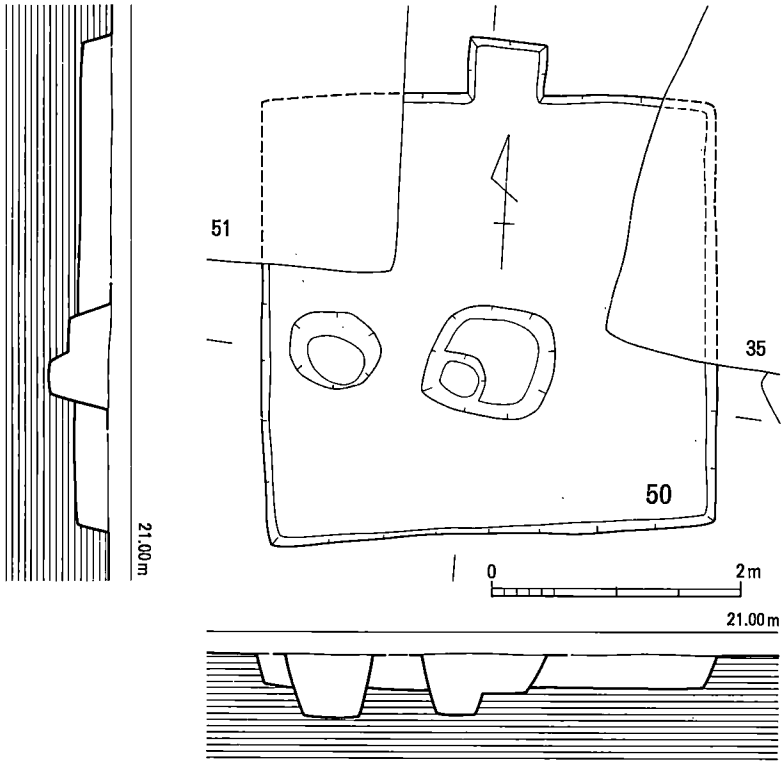
出土遺物（第194図1）

土師器　坏の口縁部の小片である。

51号住居跡（図版22、第170図）

F4区で、24号住居跡の下層から検出された。北壁とそこに付設されたカマドを検出したのみであって全容は不明である。北壁は24号住居跡の東西壁間である500㎝以上に伸びるのでかなり大型の住居になる。主柱穴は不明。カマドを通る主軸方位はN-0°-E。カマドと埋土中から土師器、須恵器、焼塩土器3、軽石3、用途不明石器1、鉄器1、粘土塊が出土している。8世紀前半であろう。

カマド　北壁に突出して築かれ、両袖が内側に遺存する。右袖の前面には粘土があり、壁体の



第192図　才田 50号住居跡実測図（1/60）

崩れたものであろう。焚口幅は60cmで、奥行きは85cmを測る。奥壁に近く土器が出土した。
出土遺物（図版52、第194図1～6、200図7、201図8）
須恵器（1） 椀の底部片で、畳付は内端部のみ接地する。復原高台径9.8cm。カマド出土。
土師器（2～6） 2の坏は復原口径17.5cm。3～5は甕、6は甑であろう。3は復原口径16.4cm。4・5は大型で4の復原口径28.8cm。6はカマド出土。
石器（7） おはじきのような形状の、表面がよく擦れた珪石である。人為的に擦れたのでなく自然になったものかもしれない。長径20.5mm、短径17mm、厚さ5.5mm、重さ2.9g。カマド内出土。
鉄器（8） 鎌である。錆が著しく、一見すると外湾刃らしくもある。長さ163mm。

52号住居跡（図版22、付図）

G3区で、38・40・41号住居跡に挟まれてそれらに切られ、東側と南側とは段落ちにて削平されている部分を52号としたが、どの一辺の壁もカマドも現れていないので規模等は全く不明である。主柱穴も不明。埋土中から土師器、須恵器、焼塩土器3、粘土塊が出土している。7世紀初頭～前半であろう。
出土遺物（図版51、第194図1・2、198図3）
須恵器（1） 坏身で復原口径10.6cm。
土師器（2） 甑になるかと思われる。復原口径19.6cm。
焼塩土器（3） 鉢形になるもので、二次被熱の有無は不明。

53号住居跡（図版22、付図）

H5区で、32・33号住居跡の北側、26・27号住居跡の東側の所を53号としたが、ここもどの一辺の壁もカマドも現れていないので規模等は全く不明である。本来なら北側に壁の一辺が現れなければならないが、置土もあって検出できていない。主柱穴も不明。埋土中から土師器、須恵器、焼塩土器4、軽石3が出土している。7世紀初頭頃と考える。
出土遺物（第194図1～5）
須恵器（1・2） 1は坏蓋であろう。2は蓋の摘み部分。
土師器（2～5） 3は須恵器模倣の椀で、復原口径14.2cm。4は坏で、復原口径14.6cm。5は精製の甕で、復原口径15.8cm。

54号住居跡（図版22、第193図）

Gの2・3区にあり、55号住居跡に切られるとともに、東側は調査区外へとのびていた。カマドのある西壁の長さは475cmで55号住居に切られ、北壁は390cmが直線で伸びたあと南に屈折しており、西壁からは都合480cmで調査区境界に至っている。この境界付近には焼土の広がりが

認められたので、壁面の屈折と併せ考えるならばもう１軒別の住居跡が存するのかもしれない。ともあれこの住居跡は一辺が500cm前後の方形プランであったと思われる。柱穴は全く検出されなかった。カマドを通る主軸方位はN-99°-W。埋土中から土師器、須恵器と焼塩土器3、粘土塊、混入の白磁片が出土した。8世紀中頃であろう。

カマド　西壁にあり、突出した形式で内側に袖は見られなかった。焚口幅は105cmと広く、奥行きは50cmを測る。焚口付近に焼土があった。

出土遺物（図版51、第194図1～3、198図4・5）

須恵器（1）　椀の破片である。

土師器（2・3）　2は半精製の甕。3の甕は復原口径19.2cm。

焼塩土器（4・5）　ともに二次熱を受けており、4は桃色に変色した所がある。

55号住居跡（図版22、第193図）

Ｇ2区にあり、54号住居跡を切るとともに、南東側は調査区外にかかっている。南壁はやや開き気味に伸びているので、一辺が260～310cm前後の台形に近い方形プランであったと思われる。カマドは西壁に造られている。柱穴はＰ3が調査区外にあるらしく検出されなかったが、４本柱であることは間違いない。Ｐ1-Ｐ2間が140cm、Ｐ2-Ｐ4間が105cmを測る。面積は復原で7.4m²。この遺跡の住居跡としては最も小さいことになる。カマドを通る主軸方位はN-90°-W。埋土中から土師器、須恵器と焼塩土器8、粘土塊が出土した。8世紀後半であろう。

カマド　西壁の中央にあり、突出した形式で内側に両袖を持つ。焚口幅は50cm、奥行きは70cmを測る。

出土遺物（図版51、第194図1～4、199図5）

須恵器（4）　大甕の口頸部片である。外面に波状文等は施されていない。復原口径45cm。

土師器（1～3）　1は須恵器を模倣した蓋で化粧土を掛けている。2は坏。3は高坏の脚部片である。

焼塩土器（5）　器壁の厚いもので二次熱を受けている。

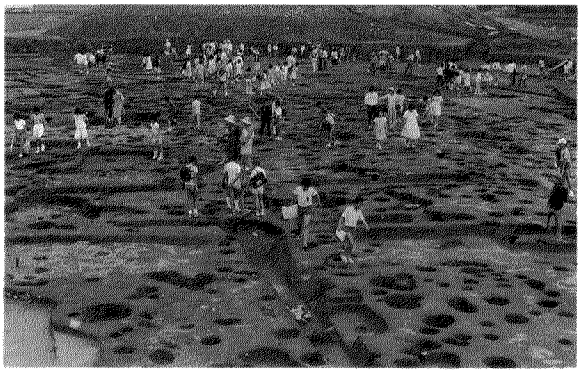
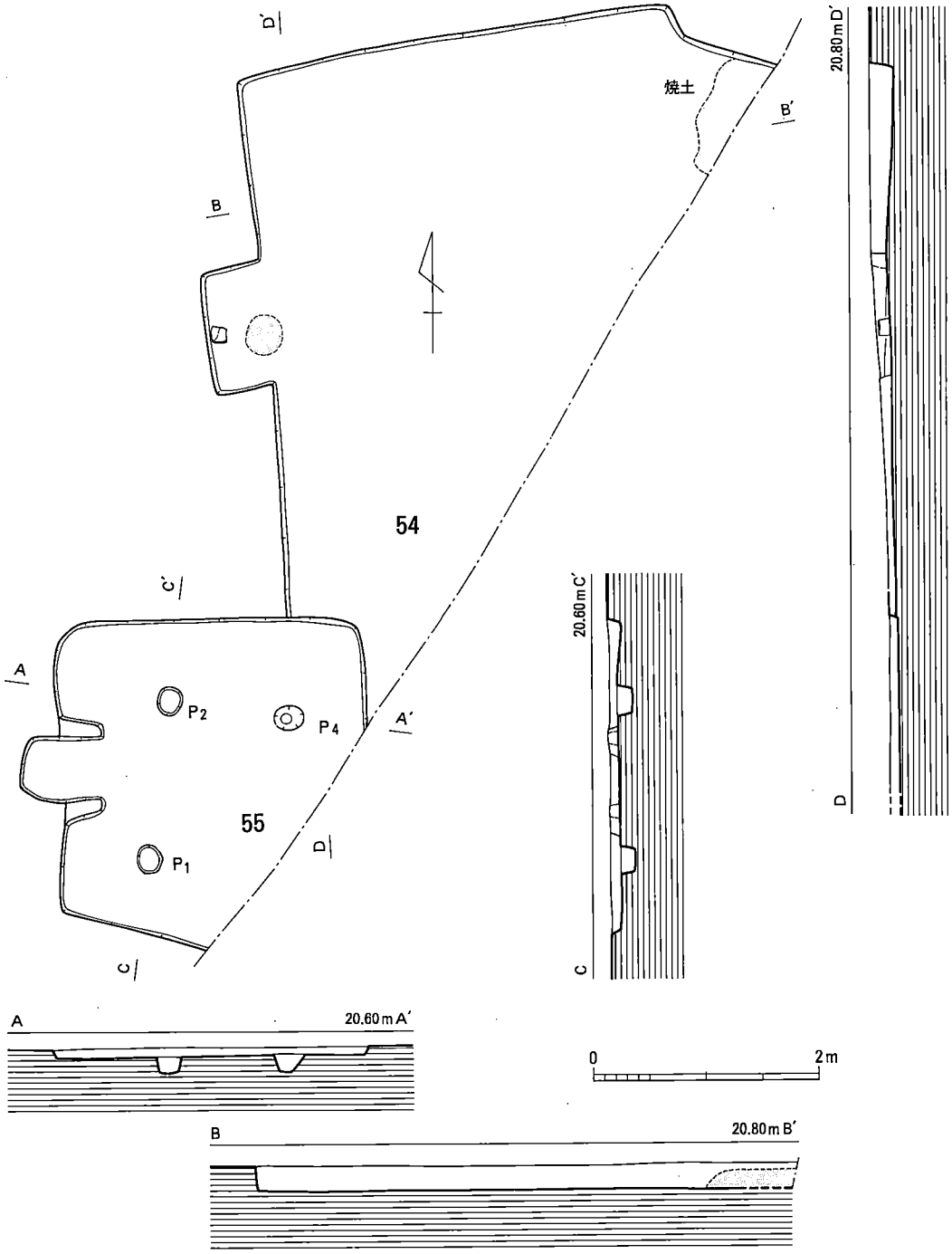
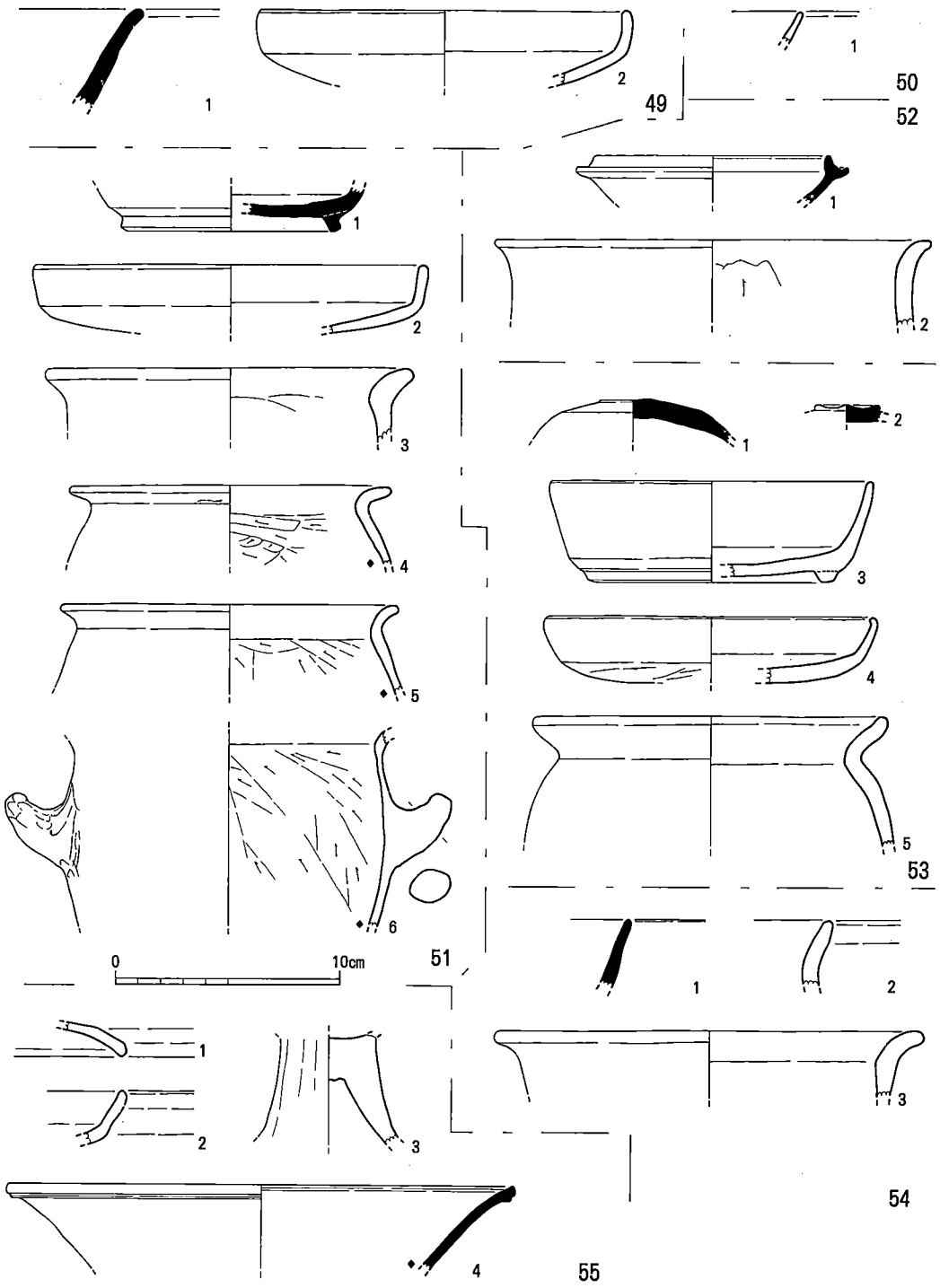


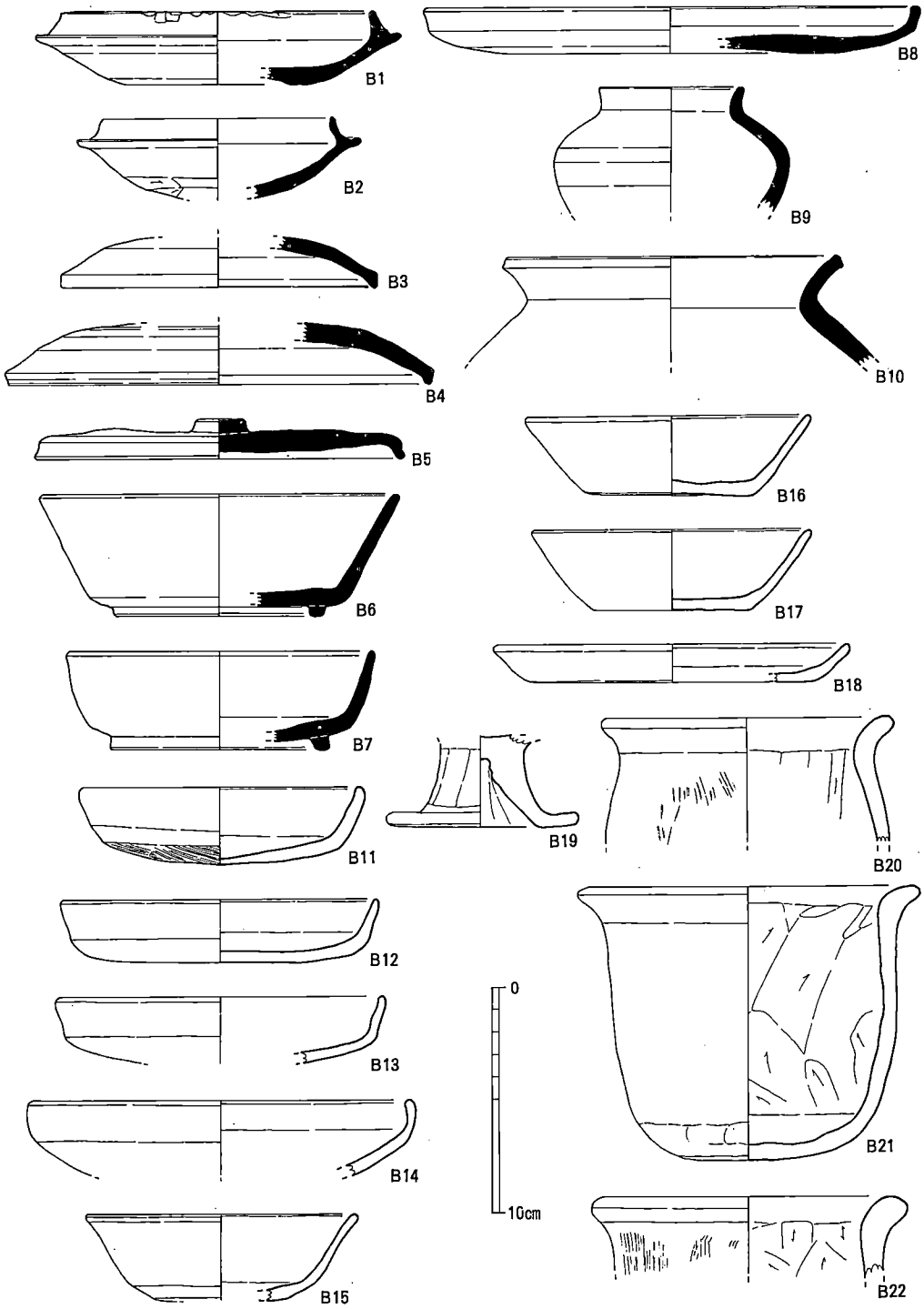
Photo. 13
現地説明会　③



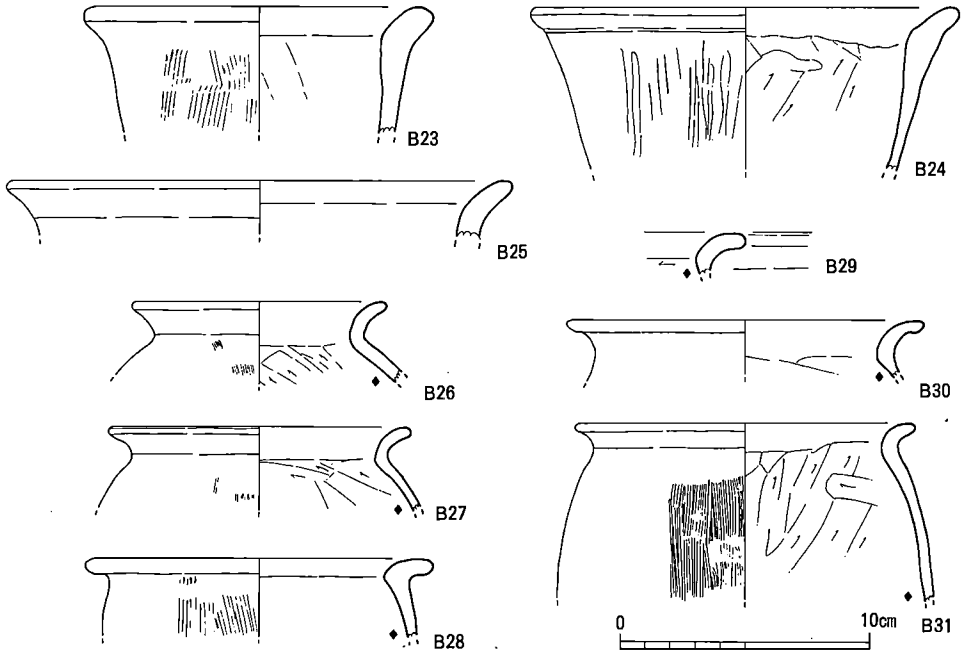
第193図　才田 54・55号住居跡実測図（1/60）



第194図　才田 49～55号住居跡出土土器実測図（1/3・1/6）



第195図　才田 遺構検出面等出土古墳～奈良時代土器実測図１（1/3）



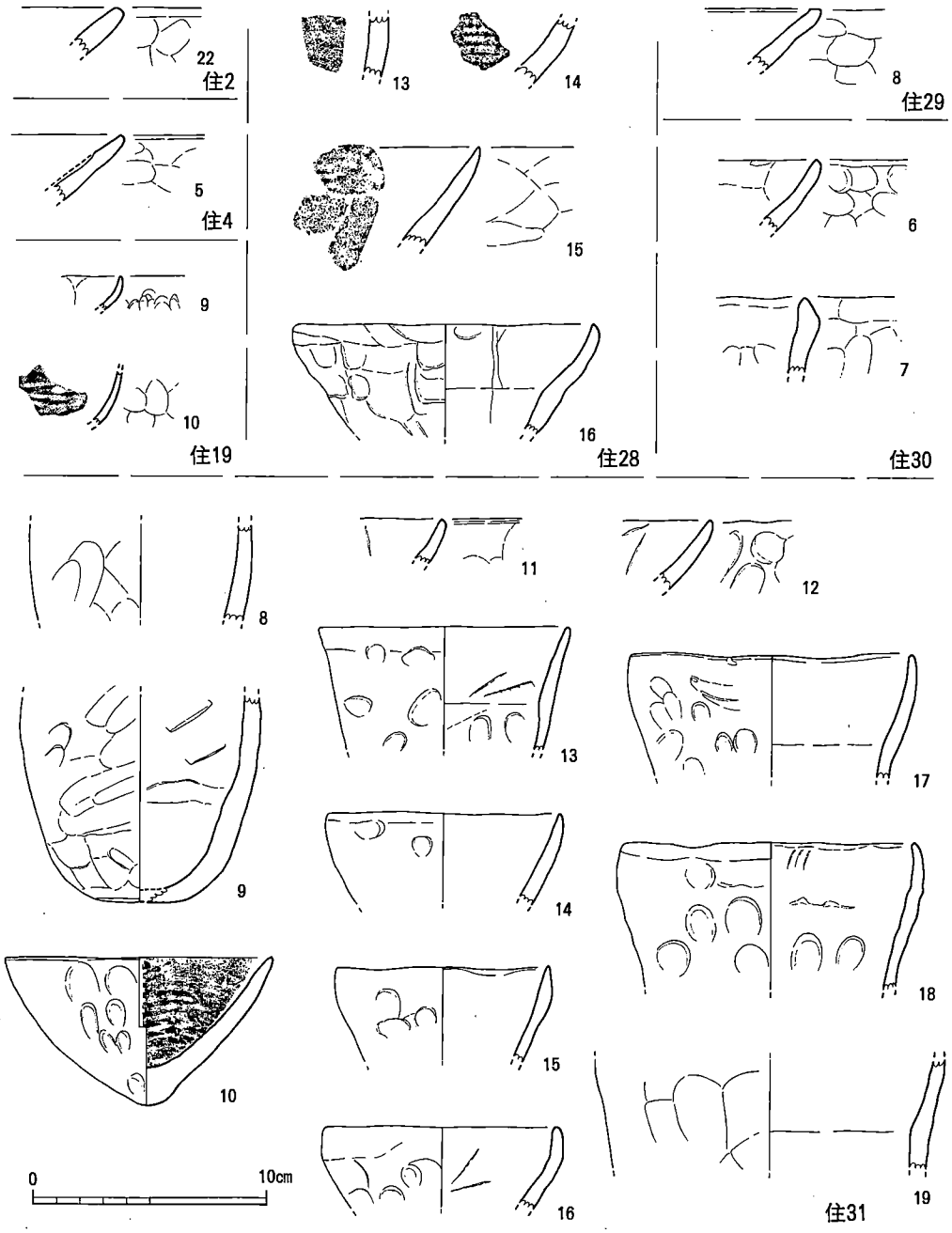
第196図　才田 遺構検出面等出土古墳～奈良時代土器実測図２（1/3・1/6）

2　その他（図版52、第195・196・197～199・145図）

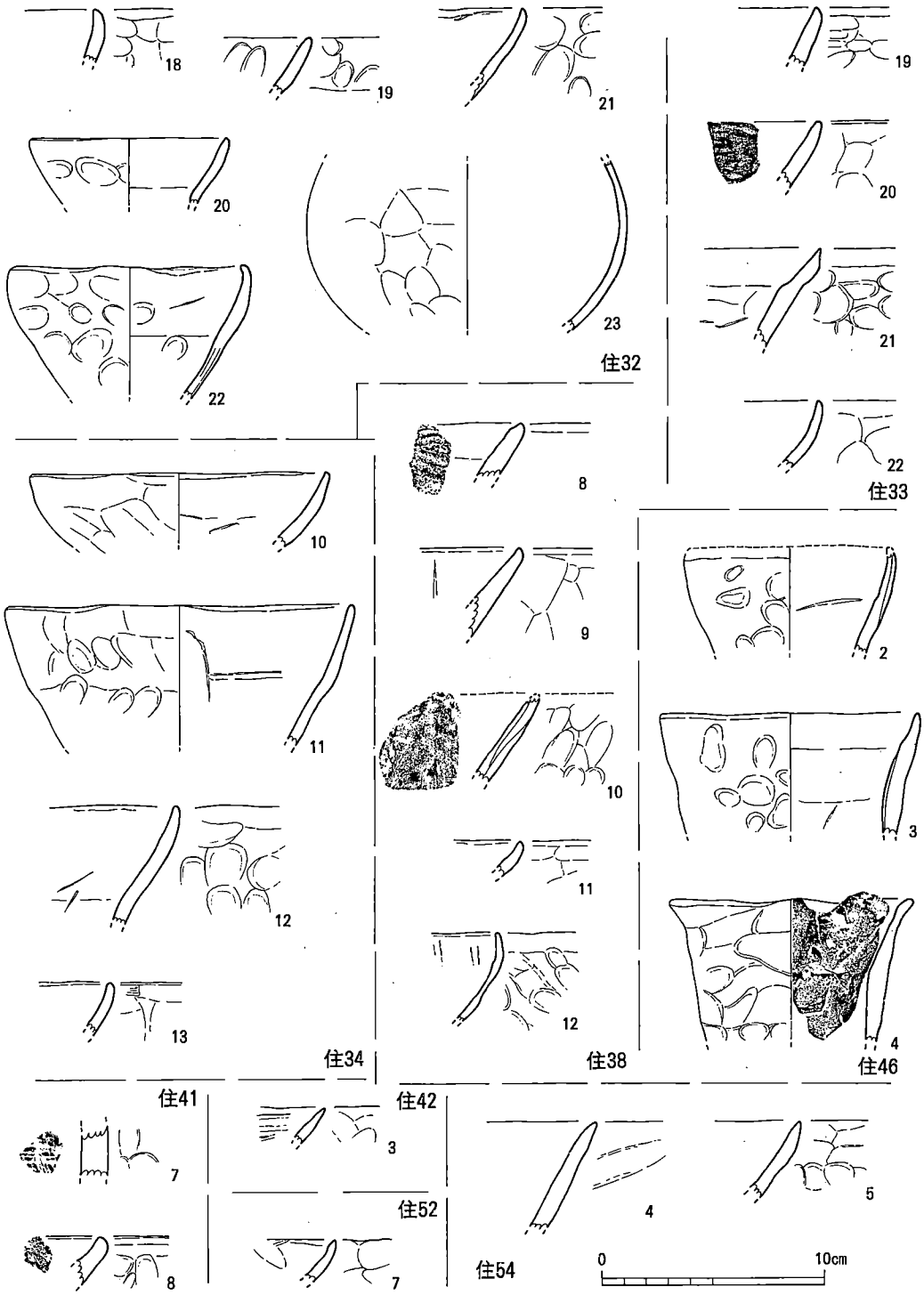
遺構検出面や攪乱部分から出土した土器と焼塩土器、石帯について述べる。頭にＢを冠しておく。

須恵器（第195図B1～B10）　1・2は坏身。1は口唇部に打欠きがなされている。復原口径13.8cm、器高3.2cmで、古墳時代後期の土器としてはこの遺跡で最も古いものとなる。2は復原口径10.4cm。3～5は蓋。5はかなり扁平で復原口径16.4cm。6・7は椀。6の復原口径16cm。8は高坏であろう。9は壺で復原口径6.4cm。10は甕。内外ともナデ調整である。1は調査区東端部、2は2号住居の北方、6はトレンチ、それ以外はＧ・Ｈの4・5区周辺から出土した。

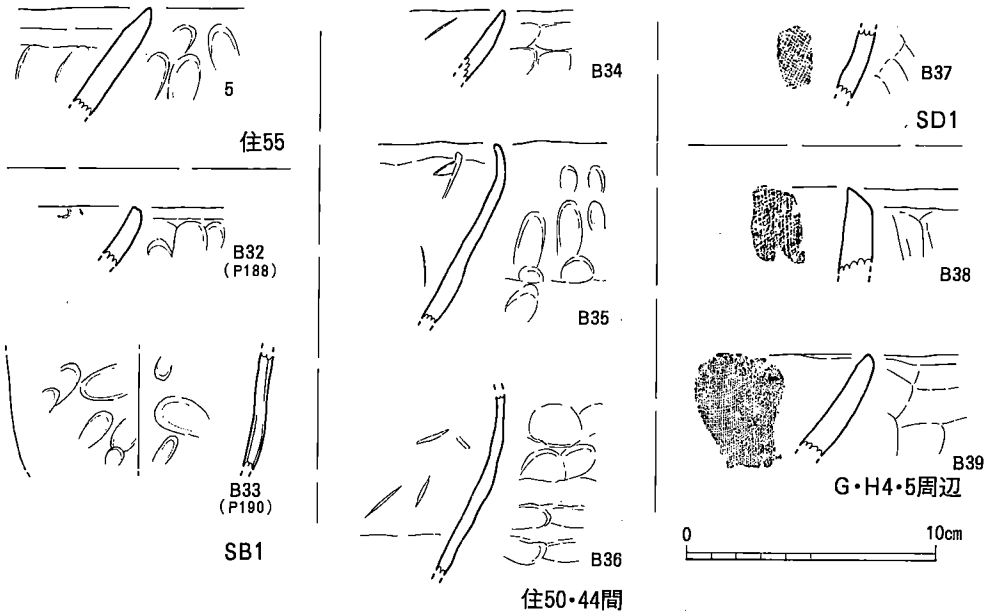
土師器（第195図B11～第196図B31）　11～17は坏。11は穿孔がある。口径12.5cm。12は平らな底部となり復原口径14.2cm。16・17の外底部はヘラ起しで、復原口径は16が12.8cm、17が12.5cm。18は皿。19は高坏で裾部径8.5cm。20～31は甕。21は口径15.1cm、器高12.2cm。26～31は大型で、31の復原口径27.4cm。11は3号住居の西南部、12はＢトレンチ、14・20は21号住居の南、15は44・50号住居間、16はＡトレンチ、18・25はピット、19・26・28はＧ・Ｈの4・5区周辺、22・27は3号住居の東側、23・29は1号溝の北側、30は23・24号住居間から出土し、それ以外の13・17・21・24・31は場所不明である。



第197図　才田 焼塩土器実測図１（1/3）



第198図　才田 焼塩土器実測図２（1/3）

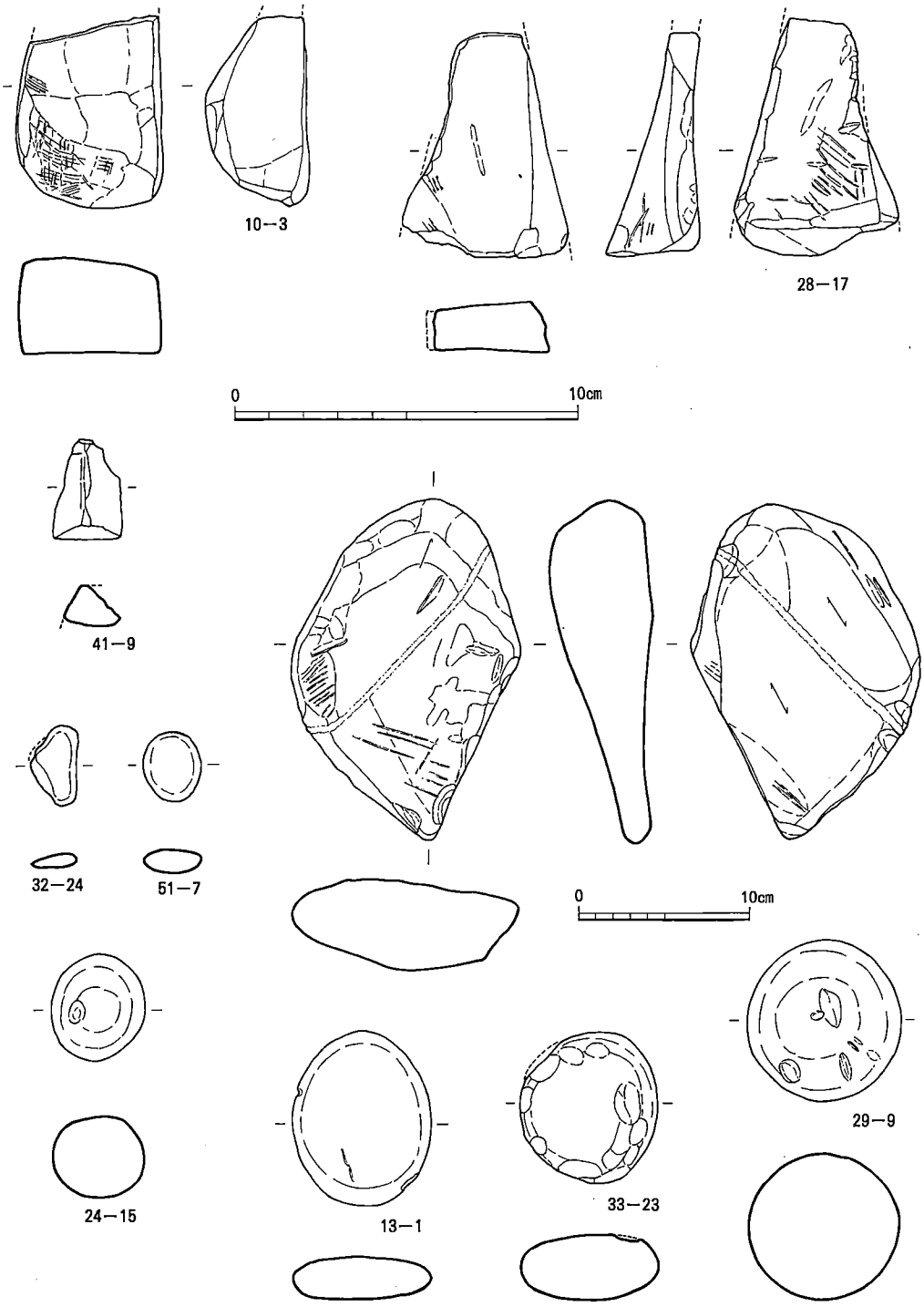


第199図　才田 焼塩土器実測図３（1/3）

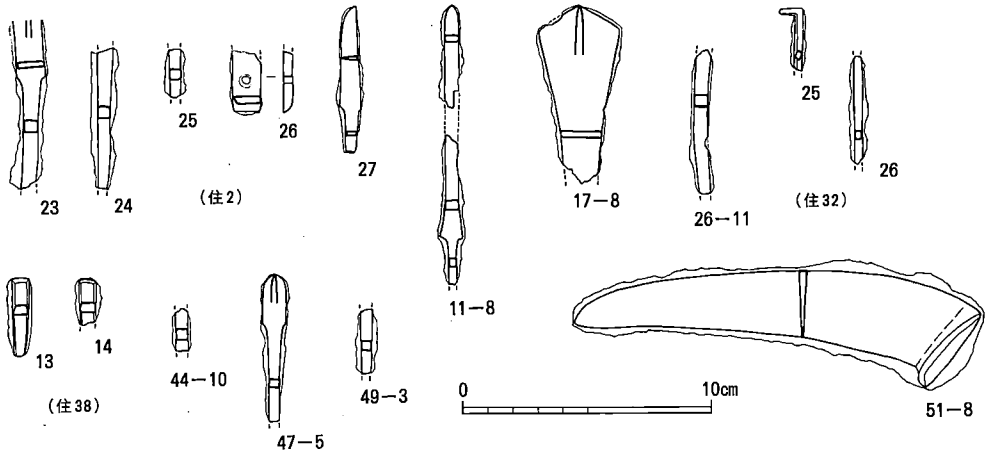
焼塩土器（第197～199図B32～B39）　全て二次熱を受けている。32・33はそれぞれＳＢ１のＰ21とＰ12から出土しており、これはその下層にある31・46号住居のいずれかに属していたものであろう。

32は白っぽい土器であり、33の胎は黒灰色をなす。34～36は44・50号住居間から出土した。35は口縁の少し下に穿孔したような所がある。36の胎の中心は青灰色をなす。37はＳＤ１の東端部から出土した。内面の布目痕は1cmあたり9本を数える。須恵質と称してよい。38・39はＧ・Ｈの4・5区周辺から出土し、ともに内面に布目痕がある。38は円筒形をなすもので、布目は1cmあたり7～8本と粗く、逆に39のそれは1cmあたり12本を数える密なものである。

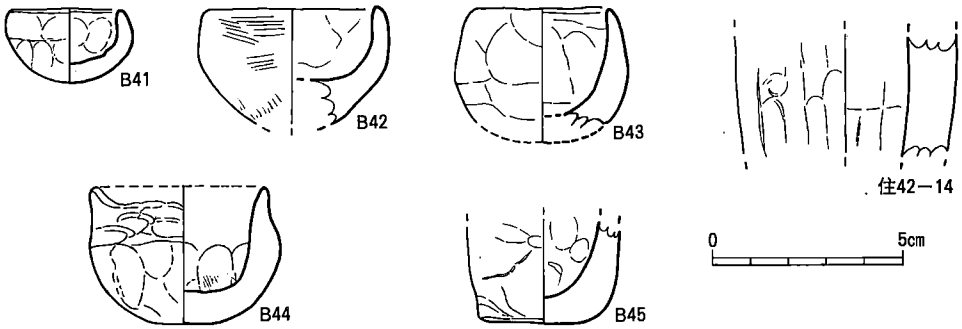
石帯（第145図B40）　巡方である。黒い石材で、頁岩製。表面と側面は磨かれて艶消し状の光沢をもち微細な擦痕が多数あるが、裏面は磨くことなく白っぽい状態である。裏面の各隅近くには2個一対の連結したかがり孔がある。一辺は40.2～40.9mm、最大厚6.1mm、重さ22.8g。ＳＢ13のＰ13のすぐ北東にあるＰ569から出土した。奈良時代に属するという確証はないが、中世期とするよりは蓋然性が高いと考える。



第200図　才田 住居跡出土石器実測図（1/2・1/4）



第201図　才田 住居跡出土鉄器実測図（1/3）



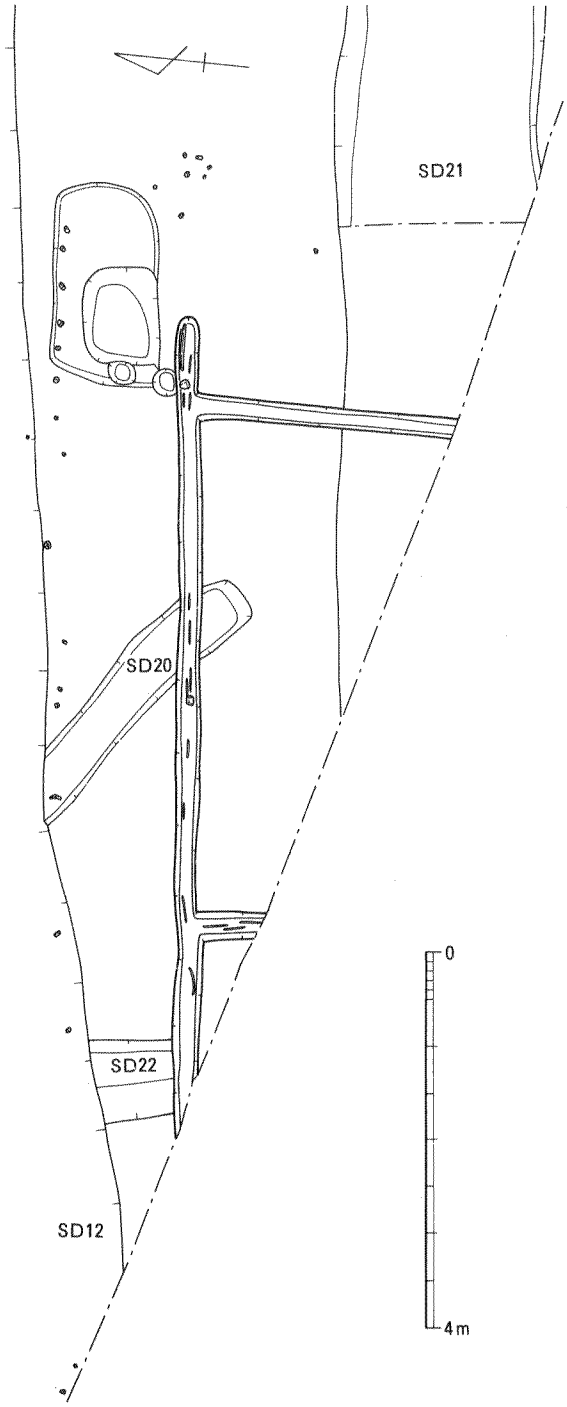
第202図　才田 ミニチュア土器・ふいご羽口実測図（1/2）

C．その他の遺構と遺物

1　暗渠（図版3・14、第203図）

E1区にあり、西側から見てF字形に掘られているが、南側と西側は調査区外へと伸びている。東西に走る基幹溝から、540cmの距離をおいて2本の支線溝が南へと伸びる。これらの溝が20～22号溝を切る。幅は17～30cmで、深さは21～26cm。底面には松の小枝が敷かれていた。排水用の暗渠であろう。時期的には不詳であるが、古くとも江戸時代以降であろう。

東西方向の基幹溝の北側に、120cmの間隔をおいて溝とほぼ平行に杭列があった。どのような機能の杭列かはわからぬが、暗渠と関連するものだろう。杭列は12号溝を切っている。

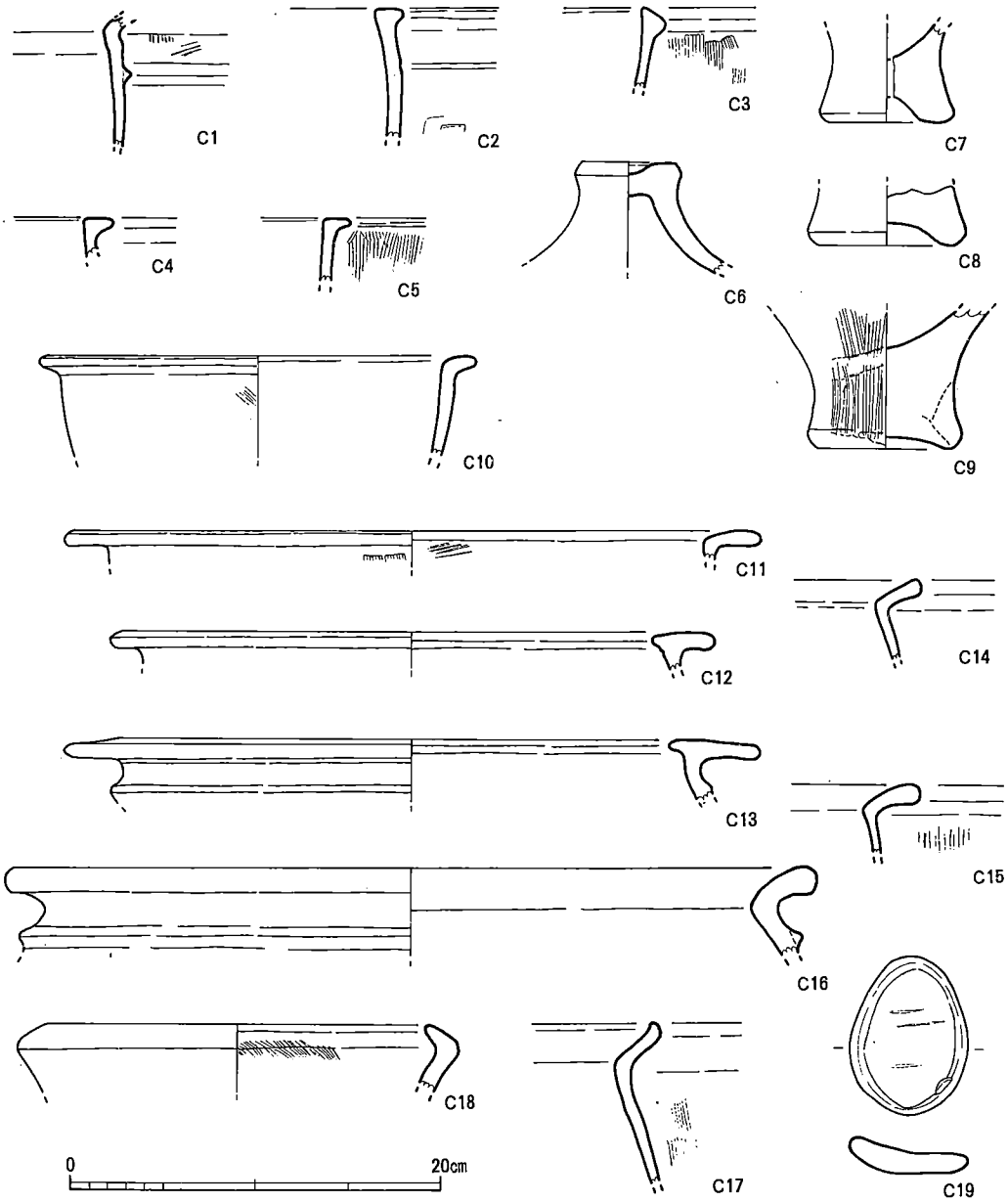


第203図　才田 E-1区暗渠平面図（1/80）

Photo. 14　耕地整理記念碑

2 弥生土器・土師器・須恵器

土坑や溝、ピットの埋土、包含層から弥生土器、古墳時代前期～中期の土師器、初期須恵器が出土している。弥生土器については器表が磨滅しているので上流側にあった遺跡が洪水等で



第204図　才田 弥生土器実測図（1/4）

削られたのちに運ばれてきたものだろう。しかし、古墳時代前期～中期の土師器・初期須恵器はそうではないので、あるいは該時期の遺構が存したのかもしれないが、調査中には確認できなかった。遺物量は少ないのでこの時期の遺構の主体が調査区外にあるのかもしれない。なお、初期須恵器とした土器は陶質土器である可能性もある。

a．弥生土器（第204図C1～C19）

1は肩部に断面三角形の突帯を貼り付けた甕で、方形溝の南側から出土した。2の甕は肩部に浅い沈線を入れる。ＳＫ13出土。3の甕はＳＢ5の一柱穴の出土。4・5は口縁の上面に平坦面を持つ甕で、4はＳＢ16の一柱穴から、5はＳＤ4周辺から出土した。6は蓋であろう。摘み径5.8cm。ＳＫ8出土。7～9は甕の底部で、いずれも上げ底となる。復原で底径は7が7.2cm、8が8.6cm、9が8.4cm。7は15号住居跡、8はＳＫ68、9は方形溝の出土。10の甕は復原口径23.8cm。ＳＤ1西端部出土。以上は中期初頭～前半の土器である。11～17は甕で、11は復原口径38cm。ＳＤ1出土。12は復原口径33cm。西端撹乱部出土。13は復原口径37.8cm。Ｂ3区周辺出土。14はトレンチ、15はＳＫ37出土。16はくの字形の口縁で、復原口径44cm。17は口縁端部が跳上げ状となる。ＳＫ64出土。以上は11～15が中期中頃～末、16・17が後期初頭～前半であろう。18は複合口縁の壷で、復原口径20.6cm。ＳＫ10出土。後期中頃～後半であろう。19は土器を二次利用したものらしい。24号住居跡の項で既述した。

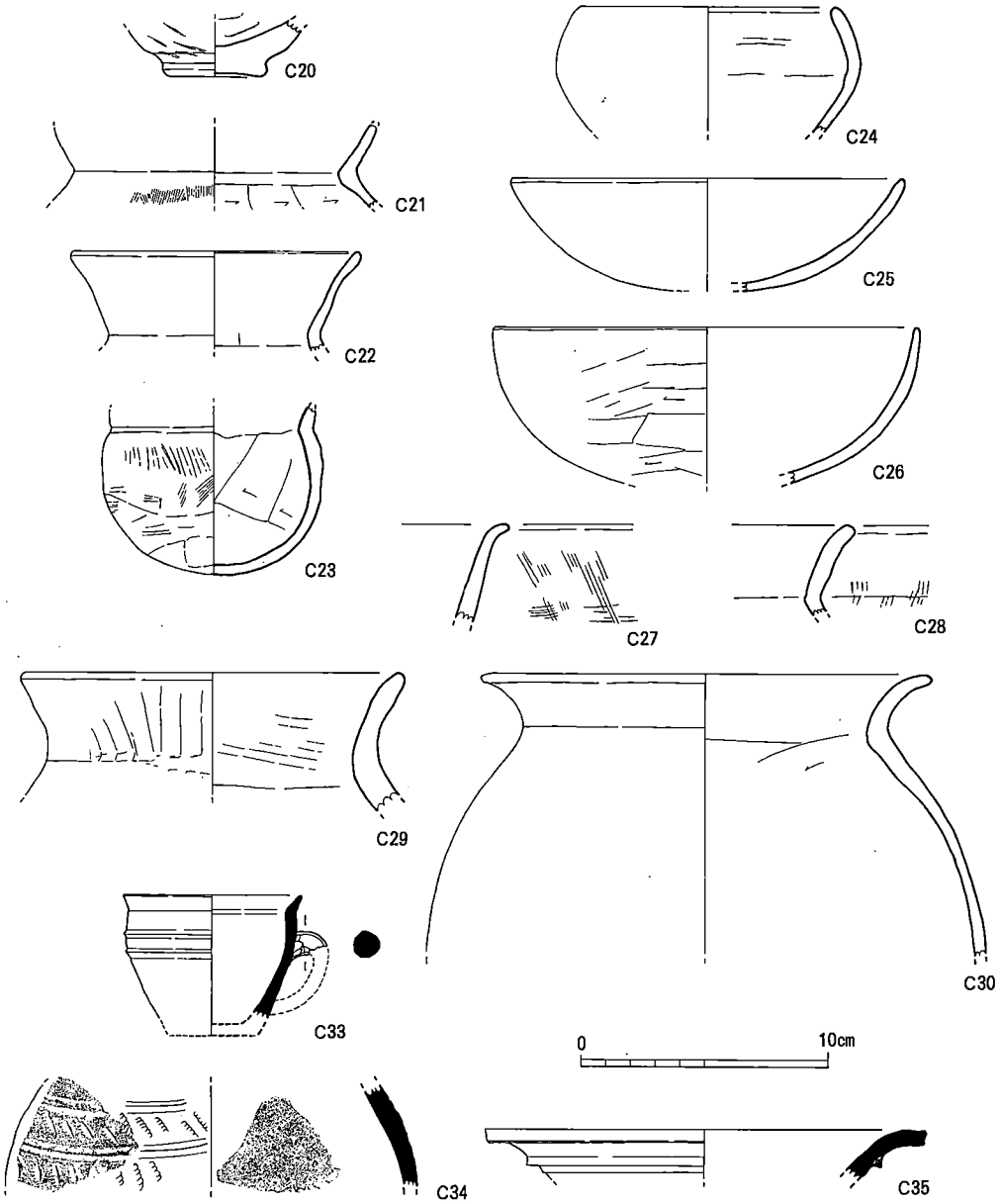
b．土師器（第205・206図C20～C32）

1は甕の底部か。少し上げ底になる。復原底径3.6cm。方形溝の南側から出土した。21の甕は庄内式か布留式であろう。外面に煤が付着する。12号住居跡出土。22の壷は復原口径11.8cm。ＳＤ4出土。23の坩はややつくりの粗い土器である。検出面採集。24～26は椀とすべきか。復原口径は24が10.4cm、25が16cm、26は17.2cm。24・25はＳＫ50、26はＳＫ52出土。27は高坏の破片であろう。ＳＫ50出土。28～32は甕で、28は19号住居跡出土。29は復原口径15.6cm。ピット出土。30は復原口径18.2cm。トレンチ出土。31・32は外面が刷毛目、内面がケズリである。31は口径15.8cm、胴部径21.6cm。29と同じピットの出土。32は口頸部が内湾気味である。復原口径16.8cm、胴部径25.2cm。ＳＫ49出土。以上は20・21が古墳時代初頭で、ほかは5世紀前半代とみてよいであろう。とくに後者は後述の初期須恵器と関連する時期と思われる。

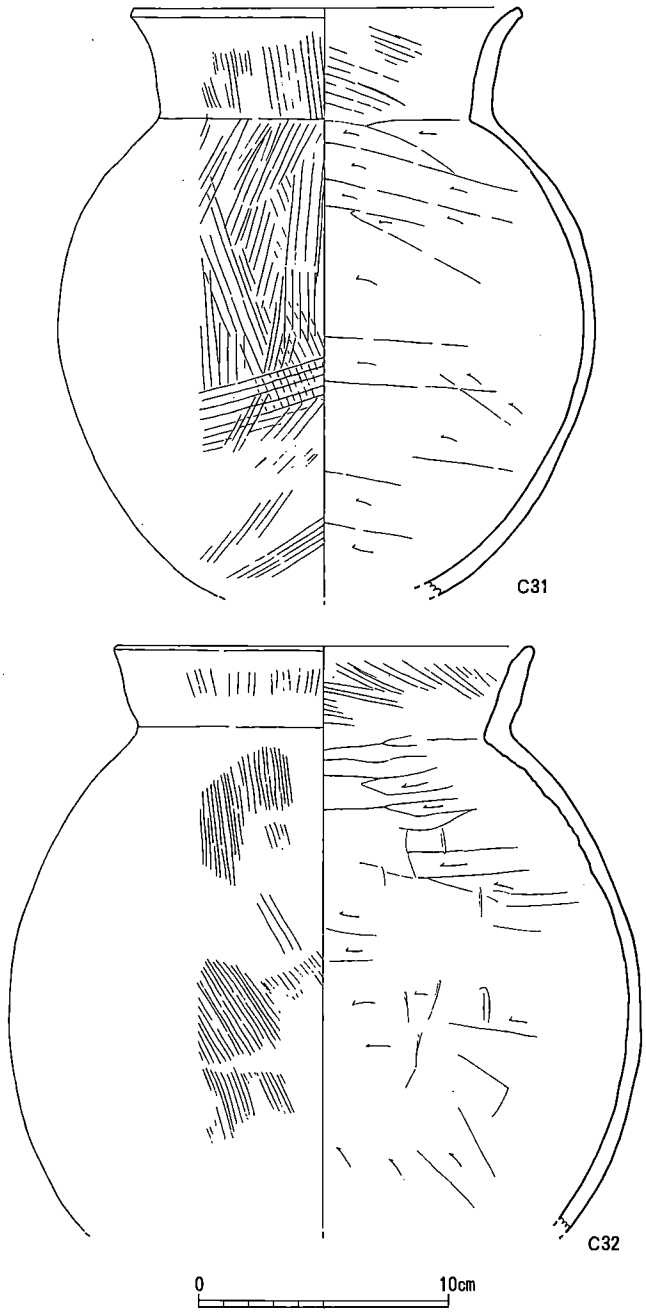
c．初期須恵器（第205図C33～C35）

33は把手の付くジョッキ形土器で、把手と底部を欠く約3/5ほどの破片である。口縁は強い角度で屈折し、端部は鋭い。胴部に２条の三角突帯が巡らされる。内面はナデを施し、外面下半にはナデの際の指紋が残る。胎土はわずかに紫色がかっている。内面は灰を被っている。口径7.2cm。ＳＫ50出土。

34は壷の肩部付近の破片と思われる。沈線を接近して2条施すことによりその中間を突帯状に表現し、その間に木の小口による刺突文を施している。内面は横ナデである。外面は灰を被る。復原胴部最大径16.6cm。



第205図　才田 古式土師器・初期須恵器実測図1（1/3）



第206図　才田 古式土師器実測図２（1/3）

35は当初は高坏の脚裾の部分と考えたが、内面が灰を被っているので壷もしくは甕の口縁部片として図示する。突帯はきわめてシャープである。復原口径18cm。21号住居跡の南側出土。

3 その他

石器（図版52、第207図C36～C40）

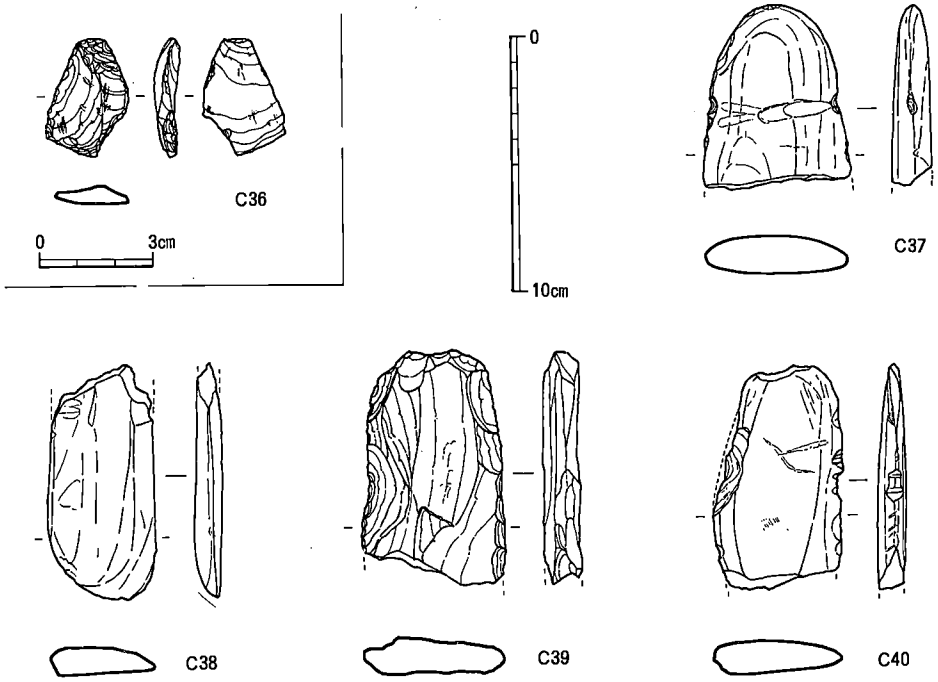
36は黒曜石の使用剥片で、両縁辺に小さな剥離があるが、右下の剥離は急角度でなされている。ナイフ形石器の可能性もある。白い不純物を含む。全長30.7mm、厚さ6mm、重さ3g。

37～40は石斧かと思われる資料であるが確実に石斧であるかどうかわからない。用途は不明である。37は雲母片岩で表裏と周縁ともによく擦れている。両側には抉りを入れ、その間は紐掛けした痕跡が溝状となっている。現存長69mm、幅58mm、厚さ15mm。包含層出土。

38も雲母片岩で片面は扁平、もう片面はよく擦れている。現存長93mm、幅43mm、厚さ11mm。検出面採集。

39は緑色片岩で打製である。現存長92mm、幅57mm、厚さ14mm。ピット出土。

40は雲母片岩で表裏ともによく擦れている。側縁には削ったような痕跡がある。砥石的な用途としていたかもしれない。現存長84mm、幅51mm、厚さ12mm。包含層出土。



第207図　才田 弥生時代以前石器実測図（1/2・1/3）

D. 放射性炭素年代測定結果

才田遺跡から出土した木炭4点について、昭和63年(1988)、社団法人日本アイソトープ協会に^{14}C年代測定を依頼した。その結果は下記のとおりであった。

当方のコード	依頼者のコード	C-14年代
N-5376	KOF 7-1 NO.13	890±75yB.P.(860±70yB.P.)
N-5377	KOF 7-2 NO.14	900±75yB.P.(870±70yB.P.)
N-5378	KOF 7-3 NO.15	840±75yB.P.(820±70yB.P.)
N-5379	KOF 7-4 NO.16	920±75yB.P.(900±70yB.P.)

年代は^{14}Cの半減期5730年（カッコ内はLibbyの値5568年）にもとづいて計算され、西暦1950年よりさかのぼる年数（years B.P.）として示されています。付記された年代誤差は、放射線計数の統計誤差と、計数管のガス封入圧力および温度の読取の誤差から計算されたもので、^{14}C年代がこの範囲に含まれる確率は約70%です。この範囲を2倍に拡げすと確率は約95%となります。なお^{14}C年代は必ずしも真の年代とひとしくない事に御注意下さい。(以下、略)

上記の「依頼者のコード」の内容（遺構名）と、西暦1950年から遡っての暦年代は次のとおりである。これによると、11世紀前半から12世紀初頭頃を中心とした年代を示していることになり、われわれが遺跡の主たる年代を12世紀代と考えていることよりやや古い年代が示されていることになる。

[依頼者のコード]		[遺構名]	[暦年代]
KOF 7-1 NO.13	→	1号溝西端下層	1060±75(1090±70)
KOF 7-2 NO.14	→	50号土坑	1050±75(1080±70)
KOF 7-3 NO.15	→	2号墓主体部埋土中	1110±75(1130±70)
KOF 7-4 NO.16	→	5号掘立柱建物P3′	1030±75(1050±70)

Ⅳ　東才田遺跡の調査

才田遺跡から東へ600mの所に位置し、標高は21m前後である。検出した遺構は溝1条、ピットであった。遺構は礫混じりの砂層に掘り込まれていた。

調査区の中央部では遺構がなく、南端、北端でわずかにピットを検出したにすぎない。

遺物は土師器、黒色土器、瓦器、須恵質土器、陶器、磁器、すり石、砥石、土錘鉄器、古式土師器などが出土した。

A. 遺構と遺物

1　溝

1号溝（図版54、第209図）

調査区の北側にあり、東西方向へ伸び、幅110～320cm、深さ50～60cmを測る。幅は西側へいくにつれて狭くなっている。溝はわずかに蛇行気味で、断面は逆台形を呈していた。

この溝は才田遺跡で検出した12・21号溝のいずれかにつながる可能性もある。

出土遺物（図版54、第208図13～20）

土師器(13・18)　古式土師器の高坏の脚部片である。柱状部はエンタシス状を呈する。外面はナデを施す。18はカマドの鍔の部分か。

須恵器(14・15)　坏身の高台部である。14は高台の立ち上がりが低く、15は高くて「ハ」の字状に開く。

瓦器(16・17)　底部片である。

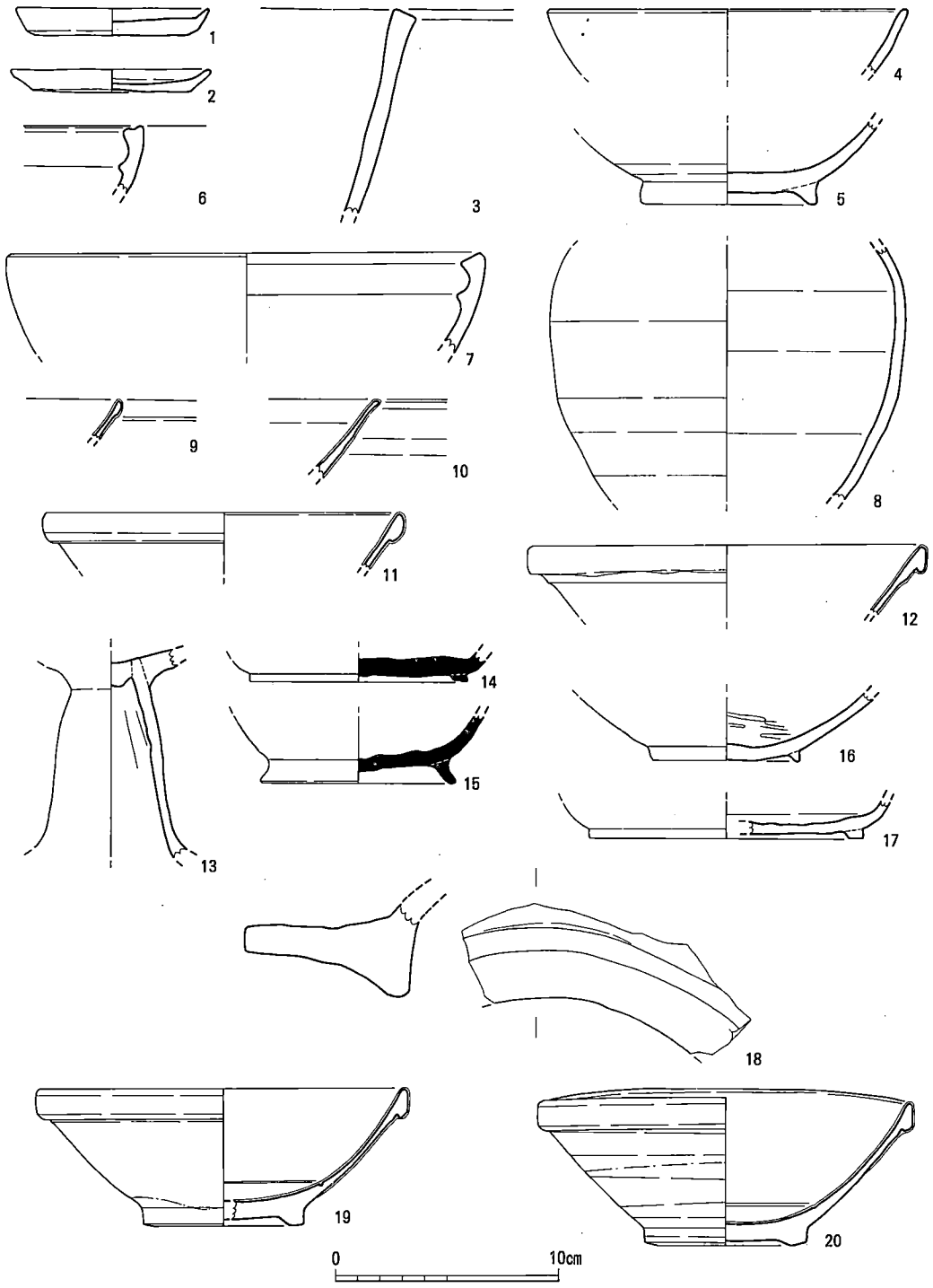
磁器(19・20)　白磁碗で、玉縁口縁を有し、Ⅳ-1・a類に分類できる。

2　ピットその他

〔ピット〕

出土遺物（図版54、第208図1～12）

土師器(1～3)　1は小皿で口径8.6cm、器高1.2cmを測り、底部外面は糸切り離しである。2も小皿で口径8.6cm、器高1.0cmを測り、底部外面は糸切り離しである。3は鍋の口縁部片。



第208図　東才田 1号溝・ピット出土遺物実測図(1／3)

第209図　東才田遺跡全体図(1／400)

瓦器(4・5)　4は椀の口縁部片で口径15.9cm。外面は回転ナデを施す。5は底部片。

陶器(6～8)　6・7は鉢。8は壷類の胴部片である。

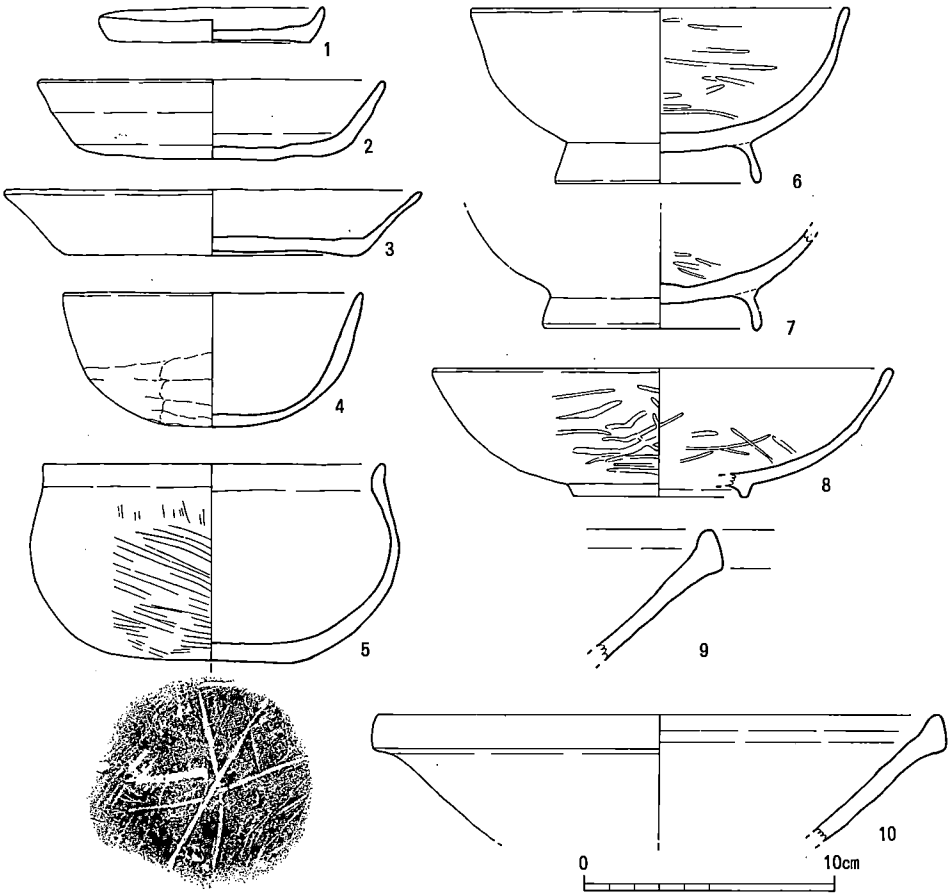
磁器(9～12)　いずれも白磁碗で、9は小さな玉縁口縁を呈する。Ⅱ類。10は口縁部内面に沈線が巡る。11・12は玉縁口縁で11がⅣ類、12がⅡ類に分類できる。

以上は、1がP36、2がP72、3がP60、4がP58、5がP39、6がP103、7がP20、8がP34、9・11がP63、10・12がP2から出土した。

〔検出時・トレンチ〕

出土遺物（図版54、第210図1～10）

土師器(1～5)　1は小皿で口径8.6cm、器高1.35cmを測り、底部外面は糸切り離しである。2・3は坏で口径は13.7cmと16.6cm、器高は3.2cmと2.6cmを測る。2の底部外面は糸切り離し後板状圧



第210図　東才田 遺構検出時、トレンチ出土遺物実測図(1／3)

痕がある。4は椀で底部外面は手持ちヘラケズリを施す。5世紀前半代であろう。5の口縁部は短く直に立ち上がる。外面は刷毛目、内面はヘラケズリである。

黒色土器(6・7)　高台付椀である。6は口径が15cm、器高7cmを測る。外面は回転ナデ、内面はミガキを施す。7は底部片であるが調整は6と同様である。

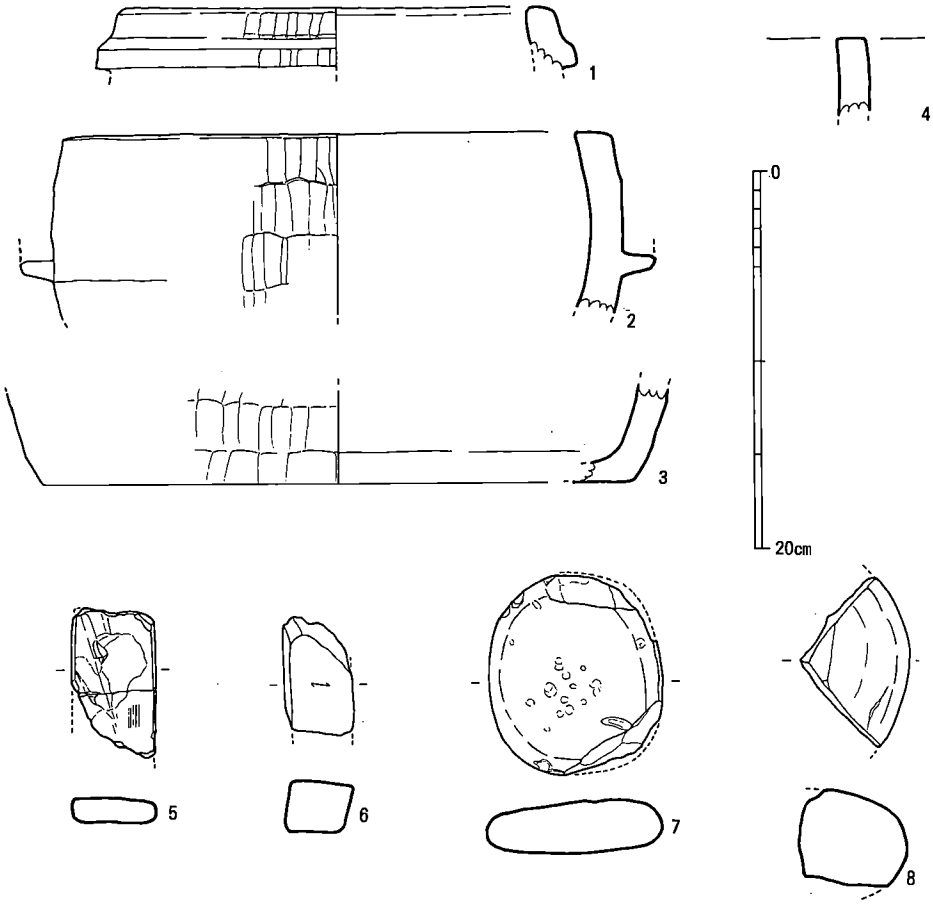
瓦器(8)　椀である。内外面はミガキを施す。

須恵質土器(9・10)　東播系の鉢の口縁部片で、10は口径22.6cmを測る。

以上は、2・3がトレンチで、他は検出時に出土した。

a．石鍋（第211図1～4）

1は口縁部片で、鍔は口縁直下にある。口径21cm。内外面は縦方向のケズリを施し、鍔の上面と口縁上面は研磨を行っている。P103出土。2は口径25cm。外面は縦方向のケズリ、内面は



第211図　東才田 石鍋・石器実測図(1／4)

研磨痕がある。P75とP100から出土し接合した。3は底部片で外面には煤が付着する。外面は縦方向のケズリ、内面は研磨を行う。出土地不明。4は検出時に出土した口縁部片である。

b．土錘（図版54、第212図1～4）

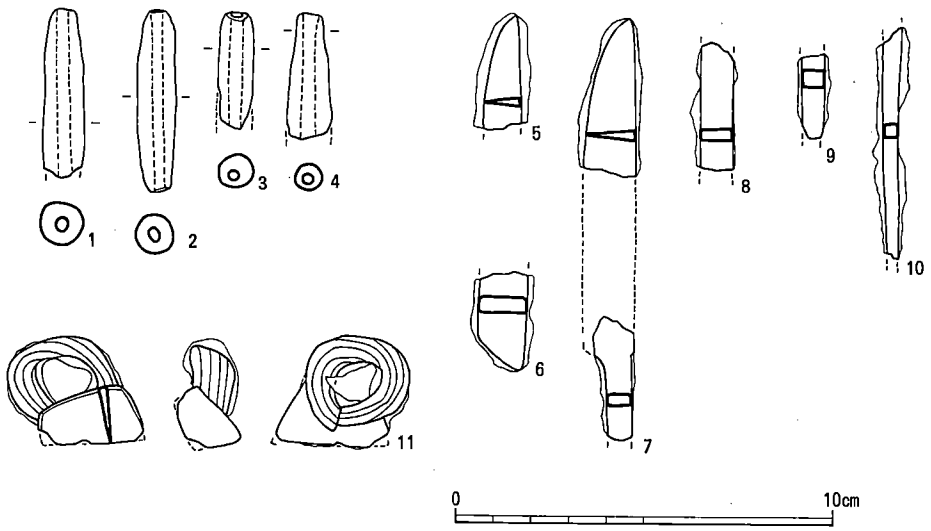
ともに管状をなす。1は現存長44mm、径11mm、重さ5.08gを測り、乳白色を呈する。P20出土。2は現存長48mm、径11mm、重さ2.24gを測り、やはり乳白色を呈する。P93出土。3は現存長31mm、径10mm、重さ2.19gを測り、黒色を呈する。トレンチ出土。4は現存長33mm、径11mm、重さ2.4gを測り、明赤褐色を呈する。P20出土。

c．石器（図版54、第211図5～8）

5は片岩の砥石で、現存長78mm、幅45mm、厚さ13.6mm。トレンチ出土。6は流紋岩の砥石で、現存長61mm、幅36mm、厚さ26mmを測る。砥面は四面である。P23出土。7は安山岩のすり石で、両面ともに擦れていて、一面には敲打による小さな窪みが多数ある。現存長104mm、幅93mm、厚さ30mmを測る。P8出土。8は安山岩のすり石の破片で器表は滑らかである。現存長88mm。検出時出土。

d．鉄器（図版54、第212図5～11）

5は刀子の切先部、6は刀子の茎らしい。ともにP13出土。7も刀子の切先部と茎部である。P96出土。8は刀子の茎か。9・10は鏃かと思われる。8～10はP124出土。11は1号溝上層から出土したが、ごく新しいもので桑摘み用の爪らしい。



第212図　東才田 土製品・鉄器実測図(1／2)

V 総 括

1 中世期出土遺物の時期と様相について

土師器小皿・坏については、遺構ごとに外面底部の調整と法量の計測の変化を見ていった。土師器の調整は外面底部の調整をヘラ切りと糸切りに、法量は口径と器高を基本として分類した。須恵質土器、国産陶器、中国産陶磁器などは、遺物の様相と土師器などの共伴時期について分類した。年代観は大宰府における編年を参考にした(註1～3)。

土師器の外面調整から見ると、ヘラ切りが出土した遺構は13号土坑、4･9･10･12号溝、方形溝である。その他の遺構から出土した土師器小皿･坏はすべて糸切り離しを行っている。

XⅡ期～XⅣ期（11世紀後半～12世紀中頃）に属するのは13号土坑、4・9・10・12号溝、方形溝である。

13号土坑の小皿の法量は、ヘラ切りが口径平均9.3cm(8.5～9.6cm)、器高平均1.15cm(1.0～1.3cm)を測る。糸切りは口径平均9.4cm(9.2～9.8cm)、器高平均1.3cm(0.9～1.45cm)を測る。糸切りは少量出土している。

4号溝の小皿の法量は、ヘラ切りが口径平均9.1cm(8.3～10cm)、器高平均1cm(0.7～1.2cm)を測る。糸切りは口径平均8.6cm(8～9.6cm)、器高平均1cm(0.8～1.2cm)を測る。糸切りは小皿の半数程度、坏はほとんどであるが、ヘラ切りが少量出土している。

9号溝は坏だけがヘラ切りである。坏の法量は平均口径15.8cmを測る。小皿はすべて糸切りである。糸切りの小皿の法量は口径平均8.2cm(7.9～8.8cm)、器高平均1cm(0.8～1.2cm)を測る。

10号溝はヘラ切りが小皿1個体分のみで口径7.8cm、器高1.1cmを測る。11号溝は小皿が糸切りであるが、坏の半数がヘラ切りである。口径13.2cm、器高3.3cmを測る。糸切りの小皿は口径平均8.3cm(7.8～8.9cm)を測る。

12号溝は小皿18個体の中で1個体がヘラ切りである。口径8.4cm、器高1cmを測る。小皿の糸切りの法量は口径平均8.6cm(8.2～9.1cm)、器高平均1.1cm(0.85～1.4cm)を測る。

方形溝における小皿の法量は、ヘラ切りが口径平均9.3cm(8.8～9.8cm)、器高平均1cm(0.8～1.4cm)を測る。坏の法量はヘラ切りが口径平均16cm(15～16.9cm)、器高平均3.5cm(3.3～3.8cm)を測る。糸切りの小皿の法量は口径平均8.8cm(7.8～9.3cm)、器高平均1cm(0.8～1.3cm)を測る。ヘラ切りと糸切りの土器の出土地点には偏りが見られ、ヘラ切りは南側と西側に集中し、北西隅から出土したものはすべて糸切りであった。溝内には新しい遺構が掘り込まれてい

た可能性がある。

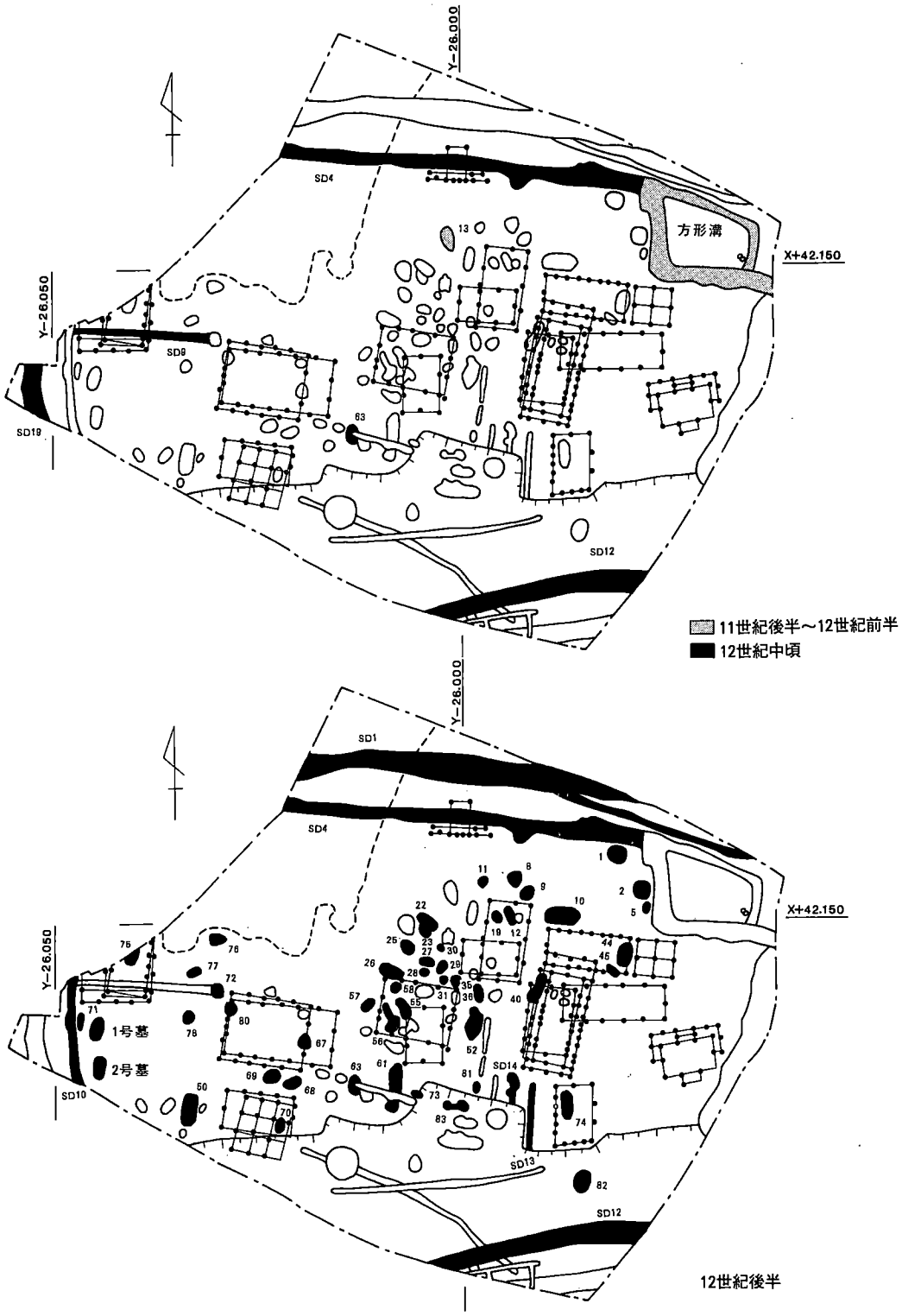
これらの遺構の時期は、ヘラ切りと糸切りが混在するためにそれぞれの出土量の割合で決定する。13号土坑は山本編年では、ヘラ切りと糸切りが混在するがヘラ切りのほうが多く、ＸⅢ期の12世紀前半に比定できる。4号溝は糸切りが多く混在することからＸⅣ期の12世紀中頃に比定できる。9号溝は小皿が糸切りで、坏はヘラ切りを施すことからＸⅣ期の12世紀中頃に比定できる。10号溝は時期決定が不可能である。12号溝はＸⅣ期で12世紀中頃に比定できる。19号溝は小皿1点がヘラ切りである。口径9.6cm、器高1.4cmを測り、ＸⅣ期の12世紀中頃に比定できる。方形溝出土のヘラ切り小皿は、糸切りよりも口径･器高平均は大きいことから、異なる時期のものであることが窺える。坏の時期は、外面体部の中位屈曲が遺存するものがあり、ＸⅡ期～ＸⅢ期の11世紀後半から12世紀前半に比定できる。この遺構に共伴した他の遺物は、瓦器、陶器、白磁碗Ⅱ・Ⅳ類などが出土した。

その他の遺構から出土した土師器小皿･坏はすべて糸切り離しを施すもので、山本編年のＸＶ期の12世紀後半代以降に比定される。

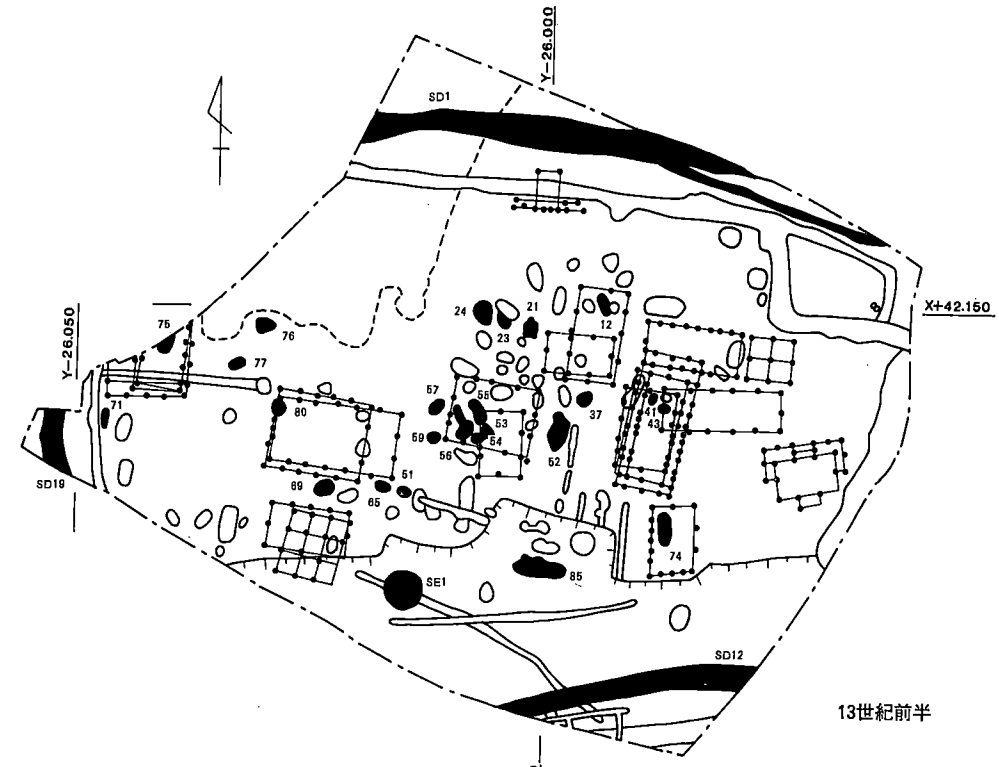
ＸＶ期（12世紀後半代）の遺構は1・2・5・8・9・10・11・12・19・22・23・25・26・27・28・29・30・31・35・36・40・44・45・50・52・55・56・57・58・60・61・62・63・67・68・69・70・71・72・73・74・75・76・77・78・80・81・82・83号土坑、1・4・10・12・13・14・19号溝、1・2号木棺墓、土師器集積遺構が該当する。当遺跡の最盛期である。土師器小皿の口径は9.1cm、器高1cm前後を測るものが多い。さらに、23号土坑では、小皿の口径が8.1cm、器高1.1cm、坏の口径15.5cm、器高2.8cmを測り、小皿が当該期に比定しているよりも小ぶりである。これは厳密に山本編年と細部にわたって同一という訳でなく、地域的な特質として捉えることができるかどうか今後の課題である。共伴遺物は白磁碗Ⅳ･Ⅴ・Ⅷ類・ⅢⅢ類と新たに同安窯系青磁碗Ⅰ類･ⅢⅠ類と龍泉窯系青磁碗Ⅰ－1～4類･ⅢⅠ類が出土している。

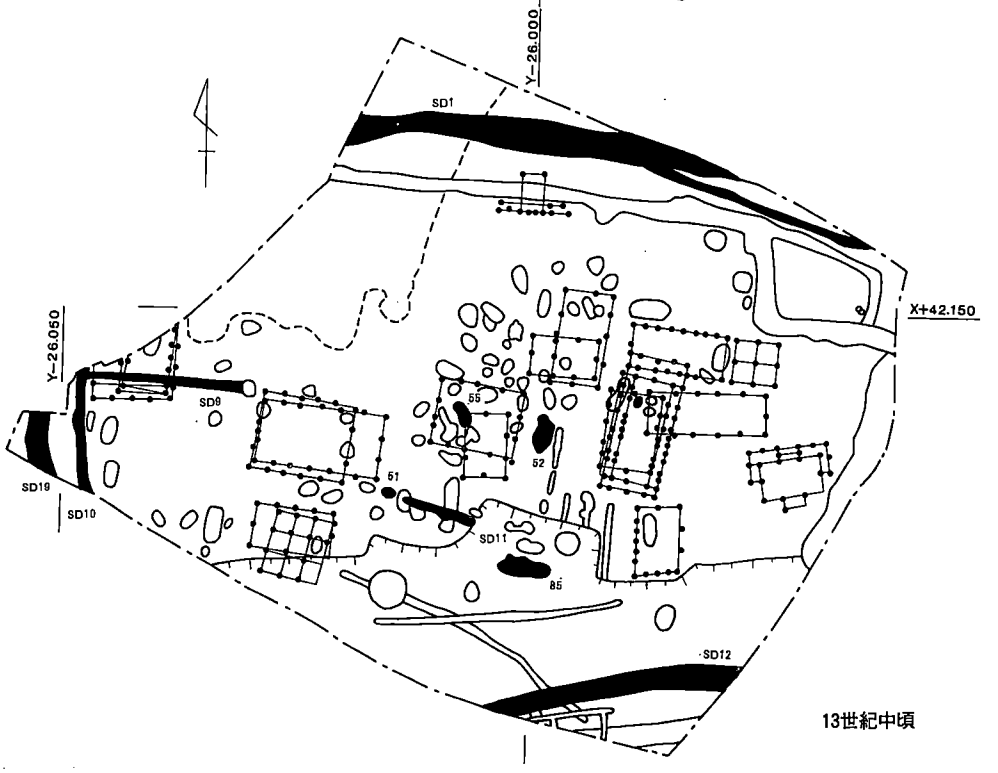
ＸⅥ期（13世紀前半）の遺構は、ＸＶ期から継続している場合が見られる。12・21・23・24・28・29・30・37・41・43・51・52・53・54・55・56・57・59・60・65・69・71・74・75・76・77・80・81・85号土坑と1号井戸、1・12・13・19号溝が該当する。当該期の法量は37号土坑出土の土師器小皿が口径平均8.7cm、器高口径0.9cmを測る。前段階のものに加えて、須恵質土器の東播系のすり鉢、常滑焼・珠洲焼の甕、龍泉窯系青磁碗Ⅰ－5類が出現する。東播系の須恵質土器と常滑・珠洲焼などの国産陶器は、共伴した土師器類から12世紀後半段階に流入していた可能性がある。

ＸⅦ期以降（13世紀中頃以降）は19・51・52・55・63・77・85号土坑、1・9・10・11・12・19号溝が該当する。51号土坑の土師器小皿の口径は8.5cm前後、器高1.0cm前後を測り、小型化する。1号溝の土師器坏の口径が13.4cm前後、器高2.8cmを測る。新たに白磁碗口禿が出現する。



第213図　中世期遺構配置図①





第214図　中世期遺構配置図②

以上のように、才田遺跡の中世期の遺構の上限は11世紀後半代に比定でき、ＸⅡ期段階には磁器が伴うかどうか不明であるが、12世紀前半から中頃には白磁Ⅱ類が少量、Ⅳ・Ⅴ類が伴う。ＸＶ期の12世紀後半代には、龍泉窯系青磁・同安窯系青磁が出現し、白磁の出土量が減少している。

また、50号土坑から出土した黄釉褐彩四耳壺、黄釉四耳壺、黄釉鉢、青白磁碗、青磁皿などの一括出土陶磁器は山本信夫氏の時期決定によると、12世紀後半の傾向を示す例で、Ｃ期から継続する黄釉褐彩四耳壺とＤ期の黄釉四耳壺、黄釉鉢を含む例としてあげられた。共伴した土師器皿はＸＶ期の12世紀後半を示す資料である。ＸⅥ期の13世紀前半代には、磁器の他に国産陶器の常滑焼や珠洲焼が出現している。大宰府条坊跡19次調査では、12世紀後半から13世紀前半頃に比定される常滑焼の大甕が出土している。才田遺跡では大宰府19次調査に近い時期が考えられ、他の遺跡よりも早い段階で流入された可能性が指摘できる。さらに、50号土坑の一括資料からは、才田遺跡が朝倉地域における中世前期の拠点的な集落の一つであったことが窺える。

註

1　山本信夫 1988「大宰府における古代末から中世の土器・陶磁器－10～12世紀の資料（1）本文編－」「中近世時の基礎研究Ⅳ」日本中世土器研究会

2　山本信夫 1990「統計上の土器－歴史時代土師器の編年によせて－」『九州上代文化論集』乙益重隆先生古稀記念論集

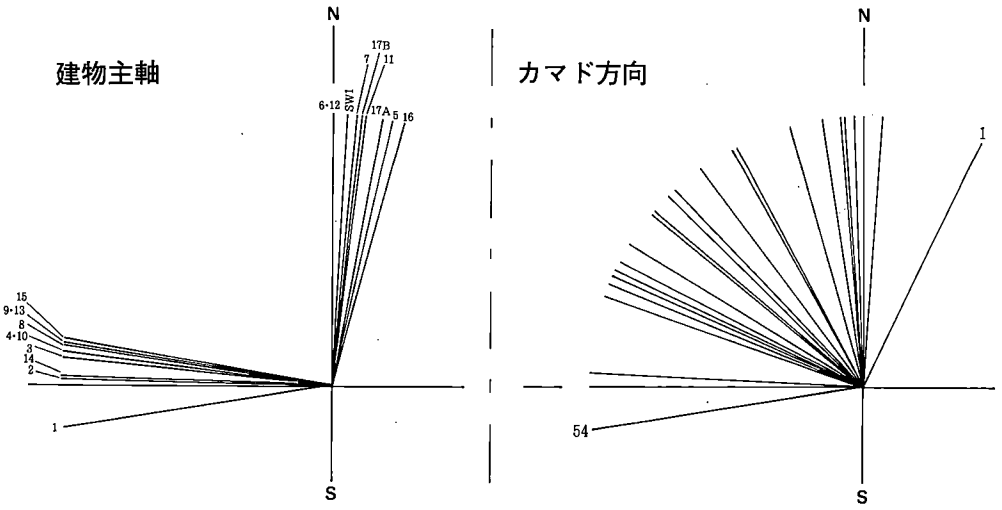
3　山本信夫 1983「大宰府条坊跡Ⅱ－付編　・土器の分類」太宰府市の文化財第７集

Photo.15　現地説明会④

2　中世期の才田遺跡

11世紀から12世紀を中心とした中世胎動期の才田遺跡では掘立柱建物跡20棟、土坑83基、井戸1基、木棺墓2基、溝16条（主なもの6条）、ピット群が検出された。以下、これらについて簡略ながらまとめを行う。

［建物］　掘立柱建物については無数のピット群の中にまだいくつか建物としてまとまるものがあると思われるが、これ以上は把握できなかった。ＳＢ4・5・17については位置を少しずらしてのＡ・Ｂ２棟の建て替えとみなされる。20棟は主軸方位がほぼ東西と南北の二方向に収斂される。東西棟はＳＢ1からＳＢ15までが19度までの間に納まり、ＳＢ1を除けば8.5度の間に入る。南北棟はＳＢ6・12からＳＢ16までが15度の間に納まる（第215図）。これは東西棟と南北棟の建物がいくつかずつ組み合わさって併存していたとみてよいだろう。そのときＳＢ4のＡ・Ｂ、ＳＢ5のＡ・ＢとＳＢ11、ＳＢ4Ａ・ＢとＳＢ5Ａ・Ｂ、ＳＢ7とＳＢ8、ＳＢ9とＳＢ10、ＳＢ12とＳＢ13、ＳＢ15とＳＢ16、ＳＢ14とＳＢ17Ａ・Ｂ、ＳＢ17のＡ・Ｂはそれぞれが重複するので各々の同時併存はありえない。これらを整理すれば、少なくとも五時期の変遷があることになろう。どれとどれが同時併存であるかは主軸方位のみでは決めがたいところもあるが、例えば、四面に庇の付くＳＢ5と根固め石を据えていたＳＢ9を中心とすると、ＳＢ5・8・9・13・16・17あたりは方向からいっても十分に併存しうるであろう。次はＳＢ3・4・7・10・11・15、そしてＳＢ1・2・6・12・14とＳＷ1の組み合わせも可能である。この想定が正しいかどうかは検証できないが、ともかく建て替えを含めて最低でも五期の変遷はあったことになる。



第215図　掘立柱建物の主軸、カマド方向グラフ

この遺跡が11～13世紀のおよそ150～200年ほど存続したとすれば、単純に言っても30～40年での建て替えと変遷が考えうることになろう。

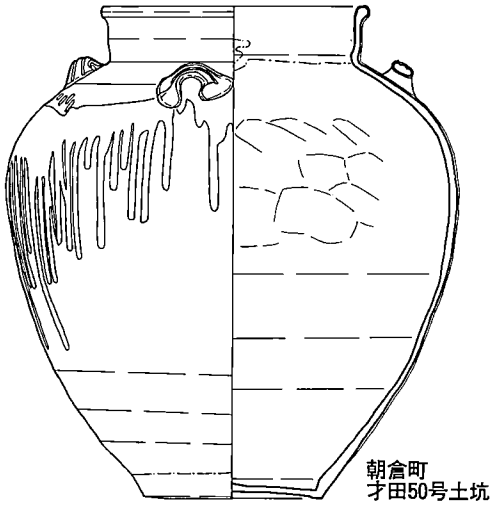
［溝］　ここで注意されるのが溝の存在である。ＳＤ1・4は調査区北端をほぼ平行して東西方向に、ＳＤ10・19は調査区の西端をこれも平行して南北方向に、ＳＤ12・21は南端部をやはり平行して東西方向に巡っている。これらは本来が掘立柱建物群を囲繞して巡る一連の長方形区画の溝ではなかったか。溝の土層からは土塁の存在は窺い知れなかったが、各々の二条の溝の間には土塁があったとしてもおかしくないだろう。

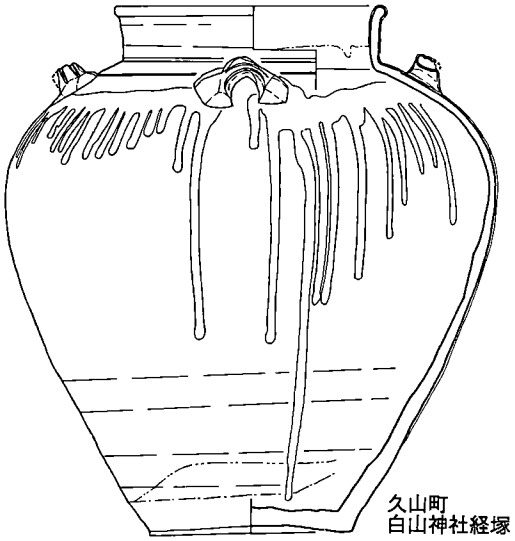
溝や土坑からの出土遺物を見れば、ここの建物群が一般農民層のものではなくかなり富裕な階層のものであったことは明らかである。溝に囲繞された広大な屋敷地を構えうる階層である。調査区の東北端にあった方形溝は４号溝と合流していたが、この方形溝の内部には明確な建物は見られなかったけれども“屋敷地”内での位置を考えると、この区画はある特別の意味を持っていたのかもしれない。ともかくも、広大な屋敷地を囲繞した溝と建物群が検出されたものと考えたい。

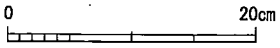
［土坑］　土坑群は大半が塵芥捨て場として機能したものだろう。建物群に伴っての土坑と考えうる。ＳＫ1からは北宋の貨幣5枚が出土した。最も古い初鋳年は「祥符元寶」の1008年であり、ＳＫ1を含めてこの遺跡の中世期とした時期の上限が知られる。最新銭は元豊通寶の1078年である。

ＳＫ50からは陶器の黄釉褐彩四耳壷・黄釉四耳壷・鉄釉鉢・黄釉鉄彩盤、青白磁碗、青磁皿などが出土し、完形品を含んでいる。その中で黄釉鉄彩四耳壷は、これときわめてよく似た製品が粕屋郡久山町白山神社経塚から出土している（第216図）。白山神社例の方が肩部の張り具合がやや強く、そのため底部は大きいけれども全体として引き締まった形状を呈するのに対し、才田例は胴下半部がやや膨らみを持っていて、安定感はあるけれども幾分か鈍重な感じを受ける。底部近くの器胎の厚さは才田例の方が薄い。しかしこれらの点を除けば、鉄彩の掛かり方といい非常によく似ており、同じ工人の作品といってもよいくらいである。白山神社経塚例は経筒の外容器であり、本体の鋳銅製積上式経筒には刻銘があって、その中には「天仁二年」の年号も含まれている(註1)。天仁二年は西暦1109年である。この壷が舶載されてのち使用された年代の一端を知ることができ、同巧品の出土した才田ＳＫ50もほぼ同じ頃とみてよいだろう。なお、この四耳壷については北宋後半から南宋前半の12世紀のものとし、中国福建省泉州市磁灶童子山窯の製品と考えられている(註2)。

［井戸］　井戸は調査区内で1基しか検出されなかった。建物には最低でも五期にわたる変遷があったけれども、その存続期間中に井戸は1基だけだったのだろうか。確かにこの井戸の湧水量は多く、調査中でも涸れることはなかったから、当時においても数十年間は維持できたと思われる。なお、井戸が1基しかないこと自体がここが全体として屋敷地内部として完結して







第216図　褐釉四耳壺実測図（1／6）

いたことを証しているのかもしれない。

［墓］　調査区内で検出されたのは2基のみであった。これは2基ともに木棺墓であり、棺外の裏込めにも棺上にも河原石を用いていた。結果的に石郭木棺墓の如くであったが、河原石自体は近くの川にふんだんにあるといっても、わざわざ運んできた石で埋めたというのは何か意味を持つのかもしれない。2基の占地を見ると、2号墓南側の調査区外にもし別の墓地群が存したとしても、この2基のみは他から独立して営まれている可能性がある。これの被葬者はいかなる人物であったか。それを特定することはもちろん不可能だが、この屋敷の当主であったかもしれない。

［特殊遺物］　ここで、特殊な遺物について触れておこう。ＳＥ1出土の木製人形とＳＤ12出土の土製人形である。ＳＥ1の木製人形については遺憾ながら整理途上で所在がわからなくなり現在のところ行方不明となっているが、一側面を削り出すことで目の窪み・鼻・口を表現し、背後も抉りを入れることで頭部を表している。目は描き表わされてはいない。大宰府史跡87・90次調査のＳＤ2340からはやはり切り込みで口や鼻を表現したうえに眉と目を墨書した人形が出土しているが、これは8世紀中頃の所産である(註3)。ここの井戸自体が廃絶する際に粘土を用いて密閉した痕跡が見られたので、この人形も密閉直前に穢れを払う儀式ののちに投棄されたものかもしれない。

またＳＤ12の土製人形は体の左側と両手、両足、頭部を欠失するもので、体側や背面には刺突痕がある。これは、まわしをした男の裸形の人形をつくり、乾く前に串刺しにして、焼成後に頭・両手・両足・陽物をもぎ取ったものであるらしい。怨念のこもった行為のように思われる。制作者と破壊者が同一人物であるか否か、それが男性であったか女性であったか、また破壊する行為の原因が何であったか、などは不明とするしかないが、きわめて呪術的な所作の窺える資料である。想像をたくましくすれば、陽物をもぎ取っている所作など、女性が男性を呪っての行為のように思える。それはさておいても、中世期のまじないの世界とおどろおどろしい人間関係が想像される。人間の想いが高じての「わら人形」的な呪的行為は今も昔も変わらないのであろう。

［時期］　ところで、この遺跡の時期についていま一度検討してみよう。ＳＫ1の渡来銭により11世紀初頭を上限とするであろうことと、ＳＫ50の年代の一端が12世紀初頭にあることはすでに述べた。C-14年代測定ではＳＢ5・ＳＫ50・ＳＤ1・2号木棺墓について11世紀前半から12世紀初頭を前後する時期が示された。

これまでの土師器を中心とした編年の成果では古くは11世紀後半から、新しくは13世紀中頃までの時期の土器があり、なかでも12世紀中頃～後半を中心とするように把握されているが、上記の年代をを勘案すると、もう少し古い頃(12世紀前半～中頃)にこの遺跡の最盛期があったのではないかと考えている。

［遺跡の性格］ 最後に、この遺跡の性格について触れておこう。広大な屋敷地に住み、多量の舶載陶磁器や国内の常滑、珠洲といった陶器を使っていた人たちは、既述のように一般農民層とは思われない。とくに舶載の陶磁器は博多や大宰府で出土するものと比べると若干の見劣りは否めないが、それでも遜色のない逸品と称してよいものがある。これらは相当の財力がないと購入できなかったであろうことは容易に想像がつく。おそらく博多経由で搬入されたであろうが、その購入する財力の基礎は何であったか。

11世紀末から12世紀といえば政治的には院政が始まり、武士の棟梁として桓武平氏と清和源氏が勢力を持ち始めた中で、やがて平氏が実権を掌握し、のちには源氏が平氏を倒して源頼朝が鎌倉に幕府を開いて本格的な武士政権が誕生していく、という時期にあたる。社会経済史的には律令制が崩壊して荘園が乱立していたなかで寄進地系荘園が増加し、各地にあっては荘園と公領とが併存するという状況にあった。在地領主たちが開発した荘園は中央の皇族・貴族や大寺院に寄進され、自らは預所や荘官として現地支配を行った。一方の国司たちからも荘園の寄進があったという(註4)。後述の黒島荘・長淵荘が寄進された荘園であったか公領であったかは定かでないが、いずれにしてもこの荘園あるいは公領の管理者たる在地土豪層はその諸権益を守るために武装化していたものと思われる。溝に囲繞されていたであろう才田遺跡の建物群のあり方はそのことを端的に示しているように思われる。

朝倉町周辺には平安時代後半に黒島荘があり、同末頃にはそれを含めて長淵荘が存したとされている(註5)。才田遺跡の西南500mの、桂川と新立川の合流地点南側には大字入地地内で「黒島」という小字があり、大字入地に接して西南方には筑後川に面する大字「長淵」がある。長淵荘はかなり広い面積を有していたと推定されており、そこを管理する在地領主はかなりの財力を持っていたであろう。これらをふまえ、才田遺跡はこのあたり一帯にあった長淵荘の在地領主、すなわち荘官層の住む所であったと考えたい。

長淵荘はそのご正応元年(1288)、建武3年(1336)にも文献に登場し、南北朝の動乱のなかで

Photo.16　いつかここは高速に

崩壊するのではないか、とされている(註5)が、才田遺跡で出土した遺物には14世紀にまで下るものはなく、13世紀中頃を下限とするようである。おそらくは鎌倉幕府の成立による地頭の配備が原因となって、それまでの在地領主が地頭に対抗しきれずに没落していったのではあるまいか。それがこの遺跡の廃絶の理由と考えられよう。

長淵荘が13世紀、14世紀まで文献に登場するということは、この荘園の管理者層はその後別の場所に居宅を構えたということになろう。才田遺跡の西北方750mほどの所にある狐塚南遺跡(註6)では13～16世紀の遺構が検出されており、また大字大庭字徳次から備蓄銭が13688枚以上も出土していることからも(註7)、狐塚南遺跡のある台地上およびその周辺が居宅跡の存する候補となろう。

註1　九州歴史資料館参事の宮小路賀宏氏から実測図の提供と刻銘の御教示を受けた。深謝いたします。

2　亀井明徳　1982「九州の中国陶磁 10」『西日本文化 183』　西日本文化協会

3　九州歴史資料館　1985『大宰府史跡　昭和59年度発掘調査概報』

4　石井進　1986　「荘園とは何か」　週刊朝日百科 日本の歴史2　通巻530号
〈中世Ⅰ-②　中世の村を歩く　寺院と荘園〉　朝日新聞社

5　倉住靖彦　1986「中世」　朝倉町史刊行委員会『朝倉町史』

6　福岡県教育委員会　1994『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告―28―』

7　鶴田多々穂・櫻木晋一　1993「福岡県朝倉町出土の備蓄銭」
『九州帝京短期大学紀要』第5号
福岡県教育委員会　1993『真奈板遺跡』　福岡県文化財調査報告書　第105集

Photo.17　菜の花を見る余裕もなく

3　奈良時代以前の才田遺跡

才田遺跡の立地する所は沖積地の中の微高地であるが、基盤は礫層であり、その上層には幾重にも砂層が堆積していた。弥生土器の出土は上流からの流下によるものと捉えられるが、5世紀代の土師器・初期須恵器は磨滅もなく、遺構は検出されていないけれども、この時期前後には当地がある程度安定した立地条件を備えていたと考えられる。また一方で、よく言われるような5世紀代の古墳築造という大土木工事を含めた諸開発とも連動しての集落立地の低地進出なのかもしれない。ともかく、5世紀代からこの才田遺跡に人の住んだ痕跡があるということになろう。その後は6世紀末～7世紀代までヒアタスがある。

最も古い土器として遺構検出時に6世紀末頃のものが採集されているので、この頃から集落が本格的に営まれていた可能性はあろう。

才田遺跡では55軒の竪穴住居跡を調査したが、2軒は実態が全く不明であるのと、重複が著しく削平された住居が多く、さらにはその下層から検出されてプランの全容を把握できていないものがあるので、実際に様相が窺い知れるのは少なかった。時期的には7世紀初頭から8世紀後半代までに及ぶとみられる。

出土土器として確実に住居に伴うものが少なく、明確な時期を押さえにくいが、7世紀初頭～前半のものとして1・3・18・33・44・52号住居跡などが考えられ、あとは数軒の7世紀代住居を経て、大半は8世紀代に属すると思われる。8世紀代でもその中頃を中心とするようである。

上記の時期であれば、当然ながら掘立柱建物が居宅・倉庫を問わず併存してよいのであるが、この時期に属する建物として把握できるものは見つけられなかった。11～20号住居跡の西側、つまりC・D列あたりの柱穴群の中に建物としてまとまるものがあるのかもしれないが、残念ながら捕捉できない。またこの時期には平面形が楕円形または不整形の土坑がよく伴うのであるが、それも見られない。

住居群の拡がりを見ると、集落としては削平されていた東側から南側へさらに展開していたものであろう。そうであるならば、掘立柱建物や土坑もそちらにあったのかもしれない。30・31号住居跡を中心とした一帯は重複が甚だしいが、一時期に併存しえた住居は7～8軒であったと思われる。

住居の規模は概して小さく、最小は55号住居跡の7.4㎡、最大は24号住居跡の23.2㎡であった。主柱穴の検出されたものが少なかったが、本来は四本柱であったとみてよい。カマドは古いものは屋内に造り付けられるが、8世紀代は突出型となる。その設置された壁面は北壁から西壁にかけてであった（第215図）。カマド対面に入口があったとして、広場的な空間を中心に住居の配置がなされていたとするならば、集落の中心は東側か南側ということになる。上記の東側から南側への集落の展開ということがここでも想定される。

出土遺物として特記すべきものに2号住居跡の墨書土器がある。土師器の坏の外底面に書かれており「乙嶋」と読めるがそれほど達筆でもない。人名であろうか。この土器は在地産のものと捉えてよいだろう。また38号住居跡の須恵器の蓋の外天井部にも墨書らしきものがある。硯そのものや転用硯は出土していないが識字層の存在を考えてよいのだろう。

次に焼塩土器がある。31号住居跡の106点を最高とし、全体では435点を数えた。鉢形の器形をなすものが圧倒的に多いけれども円筒形も少なからず目に付いた。玄界灘式の甕の破片は出土していない。

それから住居跡ではなくピットからの出土であるから時期比定にやや問題はあるが、奈良時代のものと考える頁岩製の石帯がある。これは官人あるいは富豪層の存在を彷彿させるものであるが、上述の墨書土器をも考え併せるならば、竪穴住居群のみの集落に伴う遺物ではないだろう。やはり、削平された部分あるいは調査区域外に掘立柱建物群などのしかるべき遺構群が存在していたのではあるまいか。

以上を要するに、奈良時代以前の才田遺跡は5世紀代から人々の定着するところとなり、7～8世紀には集落の営まれた様相が捉えられた。とくに8世紀中頃前後には墨書土器、焼塩土器、石帯があり、官人を含めた識字層の存在が考えられ、顕現している住居群のみでは一般農村集落としか見えないけれども、既に削平された部分等を考慮すればもっと大規模に展開していた集落であった可能性もある。

〔補記〕

遺物レイアウト時の確認ミスにより、遺物の出土遺構に誤りがあったので、次のように訂正する。

・第41図　(70頁)：SK47の６はSK74出土

・第89図（132頁）：１号溝の256は12号溝出土

表2　小皿・坏法量表　①

1号土坑

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1	8.4	0.9		○	○		368
2	8.5	0.6		○	○	○	371
3	9.6	1.3		○	○	○	370

2号土坑

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1	8.35	1		○	○	○	381
2	10.2	0.9		○	○	○	383

5号土坑

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1	8.3	1.2		○	○	○	435
2	9.6	0.8		○	○	○	433

8号土坑

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1	8.8	0.95		○	○	○	485
2	8.9	1.5			○		486
3	15.1	2.95		○	○	○	475

9号土坑

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1	8.3	0.95	○			○	505
2	7.7	0.9		○	○		503
3	8.2	0.85		○	○	○	502
4	8.6	0.8		○	○	○	506
5	8.6	0.7			○	○?	508
6	8.6	0.9		○	○		504
7	9.3	1.1		○	○	○	509
8	8.9	0.6		○	○		508
9		0.8		○	○		500
10	15	3		○	○	○	495
11	15.4	3.3		○	○	○	497
13	15.4	3.15		○	○		498

10号土坑

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1	8.2	0.8		○		○	542
2	8	0.9		○	○	○	534
3	8.3	1		○	○	○	535
4	8.6	0.8		○	○	○	536
5	9.2	1.5		○			538
6	8.8	1.1		○	○	○	537
7	9.3	0.9		○	○		541
8	8.2	0.8		○	○	○	539
9	13.6	2.7		○	○	○	526
10	14.6	2.6		○	○	○	525
11	16.4	3.45		○	○	○	529

11号土坑

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1	8.2	1.2		○	○		564
2	9.3	1.1		○	○		561
3	9.1	1.1		○	○	○	560
4	13.8	3.3		○			556
5	14.6	2.85		○	○	○	558

12号土坑

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1	8	1.05		○	○	○	588
2	8	0.65		○	○	○	578
3	8.3	1		○	○	○	589
4	8.4	1.2		○	○	○	587
5	8.8	1.4		○	○		586
6	8.7	1.1		○	○	○	579
7	8.9	1.25		○	○	○	577
8	8.9	1.1		○	○	○	581
9	9.2	1.2		○	○		580
10	15.2	3		○			569
11	15.2	2.8		○	○	○	583
12	15.7	2.4		○	○	○	585
13	15.4	2.6		○		○	584
14	15.8	3.4		○	○		572
15	16.4	3.1		○	○		568
16		2		○	○	○	574

13号土坑

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1	8.5	1.15		○	○	○	599
2	9.2	0.9		○	○	○	606
3	9.25	1.15	○		○	○	600
4	9.55	1.3	○		○	○	603
5	9.2	1.4		○	○	○	605
6	9.3	1.15	○		○	○	604
7	9.8	1.45		○	○		602
8	9.6	1	○		○	○	601
9	15.7	3.7	○		○		594
10	16.4	3.2	○		○		596
11	16.6	3.65	○			○	595

16号土坑

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1	12.2	1.8					633

18号土坑

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1	8.9	1		○	○		641
2		2		○	○	○	639
3		1.1		○	○	○	640

②

19号土坑

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1	7.5	0.9		○	○	○	655
2	8.6	0.9		○	○	○	648
3	8.6	1		○	○	○	659
4	9.9	1.1		○	○	○	654
5	10.2	1.1		○	○	○	657

20号土坑

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1		0.95		○	○		662
2	8.8	1.1		○	○	○	661

21号土坑

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1		0.55		○	○	○	679
2	8.7	0.9		○			676
3		2.4			○		674
4	14.7	2.8		○	○		668

22号土坑

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1	8.2	1.15		○	○	○	698
2	8.3	1		○	○	○	699
3	9	1.15		○	○	○	706
4	8.8	0.85		○	○	○	702
5	9	1.2		○	○	○	697
6	8.9	1		○	○		704
7	13.8	2.5		○	○	○	689
8	15.2	3.3		○	○	○	695
9	15.2	3.95		○	○	○	696

23号土坑

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1	7.8	1.1		○	○	○	715
2	8.15	0.9		○	○	○	718
3	8.2	1.2		○	○		717
4	7.9	1		○	○		720
5	8	1.2		○	○	○	716
6	8.1	0.9		○	○	○	719
7	15.3	2.8		○	○		709
8	15.4	3.15		○	○	○	708
9	15.6	2.9		○?			710
10	9.7	2.2		○	○		691

24号土坑

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1	8.4	1.15		○	○	○	737
2	8.6	1.1		○	○	○	741
3	8.4	1.2		○	○		743
4	8.2	0.8		○	○	○	736
5	8.6	1.2		○	○	○	739
6	8.5	0.75		○	○	○	738
7	9	0.8		○	○	○	742
8	8.6	1.15		○	○	○	740
9	15.8	3.2	○?				730
10	15.6	2.7		○	○	○	734
11	15.8	2.9		○	○	○	731
12	17.4	2.9		○	○	○	732

25号土坑

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1	8.6	1		○			759
2	9	1.6		○	○		754
3	9.2	1.3		○	○	○	761
4	10.8	1.3		○			760
6	13.2	2.6		○			748

26号土坑

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1	8.8	1.1		○	○		784
2	8.8	1		○	○	○	783
3	9.4	1		○	○	○	785
4	9.6	1		○	○		786
5	14.2	2.7		○	○	○	780
6	15.8	2.5		○	○		774
9	17.4	3.1		○		○	781

27号土坑

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1	9.1	1.1		○		○	802
2	8.8	0.95		○	○		800
3	10.5	0.9		○		○	801
4	17.8	2.8		○			796

28号土坑

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1	8	0.8		○	○		811
2	9.4	0.8		○	○	○	807
3	9.5	1.2		○	○		808

29号土坑

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1	9	1.2		○		○	823
2	9.4	1		○			821
3	8.8	1.2		○			822
4	9	1.1		○	○	○	829
5	13.6	2.8		○			815
6	14.7	2.8		○	○		828

30号土坑

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1	7.8	1		○	○	○	835
2	8.8	0.95		○	○	○	836
4	13.2	2.7		○			830

31号土坑

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1	9.2	0.8		○			846
2	9.3	1.2		○	○		844
3	9	1.1		○	○	○	845
4	15	3.2		○	○	○	841
5	15.8	3.1		○	○	○	839
6	16.2	3		○	○	○	842

34号土坑

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1	8.8	1.2		○	○	○	858
2	10.4	1.35				○	860
4	18	2.5			○		856
5	14.2	1.4			○		859

35号土坑

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1	8.2	0.7		○			865
2	7.8	0.9		○	○	○	864
3	15	2.9		○	○		863

36号土坑

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1	9.4	1		○		○	874
2	9.4	1		○		○	873
3	9	0.7		○		○	872
4	15.9	2.7		○	○	○	870
5	15.4	3.85		○	○	○	871
6	16.2	2.8		○	○	○	869

37号土坑

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1	8.7	0.6		○	○	○	878
2	8.2	1.1		○	○		879

38号土坑

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1	9.2	1.1		○	○	○	884

40号土坑

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1	8.3	1.1		○	○	○	896
2	9	1.3		○	○	○	895
3	14.7	3.4		○	○	○	891
4	15.7	3.2		○	○	○	890
5	15.2	3		○	○	○	892
6	15.5	3.2		○	○	○	893

41号土坑

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1	8.2	1.15		○	○	○	900
2	8.8	0.75		○	○	○	901
3	8.4	0.85		○	○	○	902
4	10.8	1.1		○	○	○	903

42号土坑

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1	9.8	0.9		○	○		910

43号土坑

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1	8.8	0.9		○	○	○	919

44号土坑

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1	8.5	0.9		○	○	○	925
2	9.2	0.85		○	○	○	924
3	9.85	1.2		○	○	○	923
4	9.8	1		○	○	○	926
5	9.8	1.4		○	○	○	922
6	10.1	1.3		○	○	○	929

46号土坑

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1		1.25		○	○		944
2	8.4	1.4		○	○	○	946
3	9	1.1		○	○		945
4	9.6	0.6		○		○	947
6	15.9	2.3		○	○	○	941

47号土坑

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1		1.2		○	○		953
2	9.1	1.2		○	○		954
3	8.3	0.9		○	○		951

48号土坑

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1	15.2	3.5		○	○		955

49号土坑

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1	10.2	1.25		○	○		960

50号土坑

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1	7.8	1.2		○			977
2	8.8	1		○		○	972
3	8.8	0.8		○	○		
4	8.6	0.8		○		○	976
5	8.8	0.9		○			973
6	9.8	1.1		○			974
7	16	2.5		○	○	○	
8	18.8	2.7		○			966

④

51号土坑

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1	8.2	1.2		○	○	○	1024
2	8.1	1.1		○	○	○	1043
3	8.3	1.1		○	○	○	1020
4	8.3	1		○	○	○	1031
5	8.3	1		○	○	○	3050
6	8.3	1		○	○	○	1037
7	8.3	1		○	○		1028
8	8.4	1		○		○	1040
9	8.4	0.9		○	○		1013
10	8.4	0.9		○	○		1027
11	8.4	1		○	○	○	1010
12	8.4	0.95		○	○	○	1041
13	8.4	1.3		○	○		1032
14	8.5	0.8		○		○	1038
15	8.5	1.3		○	○	○	1021
16	8.5	0.8		○	○		1026
17	8.5	1.1		○	○	○	1004
18	8.5	0.9		○	○	○	3047
19	8.5	1		○	○	○	3048
20	8.5	1		○	○	○	3056
21	8.5	0.9		○	○		1007
22	8.5	0.7		○	○	○	3052
23	8.5	1.2		○		○	996
24	8.5	1.1		○	○	○	3055
25	8.5	1.05		○	○	○	1048
26	8.6	1		○	○	○	3049
27	8.6	1.1		○	○	○	1025
28	8.6	1.1		○	○	○	1023
29	8.6	1		○	○	○	1047
30	8.6	1.2		○	○	○	1022
31	8.6	1.1		○	○	○	1001
32	8.7	1.35		○		○	1019
33	8.8	1.1		○	○	○	1046
34	8.8	1.1		○	○	○	3051
35	8.8	0.9		○	○		1005
36	8.8	1.2		○	○	○	1044
37	8.8	1		○			1042
38	8.8	1		○	○	○	1049
39	8.9	1		○	○	○	3053
40	8.9	0.8		○	○	○	1008
41	8.9	1		○	○	○	1036
42	9	1.3		○	○	○	1003
43	9.1	0.8		○	○		1033
44	9.1	0.8		○	○	○	999
45	9.2	1.5		○	○		997
46	9.2	0.9		○	○	○	1035
47	9.3	1.05		○			1002
48	9.4	1		○	○	○	1045
49	9.4	0.9		○	○	○	3046
50	9.4	1		○	○	○	1030
51	9.4	1.1		○	○	○	1029
52	9.5	0.8		○		○	998
53	9.5	0.7		○	○	○	1034
54	9.6	1		○	○		1039
55	9.7	0.9		○	○	○	3054
56	9.8	1		○	○	○	1000
57	14.8	3.5		○			992
58	14.7	3.5		○	○		994
59	14.8	3.1		○	○		989
60	15	3.4		○	○		993
61	15	3.7		○	○		986
62	15.8	3.3		○	○	○	991
63	15.4	3		○	○	○	987

52号土坑

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1	7.9	0.8		○			1063
2	8.2	0.9		○	○	○	1062
3	8.3	1		○	○	○	1061
4	8.2	1.1		○	○	○	1065
5	8.4	0.8		○		○	1064
6	9.1	0.9		○	○		1059
7	9.4	0.9		○	○		1060
8	9.4	1		○	○		1066
9	9.8	1.1		○			1067
10	14.3	2.6		○	○		1054
11	14.4	2.7		○	○	○	1051
12	14.6	2.9		○	○		1055
13	14.8	2.7		○	○	○	1052
14	15.1	2.3		○	○	○	1056
15	15.1	2.9		○	○	○	1057
16	15.5	3.35		○	○	○	1053

53号土坑

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1		1.05		○	○		1073
2	9.9	0.9		○	○		1074

54号土坑

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1	7.5	0.95		○	○		1082

55号土坑

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1	8.4	0.95		○	○	○	1093
2	9	1.2		○	○		1095
3	9.2	1.6		○	○	○	1092
4	10.4	1.4		○	○		1097
5	10.9	1.2		○	○	○	1094
6	14.3	2.75		○	○		1086
7	15	3.2		○	○	○	1088
8	16.7	2.8		○	○		1089

56号土坑

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1	7.8	1.2		○	○		1113
2	9.2	1.1		○	○		1112
3	9.9	1.1		○	○	○	1114
4	10	1.1		○	○		1117
5	10	1		○	○	○	1116
6	12.3	2.25		○	○		1105
7	13.9	2.5		○	○		1104
8	14.3	2.2		○	○		1107
9	17.3	2.7		○	○	○	1106

57号土坑

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1	8	0.95		○	○	○	1142
2	8.1	8.2		○	○	○	1138
3	8.1	0.95		○	○	○	1139
4	9	0.9		○	○	○	1140
6	14.45	2.8		○	○	○	1133
7	15.75	2.8		○	○	○	1132

58号土坑

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1		1.1		○	○		1155

59号土坑

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1	7.8	1.6		○	○	○	1161
2	8.8	1.4		○	○		1162
3	13.6	2.7		○			1160

60号土坑

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1	8.8	1.3		○	○	○	1171
2	8.9	1.25		○	○	○	1172
3	8.9	1.15		○	○	○	1174
4	12.7	2		○	○		1168
5	14.7	3		○	○		1169
6	16.3	3.25		○	○	○	1170

61号土坑

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1	8.1	0.7		○	○	○	1194
2	8.55	0.9		○	○		1239
3	8.95	0.8		○	○	○	1238
4	9	0.8		○	○	○	1198
5	9	1.2		○			1196
6	9.2	1.1		○	○	○	1195
7	14.2	2.7		○		○	1187
8	15.7	2.5		○			1190
9	15.6	2.8		○	○		1191
10	16.45	2.65		○	○	○	1186
11	16.8	2.4		○	○		1189

62号土坑

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1	8.2	1.2		○	○		1204
2	8.4	1.4		○			1207
3	9.1	1.1		○	○	○	1205
4	9.2	1.2		○	○	○	1206

63号土坑

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1	7.8	1.1		○			1216
2	8.1	1.4		○			1215
3	9	1		○		○	1214
4	9.1	0.95		○			1217
5	15.2	3		○			1213

64号土坑

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1		1.1		○			1224

65号土坑

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1	7.6	0.8		○	○	○	1246
2	7.9	1.05		○		○	1244
3	8.6	1		○			1243
4	8.6	0.9		○	○	○	1242
5	8.7	0.9		○	○		1240
6	8.8	1.15		○	○		1241
7	9.2	2.7		○			1235
8		2.9		○			1233
9		3.4		○		○	1232

66号土坑

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1		1.5		○			1256

67号土坑

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1		0.9		○	○		1268
2	8.8	0.8		○			1267
3	10.4	1.3		○	○	○	1263

68号土坑

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1	7.6	1.1		○	○	○	1317
2	7.8	1		○		○	1313
3	8.5	0.7		○	○	○	1296
4	8.5	1		○	○	○	1316
5	8.5	1.1		○			1310
6	8.5	1.3		○			1294
7	8.7	0.95		○			1293
8	8.7	1.05		○		○	1295

⑥

9	8.7	1.35		○	○	○	1314
10	8.7	1.4		○		○	1312
11	8.8	1.2		○	○	○	1318
12	8.8	1.1		○	○	○	1309
13	9	1.1		○		○	1315
14	9.2	1.35		○			1290
15	9.2	0.95		○			1292
16	9.2	1.3		○	○		1304
17	9.3	1.3		○	○	○	1311
18	9.7	1.1		○	○		1289
19	9.8	1.3		○		○	1291
20	9.9	1.3		○			1319
21	13.8	2.3		○	○		1276
22	14.3	2.9		○		○	1278
23	14.5	2.7		○	○	○	1280
24	14.8	2.7		○	○	○	1281
25	14.8	2.4		○	○	○	1283
26	14.8	3.3				○	1287
27	14.8	2.4		○	○		1279
28	15	2.7		○	○	○	1288
29	15.8	3.2		○	○	○	1282
30	16	3.2			○		1286

69号土坑

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1	7.8	0.9		○		○	1338
2	7.8	1.3		○	○	○	1333
3	8	1.1		○	○	○	1339
4	9.6	1.3		○	○	○	1336
5	9.9	1		○			1337

70号土坑

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1	8	0.9		○	○		1349
2	8.4	1.1		○	○		1348
3	8.7	1		○	○	○	1352
4	8.8	1		○	○	○	1346
5	9	1.1		○	○	○	1347
6	14.1	3.2		○	○	○	1344
7	15.2	3.05		○	○		1341
8	15.8	3.2		○	○	○	1345

71号土坑

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1	6.8	0.9		○	○		1369
2	7.8	1.2		○	○		1367
3	8.9	1		○			1365
4		1.85		○	○	○	1358
5	14.6	2.95		○			1363
6	16.6	2.45		○			1360

72号土坑

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1	6.1	1.2		○	○		1377
2	8.8	0.7		○	○		1381
3	0.9	9		○	○		1379
4	14.6	1.8		○	○		1375
5	14.9	2.9		○	○		1374

73号土坑

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1	8.8	1		○	○		1392
2	9.1	1.15		○			1391
3	16.6	2.5		○	○		1389
4	16	2.7		○	○	○	1388

74号土坑

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1	7.2	0.85		○	○		1406
2	7.8	0.9		○	○		1405
3	8	1.05		○	○	○	1402
4	9.2	1.1		○	○		1401
5	13.2	2.4					1399

75号土坑

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1	7.4	0.9		○			1417
2	8.5	1.25		○	○		1416
3	14.3	3.3		○	○	○	1412
4	15.4	2.65		○		○	1411
5	16	3.15		○		○	1407
6	16.4	2.35		○	○		1413

76号土坑

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1	8.2	0.7		○	○	○	1431
2	8.4	1.15		○	○		1429
3	8.5	1.1		○			1430
4	8.7	0.85		○	○	○	1432
5	8.8	0.9		○	○		1433
6	13.8	2.7		○			1422
7	15.4	2.9		○	○	○	1420
8	15.7	3		○	○	○	1421

77号土坑

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1	7.6	1.35		○		○	1448
2	8	0.7		○		○	1447
3	8.8	1.1					1450
4	9.2	0.85				○	1449
5	9.8	0.95		○			1446
6	13.9	2.5				○	1440
7	15.2	3				○	1441

78号土坑

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1	9.4	1					1461
2	8.9	1		○	○		1462
3	10.8	2.3					1458
4	15	3.4		○		○	1452
5	15.8	3.3		○	○	○	1453

79号土坑

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1		1.2		○			1476
2	9.1	0.9					1475

80号土坑

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1	8.7	0.7		○		○	1486
2	8.9	0.8		○	○	○	1487
3	9	0.9		○	○		1489
4	9	0.95		○		○	1488
5	15	2.9		○		○	1478
6	15.7	2.6		○		○	1481
7	16.9	2.95		○	○	○	1479
8	17.5	2.3		○	○		1480

81号土坑

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1	7.6	0.7		○	○	○	1501
2	9.1	1.2			○		1500
3	14.5	3.2					1494
4	16.4	2.9					1496

83号土坑

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1	8.4	0.85			○		1516
2	8.6	0.9					1508
3	8.8	0.85		○			1517
4	9.4	1.2		○		○	1515
5	14.4	2.55		○			1509
6	15	1.6					1513
7	15.2	2.85					3061
8	15.8	2.95			○		1510

84号土坑

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1	7.6	1.25		○	○	○	1538
2	8.4	1.15		○	○	○	1534
3	8.4	0.75		○	○	○	1539
4	8.4	1.15		○	○	○	1531
5	8.4	0.9		○			1533
6	8.6	0.7		○	○	○	1532
7	8.6	1.15			○		1530
8	8.6	1.1		○	○	○	1527
9	8.65	0.8		○	○	○	1536
10	8.7	0.8		○	○		1525
11	8.7	2.5		○	○		1526
12	8.8	0.8		○	○	○	1537
13	8.8	0.9		○	○	○	1528
14	9.2	1.1		○	○		1534

85号土坑

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1	7.6	1.8		○			1554
2	8	0.9		○			1557
3	8.4	1.05		○	○		1555
4	9.2	1					1553
5	11.9	3.2		○	○	○	1548
6	14.9	2.7		○	○		1550
7	16	2.7		○	○	○	1549

86号土坑

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
2	9	1.2		○			1560

87号土坑

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
2		1.85		○			1568

1号井戸

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1	6.8	1		○			2782
2	7.8	1.7		○	○		2754
3	8	1.1		○	○		2787
4	8.4	1.1		○		○	2783
5	8.4	1.2		○	○		2785
6	8.4	1.5		○	○	○	2795
7	8.4	1		○	○	○	2796
8	8.6	1.2		○		○	2768
9	8.7	1.1		○	○		2769
10	8.8	1.1		○	○	○	2767
11	8.8	1.3		○	○		2794
12	8.7	1.1		○	○	○	2786
13	8.8	1.3		○	○	○	2797
14	8.9	1.5		○	○	○	2784
15	12.8	2.4		○			2770
16	12.8	3.1			○	○	2750
17	13.1	2.7		○			2953
18	13.6	3.1		○			2803
19	13.7	3.2		○	○	○	2799
20	13.8	2.9		○	○	○	2788
21	13.9	2.8		○			2789
22	14	2.9		○	○	○	2790
23	14.2	3.2		○		○	2955
24	14.13	3.1		○			2771
25	14.5	2.8		○	○		2954
26	14.6	3.1		○	○		2800

⑧

27	14.8	3.4		○			2798
28	15	2.2		○	○	○	2764

1号溝

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1	8.35	1		○	○	○	2096
2	8.4	1.1		○		○	2092
3	8.55	1.05		○	○	○	2094
4	8.7	0.95		○	○	○	2087
5	8.7	1.15		○	○	○	2090
6	8.7	0.95		○	○	○	2097
7	8.7	0.85		○	○	○	2095
8	8.75	1.05		○	○		2091
9	8.8	1.1		○	○		2093
10	7.75	0.9		○	○	○	2128
11	8	0.8		○	○		2123
12	8.1	1.2		○	○	○	2131
13	8.15	1		○	○		2088
14	8.15	1.25		○		○	2113
15	8.15	1		○	○	○	2089
16	7.95	0.75		○	○	○	2129
17	8.2	1.1		○	○	○	2122
18	8.2	1.1		○		○	2116
19	8.25	0.75		○	○	○	2126
20	8.25	0.95		○	○	○	2124
21	8.25	1		○		○	2110
22	8.25	1.05		○	○		2135
23	8.3	0.8		○	○	○	2118
24	8.4	1.05		○	○		2114
25	8.4	1.4		○	○	○	2134
26	8.4	1.1		○	○	○	2120
27	8.5	0.7		○	○	○	2130
28	8.5	1		○	○		2133
29	8.55	1.25		○		○	2115
30	8.65	1		○		○	2111
31	8.65	0.95		○	○		2117
32	8.65	1.2		○			2132
33	8.65	1		○	○	○	2121
34	9	1		○	○	○	2119
35	9.3	0.95		○	○	○	2112
36	9.3	1.1		○	○	○	2136
37	9.4	0.8		○			2127
38	9.6	1.25		○	○	○	2125
39	7.9	1.05		○	○	○	2100
40	8.05	1		○	○	○	2104
41	8.15	0.7		○	○	○	2109
42	8.2	1		○	○	○	2106
43	8.3	1		○	○		2099
44	8.3	1		○	○	○	2103
45	8.4	1.1		○	○		2098
46	8.4	0.95		○	○		2102
47	8.45	0.9		○	○	○	2086
48	8.5	1.1		○	○	○	2103
49	8.5	0.95		○	○	○	2085
50	8.65	1.25		○	○		2101
51	8.65	1.35		○		○	2084
52	8.9	1.2		○	○		2107
53	9.2	1.35		○	○		2108
54	7.7	1.05		○	○		3039
55	8.25	1.3		○	○		3043
56	8.3	1.1		○	○	○	3037
57	8.4	1.1		○			3038
58	8.4	1		○	○	○	3036
59	8.5	1.15		○	○		3035
60	8.5	1		○		○	3040
61	8.55	1.15		○			3041
62	8.55	1.2		○			3044
63	8.8	1		○	○	○	3034
64	8.9	1.1		○	○		3042
65	9.3	1.2		○	○	○	2247
66	9.35	1.15		○	○	○	3045
67	7.8	0.8		○		○	2277
68	8	0.9		○	○	○	2276
69	7.8	0.8		○		○	2280
70	8.2	1.3		○	○		2275
71	8.4	1.1		○	○	○	2274
72	8.6	1.1		○	○		2279
73	9.8	1.1		○		○	2278
74	7.8	0.8		○			2296
75	8.1	0.9		○	○		2299
76	8.2	0.9				○	2301
77	8.4	0.95		○		○	2297
78	8.4	1.45			○	○	2298
79	8.6	0.8		○			2295
80	8.6	1.4		○	○		2300
81	14.6	3.2	○		○	○	2003
82	14.7	4		○		○	2004
83	14.7	3.2		○	○	○	1999
84	14.2	2.4		○		○	2263
85	14.4	3.25		○	○	○	2273
86	14.4	3		○	○	○	2269
87	14.4	3.1		○	○	○	2272
88	14.6	2.9		○	○	○	2271
89	15.2	4.1		○			2260
90	15.4			○			2267
91	15.3	2.8		○	○	○	2005
92	15.7	3.3		○	○	○	2002
93	15.7	3.1		○	○	○	2001
94	17.1	3.45		○		○	2007
95	15.4	3.3		○	○	○	2270
96	15.5	3.4		○	○	○	2264
97	15.7	2.95		○	○	○	2262
98	15.8	3.1		○			2266
99	16.1	3.65		○	○	○	2268

100	16.4	3.4		○	○	○	2265
101	13.3	2.7		○		○	2041
102	13.4	2.8		○		○	2040
103	13.6	2.8		○		○	2042
104	13.8	3		○			2039
105	14.4	2.9		○	○	○	1991
106	14.7	3		○	○		1995
107	15.45	3.1		○	○	○	1998
108	15	3.2		○	○	○	1987
109	15.1	3.4		○	○	○	2045
110	15.1	3.3		○	○	○	2038
111	15.1	3.1		○	○	○	2043
112	15.1	3.1		○		○	1988
113	15.4	3		○	○	○	1993
114	15.4	3.1		○	○	○	1989
115	15.6	2.8		○	○	○	1997
116	15.65	3.4		○	○	○	1990
117	14.6	3.5		○		○	1994
118	15.7	2.5		○	○	○	1996
119	15.7	3.3		○	○	○	2044
120	16.4	3.1		○	○	○	1992
121	15	3.7		○	○	○	2047
122	15.7	2.9		○	○	○	2046
123	14.3	2.9		○		○	1981
124	14.4	2.4		○	○	○	1986
125	14.55	3.5		○		○	2071
126	14.6	3.1		○	○	○	1980
127	14.65	2.7		○	○		2059
128	14.7	2.7		○	○	○	2056
129	14.8	3.1		○	○	○	2065
130	14.8	3.8		○			2068
131	14.8	3.2		○			1972
132	14.8	3.7		○			1979
133	14.8	3.8		○	○		1982
134	14.8	3.1		○	○		1983
135	14.85	3.5		○	○		2055
136	14.85	3		○			2051
137	15	3.9		○	○		2057
138	15	3.9		○	○	○	2060
139	15.1	3.5		○			2048
140	15.1	3.3		○		○	1971
141	15.2	3.2		○	○	○	1969
142	15.2	2.8		○	○	○	1975
143	15.3	3.4		○	○		1974
144	16.05	3.6		○	○	○	2070
145	16.1	3.5		○	○	○	2054
146	15.6	3.2		○	○		1976
147	15.6	3.2		○	○	○	1985
148	15.65	3.2		○	○		1973
149	15.7	3.8		○		○	2049
150	15.7	3.2		○	○	○	1978
151	15.7	3.7		○	○	○	2064
152	16.15	3.4		○	○	○	2058
153	15.8	3.1		○	○	○	2061
154	15.8	3.3		○	○	○	1984
155	15.8	2.6		○		○	2067
156	15.9	3.4		○	○	○	1977
157	15.9	3.1		○	○	○	2069
158	16	3.5		○	○	○	2063
159	16	3.4		○	○		1970
160	16.1	3.2		○		○	2066
161	16.1	3.7		○			2053
162	16.2	3		○	○	○	2050
163	13.25	3.3		○	○	○	2052
164	16.5	3.7		○			2062
165	14.3	2.8		○	○	○	2013
166	14.4	3.15		○	○	○	2021
167	14.4	2.8		○	○	○	2022
168	14.6	2.6		○	○	○	2009
169	14.85	2.6		○	○		2012
170	14.95	3.1		○	○	○	2019
171	14.95	3.3		○	○	○	2029
172	14.95	3.4		○	○	○	2030
173	15.05	3.35		○	○	○	2018
174	15.1	3.6		○	○	○	2016
175	15.1	3.55		○	○	○	2025
176	15.1	3.3		○	○	○	2014
177	15.95	3.1		○	○	○	2024
178	15.15	3		○	○	○	2010
179	15.2	3.55		○	○	○	2020
180	15.2	3.36		○	○	○	2028
181	15.3	3.2		○	○	○	2015
182	15.3	3.2			○	○	2017
183	15.3	3		○	○	○	2035
184	15.35	3.35		○	○	○	2027
185	15.4	3.3		○	○	○	2011
186	15.5	3.4		○	○	○	2033
187	15.5	2.9		○	○	○	2036
188	15.7	3.2		○	○	○	2693
189	16	2.8		○	○	○	2008
190	16	2.8		○	○	○	2032
191	16.2	3.6		○	○	○	2023
192	16.3	3.5		○	○	○	2031
193	16.3	4.3		○	○	○	2026
194	16.9	3.85		○	○	○	2037
195	17.4	2.7		○	○	○	2034
196	13.9	2.45		○	○	○	2006
197	14.45	3.6		○		○	2000
198	16.3	3.8	○		○	○	2261
199	13.6	2.85		○			2288
200	14.4	2.8		○	○	○	2290
201	14.4	2.5		○		○	2289
202	14.6	3.1		○	○	○	2291
203	15.2	3.4		○	○	○	2292

⑩

204	15.6	2.7		○		○	2294
205	16.6	3.3		○	○		2293

4号溝

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1	8	1.15		○		○	2350
2	8.3	1.2	○			○	2352
3	8.5	1.5	○		○	○	2359
4	8.6	0.9	○			○	2355
5	8.7	1.15	○?			○	2363
6	8.8	0.7	○		○	○	2351
7	8.8	1.2		○	○	○	2361
8	8.8	1		○	○		2364
9	8.8	1	○		○	○	2353
10	8.8	1	○		○	○	2357
11	8.8	1.05		○?	○	○	2358
12	8.8	1.2		○		○	2360
13	9.1	1	○			○	2348
14	9.1	1.3	○		○	○	2349
15	9.6	1.2		○		○	2366
16	9.8	1	○?				2362
17	9.8	1.2	○			○	2354
18	10	1.1	○			○	2347
19	8.4	0.9		○	○		2406
20	8.5	1		○	○	○	2403
21	8.7	0.8		○			2404
22	9.1	1.05		○			2405
23	9.8	1.2	○		○	○	2407
24	7.8	0.9		○	○	○	2416
25	8.8	1		○	○	○	2428
26	8.8	0.9		○	○	○	2427
27	15.2	3		○	○	○	2338
28	15.6	2.8	○		○		2339
29	16	3.5	○		○	○	2343
30	16.4	3.2	○				2395
31	15.3	2.8			○		2394
32		2.3		○	○		2417
33	15.3	3.2	○				2396
34	14.8	2	○				2401
35	15.85	3.4	○?			○	2398
36	16.1	2.7	○				2399
37	14.6	4.2	○				2400
38		1.5		○	○		2426
39	13.8	3.2	○				2342
40	14.7	1.7	○				2408

9号溝

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
2	7.9	1		○	○	○	2475
3	8	0.8		○	○		2474
4	8.1	1.2		○	○		2476
5	8.2	1.2		○	○	○	2473
6	8.3	0.85		○			2479
7	8.3	0.9		○		○	2471
8	8.3	1.1		○	○	○	2477
9	8.7	1.2	○	○	○	○	2472
10	8.8	1.1	○	○	○	○	2478
14	12.8	2.6	○				2466
15	15.8	3.4	○				2465
16	15.8	2.6	○		○		2464

10号溝

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
溝1	7.8	1.1	○?		○		2485

11号溝

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1	7.8	1.05		○	○	○	2500
2	8	2.9		○	○	○	2497
3	8	1.05		○	○		2495
4	8.2	1.15		○	○		2499
5	8.2	0.9		○			2498
6	8.8	1.1		○	○	○	2501
7	8.9	1		○	○	○	2496
9		2.7		○		○	2490
10		2.95	○?			○	2494
11	16.4	3		○	○	○	2489
12	13.2	3.3	○?		○	○	2491

12号溝

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1	8.1	1.2		○	○	○	2573
2	8.1	1.1		○	○	○	2569
3	8.3	1.25		○	○	○	2575
4	8.4	1	○		○		2565
5	8.4	0.9		○	○	○	2578
6	8.4	0.9		○	○	○	2570
7	8.5	1		○	○		2572
8	8.7	1.2		○	○		2576
9	8.7	1		○	○	○	2566
10	8.8	0.85		○	○	○	2574
11	8.8	1.2		○	○	○	2568
12	8.85	1.3		○	○		2577
13	9.2	1.4		○	○	○	2567
14	7.7	1.3		○	○	○	2540
15	8	1.3		○		○	2558
16	8.5	1.2		○	○		2541
17	8.8	1.2		○		○	2539
18	8.9	1.2		○		○	2542
19	14.4	3.4		○	○	○	2582
20	15.5	3.25		○	○	○	2586
21	14.75	3.6		○	○	○	2589
22	14.9	3.65		○	○	○	2581
23	15	3.25		○	○	○	2587

24	15	3.35		○	○	○	2588
25	15.1	3		○	○	○	2584
26	15.1	3.1		○	○		2579
27	15.1	3.3		○	○	○	2585
28	15.2	3.1		○	○	○	2590
29	15.3	3.7		○	○	○	2564
30	15.4	3.3		○	○	○	2580
31	15.3	3.1		○	○	○	2583
32	14.5	3.8		○	○	○	2533
33	14.8	3.2		○		○	2545
34	15	3		○			2543
35	15	3.1		○	○	○	2551
36	15	3.7		○		○	2544
37	15.1	3.2		○			2550
38	15.1	3.5		○	○	○	2546
39	15.2	3		○		○	2560
40	15.2	3.2		○		○	2549
41	15.3	3.4		○	○	○	2559
42	15.5	3.2		○	○	○	2548
43	15.5	3.65		○		○	2563
44	15.9	3.25		○	○		2532
45	16	3.5		○		○	2561
46	16.1	3.7		○	○	○	2562
47	18.4	3.4		○	○	○	2547

13号溝

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1	8.4	0.8		○			2624
2	8.8	0.7		○		○	2623
3	9.4	0.8		○			2622

14号溝

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1		0.7		○			2631

15号溝

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1	7.6	0.75		○	○		2635
2	7.2	0.9		○			2636
4	9.5	0.9		○	○	○	2633
5	9.1	0.75		○		○	2634
6	16.5	3.3		○	○		2632

16号溝

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1	7.8	1.15		○	○	○	2641

17号溝

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1	7.6	1		○			3065

19号溝

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1	8.1	1.1		○	○	○	2653
2	8.2	1		○	○	○	2658
3	8.5	1.15		○	○	○	2652
4	8.6	0.85		○	○		2651
5	8.7	0.7		○	○	○	2660
6	8.8	1.3		○	○	○	2659
7	9.1	1		○	○		2657
8	9.2	1.1		○	○	○	2654
9	9.6	1.4	○		○		2655
10	14.4	2.9		○	○	○	2665
11	14.5	2.9		○	○	○	2661
12	14.7	2.5		○	○	○	2690
13	14.8	2.8		○	○	○	2664
14	15.6	3.2		○	○	○	2662
15	14.9	2.7		○	○	○	2691
16	15.15	2.7		○	○	○	2663
17	15.4	2.45		○	○	○	2667
18	15.5	3.1		○	○	○	2666

20号溝

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1	7.6	1.1		○			2696

22号溝

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
2	16.7	1.8		○		○	2703

方形溝

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1	8.35	0.9		○	○		464
2	9	1.1		○	○		463
3	8.55	1.2		○	○	○	462
4	9.4	1.2		○	○	○	465
5	9.3	0.85		○		○	467
6	8.15	1		○	○	○	445
7	83.3	1		○	○	○	443
8	8.5	1.25		○	○	○	442
9	9.58	1.3		○		○	444
10		0.8		○	○		2446
11	7.8	0.9		○	○		2447
12	8.8	1.3		○	○	○	390
13	7.9	1		○	○	○	399
14	8.8	1.1		○	○	○	425
15	9.3	0.9		○		○	418
17	9	1.15	○			○	2721
18	9.3	0.85	○		○	○	2722
19	9.1	0.8	○		○	○	2734
20	8.7	1.15	○		○	○	2719
21	8.9	1	○		○	○	2720
22	9.8	1.2	○		○	○	2733

⑫

23	8.8	1.25		○			2746
24	9.2	1.4	○		○	○	2735
25	9.75	1.15	○		○	○	2736
26	9.4	1.05	○		○	○	2708
27	8.5	1.15		○	○		2707
28		1.9		○	○		452
33	17.7	1.8	○				2439
34	15	3.4	○				398
35	15.7	2.9	○				401
36	16.9	3.8	○		○	○	2724
37	15.7	3.8	○		○	○	2711
38	16.4	3.35	○		○	○	2710
39	15.8	3.3	○		○	○	2723

1号木棺墓

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1	8.25	1		○	○		2919
2	8.85	0.9		○	○		2923
3	9.1	1		○	○		2920
4	9.2	0.9		○	○	○	2924
5	10.3	1.2		○	○		2926

その他

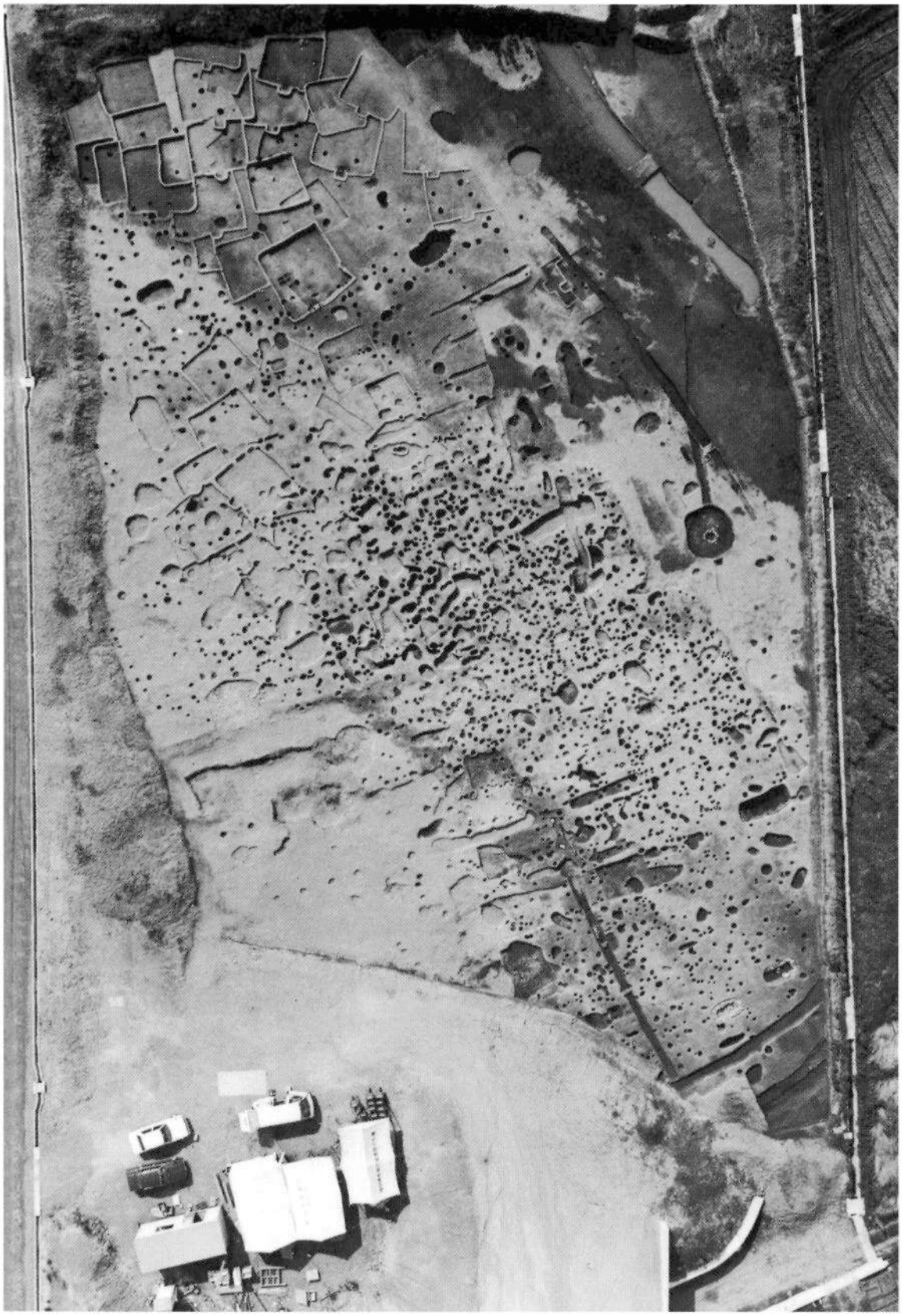
図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
A1	9.3	0.95		○	○		3215 P852
A2	9.85	0.95		○	○	○	3216 P852
A3	9.9	1.15		○	○	○	3212 P852
A4	10.05	1.2		○	○	○	3213 P852
A5	10.1	1.3		○	○	○	3214 P852
A6	8.1	1.1		○	○	○	3249 P1059
A7	8.25	1.2		○			3244 P211
A8	8.3	0.85		○	○		3245 P794
A9	10.3	1.2		○	○		3211 P852
A10	15.9	3.8		○	○		3252 P655
A11	14	3.05		○	○		3202 P921
A12	14.1	2.9		○	○	○	3203 P921
A13	15.4	2.9		○	○	○	3251 P1098
A14	15.85	3		○			3209 P1091
A15	15.4	3.2		○	○	○	3247 P1478
A58	7.75	0.95		○		○	628
A59	8.1	0.9		○	○		2906
A60	8.4	1.15		○		○	2877
A61	8.6	0.9		○	○	○	2903
A62	8.9	1.35		○		○	2899
A63	9.4	1		○	○	○	619
A64	15.3	2.9		○			2891
A65	15.5	3.2		○	○	○	626
A39	8	0.7		○	○	○	2962
A40	8.7	1.3		○	○	○	2975
A41	8.85	1		○	○	○	
A42	9.05	0.9		○	○	○	2960
A43	10.2	2.2		○	○		2944
A44	13.65	2.75		○	○		348
A45	14.8	3.5		○	○		2980
A46	15	3		○	○	○	2950

東才田遺跡

図版番号	口径	器高	ヘラ切り	糸切り	内面ナデ	板状圧痕	土器番号
1	8.6	1.2		○			13 P36
2	8.6	1		○	○		14 P72
1	8.8	1.35		○	○		15
2	13.7	3.2			○		8
3	16.6	2.6			○		16

図　　版

PLATE

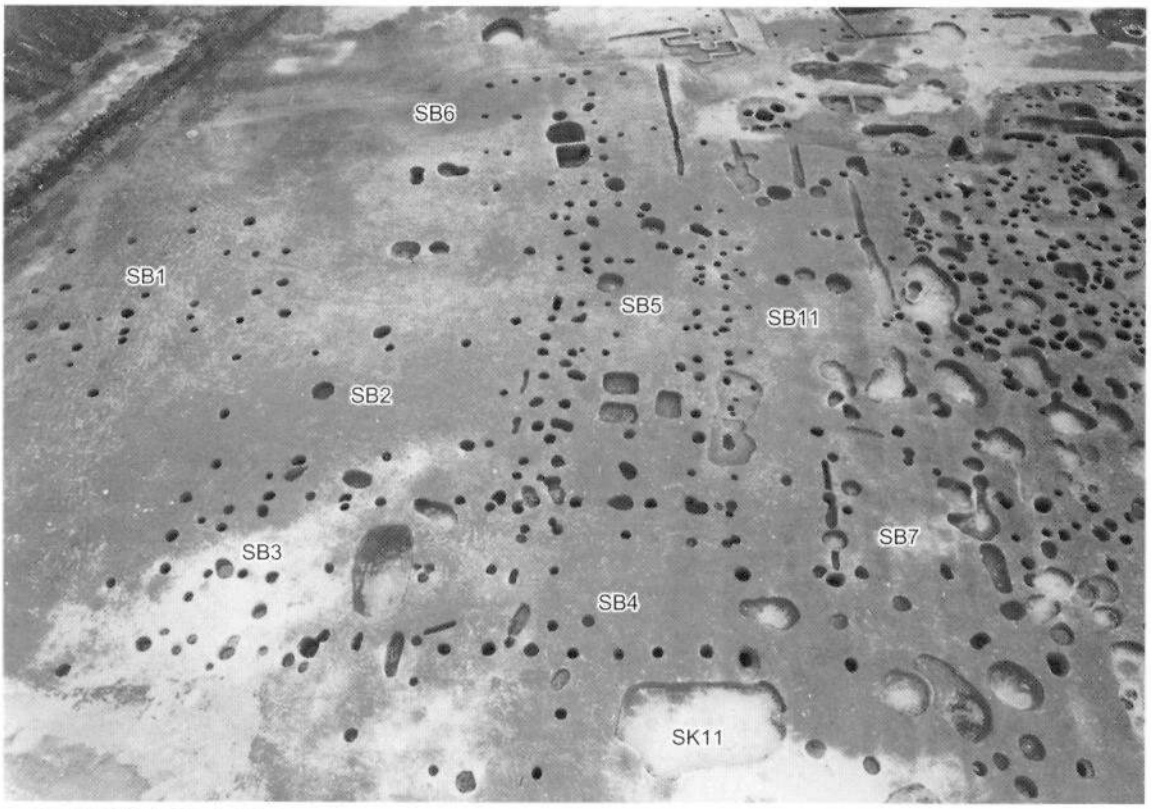


海子湖与見入湖遺跡群

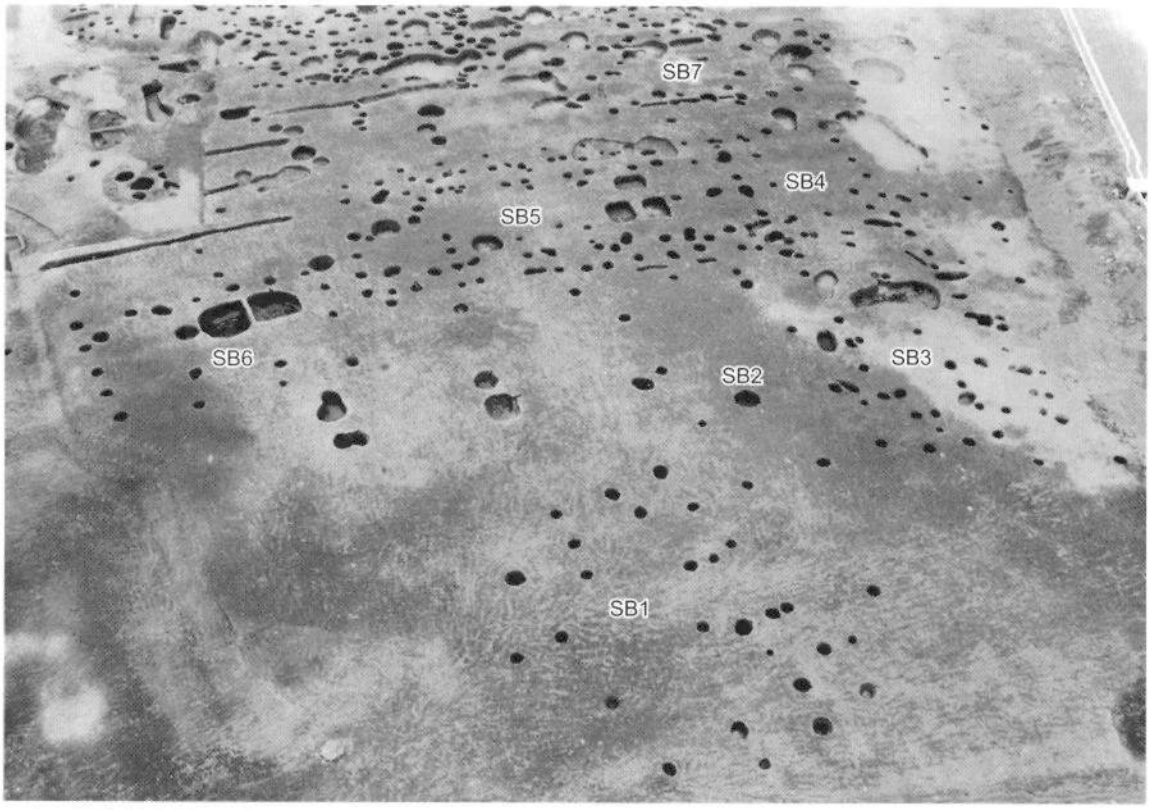
1. 才田遺跡遠景と朝倉山塊（南から）

2. 才田遺跡全景（南から）

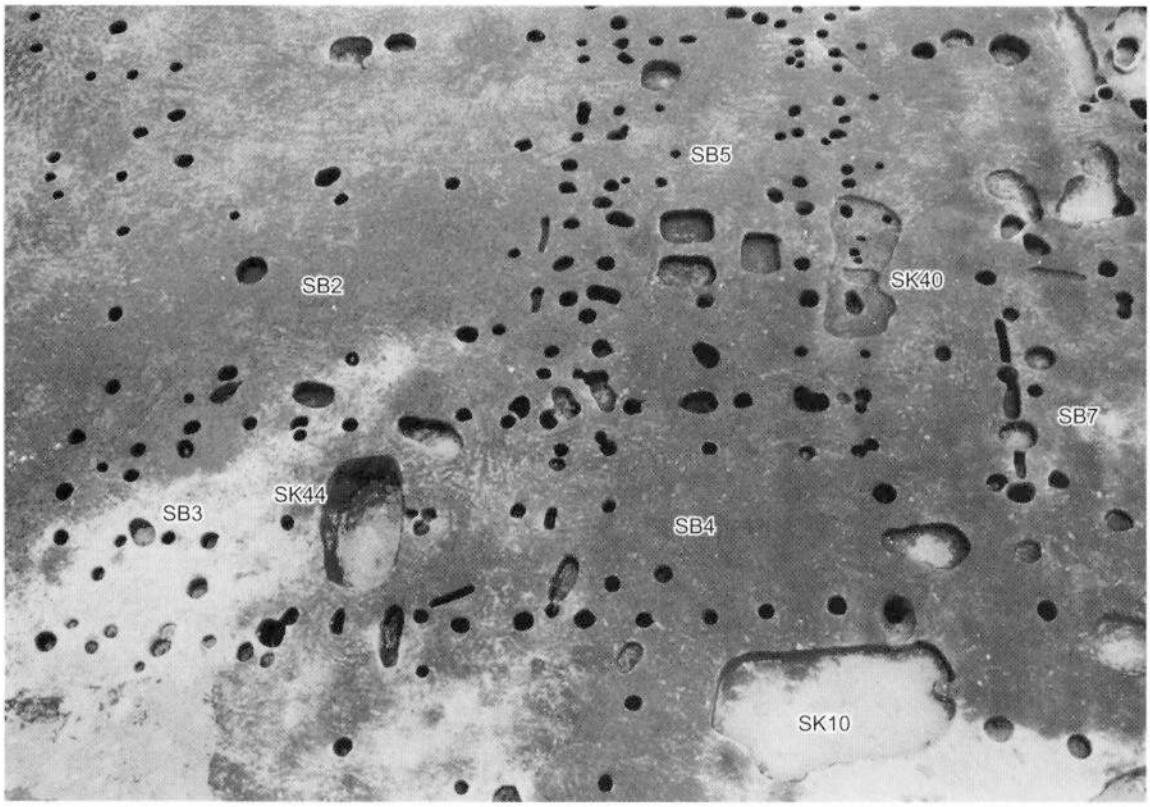
1. 才田遺跡全景（南から）　　2. 才田遺跡全景（東から）



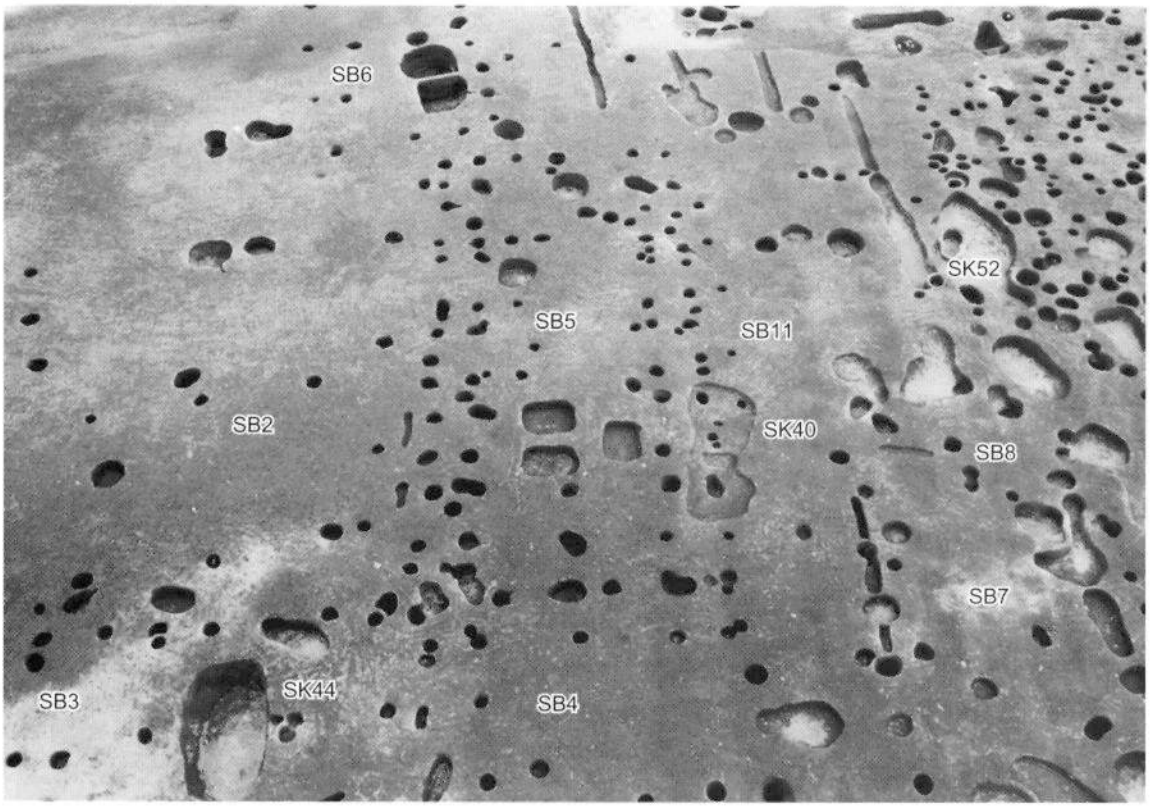
1. 才田掘立柱建物群（北から）



2. 才田掘立柱建物群（東から）

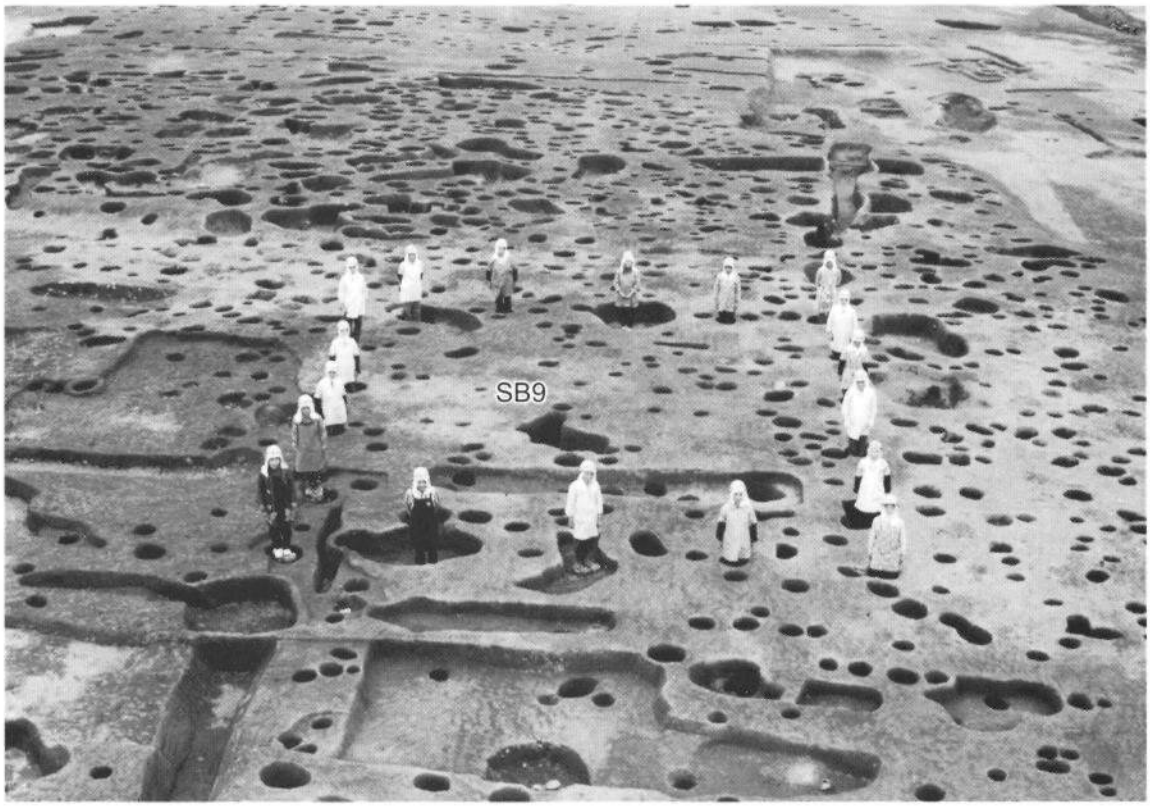


1. 才田SB2～4（北から）



2. 才田SB5（北から）

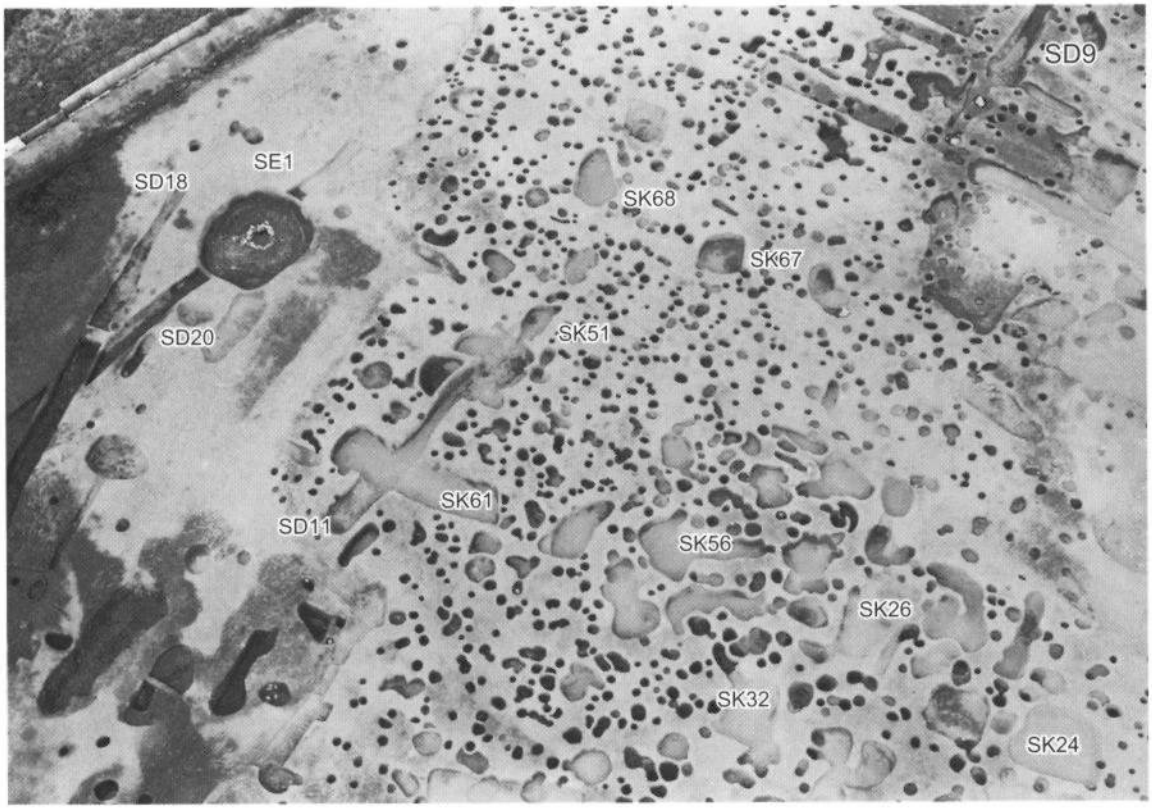
1. 才田SB9（西から）



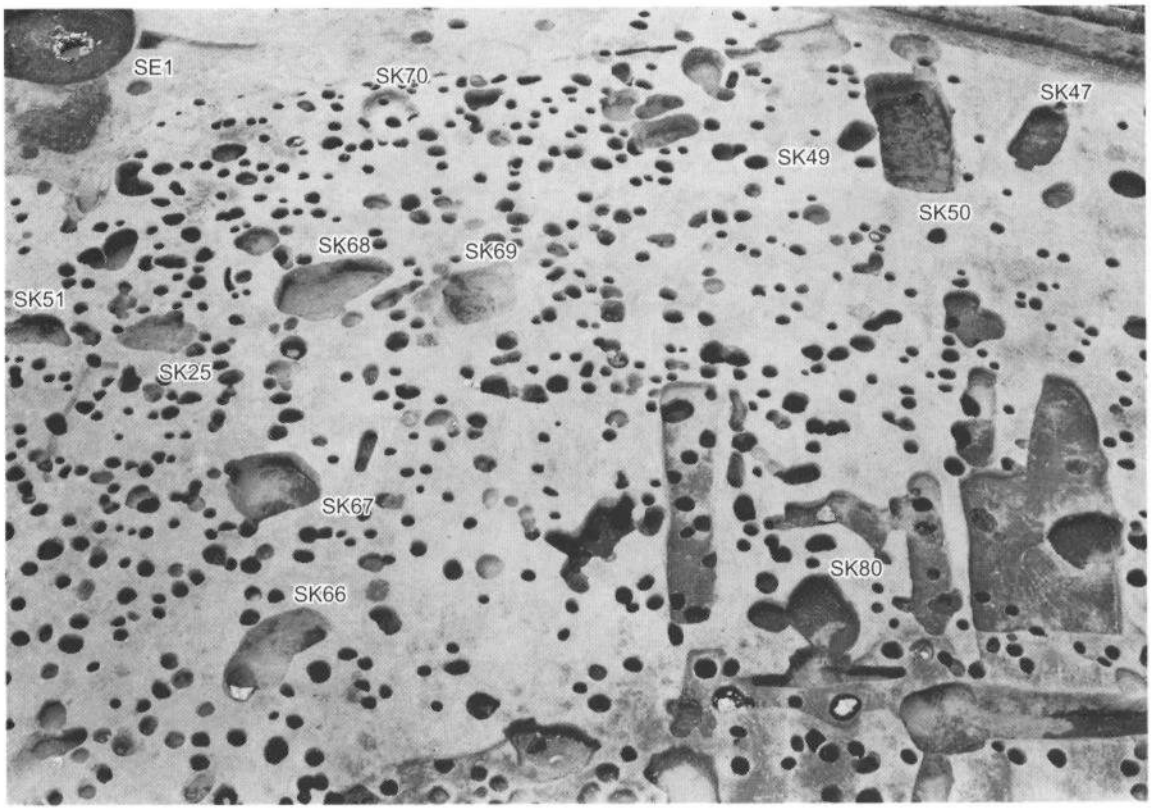
2. 才田SB9（西から）

1. 才田土坑・柱穴群（西から）

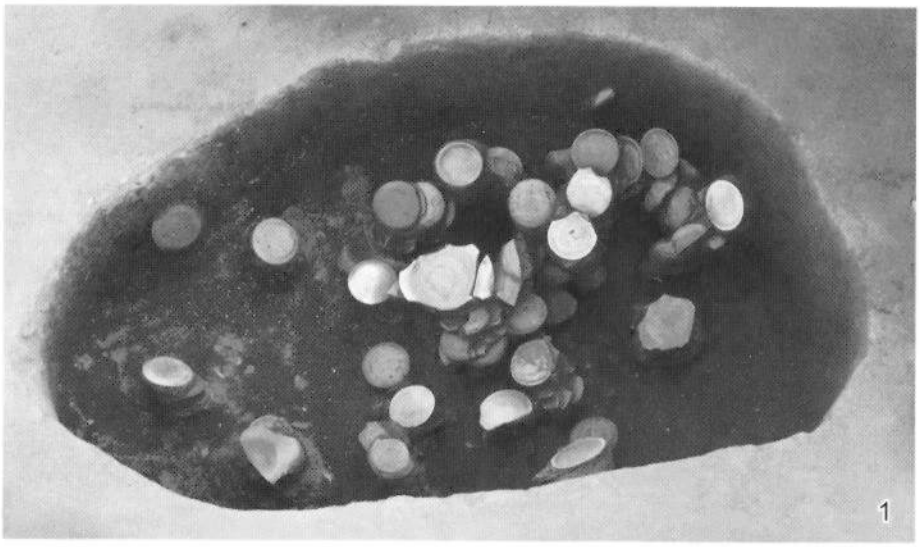
2. 才田土坑・柱穴群（東から）



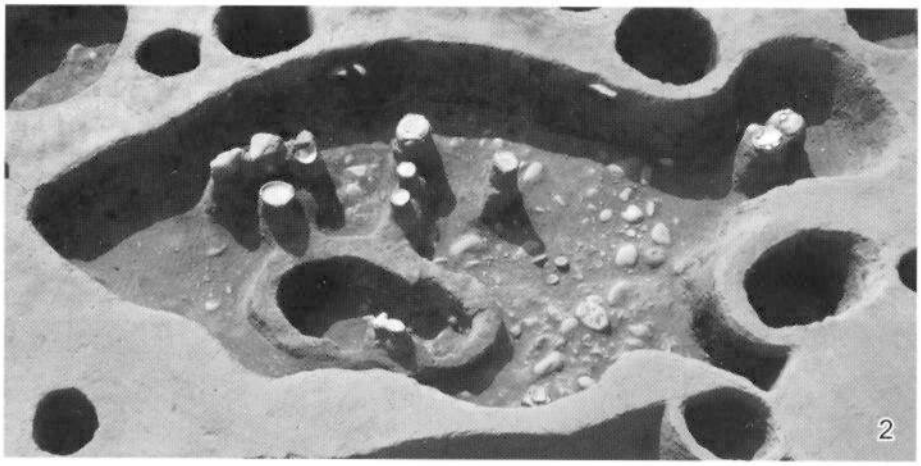
1. 才田土坑・柱穴群（北東から）



2. 才田土坑・柱穴群（北から）

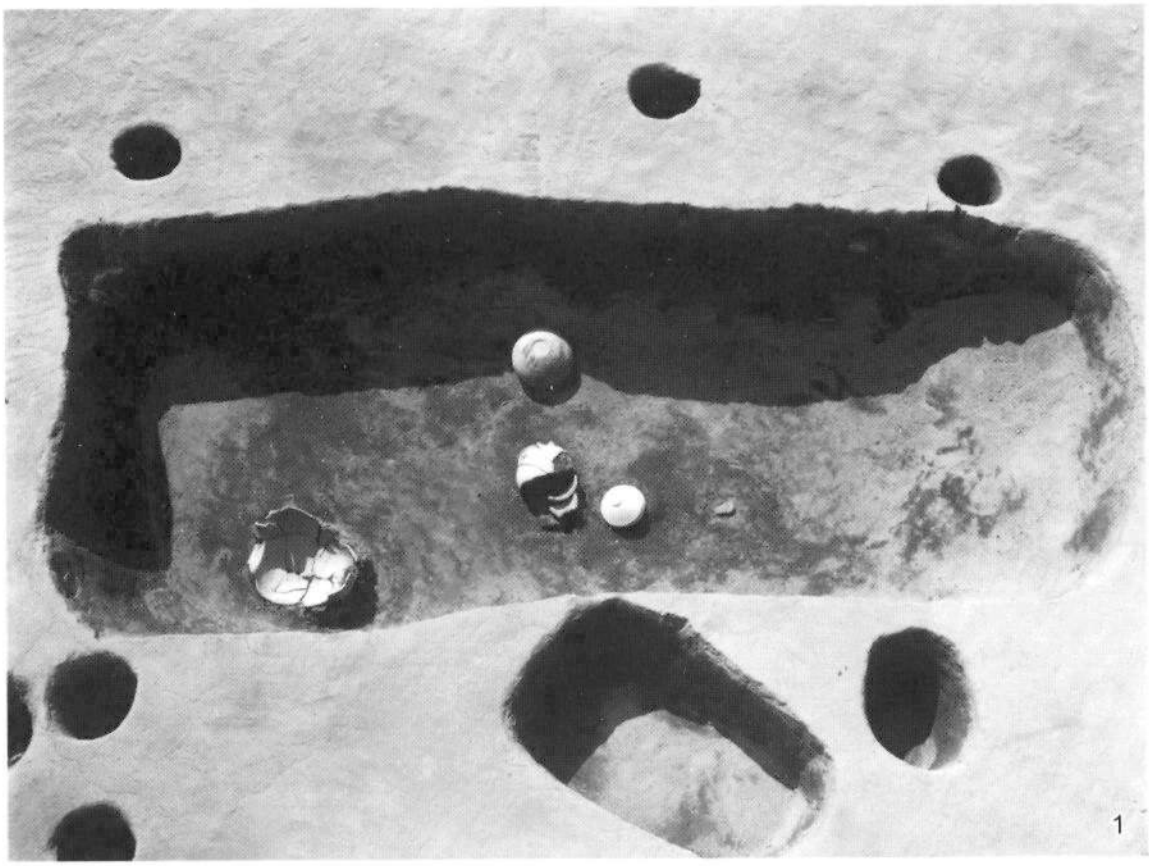


1.
才田SK51
（北から）

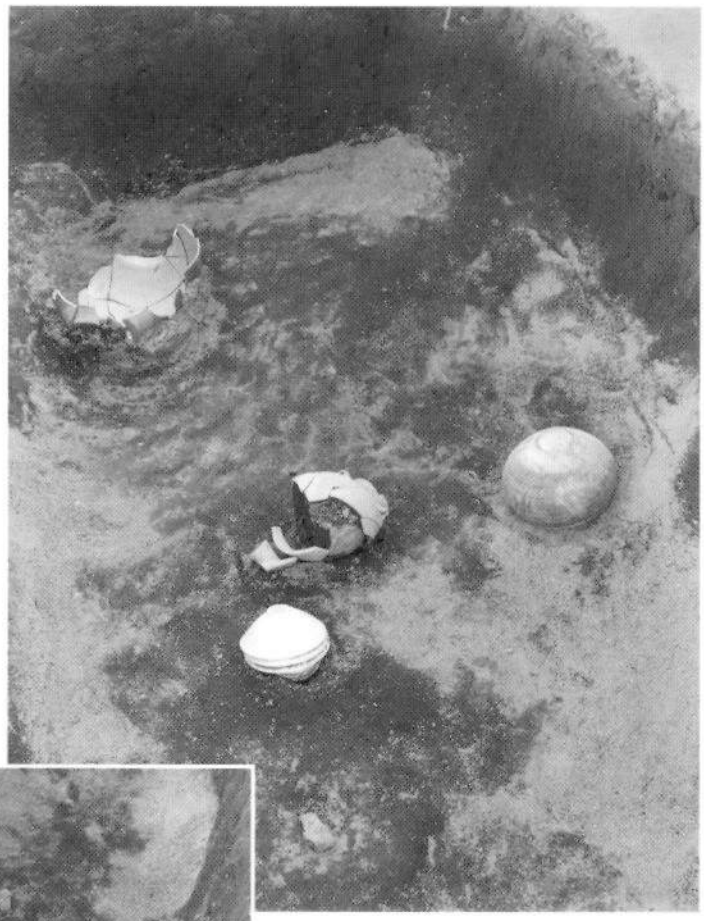


2.
才田SK52
（東から）

3.
才田SK68
（北から）

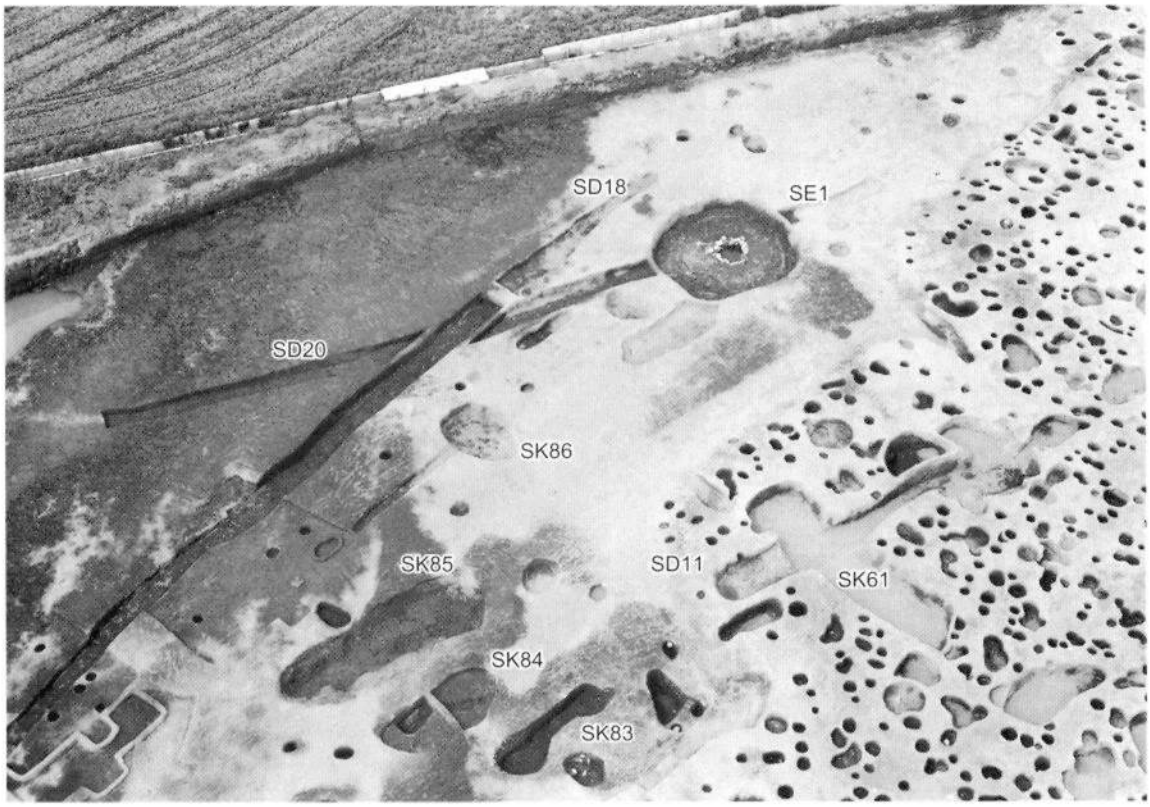


1. 才田SK50（東から）　　2. 才田SK50 陶磁器出土状態（南から）

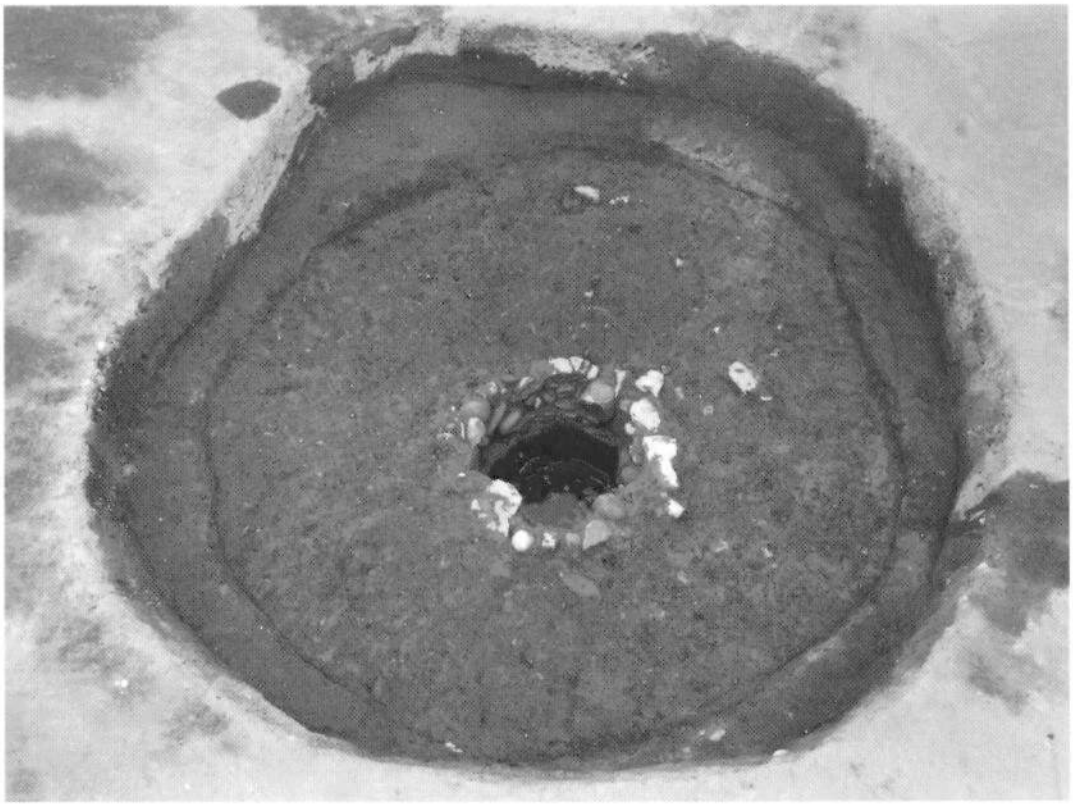


1.
才田SK50
遺物出土状態
（北から）

2.
才田SK50
遺物出土状態
（南から）

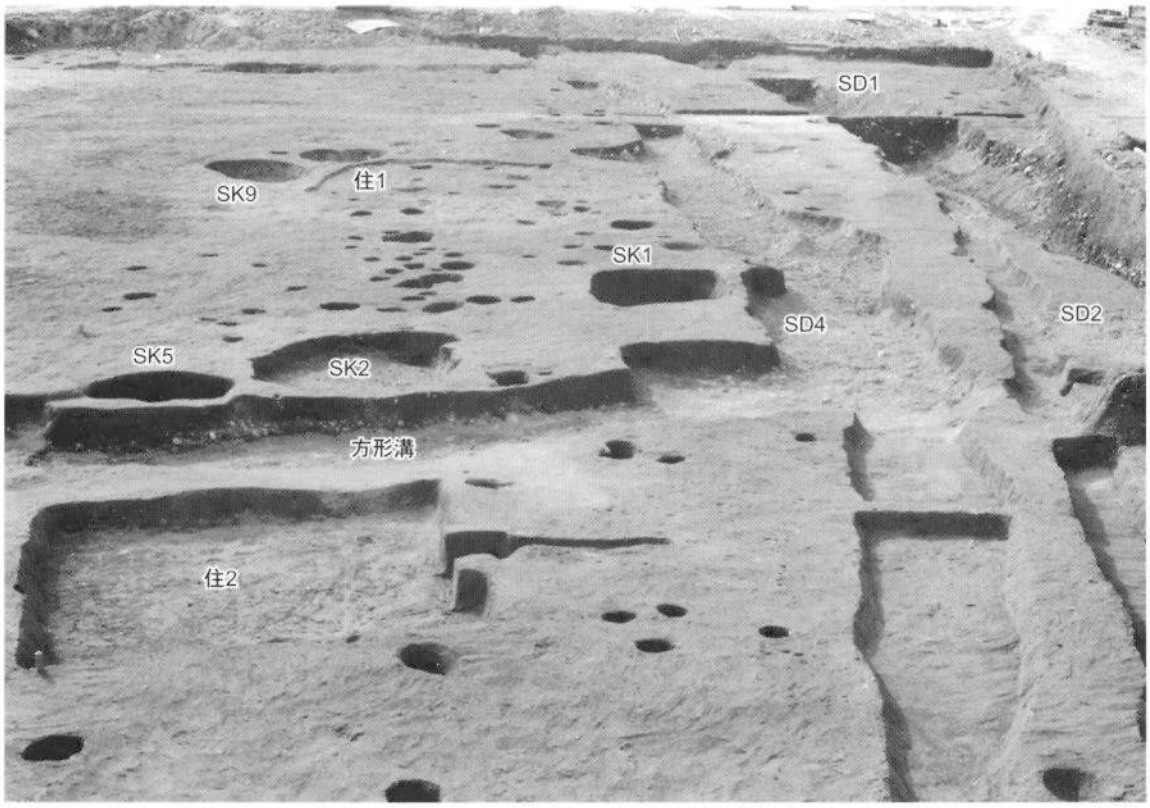


1. 才田SE1 周辺（北東から）

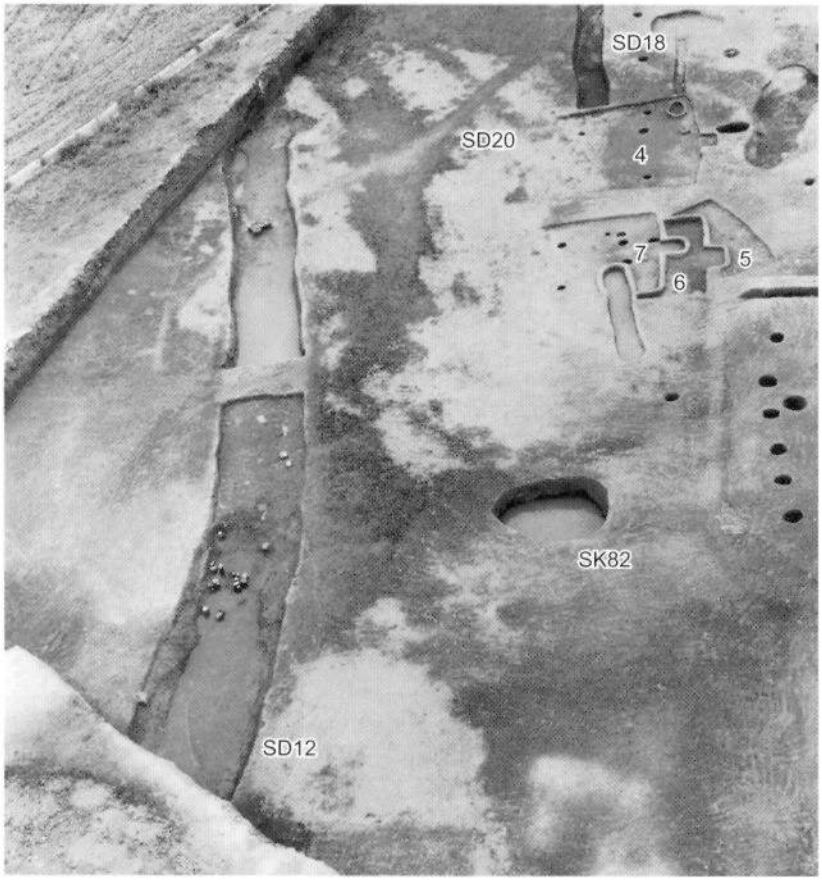


2. 才田SE1（南から）

1. 才田SD1・4（西から）

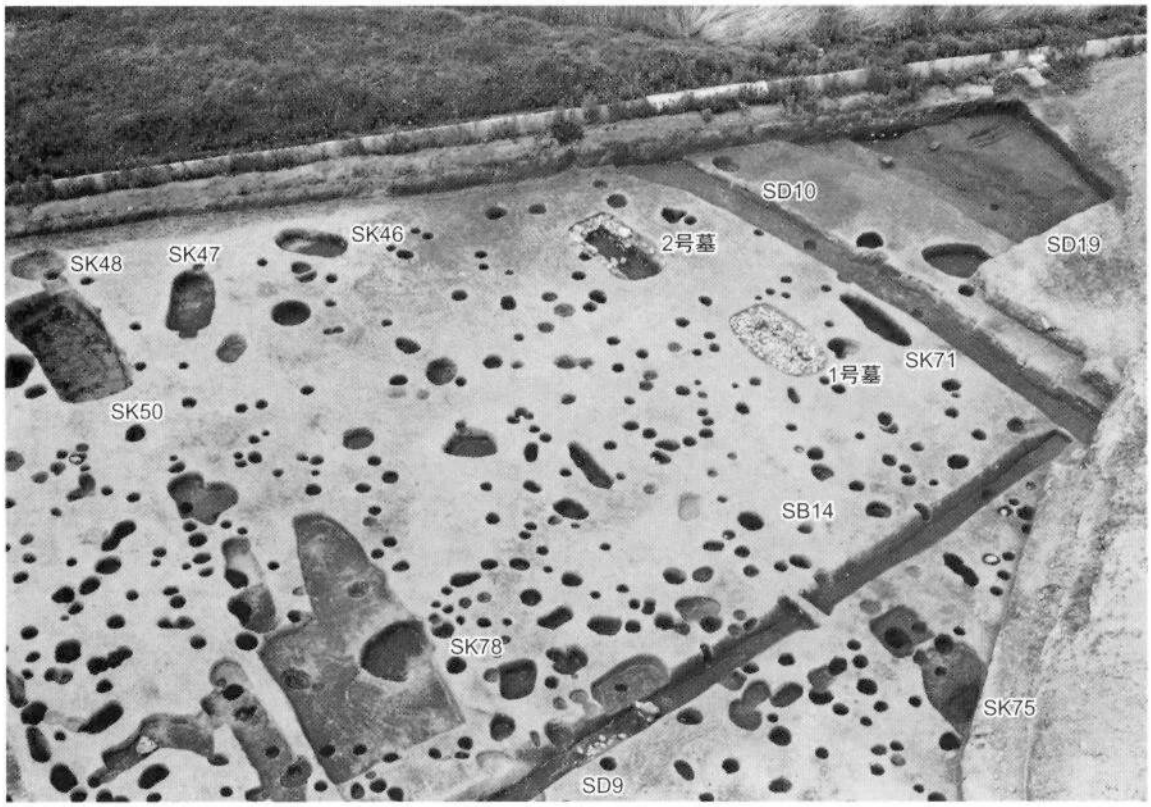


2. 才田SD1・4（東から）

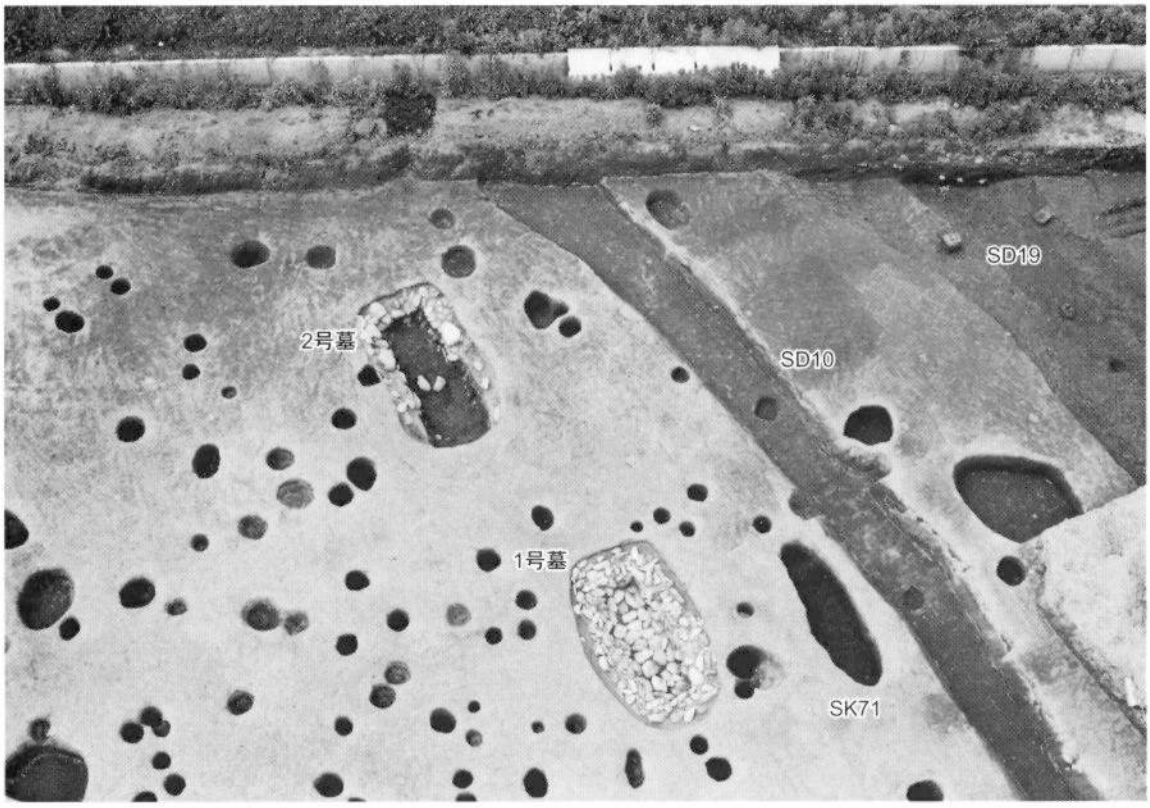


1. 才田SD12 周辺
（東から）

2. 才田SD12（東から）

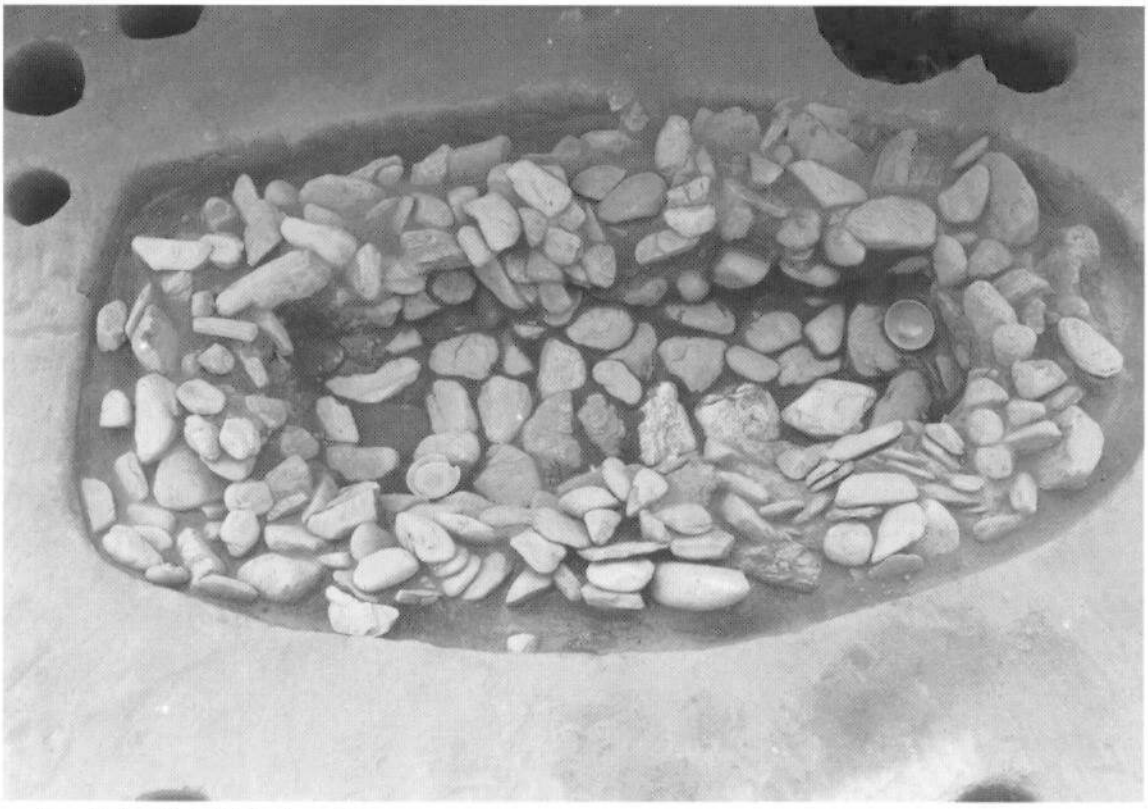


1. 才田SD9・10・19 周辺（北東から）



2. 才田1・2号木棺墓（北東から）

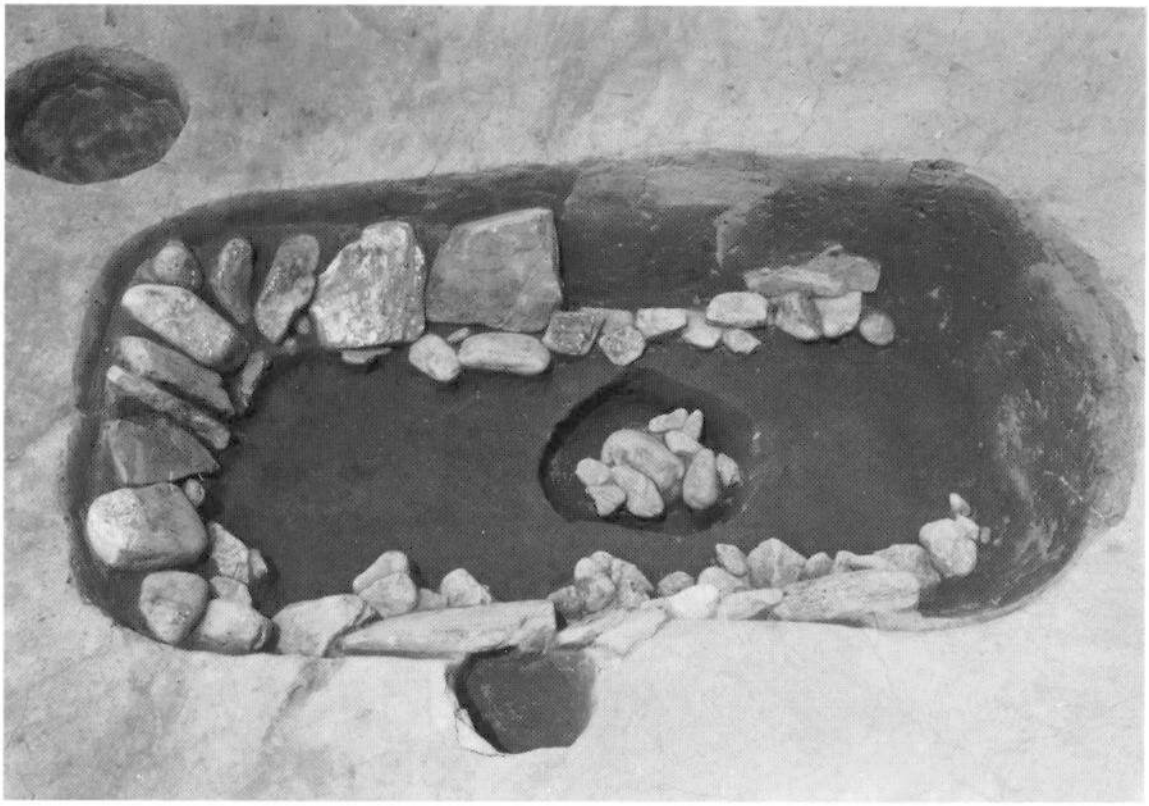
1. 才田1号木棺墓（東から）



2. 才田1号木棺墓主体部（東から）

1. 才田1号木棺墓遺物出土状態　2. 同上　3. 同上
4. 才田1号木棺墓基底部（東から）

1. 才田2号木棺墓（東から）



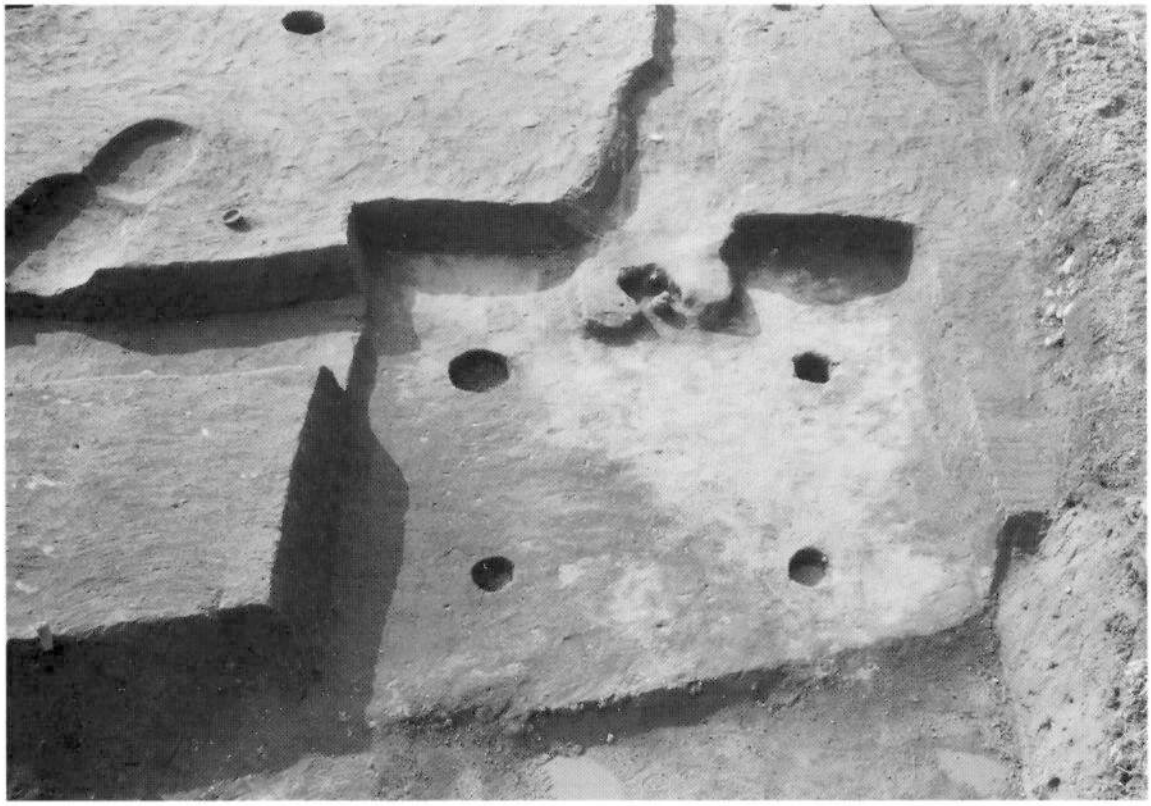
2. 才田2号木棺墓基底部（東から）

1. 才田1～3号住居跡と溝（東から）

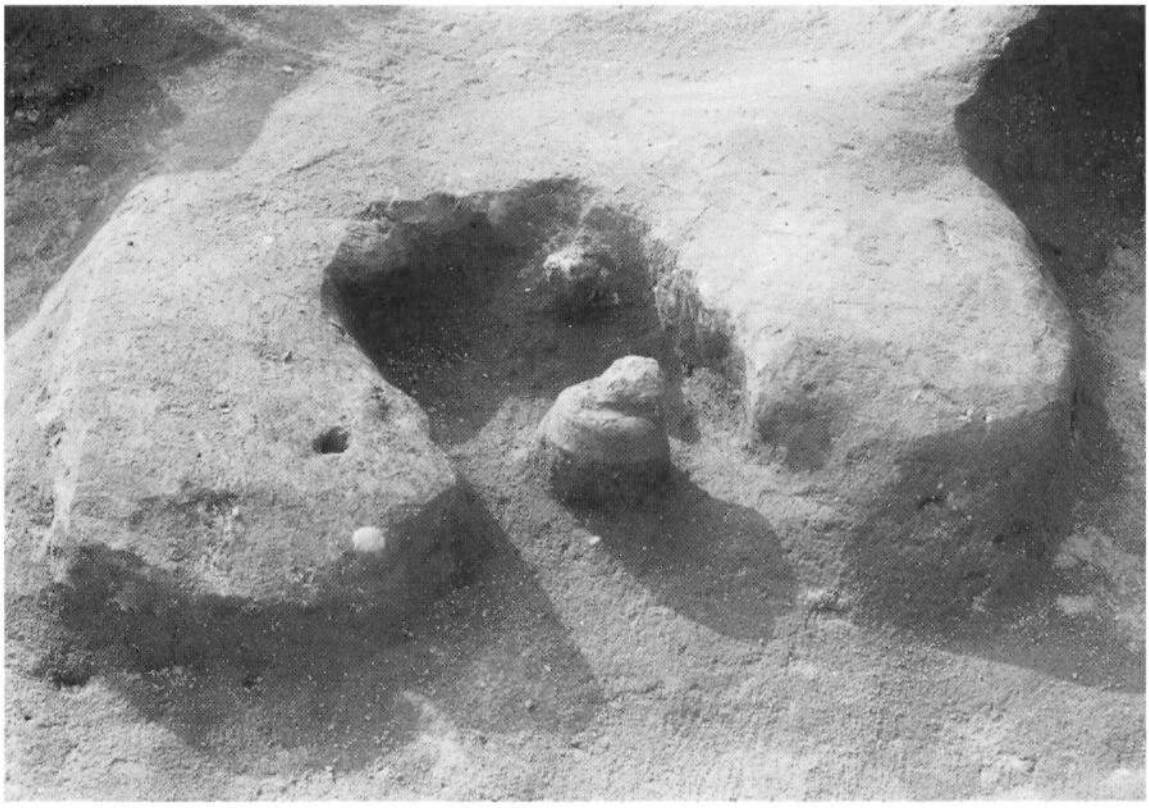
2. 才田2・3号住居跡と方形溝（南から）

1. 才田1号住居跡（南から）

2. 才田2号住居跡（南から）



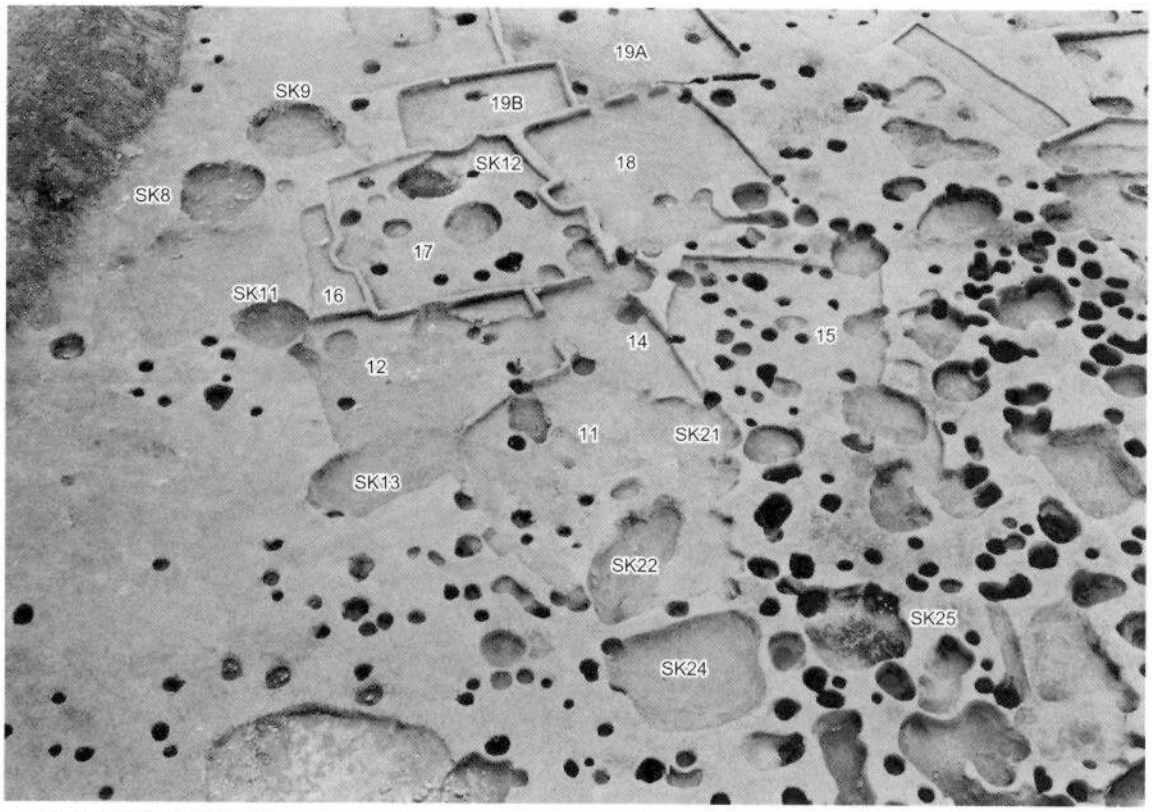
1. 才田3号住居跡（東から）



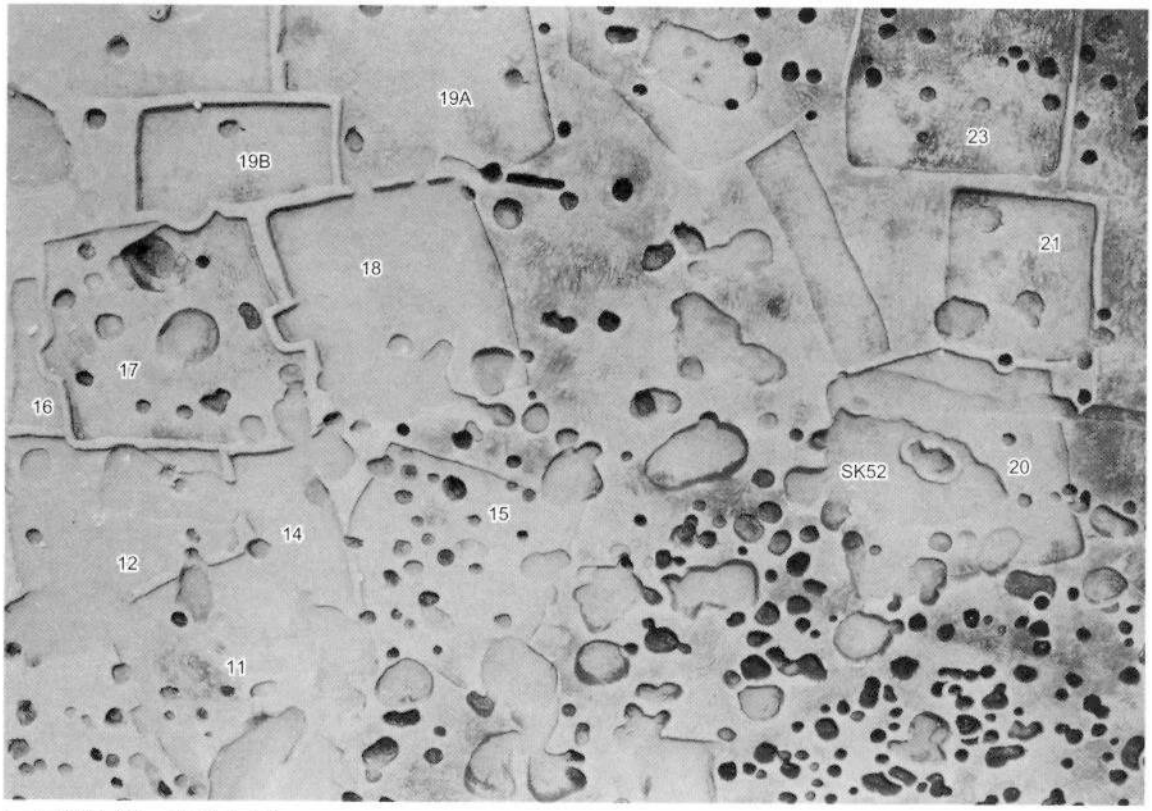
2. 才田3号住居跡 カマド（東から）

1. 才田住居群（北西から）

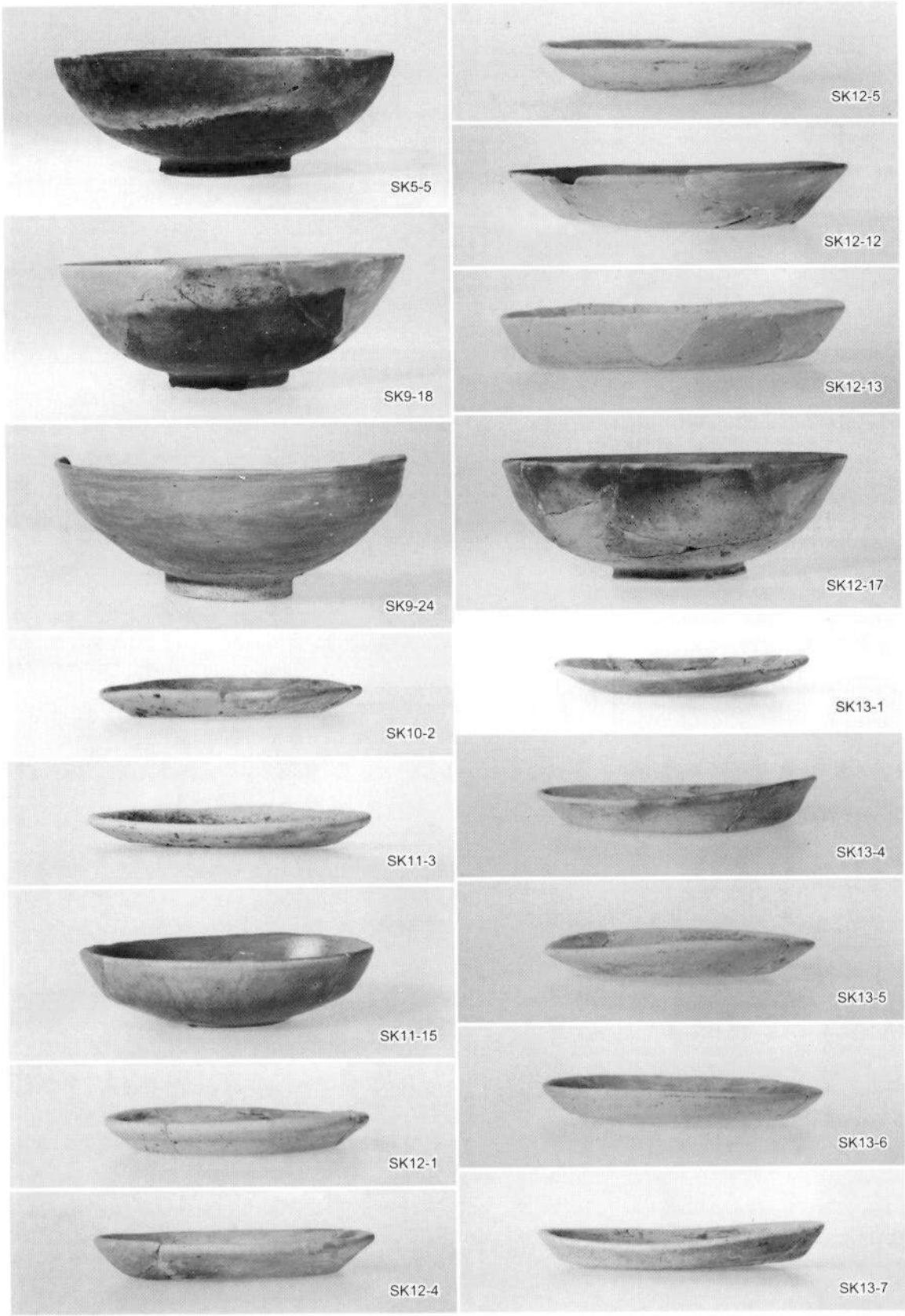
2. 才田住居群（西から）



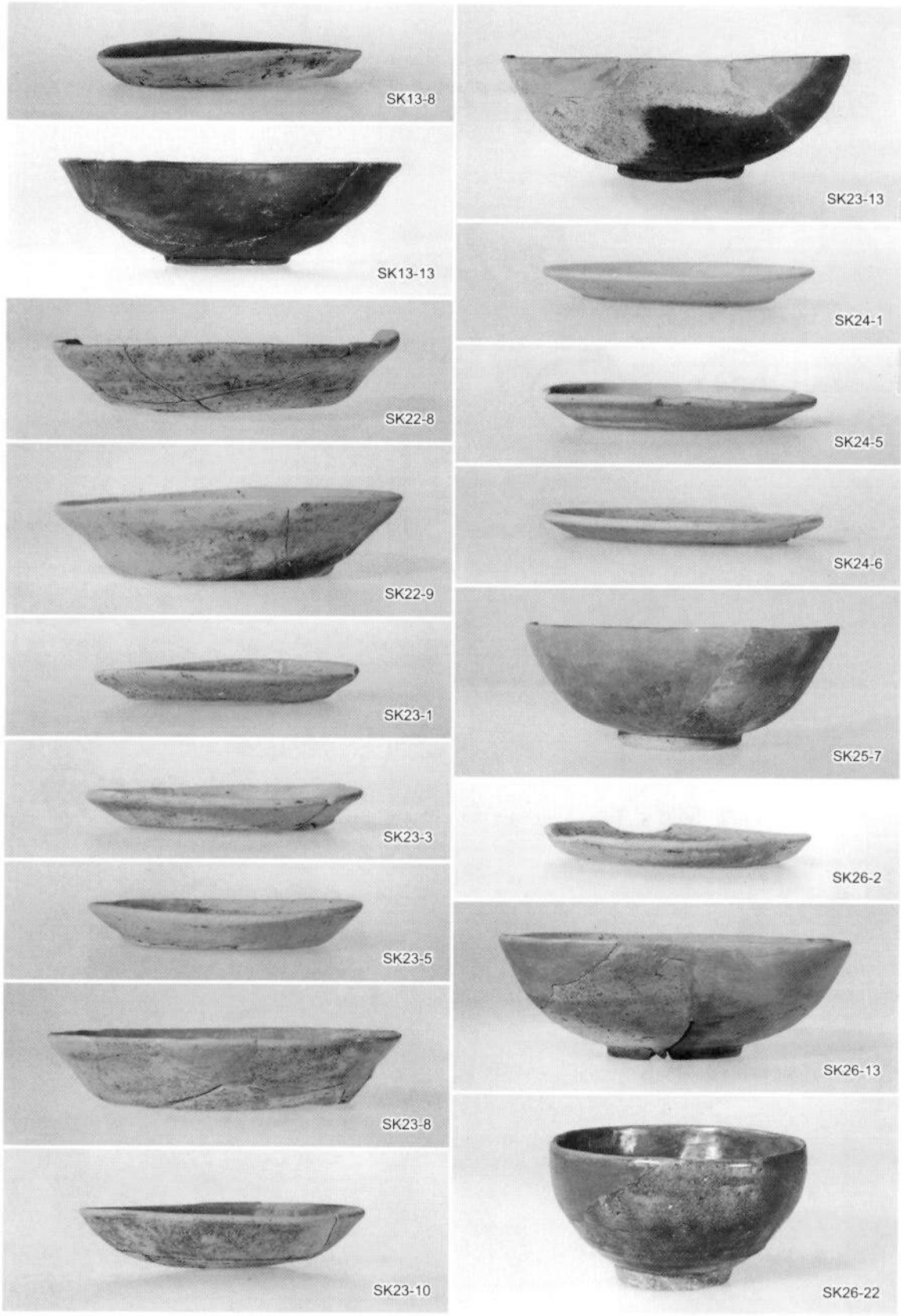
1. 才田住居群（北西から）



2. 才田住居群（北西から）

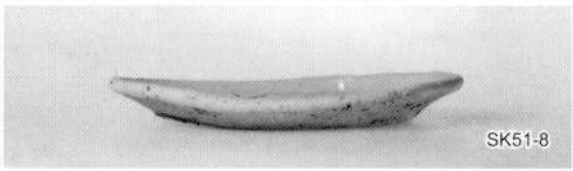


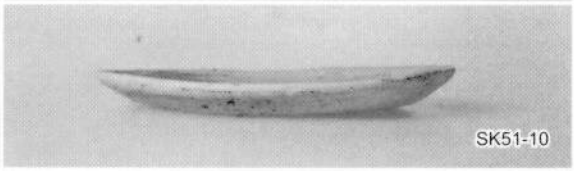
才田出土土器・陶磁器1（SK5・9・10・11・12・13）

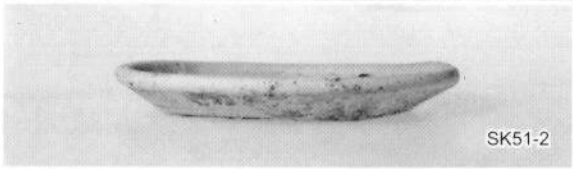


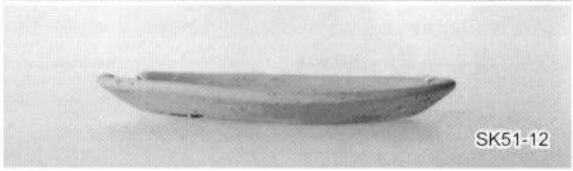
才田出土土器・陶磁器2（SK13・22・23・24・25・26）

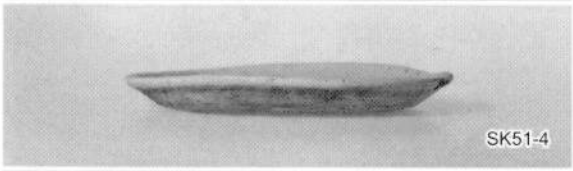
才田出土土器・陶磁器3（SK31・36・40・41・44・48・50）

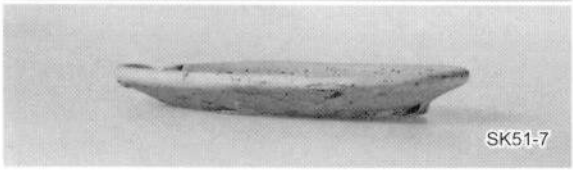


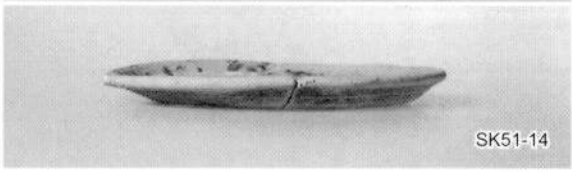




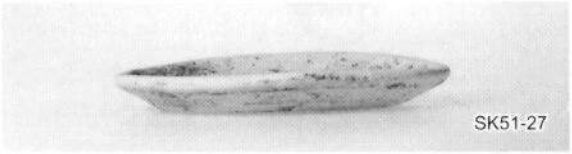


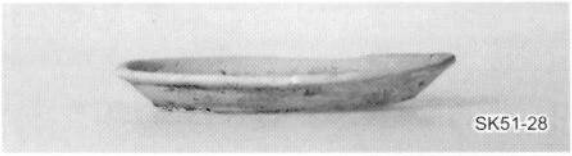


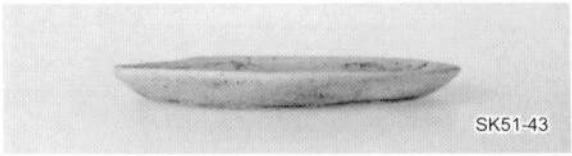


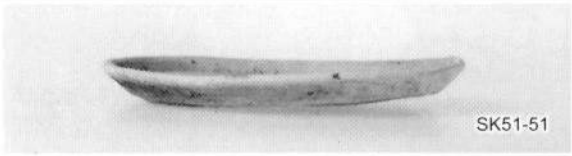


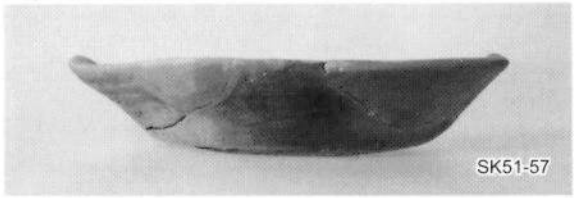
才田出土土器・陶磁器4（SK50・51）

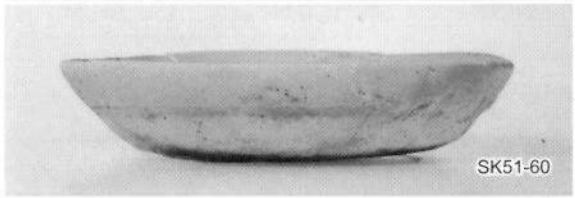


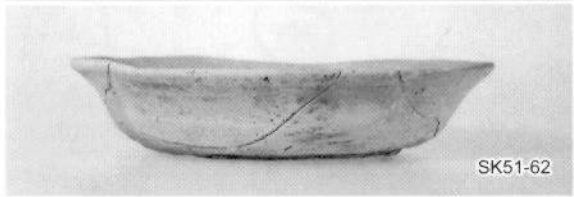


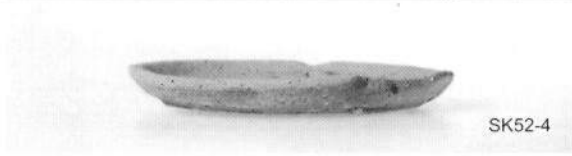


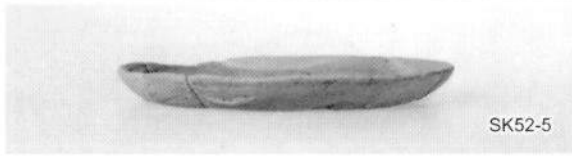


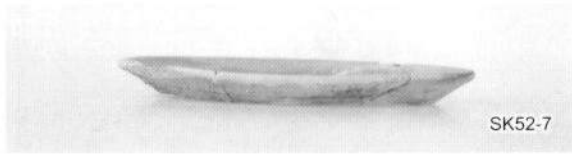


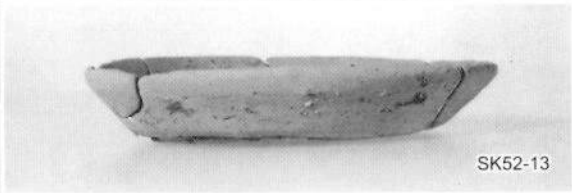


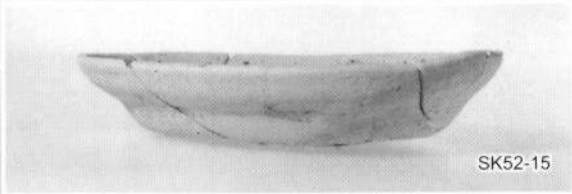


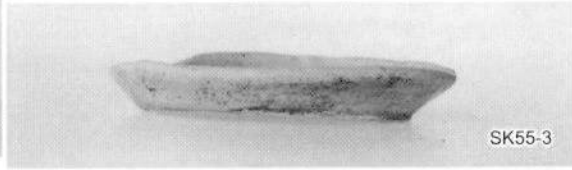


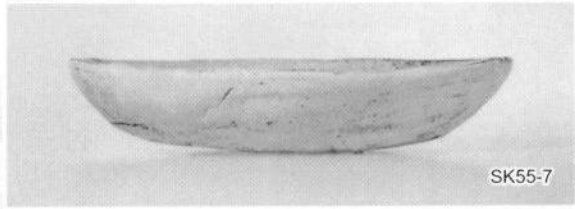




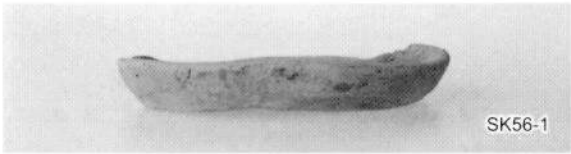




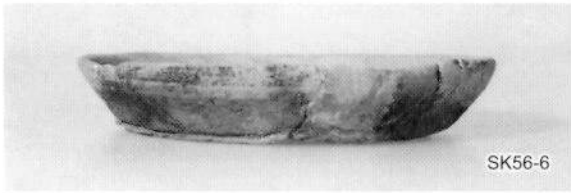


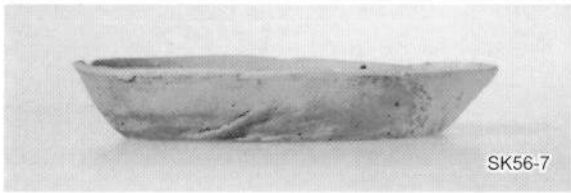


才田出土土器・陶磁器5（SK51・52・55）


SK56-1

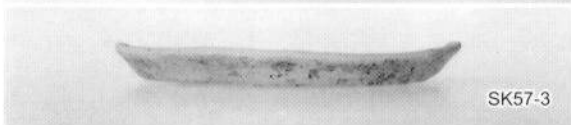
SK56-2


SK56-6


SK56-7

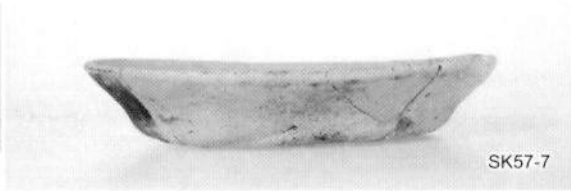
SK56-18

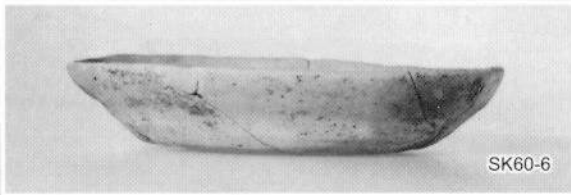
SK56-19


SK57-3

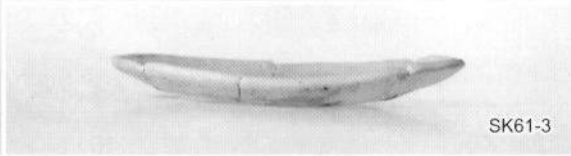
SK57-5

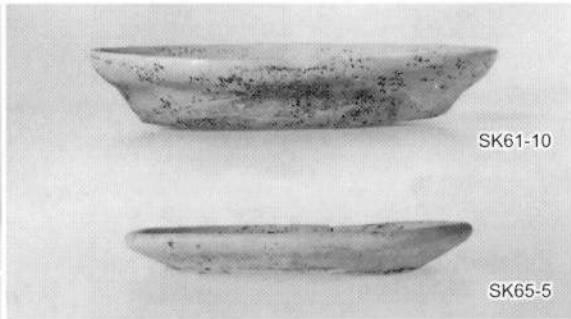
SK57-6


SK57-7


SK60-6

SK61-2

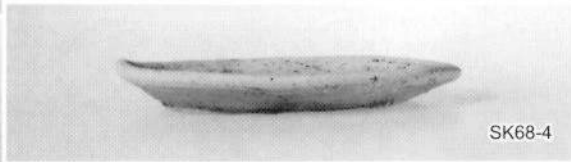

SK61-3

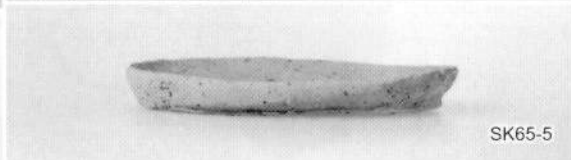

SK61-10

SK65-5

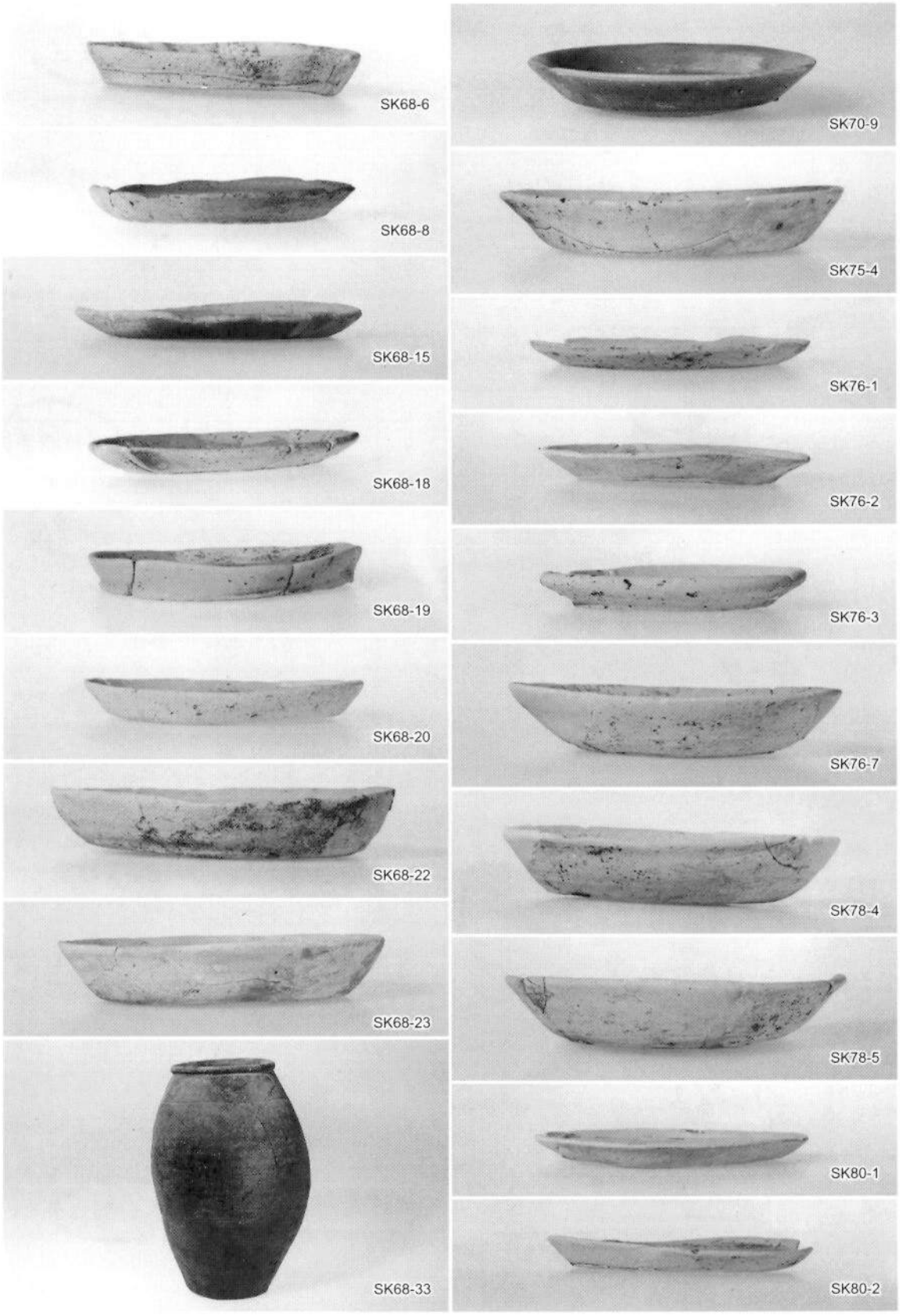
SK65-16

SK68-3

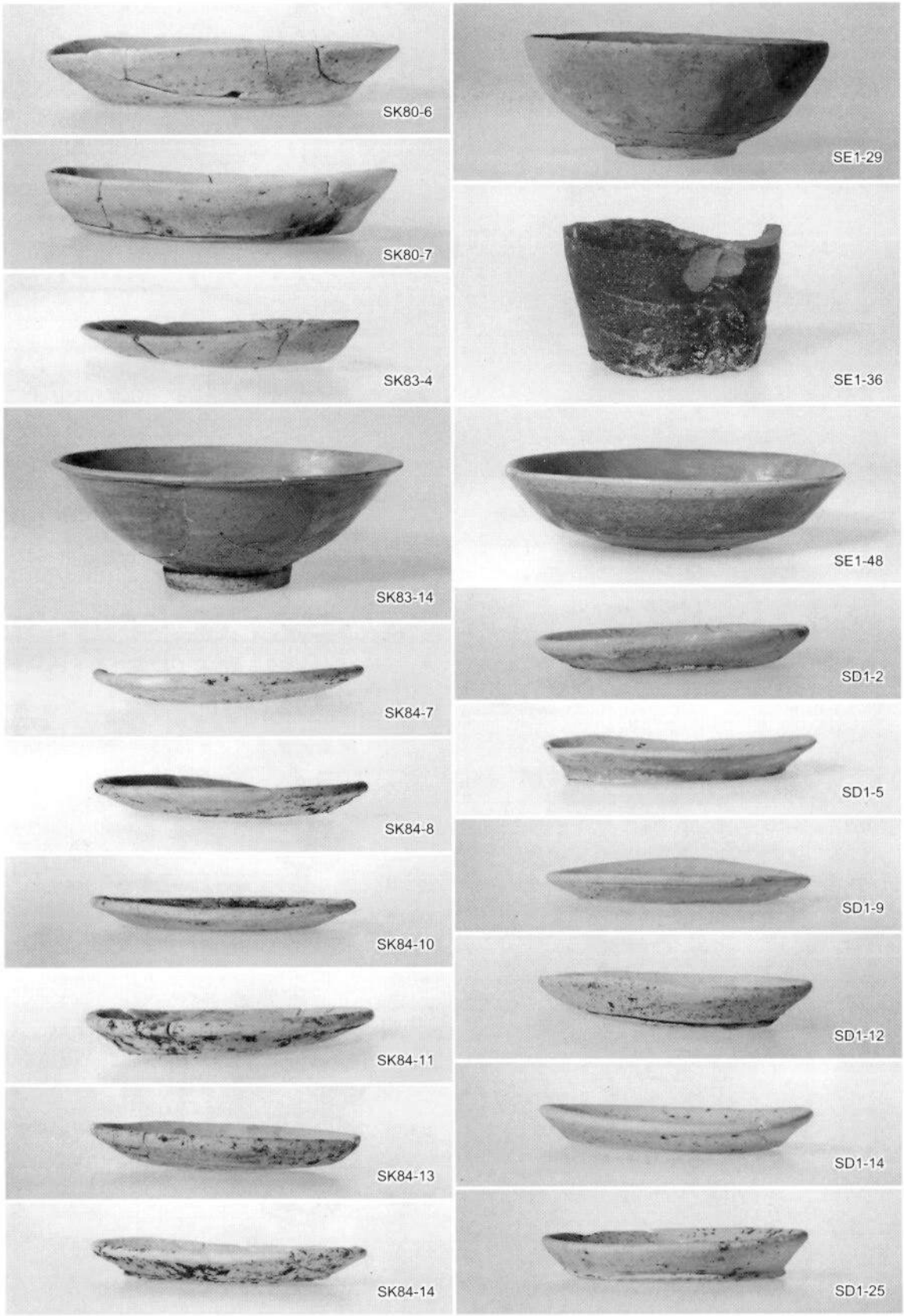

SK68-4


SK65-5

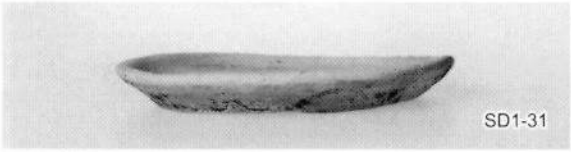
才田出土土器・陶磁器6（SK56・57・60・61・65・68）

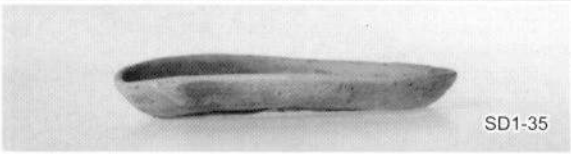


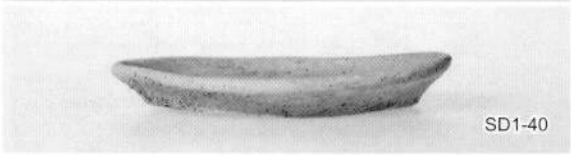
才田出土土器・陶磁器7（SK68・70・75・76・78・80）

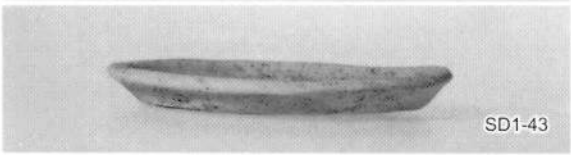


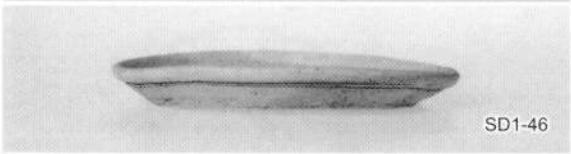
才田出土土器・陶磁器8（SK80・83・84,SE1、SD1）

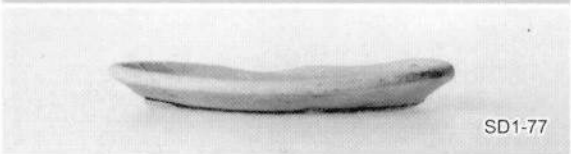


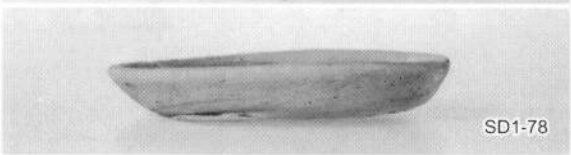


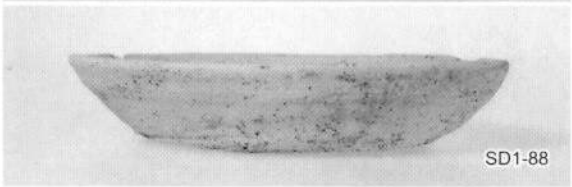


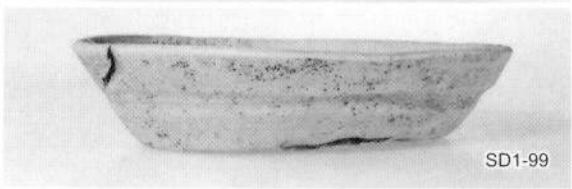


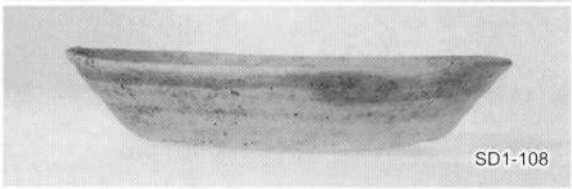


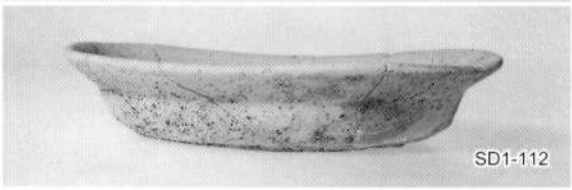


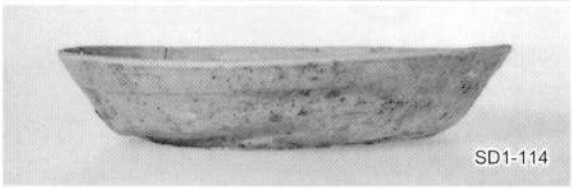


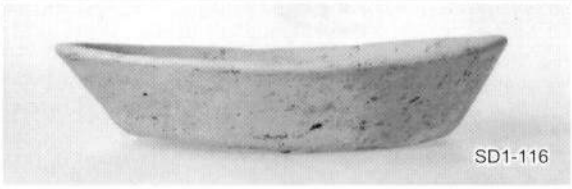




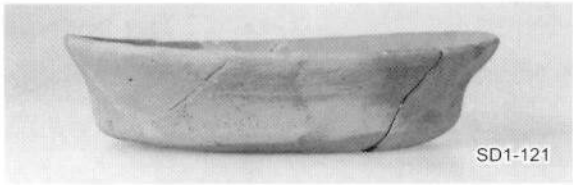


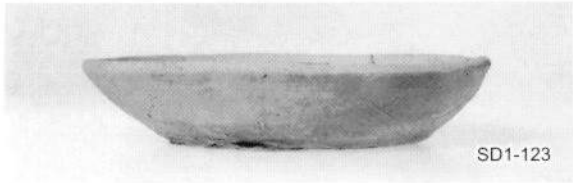


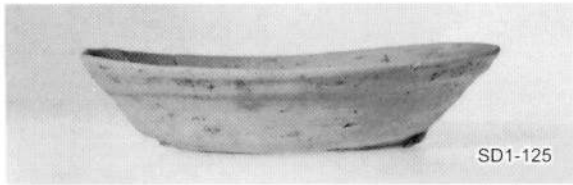


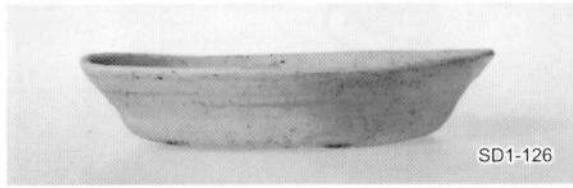


才田出土土器・陶磁器9（SD1）

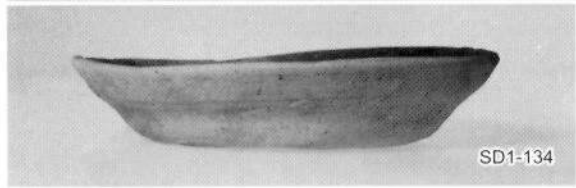

SD1-121

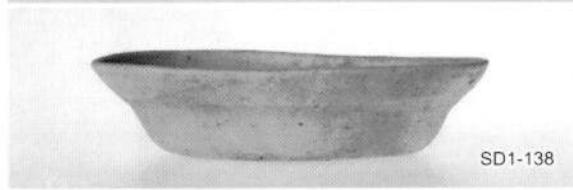

SD1-123

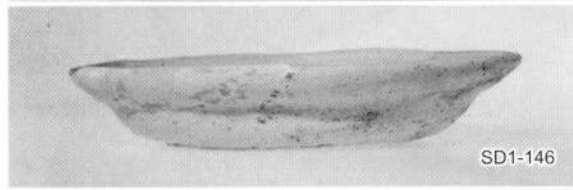

SD1-125

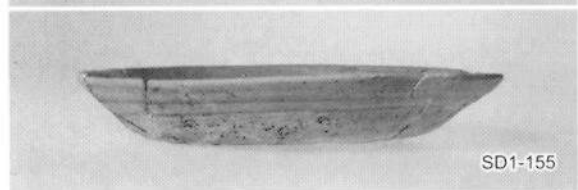

SD1-126

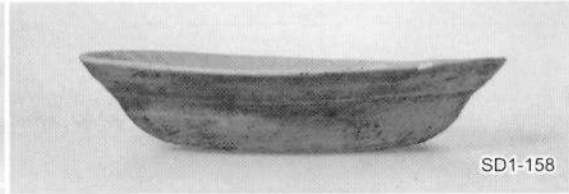
SD1-130


SD1-134

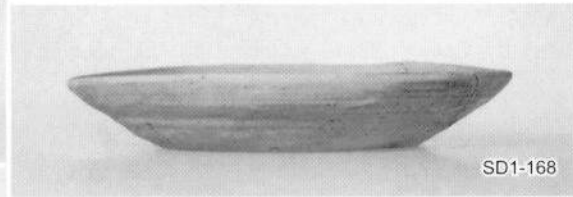

SD1-138

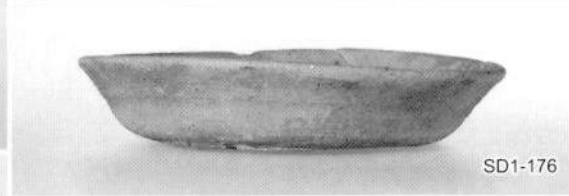

SD1-146

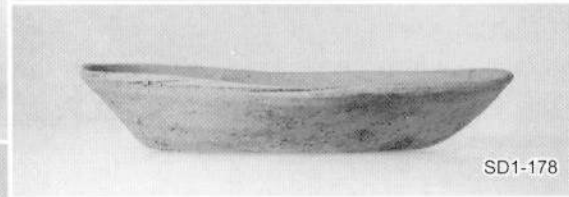

SD1-155

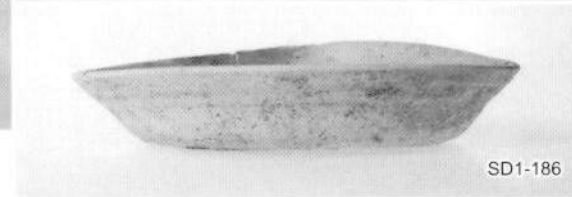

SD1-158

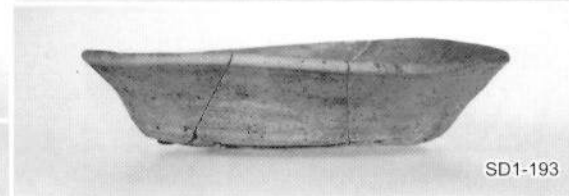
SD1-161


SD1-168


SD1-176

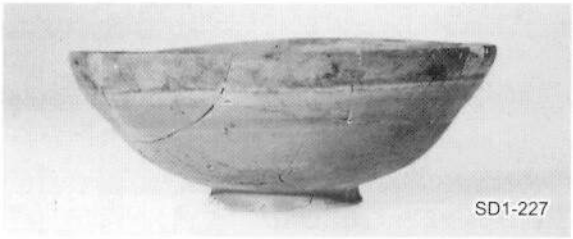

SD1-178


SD1-186


SD1-193

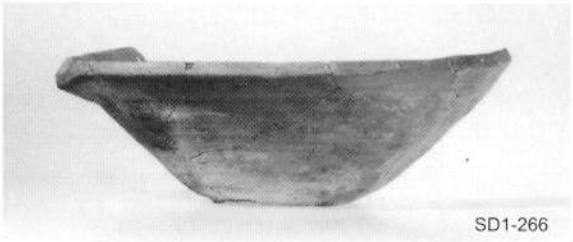
SD1-216

才田出土土器・陶磁器10（SD1）


SD1-227

SD1-258

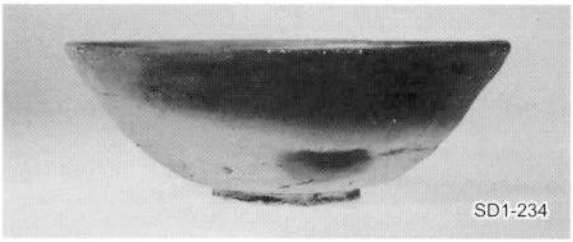
SD1-228


SD1-266

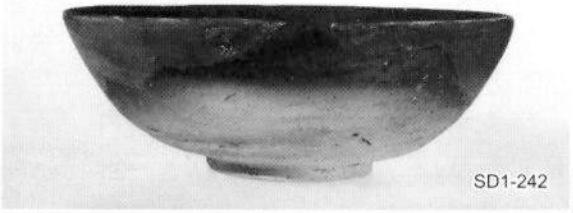
SD1-229

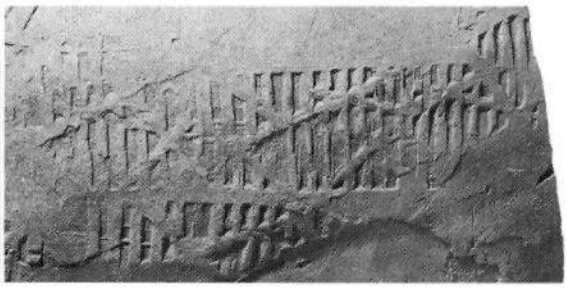
SD1-268

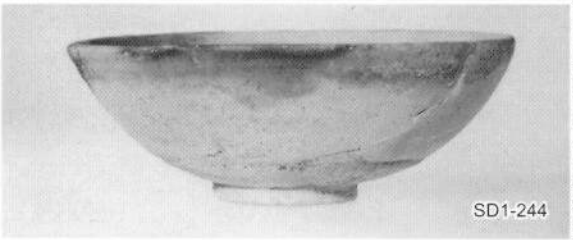
SD1-232


SD1-234

SD1-272

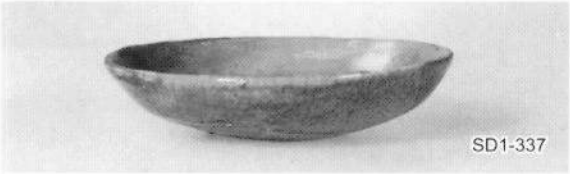

SD1-242



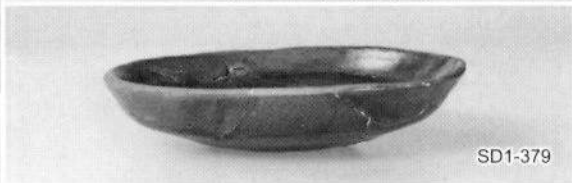

SD1-244

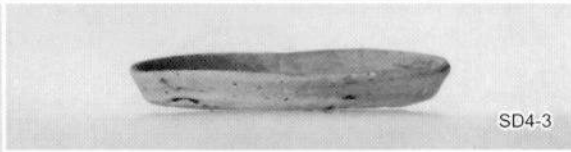
才田出土土器・陶磁器11（SD1）

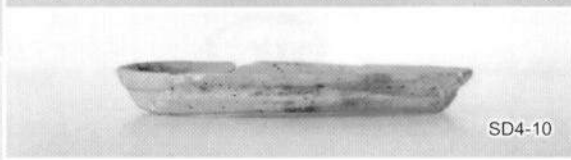
才田出土土器・陶磁器12（SD1）

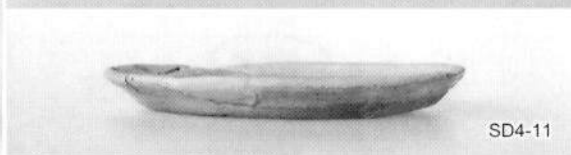


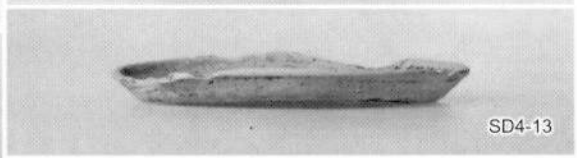
才田出土土器・陶磁器13（SD1）

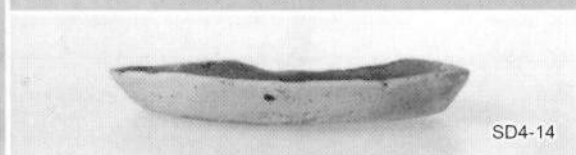


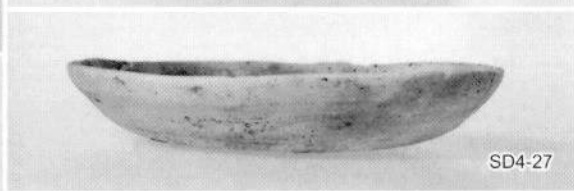


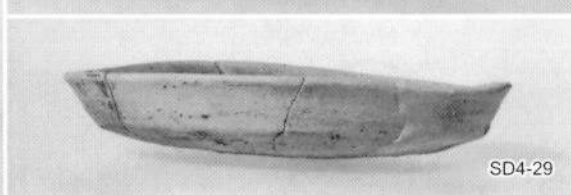




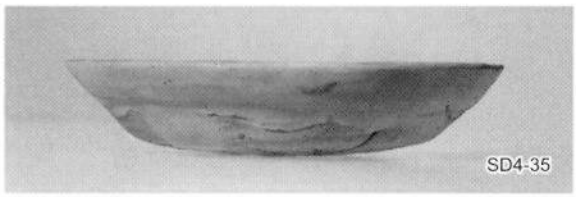


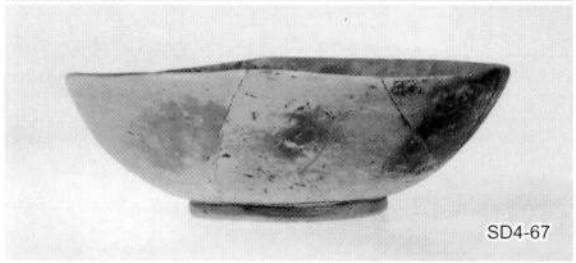


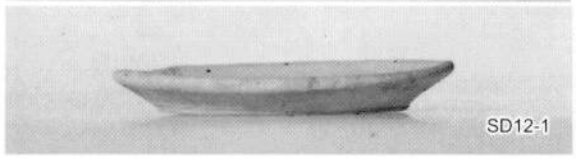


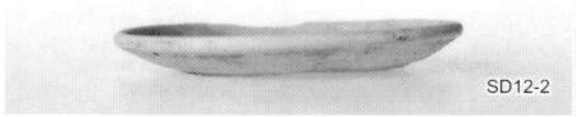


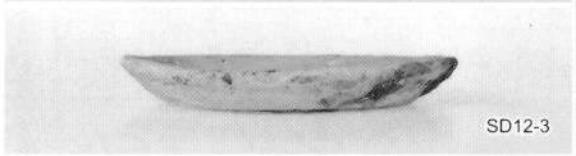
才田出土土器・陶磁器14（SD1・4）

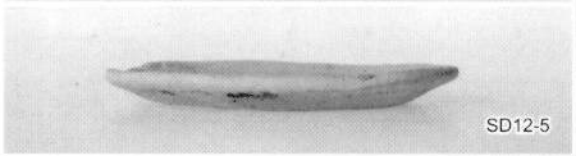


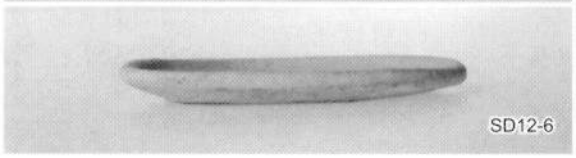


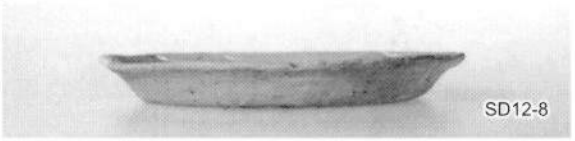


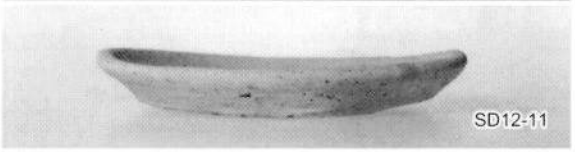


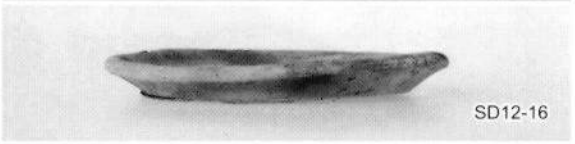


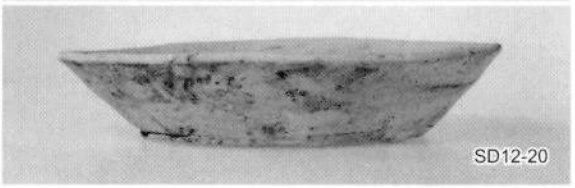


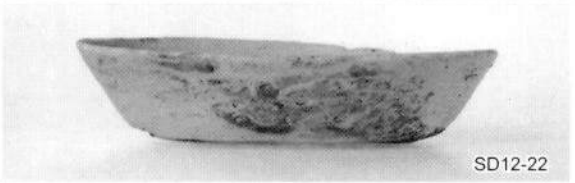


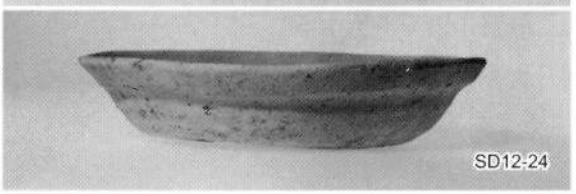


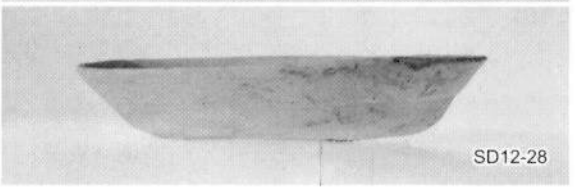




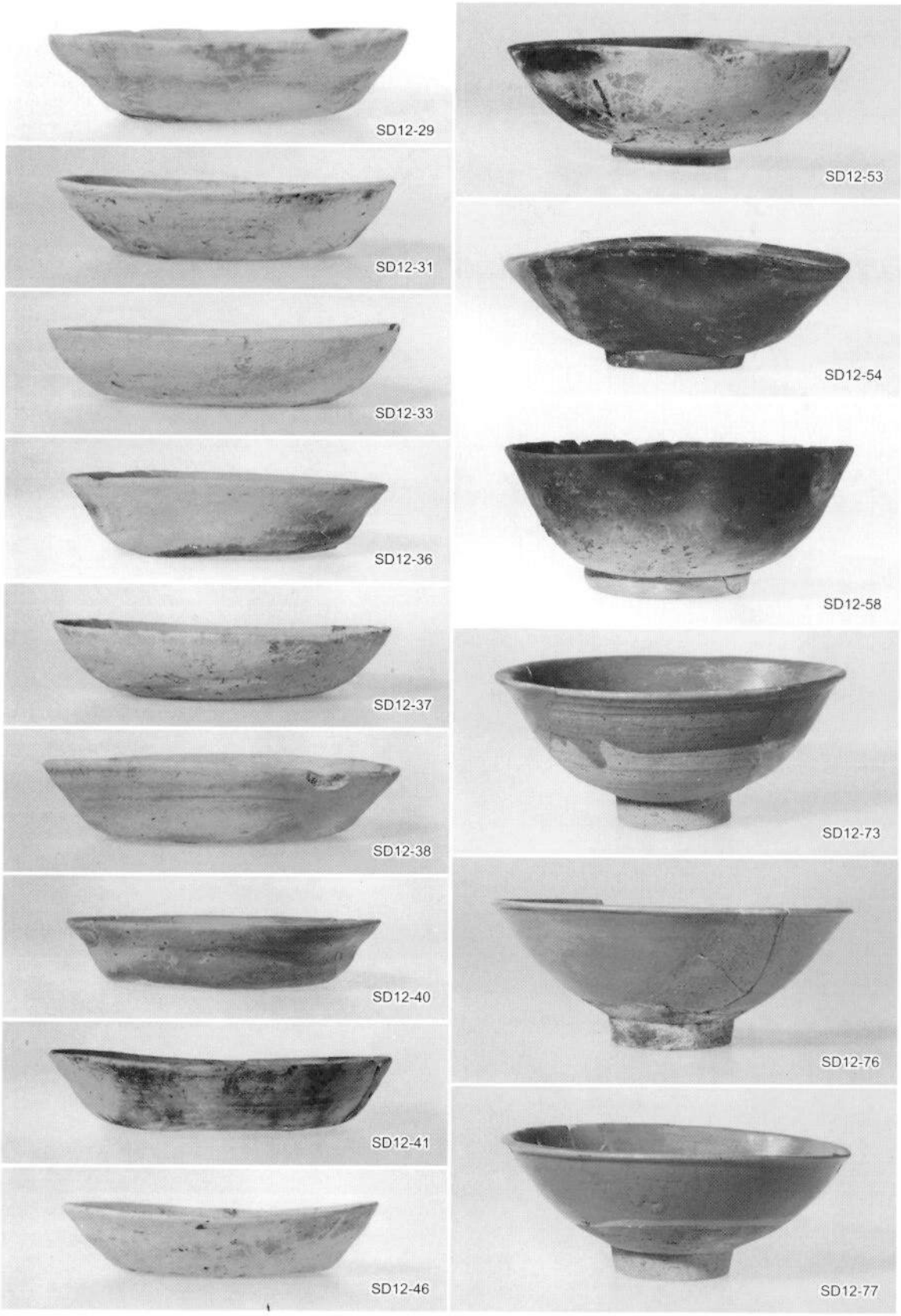




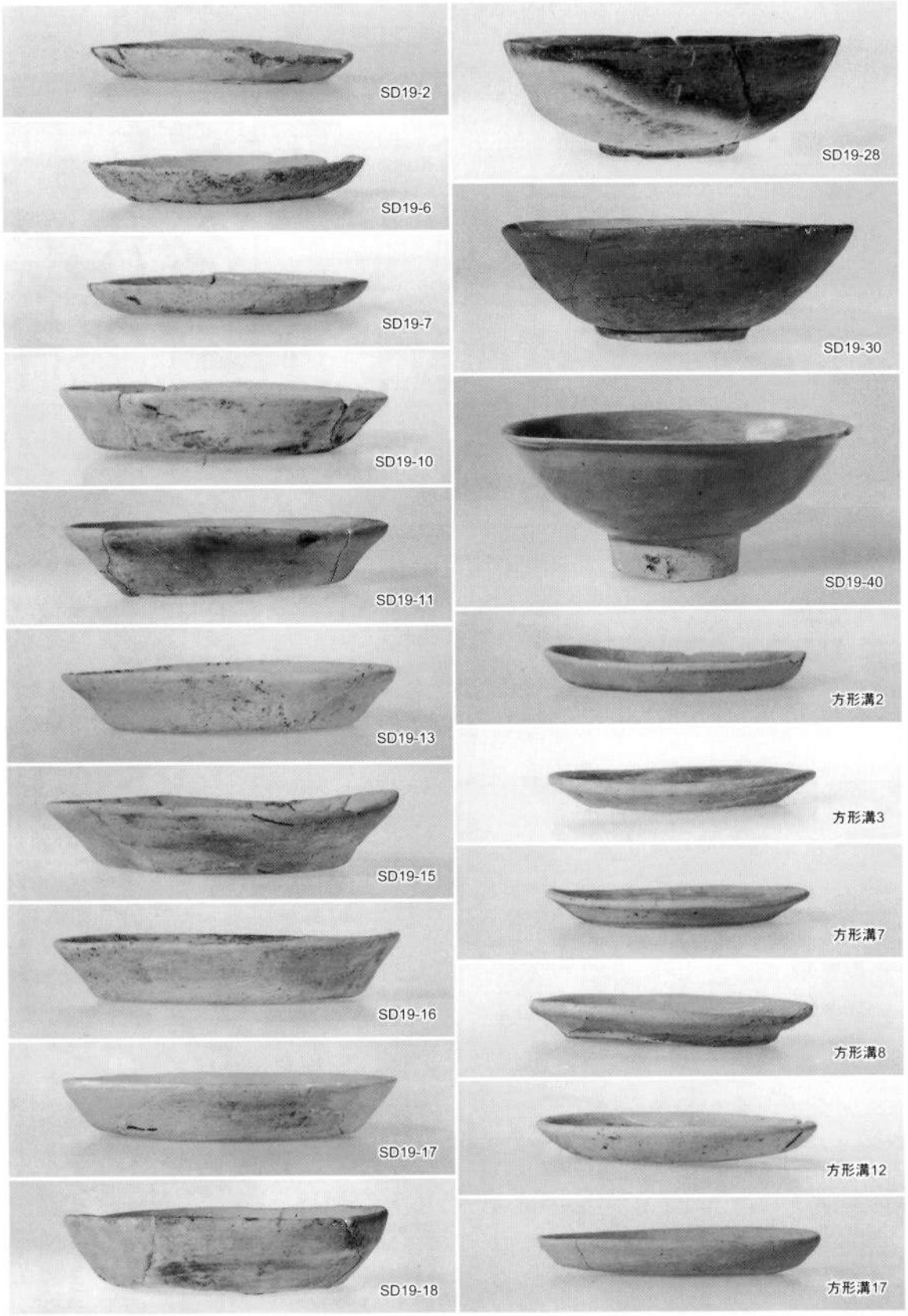




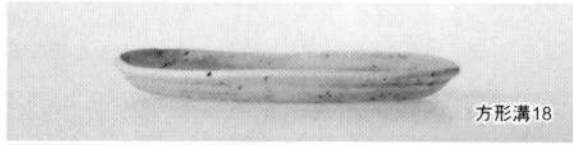
才田出土土器・陶磁器15（SD4・9・12）

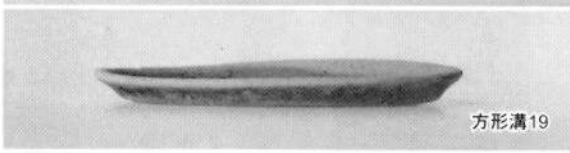


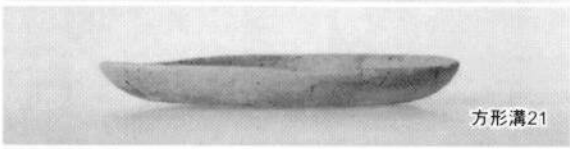
才田出土土器・陶磁器16（SD12）

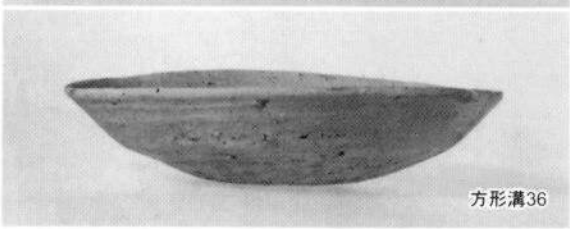


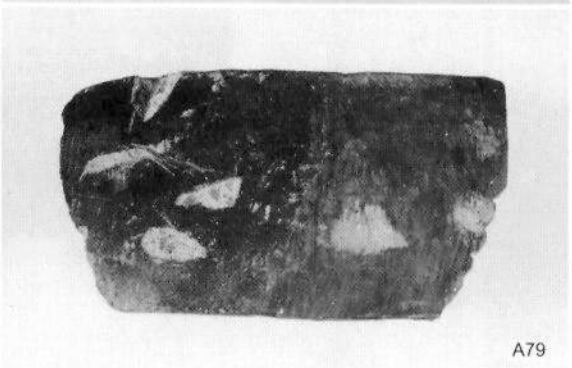
才田出土土器・陶磁器17（SD19、方形溝）











才田出土土器・陶磁器18、石鍋（方形溝 その他）

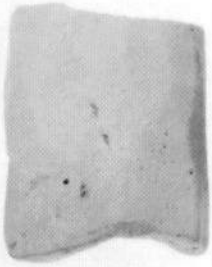
方形溝112

方形溝113

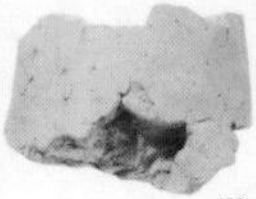
A83

A84

427



428

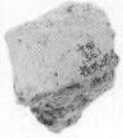


429

(SD1)

A86

SD1-431



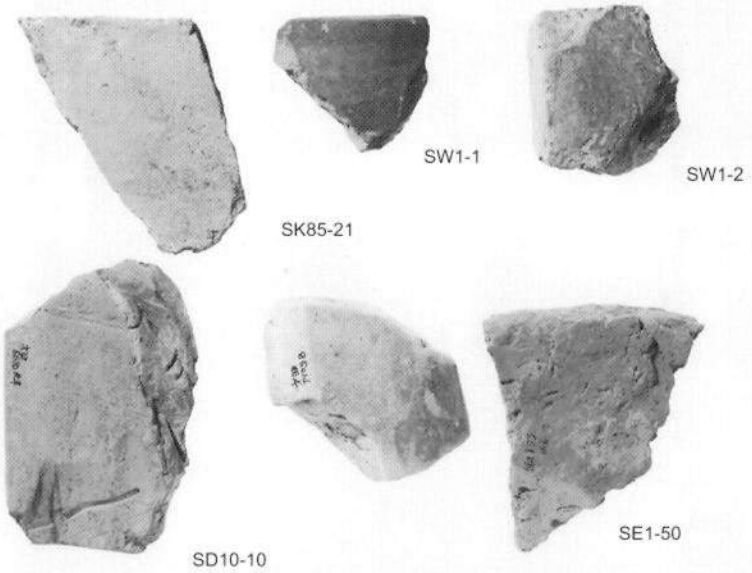
24-14

ふいご羽口

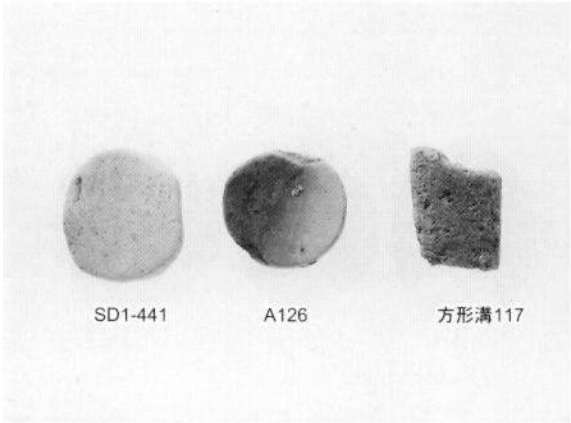
SD1-430

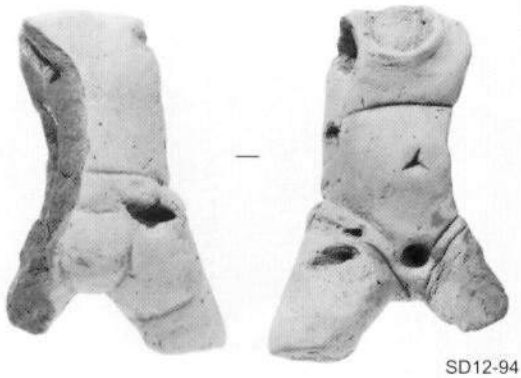
A85

SB9-11



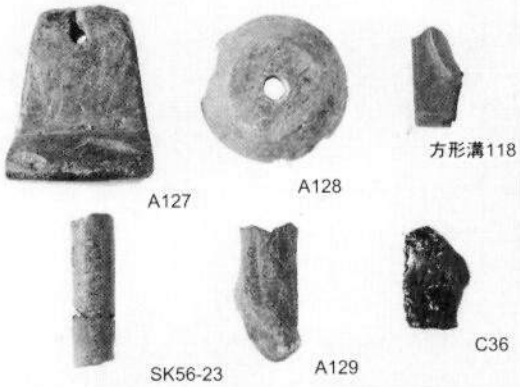
土錘

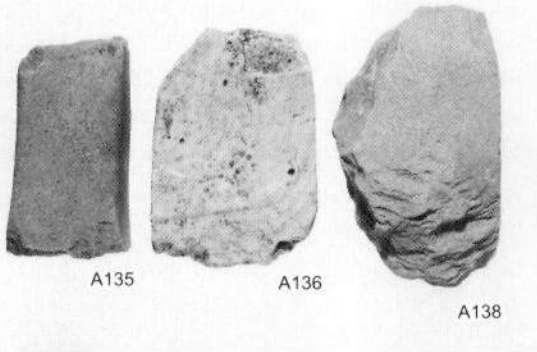


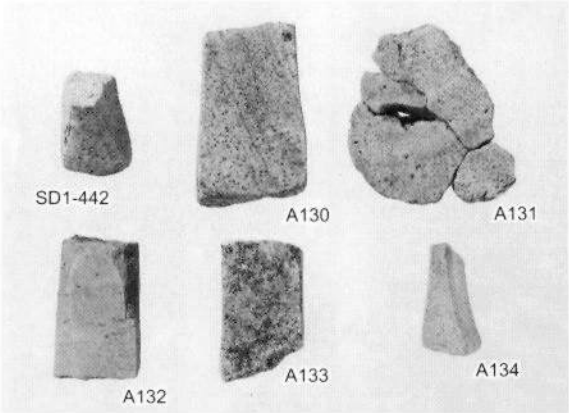


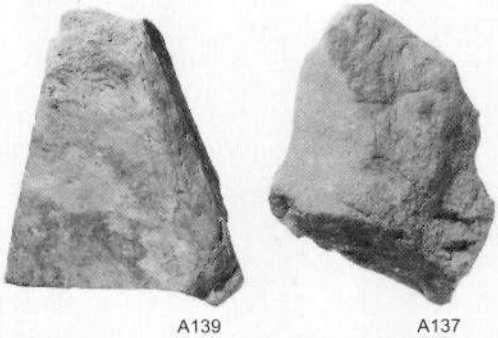
SD12-94

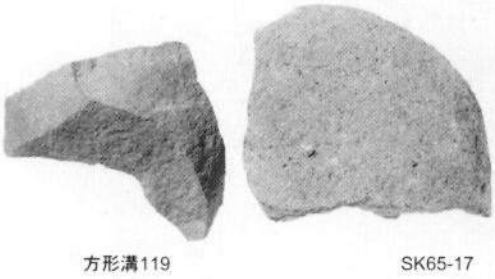
才田出土土製品2

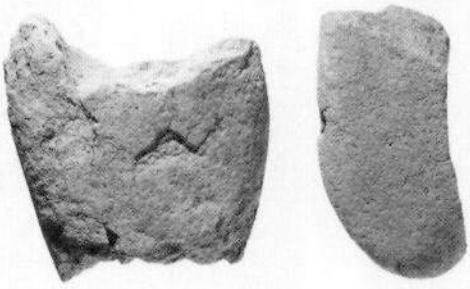

A127
A128
方形溝118
SK56-23
A129
C36


A135
A136
A138


SD1-442
A130
A131
A132
A133
A134


A139
A137

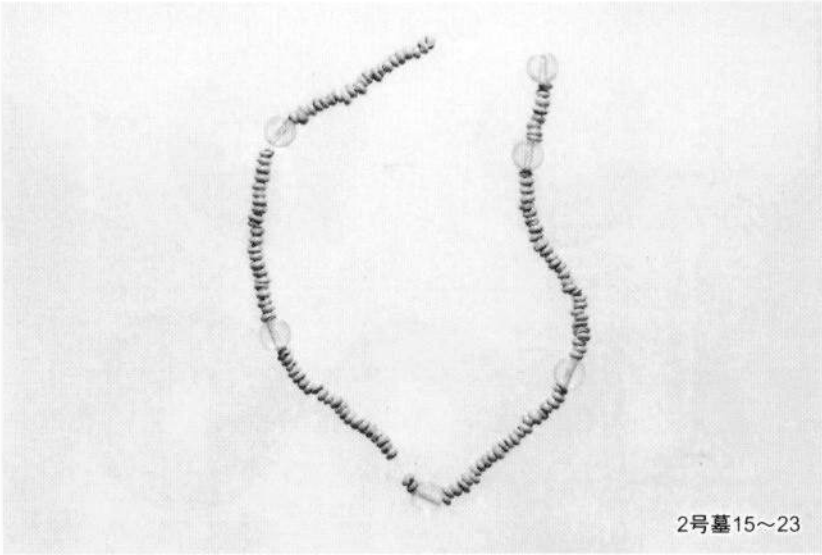

方形溝119
SK65-17

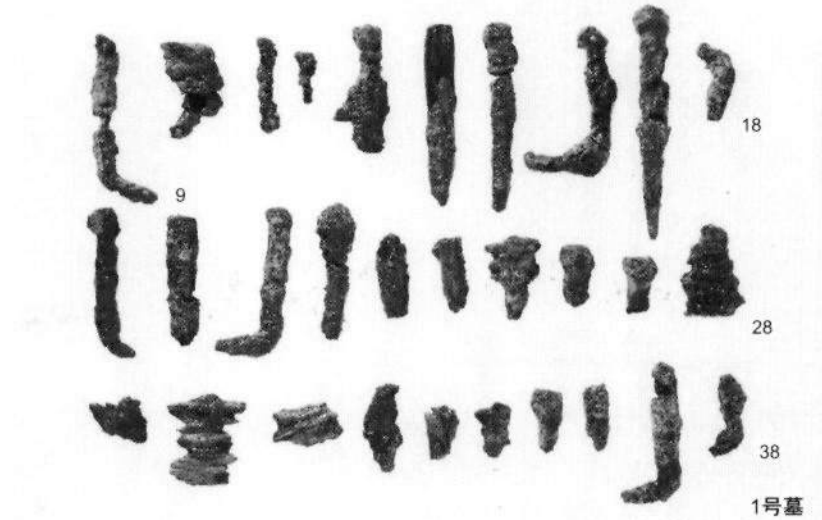

SD12-95
SK26-23

SD10-13

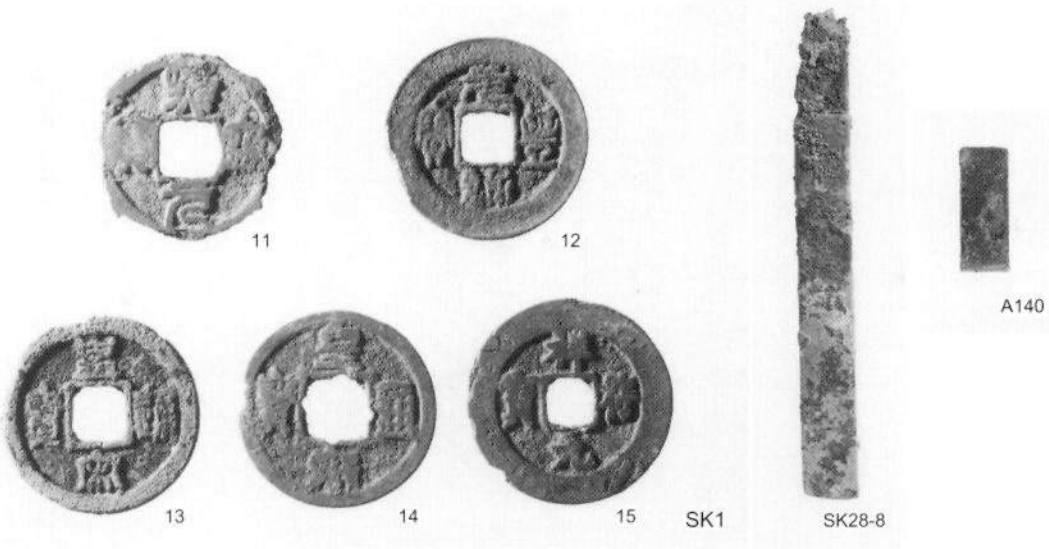
13-1
33-23
29-9

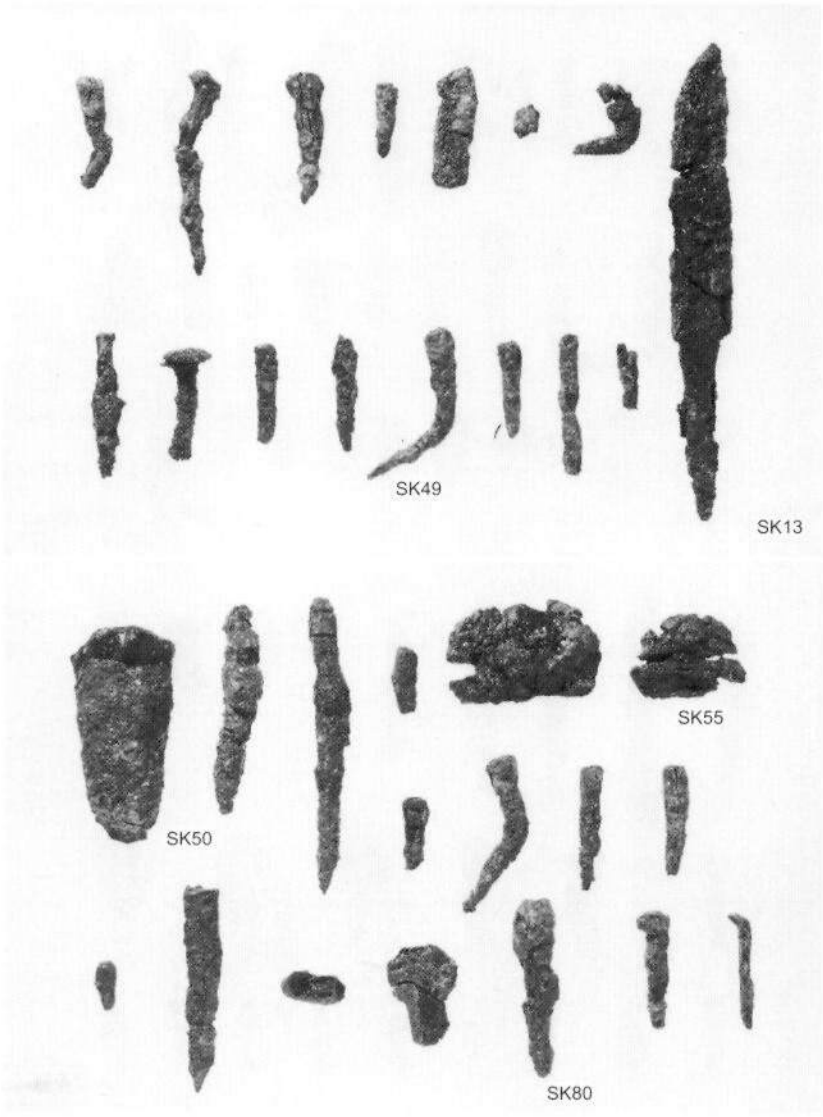
才田出土石器

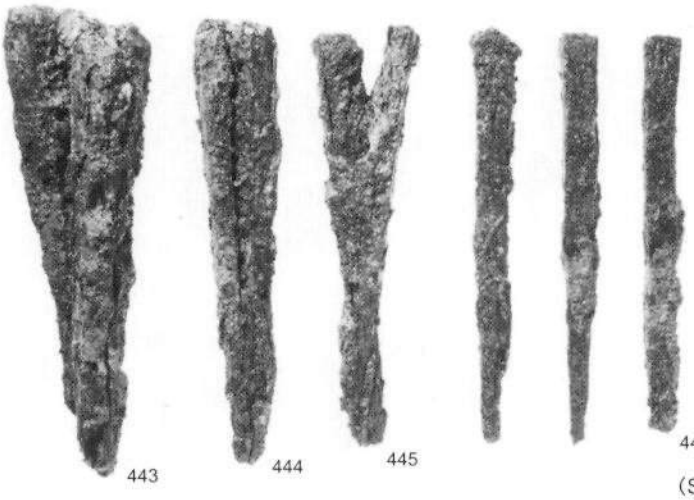




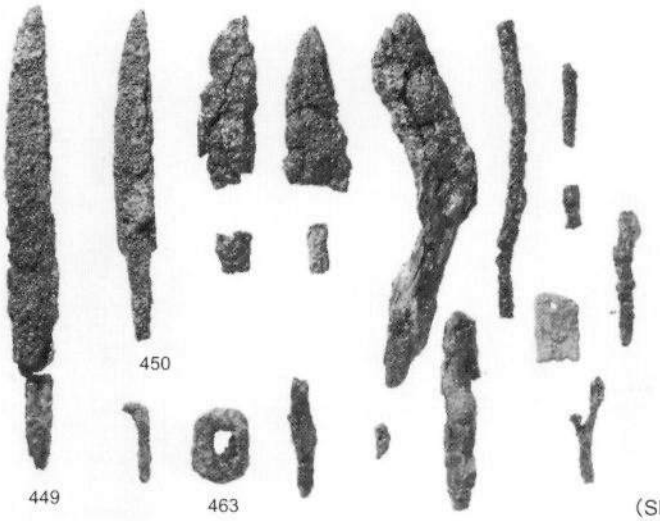
才田1・2号木棺墓出土遺物


11
12
13
14
15
SK1
SK28-8
A140

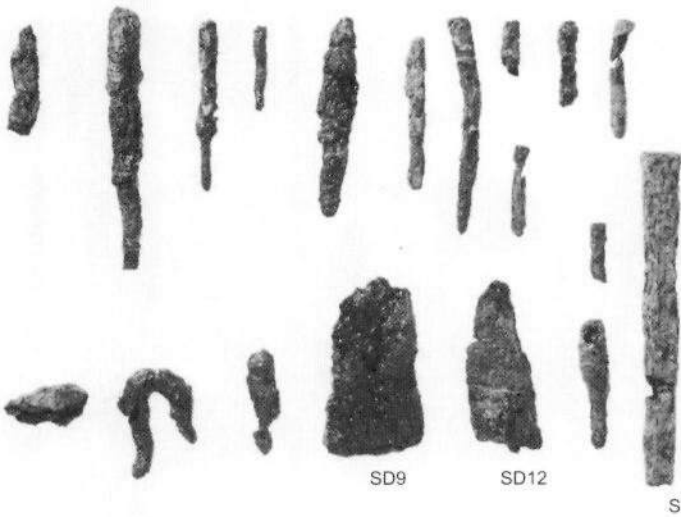

SK49
SK13
SK55
SK50
SK80



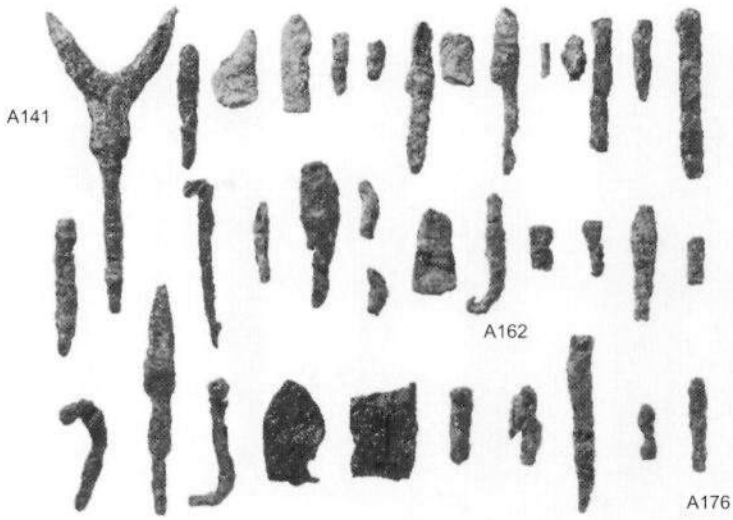
(SD1)

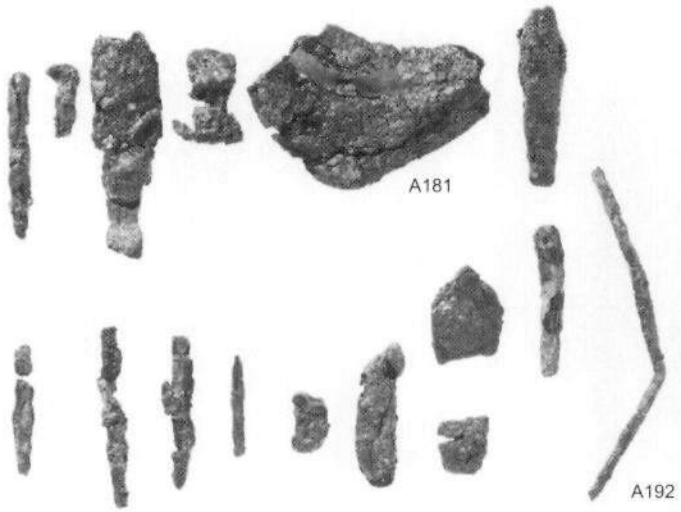


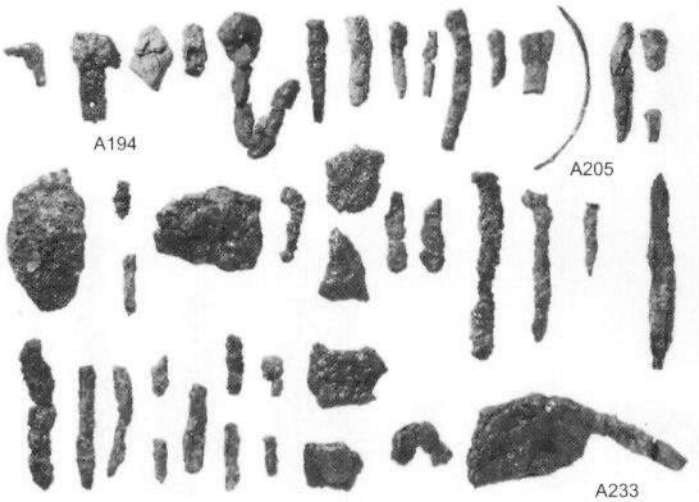
(SD1)

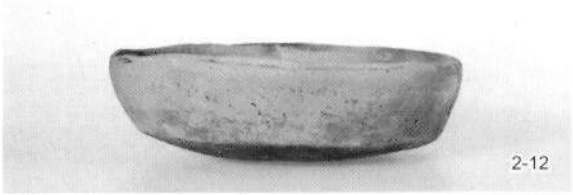


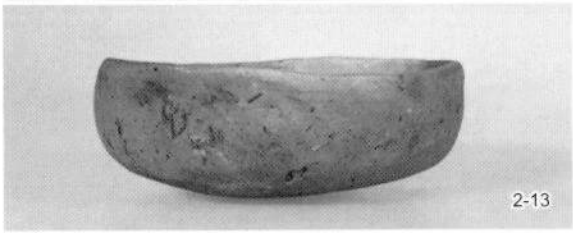
才田出土金属器2

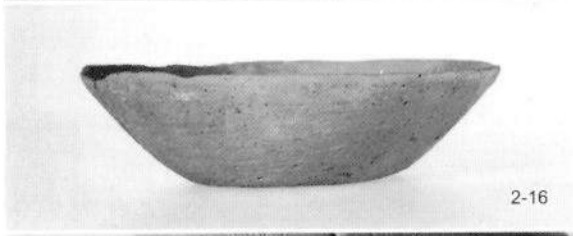

A141
A162
A176


A181
A192


A194
A205
A233

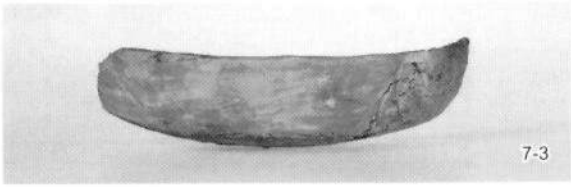

2-12


2-13

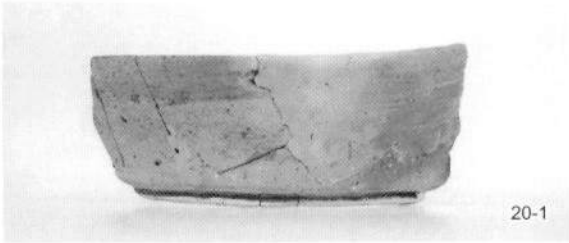

2-16

2-11

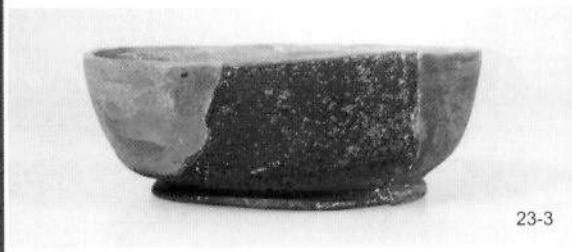
2-19

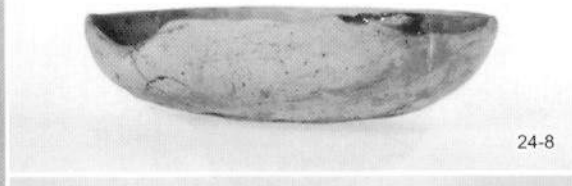

7-3

17-7


20-1

21-4

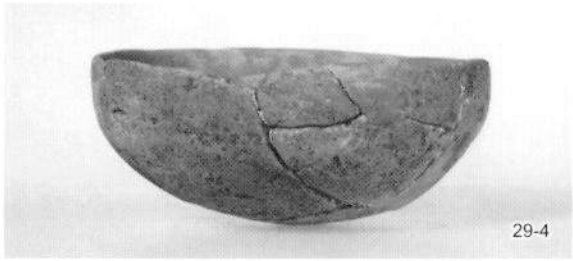

23-3


24-8

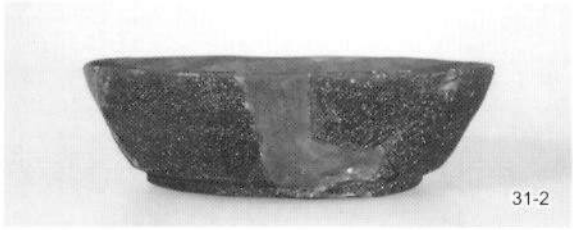
24-9

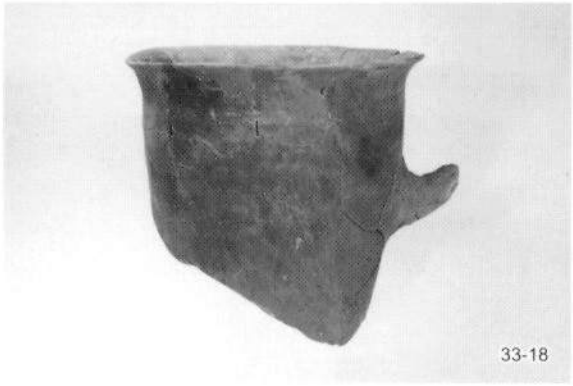
才田住居跡出土土器1

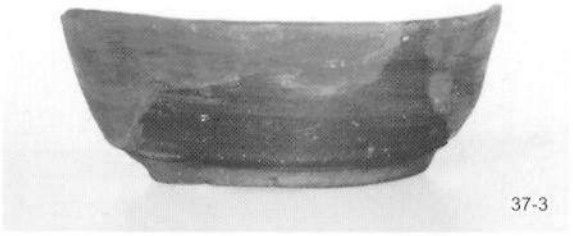
24-10

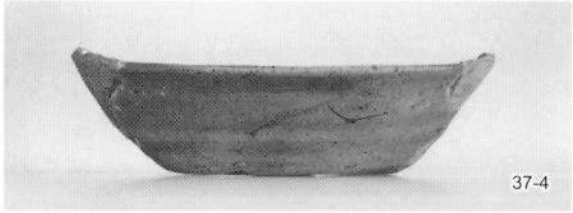

29-4

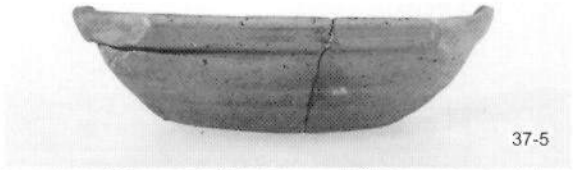
31-1

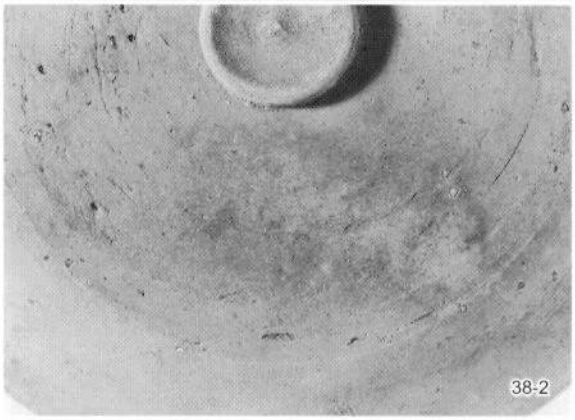

31-2

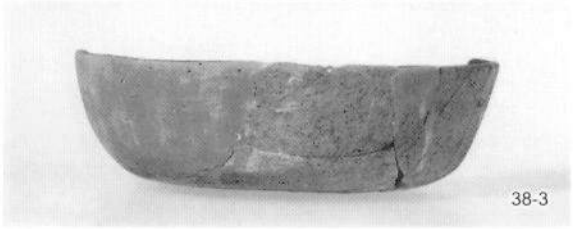

33-18

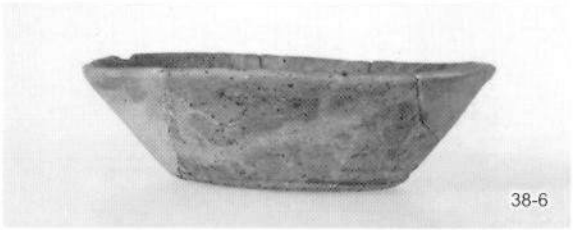

37-3


37-4

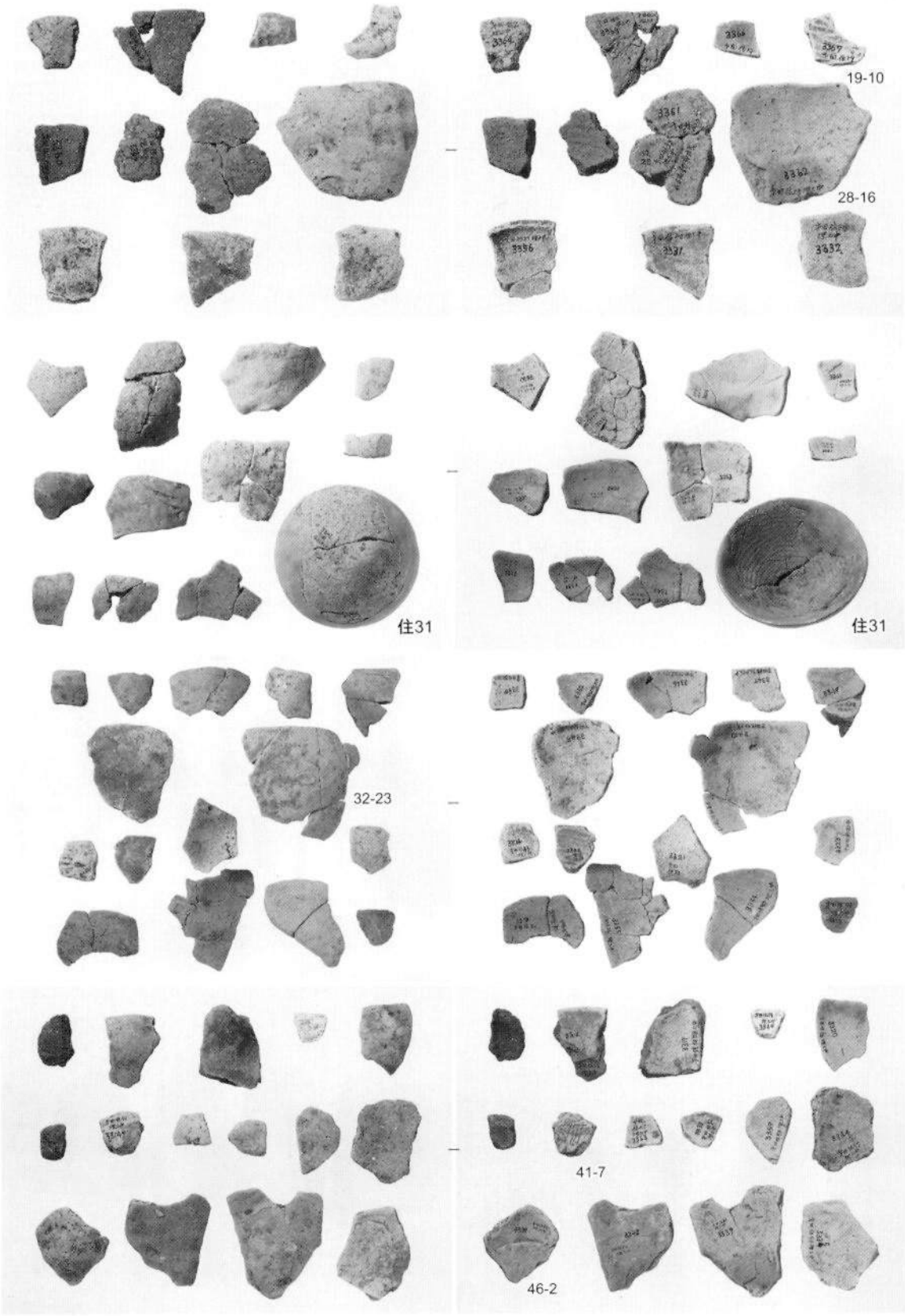

37-5


38-2

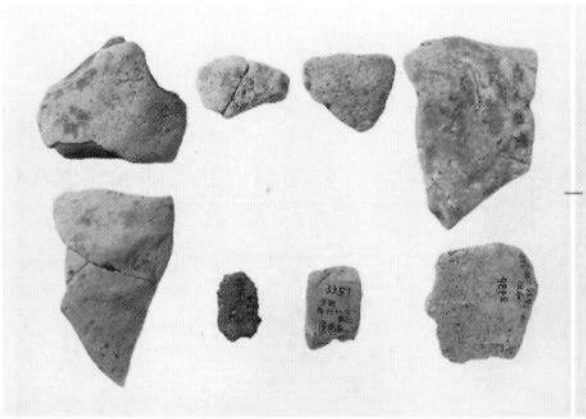

38-3

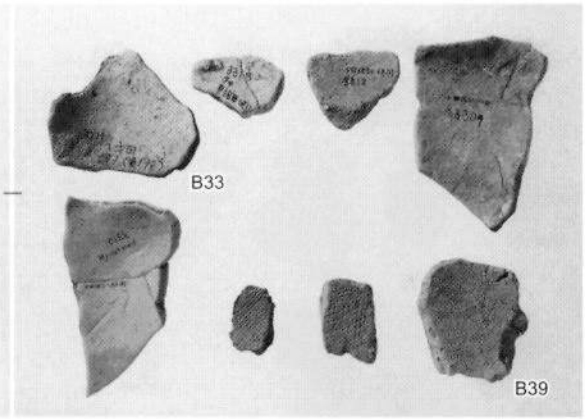

38-6

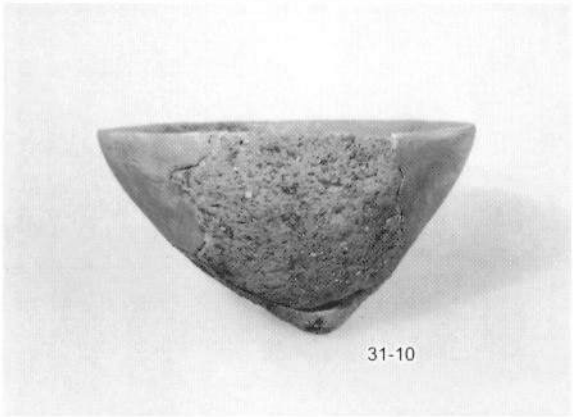
48-5

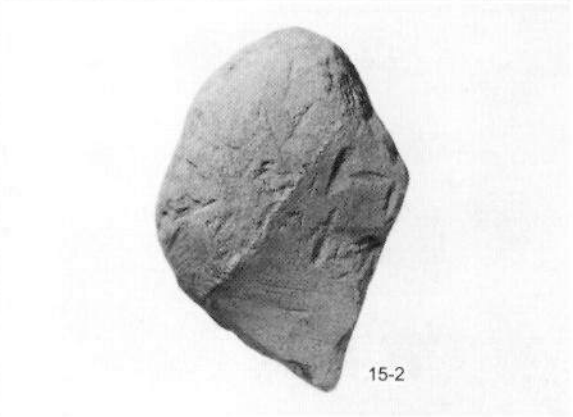


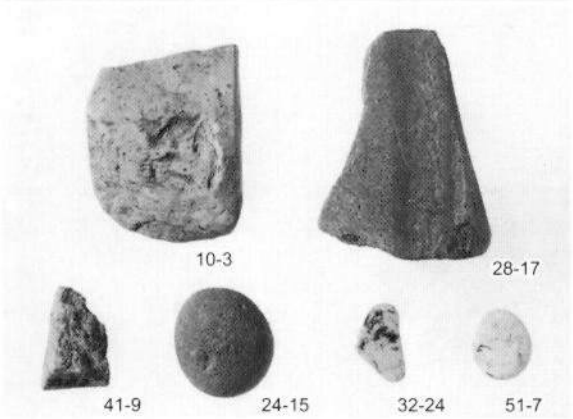
才田出土焼塩土器

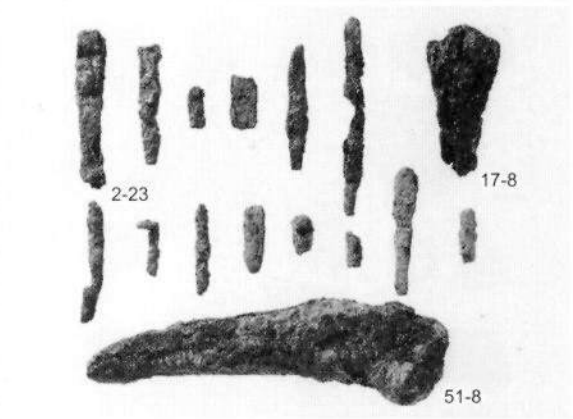


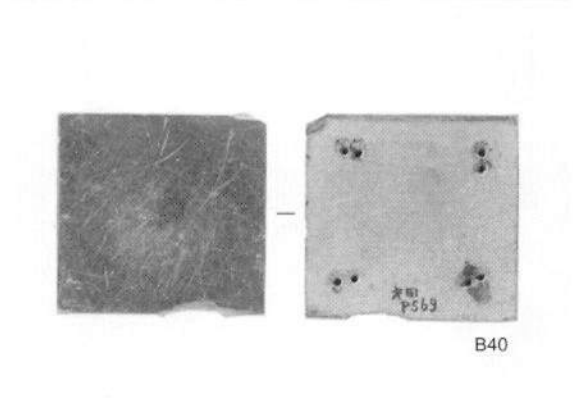


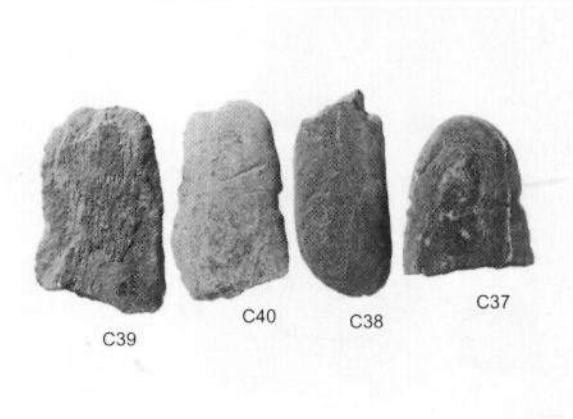






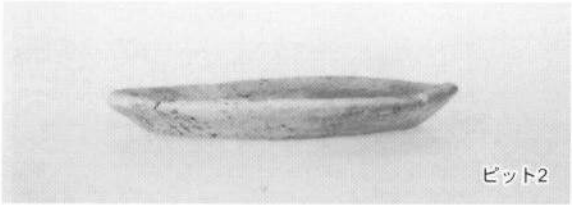




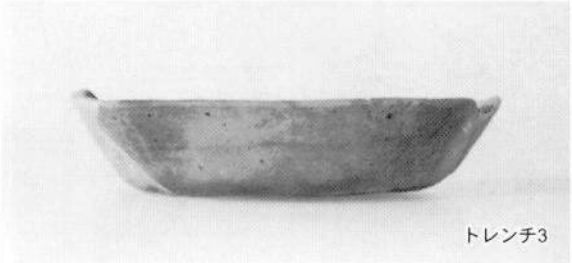


才田出土焼塩土器・石器・鉄器

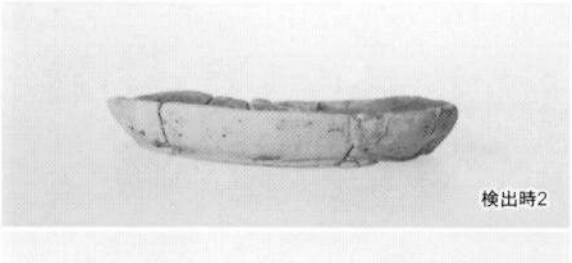
1. 東才田遺跡全景（西から）　　2. 東才田遺跡南東隅ピット群（東から）

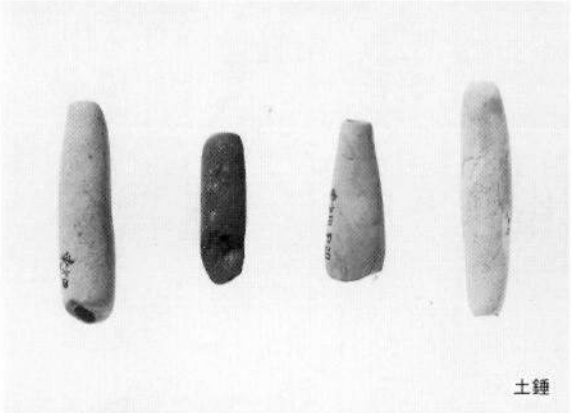

ピット2

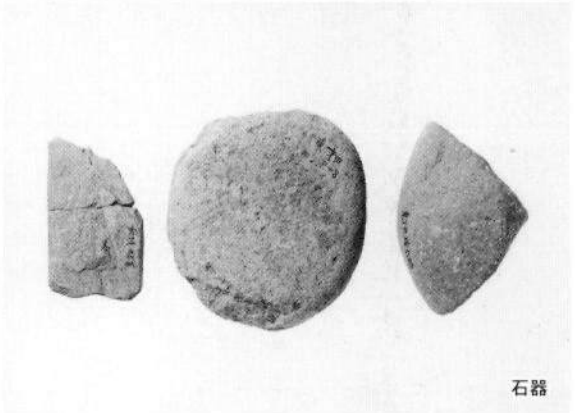
SD1-7

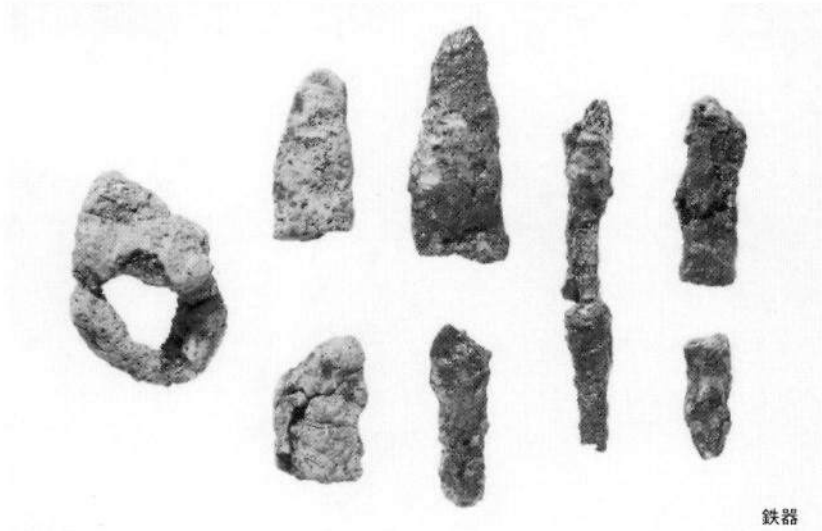

トレンチ3

検出時4


検出時2


土錘


石器


鉄器

東才田出土遺物

報告書抄録

ふりがな	さいたいせき・ひがしさいたいせき
書名	才田遺跡・東才田遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	48
編著者名	伊﨑俊秋・宮田浩之
編集機関	福岡県教育委員会
所在地	〒812-8575 福岡県福岡市博多区東公園7－7　TEL092-651-1111
発行年月日	西暦　1998年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東径 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
才田（さいた）	福岡県朝倉郡（ふくおかけんあさくらぐん） 朝倉町大字入地（あさくらまちおおあざいりじ） 字才田（あざさいた） 167・169ほか	404420	570067 570068	33° 22′ 50″	130° 43′ 18″	19850205 ～ 19850608	4132	道路 (九州横断自動車道)
東才田（ひがしさいた）	福岡県朝倉郡（ふくおかけんあさくらぐん） 朝倉町大字入地（あさくらまちおおあざいりじ） 字東才田（あざひがしさいた） 106・108ほか	404420	570067 570068	33° 22′ 50″	130° 43′ 20″	19850205 ～ 19850608	3236	同上

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
才田	包含層	弥生		土器・石器	
	包含層	古墳		初期須恵器・土師器	
	集落	古墳後期～奈良	竪穴住居跡　55軒	土師器・須恵器 墨書土器・焼塩土器 石帯・砥石	焼塩土器が多い
	集落 墓地	中世	掘立柱建物跡　20棟 土坑　80基 井戸　1基 溝　16条 木棺墓　2基	土師器・須恵質土器 輸入陶磁器 石鍋・土錘・鉄器 土製人形・木製人形 銅銭	輸入陶磁器が多量にある 荘官層の屋敷か
東才田	集落	中世	溝　1条 土坑　1基	土師器・輸入陶磁器	才田遺跡と一連の遺跡

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード ２１３３０５１
登録年度 Ｈ９	登録番号 5

九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書－48－

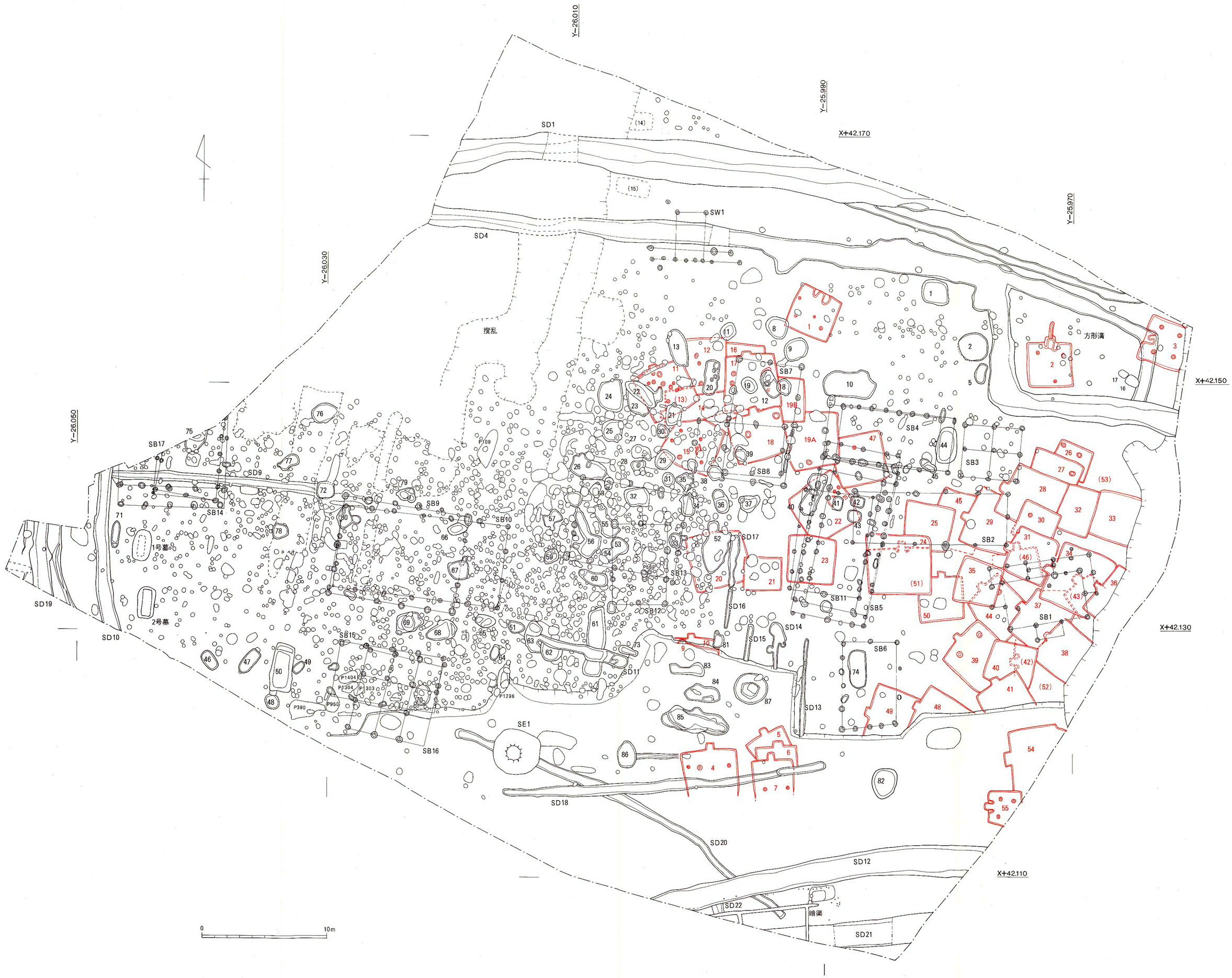
平成10年３月31日

発行　福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園７－７
092－641－1111

印刷　栄光印刷株式会社
福岡市東区松田一丁目９－30

九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告書
— 48 —

福岡県朝倉郡朝倉町所在 才田・東才田遺跡の調査



付図　才田遺跡全体図（1／200）